
テンプレ...まじで？

kou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレ…まじで？

【Nコード】

N3719M

【作者名】

kou

【あらすじ】

マジかよ……まさかテンプレなんてものがこの身に降りかかるとは……そんなわけで俺はようじ……ゲフンゲフン
とりあえず神になるために世界を回って力をつけなきゃならんらしい。どうなるんだろ…うな俺の二回目の人生（神生？）

なお、この作品はTSを含みます。また、自己満足作品でもありますので、読者様のお気に召さない部分も多々あると思います。お気を付けを。

『prologue：チートな転生物語』（前書き）

やっちゃった！！

作者のkouです。

ノリと勢いで趣味で書いてた小説を載せました。更新は不定期になると思います。

この小説はあくまで趣味なので誹謗中傷はやめていただければ幸いです。

『prologue：チートな転生物語』

やあ、皆さんこんにちは。

俺か？俺は樹里庵。きさといい趣味はパソゲー等のゲームに読書の、ラノベのみしがない
二ト予備軍20歳大学生でさあ。

ごめん『だった』だな。つまりここでみんなに言わないといけない
ことがあります。

それは――

転生しましたっ！！それも少女です！！いやどっちかというと憑依
かな…

ってそんなことよりですよ、少女ですよ少女！！たぶん身長は13
0あればいい方かな？やたらと地面が近い。髪は…見事なプラチナ
ブロンド。なぜか不釣り合いなほど大きめな胸部。手なんかすべ
べ――

「まごうことなき少女です…orz」

10分ほどorzな状態を続けていたら少し落ち着いてきたんで情
報を整理することにした。

まず今いるここ。宇宙？よくわからないので次……

なんでこんな体になったかだけど、転生or憑依と言えど転生トラ
ックに轢かれるやら、通り魔に襲われるやらと何かがあつて死ぬの
がテンプレなわけです。つまりは俺もそんな何かがあつたかもとい
うわけで…

あれ？なくね？

昨日の一日を振り返ってみる。

朝起床、日中は大学、終わって夜までバイト、家（両親と妹の4人暮らし）に帰ってきて、何やかんやして、布団に入って、ファンタシースターポータブル2（PSPo2）をして…ってそこからの記憶が無い…

いつも通りの寝落ちな一日だよな。うーん…

あ、ファンタシースターポータブル2（PSPo2）っていうのはPSPのSFファンタジーのアクションゲームだ。このゲームは自分でキャラクターを作ることができ、そのキャラと物語のヒロインであるエミリアと共に世界を襲う陰謀に巻き込まれていく話なんだが、これがなかなかにはまるんだ。シナリオもいいんだが、特に良いのが、ネット経由でonlineミッションやバトルがかなり熱い。かく言う俺もかなりはまって家に帰ってはやっている。そこでふと気になったことがある――

「この身体って・・・PSPo2で俺が作ったキャラのKoujuじゃん!？」

ロリッ子少女で銀髪、ってことは目は紅目かな？で帽子も確にかぶってるし…そういえばこの服にも見覚えがある。この無駄にでかくした胸部も……（汗）

一番の問題は種族だ。PSPo2にはまず最初にキャラ作成で選ぶものが種族だ。ヒューマン、ビースト、ニューマン（エルフっぽい）、キヤスト（機械族）、の四種族。俺が選んだのはビーストで耳を垂れた犬耳みたいなのに設定した。

俺の趣味だよ!!ほっとけ!!げふんげふん、どこからか電波が…

…でまあ気になったんで手を耳の位置に持っていくと――

「長いです…ありがとうございます…」

え、ええ！？つまり何！？原因はPSP02！？

「いやいやいやいや…どうせえと神は言っんですか……or
z」

「よびました力？」

！？！？――声が突然背後から聞こえた。振り向くとそこにはエミリアが（PSP02のヒロイン）……

「って、ちょっと待て！！？」

「？？？」

ああ、かわいく首を傾げるな。

「あんた誰？エミリア…？」

「いエ、神デす」

「紙？」

「神でス」

「GOD？」

「Yes, I am good」

「なんですとー!!?」

目の前にいるエミリアが自分を神だという。とりあえずエミリアではないことは確かだな。しゃべり方へんだし、エミリアはもっと天真爛漫ってキャラで目の前の神? みたいによくわからのじゃないし。

「失礼ナことヲ考エてくれマスネ」

「人の心を読むな!!」

「ちなみに、コノ姿はあなたの心ノ中カラ適当に嫌悪ヲ抱かない相手ヲ選びマシタ」

心を読んだことはスルーですか。

「まあ確かに好きなキャラではあるけれどもさ……そのしゃべり方で台無し……」

「おヤ……う、うウン!!これでいい?」

「おおお…エミリアっばい」

「それじゃあ、まず何があなたに起こっているかを言っわね」

「え、あ、うん……」

何か、いきなり神エミリアが話し始めた。何を言われるかかなり気になるので神妙に聞くことにする。

「あんたは死んだわ」

「なんですとー!!?」

驚愕の事実を突きつけられた。冷静に聞こうと思ったが無理だ。

「なんで!? 死因は!!?」

「え、あーうん、やつちゃった」

「は?」

は?だよ、まじで、まさか――

「えつとこういうのって確かテンプレって言うと思うんだけど、ちよつとした書類ミスで本来死ぬはずじゃなかったんだけどめでたくお亡くなり……」

「なんですとー!!?」

テンプレ乙……orz

「さっきからそればかりね」

「うるせー!! じゃあつまり何か!? 俺はあんたらに殺されたと!?」「そうなっちゃう…ね(笑)」

「(笑)!!?(笑)ってなんだよ!? 死因は!?!」

「感電死。PSPからの漏電で……」

「PSP! ? 死因PSP! ? ありえないよ! ? あれのバッテリーって確か3・6Vだよね! ? 」

「なんていうか…最近の冥界や天国の情報処理でもIT化が進んで…それでもって自動設定なわけで…」

「その自動設定とやらで末代までの恥ですよ! ! ! 」

「っていうかIT革命があつたのか! ! ? 」

「あはははっ、やつちやつた(笑)」

「絶望した…ずさんな神社会の情報処理に絶望した……orz」

「それでまあ、あなたの死は確定しちゃったんで生き返らせるのは無理だからあなたが好きそうなシチュエーションで転生させてあげることにしましたとさ」

初めて誰かを殺したいと思ったよ。たつた今。

「ちなみに、あんたの職業はこの度めでたく…神みならい(笑)になりました」

「神みならい(笑)! ? 」

(笑)がまたついてる。すきなのか?

「どういうこと? 」

「いやあ、あんたのこの事件のことで神様会議を開いたんだけど、やっぱりこっちの不手際で殺しちゃったわけだし、転生させてハイさよならってのもどうかって話になってね……… ついでに今後こういうことが起きた時用の実験に（ボソ）………」

へえー結構気にしてくれてるんだな。後半ばそつと何か言ってた気もするけど…。

「それでどうしたら神様見習い（笑）なんて話になんの？」

「簡単にいえば、現在魂の管理は電子管理してる↓魂の管理は公務員↓急なＩＴ化で忙しくて大変な仕事↓公務員志望の若い子が少ない↓古い人じゃＩＴ関係が分からない↓分かる人を連れてこようってわけ」

「それが俺？」

「YES!!」

「なんで幼女？」

「チートボディーにするついでにあんたの好きな設定を組み込んだ結果」

「確かに好きだけでもさ、ＴＳ転生の二次創作」

ん？今気になる単語が――

「チートボディー？」

「そうだよ。その身体の成長限界のMAXLVの200を始め、道具の所持限界解除、全武器所持でもちろんSランク化済み…面倒だから普通のもつけちゃうか、それから全フォトンアーツを完全習得アイテムはすべて保持で使っても消えない。あ、ムーンアトマイザー（自分以外対象の復活アイテム）はさすがに無しね…それから…」

スケープドール（持っていたら自動復活する使い捨てアイテム）はあるのか？おいおい、どんだけチートなんだよ。

「……ここまでがPSP02からの分ね。」

「は？まだあんの？」

ここまでだけでもラスボスを片手間で殺せるくらいにチートなのにまだあると？あ、ちなみにラスボスはLVが100もあればいけるから。

「なんとその身体は、基本的な技能もチートだし、不老不死、様々な技能を覚えるための制限とかが無い上にラーニング機能を備えているわ」

「ラーニング機能って技を食らったりしたらなぜかその技を理解して自分も使えるようになるって…」

「それそれ」

チートここに極まれり！！

「それで最後に……」

「まだあるのかよ!？」

「ふつつふ、聞いて驚きなさい。神様見習いの特典として、『幻想を現実に変える程度』をプレゼント!!!!」

「程度って東方かよ!!!っじゃなくて、『幻想を現実に変える程度の能力』って何さ？」

「簡単に言えば、心で思った事を実際に起こしたり、具現化する能力」

「ひ、卑怯くせえ……」

「詳しく説明すると、あなたたち人類が全知全能の神様って言うのはこの能力を持つてるからなわけ。けどこの能力にも強弱があるし、心理状態に左右されたりっていう欠点もあるわ。それで、使えば使うほど強くなる。それで神の位が決まるの」

「じゃあ何か？俺の方の能力も最初はザコみたいな「まあ、人類で言えば最強に近いんじゃない？」やっぱり卑怯くせえ……」

「そんな俺はテンプレ通りどこかの世界に飛ばされて、その神様見習い（笑）ってのをやればいいのか？」

「もらった能力じゃ魔神の方に近い気がしないでもないがな——」

「一つの世界じゃないわよ？」

「はい？つてことはつまり多次元世界？」

「そうよ。そしていろんな世界を回り神様としての力を蓄えて来てね？」

「若い子が足りないとか言っただけ？」

「IT関係に強い人が必要だからこんなことをしたとかいう話と矛盾するよな。」

「さあ？上の人の考えることなんて分かんないし」

「あんた下の人！？」

「部長」

まさかの中間管理職。

「まあ、わかった。とりあえずやらなきゃ始まらないしな」

「その意気その意気っ」

そう言い、うれしそうにしながらポケットから何かを取り出す。

「携帯？しかも何故にdoco.？」

「ふっふっふ、それはただの携帯とは比べ物にならない位高機能なんだから。所持アイテムの取り出しもそれからできるよ。私のメールアドレスも入ってるから緊急時はメールしてきてね。あ、あと訪れた世界とかの情報をその世界からある程度引き出せるようになるっ

てるからやってみてね」

「それってアカシックレコー」「じゃあいつてらっしゃい!」「うわあああああ!?!?」

足元に突然暗い穴ができて吸い込まれた。俺はどこに送られるんだろつか――

『prologue：チートな転生物語』（後書き）

どうだったでしょうか？感想をよければお願いします。アドバイス大歓迎です。

『stage1: Fate/stay nightの世界』(前書き)

二話ですね。同日中に載せるつもりが日をまたいでしまったorz

とぅっわけで(ぶっっわけ?)

どっぞー!

『Stage 1: Fate / stay nightの世界』

<Side:イオ>

「うわああああ！！！！」

現在？落ちてますとも！さつき神に落^{ヒール}とされた黒い穴を延々とね！！

「ああああ——あ？」

なんて思ってたあたりが白み始めた。

「出口——か？」

っドオオン！！

「いつてええ！！！」

痛い痛い！

何メートルも上空からフリーフォールしてたのにいきなり地面にキスするってこういう感じなんだろうか。チートボディのおかげで痛いだけで済んだんだろうな。なんか意外に冷静だな俺……。

とりあえず、次あの神にあつたら絶対にぼこる！ハイ決定！

「あなたが…私のサーヴァント？」

ん？改めてあたりを見回す。ここは…なんというか貴族の屋敷？いやお城？みたいな一室で、声がした方向にはひとりの少女がいた。そう、なんていうか白い少女。

「あなた聞こえてる？ああそっか、バーサーカーのクラスの場合、会話は不可能ね…」

「聞こえてるよ？白い少女」

「白…って私のことかしら？それよりあなたが私のサーヴァントよね。クラスは？」

「サーヴァント？まさか——この世界は！！」

F a t e / s t a y n i g h t ! ?

死亡フラグ満載じゃないか！！どうする？たしかにこの身体は不老不死だけどそれすらも人体実験っていう死亡フラグをおっ立てそうだし——

「うーん」

「聞きなさい！！」

「お、おう？」

「まったく、いきなり自分の世界に入り込んで、うんうんうんうんいきなり唸って、無視しないでくれないかしら？」

「いやすまん白い少女」

マジでごめん白い少女よ。死亡フラグはぶちおりたいからなあ。

「白い少女じゃないわ！私の名はイリヤスフィール＝フォン＝アイ
ンツベルンよ！！」

イリヤか。F a t eで好きなキャラの一人だ。

でもまあ、イリヤなら白くてあたりm「何かしら？」

「…イエ、ベツニ」

思わず片言になりながら、目をそらしちまつたぜ。

「あなたの真名は？」

「俺？樹s——いや、コウジュだ」

この容姿で日本名は似合わないしな。実際この体はK o u j uなわけだから嘘は言ってない。断じて。

「コウジュ？ファーストネームもなく、ただのコウジュ？」

「そうそう」

「ふゝん。聞いたことが無いわ。それに、私はヘラクレスを召喚するための媒介を用意したはずなんだけど？」

そう言つて白いsh「何？」ゲフンゲフンっ、イリヤは床に置いてある斧剣と云えばいいのか、岩を無理やり剣の形に切りだしたよう

な無骨な大剣を指さしていた。

「そんなことを言われてもさ、実際に俺がここにあるわけだしね。」

「まあ良いわ。ほんとは良くないけど、とりあえず置いておくわ。それであなたのクラスは何になるのかしら？ スキルや強さも確認させてほしいわね」

「クラス？学校の？」

「頭が痛い……」

「じよ、冗談だつて……サーヴァントのクラスだよな？ えつと——」

神様に渡された携帯が鳴ってるみたいで、ポツケから出した。メールか。送り主は…分かってたけど神様。

「ええっとなにになに、あなたのクラスはバーサーカーです。」

「なんでメール？　というかバーサーカー？　会話してるのに？」

「そうみたいだな」

「その容姿で？」

「そう……みたいだな」

「はあ…やっぱり頭が痛い。ごめんなさい今日は眠らせていただくわ…」

そう言ってイリヤは部屋を出ていった。

side out

side：イリヤ

今日は、私にとって大事な日……アインツベルン家にとっても……

何としても私は最強のサーヴァントを召喚しなくてはいけない。そうして戦争に勝って勝利する。それが、私が生まれた意味でもあるから。

「聖杯戦争…か…」

思わず声に出たのは、あと数日もすれば、私が参加する儀式の名前。

『聖杯戦争』、それは『聖杯』と呼ばれるあらゆる願いをかなえる願望器を賭けて7人の魔術師がそれぞれサーヴァントを召喚して殺しあうデスゲーム。サーヴァントにはクラスが存在し、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサ

ーカー7クラス。そしてクラスに応じて過去、現在、未来において英雄と呼ばれ、死後英霊となった者が呼ばれる。

どのクラス、どの英雄が召喚されるかは基本的にはランダム——
だけど、例外はある。

その英雄に係る物を召喚の儀式の際に媒体として使うこと。それが召喚したい英雄になじみ深いものならそれだけ召喚の確率は上がる。アーサー王ならエクスカリバー、クーフーリンならゲイボルグといった感じだ。

もちろん英雄にも強さの位はある。強さの基準は、英雄そのものの力と、知名度。召喚した時点で聖杯戦争に勝てるかどうかが決まると言っても過言ではないかもしれない。故に、この媒体として用意するものはとても慎重に選ばなければならない。

そして私が使うのは——斧剣。そう言い表すしかない、無骨な岩をそのまま切り出したような大剣。

召喚する対象は——ヘラクレス。誰もが知っている半神の英雄。伝説として残っている彼の逸話はどれも英雄の中の英雄といっても良いくらいだし、だからこそ知名度は高い。彼を召喚できたなら聖杯戦争に勝てる確率はありえないほど高い。

「だからこそ、この召喚は…成功させる！」

私はとある出生のことから内包する魔力はそこら辺の魔術師とはけた違い、家系的に魔術の技術も高いし、自分でも自信はある。召喚を行う場所も落ち着ける自分の部屋を使うことにし、あまり好きじゃないイリヤスフィール家に連なる者たちもこの部屋の近くから排

除した。成功する自信はある。それでも心臓はいつもより少し早くトクトクと打っている。

「ふうー…」

1度深く深呼吸、そして召喚を始める。

魔力を体内に巡らせ、詠唱を始める。

『……………』

唱えている詠唱により加速する魔力の流れ。少しでも気を抜けば自らに牙をむく自分の力を丁寧には制御し、あらかじめ書いておいて魔術陣に流し込む。

『……………』

それを続けると、ふと何かにつながった感覚がある。それを手繰り寄せる……！

っドオオン！！

その瞬間に自身に近い衝撃が走り、あたりには衝撃により壊された床がまったのであろう土ぼこりが一気に舞った。

「ケホケホっ…成功したの…？」

こんなのは聞いていた召喚の成功例とは全然違う。だから心配になっと思わず口に出てしまった。何かを召喚はできたが、ヘラクレスをちゃんと召喚できただろうか。それが心配だ——

「いつてええ!!!」

ヘラクレ...ス...?

とりあえず現状の確認が大事よね。

「あなたが私のサヴァント？」

s i d e o u t

『stage1: Fate/stay nightの世界』（後書き）

どうだったでしょうか？

次は、主人公の能力確認とこれからどうするかのシーンを入れたい
と思います。

では、再見！！

『stage2：これから…inふえいと』（前書き）

3話目です。

無理やりな感が否めないorz

文章表現やらなんやらで読みにくい部分があると思いますので、よろしければこうしたら見やすいよというのをアドバイスください。

『Stage2：これから…inふえいと』

side：コウジユ

いや、いつのまにか次の日です。

あの後何も無かったのかって？

どっかの女優じゃないけど、別に……って感じだよ。

まあ、強いて言うなら罪悪感に駆られて部屋の掃除をしたくらいだな。

赤い弓兵だとか、正義の味方志望のブラウニーみたいな技術は無いけどさ、よく見たら大事そうな、というか高そうな物がちょこちょこ散らかったから埃を払ったり程度をした。

んで、やることなくなったら色んなことを考えてた。

寝ようかなとも考えたんだけど、掃除してる途中で出るわ出るわファンシーなグッズ。

つまりここってイリヤの部屋だろ？いくら現在の俺が美少女だからって越えたらいけない線は確かにある。

最低限部屋の主が居ない所でグースが寝るのもね…。

んで、死亡フラグやらについてを考えてたわけさ。

とりあえず自分の原作知識について。まず、アニメだろ、PS2版のFate/stay nightのセイバールート、後は二次小

説……。

あ、あんまり直接の知識がねえな…。

UBWルートとかあるんだよな？

あるのは知ってるけど、どうなるんだっけ？

「うーん……」

その場にあぐらをかいて…この服スカートだからやべえ（汗）…誰も居ないのはしってるが座るのを中止して、うろろ歩きながら、ただでさえ少ない知識を思い出す努力を試みる。

「うーん……お！」

そうじゃんアカシックレコード疑惑のある携帯があるじゃん！！

「これで勝つる」

ニヤニヤしながら携帯を取りだし――

『圏外』

「なんでやねんっ！！！！」

ベシッ！！と、たまにしか使わない関西弁を言いながら携帯を床に叩きつけた。

憎らしいことに携帯はチートボディの力で投げたのに床が負けて抉

れてやがる。

「さっきはメール来たくせに……」

ちよつとだけ敗けた気分になりながらも携帯を拾ってポケットにしまう。

うん、これはきっと携帯が悪いんじゃない、神が悪いんだ。復讐の先駆けとして様付けをやめることにしよう。

「何がただの携帯じゃないだ。使えないじゃないか。これからする事……か……」

まあ、俺の拙い知識の中でも一つだけ決まってる事がある。

「イリヤを聖杯の器になんかせねえ」

それだけはなんとしても貫き通す!!

「でも、どうやってやろうかねえ……」

そうしていつのまにか朝になっていたわけだ。

side out

side：イリヤ

「ん…」

少し気だるげながらも目が覚める。

「あれ？ああそつか……」

見慣れた自分の部屋じゃなくて、少しいぶかしんだか自分でこの部屋に来たことをボンヤリと思い出した。

昨日の夜中に私は英霊の召喚をおこなった。

そして出てきたのは私位の身長の白と黒で彩られた女の子。

目はルビーみたいに紅く輝いて、犬の耳みたいなのを少し隠すように大きな黒い帽子をかぶっていた。

でも、その容姿に合わない、どこは言わないかとある身体の一部分と話し方。

身体の部分についてはおいておくとして（イライラさせる体積を誇っていたため見なかったことにする）、見た目と違った話し方のせいで私のリズムは壊されっぱなしだった。

召喚のせいもあり疲れた私は眠ることにしたんだけど、あんな惨状の部屋で眠りたくなかったこっちに來た。

幸いにも部屋はいくらでも余ってるしね。

「気がちよつと重いけど、話をしに行かないとね」

side out

side: コウジユ

ガチャッ…

「おはようコウジユ」

イリヤが入ってきた。もう朝だもんな。でも微妙に影があるのは気のせいかな？

「おはようイリヤ」

「さっそくだけど、昨日の続き、良いかしら？」

「構わないけど…疲れは大丈夫？」

「……………誰のせいだと思ってるのよ」

ボソツと言ってるけど聞こえました。マジでごめんなさい。

「まず、あなたの真名はコウジユ、クラスはバーサーカー、昨日聞いたのはここまでよね？」

「確かそう」

「じゃあ、まずは一つ目の質問ね？あなたは何を成した英雄なの？」

「えーっと……」

困った。

何を言えば良いんだろうか。中身はどこにでもいるような大学生。けどこの身体はゲームの中とは言っても宇宙を救った英雄なわけだ。どうする？どうするよ俺！？こんな時にライフカードがあれば……つて、続きがwebじゃ意味がねえよ！！答えは今必要なんだよ！！

「はやく言ってくれないかしら？」

催促するようにこちらに目を向けながら言ってくる。

こうなったらKoujuuのことを言うしかないか……

「えっとですね、う……」

「う？」

「宇宙を……救いました……」

「……………本当は？」

「いや、本当だつて」

「宇宙つて……………いくらなんでも……………」

「でも、確かにこの身は宇宙を救つたんだ……………」

→嘘は言つてない。

「じゃあ質問を変えるわ。何から宇宙を救つたの？」

「古代神？」

「なんで疑問形？」

「えっと、現代に生きる人々の——ああ、俺の元の世界のね——始まりの祖であり、古代を統べた王であり、神みたいなの。1度肉体が滅んだのに、再び現代に生きる人々を乗っ取って支配しようとした往生際の悪い奴」

まあ、これはPSP02のラスボスの話だ。

ラスボスは割と簡単だったなあ。パターンさえ読めば割とね。

むしろラスボスがいるところまでの、雑魚敵に群がらた時の方が面倒だった謎（笑）

「それって…創世神に近くないかしら…?」

「そうとも言っねえ」

「ひょっとしてあなたって相当強い?」

「試したことないから分からないけど、町一つ位なら消せるかも? やってみる?」

だってチートボディで神様見習い(笑)だしねえ。

「やらなくて良いわよっ!!」

「あ、でも力を見せるのは必要じゃない?俺も試したいことあるし」

「分かったわ、後で時間を取りましょう」

「うい」

「次の質問ね?あなたさっき異世界がどうかさらっと言ってたけど、世界移動をしたってこと?後、その耳について教えて」

「これ?」

自分の犬耳を触る。あ、ちゃんと神経通ってるし、微妙に動く。

「うーんと、世界を移動したのは本当。俺が元居た所では、いくつかの星と、コロニーを行き来するような所だったし」

実際はゲームの画面の中の話だけどね。

「そしてそこには4種族居たんだ。まずヒューマン。俗に言う人間だね。次にニューマン、エルフみたいに耳が長いのが特徴。次にキヤスト。キヤストは元々人造生命体として作られた機械人とでもいい表わせるのが特徴かな。そして、ビースト。俺がこれに当たる。ビーストの特徴は名前の通り獣だ」

「ふーん…本当に異世界から来たんだ」

「信じてくれた？」

「信じるしかないじゃない。まったく…あ、そういえばちょっとだけ気になったんだけどあなたの世界にもエルフっていう言葉があるの？」

「……（汗）」

「どうしたの？」

「い、いや、それはあれだよ。元の世界にはないけど、一応この身はサーヴァントとして呼ばれたわけだし、聖杯からの情報のバックアップ位は受けてるさ」

「それもそうよね。いくらイレギュラーな英霊でもそれ位は……」

何とか誤魔化せたかな？いやあ、焦ったぜ。まさか、この体の中身

が、ニート予備軍の現代っ子だとばらすわけにもいかないしな。

「あ、言つの忘れてたけどこの体生きてるぞ?。」

「英霊じゃないの?。」

「少なくとも霊ではないよ（生き返ったし）。ええつとなんだっけ? 霊体化? できる感じしないし」

チートパワーで似たようなことはできるかも知れんがな。

「それはちよつと面倒ね、あなたは良くも悪くも目立ちそうだし」

あんたも人のこと言えんでしょうが!!

「それもオイオイ考えるとしましょうか」

「じゃあ、これが最後ね。」

イリヤの表情が一気に真剣身を帯びる。さっきまでも話の内容といつか、俺のせいで緊張感が薄かったが、今はさっきまでとは違う。この部屋全体が緊張しているような空気を孕み、俺自身も飲み込まれる。

「なんだ？」

思わず俺も真剣味を帯びる。

「昨日私は儀式の最後の仕上げを行わなかったから今ここで行うわ」

「ああ」

「ならばサーヴァントバーサーカー、あなたを召喚した主として命じるわ。此度の聖杯戦争、私と共に勝利を目指し、障害は全て駆逐しなさい」

「Yes、マスター。この身尽き果てようとも、主の剣として、盾として、一匹の獣として勝利へ導こう」

何故か俺はイリヤの前で片膝をつき、騎士のように誓いを述べた。

口から勝手に出てきた言葉は、まさしく契約の証。イリヤの全身に何かの模様、いや、主の証である令呪がほのかに浮かび上がる。

イリヤと俺が繋がったという感覚が今はっきりとわかった。

そして、イリヤの令呪が収まると互いに手を伸ばし握手する。

「よろしくコウジユ」

「ああ、よろしく頼む。イリヤ」

「ふふ、そんな真剣な顔もできるのね。」

「ほっとけ!!」

ああ、顔が赤くなるのが自分でわかる。

なんか今更ながらさっきのセリフが恥ずかしくなってきた。

何すらすらと俺の口は勝手に言ってくれちゃったんだよ。そういう願望でもあったのか？

否定できねえのが辛い。

赤くなった顔を誤魔化すように、イリヤに話を振ることにした。

「ところでイリヤ。今後の予定を教えてくださいませんか？」

「そうね、軽くあなたの力を見て、そのあと御爺様に報告、そして今回の聖杯戦争の行われる地、冬木市へと向かうつてところかしら」

くううゝ

俺のお腹が以前では考えられないくらい可愛く空腹を訴えた。顔がまたしても赤くなる。

「まずは朝食からね」

クスツとイリヤは可愛く笑みをこぼしながら言っただった。

s i d e o u t

小話

「あ、そういえばなんであなたがバーサーカーのクラスに当てはまったのかしら？イレギュラーならイレギュラーのクラスに当てはまってもおかしくはないと思うんだけど……」

「俺がバーサーカーのクラスを得た理由か……」

確かに謎だな。F a t eで本来バーサーカーとして召喚されるはずだったヘラクレスさんは、まさしくバーサーカーのクラスに恥じな

いといった感じだった。ごりマッチョどころの話じゃないくらいの大。男だからね。

そこでふと思い出す。

「あ、分かったかも。」

「なに？」

「さっきの種族についての説明で言うのを忘れてたんだけど、ビーストにはナノブラストって言う獣化の能力があるんだ。その能力の一部に、極低確率で暴走状態に陥ることがある」

「暴走状態…ね…そうなるとどうなるの？」

「無差別攻撃、力を制御できない」

「あなたにバーサーカーは適任ね」

『stage2：これから…inふえいと』（後書き）

どうだったでしょうか。

次はチートな力の一部を使うシーンを描きたいと思います。

あ、そういえばやっぱりキャラ紹介は早めに書いておいた方がいいですかね？

うむ、がんばろう。

『stages：チートな力（前編）…innふえいと』（前書き）

4話になります。

一旦切って、前後篇にすることにしました。

ではどうぞ。

『Stage3：チートな力（前編）…innふえいと』

side：コウジユ

「ごちそうさまでした」

「なにそれ？さっきも『いただきます』とか言ってたけど」

「知らない？日本流の食事への感謝」

「……何で知ってるかとかは聞いたら負けなんでしょうね」

「そういうことにしといて…（汗）」

いや、当たり前のように言ってたから気づかなかった。

普通、異世界から来て宇宙社会がどうたらとか言ってたのに、日本がどうたらは言わないよな。

以後、気を付けよう。

「それにしても美味しかったよ。朝から大変な量が並べられてるからビックリしたけど、思わず全部食べちゃったぜ（笑）」

「私も、というより作った方もビックリでしょうね。基本的に残すものだから」

「そうなの？あんなに美味しいのに勿体ない」

「そう。後で料理長に伝えておくわ」

「よろしく」

本当に美味しかった。

朝ごはんを食べることになって、イリヤと共に食堂（あり得ないくらい広い部屋に、あり得ない長さの机がある）に訪れた。

食事はすでに並べられていて、すごい量の食事があった。何て言うかゼ口魔の食堂を少人数で使っている感じだ。壁際にはメイドさんがズラッと控えてる。

いつもこんな感じなのかな？

そんな所に、アルプスのgirl的な白いパンとか、スクランブルエッグ、色鮮やかなサラダetc etc…メジャーなのからよくわからんの（美味しかったから気にしない）まで、ズラッと絢爛にならんでたわけだ。

——クウ…

またお腹が鳴ってしまった。

今、顔は真っ赤だろう。

さっきまで無表情だったメイドさん達から、こころなしか暖かい目で見られる。

やめて、そんな目でみたいで！

そんななかイリヤは、クスクスと小さく笑いながら席に着く。俺は慌てて追っかけて席に着く。マジで恥ずい。

そしてすぐに食事開始。

さすがにバクバクとは食べる訳にはいかなからモクモクと食べ続けた。

どうやらこのチートボディの胃袋は某腹ペコ王とタメを張れるようで永遠と口に運び続ける。

明らかに現在の、いや、前の平均的な成人男子の体積を軽く越えた量を食べた。そんなこんなでいつの間にか大量にあった朝食達は居なくなった。

結局満腹にはならなかった。

この身体に改めてビックリ。

料理を追加するか聞かれたが空腹感は無くなったので遠慮した。すでに遠慮の域を越えてるとかは突っ込まないでほしい。

それにしても不思議だったのは、今作られたかのように、スープやらなんやらから湯気がたっていたことだ。

ちゃんと二人分。

俺とイリヤが食堂に行ったのって俺の腹が鳴ったからであって、定時だからとかじゃない。

しかもあの量だ。

どのタイミングで作り始めたら良いとか分からないはず。

なのに料理たちは、食堂に入った瞬間に出来上がったかのような状態。

しかも、イリヤがどこかに連絡したりもしてないのに二人分――

アインツベルン城の従者達は化け物か！！？

いや、偶然だよな？

今は考えないようにしよう。うん。

それで今は食後の一服中。

なんかすごい良い匂いの紅茶を出してくれた。

元一般人でもわかるくらいにこれは良いものです。

「飲まないの？」

イリヤがやたらと絵になる感じで、優雅に紅茶を飲みながら話しかけてくる。

やっぱりお嬢様だな。

いや、おぜうさま？

「いや、もちろんいただくよ」

ちよつとイリヤのマネをしながら飲む。

作法とか知らんしな。

——「コクッ

「熱い……………」

俺、猫舌だった。今の身体もそうみたいで、舌がピリピリする。

でも…

「うん、おいしい。」

こんなに美味しいものなんだな、紅茶って」

「フフッ、お気に召したようですねにより」

俺がのんだことあるのって午。の紅茶位だからさ。高級なやつって飲んだことなかったけど、高いだけのことはあるよ。

「なあイリヤ、この後俺の力を見るって言ってたじゃんか？」

「ええ、そのつもりよ。それがどうかしたの？」

「どこでやるんだ？さっき窓から外を見たんだけど、えらく雪が積もっててさ。外に行きたいんだよね……………だめ？」

「構わないわよ？そんなに雪が珍しいの？私からしたら見慣れた景色なんだけどね」

「へえ、やっぱり雪国の人の感覚ってそういうもんなんだ。俺か

らすればスゴイ珍しい光景なんだけどな。住んでたところじゃ降らなかったし」

転生前に俺が住んでた所は寒くもないし、暑くもない、気候的に年中安定したところだった。冬場もあんまり寒くならないから雪は降るけど積もらない。だから視界いっぱい銀世界は心を躍らせる。

「ねえ」

後で外に出たときに、初雪だるまを作ってみたい等としようもないことを考えていたらイリヤが話しかけてきた。

「なに？」

「外に行くのは構わないけど、その格好で行くの？それ以前に、ずつと言おうと思っていただけ、今現在も寒くないの？」

「いや、特に……」

そういえば、と改めてイリヤの服装を見る。

イリヤの服装は屋内にもかかわらず、そこそ厚着だ。

今いるここはお城で、日本のお城と違って基本的に石で構成されているから冷えやすい。しかも、広いから暖房なんてものも、効果は薄い。

周りにいるメイドさんもよくテレビとかで紹介されてるメイド服よりももう少し分厚い、暖かそうな服装だ。

最後に、俺の服装。

ずっと気にしないようにしてきたが、簡単に言うと守備力が低い。

下から順番に言うと、靴は黒いレザー系の生地でふくらはぎの辺りまで包んでくれている。

次、そこからズーッと上まで来て、白いミニスカート。腰の所に黒の大きなリボンが一つ付いていて、ワッカになってない方は長く、地面すれすれまでである。ちなみにスカートの長さはミニの名に恥じないくらいぎりぎりだ。

一応下にはスパッツみたいなのを履いてるが恥ずい……。これはPSP2のコスチュームの中で、靴とセットでハナウラボトムという下半身の服だ。

そして、さらに上がつてくると、上の服は二つの構成からなっていて、まず、首の輪っかから両手の着物みたいな白いライン入りの袖を紐で吊っている部分と、ピチピチの胸下位までしかないタンクトップの形の部分だ。

タンクトップの部分には所々切れ目が入っていて、背中なんかほとんど出しているし、胸下までしかないから、へそも出している。

袖は吊っているだけだから肩も、脇も出ている。

かなり前衛的？な感じた。

ついでに、手には黒い指出しグローブ。

ちなみにこの服の名前は

ストーリアジャケットという上用の服だ。

最後に帽子だが、これは髪型のオプションで付けられるやつで、hackノG・U・のシノがかぶっているような大分大きな帽子で、イリヤとはまた違う銀系統の白くて長い髪を覆っている。

全体的に構成する配色は白と黒、そして眼だけが紅だ。

とまあ、こんな感じで雪国にいるような恰好じゃない。

「でもなんでか寒くないんだよなあ……」

まあ、チートボディだしな。

なぜか猫舌はそのままだけど……

それにしても、Koujuはこの格好でラスボスを倒しに行つてたことになるわけだけど、ゲームを現実置き換えて考えると、何というかラスボスからしたらたまつたものじゃないだろうな。

PSP2の面白衣装達の中にはきぐるみやら水着なんてのもあるわけだけど、世界を支配するとか真剣に言ってるラスボスの前にいるのがもうコスプレといつても過言ではない美少女だったり、海パンのおっさんだったり、しまいにはよくわからない生き物のきぐるみだったりするわけだ。

テイルズシリーズなんてその筆頭じゃないか？ ネタ服で来られたボスの心境は計り知れない（笑）

まあ、俺もそれを良くしてたんだけどね（笑）

と、話がそれたな。

何にしてもこのままで外に行っても大丈夫だろう。

「さて、そろそろ行きましょうか」

「了解」

残っていた紅茶を飲み干す。

まだ少し熱かった…。

s i d e o u t

『Stage 4：チートな力（後篇）：inふえいと』

side：コウジユ

やあやあ皆さん。外にやって参りました。

やつふう〜！！

テンションが高い？

仕方ないじゃないですか、だって雪ですよ雪！見渡す限りの銀世界
！！

見たことない位の幻想的な世界が、そこにあるわけですよ！！

そこを今雪玉を転がしながら、走り回っております（笑）

「てやや〜」

「はあ…、早くしてね」

「了解であります！」

皆さんもうお分かりだと思いますが、初雪たるまを作ってるわけですよ。

最初、イリヤと共にエントランスホールを抜けて、外に出た瞬間に
広がる雪景色を見て、俺は即行で突っ込んでいってしまいました。

景色の話をしてたんだから、趣きとか風情は無いのかって？無いわ

けじゃ無いけど、やっぱりこれだけの量の雪を実際に触れるというのがうれしくてついつい……。

「ふう…それでこれを…いよいよっしょおお!!」

つどすううつん!!

「ふい〜あとは外観を整えてっど……」

ぺたぺた、ぺたぺた…。

「…ねえ？」

ぺた…。

「なに？」

「スノーマンを作ってるのよね？」

「そっだよ？大小二つの雪玉が縦に二つ…雪だるまじゃん」

「今まで言わなかった私も私だけど、大小二つどころか…超特大と特大じゃない!!」

「あはは、やっちゃったZEE!!」

そっなんですよねえ。いやはや、あまりにも楽しすぎて雪玉を押し

ながら走り回ってたらいつの間にかこんなことに（笑）

ちなみにサイズは…多分下の球は直径が10m弱くらいはあるかな
…上は7m位？

「まったく…非常識だわ」

「仮にもサーヴァントに常識も何もないと思うけど？」

「そうね、もう私が悪いのよ、うん……」

あやや、イリヤが何か影をまといだした。

「ごめんごめんイリヤ」

いいながら、近づいてイリヤの頭を撫でる。

ありや、俺の方が若干小さいから変な感じだ。

撫で撫で……。

「って、コウジユっ、恥ずかしいからやめて!!／／／」

「おお、元気になった」

少し呆けていたが、思い出したように、イリヤが少し離れた。

「本当にもう…／／」

さっきまでイリヤが纏っていた影がなくなる。今は、恥ずかしかったのか、顔が真っ赤になりつつも、どこか嬉しそうだ。

「コホン、ほら、もういいでしょ？始めるわよ」

まだ顔が少し赤いイリヤ。某雛見沢のレナ嬢でなくともお持ち帰りしたくなるレベルだな。

そして急な話題転換。

まあ、全部俺のせいなんだけどもね。

「了解だ、マスター」

顔とかまだ作ってないけど、まあいつか。また暇な時にでも続きをしよう。

「さて、何かからしうか」

「あなたって、何か象徴する宝具とかはないの？」

「宝具？俺しか持ってないようになっていうのは無いかなあ…レアではあったかもしれないけど、他にも持つてる人は居たしね」

「ふん、じゃあコウジユが得意としてた武器って何？」

「何個があるけど…やっぱりあれかな…？」

キヤリガインルウカー。通称ルカ。

PSP02ではダブルセイバーという分類の武器で、両剣、つまり

持ち手の両端に刃が付いていて回転を基本に連続して敵を切り裂く種類の武器だ。

ル力はそのシリーズの中でもかなりレアの武装で見た目が好きだ。

ル力より強い武器もレアなやつがあるにもかかわらず愛用していた。

形は、……説明しにくいことこの上ないな。実際に見ないとわからないけど、両端の刃が鎌のように反っていて、それが薙刀状に付いている。

検索したら出てくる程度には有名なはずだ。

で、まあ、真剣に敵を倒しに行くときとかはやっぱ攻撃力重視で他のを使ったりするんだけど、ル力って結構でかいんだよ。

ビジュアル的に2m弱くらいは多分ある。

Koujuの身長は1番小さい設定の121cmだ。

どんな身長にも関わらずだが、巨大な武器ってなんか夢があると思わないか？

俺は大好きだ。

ちなみに、イリヤはどっかで読んだ二次で書いてたんだけど、公式設定で133cmらしい。

そんなことを一瞬の内に考えてる途中、ふと思った。

「……どうやって出そう」

「何か言った？」

「な、何でもない」

どうしよう、神はなんて言ってたっけ…確か携帯の説明の時に『所持アイテムの取り出しもそれからできる』だっけ・・・だから、どうやって！？結局詳しい説明受けてないじゃん！！

やべえ、イリヤの視線がいぶかしんでくる。

と、とりあえず携帯を出して……

「ん？」

画面の下の方にちっさくヘルプが出てる。こんなのがあったっけ？
とりあえず開いてみる。

『ついにこのヘルプが見つかってしまいましたか。ということは力を使う時が来たのですね？』

思わず放り投げたくなった。だが、我慢して続きを読む。

『ではでは説明しましょう。

まず武器についてですが、MENUでPSP02という画面があるのでゲームと同じように設定してください。あ、ちなみに慣れると設定も必要無く、思うだけでできるようになりますので。最終的には金ぴか王も目じゃないかも？

続いて、フォトンアーツですが武器に設定とかしなくても大丈夫なようにしてあります。とりあえず技名を叫んでください。使えます
(笑)』

一応初心者用の設定みたいなのはあるのか。慣れたら金ぴか王みたいになって、王の財宝みたいになってことだよな。すげえ。

しかし、しかしだ。技名叫べって、身も蓋もない言い方だな。ヒーローものみたいな感じになってるじゃないか。せめて真名解放とかさ？あるじゃん……。

でもまあ武器にセットしなくて良いのは良いことだ。

ゲームでは武器を使うために、パレットと呼ばれる簡易MENUにセットする必要があった。パレットには、武器、アイテム、防具がそれぞれ6個ずつ設定できて、戦闘中に換装できるというものだ。そして、攻撃する際は通常攻撃とは別に、フォトンアーツと呼ばれる技を設定する必要がある。技は基本的に一つの武器に一つの技しか設定できなかった。

魔法系は大杖には最大8つ、片手杖には最大4つ設定できるがそれ以外の武器は単調なものになってしまう。

だから、多彩な攻撃が可能になってるのはうれしい。

さてさて続きは――。

『続いて『幻想を現実に変える程度の能力』についてですが、使用方法はただ強く思うことです。そのやりたいことが自分ではできると自分の可能性を信じることです。』

あ、この能力はPSP02の武器にも反映されて、ゲーム内での説明文が概念として付加してしまうので気を付けてくださいね？』

強く思うこと……ね。だからその時の心理状態に左右されるって言うてたのか。

それってどこの錬金術？
アルスマグナ

とある魔術のAUレウルス・イザードという錬金術師は、思ったことを現実に変えるという俺がもらった能力に似た術式を作り上げた。

どんなチートだよって感じだが、これには弱点があった。自分がちよつとでも負けるイメージを持ってしまうとそれすらも具現化してしまうというものだ。実際に原作ではそれが原因でアウレウルスは主人公に負けている。

俺がもらったのはその上位番みたいなものらしい。

注意で書いてある武器の概念が反映ってなんだ？

これって下手したら、宝具じゃね？

武器によつたら、エグイ説明の奴とかあるんだけど……。

例えば、魔剣レーヴァテイン。万物を滅ぼす力を持つ。とかかいてあったようなきがするんですけど！？

武器の選択には気をつけよう……。

『最後に、能力の使用に関してのアドバイスですが、最初はアニメで見たようなものから試してみてはいかがでしょうか？思い浮かべたものを形にしやすいと思いますよ。格闘に関しても同様です。行っただけのスペックもその体ならありますから。』

あ、某弓兵さんが言うには、常に思い浮かべるのは、最強の自分だそうです。

では、健闘を祈ります。

P.S.

携帯の電波は力を流し込めば使えます

by エミリア（神）

大体わかった。ただ、ひとつ言いたいのは、最初に説明しろ！！

——閑話休題

「さて、まずは携帯でMENUを開き設定…と。出てこい！ルカ！」

ヒュウン パシッ

「来た来た。おお、手に馴染む」

ヒュンヒュンと振り回してみる。そして、一通りゲーム内の技を思い浮かべてなぞる。生前俺は何かの格闘技をやったわけでもないのに、まるでずっとやってきたかのように体が覚えている。

「すごいわね、確かに英雄と言われてもおかしくないわ」

いままで黙っていたイリヤが目を丸くしてこっちを見ていた。

「そうかい？」

「ええ、それにその武器、ルカだったけ？その武器から感じる威圧感もそうとうよ」

「こいつはキヤリガインルウかって言って、ずっと相棒（ゲーム内で）だったんだ。手に入れられたのは本当に偶然で、いろいろとお世話になったものだぜ」

「それがあなたの宝具のひとつというわけね」

「そうだな。よし、次行ってみるか」
ル力を消して、次に出したのは杖。

名前はえこえこステッキくん。ジャンプで連載していた宇宙のプリ
ンセスが巻き起こすマンガとのキャンペーンアイテムで、見た目は、
万能ツールに似ている。
ぶっちゃけ魔法少女的な杖だ。

「それも…宝具……でも無駄に威圧感がある」

「まあ、見た目は気にするな」

言いながら、イリヤから離れていく。

今から使うのは法撃と呼ばれる魔法系統の技だ。

「さてさて最初は……ラ・ゾンデ……！」

ドガアアアアンっ……！！

「は？」

いやいや、おかしいでしょ！？この技は雷系統のゾンデ系の中でも
基本技の一つだ。

ただ前方に雷を落とすっていう技の筈なのに……

雷が落ちたあとにはクレーターができていた。
まるで隕石が墜ちたかのようにだ。地面なんて熱で溶けてガラス状になってやがる。

「な、なに……これ……」

イリヤが声を震わせながら聞いてくる。

「あはは……すまん。適当にやったらこうなっちまった」

「適当って……敵を殲滅でもするつもり？……それにこんなのを冬木市で使ったら辺りを巻き込むわ……」

「確かに……。練習をしないとだな」

そこでふと思い付いたことがある。

今までのPSP02の技ばかりだ。

じゃあ、他のはどうだろう？

今ならあれができるんじゃないだろうか？

思い付いたらやらすにはいられなかった。

「イリヤ、もう一発いいか？」

「構わないけど、冬木市で使えるやつにしてね？」

「無理だ」

「ちょ、言い切らないでよ!!」

「だって魔王って呼ばれてる人の技だし……」

「人なのに魔王とか、あなたの知り合いはどんなのよ!!」

実際に会ったことはないけど、普通に美少女だと思うよ？

まあ、白い悪魔ともよばれてるけどね――

ここまで言ったらもう分かるか。そう、あれだ。

「だめ？」

「ああもうわかったわよ!!ここでやる分には周りに人もいないし、魔王だろうがなんだろうが好きにしないさい！
ただし!!」

やるからには全力全開でやってみなさい!!」

あ、フラグ…

「了解マスター！全力全壊でいくぜ!!」

イリヤや、城とは反対の方向を向き、目をつぶり、杖を構える。

魔力とかはどうなってるのかは分からないが、メールに書いてあったようにただイメージする。

元ネタはアニメだけど、好きなアニメだったから比較的イメージはしやすいはずだ。

思い浮かべるのは全てを貫く星の光。

イメージ完了！！

目を開けて、詠唱を開始する。

「咎人達に、滅びの光を。
星よ、集え

全てを撃ち抜く光となれ」

構えた杖の先にピンク色の魔法陣と光球が現れ、辺りの光を吸収するように集まっていく。

コピーの方の魔砲だけど、個人的に詠唱があるこっちの方が好きだ。

だから、詠唱は一字一句覚えている。

光球が人よりも大きくなったところまで貯める事ができたので続きを詠唱する。

「貫け！閃光！

スターライト・ブレイカアアー!!!!!!!!!!」

その瞬間、光球から光の奔流が生まれる。

イイッン

ドオオオッン!!!!!!!!!!

結果だけ言おう。

地形が変わりました。

s i d e o u t

『Stage 4：チートな力（後篇）…innふえいと』（後書き）

やっちゃいました。

いやはや、魔王様は偉大ですね。

というわけで、どうだったでしょうか？

話の流れに無茶の所が目立つでしょうか？

感想待ってます。

『stages：破壊の後で…inふえいと』（前書き）

題名の通りに、破壊しちゃった大地をどうするかって話ですね。

この話は何度か書き直したもので、話の流れ的に違和感が大きいかもしれませんが、楽しんでいただけたら嬉しいです。

では、どうぞ。

『stages：破壊の後で…inふえいと』

side：コウジユ

あ後は色々と大変だったぜ。

俺が撃ったスターライトブレイカーは、かなり遠くまで威力が落ちることなく、地形を壊しながら突き進んだ。

山とか消し飛んだんで地図を書き換えなければならないらしい。

ここまでならまだよかった。（本当はよくないが…）

一番問題なのは、アインツベルンの地の結界もぶっ壊してしまったことだ。

確かに撃った後にパリーンツと何かが割れた音はしてた。

お城のガラスでも割れたのかな？なんて考えてただけどさ、いきなり武装したメイドさん達が城からぞろぞろと出てきたんだよ。

イリヤが訳を聞いたら、結界が壊れたから侵入者だと思ったらしい。すいません、俺のせいです。

しかもだ、俺も話に加わると結界を維持するために使っていた龍脈も一緒にダメージを受けていて、アインツベルンの魔術的防御とかがズタズタなんだって……

思わず土下座をした。

そして謝り続けた。

それはもうひぐらし的な感じに…

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「顔をあげなさいコウジユ」

さっきまで黙ってたイリヤが優しく話しかけてきてくれた。

許してくれるのかな――

なんて、嬉しくなりながら顔を上げると・・・

「あれだけの術が使えたんだから、直せるわよね？」

鬼がいた……

口は笑ってるんだけど、目が笑ってませんよイリヤさん？
俺のせいだけどき、なんだかイリヤからの風当たりが冷たい。

「えっと、直せ」……」

「できるのよね？」

「イエス！マム！！」

自分を信じるがどうか言ってられねえ…

やらなきゃ殺^やられる！！

「はあ…ため息ばかりついてる気がするわ。コウジユ？あなたを煽った私の責任でもあるから、手伝いはできないけど、一緒に居るわ。」

」

そう言って、イリヤはメイドたちに持ち場に戻るように言った。

「それで、私もさつきはあんなことを言っただけど、できるのよね？」

「できる…かな…？」

「なんで私に聞くのよ…？」

「いや、能力的には十分可能だとは思っけど…やったことないからさ…」

「あなたならできるわ」

「どうして言いきれんだ？」

「だってあなたは私が召喚したんだもの。だからできてもらわないと困るわ」

「あのさ……」

「…なに？」

「恥ずかしいなら言わなければよかったんじゃない……」

「…うるさい／＼」

顔を少し紅く染めながらそっばを向くイリヤ――

でも…

「ありがとうな。できる気がしてきたぜ。なんたってイリヤのサーヴァントだからな」

おかげで出来る気がしてきた。

「よっしゃあああ！！」

「！？…いきなりどうしたのよ大きな声をあげて」

「ちゃっちゃっとなやってしまったためにも、気合を入れないとな」

「はいはい、ところであなたって龍脈を感じることはできるの？」

「たぶん可能。」

龍脈はヒトの体で言うところの血管だ。つまり、大地の命の源が流れている。

命とは未来だ。未来を創るために必要なもの。

なら、あの剣が使えるんじゃないか？そう思って携帯で設定をする。

「来い。聖剣エルシディオン！」

表れたのは、聖剣の名にふさわしい聖なるオーラをまとった一本の剣。

一応片手剣にカテゴライズされるが、結構大きさがあり、黄金の持ち手に、光で形成されているかのような刃を持っている。

内包された概念は、未来を創る力を持つという、聖なる心の宿る究極の片手剣。

この剣を使って、龍脈が正常で、結界も復活しているという未来を描く。

「イメージ（創造）開始――」

エルシディオンを地面に刺す。

「龍脈よ、連なる結界よ……元に戻れ……戻れ……」

地面から、エルシディオンを通して何かが流れ込む。

何か？いや、これが龍脈を流れる命の本流なのだろう。
今のおれはなぜかわかる。

龍脈が荒れ狂っているから、アクセスしている俺にも流れてきているのであるということも……

その荒れ狂っているものが、清流のように、穏やかになるように改めてイメージ……

しだいに、体に来ていたものが穏やかになる。

「再度イメージ…元のように戻った大地…完了…」

「すごい…」

すぐ隣りからイリヤの声が聞こえた。

集中するために目をつぶっていたし、人の気配を感じる余裕もなかったからこんなに近くにいたなんて思わなかった。

目をあけると…イリヤが何を見てすごいと言ったのか分かった。辺りを埋め尽くす光の粒子。

まるで光り輝く雪が空へ昇っていくような幻想的な風景。

「俺、またなんかやっちゃった？」

「違うわよく見て」

イリヤが指差したのでそちらを見る。
そっちは俺が消し飛ばした……

「直って…いつてる…？」

「コウジスゴイわ！！こんなこともできるなんて！！まるで魔法みたい！！」

イリヤがクルクルと光の中で踊っている。

魔法。それはこの世界で特別な意味を持つ言葉。人の手では決して言ってもいいほど届かない、世界の真理。並行世界の運営や魂の物質化がこれに当たる。

でもそんなことは関係なしに、確かに――

「魔法かもな、こんなにも幻想的なんだからさ」

s i d e o u t

『stages：破壊の後で…inふえいと』（後書き）

どうでしたか？

やっぱりおかしいかな…

でも、やっぱりチートの力を得ても何かしらの弊害があるということを書きたくてこんな感じになりました。

ではでは、感想等お待ちしております。

『閑話1：孔明の畏だった…?』（前書き）

閑話を入れてみました。

色々この話の根幹を語りつつも、謎を残すことを目的に書いてみました。

では、どうぞ。

『閑話1：孔明の饅だった…?』

side：エミリア（神）

皆さんこんにちわ。

しがない中間管理職な神です。

本名？

天てらs……いえ、言いくいのでエミリアでいいです。

ここは、最初に庵^{いお}さん——今はコウジユさんですが——にお会いした、宇宙空間を模した場所です。

口調…ですか？

ああ、実は庵^{いお}さん——もうコウジユさんでいつか——にお会いしたときの口調とかは変装のためです。

私だって女ですからね。

あんな変な話し方本当はイヤです。

姿だって本当は、長い黒髪に着物を着た、エミリアよりもう少し年上のお姉さん系です。

まあエミリアの姿も可愛いですが、あれは悪魔でも——あ、間違いました、あくまでも変装です。変装をしていた理由ですか？

簡単に言つと、ある方に頼まれたからです。

ああ、そうそう、丁度今日はその方が来られるんですよ。

ブワッ

っと、丁度来られたみたいですね。

それにしても、空間を裂いて来られるのは構いませんが、裂け目の両端にリボンが付いてたり、裂け目の内側で沢山の目がギョロギョロしてるのは何ででしょうか？

どうせまた何かの漫画か何かで影響を受けたんでしょうけどね。

「あーちゃん、居るかの？」

そう言いながら裂け目から出てきたこの方が、つい先日、コウジユさんについてお願いしてきた方です。

蒼銀とでも言えばいい色の、地面に着きそうなほどの長髪を封印符（リボン状）で軽く巻くように纏めています。モデル体形で雰囲気は妖艶の一言に尽きる感じですね。

そして何故かいつも服装が一定しない方でもあります。

今日は日傘に、ナイトキャップ？、それから和服と中華服の中間みtainなお召し物を着てらっしゃいます。

これも何かの影響ですかね？

「はい居ますよ。それと、いつも言ってますがあーちゃんは止めて

ください。恥ずかしいですから」

「そうは言ってももう、我からすれば、あーちゃんはあーちゃんじやよ」

「でもせめて他の神の前ではやめて下さい！わかりましたか神姫様？」

「む、努力はするからそんな他人行儀に役職名でよばんでくれ？」

「はあ、分かりましたよ。光夜様？これでいいですか？」

「うむ。本当は様も付けて欲しくないんじゃないが、まあ良いか……」

「それで、今日はお話があるとお聞きしましたが、やっぱりこの間の件ですか？」

「うむ、件の際は世話になったのう」

「いえいえ、でも良かったんですか？」

「何がじゃ？」

「転生させるためにあの身体を使ったことを始め、神見習いにしたこととか、見習いにしては能力的におかしいですし……」

「まあそうじゃの」

「しかも、私にさせた説明もでたらめですし……
確かに、天界も人間界のように情報化は進んでいますが……そんな

簡単に人を死なせてしまうようなくさんな事するわけないじゃないですか」

「ふふん、そうじゃの」

「理由をお聞きしても？」

「今はあまり詳しく言えぬ…
あえて言うとしたら、あやつは、我と同じ存在だったものの欠片であり、受け継ぐものなのじゃよ…」

何かを懐かしむように、目を細めながら微笑む光夜様。
その姿は、同じ女の私が見ても見惚れてしまうような美しさと儚さを醸し出していました。

ただ、一言言わせて下さい。
詳しく言えないとか言いながら、ちゃっかり言ってますよ？

「それにしても、光夜様と同じ存在だったということは、始まりのシンキのお三方ですか……」

『始まりのシンキ』、これは光夜様を含めてあるお三方のことを言い表わす言葉です。

シンキとはすなわち、神姫、神樹、神忌を表し、世界の創世に関わ

った方々です。

人間界に伝わっている創世神話だとかもあながち間違いではありませんよ？

でも、俗に言う創世神と呼ばれる神々が生まれる前からいらっしやった方々で、世界を創るための知識だとかはお三方が教えて下さったものです。

光夜様が言うには、シンキの方々は、世界そのものに近く、所詮はシステムみたいなものらしいです。
だから厳密には、神とはまた違う存在だとか。

光夜様以外のシンキの方々ですか？

それはまあ、今はいらっしやらないとだけ言っておきましょう。

「さて、我はもう行こうかの…」

「御用事ですか？」

「新しい世界ができたのでのう。少し様子を見に行くのじゃよ」

「お仕事してくれないんですか？」

「前にも言ったが、我はただ在るだけじゃ。多次元世界や並行世界を運営するのはあくまで汝らでなくてはならぬ。それに、最初だけという約束じゃったであらう？」

「他のみんなも帰ってきて欲しそうにしていますよ?」

「うむ、ならば、コウジユが神になった際には考えてみようかの…」

「約束ですからね?」

「うむ」

「あ、そういえばコウジユさんに関してなんですが…説明をしつかりしなかったからか、力を使っていきなり大地の創造とかしてましたよ?」

「ほう…やはり、素質があるのう」

「びつくりしました。いきなり龍脈の再構築とか、そのために武器の概念の強化とかを感覚で行ってましたし、しかも、本人は気付いてませんが、もう能力が拡大してますよ?」

「くくつ、将来有望じゃのう(笑)」

「メール…送つときます?」

「頼む。他のバックアップも引き続きよろしくのう」

「はあ、また仕事が増えた…今度何かお願いを聞いてもらいますからね?」

「うむうむ。では…」

話は終わったので、光夜様は帰るためだろうか、後ろを向き、どこからか出した扇を縦にスウッと一閃…来たときにあったようなりボン付きの次元の裂け目ができた。

「また何かあったら来るからのう」

そういつて、中に入っていく光夜様。

「あの、最後に一つ聞いていいですか？」

「うむ？」

「ずっと気になってたんですがその格好って一体…」

「ゆかりんじゃ」

それだけ言い残して帰っていった。

「ゆかりん？だれ？」

謎だけが残った。

side out

『閑話1：孔明の畏だった…?』（後書き）

どうでしょうか。

私の思惑が成功していればいいのですが…。

詳しいことはこれから分かるようにしていきたいと思います。

転生に使われた身体の正体とか……

さて、次は本編に戻ります。

感想お待ちしております。

k o uでした。

『stage6：一気に本編!?!?!?infoいと』(前書き)

かなり短いです。

もうさっさと本編に行ってしまうおつといつお話。

ではとつぎ。

『Stage6：一気に本編！？・・・いんふえいと』

side：コウジユ

いやあ、やればできるもんだね。

俺って昔から、小学校とかの成績簿に『やればできる子』っていう評価を頂いてたのは伊達じゃない。

何？それは普段やらない子だった？

ほっとけ！！

実は、あれから数日がたっている。

今何をしてるかだが荷物を積めてる最中だ。

言っておくが俺のじゃねえからな。もちろんイリヤのだ。

なんでこんなことをしているかと言うと、話はチートパワーを使って、あれこれあった日にさかのぼる。

あの日、俺が修復を終わった後にある人からお呼びがかかった。

——ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルン

アインツベルンの現当主にして、八代目、故にアハトともよばれている。

すでに二世紀近くも生きており、この何百年かの支配者。

アインツベルンの宿願である、第三魔法：魂の物質化に固執し続ける男。

この人がまた厄介だったんだよ。

いきなりイリヤと共に地下の神殿みたいなところに呼び出されてさ、アハト候が俺に向かってあれこれ言うんだよ。

やれ、これで宿願が叶う……

やれ、今度の聖杯戦争こそ……

思わず、ハリセンで叩きそうになった。

それからイリヤも色々言われていた。

よくわからないが、あいりすふいーるがどうか切嗣がどうか……

切嗣は主人公の士郎のオヤジさんだろ？あいりすふいーる……？

イリヤのお母さんだよな？

駄目だ、うる覚えだ。

なんでその話をしている時のイリヤが悔しげだったのかがわからん。

でもまあ、イリヤをその場に居させるのは、駄目な気がしたんで話の途中で、イリヤを担いで部屋を出た。

後ろがまだうるさかったが知らん。

今までどこにいたのか知らんが、悪影響しかもたらさないであろうことは分かった。

だから、ここにいるとまた同じことが起こるかもしれない。

だったら…だ…

そうだ冬木市に行こう！なノリで、冬木の地に行くことにした。

そして話は冒頭に戻る。

数日時間が空いているのは、俺の力を制御できるようにするために使った時間だ。

俺はイリヤのためにもすぐにこの地を離れようと思ったんだが、イリヤが力の練習だけはした方が良いつて言ってくれたから、少しだけ言葉に甘えた。

もちろん大急ぎでやったし、あの爺さんがちよっかいを掛けてこようとしたら、色々な手段を使いながら妨害をした。

あ、そういえば、俺の能力なんだけど増えた。

また突然のメール（しかも何故か着信音がFFのレベルアップ音…だっけ？）がきて、新たに概念を操作する程度の能力が加わったとあった。

またチート臭い能力が加わったものだけ。

なにやら、聖剣を使って龍脈を操作するなんていう大技を練習もせずに行ったのと、龍脈に触れたのが原因で、魂の格やらが上がった

りとかで能力拡張が起こったらしい。

よくわからん。

そのうえ、魔力とかそういう力についても書いてあった。

これも龍脈に触れた影響らしいんだけど、一応有限だった魔力が使ったら使った分だけ辺りから吸収するようになったため、半永久機関になったそうだ。

これ以上ないほどのチートだ。

しかもだ、まだ続きがあるんだぜ？

言霊を操る程度の能力。これは俺の力を制御する練習の成果だ。

威力を調整するのをどうやってしようかと考えていたら、イリヤがもう少し明確なイメージを作ったかどうかと言ってくれたのでそれを参考に考えた結果思いついたのがスperlカード方式だ。

もちろん幻想郷のあれだぜ？

カードに絵もあるし、宣言することで、明確なイメージも持てるからこれはいけると思ったんだ。

だから、使いたい技をイメージしてカードを創る↓練習のため宣言しまくり↓繰り返し、の結果が言霊だ。

カードのおかげでイメージしやすくなったから、手加減を覚えることができたけど、違う部分でチートになってしまった。

ザ・ワールドって言ったらほんとに止まったんだぜ？

一気に、しゃべる事が怖くなって緊急時以外の制限をかけた俺はおかしいはずだ。

そんなわけで、冬木市に行く準備は整った。

俺の荷物なんて無いしな。

唯一の物が雪だるまだ。

もちろん完成済みである。

荷物は結構あるが（もちろんイリヤの）俺の持ちモノとしてアイテムボックスの異空間に入れた。

もちろん雪だるまも入れた。

ボックス内は時間の概念が無いみたいだし、溶けたりはしない。

向こうにはすでに従者が行つてて、受け入れの準備も整っているらしい。

いざ、冬木市へ!!!

『Stage6：一気に本編!?!?!インふえいと』(後書き)

どうですか？

何気に、チートパワーを増やしてみました。

そういえば、皆さんは使って欲しい武器とありますか？

私としてはネギセイバーは絶対使いたいと思っています。

そついうのもよかったら感想で募集してます。

どんどん書いてみてください。

ではでは、失礼します。

『stage7：冬木最初の1日（前）… inふえいと』（前書き）

書いてて長くなりそうなので一旦切りました。

では、ごきげん。

『Stage7：冬木最初の1日（前）：innふえいと』

side：コウジユ

ちわつす。

コウジユです。

やって来ました冬木の地！！

いやゝ日本って良いね。空気を感じるだけでも懐かしさが溢れてくる。

そして現在は、冬木市の町外れの森を歩いている。

奥にあるアインツベルン城を目指しているところだ。

実はここまで来るだけでも一波乱あった。

それは何かって言うと、俺とイリヤの容姿についてだ。

空港での話なんだが、俺とイリヤがやたらと目立つ。

本国の側の空港はまだましだったんだが、日本の空港に着いたらいきなり囲まれた。

俺達を囲ったのは、何と言うか大きいお友達？だった。

何故ここに居る。

周りから聞こえてきた話を繋ぎ合わせると、どうやら偶然にも俺達が空港に着く直前にアイドルか声優かが飛び立ったので、そのお見送りに来てたらしい。

で、その集団がそのままシフトしてこっちに来たわけだ。
こっち来るな。困うな。

そうこうする内に、ある要求をしてきた。
何だと思う？

コスプレ外国少女だとか白い姉妹だとか良いながら、写真を撮らせてくれて言ってきたんだ！！

誰がコスプレ少女だ！！って怒ったら、何故かイリヤも含めて俺を見るんで、よくよく考えたらコスプレ少女は俺だった。

そう、俺の格好は召喚された時のままだ。TS転生してここにいることを忘れてた……

あ、イリヤはアニメの時には着てた紫色の暖かそうな服な。

そういえばさ、俺達って大人と一緒に来なかったんだ。

だって、書類上はイリヤの実年齢は大人に近いし、俺の用意してもらった戸籍もイリヤと双子設定だから、いらなくなってるんだ。

気楽にいきたかったっていうのもあるし……

その結果がこれだよ……

見た目は二人とも少女で、周りは大きいお友達。

力を使って無理矢理抜ける訳にもいかないし……

結局そこで2時間ほどかった。

最終的には写真は無したが、ウマウマをやったら解放してくれることに落ち着いたんで、ちよっとだけやった。それでやっとな解放だ。

いや、解放せざるを得なかった感じだな。だって辺りが血の海だったし（鼻血の意味で）……他の一般人な方もだ。

もちろん逃げてきたともさ。

どこのHIGH SCHOOL OF THE DEADだよって感じだったんだもんよ。仕方ないだろ？

まあ、それを起こしたのはイリヤと俺の今の姿の元となったKoujuuだけどな。

イリヤとKoujuu、恐ろしい子……！

さてと、到着。

精神的な疲労が計り知れないぜ。

こんなことになるなら歩かなければよかった。

本当は、先に来てる従者さんが迎えに来てくれる手筈になってたんだが、俺が断った。

理由か？

それはもちろん原作のバーサーカー戦とかが起る重要な場所を見たいからに決まってるじゃないか。

そのためにイリヤに、聖杯戦争が始まる前に辺りの立地を知っておきたいなんてそれっぽいこと言っただけで納得してもらった。

だから空港から森の前までタクシーであとは歩き。

わくわくしてたのにさあ……

今は後悔してる。

とりあえず今すぐベッドで眠りたい。

イリヤも同じようでごったりしてる。

「大丈夫か……？」

「あなたこそ……でも、いますぐ休みたいのは確かだね……」

「同感だ……」

チートボディにここまでダメージを与えるとは……もうOTAKUっていう新しい何かなんじゃないか？

あ、前の俺は普通？のおたくでしたよ？

扉を開けて中に入る。

「お帰りなさいませ。イリヤ様。コウジユ様」

中には、2人のメイドさんが居た。

もちろんお馴染みの、セラさんとリーゼリットさんの姉妹だ。

うん、一目で分かるね。ゲームかなんかで見たままだ。

そこからは特に何も無かったかな。

軽く挨拶して、部屋とかの案内してもらって、イリヤがやっぱり疲れてたから少し休むって言って部屋に行こうとしてる。いまここ。俺も一緒に休もうかって——もちろん部屋は別だぜ？——思ったんだけど、どうせなら町を見に行くことにした。

「あのさイリヤ。町に行つてきて良い？」

「んー、まあ良いわ。まだ聖杯戦争は始まってないし、何かあったとしてもすぐに呼び出せるし」

「サンキュー」

「派手なことはしないでね？あと、着替えていくこと」

「了解」

あんな目にあうのはもう嫌だからな。

最近この身体が馴染んできて困っている。

他人だけど他人じゃない感じた。

転生してすぐはもう少し違和感が強かった。

でも最近は少しだけ違和感が付きまとうが、身体や能力が自分で意識できる。

誰かが言ってたっけ。

——魂は器の影響を受ける。

それが本当なら、俺の未来はロリババアなわけだ。

今もまだ残っている違和感が男としての最後の一線なのだろうか——

死守しよう。うん。

さてさて、着替えるでしょう。

何にしようか……帽子は耳を隠すために必要だから……

そこまで考えて思い出した。

普通の服がない……orz

俺のアイテムボックスにはもちろんPSP2内にある衣装も全て入っていた。

けど、どの衣装もコスプレっぽくなる。

一応男物も入ってたんだぜ？そっちは大人しめのが幾らかあるし試そうとしたんだ。
しかし、だ。

何故か着ようとしたらアイテムボックスに勝手に戻りやがる。

何回やつても何回やつても男物が着くれないくよっ♪

思わずその時はエアーマンの替え歌風に涙を流しながら歌ったのは仕方ないと思う。

PSP2内では違う性別用の服を着れなかったからその影響だろうか？

もしそうなら、色々とチートになって概念を操ったり、幻想具現化とかできるのに何故こんなことができないんだ。

世界の修正力とか言わないだろうな………

一応、イリヤに替えの男物の服がないか聞いたら、あるけど可愛くないから貸さないとかわれた。

そんなことを今更ながら思い出した。

鬱だ…死n…

「どうかした？」

天使が…じゃなかった、リーゼリット嬢が話しかけてきてくれた。

「リーゼリット「リズで良い」…リズは、男物の服持ってたらしない

？」

「男物？持ってない。
必要なの？」

「そっか……」

俺、スカートじゃなくてジーンズとかのズボンが掃きたかったんだよ。

まあ、無いなら仕方ないやあ」「ジーンズなら持ってる」なんですとー！？」

「ちよつと待ってて……」

そう言つてリズがどこかに行つた。

少しして戻つて来た。

「コウジユ……様……
これどう？」

「ありがとうリズ、それから俺もコウジユでいいよ」
渡されたものを見してみる。

履いてみた。うん良い感じだ。現在、帽子、白のセーター、ジーンズ。

良い感じだ。

なに、場面が飛んでる？

着替えてるところを描写しろってか！？

バカヤロー！！（とある三女的に）

「リズ、ホントにありがとな」

「ううん、良い」

「それにしても男物持って無いって言ってなかったっけ？」

「それ、女物。」

「……ま、まあ、男物に見えるから良いや」

「どう見ても女の子」

「ううゝ、で、でもズボンだ。それだけで大分よし。スースーしい。万事OK」

「何か違った？」

「こてんと首をかしげるリズ。お持ち帰りレベルだ。」

「いや、マジでありがとう！！行ってきます」

「行っってらっしゃい」

さあ町にやって来ましたよつと。

何？、また飛んでる？
気のせいだ。

現在来ているのは商店街です。
目的は、たい焼きだ。
イリヤと士郎が2人で仲良く食べたあのたい焼きだ。
この世界に来たんだから食べないと損だ。

お、見つけ。スーパーの前にあるあれだな。

へえ、結構種類あるんだな…。

ふむ、どれにするか……

「うゝむ……」

「どうかしたのか？」

> side out <

『stage7：冬木最初の1日（前）… inふえいと』（後書き）

どうでしたか？

たい焼き屋の前で話しかけてきた人物はもちろんあの人です。

段々本編に関わって来ましたね。

そろそろ聖杯戦争開幕です。

『Stage 8：冬木最初の1日（後）』：inふえいと

> side：士郎<

「うゝむ……」

学校が終わって、バイトに行く途中にいつもの商店街を抜けようとしたら、たい焼き屋の前で唸る少女を見つけた。

とても特徴的な少女で、頭より大きな黒い帽子に、腰よりも長いプラチナブロンド、白いセーターにジーンズ。

まるで幻想が現実を着ているようだ。

ただそう思った。

その少女はたい焼きを熱心に見ながら真剣に何かを考えている。

外国の子みたいだし何か困っているのかもしれないな。

よし、なら……

「どうかしたのか？」

「およ？…うおブラウニー!？」

「ブラウニー？家事妖精だったっけ…そr「なんでもないなんでもない！」そ、そうか…

それでどうしたんだ？

たい焼き屋の前で何か悩んでたみたいけど」

「ん、いや、大したことはないよ、どれもおいしそうだから何を食べようかなっていうのとお土産にも欲しいからいくつ買って帰ろうかなって」

「そうだったのか、だったら、ここのはどれも美味しいけど、普通のあんこは特に美味しいよ」

「へえ、じゃああんこにしようかな」

「お土産って言ってたけど、観光なのか？」

「いや、近くに家族で引っ越して来たんだ。今は散策してたところ」

「なら、人数分買って、気に入ったなら何度も買いに来たらいいさ。店の人もそっちの方が喜ぶ」

「ふむふむ、それもそうだね。ありがとう参考になったよ」

そういうと少女はたたたと店の方に買いにいった。

「さて、俺もバイトに行くか」

まだ時間はあるし、あそこにも行って……

「あ、し」……お兄さんちょっと待った！……」

「ん？」

さっきの女の子が声をかけてきた。
まだ困り事でもあるんだろうか。

「どうしたんだ？」

「いや、今時間ある？」

「えーっと、このあとバイトがあるから…少しだけなら」

「じゃあさ、一緒に食べない？お礼」

そう言っつて、掲げているのはさっきのたい焼きの袋。

「いや、それはお土産も入ってるんだろ？」

「だいじょぶだいじょぶ。ちょっと多めに買ったからさ。それにお礼だからもらってくれ」

「なら…お言葉に甘えるよ」

あの商店街で立ったまま食べるというのもアレなんで、近くの公園にきた。

住宅街の中にあるんから、日中は子供たちがたくさんいるが、今は冬場なので日が落ちるのが早く、子供たちはもう帰った後みたいで、貸し切りな状態だ。

そんな公園のベンチに二人して座る。

「はいこれ」

「ありがたく頂戴するよ」

受け取ったたい焼きはまだ温かく、美味しそうに湯気が立っている。

「あゝむ、おお、これは美味しいね」

お気に召したみたいだ。

「だろ？俺もよくあそこでたい焼きを買った」

「へえゝお兄さんのお勧めの店ってわけだ」

はむはむとたい焼きを隣で食べている。

見ているだけでこちらにも幸せになる位に喜んで食べている。
よかったよかった。

「あ、そういえばまだ名前を言ってなかったね。
俺の名前はコウジユ」

「俺は、士郎。衛宮士郎だ」

それにしてもこの子、話し方が男の子みたいだ。外国の子とは思えないくらい上手なんだけど、間違えて覚えてたんだろうか。

「あのさ、お節介だとは思ってたけど、話し方が男の子みたいだ。
分かっててその話し方なのか？
可愛い見た目とすごいギャップがあるぞ？」

「か、かわいいって……」

こ、これは分かっててだからいいんだ。これが俺の素だから」

かわいって言った辺りで何故か微妙に落ち込見ながら赤くなると
いう器用な事をしながら、言ってきた。
まあ、分かっててならいいか。

「さて、俺はもう行くよ。たい焼きありがとうな」

「お礼のたい焼きにお礼を貰うのはおかしい気がするんだけど、良
いか。それが士郎の性格みたいだからさ」

「はは、すごい観察眼だな」

「まあこれだけ色々してくれたらね」

「困ってる人を見たらほっとけないだけさ」

「お人よしって言われたことない？」

「む、無くは無い」

「まあそうだろうねえ…あ、じゃあ、お人よしな士郎にこんなのを
あげよう」

そう言つて渡して来たのはカードだ。

絵と何かが書いてある。

「なんだこれ、えっと、九死に一生スケープだ」読んじゃダメだつ
て！！！！」おおう！？わ、分かったけど、なんなんだこれ？」

「御守りみたいなものさ。肌身離さず持つといてね。あと絶対読ん
だらダメだから」

「御守り…か。よくわからないがいただくよ」

とりあえず、胸ポケットにしまう。

「あ、そういえば士郎ってバイト何時からなんだ？結構時間経っちゃってるけど」

コウジユが携帯を見せてくれるがそこに表示されてある時間を見ると危険な時間になっていた。

「や、やばい！！」

「そつか、じゃあ俺も帰るとするかな」

歩いても間に合うだろうが、ぎりぎりっぽいな。

席を立ち向かおうとするが、そこで最近の話題になっていることを思い出す。

「コウジユ、最近この辺りは暗くなると物騒みたいだし、送っていいんか？」

もう暗くなってきたし、こんな女の子を一人返すわけにいかない。そう思っただけが…

「大丈夫大丈夫、ここからなら、1分もせずに帰れるし」

言いながら、コウジユは公園の出口に向かって走っていく。

「またどこかで会うこともあるだろうし、よろしく」

出口で1度振り返りそう言ってきた。

「ああ、こちらこそよろしく」

「じゃあまた」

そしてそのまま帰っていった。

「おっと、のんびりしている場合じゃなかった!」

俺も急いでバイトに向かうことにした。

あ、そういえばバイトの帰りに住宅街を歩いていると昼間会ったコウジユみたいに白い髪（こっちはクリーム色に近かった）に赤い瞳の女の子が歩いてきて――

「早く呼び出さないと死んじゃうよ？お兄ちゃん」

なんて言ってきた。

振り向くと居ないし…

何だったんだろうか？

side out

『stage8：冬木最初の1日（後）…innふえいと』（後書き）

こんな感じになりました。どうでしょう？

コウジュが士郎に渡したものは何なのか！？

まあ、分かる方もいらっしゃると思いますがちょっとした伏線です。

ではではこの辺で…

感想お待ちしてます。

『stage9：月下の邂逅…inふえいと』（前書き）

昨日載せようと思ってたんですが、修整をしてたら今日になってしまいました。

申し訳ないです。

『stage9：月下の邂逅…inふえいと』

>side：コウジユ<

みなさんこんばんは。

現場のコウジユです。

俺は今、主人公の通う穂群原学園に来ております。

現在の時間は夜になったところといった感じでしょうか。

生徒だけでなく、先生方も帰られ、辺りは静寂に包まれています。

いえ、包まれていたと言っべきでしょう。

私が今居るのは敷地内の樹の上なのですが、眼前にある校庭では今まさに蒼タイツで赤い槍持った男と黒白の双剣を持った赤い男が闘い、静寂をかきみだしております。

一体彼らに何があったのか。

そしてこれから何が起こるのか。

実況中継していききたいと思います――

飽きた。

なんかノリでキャスターさん（ニュースの）をやってみたけど、面白くなかった。

聞くやつも居ないしね。まあ、声に出してたわけではないけどさ。

いや、だって見つかるじゃん？

今だって結構ギリギリに居るんだぜ？

まあ、そんなこんなで昨日士郎に会ってから1日経過している。

時間が飛ぶのはいつもの話だよ？

原作ではバーサーカーはここに来る必要はないんだけど、俺はちょっと気になる事があるんでここでのぞき中。

あとでイリヤに合流する予定だ。

およ、なんで見つからないか疑問って感じだな？

ふっふっふっ、ならば教えてやろうーああ、待って、ごめん調子に乗りました、お願いだから聞いて。

俺が見つかってない理由はこれ。

夢幻召喚『アサシン改』

ぶっちゃけ、プリズマイリヤを参考にした。

あれもカード使ってるし、俺の能力で再現できるかな？みたいなノ

リで出来ちゃった。

しかもついでにアサシンとしての隠密に対する概念を強化しまくったら気配遮断だけでなく、見ることもできなくなる背景同化という、まさにキングオブアサシンの能力になってしまった（笑）

まず見つかりません。

アサシンも涙するだろう。

割と近くにいるんだけど蒼いのも、赤の主従も気づかんしな。

しかし、しかしだ。

これには1つ多大な欠陥がある。

それは服装だ。

何故に革帯？ベルトみたいなのでグルグルと身体を覆って、それで服が構成されている。

……これってアレか？第四時聖杯戦争の方のアサシン。

二次で読んだり、画像見た程度でしかないから実際にどんなやつだったかは知らないが…

確かに俺が見た限りアサシンっぽかったよ？

第5次のアサシン、佐々木小次郎とかまったくアサシンじゃなかったし……

けどさ、これはないだろ……

銀髪獣耳口リ巨乳にベルト服って…要素多すぎねえか！？

いや、大半は初期設定なんだけどもさ……

なんにしてもこの服は色んな意味で危な過ぎる。

唯一の救いは能力を発動しちまえば、背景同化によって誰にも見られないことだ。

少しは安心でき……って安心しちゃダメじゃね!?

こんな格好でも見られなければ大丈夫なんてただの露出狂になっちゃう!!

ううゝ恥ずいよゝ

どうして俺の能力は服装関係で欠陥があるんだ?

補正か? 神の意思か?

とりあえず今使ったための能力出し、ちょっとだけガマンだ。ガマン。

それにしても、すげえです。

校庭で行われてる戦闘をずっと見てるんだが……

蒼い方のランサーが繰り出す、高速の槍の連撃。

ただ突くだけではなく、斬り、払いといった多種多様な連撃で、息もつかせない。

対する赤い男、アーチャーも負けていない。

手にする黒と白の双剣を使い、ランサーの多彩な技を全て受け流している。

俺は原作知識あるから赤い方がアーチャー（弓兵）のクラスでも普通に受け入れているが、ランサーの方からしたら奇怪だろうな。

自分の槍を受け流す技量を弓兵が持つてるんだから。

しかも、相手の剣を弾き飛ばすことができて、いつの間にか手に戻っているという不思議。

それでもランサーは隙をつくらず攻撃をしているわけですがね。

それにしても、いやあ凄いな。

これが本来のサーヴァントの戦闘というわけだ。

俺の場合こうはいかないからなあ…

まず、経験が足りない。

本国のアインツベルン城の戦闘部隊のメイドさん達と何度か模擬戦したんだが、勝負にならなかった。

いや、実力がどうのって話じゃないぜ？

このチートボディとチートパワーはただの木刀なのにアーツ技を使うと切り裂いてしまう。

要は俺が上手く力加減が出来ないから模擬戦がなりたたなかったわけだ。

だから、眼前の2人の様にいかない。

あの2人が行っているのは技と技の応酬だ。

俺は一撃必殺を叩き込むだけ。

な？

ひょっとしたら、この身体が全てのアーツ技を覚えていたように、まったく出来ないわけではないと思うが（自分でも練習はしたし）、自信ない。

まあ、追々覚えていくでしょう。

ある程度は能力でカバーが可能だしな。

おっと、そうこうする内に士郎君が出てきたぜい。

というかなんであんなに近いのに、蒼いのも赤いのも気づかないんだ？

俺みたいに偽装工作してるならまだしも突っ立ってるだけだぜ？

謎だ――

「誰だ！……！」

タッタッタッ

ああ、びっくりした〜

士郎が見つかることを知ってたはずなのに、一瞬俺が見つかったか
と思った（汗）

って、おお、ランサーが校舎の方に逃げた士郎を追っていった。
そしてそれを赤の主従が追いかけていく。

さて、運命の瞬間だぜ。

衛宮士郎は今から心臓を貫かれる。

普通ならそこで死んでゲームオーバー……

だが、衛宮士郎にここで死ぬ運命は待ち受けていない。

それどころかここから物語は加速していく。

「お、来た来た」士郎が廊下を走って来ているのが見えた。

しかしすぐにランサーが追いつく。

心臓を貫かれ、崩れ落ちる士郎。
去っていくランサー。

カウント開始だ。

59、58、57……

さて、ここで種明かしという。

前に俺が士郎に渡したカードはあるアイテムをカード化したものだ。

そのアイテムというのがスケープドールだ。

スケープドールの効果は持っている状態で戦闘不能状態、つまり瀕死になると瞬間回復してくれるという復活アイテムだ。

しかし、これをそのまま渡してもランサーが殺した瞬間に回復するため、そのまま一度殺されるといいう状況に陥る可能性がある。もちろんそんな状況にするわけにはいかないし、つもりもない。

というかそれはどんな鬼畜かっての。

だからこそ、士郎が刺されても、ランサーが立ち去ってから復活させるというタイムラグが必要だった。

それを考えている際に思いついたのが某ハンター漫画の、強欲アイランドに出てくるカードの効果、宣言せずに1分経つと勝手に具現化してしまうというもの。

これを応用した。

しかも、ただこれを応用しただけじゃ、カードを渡して1分で具現化なんてことになってしまいうから、スケープドール自体の概念も上手く利用した。

スケープドールって言うのは、持ち主が瀕死の状態にならないと発動しない。

ここから条件を満たすまで発動しないという概念を抽出。
そこに、某ハンター漫画のカードからカードの発動には宣言、もしくは1分間放置するという概念をお借りして合体させる。

そうやって作られたのが士郎に渡したあれだ。

自分でもめっちゃくちゃな設定だとは思っけど、これはこれで今後のための実験になる。

もちろん士郎には悪いと思ってる。

そのために何か失敗したときのためにここで待機しているんだし……

士郎ならこのことをぶっちゃけても、あまり何も言わなそうだけど……
何か考えだしたらさらに罪悪感が出てきた……

改めてお詫びに行くとしよう。

つと、そろそろだな。

……3、2、1、0!!

ツアアアン!

士郎の身体が光に包まれたのが見えた。

「よし!回復してる!!……あれ?完全回復してない?」

失敗か！？いや、無茶な設定したから若干のエラーが出たのか？

一応心臓の穴自体は塞がったみたいだけど……

詳しく確認するために窓の外の所まで行くと、誰かが駆けてきた。げ、赤いのが来た。

慌てて、窓の所にぶら下りながらできる気配を消せるように静かにする。

自分は背景の一部。自分は背景の一部……

『ねえ、アーチャー今の見た？』

『ああ、一瞬だったがカードのようなものが光ったのも見えた。魔術の媒体か何かだろうが……』

『だったら、衛宮君……こいつは魔術師だってこと？』

『今ほどの瞬間回復を行える力を持つものが同じ学校内に居たら凜が気づくだろう。よっぽどの実力者で無い限りな。しかし実力があるならいくらサーヴァントが相手とはいえ、もう少し抵抗するはずだがそれも無い。』
『だったら考えつくのは第3者が、小僧に媒体を渡したんだろうということだ』

『そう……よね……それが一番妥当か……』

み、見られてたー！？

『誰だ！？』

見つかった！？

これだけ近くなのに気を抜いてしまったせいかな。こうなったら後ろに向かつて前進あるのみ！！

色んな意味で見つかるわけにはいかないぜ！！

アデュー！！さよなら！！ばいばいキーン！！

『まだランサーが居たの！？アーチャー追って！！』

『承知！！』

「やばかった。マジでヤバかった……」

姿は見えないようにしてたけど、追ってくる追ってくる。

チートパワーにモノを言わせて何とか撒けたけど……

っていうか、士郎回復しきって無いまま置いてきてしまった。

「まあ、赤いのがいたし後は原作のように回復してくれるか」

『コウジユ？聞こえる？』

イリヤからの念話だ。
なんだろ？

『ハイハイ、コウジユですよ？なに？』

『そろそろ戻ってきて。会いに行くわ』

『了解マスター』

さてさて行くとしますかね。

あ、元の姿（最初の姿）に戻っておかないと…

イリヤの前にこんな格好で行ったら何を言われるか……
それ以前に俺が嫌だ。

俺のライフはもうゼロだ。

そんなこんなで、イリヤと合流後、住宅街にて待ち人を待っている。
もちろんその相手は主人公たる士郎だ。

実際は他にも居るんだが、用がある相手は士郎だ。

勿論用があるのは俺じゃなくて、イリヤだ。

何故イリヤと士郎が関わりがあるのかというと、色々あるんだが

……

端的に言つと家族の問題になる。

士郎は養子で、イリヤは親の下から引き離されていた子だ。そして今日初めて会う。

しかし、感動ものみたいな感じになることは決してない。

これは本国の爺さんの陰謀やすれ違い結果起こったモノだ。

まあ、俺が解決するつもりだがな！！

あ、するのはもっと後でだけだな？

「ねえコウジユ。どうして聞かないの？私が彼にこだわる理由」

「聞く必要はないさ。俺はサーヴァント。マスターの命^{めい}ならば、ただ従う」

「……」

イリヤが目を見開いてこちらを見てくる

「なんだよ」

「まるでサーヴァントみたいだったから」

「サーヴァントだったの…それに、ホイホイと話すことでもないだろ？イリヤの家族のことなんだから」

イリヤがまたも目を見開く

「知って…いたの？」

「えと、勘と状況とイリヤを見てたら何となくな。表面的なものだけだ」

嘘だ。

俺は原作知識があるから知っているだけ。
いわゆるズルだ。

ごめんなイリヤ。

「そう、何でも知ってるのね」

「知ってることしか知らないさ」

「ふふ、なによそれ」

「気にしない気にしない。ほら、お目当ての人が来たぜ」士郎達が来た。

原作通り、士郎に赤の主従、そして、黄色いカップ……を着たセイバー。

士郎は無事に召喚できたみたいだな。

イリヤが一步前に出た。

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

「よ、士郎。俺とも会うのは二度目だな」

さあ、初戦闘といきますか。

>sideout<

『stage9：月下の邂逅…inふえいと』（後書き）

どうでした？

カードの効果を上手く説明できているでしょうか？

さて、次はやつと戦闘シーンです。

ネタをどれだけ入れるか、少しは自重するべきなのか大いに迷います。

では、これにて。

感想をお待ちしています。

『stage10:ちーとぱわー(前)…innふえいと』(前書き)

あれ？

いつの間にか前後篇に……

思ってた展開と微妙に違うような……

まあ、なるようにしかありませんよね(笑)

『stage10:ちーとばわー(前) : inふえいと』

>side:士郎<

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

「よ、士郎。俺とも会うのは二度目だな」
今、目の前にいるのは昨日会った二人だ。

コウジユとすれ違った少女。

白い二人。

二人は知り合いだったのか。それにしてもこんな時間に一体……

「士郎、知り合い？(ですか?)」

「えっと、昨日知りあったというか……」

セイバーと遠坂が同時に聞いてくる。

「こんばんは凜。」

私はイリヤ、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えば分かるでしょ?」

「アインツベルン?」

凜は何か知っているようだ。

「ふふ、これ以上の挨拶はもういいよね？
どうせここで死んじゃうんだし」

「え？」

今かなり物騒な事を言わなかったか？

「じゃあ、殺すね。」

やっちゃえ、バーサーカー！！」

「あいよーマスター。」

来い！キヤリガインルウカ！！

さて…いくぜ！！」

コウジュがどこからか、コウジュよりも一回り大きい、両方に鎌の刃が付いた禍々しい形状の明らかに敵を斬るための武器を取り出し、こちらに斬りかかってきた。

「あの子、サーヴァント！？」

「士郎、下がって！」

「セイバー！」

セイバーが応戦するために飛び出す。

「うつうつりや！！！！」

コウジュが大きく振りかぶった。

キインッ！！！！ドオオン！！！！

セイバーが見えない剣をにかけて防ぎ、辺りに金属同士がぶつかる甲高い音を響かせる。そして驚くべきことに、防いだセイバーの足元にはクレイターができる。

「てい！や！そりや！！
よいしょおお！！」

ヒュヒュヒュンッ！！

ガン！キン！！

コウジユは両方に刃がある形状を利用してクルクルと舞うように回りながら連撃を繰り返す。

セイバーも負けじとその攻撃を逸らし、時に避けていくが……

「セイバー！」

「あんな子があんなに大きいのをおもちゃみたいに……しかもセイバーを押してる！？」

コウジユの力がすごいのか、徐々にセイバーの顔が苦しみをまじえていく。

「はは、やつちゃえやつちゃえ」

「てりやーそりやー！！」

「くっ」

どうしてこんなこと状況になってるんだ……？

今日は色んな事が一度に起きすぎだ。

最初は、学校でのこと。

友人の用事を代わりに引き受けて、あれこれしている内に外は真っ暗になっていて、外に出ると校庭では殺し合いが行われていた。目撃したのを見つかつた俺は校内に慌てて逃げ込んだが、殺し合いをしていた片方に槍で心臓を貫かれて意識を失った。

次に目が覚めると、心臓に空いたはずの穴はきれいに塞がっていた。自分も魔術を未熟ながらも扱う身だ。

あれほどの傷が塞がっていても不思議ではない。

赤い宝石がその場に落ちていたから、誰かが治してくれたのかもしれない。

そう無理矢理その場合は、解釈し、その場を一刻も離れるために家に帰ると、さっき俺を刺殺した男が再び襲ってきた。

なんとか俺が扱える魔術の強化を使って応戦するが、魔術も武術も未熟者の俺がかなうはずもなく、すぐに追い込まれ、外の土蔵にまで吹っ飛ばされた。

詰んだ、とそう思った瞬間、土蔵を光が満たし、次の瞬間には誰かがやりの男を吹き飛ばした。

「サーヴァントセイバー、召喚に従い参上した。
問おう、あなたが私のマスターか？」

それが、セイバーとの邂逅。

青いドレスに所々鎧を着けた騎士服を着た少女、セイバー。

セイバーは矢継ぎ早に召喚がどうか言ってすぐに槍の男の元に戦いに行き、何とか相手を撃退した。

何が何だか分からないまま、自己紹介とかをしていると、突然セイバーが走り出した。

追いかけるとセイバーは誰かに斬りかかろうとしていたため、慌てて止めると、そこにいたのは同じ学校の人気高い美少女の遠坂だった。

遠坂は、親切にも俺がどういう状況にあるかを簡単に教えてくれた。

聖杯戦争

7人のサーヴァント

魔術師同士の殺し合い

それでも俺はまだよく分からなかった。

そんな俺を遠坂は聖杯戦争を監督している人物の所へ連れて行ってくれた。

そして到着したのが、隣町にある言峰教会だった。

そこで俺は、聖杯戦争について詳しく知ることになった。

そして、そこで神父の言峰綺礼に教えられたのは、10年前の災厄、未だ持つて原因不明とされていた大火災が、俺も死にかけ、色んな物を焼いたあの出来事が前回の聖杯戦争で起こったものだという真実だった。

俺が目指しているのは『正義の味方』だ。

だから俺は宣言した。

魔術師同士の殺し合いも、あの大火災が起こるようなことも防ぐために聖杯戦争に勝ちぬくと。

その帰りに会ったのが白い少女達。

これも聖杯戦争だからだって言うのか……？

side out

side:コウジユ

「てりゃーそりゃー!!」

「くっ」

何とか力押しでセイバーを押しているが、こんなものなのか？

あ、そか、ランサーの兄貴の一撃を士郎がへっぽこだから治せてなくて、表面上だけを取り繕ってる状態なんだっけ？

ドンマイセイバー…

「とおりゃあ!!」

ヒュウン!!

思い切り振りかぶって1撃を入れようとするが、セイバーは上に飛んで避け、電線を走っていく。

そんな簡単にいくわけ無いか。

つて、あ!!セイバーイリヤの方に行ってるじゃん!!

慌てて追いかけて――

「やらせるか!!」

斬りかかる。

ヒュン!! ギン!!!

しかし、見えない剣で防がれた。
しかし――

「ツウルアア!!」

ブウン!!

力任せに士郎たちがいる方へ吹き飛ばした。

「バーサーカー、そこよ、ひと思いに仕留めてしまいなさい!」

「まったく…軽く行ってくれるぜ」

セイバーはこちらを睨みながら、胸の所を押さえている。

やっぱり、ゲイボルグの傷がかなり影響してるみたいだな。

「セイバー!!!」

士郎が思わずセイバーに駆け寄ろうとし、凜に止められている。

っていうか士郎君? あんたさっきからセイバーしか言ってないよ?
それでいいのか主人公…

ん？士郎を止めた凜が前に出て何か唱えてる。
そして片手を銃みたいの前に出して……

バシユン！バシユン！バシユン！……

撃ってきた！？ガンドかよ！？

ガンド、それは相手の身体活動を低下させる呪いを内包した魔術。
本来は物理的效果は無いが、凜の高い魔力密度により弾丸並みの威力があり、連射する様は機銃掃射のよう——だっけか？

なんて考えてる間に俺に迫るいくつもの黒いガンドの球。

避けられない！！

バシ！バシ！バシ！

あれ？痛くない？っていつか当たってない？

バシ！バシ！バシ！…

えーと、全部俺の寸前でかき消えています。

なんでさ？

あ、PSP2の設定か！！

ゲーム内ではザコキャラとかでレベルが離れている敵からの攻撃はレジストできるっていう設定があるからそのせいかな。

つまり、凜は・・・

いや、俺のこの身体がチートすぎるんだ。

凜は確かかなり優秀な法の魔術師らしいし。

って、その場合この身体に通る攻撃ってほぼ無くないか？
本家バーサーカーよりエグイかも、俺・・・

「なんてでたらめなのよ！！！！」

「逃げろ！セイバー！！！！」

いやゝ次どうしよう？

セイバー ↓ 動けない
士郎 ↓ 「セイバー！」
凜 ↓ ガント効かない

積んじやった。

ネタをかまそうと思ってたのに……

ヒュウウッン！！バシン！

悩んでいると遠くから殺気を感じたんで振り向いた瞬間、何かが飛んできて目の前でレジストされた。

狙撃！？いや、アーチャーか！！

すっかり忘れてた。

ヒュウウッン！！バシン！ヒュウウッン！！バシン！……

「これ、うつとおしいかも……」

こっちからも狙撃するか？ライフル装備の中にあるし…

それとも、こっちも弓で…

いや、ネタに走ろう（笑）

ネタ…ネタ…東方でいつか。

思い浮かべるのは、幻想郷に住む、吸血鬼なおげつさまの技。

「……神槍『スピア・ザ・グングニル』」

ル力を一旦直し、スペルカードを取り出し、宣言する。
すると、カードから炎が出、それは槍の形状を持つ。

「せーのー!!」

ブウン!!

思い切り振りかぶって、アーチャーが居るであろう方向へ投げる!

ツドガアアアン!!!

「たーまやー」

「や、やりすぎよ!!」

イリヤからの抗議が入る。
うんごめん、やり過ぎた。

キロ単位で離れてる所の爆発なのに、ここまで明るくなる位の爆発
が起こってる。

多分ビルの屋上からの狙撃をアーチャーはしてたんだろうけど、屋
上が崩壊とかじゃなくて、無くなっちゃった。

いや、多分ぎりぎりアーチャーは生きてると思うよ? 瀕死かもしれ
ないけど…

いや、実はね?

カラドボルグとか宝具級のものを射ってこられたら、いくらチートでもレジストできるかちょっと不安だったもんで焦ってたんで、威力の制御が手抜きになっちゃって……
もう少し軽めでいこうと思ってたんだよ？
本当だよ？

言い訳になって無い？

そうつすか。すみません。

「なん…なんだ…」

「あり得ない。グングニルって今言った？」

「宝具…？」

馬鹿な、グングニルは主神オーディンの…」

上から順番に士郎、凜、セイバー。

「ああ、皆さん？俺はオーディンでも神族でもないよ？今のはそういう技だから」

まあ、一応まだ見習い（笑）だし。

「圧倒的ね。バーサーカー」

「なあイリヤ。コウジユで呼んでくれない？自分がバーサーカって感覚あんまりないから、分かりにくい」

「そうね、コウジユの真名を知られたところで関係ないしね」

「コウジユ？それが真名？どこの英雄だったのよ！？」

凜が軽くヒステリックに叫んでる。

アーチャーがアボンだもんなあ。

「教えてあげるわ。コウジユはね、異世界の英雄よ。それも神殺しをなした…ね…」

「あの、イリヤさん？紹介されるのは恥ずいんだけど？」

「異世界の神殺し！？そんなわけ…」「言いきれるの？」「…つく…」

「コウジユ…と言いましたね？」

ちよつとの間空気にされてたセイバーがこちらには話かけてきた。

「あなたのクラスはバーサーカーなんですよね？」

「うん、そだよ」

「なぜ、会話が可能なのですか？」

バーサーカーのクラスは文字通り狂戦士のクラスです。会話など到底不可能なクラスのはず…」

「うーん、多分だけど、俺は能力の一つとして元々バーサク化を持つてるからそのせいじゃない？」

だからクラス補正は必要なしと判断されたとか」

「完全にイレギュラーサーヴァントというわけですか」

セイバーはまだダメージが抜けないようで、片膝をついたままの状態だ。

これでもう相手側に戦えるものはいない。

「さあ、観念できた？もう、あなたたちの負けよ。」

イリヤが敗北という名の死刑宣告を言い渡す。

どうしよう…

悪ふざけをしまくって、あやふやな状態で誰も血を流さずに終わらそうと思ったのに、超シリアスなんですけど……

これ、殺らなきゃ駄目な空気出てんじゃない。

「じゃあ、さよなら。やっちゃんなさいコウジュ」

再びル力を構える。

あー！！誰かどうにかしてこの状況！！

ヒュンヒュンヒュンっ！！！！

そんなことを考えてたからか、誰かが何かを二つ投げてきた。

何とか防ぐことはできたけど、いったい誰が…ってこの白黒双剣はアーチャー！？

「アーチャー！！無事だったのね！？」
凜がうれしそうに声をかける。

「勝手に殺されては困るな」

おお、あちこちボロボロだけど、何とか無事っぽいな。

「さて、バーサーカー、よくもやってくれたな。この貸しは高いぞ？」

side out

『Stage10：ちーとぱわー（前）…innふえいと』（後書き）

どうでしたか？

戦闘シーンを楽しみにしていただいていたお方には申し訳ないですが、前後篇としました。

次回、ネタ武器で勝負を決め、コウジユの目論み通りにあやふやにして終わらせてやろうと思います。

では、次回をお楽しみください。

感想待ってます。

『stage11:ちーとぱわー(後) : inふえいと』(前書き)

少し遅れましたね。

書き直しまくった結果こうなりました。

ではござ。

『stage11:ちーとばわー(後) : inふえいと』

side:コウジユ

「この貸しは高くつくぞ?」

アーチャーがカッコよくセリフを決める。

いいなあ、かつこいいセリフがスゴイ似合う。

アーチャー語録には俺も憧れたもんだよ。

仮面ライダーのほうの天道語録ももちろん好きだ。

けど、今の俺が言ったところであつたかと言っていいほど迫力がない。

なに可愛いこと言っちゃてんのこの子レベルである。

「良かったわアーチャー。死んだと思ったんだから」

凜がさっきまでのが嘘のように嬉しそうに笑っている。

そんな凜にアーチャーは少し呆れたように……

「凜……、君は私のマスターだろう?だったら令呪の有無で気づいてくれ……」

「うつ……」

このタイミングで凜のウツカリが発動。

確か血筋なんだっけ？

むしろ呪いな気が……

そんなことは置いて、だ。

目の前のアーチャーをどうやって倒そうか。

1：おちよくる

2：逃走する

3：ネタにはしる

4：コマンド

これは3しかないな。

1は後々仲良くしたいのだから不可。

2はもちろん不可。

4…俺にそんな機能はねえ。ない…はずだ。

よし、俺のネタ攻撃パート2！！

「来い！！ツインドンパツch…間違えた…ツインネギセイバー！！」

俺の両手に現れたのは文字通り一対のネギ。

緑の電子な歌姫が持っているものがPSP2内で双手剣として再現されたものだ。ちなみに類似品として片手剣型、片手杖型なんてのもある。

あ、今度リアルに片手剣の方にドンパッチソードの概念加えてみようかな。

効果はギャグ補正が発動し、いつの間にか勝ってる…とか？（笑）

「なん…だと…」

アーチャーの顔が驚きに包まれる。

何に驚いてるんだ？

ネギが出てきたこと？

「なぜそれはネギなのに武器として、宝具として成り立っている…
…？」

ああ、そっかアーチャーって武器の解析ができたっけ。

っていうかこれって宝具扱いなんだ？

確かにPSP2内で再現されてる、アーチャーが持ってる白黒双剣の干将・莫耶と同じ武器ランクだったけど……
そして何故か、

初期値はネギの方が強い（笑）

まあ、実際にアーチャーが持つやつと比べたらどうだかしらんけど

……

「俺も不思議だよ。けど……」

瞬時に近づき斬りかかる。

ガアアン！！

アーチャーに防がれたのに合わせて、再び距離をとる。

「ちゃんと剣だろ？しかも……」

近くにあった電柱に一閃！

スパアン！ズズズ…ドオン！！

電柱の斬った部分に線が入り、スライドするようにずれていき、倒れる。

「切れ味が良いという謎（笑）」

「ありえん」

「ありえません」

「なんでさ」

「でたらめよ、色々と…」

アーチャーを始め、セイバー、士郎、凜とネギのすごさに驚いてい

る。

「というか現実逃避をしたそんな感じ？」

「なんていうか、ごめんなさい……」

何故かイリヤが謝りだした。

「何でイリヤ謝ってんの？」

「コウジユが悪いんでしょ！！何でネギなのよ！！」

「む、こいつを馬鹿にしない方が良いぜ？」

「なんたつて、とある歌姫が持っていたものが原典なんだが、歌いながらネギを振るといっただけで何千、何万もの人がノックアウト（萌えた的な意味で）されたんだからな。」

「しかもそうする内にこのネギは技を内包するまでに昇華したものだ。」

「二。動なんて、その歌姫や、その親戚？達に大半を占拠されてると言っても過言ではないはずだ。」

別に否定的意味は無いぜ？

転生前は俺も聞いてたし（笑）

「ネギなのに、何故かすごいものに見えてきた……」

「あ、こんなものもあるぜ？」

一旦ツインネギセイバーを直し、再び両手にネギを出す。

「何も変わってないじゃない」

「全然違うーうー！右手にあるのが片手剣のネギセイバー。別名、真打・ネギ雪。そして左手にあるのがネギウオンド、片手杖だ。まったく違うじゃないか」

本来のPSP2内での設定では、剣と杖を持つことはできないが、携帯設定ではなく、この手に直接出すことで俺はこの制限を突破した。

ゲームじゃないから杖で殴る事も出来るんだぜ？

「……一緒にしか見えない（ぞ）（ません）（わ）」「」「」

そこハモんなー！！

「私は解析できるおかげで分かるが、その違いを肉眼で見分けるのは不可能ではないかね……？」

今現在敵であるアーチャーにフォローを入れられてしまった。

「もう良い、全員みつくみくにしてやんよー！！」

思わず俺は、ネギを振りかぶりながら戦闘行動に移ってしまった。

「くっ……！！」

とりあえず、1番近くで、目に付いたアーチャーを襲撃する。

斬り下ろし、袈裟斬り、突き、あらゆる方向からの攻撃を、ただやみくもに回転を意識しながら、流れるように繰り返す。

ガン！！ギャアン！キンツ！！ガン！！……

「大人しくこのネギのさびになれ！！！」

ギャガン！！ギン！！……

「御免こうむる…な！！！」

アーチャーも負けじと隙をついて攻撃してくる。

ヒュンツ！キン！！……

「だったら……」

一度離れて、左にあるネギ（杖）をアーチャーに向ける。

「グランツ！！！」

グランツは天空から光の矢を振らせて周囲の敵を貫くフォトンアーツ（魔法攻撃）だ。

ツドオオン！！！！

「クッ！！！」

ぎりぎりでアーチャーは横に飛ぶことができたが、アーチャーが寸前までいた所には小さいがクレーターができている。

「あいつ魔術も使えるわけ！？しかも無詠唱であの威力って何！？」

遠くで凜が叫んでいる。

気にしないけどね。

「本当に君はでたらめだな」

「自分でも思うよwww

さて、次で決めるよ？」

再びアーチャーにネギ（杖）を向け…

「こいつは反則だぜ？メギバース！！！」

これは闇属性のフォトンアーツで、効果は一定時間PPつまりこの世界でいうところの魔力がなくなるまで（このチートボディには関係ないが）あいてのHPを吸収することができる技だ。

しかも、これは範囲技だ。

つまり避けられない。

「何ッ！？グ…コレは……」

「あんたの生命力を吸収してるんだよ」

アーチャーが膝を付く。

ちよつと卑怯な気もするけど、今日のところはこの位で終わつて
う。

ちよつとは自重（今更な気もするが）しないとな。

バタッ……

バタバタッ……

はて？

今誰か（何人か）が倒れた音が……

目の前のアーチャーは方膝着いてるだけだし……

「衛宮…くん…大丈夫……？」

「士郎！！くっ…力が入らない……」

「なんで…私まで……」

え？

えと……何で離れてる皆さんも苦しそうなんでせうか？

士郎 ↓ 返事がないただの屍のようだ

凜 ↓ 倒れていて、何とか立とうと頑張っている

セイバー ↓ 見えない剣を杖代わりに立とうとしているが立てない

アーチャー ↓ さっきから一緒

イリヤ ↓ 倒れてる

！？

「イリヤさん！？」

術を止めて駆け寄る。

「な、なんで…私まで攻撃してるのよ！？」

俺の首もとをいきなりつかんでシェイクしだした。

ガクガク……

けどすぐに、イリヤは力尽きて倒れてくる

「コ、コウジユ…退くわよ…後で覚えてなさい…」
そう言い残してイリヤは気絶した。

最後の所でめっちゃ睨まれたんだけど……ガクブルガクブル……

「えっと……やっちゃった？」

「ひょっとして君は凜以上のウツカリなのか？」

「それって…私に喧嘩うつてない…？」

「私はあんなのに敗れたのか……」

ううゝ…

アーチャーにウツカリ認定された上に、セイバーにはあんなの呼ばわりされてしまった。

べ、別に悲しくなんかないからな！？

っていうか、そのウツカリ認定はやめてくれ！！
ホントにウツカリ属性が付きそうだから！！

「うう、きょ、今日のところはこれ位にしておいてやる……覚えてるよ……!……!」

イリヤを抱えて跳び去る。

言っておくがこれは戦略的撤退だからな……!!

『stage11:ちーとぱわー(後) : inふえいと』(後書き)

どうでしたか？

良い意味で皆さんの期待を裏切れていれればと思います。

感想お待ちしています。

『stage12:OSHIOKI...inふえいと』(前書き)

スイマセン遅れました。

連休はずなのに、平日より時間が無いのは何故でしょうか。

『stage12：O SHI O KI：inふえいと』

>side：コウジユ<

ハロー。

みんなのアイドルコウジユだよ？

……ごめん。やっぱ今のなし、自分でやっててキモかった。忘れてくれ。

take2

よ、皆昨日ぶり。
元気だったか？

俺？もちろん元気だ。

と…言いたいところだが、実は昨日やらかした事でちょっとな…

いや、後悔はしてないよ？

デフォルトで俺は反省はしても後悔はしない。

って、そんな話じゃなくてだな……

ほらあの、俺が最後に使った術を失敗してイリヤに駆け寄った時の、
気絶する時に残した言葉、あれのせいでビクビクしてんだよ。

あの時の目も頭にこびりついてて……ガクブルガクブル……

昨日、深夜だったし今日って言っても良いくらいだが、聖杯戦争（
転生前から考えても）初の俺の戦闘のあと、俺は急いで城に帰って
きた。

とりあえず、セラさんに見つかからないように（リズには見つかった）
イリヤを私室まで連れていき寝かせた。

そしてすぐに、回復のフォトンアーツであるレスタをイリヤに使い、
治療したあと自分の部屋で起きるのを待っているところだ。

「俺…何されるんだろ…」

とりあえず、正座してよ……よいしょ…

土下座の準備は万全だ！！

side out

（side：士郎）

「知らない天」いや、俺の部屋…だな…」

何故か言わないといけない気がしたが、気のせいだな……

そんなことより……

「昨日…俺はあれから……どうなった……？」

身体がだるい。

コウジユがネギを出した辺りからの記憶があやふやだ。

「どこかが痛い訳じゃないけど…ホントにダルいな…」

このまま寝ているのもあれだし、居間の方に行くために立ち上がる。

病み上がりみたいな、脱力感がある。

今日は居間が遠い。

「おはよう、衛宮くん。もうお昼だけど」

「あ、ああ、おはよう…って遠坂！？なんでここに！？」

「あのねえ…あなた昨日の自分がどんな状態だったか覚えてないの？」

どんな状態って……
首をかしげる

「簡単に言えば、生命力だけが極端に引っこ抜かれた状態だったのよ。ギリギリまでね」

「え、じゃあ、遠坂も倒れたりしたのか？」

「倒れはしたけど衛宮君ほどじゃないわ。あなたは素人のへっぽこでしょ？魔術耐性がほとんど無いから極端にダメージがあったのよ」

「へ、へっぽこ！？というか話し方が……」

「！……こつちが素なのよ！悪い！？」

「悪くは無いと思うぞ…？うん」

何故か怒られた。何でさ…

とりあえず、俺の中の遠坂像が崩れたのは確かだ。

「コホン、そんなわけで私はあなたを治療するためにここに来たってわけよ。

……実際には治療は必要なかったけどね…何故か勝手に治ってたし……」

後半が声が小さくて聞こえなかったんだが、何だったんだ？

「そつえば！あの後どうなったんだ！？セイバーは！？」

治ったと思っていたランサーから受けた傷。

コウジユと少し交戦しただけで槍を受けた場所を押さえて膝をついていたけど…無事だろうか…

「落ち着きなさい。セイバーは無事よ。ただ、昨日のことで大分消耗はしてるみたいだけどね」

「消耗？」

「バーサーカーが最後に使った魔術は生命力を吸収するというものだったみたいだけど、アーチャーやセイバーは英霊、つまり現界を維持しているのは魔力だから生命力の代わりに魔力が吸収されたみたいなのよ。

だから、あなたからの魔力供給を得られないセイバーはほとんど回復していないのよ。

はあ、なんでこんなのがクラス中最強と言われセイバーのサーヴァントを召喚しちゃうんだか…私なら回復なんてすぐなのに……」

「ぐ…、確かに俺は回復とかの魔術は全然だけどそこまで言わなくてもいいじゃないか」

「…ごめんなさい。言い過ぎたわ。私も動揺してるみたい。昨日のバーサーカーは規格外すぎた」

「そうか？バーサーカーなんてクラスが似合わない女の子に見えたけど…まあ、英霊だけあって強かったのは確かだけどな……ネギ使ってたけど…」

「あのね衛宮君、よく考えてみなさい。昨日のあの子が使ってた攻撃手段」

攻撃手段？

えっと、確か…

最初は、両端に鎌程じゃないけど湾曲した

刃がついた武器でセイバーと接近戦をやってたっけ？

それから次は…ああそうだ。槍だ。紅い炎でできた魔術の槍。カードから詠唱も無しにあれだけの威力があるのにはビックリした。

その次が、ネギか……

でもあのネギはビックリしたな。なぜ斬れたんだろうか……

それも英雄だから成せたのだろうか……

しかもアーチャーがあれば宝具とか言ってたっけ。まったく訳がわからない。

で、次もネギ。魔術の媒体みたいに使ってたし、別のネギとか言ってたけど。でも使ってた魔術は半端がないものだったな。光を落とす方はクレーターが出来てたし、次のやつはあまり覚えてないけど結構離れてたのに一気に何かが抜けたのは覚えてる。

「どう思い出した？ だったらわかるはずよ。あの子は、バーサーカーは弱点が見つからない。近距離もケガをしてるとはいえ、セイバーとほぼ互角。遠距離からの不意打ちの攻撃もまったく気にも止めず障壁みたいなのでレジスト。そして、無詠唱であの威力の反撃の炎槍、光を落とすのも、生命力を吸収するのもそうね。

しかも特にひどいのがラストの魔術！！

生命力を吸収って何よ！？ こっちはダメージを受ける一方で相手は回復するのよ！？ でたらめにも程があるわよ！！」

話してる内に怒りのボルテージが上がったのか、肩で息をしながら捲し立てる遠坂。

確かに改めて言われてみると出鱈目だと俺も思う。

しかし、そんなに気に障ったのか……

「ふう…ごめんなさい。あなたに文句を言っても仕方ないわよね」

落ち着きを取り戻して、目の前のお茶をのむ遠坂。

「いや、俺に言うことで楽になったんなら良いけど」

「そう、ありがとう」

「ああ」

「ところで、衛宮君はこれからどうするつもり？」

「これから？」

「ええ、聖杯戦争にどうかかわっていくつもりなのかってことよ」

「俺は、10年前の大火災みたいになるようなら防ぎたい…ただそれだけだ。聖杯なんてものに興味は無い」

「そついうと思ったわ。言っておくけどあなたその内セイバーに殺されるわよ？」

聖杯戦争で召喚される英霊たちにも叶えたい願いがあつて聖杯を必要としてる、だから私たちマスターに従ってくれるのよ。あのセイバーだって例外ではないわ」

「セイバーにも…叶えたい願いが……」

セイバーの願い。

死んでからもなお叶えたい事って一体何なんだろうか――

「あともう一つ聞きたいことがあるのよ。昨日のバーサーカーとの戦闘時に、あなた、セイバーが危なくなった時飛び込もうとしたわよね？」

「あ、ああ。それがいつたい……」

「言っておくけど、前代未聞よ？マスターがサーバントをかばおうとするなんて……」

「けど、あんな殺し合いを黙ってみてるなんて……！」

「衛宮君、あなたがやられた時点でセイバーも消えるっていうことを分かつてる？」

「それは……」

「それで、どうするの？殺し合いは認められない？」

「ああ、おれはやっぱり殺し合いは認められない」

「そう」

遠坂が突然席を立った。帰るようだ。

「最後に忠告、英霊たちを現界させているのは魔力つてさっき言ってたわよね？だから英霊たちは魔力があればある程本来の力を発揮できるの。マスターによってはそのためにサーバントに無差別に人を襲わせる奴もいるわ」

「なんでそんな…！！？」

「魔術師じゃなくても、人の魂は力を内包してるから喰わせるのよ、英霊にね。」

だから、殺し合いが認められないなんて悠長な事を言ってるは無関係な人が死んでいく可能性だってあるし、相手は強くなっていく一方よ。

大災害は止めたい、けど、殺し合いは認められない、どう動くにしてもその矛盾を早くどうにかしないと真っ先に殺されるわよ…」

そう言い残して遠坂は帰っていった。

——分かってる。

確かに矛盾しているんだろう。

大火災みたいなことを起こしたくないから、聖杯戦争に参加するけど、殺し合いは認められない。

俺は、誰にも傷ついてほしくない。死んでほしくないんだ。

あんな、地獄のようだった大災害は絶対に起こしてはいけない。

だから俺は、あんな理不尽な事を起こそうというやつがいるなら、絶対に許してはおけない。

止めてみせる。

s i d e o u t

side : コウジユ

「……zzz」

はっ！！寝てたみたいだ！

「ふわぁ、正座しながら寝るとか俺も案外器用になったみたいだな……」

「ええそうね、私も驚いたわ。色んな意味で」

！？

イリヤが部屋の隅で立っていた。

「イ、イリヤさん……？」

目覚めてたのでせうか？というかいつからそこに……？」

「目覚めたのはついさっきよ。そして私がこうなった原因はどこで何をしているのかと見に来たのよ。」

ノックをしても返事がないから中をのぞいたら正座をしていて反省をしていると思ったら寝ていて少しびっくりしたけどね」

「ご、ごめんなさいっ……！！」

頭をベッドに思いっきりぶつけるように土下座をする。

「まったくどういふつもりなのかしら？いえ、寝ていたことは良いわ。」

そんなことより、昨日のことよ…」

ふと顔を上げると…

イリヤの口が笑みの形を取るが、目が笑っていない。
部屋の温度が一気に氷点下になった。

「マイマスター……？
目が笑ってないですよー…？」

「そう？おかしいわね、あなたへの罰を考えていても気分は高揚しているのに…」

ど、どSだ！！
どSがここにいる！！

「まずは何で昨日の魔術が私にまで影響があつたのかを聞きましょうか…」

「えっと、昨日のは…な…「昨日のは？」
ごめんなさいテンションが上がって術の制御に失敗しました。本来なら敵味方の判定が可能です」

再び土下座をして自分の非を認める。

誤魔化しなんてした日にはどうなるか分かったものじゃない。

「そう…」

や、やばい…

部屋の中が氷点下だけじゃ無くブリザードまで幻視できる。

どんな罰を下されるんだろう。

とりあえず分かっているのは、ただではすまないことだ。

無事に明日を迎えられるかなー……

「さて、何がいいかしら？

あ、そうだね。」

どうやら決まったようだ。

あれ、おかしいな。

イリヤの背中やら頭やらに小悪魔的な羽とか尻尾が見えてる。

何されるんだろ俺。

「コウジユ、あなたの罰は『女らしくすること』よ」

「はは、何を言われるかと思えばそんなことk…って、なんだとお
！！？女らしく！？

イリヤは俺に死ねと！！？」

「くすくす、そんなに嫌なんだあ…」

こ、怖いんですけど。

というか絶対いやだー！！

「仕方がないわね。手伝ってあげるわ」

突然部屋に魔力が満ちる。

これってイリヤ!?

同時にイリヤの全身に薄く刻印のようなものが浮かび上がる。

「それって令」……!!?」

「バーサーカーのマスター令呪のもとに命じるわ。私が許可するまで『女の子らしく』しなさい!!」

ドクン!!

「ぐ……!?!」

何かが強制的に俺を圧迫する感覚がある。

それは少し続いたがすぐに収まった。

「やっと収まったのですよ……!?!」

く、口調が!?!

「な、何なのですかこの口調は!?!というかイリヤはなんで令呪を使ったのですか!?!」

本当にこの口調は何なのですか!?!

令呪のせいなのか考えまで変化しているのですよ!?!

というかまるでひぐらしの梨花ちゃまの口調なのですよ!!?」

「クスクス、えらく変わったわね、とても似合ってるわよ？」

それと、令呪が1つ減ったところでああなたの勝利は揺らぐとは思えないもの。だったら有意義に使った方がいいじゃない？」

「確かに私なら令呪の一つや二つ……ってちょっと待ってください！
！有意義！？これ有意義なのですか！！？」

「ええ、とおっても有意義よ」

満面の笑顔で返された。

「っ……」

「っ？」

「月夜ばかりと思うなよーなのですよー!!!!」

私は窓を突き破って城を出た。

こんな家（城）出てってやるのですよー!!!!

「何かあったら念話するわね」

後ろでイリヤの声がかすかに聞こえた。

けど止まらずに私は城を後にした。

s i d e o u t

『Stage 12: OSHIOKI inふえいと』(後書き)

どうでしたか？

Fateのアニメを見返したりはしているのですが、何か設定的にあまりにも不自然だとかがあればできれば教えてください。

ではでは、感想お待ちしています。

『stage13：少女家出中（前）…innふえいと』（前書き）

短いです。

無茶苦茶な設定をしていると思いますが、突っ込まないでくれると
うれしいかなー…なんて…思ってたー…

『Stage13：少女家出中（前）…innふえいと』

side：コウジユ

どうもコウジユなのです。

令呪のせいで女の子を強制されているコウジユなのですよ。

く、自分ではいつもどおり話しているつもりなのに勝手に変換されてしまうのです……。

これはもう、令呪という名の通り呪いなのですよ。

一応、自分で解除できないか試してみたのですが、分かったのは今の私では解除は不可能ということなのですよ。

城を出てすぐ、森の中で解除をしようと、状態異常回復のフォトンアーツやアイテムを使ったのです。

けど…けどすぐに呪い状態に戻ってしまいのですよ。

令呪はマスターが自身のサーヴァントの主である証であると同時に、たったの3度だけ可能な絶対命令権。

だからと言って、見習いとはいえ神様なチートパワーが令呪に負け

るなんて思えなかったので、次は能力の方を使うことにしたのですよ。

結果は同じように一瞬解除できてもすぐに呪い状態へ戻ってしまうのです……。

そこでふと思い出したのはアカシックレコード携帯電話。

前回は使い方もわからず

当たり散らかしてそのまま忘れていたこれ。

しかし、今回は使い方を知っているこれなら……！

「確か…魔力を通すのです…」

よくわからないが、とりあえずぱわ〜注入なのです。

「むむむ…」

画面を見るとアンテナが立ったのです。

「次は…どうやって調べよう…ネット検索みたいなのはできるのですかね？」

ピコピコとあちこち調べているとどうやら普通の携帯のようにネット接続できるようで、それがアカシックレコードにつながっているようなのです。

操作してそのページを呼び出す。

そこに表示されていたのは…

「G o o g l e 検索

…だと…なのです…。

と、とりあえず検索項目は私の状態…

あ、出た………何々、『現在令呪によりお仕置き中。令呪の効果によりコウジユ自体に少女らしくあれという意識誘導を行われており、コウジユ自身が自身に令呪からの命をかけている状態のため解呪しても、自分で呪ってしまっている。

よって、解呪を成功するためには自身の能力を現在より発展させる必要がある。

ぶぎゃあ〜www』

・・・

馬鹿にされた!？」

何!?!なんでG o o g l e 先生に馬鹿にされているの!?!?

「というかぶぎゃあ〜って何なのですか!?!!」

バシっ!!

とりあえずまた地面に投げる。

また傷一つつかないですけどね!

携帯を拾い落ち着く。

ふう…まさか解呪できないのが自分の所為だとは…

『幻想を現実に変える程度の能力』は自分の心の在りようで効果が影響される能力。

だから、私の心が少女であるようにと意識誘導されてしまっているから解呪は不可能…ということなのですか。

しかも私はこの能力を扱いきれていないのです。

つまり心のどこかで不可能であると思っているのです。

「ははは…、レベルアップするまではこのままというわけなのですか…」

…orz

私の敵は私自身…

少年マンガにありきたりな展開みたいなのです。

鬱なのですよ…。

クウ…

無理なのが確定した瞬間空腹を自覚しました。

いつの間にか次の日になっているのですよ。

まあ、それだけ少女補正を勘弁してほしかったということなのです。

とりあえず町に行って何か食べましょうか。

とぼとぼと歩く。

お腹が減って、力がでないのですよ（アンコが詰まったナイスガイ風に）

ガヤガヤ…。カシャカシャ…。

ん？あ、いつの間にか街中まで来ていたみたいなのです。

というか、カシャカシャ？

あ！！服が初期のコスプレ系のままなのを忘れていたのですよ！！
写メを撮るなのですよ！！

これはコスプレではありません！！

急いで、路地裏に走る。

空港の悪夢が再来なのですよ。奴らはどこにでも居るものなのでしようか…。

「はあ、今日は厄日なのですよ…。」

えらく入り組んだ路地裏を歩く、自分では大通りに出ようと思っ
ているのですが、どんどん奥に行っているような…。

これも少女補正のせいなのですか!?(違います)

「それにしても…今日はどこに泊まりましょうか…出てきた手前、
帰るのもなんですし…およ?」

ふと、歩く路地裏の隅を見るとゴミ山の中にマネキンみたいなのが
ある、というか人!?

「だ、大丈夫なのですか!?」

「・・・」

「返事が無いただのしかばn…ってネタをしている場合じゃないの
ですよ!」

えっと、こういう時は何をすれば!?
人工呼吸!?

ああもうどうすれば!!

そこでふと気付いた。

「あ、あれ、この服って穂群原学園の…というかこの人どこで見
たような……」

はて、誰でしょう……

原作キャラ？

「って、だから早く治療しないと！！
えっとえっと、レスタ！！レジエネ！！」

とりあえず回復＋状態異常回復を使ってみる。
これなら、死んでない限りは大丈夫なはず！

「う……あ……私……一体……？」

よかった起きたみたいなのですよ！！

「大丈夫なのですか！？ここは路地裏のです、あなたはここに倒れていたのですよ！！」

「倒れ……は！あいつらは！？慎二と紫の、うぐ……」

「急に立つてはダメなのですよ！体力は回復できても精神的な疲れはまだ残っているはずなのです！」

「回復？……いや、それより君は……？」

「私ですか、私は通りすがりのかみ……じゃなくて魔法使いなのです
よ」

「魔法使い…？」

少しいぶかしんだような眼でこちらを見てくるのですよ。

ふと出たのが魔法使いという単語だったのですが、あながち間違いいではないですしいいですよね？

「…今更魔法使いが出ても、おかしくは無いか…」

「それよりあなたは どうしてこんな所に？」

「ええつと…襲われたんだ。慎二っていう同級生と、あと、紫の髪の変な女に…」

「慎二？慎二って、間桐の？」

間桐慎二…紫の髪の女…穂群原学園の生徒…ひょっとしてこの方は…

「そういえばあなたの名前を聞いていなかったのです。私はコウジユなのです」

「私？私の名前は美綴綾子よ」

原作キャラ来たー！！

side out

『stage13：少女家出中（前）…innふえいと』（後書き）

どうですか？

やっぱり、無茶がありましたかね？

ここで彼女を出したのには、訳があります。

それは次回にでも。

では、また。

『stage14：少女家出中（後）…innふえいと』（前書き）

前編を少し変えました。

ではどうぞ。

『Stage 14：少女家出中（後）：innふえいと』

> side：美綴<

私は今、病院に居る。

ほんのさっきまでは路地裏に居たらしい。

らしいというのは、あまり記憶が無いからだ。

今隣で居る少女、きれいなプラチナブロンドに紅い眼、コスプレ？（不思議と違和感はない）といった格好の自称魔法使いなコウジユが発見してくれたらしいんだが、路地裏の更に奥の方で私は倒れていたと教えてくれた。

コウジユは私を発見してすぐに、治療？（意識が朦朧としていたからよく覚えていない）をした後、救急車を呼んでくれた。

コウジユは救急車が着いたらどこかに行こうとしていたが、救急隊員から事件の可能性が高いから一緒にきてほしいと言われていた。そして今、外傷はないが精神的に衰弱が見られる私に念のため一日入院するようにとのことで宛がわれた部屋にコウジユと2人で居る。

というか、室内のテレビでサッカーの中継を見ている。

個室だから良いけど、かなり熱い応援の仕方だ。

ただ、行け、そこだという声にあわせて、ストレートパンチやフックを繰り出しているのが気になる。

競技が違うからな？

そんなコウジユをぼーっとみながら、どうして私がこうなっているのかを考える。

話に聞くと、私は運良く家に帰れなかった次の日に発見されたらしい。

だから、私が覚えてる記憶は昨日のものということ。

昨日の私も普段と別段変わり無い生活を送っていた。

いつも通りに朝から自分が部長をつとめる弓道部の朝練をし、学校が始まり授業をつける。

確か、珍しく衛宮が休んでるなと考えたっけ。

そういえば、遠坂も休んでたな。

真面目と優等生が同時に突然休む……いや、考えすぎだな。

そしていつも通りに学校が終われば再びの部活。

そうこうする内に部活が終わって、片付けをしていたらあいつが話しかけてきた。

間桐 慎二。

何かと問題を起こすやつで、こないだなんか新入部員をいびったりしていた。

いけすかないやつ。

妹の桜とは性格が天と地ほど違う。もちろん桜がいい方だからな？

話がずれた……。

その慎二が話しかけてきたんだ。

最近何かと迷惑を掛けたから、何か奢る…と。

あまりにも怪しい誘いにジト目になった私は何も悪くないはずだ。

それでも、私は奢らせることにした。

弓道部といえども体力は結構使ってから部活が終わってすぐはかなりお腹が空いていたりする。

食い意地が張ってるのか思った奴は前に出る。撃ち抜いてやる。

コホン…それでまあ、奢らせることが決まったから、慎二と一緒に町に出た。

本当に怪しかったんだが、最近は物騒だからって部活も早く終わってたからまだ辺りは明るいし変なことでもないだろうって夕力をくくってんだ。

それで、たらしをやっているからか中々に良い店で色々奢らせた。

問題はその帰りだ。

逢魔が時。夜と夕方が混じったあやふやな時間。

歩いていたら、横からトンって慎二が押してきて、私は路地裏に入ってしまった。

もちろんすぐ戻ろうとした。

けど、大通りから軽く押されただけなのに、すでに私は路地裏にのさらに奥の方に居た。

ケラケラ笑う慎二がまだそこに居たから問い詰めようとしたら、とても長い紫の髪の毛の目隠しをした女が現れた。

手には杭のような短剣のようなものを鎖でつないだ明らかに人を害するのが目的の武器を持っている。

すぐに私は走って逃げた。

幸いにも、この辺りの路地裏はそこまで距離があるわけでもないし、陸上部には負けるが走りもそれなりに自信がある。

けど、紫の髪の毛の女は絶対に出口の手前に居る。

クスクスと笑いながら私を追いかけてくる。

完全に籠の鳥状態だ。

走って、走って、でもすぐに追い込まれて……

そして、最終的には首に噛みつかれて何かが一気に抜けていく感覚と共に私の意識は途絶えた。

ナデナデ……

コウジュがいつのまにか私を撫でていた。

なんで、と聞く必要はなかった。私は震えていたんだ。

ははは、友達から男まさりだって言われれ私が…だ。

でも、不思議と落ち着く。

>sideout<

>side:コウジュ<

ナデナデ……

あの、思わず撫でちまったんですけどね……

この人お持ち帰りして良い？（レナ的な意味で）

めちゃくちゃ可愛いのですよ？

原作だと姉御肌な感じだったけど、今日の前で私に撫でられる綾子は、ちよつとつつむいて、撫でられるのが恥ずかしいのか微妙に頬を赤くしているのです。

だからと言って撫でられるのが嫌なわけではなく嬉しそうにはして

いる——といった感じなのですよ。

こ、これがギャップ萌えというもののですね！

綾子、恐ろしい子！！

ああ、そういえばお互いをコウジユ綾子で呼ぶようになったのかです
か？

特段何かがあったわけではないのです。

普通に話をしてたらそれなりに仲良くなって、お互いがそう呼んで
欲しい……っていう風な流れなのです。

綾子は最初、コウジユちゃんと呼んできたのですがそれだけは阻止
したのです。

呼び方だけどこまでダメージを受けるとは……………

綾子、恐ろし（ry

というか、いつになったら私は帰れるのですかね。

「あのさコウジユ、最初に会った時、魔法使いとか言ってたけど本
当？」

「一応、マジなのです。厳密には魔法を使える…ですけどね」

基本的に、チートボディな私にできないことはほとんどないのですが（割りとある気もする）、やはりこの見た目なら魔法使いが一番なのです。

魔女っ娘ではないのです。悪魔でも、まちがいました…あくまでも魔法使いなのです。不可能を可能にするという意味で。

自分の能力に振り回されてますけどね…現在進行形で……orz

とりあえず、型月さんの作品だから自称魔法使いをやってみたかっただけというのもあるんですけどね。

「そっか…」

「えらく簡単に信じるのですね」

「いや、私を襲った奴も吸血鬼みたいだったし…居ても変じゃないかなあ…と」

確か原作ではライダーにやられてたっけ……

「ひょっとして綾子がやられたのって紫の髪ボディコン目隠し？」

「知ってるのか!？」

「えっと…何から説明しようかな……」

それから今この町で何が起きようとしているかを簡単に説明した。

聖杯戦争、サーヴァント、7人のマスター、その一人が間桐慎二と件の紫レディ……

「コウジユも関係者なのか…?」

「まあ、そんなとこなのです」

「でもなんで…?」

「綾子に話したか…ですか?

記憶を消すために何故その必要があるかを知ってもらったためなのです。一般人に知られた場合、記憶を消すのではなく、口封じに殺そうとする者も居るのですよ」

「……………」

「だから……………」

懷からカードを取り出す。

「封印解除『言霊』」

「コウジユに関する記憶もなくなるのか?」

「私はただの第一発見者になるのです。でも、魔術とかの記憶がな

くなるだけなのでそれ以外は覚えているはずなのです」

「そっか……」

「綾子…『あなたは魔術に関する記憶をなくす』」

あ、そうだ……『とりあえず悪いのは間桐慎二とだけ何故か覚えている』…と、綾子？」

「悪いのは慎二…悪いのは慎二……」

私はあのワカメが嫌いなのです。

アニメではバーサーカーに殺されましたが、イリヤに命じられても私は殺っちゃう気はないので、これくらいは許せなのですよ。

ライダーは、まあ置いて……

とりあえず綾子のさっきの震える姿をみたらほっとけなくなったのですよ。

だから、綾子が無に襲われたのかの記憶と、自分で説明した聖杯戦争やらの魔術に関する記憶を消したのです。

ライダーに襲われた辺りを忘れさせておけば恐怖感は大分ましになるはずなのです。

これで間桐慎二は警察行き……

臭い飯でも食えば良いのですよ！！

「悪いのは……ってあれ？今私は何を……？」

「気分はどうですか？」

「悪くないけど……あれ？さっきまで……なんだっけ？」

「忘れたのならきつと大したことではなかったですよ」

「そっか、それもそうだな」

どうやら成功したようなのですよ。

けど、根本的な間桐慎二をどうにかしないといけないのです。

またちよっかいを掛けてくる可能性が高い――

のらりくらりというわけにはいかなかったのです。

間桐慎二をどうにかしても聖杯戦争が終わらないと……

けど、他のサーヴァントを殺すのも嫌ですし……

というか、サーヴァントがやられる度にイリヤに負担がかかるのでしたっけ……

よし決めました。

どうせならハッピーエンドがいいのです。

原作ブレイク… いっちゃうしかないですね。

それから、綾子と他愛もない話をしていたら警察が来て事情聴取をされたのです。

慎二が犯人という話になり、現在は行方不明だが見つけ次第逮捕とのこと。

そういえば、警察の人に写真を撮られたのです。
捜査に必要なんだとか。

何に使うのかは分かりませんがお仕事頑張ってください。

事情聴取が終わると、帰ることにしました。

綾子とはもう友達ですし、またお見舞いに来ることを約束して病院をでました。

「あう、どこに行こう……orz」

すっかり忘れていたのですよ自分が家出していると。

短い逃亡でしたが帰るとしますか……

原作ブレイクするにしてもどうやるかを考えないといけないのですよ。

というか地道に訓練してれば解呪できるようになったのでは？

ま、まあ、綾子との出会いがあったから良しとするのです。

はあ、泣きそうなのです。

>sideout<

『stage14：少女家出中（後）…innふえいと』（後書き）

時間軸がよくわからなくなりました。

一応矛盾はないと思います。

気づいた点があれば教えてくださいm——（m

『stage15：私は帰ってきた！！…inふえいと』（前書き）

最終的にどういう風にするかは決まってるんですけど、間に悩みなkouです。

ではござ。

『stage15:私は帰ってきた!!...inふえいと』

>side:コウジユ<

ハローハロー、みんな元気ですか？

私は絶不調ですよ。

少女補正は未だ解呪できず、お城に戻ったときはイリヤに弄られ……

散々なのです。

イリヤの弄り…ですか…？

はあ……。

着せ替えなのですよ、着せ替え……。

イリヤが令呪で私に命じたのは『女の子らしくすること』なのです。そのせいか女の子らしい服を着せられる時、何故か身体が動かなくなっただのですよ。

色々変えられて、満足したのかイリヤが来ている服の色違いの黒を着せられてお開きとなりました。

もうね、わけが解らんです。

いくら令呪だからってここまで私の男としての尊厳を破壊しまくって良いのでしょうか。いや、良いわけないのです。反語。

令呪やら、私の能力がどうたら以前に世界から弄られてる気がするのですよ。

閑話休題

そんなこんなでお城に帰ってきた私なのですが、現在は自室で新しい力について絶賛修行中なのですよ。

実は今日は慎二君終了のお知らせの日なのです。

イリヤに今日の夜出かけると言われました。

時間が飛びすぎ？

いつものことなのですよ。

といっても、私が綾子と話をしていた日が穂群原学園で慎二が事件を起こす日だったみたいなので、そう飛躍しているわけではないのです。

その翌日が今日なわけですからね。

なので、今日の夜まで——現在正午なので大体後8時間ほど——でライダー vs セイバー戦が始まるであろうところなのでそれまでに新技を開発する必要があるのです。

攻撃に関しては何とかなると思うので、今回は汎用性が高い能力を得たいと思うのです。

その能力は——次元移動——特に、空間移動をするためのゲートを創りだす系統の能力が欲しいのですよ。

何故今それが必要かという私が考えた原作ブレイクの方法に関するのです。

名前は『サーヴァント補完計画』。計画名は適当なのです。

内容は——いや、今言ったら面白くないのでその内にしましょう。

今は、能力習得が先なのです。

私が考えた次元移動の方法で、最初に思いついたのが東方の八雲紫が使うゲート方式なのです。あの能力は空間の『境界』を操って別に場所につながるゲートを作ったり、異次元空間へつなげたりとかなり汎用性が高いし、チート臭いのです。

しかし、今の私でできると思っていないので却下。

後々使えるようにはなりたいですが……

他に……ゲートタイプの能力者は……

「ふむむ……あ……」

目についたのは部屋の入り口——ドア。

「これなら……」

取り出すのは真っ白なカード。

ここに概念を書き込むことで新たな技、能力にするのが私が編み出した技術。

ドアとは違う空間と空間との隔たりの出入口。

この概念を使用して、イメージ。

イメージするのは国民的人気アニメの青いたぬk……コホン……猫型ロボットが使う道具。

「……ッ！……！」

一気に概念と共に力をカードに込める

パアアアッ

「よし完成！って、なんなのですかこれ……怪奇移動』どこでもドア』……とてつもなくいやーな予感がするのです……」

怪奇移動？

微妙に猫型を間違えそうになる雑念が入ったからなのですかね？

でもまあ使わないと勿体ないですよ。

細心の注意は必要でしょうけども……

ドアの方に向かい、正面に立つ。

そして、宣言。

「怪奇移動」どこでもドア」――！
目標――！日本の人気がないところ――！」

ぺかあゝ……

あ、なんか光方もうさんくさい……

とりあえず……ドアの先はどうなったのですかね。

ガチャツ……

『グウアゝ』『ガァーッ――！』『アァ……』『ウウアァゝ』……

なんぞこれ？

ゾンビ？

私がドアを潜った先はゾンビがうようよ居る場所でした。

多分学校の屋上。

感じからして日本なのです。

そして、ゾンビは居るけども人は居ない。

「確かに私が言った条件に当てはまりますけども何なのですかこれは！？どこ！？」

思わず叫んでしまったのです。

『『『グウア？』『』』』

しまったのですー！一斉にこちらにゾンビが向いて殺到しはじめたのですよー！！

「お、お邪魔しましたのですよー！！！！！！」

ボタン！！！！

思いっきりドアを閉めた。

持っていたカードが燃えて消える。

軽くドアを開けて向こうを覗くいつもの城内に戻っていた。

まったく、怪奇にもほどがあるのですよ

マジでどこですかあれは！！

ゾンビ？もしかして異世界！？

あれこれ考えていると脳内にあるアニメやらなんやらの知識群で検索項目がヒットしたのです。

「はいすくーるおぶざでつど……？」

私が転生する直前にアニメ放送が開始されて一話だけ見たから覚えているのです。

コミックの方も読んでいたし、雑誌もよく立ち読みしてたのですよ。

「いやいや、確かにあのマンガは好きですけどね……というかゾンビが居るだけであの世界だと決めつけるのは早計なのですよ」

自分に言い聞かせるように言う。

「ひょっとしたらバイオハザードの日本版みたいな平行世界な可能

性も……バイオハザードの方がハードル高いのですよ……orz」

確かにこのチートボディなら大丈夫かもしれませんが。不老不死だし、魔法も使えるし、銃もある。

けど、行きたくないのですよ!!
ゾンビは嫌なのです!!

あ、でもちよつとだけ鞠川先生に癒されに行く位なら……ってダメなのですよ!

そんなこと考えたらフラグ『てててててててててててて』

「これって、FFのレベルアップ音でしたっけ?うる覚えですね。ともかく、メール…なのですか?」

恐る恐る、携帯を取り出しやっぱりあったメールを開く。

『確率50%のフラグがたちました』

「くそーっ!!なのですよ!-!」

ベシッ!!

いつものように携帯をなげる。

立ってしまったのですよ……フラグ……

やはり傷1つ付かない携帯を拾う。

というか50%って高くないですか!?
行くか行かないかの可能性が半々なのですよ!?

「はあ…鬱なのです……」

とりあえず、記憶の片隅にポイすることにしましょう!

ポイツ。

「さてさて、今度こそ成功させましょう」

再びカードの作成に入る。

雑念が入らないように……力を込める!!

パアアアッ

今度は好感触なのです。

「空間移動」どこでもドア……完成したみたいなのです」

じゃあ試すのでしょうか。

宣言!

「空間移動」どこでもドア!」目標!!無難にこの城の玄関!」

ガチャッ

またメールなのですか？

携帯を開くと…

『レベルが上がりました。これからは次元に関する技術の習得が容易になりました。』

特典としてマイルームを差し上げます。

模様換え様アイテムは元々お渡ししてあるのでそちらをお使いください。

部屋の設定は携帯をお使いください。

P.S.

基本的にはゲームに準拠しています』

これはこれは…ふふっ…丁度良いですよ。

有効活用するとうしましょう。

「どうしたのコウジュ？出掛けるにはまだ早いわ」

「話があるのですよイリヤ。」

これからについて」

計画について話をするためにイリヤのもとにきたが、自室に居たいリヤはどこか楽しそうだった。

「…？」

えらく楽しそうなのです。何か良いことでも？」

「ふふ、昨日あなたが家出して、令呪があるから離れてる感覚はなかったんだけどやっぱりどこか寂しさがあつたわ。だから帰ってきたときは嬉しかった。

だってね、よくよく考えたらあなたは初めての友達だったのよ。

最初、サーヴァントはサーヴァントって割り切るつもりだったけど、あなたを見てるとやっぱり友人感覚になっちゃってしまっ。

あなたを召喚してからを思い返すと疲れることが大半だったけど、あなたを召喚できて本当に良かったわ」

そんなことを私の真正面でイリヤはいきなり言い出したのです。

あう、顔が熱い…／／

それにしても、唐突すぎるのですよ。

「い、一体どうしたのですか？いつもとキャラが違うのですよ？ひょっとしてからかってるのですか？」

「うーんと、何でだろ？別にからかってるわけじゃないんだけど…ただ、なんとなく今言わないといけない気がしたのよ。本当になんとなく…」。

それで話って？」

ズキッ……

心が痛む。

イリヤが私を友人だと思ってくれるのは嬉しいのです。

私もそういう風に接してきましたし、正直両手をあげて喜びたいのですよ。

けど、私の計画は…あまりにもイリヤに負担を掛けてしまう……

「イリヤ…今から私が言うことはイリヤが私に思ってくれてる友情に対する裏切りになるのです。

それでも聞いてもらえますか？」

「……とりあえず、話して」

途端に空気が重くなる。

「まず、最初に言っておくと私はある程度未来を知っているのですよ」

「ふん」

ふんって…

「驚かないのですね」

「あなたを見ると今更な気がするのだけど？
なんていうか、もう何でもありじゃない？

アカシックレコード、根源に到達してるって言われても驚かないわ」

「アカシックレコード……一応使えるのです……」

「え？」

「え？」

仕切り直し。

「それで、私が知った未来というのは色々とハッピーエンドと言いがたいですよ。

私はハッピーエンドが好きなのです。

だから私はこの聖杯戦争をぶっ壊すことに決めました。そのために私は聖杯を作り替えようと思うのですよ」

「作り替える？そんなことできるわけが……」

「できることはイリヤが一番知っているはずなのですよ。聖杯の器たるあなたが」

「そっか、全部知ってるんだっけ」

聖杯戦争は元々御三家と呼ばれる遠坂家、間桐家、アインツベルン家が生み出したもの。

それぞれの家がそれぞれの得意な分野で役割を果たす。

そして、アインツベルン家が担当したのは聖杯の受け皿。

アインツベルン家は元々、第3魔法である魂の物質化に当たる『^{システム}天の杯』を得ることを求めてきた。

しかし、何代も研鑽を続けてきたができたのは中身のない外側（器）だけ。

だから他の2家と協力し、聖杯戦争というシステムを作るにいたった。

ただ一つ誤算だったのは、聖杯を得るために作ったシステム（聖杯戦争）のせいでゲームを勝ち抜く必要が出たことだろう。

「そして、聖杯戦争のたびに用意されている器は、今回イリヤというわけなのですよね？詳しく言うならイリヤの心臓が器」

「そうよ、その通り」

「そして、器は生み出された。錬金術により生み出された。ホームンクルスの母と衛宮切嗣との間に…」

その子がイリヤスフィール・フォン・アインツベルン…」

「やっぱり…最初から知っていたのね…」

「イエス…なのです、マスター。」

ごめんなさいイリヤ、イリヤから話してくれるのを待つとか言いながら……

でも、心に決めてしまったのですよ。

私は私の傲慢で出来たハッピーエンドを目指すって…だから協力してほしいのです」

「ハッピーエンド…ね…本当に…？」

「成功すれば…いや、させるのです」

イリヤは黙考を始めたのです。それから結構時間が経ち…

「いいわ。付き合う。隠し事していたのもお仕置きで許してあげる」

「まだ、内容を言っていないのですよ？」

「だって、ハッピーエンドなんでしょ？」

「ええ、まあ」

「ならいいわ。で、私は何をすればいいの？」

「イリヤはですね……」

そうして、ハッピーエンドを目指すための下準備は整った。

感謝するのですよイリヤ。

ただ…お仕置きは優しくしてほしいのですよ…？

s i d e o u t

『stage15：私は帰ってきた！！…inふえいと』（後書き）

どうでしたか？

ネタばれをするかどうか悩んだ結果、先送りにすることにしました。

感想お待ちしています。

『stage16：ライダー捕獲作戦…inふえいと』（前書き）

すみませんかなり遅くなりました。

ではどうぞ。

『Stage16：ライダー捕獲作戦…inふえいと』

>side：コウジユ<

やーやー、みんなお元気かな？

俺は絶好調だぜ！！

なんでかって？

そんなものは決まっている。

俺の少女補正がとれたからだよ！！

ふっふっふっ…永かったぜ。

苦節…そんなにはないけど、それでも気分的に永かった…。

けどまさか、最後はあんなにあっさり行くとは…。

ほら、俺レベルアップしたじゃん？

あの上に解呪使ったらあっさりポン、元に戻りましたとさ……ふざけんじゃねえ！！

そんなにあっさりいくなら最初から訓練に走れば…。

いやあれは綾子に会えt（ry

閑話休題。

見苦しいところをお見せしたな。忘れとくれ。

さてさて、現状の話といこうか。

今俺は、ライダーとセイバーの戦いが行われるであろうビル群の屋上に居る。

よく見たら近くに俺が『スピア・ザ・グングニル』で吹っ飛ばしたビルの屋上も見える。

ニュースでは最近噂になっているガス漏れ事故に連なってガス爆発事故で処理されていた。アーチャーが陣取っていたし、人気がないだろうとは思っていたが実際に居なくて良かった。

また反れたな。

現在の時間は夜になって久しく、辺りに人の影は無い。

ライダーが辺りに張っている人払いの結界の効果でもあるようだ。

イリヤ？

イリヤならマイルームだ。

ご丁寧にも中にテレビがあつて、俺が見ているものを中から見れる

（勿論こちらから拒否はできる）ようになっていた。
いやあ、マイルームはマジでありがたいよ。

PSP02のゲームでのお楽しみ要素の1つであるマイルーム。
模様替えや、ルームグッズで内装を変えれて割りと楽しめる。

ちなみに、俺は和風の内装にめちゃうくちゃ適当にグッズを置いてある。

ちーずくんとか、小夜ちゃん人形だとか、モトウブパパガイっていう同じセリフを使いまくっていると覚えるインコみたいなやつとかだ。

ついでに空間移動『どこでもドア』の詳しい説明をしとこうかな。
関係あるし。

あの能力、割りと使いにくかった。

あの能力を使ってドアをくぐる時のルールとして――。

1：能力使用の際は、宣言、もしくは使う扉に当てる。

2：ドアからドアは同じ種類にしか行けない。開き戸なら開き戸へ、引き戸なら引き戸へ。

3：能力使用后、戸を1度でも閉じると能力が切れる。

4：マイルームに行く際だけはどの種類の扉でも行くことが可能。

思ったより使えねー…。

使いどころが難しいっての。

なんていうかさ…いくらチートでもイメージ難しいんだよ。

何？それでもチート？

どうもすいませんでした。

でもね、それに対してもらったマイルーム割りと使えるんだよね。
腹立つことに…

ゲーム内みたいにな、パートナーマシーナリー（個人ごとの相棒みたいなもの）は居なかったけど、すごい居心地が良いんだよ。思わず引きこもりたくなるくらいに……

細かいところで自由度も高くなってるしね。
キッチン、風呂、トイレが増えてたり……

うう…何か負けた気分だよ。

またまたずれたな…。

でも、何の話だっけ……？

『コウジユ？来たみたいよ』

イリヤが話しかけてきた。念話っていきなり話しかけられたらびっ

くりするんだけど…。

「ふえ？あ、ああ、了解であります」

士郎君とセイバー到着。道路できよろきよろしてます。ライダーを探してるんだろうね。

つてか、そつだそつだ、ライダー戦の話してたんだ。だよね？

「今更だけど上手くいくかなあ」

『あなたが不安になってどうすんのよ…』

「いやあ、そんなこと言われてもね。まあなるようになるか」

『……、まだ開き直ってる方がましか…』

あ、ライダーがセイバー達に攻撃した。ついにはじまるね。

『へーライダーって結構やるんだ』

「うんうん。すごいよな、いろいろと……」

服とかね、きわどすぎない？

胸元丸見えだよ？

スカート部分なんて今どきの子でもそこまで短くしないでしょって感じだし。

ライダーさん！見えてますよ！

そして、プロポーション抜群なうえ、全体的にパツンパツンだし。

後、絶対領域？形成されてるよね。

あ、重要な事をイリヤに言っただけを忘れてた。

「ちなみにメデューサさんです」

『メデューサ！？ギリシャ神話の！？そんな重要な事軽く暴露しないでよ！！』

「あははwww」

ちなみに、俺らこんなににのんびり会話してますけど、目の前ではすごいハードなバトルが繰り広げられてます。

ビルの側面を上に駆けながら互いの武器を何度も交わらせて激戦中。セイバーは、窓とかのちよつとした引掛かりを利用しながら、ライダーは重力と何それ美味しいの？と言わんばかりに壁に立ったりしながら攻防を繰り返しております。

ってかさ、今更何だけどライダーがエロい、服はさっきも言ったように勿論のこと、動きの一つ一つがマジでエロい。

何だっけ、女豹のポーズ？とか、どこのグラビアアイドルだよって感じのを攻撃の端々に入れてくるんだよ。さりげなく、それも流れるように。

必要なのか？

必要？

そーなのかー。

『コウジユ……？』

底冷えのするような声でイリヤが念話してきた。

「な、なに？」

すごい寒気がするんですけど！？

「大きいことがそんなに偉いの……？ライダーも、あなたも……」

なんぞ……？

「何の事を言ってるんだ？いまいち要領を得ないんだけど……」

『……いいえ、なんでもないわ。忘れて』

そう言っただけで念話が切れた。

何の話だったんだろ……

まあいいや、そんなことより、セイバーとライダーが屋上までたどり着いた。

ここからが本番だぜ。

俺もすぐ行動できるように準備しないとな。

いつ行くんだって？

勿論一番いい所でさ（笑）

ピカアア！！

おお、ライダーが宝具を解放した。

ライダーの宝具『ベルレフオーン騎英の手綱』

名前の通り、ライダーのクラスに相応しい宝具であるのは確かだ。

この宝具は、単体では効果が発生しない。

そのため、ライダーは同時にペガサスを召喚し、宝具を使用するんだが…。

遠っ！！

ペガサスに乗って空高くに言うのは良いが遠いよ！！

よくその距離でセイバーとライダーは会話ができるな。

いや、俺もチートだから聞こえてるんだけどね。

ライダーは何度もペガサスで光の軌跡を描きながらセイバーに突っ込み、翻弄する。

逆にセイバーは何とかそれを避けて反撃の機会をうかがっているようだ。

しかし残念なことに、セイバーにとって不利な方向に場は変化する。衛宮士郎の屋上のドアを蹴破るようにながって来た。

士郎は壁を登るなんて芸当はできないから、地道に階段かエレベーターで昇って来たんだろう。

セイバーが心配な士郎の気持ちはわかるけどもね。

けど、その結果セイバーは士郎を守りながらライダーと戦う必要が出てきたわけで……さっきからやってた反撃に機会をうかがいながら……という戦法が不可能になってしまった。

するとセイバーは決断する。

自身に残存する魔力は少ないが、ここで決めると。

セイバーが不可視の剣を握りなおし、構える。

その瞬間、辺りに風が吹き荒れる。

ビュアアア！！

セイバーの宝具の開放だ。

ここが俺の出番だ!!

「光翼『ホワイテイルウイング』!!」

これはPSP2内でのビジュアルユニットと言われる、防具とともに装備することが可能なもので、名前の通り見た目の為の装備だ。装備することで様々なエフェクトを発生させるわけだ。

そして、今回使用するのはホワイテイルウイングっていうもの。こいつも名前そのままの白い翼。

光翼『ホワイテイルウイング』はこの見た目装備に翼は翔ぶためのものという概念を書き加えたものだ。

スperlカードの宣言をしたため背中に翼が現れる。

さて、行くか。

ダダダつと俺は走り、ライダーに向かって跳ぶ。

「アイ、キャン、フラアアイ!!!!!!」

ギョオンっという感じに俺は飛び立った。

「な、なんだあれ!!」

「あれはまさか、バーサーカー!？」

「ちっ、乱入者ですか」

さすがにここまでしたらバレルか。

士郎、セイバー、ライダーが声を上げる。

そうそう、現在飛んでいる俺なんですけど皆さんにお知らせすることがあるんです。

実は光翼のスペルはいまさつき作ったんです。

いつものごとく?のノリでいけるんじゃないかな〜と思ってやっちゃいました。

それで、宣言したらちゃんと発動したので成功かなと思ったので跳んだんです。つまり、処女非行なわけですね。

まあ、何が言いたいかと言うと…。

これ、どうやって止まればいいんですか？

曲がるのも無理です。

あ、そうこうするうちにライダーが近づいて…。

「く、速い！回…」

あ……。

ドガンー！！

「ぐあつ！！！！？」

「ヒヒー…ひでふ…！！」

——ペガサスさんがログアウトしました——

「ごめんなさいペガサスさん！！」

やっちゃった！？殺っちゃった！？

ペ、ペガサスさんの横腹に頭突きしてしまった。

ペガサスさんは光の粒子となって消えて行ったんだが最後の言葉が北斗○拳を叩き込まれた敵みたいになつてたのは何でだ！？

俺の頭突きは殺人拳か！？

でもまあそのおかげで俺は空中で静止することができました。

くっ、尊い犠牲だったぜ……。

ペガサスフォーエヴァー…。

「この、離しなさい…!!」

ライダーがじたばたと暴れる。

そうなんです。ペガサスさんやっちゃった時に捕獲しました。
チートパワーでがっちり掴んでます。どんな怪力だろうと負ける気
はしません。

何というかハプニングはあったが目標のライダー捕獲に成功つと。
結果オーライ!!

「獲ったどおお!!」

マッサルさんのノリでライダーを掲げる。

「あ、きゃ!?!」

さて、ライダーをお持ち帰り……。

「バーサーカー!!何のつもりですか!!」

かなり
若干空気だったセイバーが黄金に光輝く剣、
宝具の約束された勝利
の剣を構えたまま話しかけてきた。

「何のつもりと言われても、捕獲したとしか…」

「ライダーはここで倒します。

邪魔をするのならあなたごと攻撃します!!」

そう言い、セイバーはエクスカリバーを上段に構え、それに合わせ
て剣も輝きが強くなる。

うわっは!?!セイバーさんがヤル気満々になってるよ!?!

だがしかし!!

俺もこのシチュエーションでやりたいことがあるため、応戦するぜ。

上空に放り投げ――。

「きゃっ!?!」

あ、何かさっきからライダーが可愛い。

ッて準備準備!!

懷からカードを取り出し宣言する。

「今日の俺の行き当りばったりパート2!!

概念憑依『エクスカリバー』!!」

俺の手にセイバーが持つ剣に瓜二つの剣エクスカリバーが現れる。

「な!?!バカな、それはエクスカリバー!?!」

「セイバーと同じ黄金の剣!?!」

ふふふ、びっくりしてるびっくりしてる。

「はい、いくよー^{エクス}約束された…勝利の剣^{カリバー}!!!」

「く、^{エクス}約束された勝利の剣^{カリバー}!!!」

互いに向かって剣を振り下ろしながら真名解放する。

ゴアアアアー!!!

数秒の間互いのエクスカリバーから放たれた光の本流が消える。
何とか相殺できたようだ。

役目を終えた俺のエクスカリバーが消えて、手が軽くなる。

「~~~~!!!」

そして丁度上から降ってきたライダーをキャッチする。

今俺が使っていたのは、PSP02内で存在するエクスカリバーを利用したものだ。

ゲーム内ではセイバーが使っている本家本元のような真名解放といった能力は無い。

そこで俺のチートパワーの登場だ。

俺が持っている方のエクスカリバーもPSP02内では本物という概念がある。

それをいじって強化・付与をする。

付与した概念はこの世界でも本物という概念。

そうすることで本物に限りなく近いが、最後の一线でどこか違う本物が出来る。

そうすれば、本物なんだから本物と同じ能力が無ければおかしいという、逆説的な、後から能力が付いてくる…。

こじつけなのは分かってるけどさ…

エクスカリバーやってみたかったんだよ。

分かるだろ？

けどまあ、無理やりだった弊害だろうけど本家に比べて微妙にランクが下がってるみたいだ。マイナスが付く程度だけど。

さつき相殺できたのも、俺が魔力を無理やり流し込んでカバーしただけ。

しかも、一回真名解放したら勝手に消えたし…。

改良の余地ありだね。

バタ……

「セイバー!？」

少しの間こちらを睨んでいたセイバーだが、積もり積もったモノの

せいか、倒れた。

士郎が駆け寄るが完全に気絶したようだ。

セイバーのドレスの上からあった鎧が消え、黄金色に輝くエクスカリバーも消える。

魔力を使いすぎたのだろう。

俺は、まだまだ使い慣れていない光翼でふらつきながらもセイバー達がいる。ビルの屋上に降り立つ。

「や、士郎」

「コウジユ…まさかとどめを!？」

「違うよ!？」

はあ、士郎って俺をそんな目で見てたんだ。ちよつとショック……」

「え、あ、ゴメン!」

「うそうそ、俺の今までの行動のせいだってのは分かってるから。でもま、大丈夫。

セイバーに危害は加えないよ。

勿論士郎にも……」

「じゃあ一体……」

「俺が用があるのは……」

屋上にある給水タンクの方へ向き――。

「そこにいるのは分かってるよ、間桐慎二。出てこい」

すると――。

「くそっ！ライダー！何してる！！そんな奴さっさとやっちまえよ！！」

「無理です。私の力でもバーサーカーの力からは逃れられなかった」

ああ、さっきからいきなり大人しくなったと思ったら、そういう理由があったのか。

「そうそう、自分の状況を理解しな？」

だから…偽臣の所をよこせ」

「何でお前がそれを知ってるんだよ！！」

「禁則事項です」

勿論、片目をつぶり、たてた人差し指を口もとに持ってきて言う。

「ほら、死にたくなかったら早く渡せ？」

ニコニコしながら慎二に言う。

「くそー！！」

すると、慎二はこちらに偽臣の書を放り投げ、自分は扉に向かって走り出した。

「ふふん、ただ逃がすと思うか？」

空間移動『どこでもドア』のカードを取り出し、ぼそぼそと行き先指定をし、慎二が扉をあける寸前に扉に投げて当てる。

「空間移動『どこでもドア』！！」

「僕は、こんな所で！！」

慎二が俺のしたことに気付かずの扉をくぐる。

「よし、このま……な、なんだよ前ら！？こ、こっちに来るんじゃない……ぎゃ、ぎゃああ！！！！」

慎二の声がドップラー効果を残したまま、扉は閉じられる。

「ふう……一件落着」

「し、慎二イイ……」

士郎が慌てて、扉をあけに行くがそこには何も無い。

「あ、あれ？」

「慎二君はログアウトしました」

ふっふっふ、いやぁ良い仕事したぜ。

あ、言っとくけど慎二はまだ死んでないよ？

元の人格が分からなくなるくらいに別人にはなるかもしれないけど
…w

「バーサーカー。」

私をどうするつもりですか？」

ずっと大人しくしていた（俺に抱えられたまま）ライダーが話しかけた。

ちなみに士郎はこちらを見ながらセイバーを介抱し始めました。

「ライダーには俺の仲間になってもらう。そのために捕まえたんだ」

「仲間に？」

令呪（偽臣の書）はそちらにある。今のあなたは私のマスターの権限を持っているのですから仲間も何もないのでは？」

「偽臣の書は所詮紛い物のマスター権限じゃん？なァライダー、本当のマスターを救いたくないか？」

「！？」

「俺の話…聞いてみない？」

「良いでしょう、聞きます」

よっし、交渉成立。

「じゃあ行くか。ついてきて」

俺は再び、空間移動『どこでもドア』を取り出し、マイルームに繋がるように設定してドアに向かう。

「……」

ライダーは黙って俺に着いてくる。

「じゃあね士郎。俺たちはもう行くよ。またね」

「あ、ああまたな」

それだけ士郎に言って俺とライダーはドアをくぐった。

扉が閉まる瞬間に、士郎が何でさと言った気がした。

s i d e o u t

『stage16：ライダー捕獲作戦…inふえいと』（後書き）

どうでしたか？

やっぱり小説って書くの難しいですね。

待っていただいていた方には本当に申しわけない位に時間がかかってしまいました。

でも途中では終わりたくないなので、頑張って行こうと思います。

応援よろしくお願いします。

ではこの辺で。

感想お待ちしています。

『stage17：なまか（前）…inふえいと』（前書き）

暑い…

最近ほんと暑すぎませんか？

その内容けてしまいそうです。

そんな私ですが、これからもよろしくお願いします。

では、どうぞ。

『stage17：なまか（前）…inふえいと』

>side：コウジユ<

ちやおつす。

ライダーを捕獲したコウジユだ。

いまからマイルームで話し合いをかいしするぜい。

「そついや、自己紹介まだだったね、俺はコウジユ。
んで、こっちが俺のマスターの「イリヤよ」です」

「私h「メデューサだろ」…！？
どうして私の真名を！？」

身構えるライダー。

「内緒」。

あ、それからさ。この部屋ではあらゆる攻撃が許されないからそんなに身構えなくてもいいよ？」

このマイルーム、実は少し概念をいじつてあります。

その概念が『マイルーム内での戦闘行動を禁止する』というもの。

これはわりと簡単に付加できた。

ただ単にゲームで戦闘はフィールドとかに出ないと出来ないってのをちよちよいと操作しただけ。

「こんな感じで…」

ライダーのに向かって、適当に剣を一本出して投げる。

が…。

キン！

まるでシールドがあるようにライダーの直前で弾^{はじ}かれる。

「ね？」

まあ実は、このルールは主である俺は無視するんだけどね？

「分かりました」

若干警戒を弱めるライダー。

「それで、私の本来のマスターを救うというのは本当ですか？」

ライダーはやはり、本来の主のことをどうしても救いたいようだ。

「モチのロン」

「古い」

「う、うるしい！…あう…ひゃんじやった（囃んじやった）…」

「あの…」

ライダーが申し訳なさに話しかけてくる。

「ああ、ごめんなさい。私もこの子に聞いただけなんですけど、あなたの本来のマスターは間桐桜っていう子なんですよ？」

「ひえど、コホン……けど聖杯戦争自体には偽臣の書を使って慎二が参加。」

まあ、それは今はいつか……
とりあえず、問題は爺だな？」

ライダーたちの主従を救うのに邪魔なのは間桐まきりぞうけん臓硯。

300年前（まとう家がまきり家で在った時）から生きていて、虫と融合してまで命を永らえている老害。
裏で色々をやっているうつつとしい奴。
寄生虫と言ってもいい。

「全て知っているのですね……な」
「コウジュに何故なんて聞いても意味無いわ。」

というか、真剣に考えてたら頭が痛くなってくるわよ？

私はあきらめたわ」

そ、そうですか……」

イリヤがライダーに変な事を教える。

うんゴメン、否定できないな。

「ライダーはどうしても桜を助けたいんだよね？」

「はい、勿論です」

「じゃあ、桜を助けたら…仲間になってくれる？」

ああ、ちなみに桜が真のマスターのままってのはできないけど、離れ離れにはしないから」

「それなら…構いません。私は命を賭してでも桜を助けたい」

「どんなこともする？」

「勿論です」

よしよし、これなら計画にも乗ってくれそうだ。

「イリヤ、これなら？」

「分かったわ。裏切る可能性は少なそうだし…いいんじゃない？」

「よし決定！ライダー契約しよう。内容は…俺は桜を助ける。ライダーは俺達に協力する。ただそれだけ」

握手のために手を俺は出す。

「契約成立です。よろしくお願いします」

ライダーは手を出し、俺の握手にこたえてくれた。

「ねえ、話は変わるんだけど…」

イリヤがライダーに話しかける。

「なんですか？」

「その桜って子はどんな子なの？英霊であるあなたがぞっこんになる位だし、よっぽど魅力的なのね」

「ぞ、ぞっこん…！？／／／

いえ、あの、桜は、えっと…／／／

「くすくす、桜は？」

「あう……／／／」

わたわたしながらライダーが言い訳しようとしている。

可愛すぎるぞこの生き物。

お持ち帰りしていいよね？答えは聞いてn（ry

「これこれ、イリヤさんや。ライダーさんをいじめてはいかんぞい」

「だって、面白いんだもの」

Sですなー…。

でも分かりますwww

「さて、桜をいつ助けに行こうか…出来るだけ早く行きたいんだけどね……」

実は、桜の助け方は決めかねている。

俺の知識ではよく知らないんだ。

俺自身がやったゲームのルートじゃ全然関わってこないし、二次では結末なんて読んだ数だけ違う。

分かっているのは、桜の中に虫がいて、虫は心臓とほぼ融合している。

そしてその虫を殺さないと爺は死なない。

それは、爺の本体がその虫だから。

つまり、爺の命と桜の命はつながってしまっている。

「どうしよっかな」

「どうしたの？（ですか？）」「」

二人して声をかけてきてくれた。

「いや、桜の助け方を考えててさ……」

「え、考えてあったんじゃないの？」

「契約を持掛けるのですから、普通は考えておくのでは……？」

「いやいや、一応考えてるよ？」

ヒョウリシリーズ…出てこい」

そう言い、俺が出したのは2対で一つの剣が2対。

逆手に持つ巨大なナイフのような剣達（ツインダガー）。

2対とも見た目は一緒だが、能力が違う。

「絡まりし事象の鎖から、その姿を表すとされる連鎖の双小剣。過去と未来の過ちを支配し、表裏一体の運命を覆すほどの力を持つ、サイカ・ヒョウリ。

絡まりし事象の鎖から、その姿を表すとされる連鎖の双小剣。空間と時間の亀裂を制御し、時空の法則をも乱す絶大な支配力を持つ、ツミキリ・ヒョウリ。

ぶっちゃけこれあったら、今すぐに救えます」

「…は？」

side out

side：イリヤ

こんにちはイリヤよ。

何だかひさしぶりな気がするわ…。

って、私は何を言ってるんだろ…電波？

じゃなくて！

そんなことより、コウジユよコウジユ！

規格外だとは思ってたけど、運命を覆すだとか、空間と時間を支配するとか……どんなチートよ。

でも、そんなチートができてても出来ないことはあるみたいなのよね…。

私がこの前コウジユに教えてもらった聖杯戦争の行方と結末。コウジユがどう変えたいか。

初めて聞いた時は驚いたわ。

ハッピーエンドとか言い出したんだもの。

そこには私も含まれてる。

私は覚悟してた。

この聖杯戦争で、誰が最後の一人になっても私は聖杯になる。

私が勝っても、聖杯がアインツベルンの物になるだけで私の運命は変わらない。

そう…思ってた。

けどあの子は私も救うって言ってきた。

その瞬間のあの子は、男の子みたいで少しドキツとしたのは内緒。
まあ、次の瞬間にはいつものあの子に戻ってたけど……

あの子が言うには——俺はまだ足りない。一人で出来ることは限られてる。——だそうよ。

どれだけの反則的な能力でも不安だとも言ってたっけ…

何にしても今の私はもうハッピーエンドを望んでる。

私も頑張ればそれが可能だって…

なら…私はもちろんやるわ。

桜とかいう子を助けるのも喜んで手伝う。

ハッピーエンドのためにはあの子も救わないといけないんだって…

コウジユにはもっと頑張ってもらわないとね……

side out

side:ライダー

えっと…ライダーです。

口調が違っ？そうですか、まだ動揺しているみたいですね。

ふう…

私は、聖杯戦争に呼ばれました。

呼んだのは間桐桜という、聖杯戦争なんていうものが決して似合わない優しい女の子です。

召喚されてすぐに話をしましたが、第一印象と同じ優しい女の子だと分かり、私はうれしくなりました。

優しく笑いかけてくる桜を見ていると胸があたたかくなります。

本来私は英雄と呼ばれるものではありません。

いわゆる、反英雄と呼ばれる存在です。

そう呼ばれることをしたので当然でしょう。

そんな私が大人しくマスターの言うことを聞くわけがないでしょう？
しかも、私は聖杯に願うものなどありません。
だから、場合によってはマスターを殺してしまおうかとも考えました。

しかし、桜を知る内にそんな気は無くなりました。

むしろ、私の願いは桜が幸せになることになりました。

桜と話をすればするほどその気持ちは強くなっていきます。

そんな中あいつらは来ました。

間桐臓硯と間桐慎二です。

それから思っただけでも腹立たしい。

偽臣の書という魔術具を使い、慎二が仮のマスターとなり、臓硯は桜を人質にして私に勝つことを求めた。

その時点で私は詰んだ。

だから、何としても私は勝つ必要がある。

他の誰が犠牲になっても、気に喰わない人間の言いなりになろうとも……

そんな中、バーサーカーが私に持ちかけた契約、これはとても理想的なものです。

私が桜のもとに居ることができる上に、対価は何かを手伝えれば良いだけ。

何を手伝うのかは聞いていませんが、今までの状況に比べればどれだけましだろうか……

まあそれ以前に、今バーサーカー……コウジユでしたか……が言った空間や時間、運命すら操れるというのが本当なら戦っていれば負けていたでしょうね。

そのことを考えるとぞっとします。

ふ、ふふふ……。

待っていないさい臓硯。

桜をあなたから救ってみせます。

そういえば、慎二はどこに送られたのでしょうか。

「あの、コウジユ。一ついいですか？」

「なんですかい？」

「慎二は一体どこに送られたんですか？」

「マッチョなナイスガイたちがいっぱい居るところに贈ったよ（誤字にあらず）」

「……」

忘れることにしましょう。

s i d e o u t

『stage17：なまか（前）…infueit』（後書き）

どうだったでしょうか。

大まかな流れは決めてあるんですが細かいところがどうも……

ぐぐぐだすいません。

感想等お持ちしております。

『Stage18：なまか（後）・・・innふえいと』

side：「ウジユ

「「は？」」

「おーおー、息が合ってるね。」

「ほんとほんと」

「それって、すでに魔法の領域よね」

「一体…何者なんですか…」

「通りすがりの、神様見習い（笑）だ」

「「・・・」」

「あの、えつと、ごめんなさい！言ってみただけです。だからそんな目で見ないでー！」

「あながち間違っちゃいないけど、信じてくれないよね。」

「俺もなんとなくやってるだけだしwww」

「そんなわけで、桜を助けるのは割と簡単に行けると思うんだけど…
タイミングがね…」

「桜と凜の仲直りイベントつぶしたくないし。」

「私としてはやはり少しでも早い方がいい」

ライダーの言うように早く助けたい気持ちは勿論ある。

「あのさライダー、遠坂凜が桜の本当の姉だって知ってる？」

「！？…何かがあるとは思っていましたが、本当なのですか！？」

「本当ですぜ。」

「なるほどね。」

遠坂の家も古き血筋。

後継者となる長子以外は自らの家が魔術の家系と知らされないか、あるいは養子に出されるのが習わしだから、桜もそういうわけね…。

「

「そういうこと」

「それで、この先何が起こるか知ってる俺としては、凜との仲直りの機会を無くしたくない訳なんさ」

「何が起こるか知ってる！？」

あなたは未来すら見ることが可能なのですか！？」

「あれ、言ってなかったけ？」

「聞いてません！というか私たちが会ったのはついさっきです！！」

「……。」

あっはっはっはwww」

「笑って誤魔化さないでくださいよ…
しかし、仲直り…ですか…」

「俺が目指してんのはハッピーエンド。
だから、俺は他の人も救いたいのだよ明智君」

「誰よ明智君って…」

最近イリヤが突っ込み要員に思えてきた。

「分かりました。それに、桜なら自分だけが助かって嬉しくない
と言います」

そう言いながら、薄く微笑む。

自然に出てきたといった感じだ。

うーん…？

顔をメデューサに近づける。

「な、なんですか…？／＼」

「いや、これとった方がよくない？」

ライダーの目隠しに手をかける。

「ちょっと、あの、これは魔がn…！」

ポイっ！

目隠しを獲り（笑）、真正面からライダーの目を見る。

「おお、思った通り」

やっぱり目を出した方が良いね。

「あ、あれ…？魔眼が発動しない…」

「さっき言ったじゃん。ここじゃあらゆる攻撃は許されないってね。」

だからだいじょぶ」

「もうほんとに何でもありですね……」
何かをあきらめるように言うライダー。

「あはは」

とりあえず、笑ってごまかすことにした。

「笑って誤魔化してる所悪いのだけど、今後の予定を聞かせてくれないかしら？」

誤魔化してなんk…

「聞かせてくれないか・し・ら？」

「イエス、マムー！」

たまにイリヤがなる修羅モードこわい…
まるでスタンドの様なんだぜ…

「えゝとどこから言おうか…

「大体の流れを言っしまえば良いんじゃない？」

じゃあ大体で…

「とりあえず簡単に言うか…。

まずサーヴァントを全員集める。

聖杯戦争の勝者をサーヴァントが還らないようにして決める。

聖杯完成間近になると金ぴか王とかラスボスが出てくるだろうから、
ボコる。

聖杯完成。

それを勝手に改造。

という流れだね」

「ツツコミどころが多すぎませんか！？」ライダーがツツコミできた。

俺ってひょっとして『相手をツツコミにする程度の能力』を持つてるんじゃないだろうか……

「それが出来るっていうんだからホントにデタラメよね……」

「だってこれしか思い付かなかったんだから仕方なくない？」

「イリヤはこれで良いのですか!？」

「そんなことを言われても困るわ。」

それと、私も全部を聞いた訳じゃないのよ？」

「そうなんすよね……」。

聞いてくださいよライダーさん。イリヤったら、全部聞いたらハッピーエンドの嬉しさ半減しちゃうからとか嬉しい事言ってくれちゃって、細かいこと聞いてくれないんだよ」

「そんなこと言って……!!」「そうだっけ?」「そうよ……!!」「でも、思ってたたり?」

「し……ない……ない……けど……」／／
それと、全部聞かなかったのはコウジユを信頼し……って何を言わせるのよ……!!」

「あう、えつと……ありがとう……?／／」

ごめんなさい、俺のライフはもうゼロです。
自爆ツンデレとかお持ちかえ（ry

「あの……」

若干ライダーが居づらそうに話しかけてきた。

「えっと、何の話だっけ？」

顔が微妙に赤くなってる気がするが気のせいということにしておこう。

「大体の流れの話です」

「じゃあ説明は終了だね」

「終了なんですか！？ツツコミ所を放置のまま！？特にラスボスの所とか！！」

「細かいこと説明するより実践したほうが分かりやすいだろうし…

…」

「話を聞いてください！！というか実践！？何を！？」

「聞いてるよ？一応」

なんかライダーが楽しいwww

「……」

微妙に涙目になりながらライダーがイリヤにアイコンタクトをする。

「……（フルフル）」

イリヤは諦めるように首を振った。

「…orz」

ライダーは項垂れた。

所変わってアインツベルン城。

実k…コホン間違えた。実践するためにマイルームだとできないのでこっちに来ました。

あ、ちなみにライダーさんには魔眼殺しの眼鏡をかけていただきます。

な・ぜ・か、アイテムボックスに入ってた眼鏡に魔眼殺しの概念を加えて渡した。

これが噂に聞く御都合主義か……

「じゃあとりあえず…
ライダー、いっぺん…死んでみる？」

「？」

「コウジユ、遊ぶのはその辺にしておきなさい。ライダーが可愛そうよ」

イリヤさん。

そのセリフはニヤニヤしながら言うじゃないですよ？

「それで、一度死ぬ…というのは？」

「まずは聖杯の状況について教えるよ…」

「穢れていること、

イリヤが器であること等を軽く説明する。」

「破壊でしか願いを叶えることができない聖杯…ですか…」

「そう、今の聖杯は穢れてる。」

「だがしかし、俺はあえてそれを完成させますwww」

「そうらしいわ、そしてコウジユはその完成した聖杯を乗っ取るそうよ」

「そんなことがでk…そうですね…。今更ですよね…」
「遠い目で悟ったようなことを言うライダー。」

「うわ、ライダーまでもが何かを悟ってしまったよ」

「んで…。」

「話を戻すけど、完成のためにはどうしても中身となる英霊の死という現象は必要だから、1度死んでもらってそのあとに復活してもらうわけですよ」

「復活…だから1度死んでも大丈夫というわけですね」

「maybe…」

「たぶん!？」

「1度やって成功はしてるんだよ？
対象は生身の人間だけど…
俺の推測では英霊でも行けるハズ…みたいなの？」

「……」

ライダーはイリヤを見た。

「……（ふるふる）」

イリヤは諦めるように首を振った。

「……orz」

ライダーは頂垂れた。

乙。

「さあ、気を取り直して逝ってみよう！」

「今、言葉のニュアンスが違いますでしたか…？（汗）」

「気にしたら負けDAZE」

そう言いながら、ライダーに近づき、1枚のカードを渡す。

「これは…？」

起死回生「スケープ」：「ハイストップ！読まないように！」わ、分
かりました…しかし、本当にこれは何なのですか？」

「そいつが復活アイテムなんさ。

さっき言った前回使ったやつ英霊用に改良したんだよ」

改良点は、時間差を無くした所、元の状態への回復ではなく、再構
成にした点の二つ。

状態復活だと、聖杯に行かない場合がある。

けど、再構成ならやられた方の身体が魔力に還元されて聖杯に溜ま
り、魂とか英霊自身の本質は復活するといった感じになるはずだ。

「色々と不安な点がありますが…

やってください」

カードを持ったままライダーが対面に立つ。

「おーけー。

じゃあ、いくぜ？」

・
・
・

「あの、早くしてくれませんか？」

「いや、どうやって死んでもらおうかと…」

ただ単にやるのも芸が無いじゃんねえ？

「…何でもいいから早くしてください。

これでもやられる側としては色々と考えさせられて、こうして待つ

のも嫌なのですから」

「何でも？（キュピーン）」

何でもって言ったよね？よね？

「いや、あの、やっぱり、できれば優しく……」

ふっふっふ、前言撤回はできません。

残念ながらネタ技の使用が決まりました。

「決まったぜ。痛くないように一瞬にするから心配するな。

来い！！コクイントウ・ホオズキ！！」

呼びだすのは、2mはあるつかという長刀。

死者の国に渡る際の渡航証になるという、封印されし長剣。使用者が死の淵に立つと、覚醒し真の力を発揮するというもの。

ゲーム内では敵を一定数倒すと解放状態となり、ビジュアルが変化し、刀の周りに靈魂のようなものが漂うようになる。

俺が出したのは、すでに解放されているもの。

一応確認したら、解放されてないものも別でちゃんとあるみたいだ。なんとも至れり尽くせり。

——チャキン

俺は出したホオズキを振りかぶるように構える。

そのとき一緒に真つ白なスペルカードを握る。

目をつぶり、刀を媒体に技を幻想し、げんじつにするように思い描く。

思い描くのは、某オレンジ頭の死神の必殺技。

「幻想闘技『月牙天衝』！！！」

同時に振り下ろす！！

ズガアアアアアア！！！！

ジュッ……

「よつし成功！本家よりえぐい威力になっちゃったけどこれは使えるね」

「使えないわよ！こんな大威力のもの早々使われてたまるものですか！後で直しておいてよね！」

「うい」

まあ、しゃーないよね。前みたいに直すか。

「ねえコウジユ。そういえばなんだけどジュッ……って何の音？それにライダーの復活ってこんなに時間がかかるものなの？」

！！？

「い、いや、すぐに復活するは……」

あ・・・

「コウジユ？今回は何をやらかしたの？」
ジトーっとした目でイリヤが見てくる。

「いや、あのね？俺の技でカードごと蒸発してたり…しない…よね？」

「……頭痛い……」
頭を押さえるイリヤ。

あうあう、やばいよやばいよ！やっちゃったよー！！

パアアア！！

あう？これは…ライダーの再構成が始まったのかな？
辺りの光の粒子が集まるように集っていき、人型を象っていく。
つてことは無事！？

「イ、イリヤ！！再構成始まった！！大丈夫っぽい！！」

「ふう、良かった。まったくいつもいつも心臓に悪いことかしな
いんだから」

パアアン！！

再構成が終了したようだ。

良かった良かった……

ごめんなさい失敗しました。

「コウジユ？失敗よねこれ。どう見ても！」

「う、ごめんなさい！！」

そこに再構成されたのは確かにライダーでした。

ただし、身長が縮んでロリッ娘化してしまったライダーが……。

「よかった。どうやら成功したようですね……」

あれ？コウジユもイリヤもこんなに大きかったでしょうか……？」

可愛く首をかしげるライダー。

そんなライダーにイリヤが近づいていき、持っていたのであろう手鏡をライダーに向けて見せる。

「！？、！！？、！！！！？」

ち、縮んでる！？」

俺は土下座をする。

「すまんライダー！」

おそらく、この状況を第三者が見たらただのカオスにしか見えないだろうな。

ワタワタしているロリッ娘。

土下座をしているロリッ娘。

何故か、少し嬉しそうなロリッ娘。

一人は俺なんだけどね。

それからしばらくして…。

気を取り戻したライダーが俺を許してくれたんで良かった。

雖見沢的に謝ってた俺を止めてくれたライダーは少し遠い目をしていた気はするがホントによかったぜ。

あ、もちろんライダーの身体の状態とかを確認したぜ？

結論から言うと実験は成功。

サーバントとして召喚されていたライダーは負けたと判断され、構成していた魔力は聖杯に行ったようだ。聖杯に繋がってるイリヤにも確認をしたんで間違いない。

そして、ライダーの魂？は戻ってきて再構成。

ロリッてしまったが復活を遂げた。

ただ、聖杯戦争の参加者としては負けてしまったので、マスターとの霊的なパスは途切れてしまったようだ。

しかし、嬉しい誤算もあって、ライダーは受肉を果たした。

これについてはライダーも喜んでいた。

生で桜に触られるようになったのが嬉しいそうだ。

これで、聖杯戦争のシナリオはまた進む。

俺のハッピーエンドへの道のりも。

ライダーが負けたことは聖杯を通して各サーバント、そしてマスターへと伝わったはずだ。

それぞれの主従は本腰を入れたす。

ここからは俺の知らないところで物語が動くかもしれない。
それでも、チートパワーで無理を通して道理も通すぜ。

「さてライダー。改めてよろしくな」

「よろしくねライダー」

「はい。こちらこそよろしくお願いします」

さあ、これで原作で言う所のライダー編の分は終了した。
次はバーサーカー編だ。
これも色々しないとな。

s i d e o u t

『Stage18：なまか（後）・・・innふえいと』（後書き）

どうでしたか？

なぜでしょう。いつの間にかライダーがロリッ娘にwww

今回も勝手な解釈など突っ込みどころは満載だとは思いますが。

諦めてください。いつの間にかこうなってます。

しかし、あまりにも矛盾がひどい場合や、こうした方が分かりやすいなどがあれば教えていただくと幸いです。

では、感想お待ちしております。

『stage19:あいあむざぼーんおぶまいそーど(前)……いんふま

またまた前後篇です。

今回は戦闘前のお話です。

ふう、投稿スピードが一定しないなー……orz

ではどうぞ。

『Stage19:あいあむざぼーん おぶまいそーど(前) … i n f u

side:コウジユ

やはー、コウジユだぜ。

突然なんだが、士郎を捕獲してしまったぜwww

いや、すまん。いくら何でも脈絡なさすぎるよな。わるいわるい。

えーと、現在はライダーと契約した次の日だな。

そんでもって夕方。イリヤの部屋。

目の前には原作通りに椅子にロープで縛り付けられながらも寝こけている士郎。公園に居たんで拾ってきた。

いや、もちろんそのままの意味じゃないよ？

えっと、昨日のことなんだけど、私室（マイルームじゃない方）に居たらイリヤが――

「コウジユ、明日仕掛けるわ」

「唐突にどつたん？」

「あなたの話だとそろそろだったんじゃないの？」

「そろそろ…ああ、士郎か。忘れてた。」

「忘r…。はあ、自分で言っておいたくせに、もう…」

「ゴメンゴメン。イリヤの弟君なのに扱いひどすぎるかwww」

ああ、ちなみにイリヤと士郎の父親のに当たる切嗣さんについての誤解は解いてある。

ずーっと、言うタイミングを窺ってただけど、中々言うタイミングが無くて思わず、いつかの食事時にさーっと言っちゃった。

その時はさすがにイリヤが噴いて、セラにえらく怒られてたっけ…。今更だけどゴメンねイリヤ。

っと、話がそれた。

「明日、士郎が一人になった所で捕まえてこの城に招待する。もう1度ゆっくり話もしてみたかったし……」

「了解っと」

シュツと、軽く敬礼のまねごとをする。

実は、イリヤが公園で士郎とゆっくり話すというイベントは起こっていたらしい。

丁度俺が家出していた時だ。

内容も大体原作と同じで他愛もないものだったらしい。

———でまあ、そんなわけで、公園で考える人みたいな感じで何か考え後としてた士郎にイリヤが接触。イリヤが魔術で士郎を眠らせたときに、俺が担いで、その辺のドアから帰還。そして今に至るというわけだね。

特に面白いこともなかったんではしよったよ。

そんで、士郎が居る前に椅子を持ってきて二人して起きるのを待ってる。

「……」

「どうしたの？」

「いや、額に肉って書くべきなのかなって……」

「よくわからないけど、やめてあげて」

「ぶー…、しかたねーな」

とりあえず、士郎が起きるまで待つか……

side out

side：士郎

「ぐ……」

「あ、起きた？」

「はあ、やっど？」

何がどうなったんだっけ…イリヤに身動きを封じられて…そのまま…。

「土郎、声は出せるかい？」

コウジユが目の前で何故か嬉しそうにしながら俺に話しかける。

「ああ、頭の方も自分が捕まってるってことが理解できるくらいにはハッキリしてる」

大人げないと思うが少し皮肉を込めて返す。

そしたら、イリヤが今度は話しかけてくる。

「不満なの？捕まえた敵は本当なら地下牢に入れるんだけど、土郎は特別だから私の部屋に入れてあげたんだからね」

いや、そんなむしろ喜んでほしいみたいなのを言われても…。

「それでまあ、土郎君が捕まったここは樹海の中のお城、誰かが助けに来ようにも早々これはしない所にあるからゆっくりしていきな」

「どうして俺をそんな所に連れてきた。俺を殺すならあの公園でもできた筈だ」

実際に俺はあっさりと捕まっている。
わざわざこんな所に連れてくる意味が分からない。

「俺たちは士郎を殺す気なんてないぜ？他のマスターは殺すがお前を殺す気はないんだよ……（ウソだけど）……」

俺だけは殺さない？
最後にぼそつと何かを言ったみたいだが、どういうことだ？

「ねえ士郎。私のサーヴァントにならない？そうすれば殺さなくて済むわ」

「そんなの無茶苦茶だ。」

サーヴァント？本来の意味での執事という意味でいってるんだと思うが、どっちにしるお断りだ。

「ふむふむ、士郎は嫌だ……と」

「当たり前だ！」

「はぁ……とりあえず言つとくと今の士郎はかこの鳥状態だ。生かすも殺すも俺立ち次第なんだぜ？
そのことを考えてもう一回考えてみる」

「それでも嫌なのは変わらない」

俺の意思は変わらない。
何とかしてここを脱出して、セイバー達のもとに帰らないといけな

いんだ。

「だってよイリヤ」

「せっかく十年も待ったんだものすぐに殺すのももったいないし…あ、そうだ。セイバー達を殺しに行きましょうコウジユ。たぶん、士郎はセイバー達が居るから了承しにくいのよ」

「そーなのかー…っていうわけで、殺しに行ってくるわ士郎」

「待て！セイバーも遠坂も関係ない！俺がイリヤと居られないのは俺の都合で…」

「残念、どっちにしろ他のマスターを殺す必要はあるから殺すのは変わらないぜ？」

「さっきから殺す殺すって…簡単に人を殺すなんて言うんじゃない…！」

「残念、すでに俺はマスターを一人殺してるんだぜ？昨日士郎も見たと思うが…慎二を違う所に飛ばしたんだが、その場所には肉食動物の檻の中だ。今更腹ん中に入っちゃってるんじゃないか？www」

「くそ…、慎二……」

慎二が死んだなんて。

確かにあいつはひねくれた部分はあるが殺されて良いような奴じゃ…。

いやそれ以前に殺されて良い人間なんて居るわけが…。

「じゃあ行ってくるぜ士郎。そこでおとなしくしてなよ」

「行ってくるわ。士郎」

そう言つて二人はこの部屋を出て行つた。

くそ！早く何とかしないと。

セイバーは昨日のライダー戦で宝具を使ったから魔力がぎりぎりだ。しかも、遠坂が言うにはコウジユがセイバーの魔力を吸ったから本当にぎりぎりだつて言つてた。

つまり今、コウジユと戦えるのはアーチャーだけだ。

あのいけすかないアーチャーだけではコウジユに対抗できないのは前回で分かつてる。

ライダーもあつさり捕まえていたし、早くしないと…。

「くそ！早くセイバー達の所に行かないといけないのに！」

イリヤの魔眼の効果がまだ残っているのかまだ体が動かない。

……仕方がない。

少し荒っぽいが身体に魔力を通して洗い流す。

「トレース、
同調、開始……」

side out

side：イリヤ

「さて、これで士郎達は頑張ってくれるかしら」

「よくもまあ、あれだけ悪役になりきれもんさね」

いつも通り安定しない口調で軽口を聞いてくる。

「そう言うあなたもじゃない。普段あれだけ殺さないように気をつけておいて……あのわかめみたいな髪型のマスターのことなんてでたらめにもほどがあるじゃない。命の保証が確実な所に送ったんでしょ？」

「まあねー、殺すの嫌だし……自分とか大切な人の命が掛ったらどうか知らないけど」

本当にこの子は甘いというか……敵まで救う対象だなんて……

でも、そこがコウジユの良い所なのかしらね。

そんなことを考えてるとコウジユが突然何かに気づいたように振り向いた。

どうやらお客様のようね。

「んじゃ、行きますか」

「出ていったふりをするんだっけ？」

「そうそう、マスターはいはいだね」

そう言つて、コウジユが嬉しそうに外へ向かう。

「これほど緊張感のない聖杯戦争なんて史上初なんじゃないかしら……」

そう言いながらも、どこか楽しくなっている自分に気づきながらコウジユを追いかけることにした。

side out

side: セイバー

今、私はアインツベルン城に來ています。
それは、士郎が捕まってしまったからです。

くっ…、不甲斐ない。

サーヴァントである私が主^{マスター}を守れず
に、連れ攫われるとは。

昨日私は、ライダーと戦いました。
やむを得ず宝具を使いましたが、使用するならば一撃必殺出なければならなかったのに、バーサーカーが何故か持っていたエクスカリバーと相殺されたた魔力が減っただけ。

そして、魔力が宝具解放の影響で少なくなり倒れました。

私にとっては昨日の一戦はマイナスばかり……。

そして、次に目が覚めたときにはすでに屋敷におり、しかも翌日の夕方になっていました。

その時点で士郎が居ないことに気づき、歩くこともままならない私は現在手を組んでいる凜とそのサーヴァントのアーチャーに助力を頼み、士郎創作を始めました。

魔力残滓をたどり、居ることがわかったのはアインツベルン城。

様々な思いを持ちながら、城まで来ました。

隙を見て、早く士郎を助けにいかないといけません。
待っていてください、士郎。

s i d e o u t

『stage19:あいあむざぼーんおぶまいそーど(前)…i n f u

どうでしたか？

つぎはおまちかね？のアーチャー戦。

不憫な扱いになるのは決定事項です(笑)

ではまた。

感想お待ちしてます。

『stage20:あいあむざぼーんおぶまいそーど(後)…i n f u

9ページになってしまった…。

待ってくださっていた方には申し訳ない。
えらく遅れ気味ですね。

不定期更新とはいえもう少し早く上げたいものです。

では、どうぞ。

『stage20:あいあむざぼーん おぶまいそーど(後) : inふ』

side:士郎

魔力を身体に無理矢理流す。

く…やっぱり負担はあるな…。

血が口元から一筋垂れる。

だが…よし!!

縄もほどけたし、身体の調子もほとんど戻った。

早く、屋敷を出ないと…。

扉の方へ向かい、部屋の外の様子を窺う。

タッタッタッタ…

見回りか!?

1度部屋に戻り、何か武器を探す。

木の棒があつた。

少し心許ないがひとまずこれで…。

バアン!!

「士郎!無事ですか!?!」

扉を押し開けて入って来たのはセイバーだった。

「セイバー！？」

家に居た筈なのに。

「どうしてお前がここに？」

「それは私のセリフです」

淡々と話すセイバーの後ろからまた誰かが来た。

「思ったより元気そうね。これなら私たちが出向くこともなかったでしょう。」

「だからそう言っただろう。衛宮士郎は放っておけと」

「遠坂にアーチャーまで。どうして……」

その答えはセイバーが答えてくれた。

「私が協力を要請したのです。士郎がイリヤスフィールに拉致された……。そして丁度イリヤ達が出出したのでその隙に……」

「ま、一応協力関係にあるわけだしね……」

さ、イリヤスフィールが戻ってくる前に早く」

そう言って早足に部屋を出ていく遠坂。

礼を…いや、礼は帰ってからしよう。
今は脱出をしないとだな。

・ ・ ・

城の中を走る俺達。

お城というだけはあるようで、すでにかなり走った筈なのに出口が見えてこない。

そこらには高価そうな置き物や絵が置いてある。

こんなときでなければ楽しめたかもしれないが…。

そんな風に思考が横道にそれている内に出口が見えた。

しかしこれって……。

「正面入り口…。こんな所通って大丈夫なのか？丸見えだぞ」

「相手が留守にしているんだから最短距離を一気に行った方がいいですよ？」

さ、行くわよ」

そう言ってまた走り出す遠坂。

大胆と言つか何と言つか……。

だが、考えている間にもイリヤが戻ってくる可能性は増すので俺も追いかける。

タッタッタッタ……

あまりにも広い、ちよつとした運動なら出来そうな位だ。
出口まででもおよそ50mほど。
そこを一気に駆ける。

ガチャっ……

「な〜んだ、もう帰っちゃうの？せつかく来たのに残念ね」

「まったくだぜ」

今一番聴きたくない声が辺りに響く。同時に、ただでさえ重かった空気が更に重くなる。

後ろを振り向くと、外に居るハズのイリヤとコウジユが何かの部屋のドアから出てきた。

「イリヤ…スフィール。バーサーカーまで…」

信じられないといった感じで二人の名を口に出す凜。

イリヤ達は外出したんじゃない？…なのにどうして後ろから？

「こんばんわ。あなたの方から来てくれてうれしいわ、凜」

「……」

微笑みながら、話しかけるイリヤは、天真爛漫という言葉が良く似合う。

だが、そのイリヤが放つ言葉はあまりにも残酷なものだった。

「黙っていてはつまらないわ。せつかく時間をあげてるんだから、遺言位は残した方がいいと思うな」

遺言、つまり今から俺たちを殺すってわけか。

正直、色々と言いたくなる言葉だが場の空気に押し潰されないようにするだけで精一杯だ。

そんな中でも凜が話しかけた。

「じゃあ、一つ聞いてあげる。あんた達が屋敷を出たから入ってきたの後ろから表れるのはどうしてかしら？気配も確かに外に行った。なのに今突然、そこに現れた」

「それは俺の能力さね。
つてか、昨日士郎も見てただろ？ただ単にあのドアを媒介に空間を
跳んだだけだよ」

「なるほどね、私たちは誘われたわけか」

「そういうことよ。あなた達が来ることは分かっていたから入りやす
くしてあげたの。」

私はこの城の主だからおもてなししてあげないとね」

その瞬間コウジュがイリヤの横から飛び、俺達の前方に来る。

「もう話すことはないかしら？」

「ないみたいだな。それじゃあ始めようぜ。」

来い、スヴァルティアトマホーク」

コウジュが頭の上に片手を掲げるとそこに何かが現れる。

トマホークと言った所から、斧なんだと思うが、コウジュの手に
表れたものは斧としては異形。あまりにもな巨大さ。

コウジュの身長は二倍はあるんじゃないかなろうか。

刃であろう部分も、長い持ち手に無理矢理つけた鋼鉄を無理矢理に
刃形にしたといった感じた。

その一撃を受けてしまったとしたら、斬れるとかそれ以前に圧倒的
な圧力で粉みじんになりそうだ。

それを軽々と無造作にコウジュは構える。

「誓うわ今日は一人も逃がさない」

イリヤの宣言がいやに頭に響いた。

s i d e o u t

s i d e : コウジユ

さてさて、どうなるかな。

俺としては原作通り、アーチャーを残して、士郎、セイバー、凜がこの場を脱出してくれることを望んでる。そして、俺がアーチャーを倒して、その後士郎達を追っかけて戦うっていう感じがベスト。

だから、この場でアーチャーには死んでもらわないといけない訳だ。と言っても、ライダーみたいに一旦だけだね。

ついでに、俺個人の目的もあるんだけどね…につしつしwwww

あ、そういやさ。

全然話変わるんだけど、イリヤの今した宣言あるじゃん？
あれって負けフラグだと思ったの俺だけ？

俺…この戦争が終わったら結婚するんだ…みたいなレベルの。

そんなのんきな事を考えてる俺の前では、シリアスが繰り広げられている。

「士郎、逃げてください。ここは私が…
くっ……！？」

そう言っただけで倒れそうになるセイバーを士郎が受け止める。

「何言ってるんだ。そんなことできるわけないだろ」

「しかし…」

なんか、俺って悪者だよな。
分かってやってるし、今更なんだけどさ。

その横では…。

「アーチャー、聞こえる？
少しでいいわ、一人であいつの足止めをして」

「遠坂？」

「馬鹿な、正気ですか凜？」

アーチャー一人でバーサーカーの相手など」

「私たちはその隙に逃げる。良い？」

「賢明な判断だな。凜が先に逃げてくれれば、私も逃げられる。それに単独行動は弓兵の得意分野だからな」

ひそひそ話してるけどまる聞こえですよ？
俺ってビースト種だから、獣じみた部分があるみたいだから余計に
なんだろうけど。

アーチャーがセイバー達の前に立つ。

「へー、そんな誰とも知れないサーヴァントでバーサーカーに立ち
向かうっていうんだ。

案外可愛い所があるのね、凜」

ノリノリっすねイリヤさん。

って、うう、イリヤがそんなこと言うから、アーチャーがこっち睨
んでるじゃん。

鷹の目とはよく言ったもんだ。怖いんすけど。

「ところで凜。一つ確認していいかな」

「え？」

「時間を稼ぐのは良いが、別に、あれを倒してしまってもかまわん

の
だ
ろ
？
」

そう言い、凜に横眼を向ける。

「アーチャー……。」

ええ、遠慮はいらないわ！」

「では、期待にこたえましょう」

おおー！

生でこのセリフが聞けるとは！

やばい、超嬉しい。

サイン欲しいんですけど！！良いですか！！

「ふん、そんな生意気な奴、バラバラにして構わないんだから。

やりなさいバーサーカー！！」

「Yes , my Lord!!」

そう、最近よく聞く台詞を俺は言いつつ、全身に魔力をみなぎらせる。

「行くわよ士郎！セイバー！」

そう言って凜が出口へ走っていく。

「でも……」

「士郎、それしかありません」

セイバーも走っていく。

士郎はまだアーチャーを残して行くことに納得しきれないのか、足が中々動かない。

だが割りきったのか、齒をかみしめ、出口に向かう。

その士郎にアーチャー崖を掛ける。

「衛宮士郎。

いいか、おまえは戦う者ではない、生み出す者にすぎん。
余計なことは考えるな。お前に出来ることは1つ。その1つを極め
てみる」

そう士郎に背を向けたま言い、いつもの黒白双剣、干将・莫耶を投影して出し、構える。

「アーチャー……」

「忘れるな…

イメージするのは常に最強の自分だ。

外敵などいらぬ、お前にとって戦う相手とは…自身のイメージにほかならない」

そして、持っていた干将・莫耶の片方を天井に投げる。

ビキビキ…ガガアアンツ！！

刺さった剣が天井を崩す。丁度アーチャーの後ろで、士郎達と俺た

ちを分かつように。

って、あ…士郎が危うく崩落に巻き込まれて潰れそうに…。

狙ってたか？

あわよくば潰れろってか？

タッタッタッタ……

でもまあ落ちてきた瓦礫のせいで、士郎達は見えなくなったが、音からして無事に城から逃げたようだ。

よしよし、とりあえずは予定通りだ。

「さて、戦う前に一つお聞かせ願おうか」

「おりよ、戦うんじゃないん？」

「少し…気になることがあるんでね」

これは予想外だね、話ってなんだろう？

「凜達がない方が都合な話しだったたり？」

「ふむ、君は私が何の話をしたいのか気づいているのか」

「いや、大体の想像だよ未来の英霊さん。
本来バーサーカーとして召喚されるのは俺じゃないって言いたいんだろ？」

「コウジユどういうこと？」

空気になりかけてたイリヤが声をはさんでくる。
そっか、この辺の話もイリヤは聞かなかったんだっけ。

「イリヤ、アーチャーはね。イリヤもよく知る人が今現在から見て
未来で英霊になった姿なんさ」

「私も知ってる…？」

「私の真名まで知っているとね…恐れ入る」

アーチャーが俺を見る目が更に鋭くなる。だから怖いですって。

「私が良く知る人間で英霊に至りそうな人なんて……
思いつかないわ」

「ま、そうだろうね。現在の姿からは思い浮かばないだろうさ。
な、エミヤシロウ？」

「シロウ！？うそ、本当に!？」

「肯定だよ、イリヤスフィール」

イリヤに答えてすぐに再び俺の方を向く。

「それにしても、なぜ君は私の真名まで知っているのかね？
異世界から召喚されたと言っていたが、それなら私の真名など知る
筈がないと思うんだがね」

「それなら簡単だ。俺はアカシックレコードに接続する方法を持
っている」

「！？」

「そうか、それなら納得できるというものだ。まさか根源に至つて
いるとは……。個人的には納得したくないが」

「実際は原作知識なんですけどね。」

「アカシックレコードに繋ぐ事が出来る携帯を確かに持つてる。何で
か言うこと聞いてくれない……」

「って言うか馬鹿にされてるけどね！」

「さて、どうしたものか……根源に至っているのであれば魔法も使え
るのかね？使えなかったとしても十二分に脅威だが」

「使えるぜ？」

「……。」

「本当に規格外だな……。ヘラクレスの方がまだ勝てる可能性は高かつ
たよ」

「私もコウジユを召喚してしばらくは驚いてばかりだったわ。山一
つ吹き飛ばすし、アインツベルンの大結界は一発で破壊するし、龍
脈の制御もやっちゃうし、空間転移も軽々だし……」

「規格外にも……程があるな……」

汗をかきつつ口元がヒクついているアーチャー。
俺ってそんなに規格外？

いや、ゴメン。自分でもチートだと思うわ。

って、そんなことより！

「あのさ、バトルするんじゃないかったっけ？」

「ふむ、そうだったな。」

勝ち目はないが1秒でも多く時間を稼がせてもらおう」

そう言っつて、いきなり干将・莫耶を振りかぶるように斬りかかってくる。

ギヤアアン！！

「うお！？」

とりあえず、スヴァルティアトマホーク——長いからスヴァルで
いつか——の持ち手で防ぐ。

次は俺が行かせてもらうかね。

Let's ^{レッツ} ^{パーティー} party！ってね。

「でりゃあ！！」

ブオオオン！！

受けているのを弾くように横薙ぎにスヴァルを振るう。

「くっ！」

アーチャーは難なく避けたように見えたが、俺が速いスピードでスヴァルを振るったから、鎌鼬みたいなのが発生し、アーチャーを軽く切り裂く。

うわ、すごい威力。

スヴァルには何の概念も付与してないから、ただ馬鹿でかい斧でしかないのにこの威力。

いや、犯人俺だけどさ。

この身体の筋力だけでも、十分チートだねって改めて思ったんよ。

「完全に避けた筈なんだがな」

投影していた双剣はどこかにいったのか再びアーチャーは干将・莫耶を投影する。

「良い調子よバーサーカー」

「声援ありがとよ！

てりゃああー！」

再びアーチャーに俺は斬りかかる。

美少女の応援ってなんかテンション上がるね。

「ッー！」

ブオン！

上段から斬りかかったが
横に身体を移動させ避けられる。

「何の！！」

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラ！！」

ブオンブオンブオンブオンブオンブオンブオンブオン
ン！！！！

連続ででたためにアーチャーに斬りかかる。

どうせなら拳でやるべきだったかな？

アーチャーは俺の斬撃を全てかわしていく。
だが今度は、先ほどの鎌鼬すら避けるように幾分か動きが大きくな
っている。

「隙有りだぜ！」

アーチャーにスヴァルを振り下ろす！！

ギャアアン！

今度は避けられにと思ったのかアーチャーはとっさに双剣をクロス

させ、俺の斬撃を受け止める。

だが、俺の筋力はチートだから、力を込めると…。

ブアアン！ドオオン！！

「ぐあつ…！！」

一瞬拮抗したが、すぐにアーチャーは吹っ飛び、壁にめり込む。

そしてすぐに、壁が砕け、アーチャーは落ちてくる。

「ありやりや……やっぱり俺じゃあスマートな戦い方は無理か」

なかなか、技としてしかこの身を活かせられていない。

ごり押しも良いけど、剣と剣での応酬とかやってみたいな。

そんなことを考えていると――

「まったく、何が不満なのかね」

薄く笑いながら、アーチャーは再び立つ。

「あんたこそ、何が楽しいんだい？」

「いやなに、見た目は美少女なのに攻撃はえげつないなと思ってね」

「美しよ…！！？」

な、なな、何言ってやがる！？

士郎もそうだけどたらし属性でもあんのか!?

アーチャーは突然上へ飛び、二階の手すりに立つ。

「つて、あ!!」

「——I am the bone of my sword.
(体は剣で出来ている)」

そうアーチャーが詠唱すると、手には鉄製の黒いハンドガードが付いた弓と、刃が螺旋状になった剣が現れる。

「やつべ!!おらあ!!」

それはオート防御——これも長いから障壁でいつか——を突破される可能性があるんで潰させてもらっぜ!

俺は慌ててアーチャーの方に向かって跳び上がる。

しかし、アーチャーの攻撃の完成の方が早かった。

「——“偽・螺旋剣”(カラドボルグ)!!」

シュパンツ!!ドオオン!!

「うおわ!!!?」

空中だったのもあってかわせなかった俺は、カラドボルグを喰らい、矢が障壁に当たって爆発、地面に叩きつけられる。

「いてて…うわ、服が若干破けてる…」

「コウジユに攻撃が通ったの!？」

あの士郎がこんなレベルまでなるなんて……」

いや、それはさすがにひどくないっすかイリヤさん？

確かに士郎はへっばこだけどさ。

「並みのサーヴァントなら即死だが、服が少し破けた程度とは……」

アーチャーはまた口元をヒクつかせる。

「あ、ここはすりむいてるし…ヒリヒリする。

来いウオンド。んでもって、レスタ!」

スヴァルは片手に持ったまま、片手杖（普通の短杖。ゲーム内では1番メジャー）を使い回復する。

俺の身体は一瞬光に包まれ、傷を修復する。服も。服までとは便利だね。

「生半可な攻撃ではすぐに回復される…か…」

アーチャーはそう言って先ほど開けた天上の穴から外へ飛び出る。

「中々に順調だね。よし、第2ラウンドといこうか」

俺は、背中に羽を付け、追いかける。

s i d e o u t

side:アーチャー

自分で開けた穴を抜け、テラスに出る。

テラスの端に立ち、追いかけてくるであろうあのバーサーカーを名乗る女の子を待つ。

あのバーサーカーは圧倒的に私より強い。

あれがチートというものののだろうか。反則的な能力が大安売りだ。神殺しをなしたというだけはある。

だが…、勝機はある。

前回と今回戦って分かったことなのだが、あの子は英雄でありながら素人だということ。

あの子の動きはあまりにも不自然だった。

先ほどカラドボルグを射った(うった)時もそうだ。

あの近距離で射った(うった)にもかかわらず、あの子とはっさにあの馬鹿でかい武器で防いでいた。それも無意識にといった感じだ。だが、あの子が時たま見せるスピードとあの体の小ささがあれば空中とはいえ本来なら避けられたはずだ。

前回剣を交えた際もおかしな点があった。

私やセイバーと打ち合っではいたが、あの子の武器の軌道には洗練した動きはあまり見られなかった。唯一見れたのは何かの技の最中という、決められた動きをなぞる時のみ、それ以外は完全にスベックにモノを言わせて、反射神経や筋力で押し切る形だった。

まるで、自身の能力を把握しきれていないような……。

技のキレや物理的な重さはある。なのに年月や積み重ねた重さがほとんど感じられない。

そして最後に、あの子は私を殺そうとしていない。

いや、確かにあの子の攻撃は私を殺そうとする軌道を描いてはいるが、当たりそうになると刃が鈍る。

これも無意識なのだろうか。

そういえばイリヤもだ。あれだけこちらを殺すようなことをほめかしておいて、この間に比べて本気で殺そうとしているようには感じられない。

私の衛宮士郎としての記憶の中での聖杯戦争時代のイリヤと言って、いることはほとんど変わらないのに……だ…。

何か企んでいるのか？

いや今は関係ないな。

悪いがそこをつかせてもらっただけだ。

あんな小さい子に対して使うのは忍びないが私の切り札を切り、全

力で行く必要がありそうだ。

せいぜい手を抜け、それだけ時間は稼げる。

思考の最中に居ると、上空から殺気を感じた。

「流星！！ブラボー脚うう！！！！」

その場から飛び、回避すると、今まさに自分がいた所を蹴りの態勢でコウジユが過ぎ去る。

ドゴオオオン！！

そのまま彼女はテラスの床に突き刺さる。

「うわっは！？ 抜けない！ ちくしょう加減を間違えた」

思わずこめかみを押さえる。

先ほどの私が真剣に考えていた時間を返してほしい。素人や英霊がどうか以前に、この子はうっかりすぎだ。それも、凜に匹敵するかそれ以上の……。

これほどやる気が起きない戦闘は初めてだ。

side out

side : コウジユ

調子に乗って、キャプテンブラボー技なんか使わなきゃよかったぜ。

そんなわけで？現在下半身が埋まっております。

うー！抜けない！！

スカートかなんか引つかかってんのかこれ。

馬鹿力で抜けようとしても、他も崩れて下に居るイリヤがぺちゃんこになったら意味ないし……。

そんな風にもがいていると。

「ふう……」

「ため息！？って俺を見てため息ついてんのか！？」

「言葉にしがたいよまったく」

くそ！アーチャーめ！あんたが避けるからこんなことに！！（逆恨み）

「少々悪いが、これを逃さない手はないな。」

Steel is my body, and fire is

my blood・（血潮は鉄で心は硝子）。

はっ！！」

そういつて、アーチャーはてい持っていた。干将・莫耶を横に投げる。

投げられた双剣はブーメランのように回転しながら、俺をはさむように飛んできて――。

カアンキイン！！

障壁ではじかれる。

これってあれだよね！？

アニメ版で本来のバーサーカーがボコられてたのと同じシチュエーション！！

これが、世界の修正力というものか！？

違います。コウジユが自分でうっかりこの状況に持って行っただけです。

今何か失礼な事を言われた気がする…。

ってそんな場合はない！！

「I have created over a thousand blades・（幾たびの戦場を越えて不敗。）」

はあ！！」

アーチャーは再び黒白双剣を投影し同じように俺に向かって投げる。先ほど障壁に弾かれたのはまだ滞空しているから、今のと合わせて合計4本が俺に向かってくる！

のああ！？

ヒュンヒュンヒュンドガアン！！

「ノー！！！」

全ての双剣が障壁にぶつかった瞬間爆発し、爆風が俺に当たる。熱い！熱いって！！

続いて、アーチャーは手を身体の前でクロスさせながら再び投影を始めつつ、俺に向かってくる。

「Unknown to Death」（ただの一度も敗走はなく）

出てきたのはまたしても干将・莫耶。

だが――

「Known to Life」（ただの一度も理解されない）」

そう詠唱しながら、双剣を背の方に持つていくと双剣は光だし、黒と白の羽を模したような大剣にそれぞれが変わる。

「——心技（ちから）、泰山二至リ（やまをぬき）

——心技（つるぎ）、黄河ヲ渡ル（みずをわかつ）

はっ！！」

アーチャーは飛び、その2剣を俺に向かって振り下ろす！

そいつはダメージを受けそうだからやらせねえぜ！

「しかたねえ！ツミキリ・ヒョウリ！」

ツミキリ・ヒョウリの概念を補強し、俺の周囲の空間を少し歪曲させ、穴から抜け出る。

ついでにフリーズトラップ（凍結系探知トラップ）を置いておく。やられっぱなしは嫌いだ。

抜け出たのが斬られる寸前だったので、アーチャーはまんまとトラップに引っ掛かる。

「これもか！くっ！！」

だが、英雄の名を持つだけのことはある。

最後に横に飛び身体の所々を凍らせてはいるが凍結しきっていない。

本来なら全体が凍るはずなのに。

「さすがだねアーチャー…」

「なるほど、^{バースカー}最狂のクラスなだけはある」

「あ褒めに預かり恐悦至極だよ」

片膝をつきながらこちらを睨みつけるアーチャー。

ゾクッて来るね。言っとくけど変な意味じゃないから!!

「さて、下に行こうか」

まだ節々が凍っているアーチャーを掴み、身長的に空中ではないので担げず、仕方なく引きずりながら元のエントランスホールへと、穴を飛び降りる。

「ぐーがあ!!」

「あ、ごめん!!」

下りる途中でどこかにアーチャーをぶつけてしまいボロぞうきん
ry

「ごめんなさい未来の士郎。私たちの計画のためにはあなたにここで1度死んでもらう必要があるのよ」

あ、若干イリヤに砂埃が…あれ、俺のせいかな？
後で怒られそう…。

「振り払ったつもりだったんだがな……」

「まだ話せるの？すごいわ、けど……」。

コウジユー！苦しまなくて済むように、油断なく躊躇いなくやってしまいなさい」

シリアスは苦手だし、ここらでしまいか。原作より早く終わっちまった。

俺はカードを取り出し、アーチャーの胸元に当てる。すると、カードは消えてしまう。

「そうだな、1番の目的以外はついでだしな」

「今…何をした？…それに…計画……？」

「その内わかるさ。スヴァル！」

言いながら俺は、スヴァルを出し、頭上に構える

「これで終いだ…」

ドゴンー…！

しかし——。

「こちらの敗北は動かないが、終わらせるのは手間だぞ。バーサーカー」

アーチャーは当たる寸前に横に飛び避けていた。

「まだそんなに動けたのか、耐久力がすごいな」

「切り札をまだ切っていないもんでね」

アーチャーは干将（白黒双剣の片方）を投影し、こちらに投げる。

しかし投げられた剣は俺もイリヤも素通りし、さらに後ろへ…

パリン！！

当たったのはこの広いエントランスを唯一照らしていた明かり。

あたりは暗闇に包まれ、唯一の光は天上の穴から漏れる月光のみになる。

アーチャーは暗闇にまぎれ、気配を隠す。

やっぱりあるわけね、最終ラウンド。

いいぜ。

おかげでもう一つの目的を果たせそうだ！

side out

『stage20:あいあむざぼーんおぶまいそーど(後)∴innふ

どうだったでしょうか？

残念ながらUBWは次回へと持ち越しになりました。

次は何を使おっかな(笑)

あと、ルビでしたっけ？あのふりがなのやつ。

上手くいく時といかない時があるのは何でだろ…。

まあいつか。

ではまた次回。

感想お待ちしております。

『stage21:あんりみてつど ぶれいど わーくす...iロふえいと』(前)

こんな感じになりました。

チートと、ネタを上手く仕えてるか…。

あと、アーチャーの壊れ具合が異常です。

そういうのが苦手な方は読まないことをお勧めします。

では、どうぞ。

『stage21:あんりみてっど ぶれいど わーくす...innふえいと』

side:コウジユ

月光の少ない光量に慣れ始め、辺りが見え始める。

それでも、気配を消しているアーチャーは中々見つからない。

キヨロキヨロとあたりを見ていると、唐突に月光の差し込む場所が変わっていき、何故かアーチャーがあらわになる。

「どうやら、月の女神の加護は貰えなかったようね」

これが月の女神さんの所為なら、新手のいじめじゃないっすか？

けど、そんなの関係ねえとばかりに、片膝をつき、王に忠誠を誓う時のような姿勢で詠唱する。

「Have withstood pain to create many weapons. (彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。)」

「コウジユー!!」

「ちよいタンマ」

その詠唱に不審な匂いをかぎつけたのか、イリヤが俺に倒せと言ってくるが、俺は動かない。

「Yet, those hands will never hold anything. (故に、生涯に意味はなく。)」

なぜなら、俺は――

「So as I pray, unlimited blade works! (その体は、きっと剣で出来ていた!)」

――この状況を待っていた。

アーチャーの詠唱が終わった瞬間、辺りに炎が満ちていく。

しかし、炎は俺たちの身を焼きはせず、辺りが炎で満ちたら一気に消えた。

だが、炎が消えた辺りは先ほどまでに居た城ではなく、無数の剣が地面に刺さり、歯車が宙に浮かび、赤銅の空が満ちた世界に変わっていた。

「固有…結界…」

「そうだよ、これだよ。これを待ってたんだ」

固有結界。別名リリティ・マール。

魔術師の世界で、目標とされる魔法に1番近く、最大級の奥義であり、同時に禁忌ともされる魔術。

魔術の到達点の一つとされ、使い手の心象風景を形にして現実を塗りつぶし、世界その物を作りかえる業^{わざ}。

よくチート二次小説ではこの魔術を自身に望むものが多い。
いや、俺も欲しいけど。

でもさ…。

どうせ、この身はチートなんだ。
本家本元のこの技を受けてみたくなっただ。

そして、”学ばせて”

もらっぜ？

無限の剣製を。

「なぜ、私の詠唱を止めに来なかったのかは分かんが……」

おもむろにすぐそばに刺さっていた剣を一本抜きつつ、俺に向かって
てきざったらしい笑い方をしながら、俺に向かって宣言する。

「御覧の通り、君が挑むのは無限の剣。

剣戟の極致。

恐れずしてかかって来い！」

よっしゃあ！！アーチャーの聞きたいセリフを1番聞きたかった台
詞を聞けたぜ！！

テンション上がってきたあ！！！！

しかももしか、さっきは周りの被害を気にして、ちょっと自重し
ぎたからな。

ここはある意味異次元。

チートパワーを制限する必要はほとんどない。

色々と試させてもらうとするよ？アーチャー…。

あ、イリヤをどうにかしないと……

「とりあえずこれつけてて」

「何これ、腕輪？」

「それつけてたら大丈夫なはずだから」

「ふーん」

とりあえずつけてくれるイリヤ。

俺が渡したのは『ブルーリング』という、盾の種類に分類されるも
のだ。

見た目はただの少し透き通ったブルーの腕輪だが、大盾としての性
能を持っている。

ゲーム内では仲間と一緒に付けたら、さらに防御力が上がるって
いう代物なんだが、俺特製のこいつは防御と言う概念を強化しまくっ

たやつで、ちょっとやそつとじゃ装備者に傷をつけられなくなるはずだ。

筈だったのは耐久訓練してないからなんだが、この概念付加は別に自重する必要が無いんでチートパワーを込めまくった。

さっさと渡しとけよって？

わ、忘れてたワケじゃないヨ… ホントダヨ…。

でもまあ、これで周りを気にせず戦えるってもんだ。

side out

side : アーチャー

正直に言おう、やりにくい。

いくら英霊とはいえ、少女だ。

別に、少女だからというだけでやりにくいわけではない。まったくないとは言わないが、これは戦争なのだから今は問題ない。

問題なのは、どうしてあんなにも無邪気なのかということだ。
今も――。

「自重？何それ美味しいの？
はっ、最初からクライマックスだぜ！！

まずは…節子おさんのフライパン！来い！」

バーサーカーの手には巨大な1m位はある、フライパンが現れる。

さっきはまだまだもな武器だったのに何故だ？
というか誰なんだ、節子おさん。

「ターンオーバー！！」

く、思考がずれてしまったか。

バーサーカーはすでに、フライパンを上から叩きつけるように振り下ろしてきていた。

それを受けるため手にしていた剣を反射的に上げようとして、先ほどのことを思い出し横に飛ぶ。

ダアン！ダアン！ダアン！！

1撃2撃、自身も空中で1回転しての合計3連撃の打ち下ろし。

私が避けてからも2撃目を行っていたところを見ると3連撃で1つの技なのだろう。

見た目だけで言えば可愛いものだが、その威力は、目の前にある結果はやはり納得しがたい。

今でもクレーターが……。

もしも自分が受けていたらと思うと、背筋が凍る。

何故か、受けた自分がデフォルメされたように縮んでいるのは何故だろうか。

「さて次だ！武器変更、節子おばさんの料理セット！！」

一旦フライパンが消えて、出てきたのはまたしても同じフライパン…と、お玉？

出てきたお玉も1mはある。

何でそんなものを作ったんだ節子おばさん。あれだろうか、相手を料理するといった……

…またしても思考がズレたな。だが、何かをされる前に次はこちらから行かせてもらおう！

「これでもくらっておけ！！」

少し離れたところから、自身の周りにある剣をバーサーカーに向かって何本も投げる。

「け、剣がいつぱい来た！？

これでいけるかな…。

エルロン家奥義！！死者の目覚め！！」

そういつてバーサーカーはフライパンにお玉を叩きつけ――

ガンガンガンガンッ…！！！！！！

「なん…だと…!？」

慌てて耳を塞ぐ。あの死者の目覚めという技？は危険すぎる。音の壁によって、私が放った剣達は全てバーサーカーの障壁よりさらに外側で弾かれてしまった。

音が衝撃波となって視認できる程の壁となっていてしまっているのだろう。

それほどの濃密な音。

確かに死者すら目覚めそうだ。

恐るべきはエルロン家か…

というか、バーサーカーの家名はエルロンだったのか？

いや、バーサーカーのことだ。どこかで覚えたとか言いそうだ。

!？…まさか、節子おばさんの家名がエルロン!？

……今は関係ないな。

「何だその技は…相変わらずの君の不条理さには冷や汗が止まらないよ」

「あはは、誉め言葉として受け取っておくよ。

つつか頭が痛え…この技は封印だな」

自分も食らってしまったようだ…微妙にふらついている。

あと、離れたところにいるイリヤがきゅっつと目を回しているのだから……いいのか？

「さて次だ…！」

自滅攻撃から持ち直したコウジユはフライパンとお玉を直し、次をだす。

「来いよロリポップ！」

その手に出てきたのは、巨大でカラフルな棒付き飴。私の解析ではなぜかアレは斧と出ている。

しかも、あれも宝具だと……。

この子は一体いくつの宝具を持っているんだ？

「よいしょ！アング・ジャブロッガ…！」

斧（飴）を肩に担いで力を溜め、飛び上がり振り下ろしてきた。

「隙だらけなんだが？」

このダメージのある身体でも、楽に避けることができる。念のため、大きめに距離をとる。

ドッ、グアアアアン…！！！！！！

振り下ろした斧（飴）が地面に振り下ろされた瞬間地面が爆発す

る。

「ぐうあ!？」

吹き飛ばされてしまいつつも何とか立て直す。
今の技の本質はこちらか!？

「厄介な技だ。最初のゆっくりとした動作も油断を誘うための罠と
いうことか」

「え?... まあ、そんなところ...。
つて、うわ!？、べとべとするこれ!! やっぱなし!
戻れ!!」

顔を背けながら私に向かって返答したと思ったら、次の瞬間にはバ
ーサーカーは飴を直していた。

あれか? たまたまか?

真剣に考えていた自分が恥ずかしい.....。

「さっきから君は何をしたいんだ.....」

自分の口元がヒクついているのが分かる。

全てを投げ出して旅に出たくなる衝動が生まれている私は別におか
しくないはずだ。

今の私は肉体的にも、精神的にもボロボロだ。

これを狙ってやっているのなら称賛に値するよ。

どうせ、これもたまたまとかそんな程度の物なのだろうがな！！

「いや、あの、普段できないことをやってみようかと…ね？」

「何故に疑問形だ」

「……」

また顔を背けるバーサーカー。

「でも、これで終わりにしとくよ。

さつきからずっと戦ってたからね。後ほんのちょっとでたまりそうだしね」

「何をするのかは知らないが、私の身体もそろそろ限界のようだね。最後の1撃を持って相對するでしょう」

正直に言おう。私のライフはもうゼロだ。

何とか持っているのは、このままやられるのはシヤクだという思いと、サーヴァントとしての使命を果たすためだ。

だんだん前者の方が大きくなってきているが……。

それにしても、バーサーカーの雰囲気はどこが変わってきている。

まさしくそれは狂戦士のものだ。それも、獣のような……。

溜まりそうとか言っていたが…なんだ…？

いや、関係ないな。

元よりこの身は勝つ事を最優先事項とはしていない。
ただ全力を持って時間を稼ぐ。

「さて、バーサーカー。いやコウジユよ。」

ねえ……武器の貯蔵は十分か？」

Side out

side: コウジ

「先手必勝といかせてもらおう！
かわせるか？行け！！」

そうアーチャーが言った瞬間、辺りに刺さっていた剣達が一斉に宙に浮かび、俺に向かって飛んでくる。

ズダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ
ダダダン！！！！！！！

「これなら少しはダメージが通った……か……？
反射的に動いた所でこの量だ。当たるはず……」

「ああ、当たってるよ。全部、ぐフツ…」

痛いイタイいたい……。――

頭がおかしくなりそうだ。

初めての死の程の痛みが、俺の中を駆け巡る。

テンプレものでよく不老不死になる奴がいるが、最初はみんなこんなものなんだろうか？

自分が自分であることをやめなくなるこの感覚を——この儀式を通過するのだろうか？

実を言うと、さっきの剣軍を防御することはできた。たぶん……いや、確実に……。

けど、俺も不老不死になったそうだし、1度は死んでおいた方がいざという時に良いかなと思った次第です。

そんでもって学ぶ為には必要だったもんでね？
いわば実験ですたい。

それにしても、うあゝ、ウニになった気分ってのはこういうものなのか。

メダカ箱の超絶生徒会長の元に居るツンデレ気味な庶務（男）——
まあ善吉君のことなんだけど——の気持ちが分かったよ。

こっちの方がエグイけどね。刺さって無いとこ探すほうが難しいぜよ。

そうこうしている間に、身体が光に包まれ、剣もなくなり身体が元の状態に戻る。

なぜか、ポッケがいつそう輝いてるから、スケープドールがオート

発動したんかね？

そういや、神様は何でスケープドールはくれたのに、ムーンアトマ
イザーはくれなかったんだろ？

何か理由があったのかな？

それ以前にスケープドールがあつたら、不老不死いらんような

……

ま、いつか…。

「ふい、痛かった。痛いのはもう勘弁願いたいぜ」

「そんな気はしていたが、やはりか。

私が知っているバーサーカー、ヘラクレスの場合は12回殺す必要
があつたが君は何回殺せばいい？」

やはりとか言いながら、口元がヒクついているアーチャー。

なんて言うかゴメンねチートで。

でも、痛いのは痛いんだよ？

「そんなあなたに衝撃の事実。あい あむ 不老不死。ついでに復
活アイテムも持ってた」

「このチートめ…。

クク、少しは勝てるかと淡い期待を抱いていたが…、意味はなかつ
たな。

まあ良い、十分に時間は稼げた」

そうこちらに良いつつ、仁王立ちになる。

ホント無駄にかっこいいなあ。

UBWも見れたし、余は満足じゃ。

ってなわけであれだすよ？

あれ？

あれはあれだよ。俺がの現在の種族の奥義。

実はね、キュピイーン！！と来たんだよね。

色々やっている内に、身体の中に熱いものが溜まっていくというか、火照っていくというか、まあそんな感覚があったんだよ。そしていま、ニュータイプばりに何か電気のようなものが身体に走った。

これはあれだ。ビーストの固有スキルたる獣化。

マゾブラストならぬナノブラストゲージが溜まったようです。

来た！来たよ！！

最高にハイってやつだぜ！！

そんなわけで――

「んじゃ、まあ、良いものを見せてもらったし、こっちもさっき言っていたものが丁度たまったから、とっておきを見せるよ。」

はああああー！！！！！！

再び、俺の身体は光に包まれる。

力の本流が俺を駆け巡り、獣しての何かを体の隅々まで伝えていく。

そして光が止むと、俺の身体はより獣に近い獣人、蒼き猫になっている。

他の姿にもなれるはずだが、自分でゲームで使ってたKoujuの設定がこの姿だったから、蒼猫なんだろう。

補足だが、それぞれの獣になるためには設定でバッジというものを付ける必要がある。

バッジにはそれぞれ意味があり、蒼猫になるためのブラストバッジの意味は『ブレンデ・ヴァル無敵』、文字通り一定時間無敵状態で敵の攻撃をガン無視できる。他には『疾風』、『衝撃』とかある。

そのうち使つかないかな？
狐にはなりたくないな…。

おっとそれより――

『さて、アーチャーいっぺん死んでみようか？』

「それが、君がバーサーカーのクラスたりえる力か…」

『その一端だね』

ナノブラスト
獣化を使っている時は身長が2m近くあるので、アーチャーを下に見ながら言う。

そろそろ時間だ。

『アーチャー、悪いけどこの姿は時間制限があるんで決めさせてもらうよ。』

大丈夫、痛みが無いよう一瞬にしてあげるよ。さっき実感したから、

特別サービス』

「ふ、さらばだ」

「うつん、またね？」

腕を振り上げ、思いっきりアーチャーに落とす。

「それはどぅ・・・？」

どぐちゃっ！！

あれ、今アーチャー何か言おうとしてた？
まあいつか。

どうせ――

s i d e o u t

『stage21:あんりみてっど ぶれいど わーくす...innふえいと』(後

どうだったでしょう？

アーチャーさん壊れるの巻。

いやー、何故こんなことになったんでしょう？(笑)

でもまあ多分、しばらくはこんな感じというか、扱いになるでしょう。

では、今回はこのあたりで…。

今回たてたフラグは次でネタばらしをしようと思っております。

感想お待ちしております。

P.S.

トリップ先でのアイデアという名の妄想が色々と溢れて悩み中です
ww

H.O.T.Dのフラグ立てましたけど、H×Hとか、ランスとか
に行かせてみたらどうなるんでしょうね。

『stage22：セイバー戦…の一個前…inふえいと』（前書き）

いつも通りグダグダですねえ……

来週月曜日から2カ月研修に行くので、更新を今の内にしたいんですが、なかなか進まないし、構成がぐちゃぐちゃ…orz

えっと、そんな感じですがよろしくお願いします。

ではどつぞ。

『Stage22：セイバー戦…の一個前…innふえいと』

side：コウジユ

ふう…アーチャー戦終了っす。

アーチャーの固有結界が溶けていく。

同時に、元のアインツベルン城の景色に戻っていく。

アーチャーの身体は何故かまだメメタアツ！！な感じだ。あえて言うなら、モザイクが必要で18禁（グロ的な意味で）な状態だな。

あれ、何か遅いな。

まあいつか。

俺は、今は蒼猫化の変身時間はゲーム設定通り30秒だったみたいで、元の姿に戻っている。変な所でゲームに準じてるんだよね…。

345

あ、そっぴやイリヤ忘れてた。

辺りを見ると、イリヤが目を回して倒れてる。

誰がやった！？

ハイ、俺ですね。

またお仕置きかな…。

「う、ううん…」

「あ、起きた？」

「コウ…ジュ…？」

「ごめんなさい！！」

すかさずジャンピング土下座をする。

何度目かも分からない位にしている気がするよ。

「猫臭い…」

「ふえ？」

猫…ああ、さつき獣化してたから…

って、イリヤが気絶してた理由聞かないの？」

「気絶してた理由……？」

あれ、そういえば何でだろ？何でなのコウジュ？」

墓穴ったああー！！？

どうする！？どうするよ！！？

と、とりあえず誤魔化すか。

「いや、あの、まあ戦闘が激しかったし…ね？」

「そっか、でも変ね。私はフライパンとお玉の音でやられた気がするんだけど？」

ものすごいジト目でこちらを見てくる。

「覚えてんのかよ!？」

ジーっ…

「ごめんなさい!！」

「くすくす」

こらえきれないという風に微笑んでいるイリヤがそこに居た。

「弄ばれた!？」

「ホント面白いわね、コウジュは。からかい甲斐があるわ」

「怒って…ない…?」

「ええ。

だって言っても意味はないと理解したもの」

「それはそれで悲しいっす」

「じゃあ、罰が欲しいの?」

「そんなことないです!！」とりあえずごめんなさい!！」ちゃんと気をつけます!！」

「だからもう良いって言ってるでしょ?」

やた、神様イリヤ様ありがとう!！」

「それで、アーチャーは？勝ったの？」

イリヤに言われて思い出した。
まだ、復活してないのかね？

パアア！

そしたら丁度アーチャーが復活した。
わゝ御都合主義。

いやいや、そんな場合じゃなかったな。

「イリヤ立てる？」

「ええ、無事よ」

見た感じも傷とかはなさそうだな。

二人してアーチャーが復活した方に向かう。

って、あ・・・

「コウジユ…また…？」

「ぽいつす…。やつちやつたみたい……」

まあね、そんな気はしてなかったって言うたら嘘だけどさ。
アチャ男さんが、アチャ男さんが……！！

「小さいわね」

「小さいね」

シヨット…ゲフンゲフン…!!…デフォ化してしまった!!…
あくまでもこれはデフォだ。そこが大事。

「ううん…私は…バーサーカーに負けた筈…」

件のアーチャーが目を覚まし、ゆっくりと起き上がる。

「ん?…バーサーカーに…イリヤ…?」

何故私は…」

「アーチャー、それには色々と訳があるんだよ…。
えと、お、落ち着いて聞いてくれ」

「いや、君が落ち着きたまえ」

「お、おう。スーハー……。

おっけー。大丈夫」

「ふむ、では何を言いたかったのか言ってくれないか?
私が生きている理由もだ」

「その、なんだ、まずは…だな。俺が言いたかったのは…」

「それなら簡単よ、アーチャー。
立って自分をよく見たら良いの」

俺がまごまごしている間にイリヤがアーチャーにニヤニヤしながら
言った。

「まったく何がどうなっ t……」

そして、イリヤに言われるままに自身を確認し、当然固まるアーチャー！。

しかしすぐに再起動し…。

「なんじゃこりゃあ!？」

太陽に吼○ろ!？

いやいや、そこは伝家の宝刀「なんでさ」だろ？

声も子供っぽくなってるからワイルド感はないけど…。

つてか、キャラ壊れてますよアーチャーさん。

あれ？ほとんど俺の所為な気もするけど、気のせいだよな。うん。

「えらく可愛くなったわね。アーチャー君」

そんなアーチャーにイリヤはとどめ…っっていうか滅びの呪文？を唱えた。

「……orz」

痛恨の一撃www

うわ、見てられない。

どうしよう。俺がミスったからこうなった訳だけど、どうやって誤魔化そう。

ライダーの時みたいにならないように頑張ってイメージを加えた筈なんだけど……。

いや、原因究明は後だ。
それより、どう誤魔化すk…

「あ、ちなみにそんなふうになってる原因は全てコウジユだから」

「…何？」

イリヤめ、チクリやがった！？
うう、鬼！悪魔！！

思わず俺がイリヤを睨みつけると、またもニヤニヤしながらこちらを見てくる。

いじめっ子だ！いじめっ子がここに居るよ！！

ひょっとしてさっきのをまだ根に持つてるんツじゃないだろうな！？

「バーサーカー、こういうことかね？説明を願いたいのだが？」

うわ、戦闘中とは違う意味で口元がヒクついているアーチャー。
怖くはないけど、なんか怖い…。

何言ってるんだ俺！？

それだけテンパってるのか！？

「えっと、とりあえず俺のことはコウジユで良いよ。
バーサーカーって呼ばれると違和感あるし。

それから、今の状況なんだけど…あのさ、さっき俺が戦闘中に心臓の所にカード置いたの覚えてる？すぐに消えた奴」

「覚えている。待てよ…。私はあれに似たのをどこかで…」

「うん、見たことあるはずだよ。士郎が1回目に死んだ時に。学校
のときだね」

「!？」

そうか、あれは君が…。

しかし何故それを私に使う必要があるのかね？」

「それが重要な点だね。

アーチャーはさ、エミヤシロウなわけだけど、この聖杯戦争どうい
う結末になるか覚えてる？」

「結末か…。

衛宮士郎、セイバーの主従が勝ち残り、第四次聖杯戦争の業である
言峰綺礼とギルガメッシュを下し聖杯を砕いて、セイバーと黄金の
決別。

これが私が覚えているこの聖杯戦争の終わりだ」

「じゃあさ、イリヤの最後は分かるよね。

俺はそれを防ぎたい」

「……。

確かにイリヤは器にされる。君がそれを防ぎたいのも分かる。

しかし、それが私にどう関わるのかが分からん」

「それは…」

ちよつと言いくい。

「それはねこの子がギルガメッシュに勝てない可能性があるからよ」

またしてもイリヤのフォローが入る。

「いや、それはないだろう。」

あれほどの力や宝具を持っておいて…」

「言い方が悪かったわね。」

この子の場合勝つことは可能よ確かに。負けることも確実にないでしょうね。

でも…」

「でも…？」

「コウジユがギルガメッシュと戦うと町ごと全部吹っ飛ばす可能性があるのでよ」

「は…？」

えっと、つまりどういうことかね…」

そんな反応になるのも分かるよ。

「アーチャーが俺と戦ってる時にさ、違和感感じなかった？」

「ふむ、確かに感じたな。」

動き方に統一性が無いと言った感じでだが…」

「そうそう、それぞれ。」

実を言つと。俺に出来るのは力押しだけなんよ。

俺も最初は自分のちからでちゃちゃっと終わらせようと思ったこともありました。だがしかし、不測の事態に陥った時に俺は冷静に対

処できるのかと考えてみた。そして、イリヤにも聞いてみた。

結果は御想像にお任せします…orz」

「つまりコウジユは

手加減がものすつつつごく、下手なの。

だから、とっさの時に力技で全部吹き飛ばしちゃう可能性があるのよ」

「だから、俺がギルガメッシュと戦うの危険なので代わりに戦ってくれる人がいるわけなんすよ」

「そ、そうだな。そんなことになる可能性があるのなら私が戦おう。」

なんか視界が霞んできた気がする。おかしいな、目から汗が…。でもまあ、仲間にはなってくれそうだね。

「む…、ちよつと待て。

今の説明のどこかに、私がこの姿になる必要性があったか？」

俺は思わず明後日の方向を見る。

「何故、目をそらす？」

「き、記憶にございません…」

「訳がわからんことを言うな。

というか、それはどこの政治家だ」

「ううゝ、ごめんなさい。失敗したんです。」

俺が持つてる死の淵から生還させるアイテム、スケープドールっていうんだけど、これをそのまま使っても聖杯との繋がりを切れなかったから弄って…。

成功したと思っただけだなあ…」

「私は実験体か何かか？」

「That's right——嘘ですごめんなさい！！」

ギロツと俺を射殺さんばかりに睨んでくる。

今ではほとんど同じ身長なのに、目が前と同じように鋭くて怖いよ。

「はあ、もう良い。」

この身体もマイナスばかりではなさそうだ。
納得はできないが理解しよう」

アーチャーは、いきなりため息をつきながらそんなことを言った。
あ、結構優しいかも…。

そして目をつむり、トレース・オンとおなじみの言葉を言った。

「魔力量、魔術回路共に異常はない。筋力等の基本ステータスも変わってないのか…ならば身体が縮んで問題となりそうなのはリーチ面くらいか。凜とのパスは…やはり完全に切れているな。」

だが、受肉している分身体維持に魔力は不要となったか…」

「ど、どうかな？」

どうしようもなくもってしまっ。

「君がやはりチートだということはよく分かった。

まあとりあえずは協力しよう。

だから、泣きそうな顔は止めてくれかね？

私がいじめてるような気になる」

「し、してねえよ！」

やっぱり失礼な奴だ。

さっきから俺の視界を霞ませているのは汗だ。そうじゃないと俺の何かが崩れる。

「そういえば、一ついいかね？」

「何？」

「凜のことなんだが、連絡を取ると今後の作戦に支障をきたすのかな？」

元マスターなんでね。構わないのならいくつか言っておきたい」

「そうだねえ…ま、いんじゃない？」

あ、でもうつかりスキルが…。」

「ねえ、こんな所で立ったままっていうのもなんだしマイルームに行かない？」

イリヤがつまらなそうに話を切った。
だけど確かにそうだな。

長い話になりそうだし。

「それもそだね。アーチャー、場所変えよっか」

「分かった」

いつものごとく、その辺のドアから力を使ってマイルームに移動してきた。

しかし、中に入ると面白い光景があったので入り口で止まってしまった。

その止まってしまった原因はまだこちらには気づいていないようだ。

改めて現状を確認する。

「さーくーら」

『さーくーら』

「ちくら」

『ちくら』

えっとつまり、ライダーさんが可愛いことをしているわけだ。
チーズ君人形（マイルームグッズの一つ。ピザ好きな王の力をくれる魔女さんがたまに抱えてるやつ）をその手に抱えて、モトウブパバガイ（オウムみたいに言葉を覚える鳥。マイルームグッズの一つ）に向かって自分の主の名前を覚えさせて嬉しそうに笑っている。

「何…してんの…？」

見ての通りの状況なのだが、聞かずにはいらなかった。

その瞬間ライダーがこちらにバツと顔（ちなみにめがね）を向け、顔を青くしたと思ったら、すぐに顔を真っ赤に染めるといふ器用な事をしだした。

「お、おかえりなさい。いつ…お帰りに…？」

「たった今…なんだけど…」

「見ましたか？…絶対に見ましたよね？どうなんですか？」

「何も見てん「ばつちり見たわ」…イリヤさん！？」

見てしまったがライダーのためにも見ていないと言おうとしたのにイリヤがすっぱりと言ってしまった。

「~~~~！！」

イリヤはライダーにも滅びの呪文を唱えた。

「!!!／／／」

ライダーは耐えられなくなったようで、チーズ君は抱えたままベッドの方に走っていき布団にもぐった。

「今のは…、ライダーか？」

彼女も私のように捕獲されたわけか」

後ろから最後に入ってきたアーチャーがちよろつと失礼な事を言う。

「とりあえず、あっちに行こうか。どうせならライダーにも聞いてもらわないとだから」

俺は入り口からライダーが向かったベッドがある方に行く。

ゲーム内では無いが、そこそこ立派な椅子とか机をアインツベルン城から持ってきてきてあるのでそこに座る。

「さてさっきの続きなんだけど…」

「まず凜のことよね？別に前にコウジユから聞いた作戦内容だと影響はないんじゃないかしら」

「うーん、良いっちゃ良いんだけど、でも俺と戦っても生き残ることはこのうなんていう心の余裕を持たせたくはないんだよね。」

だから、セイバー戦の後でつてことにしよう。

ついでに、その後のことも考えて、アーチャーは力がほとんど使えないということにしよう」

「ふむ、連絡を取れるなら少しくらい遅れてもかまわんが、今後の事を考えてのくだりは何のためだ？」

うあゝ！もうそっちも言わないといけなのか…。

やっぱ説明めんどくさいな。

いや、するけどもさ。

「それは、士郎の成長をこの戦争中においてほしいからだよ。

確かに、俺はアカシックレコードに接続できるけど、それは限定的でさ。

正直この戦争以降のことはほとんど知らない。

でも、一つ確実に分かっているのが衛宮士郎の固有結界が異端視される可能性が高いということ」

もちろんこれはアカシックレコードから知ったものではなく、いわゆる原作知識の一部だ。

確か、脳と魔術回路を引っ張り出されて、そのまま考えることもできずに無理矢理生かされるんだよね？

するのは…魔術協会だっけ？あんま覚えてないけど…。

確認すればいいじゃんアカシックレコードがあるんだからって思うだろ？

でもな、アカシックレコードを何回使っても何故か中途半端にしか使えないんだよ。そして疲れだけ残る。精神的に…。

クーリングオフが利くのならしたいよ。不良品渡されたんじゃないだろうかと思う最近だ。

「確かに固有結界は異端視されやすい、実際私は封印指定候補となっていた」

「封印指定ってあれよね？」

継承等が不可能と判断されたために保護という名目の元に幽閉されたり、奪われるという」

「その通り。私の無限の剣製も私個人の物である以上分かっていた事ではあるがね」
アンリミテッド・ブレイド・ワークス

「それもあるから俺は士郎が力をつける機会を潰したくない。若干八百長が入るのは仕方ないだ。

記憶やらなんやら全部消して一般人になってもらうことも考えたけど、士郎は絶対厄介事に首を突っ込んでいくから、力が必要になる」

「私個人としては衛宮士郎を殺したいわけなんだが？そもそも、衛宮士郎という存在が無ければあれこれ考える必要もなくなる」

「・・・」

「なにかね？」

「ひねくれもの」

イリヤとかぶってしまった。まあ、ここに凜とかがいても同じことになると思うが。

「私は士郎がどうなっていくのかまで聞いてないけど、その考え方がひねくれたものなのは分かるわ」

「ある程度知っている俺もやっぱりひねくれていると思うよ？」

分らないでもないってのも内心あるけどさ。まあその辺はアーチャー…というか衛宮士郎の命題だから結局は自分で答えを出して欲しいし、そのために受肉してもらったってのもあるわけで……

おっと、今はそれは置いて。いて。

でもそれ以前にアーチャがこの時代の士郎を殺してもアーチャーと言う存在がなかったことにはならないと思うけどな」

「それは何故かね？」

「俺がいるじゃん」

「む…」

今気づいたようだ。

すでにアーチャーが士郎として過ごした時代とは乖離しているんだ。横のつながり（並行世界としての）はあっても縦の（時間軸的な）繋がりはない。

ひょっとして、あんたもうっかかりか…。伝染病なのかな…？

「せっかく受肉したんだからさ、後ろ向きな方法じゃなくて前向きな方法を探してくれよ？」

「それもあなたの思い描くハッピーエンドってなわけ？」

「直接的なものじゃないけどさ、余計なお世話かもしれないけど選択肢くらいはあっても良いじゃん？」

仲間で事に当たるとかさ。
今の内から士郎を魔改造するとか」

俺は他の二次小説オリ主みたいに器用なこととはできないし、知識も微妙なんでこんな程度しか思いつかなかった。
良い案があつたら誰かに教えてもらいたい位だね。

「ふん、たしかに余計なおせっかいだな」

そう言いつつもどこか嬉しそうなアーチャー。

「まあ、グダグダになったけど、そんなわけで俺には（目指してるハッピーエンドの為には）アーチャーが必要なんだよ」

「ふふ」

「くくく…」

「…くす」

「な、なんだよ？何でみんな笑ってんだよ。ライダーも布団の中でちやっかり笑ってるしよ」

「いや、何。今の君のセリフだとプロポーズのようだったものでね」

「んな！？／＼／」

「えっと…『俺にはアーチャーが必要なんだ』だっけ？」

イリヤが俺のマネ？をして茶化す。

「う、うるしい！！言葉のあやに決まってる！！」

くそ、噛んじまったじゃねえか／＼

「あゝもう、今は忘れる!!」

とにかく、手伝ってもらえるんだよね?！」

「レディーにさそわれて断るのは野暮というものだ。手伝わせてもらおう」

「このキザ野郎!!／＼」

やっぱりやな奴だ。

でもまあ、仲間が一人増えた。

「それで、これからどう動くのかを教えてくださいませんか?」

「とりあえずは、士郎には勝ち進んでもらって、裏で俺たちがイレギュラーに備える感じかな。

そして最後に全面戦争（笑）をする」

「他のサーヴァントはどうするんだ?」

「もちろん仲間にする。アサシンは微妙だけど…」

「アサシン…佐々木小次郎か。何故微妙と?」

「確かアサs…もう小次郎でいいや、小次郎は肉体が存在しないから俺じゃ無理だ。」

俺のはあくまで“復活”だからな」

ま、今の時点ではだけど（笑）

「それに、強い奴と戦えたらそれだけで満足みたいなこと言ってたんだよ、確か…」

だから、アサシンは保留、キャスター、ランサーはとりあえず接触して交渉かな」

「交渉材料はあるの？」

「キャスターは受肉さえできたら良いし、すぐにも交渉成立するはず。」

ランサーは・・・」

あれ、ランサーも強い奴と戦うのが目的だったわけ…。

じゃあ交渉は難しい？

でも、アニメでランサーの兄貴は槍一本で剣軍を弾いてたし、いてくれると心強いんだよね。

あ、それ以前にマスターが綺礼じゃん。

交渉できるわ…け…

ああ！マスター居るじゃんホントのマスター若干忘れてた。

ランサーのホントのマスター、ダメットさん…じゃないや、バゼットさん。

でもどこに居んの？

いや、それはランサーから聞けばいいか。

「ランサーは何か問題があるの？」

「いや、何でもない。いけると思う」

「……？…なら良いけど」

その後もいくつか話した。大半はセイバー戦の流れについてだが他愛もない話もあって、それなりに充実したものになった。

さて大体は話したかな。

次はお待ちかねのセイバー戦だ。

全てはハッピーエンドの為に、がんばるぜ！！

side out

「小話？」

「なあなあアーチャー」

「何かね？急に改まって」

途中で淹れた紅茶を（淹れたのはアーチャー）カッコよく飲むアーチャーに俺は忘れていた事を言う。

「無限の剣製覚えた」

「ぶふお！！？ごほごほ…そ、それはどういふことかね？」

一気に紅茶を噴き出すアーチャー。

正面に俺が居たけど攻撃認定されたのか障壁で無事でした。そら吹くわな…。

「俺の固有スキルのラーニングだったので、食らった技はオートで覚えていくんだよね。」

そんなわけで御馳走さまでした」

「まさか、あの時避けなかったのは…」

「獣化するためってのもあつたんだけど…正解」

「理不尽だ…orz」

「小話？」

「ねえコウジユ」

「はいはい？」

「私は見てないんだけど、獣化？とか言うのは猫にしか出来ないの？」

「いや、狐もなれるよ。

それがどうしたん？」

「私、猫苦手だから…もうならないでね」

「ほぼ猫なのに！？」

「狐だと2種類しか…」

「なるにしても近づかないでね」

「理不尽だ…orz」

『stage22:セイバー戦…の一個前…inふえいと』（後書き）

どうでしたか？

キャラブレイクはいつも通り（？）ですね。

実は微妙にポンコツなコウジユ。

火力はあるけど、制御がめちゃくちゃ下手なわけですね。

まあ、vsギルガメはやっぱりやりたいのでその辺りは調整しよう
と思います。

では、今日はこの辺りで。

感想やこうした方がいい、こうしてほしい等があればどんどん願
いします。

『stage23：やっときた折り返し地点（前）…いんふえいと』（前書き）

また結構間があいてしまいました……

今回ののは中途半端なので、続きをすぐに、できれば今日明日で書けたらと思っています。

ではどうぞ。

『stage23：やつときた折り返し地点（前）… inふえいと』

side：士郎

アインツベルン城から逃げている途中、前を走っていた凜が急に立ち止まって自分の令呪を見た。

何を、と声をかけようと思った瞬間にはその令呪の存在は消えていた。元々何もなかったように、ほんの少し前まで赤くその存在を示していたものが、無くなってしまった。その役目を失ったのだ。

それが表すことは1つだけ…。

——アーチャーが死んだ。

魔力が回復しておらず、俺に半分担がれたような状態で横を走っていたセイバーもその事に気づく。

俺たちは凜に洞声をかけようか悩んでいると…。

「イリヤスフィールがすぐに追ってくるわ、急ぎましょう…」

「おい…！」

何かを言おうとしたわけではないが、とりあえず声をかけた。

「早く…」

あいつらに殺されるようなことがあったら許さないからね…」

絞り出すような声でそう言った凜。

そんな凜に何を言えば良いのか、未だ分からずに居ると。

隣から自分にかかっていた重さが大きくなる。
横を見ると、限界が来たのかセイバーは気を失っていた。

「セイバー！？」

声をかけると、目をあけて自分は無事だとセイバーは言い張るが、どう見ても限界に近いセイバーの言葉を凜と共に令呪を使うぞと盾にしつつ封殺する。

俺はセイバーを俗に言うお姫様抱っこで抱え、再び走り出した凜を追いかける。

いくらか走り続けると建物が見えてきた。

「廃墟……？」

窓は割れ、壁がめくれてはいたがちよつとしたものだった。

ここが目的だったのか、凜は中に入っていく。
自分も慌てて凜に続く。

やはりというか、中也荒れていた。

「来るときにね、アーチャーが見つけておいたの。
万が一の時の隠れ家にしようってね」

中にあったベッドを整えながら、凜が言ってきた。
そこにセイバーを寝かせる。今は完全に意識が盛ろうとしているのか、呼吸を荒くして、目を瞑っている。

「イリヤスフィールが追ってくるにしてももう少し時間がかかるでしょう。」

探すのに戸惑えば朝方までかかるでしょうね」

遠坂が窓から外を窺いながら、こちらに言ってくる。

その表情はどこか暗いものが立ち込めている。

「遠坂、アーチャーは…」

思わず口に出してしまった。

しまったと思つた瞬間には、俺の言葉に遠坂は一気に暗くなる。

「足止めだけで良いつて言つたのにさ…。」

あいつ、最後までキザだったな…」

「……」

「無駄になんかしない。」

アーチャーを失つた以上バーサーカーはここで倒す。

悩んでる暇があつたら行動するのが私の信条。

あなたにも覚悟を決めてもらうからね？」

遠坂は気合を入れるように、掌を反対の拳で撃つた。

「覚悟？」

「いくらあのバーサーカーが規格外だからってアーチャーが全力で
でいったのなら何かしらの傷を負っているはず…。
私だつてとおきの宝石は全部持ってきてるし」

確か…遠坂は宝石魔術を使っつて言っただからそれか。

魔力をずっと貯め込んできたとも言っただな。

「だから、セイバーさえ回復できれば…」

セイバーに目を向ける。

セイバーが目をあけてこちらを見ていた。

だが、まだまだ自ら動けすらできないようだ。

「でも回復する方法はどうするんだ？」

「セイバーは単に魔力が切れて弱っているだけ。一定以上の魔力さえ回復できれば以前どおりの能力を発揮してくれるはず」

「回復する方法があるのか!？」

だがちょっと待てよ。

いつだったか教えてもらった魔力を得る方法は人の魂を喰らうこととかい言っただけどまさか……。

「セイバーに衛宮君の魔術回路を移植する」

よかった。そうだな、遠坂がそんなこと言うわけないか…。

よし、移植することでセイバーが回復するなら――

「凜、ちょっと待ってください」

だがセイバーが凜を止めようとする。

「魔術師にとって魔術回路は己の寿命より大切なものです。それに

――」

「そうね、魔術回路を移植させるためには、張り巡らされた神経を引きちぎるの同じことをしないとイケないわ。」

そしてその負担は士郎へ…」

「それはあまりにも酷です」

それでも俺の意思は変わらない。

「やろっ」

「本当にいいの？」

「お前も言つたろ。あいつの為にも俺たちは勝たなきゃいけない」

「いいわ、それなら…」

そう言つて、遠坂がこちらに近づいてきて、俺のかを手で固定して…

「え？んむ！？」

き、きき、キス！？

「うわ！？」

遠坂から慌てて離れる。

「儀式の前のちょっとした下準備よ！

セイバーにも頑張ってもらわないとイケないんだし……」

遠坂が何か言ってるが、耳に入ってこない。
いや、えっと、そんなことよりキス？え？

完全に俺はフリーズしてしまう。

そんな俺は放っておいて遠坂はセイバーに近づき自らは動けないセイバーの服に手を――

「移植の前段階として少しでも接触を多くしないといけないの」

「士郎…凜を…止めてください…」

弱弱しく俺に声をかけてくるセイバーの声で何とか立ち直る。

だが、止めろって言われても……

遠坂はそんな俺たちにお構いなしに続ける。

「何事も儀式の成功率を上げるためよ。

さあ、士郎も」

え？

「お、俺も！？」

ただただ、遠坂はセイバー覆い被さりながら、こちらを見てくる。
その下に居るセイバーと二人合わせて、窓から差し込む月明かりが

二人を照らし幻想的で、俺は頭が真っ白になってしまう。

すると凜がセイバーの上からよけ、俺と代わるよう促す。

おれは導かれるままに、遠坂と代わる。

遠坂は俺達を見ながら、詠唱を始めた。

・ ・ ・

ふと、気づくと俺はひたすら暗闇の中を落ちていた。

そしてすぐに光が見え始める。

光を越えると、そこには広い空間が広がっていた。

ここは、セイバーの中…なのか？

そうか、ここで、よりセイバーの本質に近いここで魔術回路を分け与えれば…。

『GRRRRR…』

どこからか、大きな音が鳴り響く。いや、そんなもんじゃない、これはまるで咆哮…。

『GRRRRUAAAA!!!!!!』

辺りを見回すと、大きな、それこそ山のようなドラゴンがこちらを見ていた。

「っ!？」

意図せず息をのみこむ、鼓動は早打ち、汗が背中を濡らして行く。

な、なんなんだこれ…

だが、そんなことを考える暇を俺にくれなかった。

ドラゴンは翼を広げ、刃のような鋭い牙の隙間から炎の吐息を漏らしながらこちらに向かってきたのだ。

ものすごい音をまき散らしながら、こちらへ突っ込んでくる。

いつの間にか空中に止まるようにして居た俺は、がむしゃらにドラゴンを避ける。

どういう理屈か、俺は空中を滑るように何とかドラゴンを避けた。

しかし――。

『GRUAAA!!!!!!』

ドラゴンはすぐに折り返し、こちらへ再び向かってきた。

「がああああ！！！！」

今度も俺は避けようとしたが間に合わず、片腕を食われてしまった。

言い表しようが無い痛みが身体を駆け巡る。

あまりにもな痛みに、意識が飛びそうになる。

だが、あまりにもな痛みのせいで意識が覚醒する。

そんな俺の中から、ぶちっという音と共に何かが抜けて行った。

同時にセイバーとどこかで強く結びついた感じがする。

そう感じた瞬間俺はセイバーに心の中で呼びかけた。

——シロウ…。

するとセイバーが俺を呼ぶ声が聞こえた気がした。

そうしてやっとな俺の意識は再び飛んだ。

side out

side : コウジユ

オッハー！！

古いと言っな、これはナウなギャングn(ry

こほん、忘れてくれノノ

徹夜明けでちょっとハイになってるみたいだ。

俺たちはマイルームでの話し合いを結局朝まで続けた。

ライダーは途中で寝てたが……中身まで幼女化してないか、あれ…。

ま、いつか。

とりあえず――。

「さあ、シマっていつ」

「……」

「やめて!?!、そんな目で見ないで!?!」

「まったく…真剣にはできないのかしら…」

「無理だ。これが俺クオリティ」

いつも通りになりつつあるやり取りをイリヤとしながら朝の森を歩いている。

ちなみにアーチャーとライダーはもちろんのことお留守番。
セイバー戦をしに例の廃墟に行く所だからな。

「それで…ホントに良いの？」

「俺は別に構わないよ。望みは自分で叶える。」

「ってか、俺が言うのもなんだけどイリヤこそ良いのか？」

「別に構わないわ。私の願いはあなたが叶えてくれるんでしょ？」

「ん、まあ…」

「だから良いの」

何の話してるかって？

にひひ、内緒だぜ！

ああ、ごめんなさい！

どこかにいかないで、いかないで！！

うんとだな…。

詳しく言うとネタばれになるんで言えないが、セイバー戦についての話に関わってくることだ。うん。

あれ、これってすでにネタばれ？

「——ねえってば！聞いている！？」

「え、うん、聞いている聞いている」

聞こえてなかったがいつのまにかイリヤが話しかけてくれてたよう
だ。

「聞いてなかったでしょ…
はあ…だから、死なないとはいえ痛いんでしょう？大丈夫なの？って
きいてるのよ」

「…デレ期？」

「え？デレ期って何？」

「いやいやこつちの話。

うんと、大丈夫だとは思うよ？昨日一回死んだけど、心が壊れると
かはなさそうだし」

「そう」

顔を少し背けながら言うイリヤ。

なんだかんだ言いながらも色々心配してくれるのは嬉しいね。
それだけで後百年は戦えるwww

そうこうしている内に広場のようになっている所に出た。そしてそ
こには、弓を構えた士郎、回復したセイバー、そして凜が居る。

「やほ、皆さんごきげんうるわしゅう」

「全然うるわしくないわね。気分は最悪よ」

「つれないな」

真剣な面持ちの相手方なぞほつといて、俺はにししと笑いながら会話をする。

「でもまあ、当然か。かたき討ちなわけだもんな」

「そうよ、だから今日は負けてもらうわ」

3人は臨戦体勢に入る。

「悪いけど、そう簡単にはやられないぜ」

場の空気が一気に張り詰める。

「まあ、話しはこんなものにしとくか」

イリヤが後ろに下がる。

逆に俺は前に出る。

「ではでは、零崎をはじめる」

> s i d e o u t <

『Stage23:やつときた折り返し地点(前) … inふえいと』(後書き)

どうですか？

ホントに中途半端なとこで……

しかし、バトルに入ってから長くなると思うのでここで切らせて頂きました。

今回はバトル、セイバー戦。はたしてどうなることやら……

あ、セイバー戦でこの武器使ってほしいとかこのネタ技をなどがあればお願いします。

できる限りご要望にお答えしたいと思いますので…

では、このあたりで失礼します。

すいません>（――）<

予告よりこんなにも遅れてしまいました。
しかも、中身もグダついてるかも…。

明日っていつか、今日？から実習の為、更新が更に不定期で亀になると思います。

そして今回、効果音？っていうんですかね。それを抜きで書いてみました。無謀な挑戦でしたね。

まあ、そんなこんなでできた作品ですが、どうぞ。

『stage24：やつときた折り返し地点（後）…innふえいと』

>side：コウジユ<

「ではでは、零崎をはじめる」

言ってみたかつたんだよねえ。

詳しくはないんだけど好きなセリフなもんで…言っちゃった。

「「「零崎？」「」」

士郎達がへんにシンクロしながら首をかしげる。

ああ分からんよな。

「えっと、じゃあ

コホン……」。

殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

決まった！

「はあ…コウジユ、それって言わないとダメなの？」

「様式美だからな……」

こついつ時はやっぱり言わないと…ねえ？

「「「……」「」」

3人の方を改めてみると固まっている。

「な、なんだよ…?」

「せ、セイバー、士郎、相手のペースに乗っちゃダメよ。
これはきつとあの子の作戦よ。こちらのペースを崩してその隙に…
うん、たぶん、きつとそうだから」

「お、おう」

「は、はい…」

フォロー!?フォローされた!!?

うゝ!!!せつかく格好よく決めようと思ったのになんだよこの仕打ちは!!!

決めちゃダメなのか!?シリアス禁止か!?

だったら期待に答えてやろうじゃねえか!!!!!

「来い!!エレクデイストーション!!!!」

あえてこれで斬ってやる!!墓にはこう書け!死因はギターですつてな!!!!!」

ギター片手に飛びかかる。

そう、俺が呼び出したのはまごう事なきエレキギターだ。

こいつは見た目に反して片手剣セイバーのでは高ランクのSランクで、割りと強い部類。エフェクトとして何故か電気を纏っていて、ギターサ

ウンドが鳴る。

汚れた大人にや分からない、アツいエレキがほとばしるんだそうだ
俺はそれを3人がいる間の地面に叩きつける。ギターの音？が辺り
に鳴り響く。正直うっさい。

いつものごとくクレーターを作る。

わりと分かりやすい攻撃だったんで全員が避けた。

それぞれが後ろに下がる。

しかし、さすがは英雄といったところかセイバーがすぐに反撃する
ため斬りかかってきた。

「はあっ!!」

「おわつと!!」

寸での所で横に避ける。

回復してるからかこの間より早い。チョイやばげだね。

「セイバーさん復活かい？どうやって復活したのやら？」

あ、そういえばさ、何か三人の臭いが混ざってるような…。」

「…//」

「あ、真っ赤になった。何で真っ赤になってるのかにやあ？WWW」

「……!!!!//」

「のわああ!!?」

セイバーが顔を真つ赤にしながら、見えない剣でラッシュラッシュ。

何があつたか知ってるからからかつてみたんだけど…セイバーって面白www（某死神風）

「まあ、そのおかげ…で!こうなつたわけだ、おわ!?...けども…」

「ぶつぶつ言っていないでさっさと斬られなさい!!/」

まだ少し顔が赤いセイバー。

はっはっは、今のセイバーさんにこそバーサーカのクラスはお似合いだぜ。

「はあ!!やああ!!…この!!」

すみません。こんなどうでも良いこと考えてますが正直ぎりぎりです。

横薙ぎ、逆袈裟、突き…反撃の暇ないっす。

ひよひよいと何とか避けてるけど、ぎりぎり…によわ!?かすつた!!…今かすつたよ!!…?

オート防御突きぬけてるよこれ!?

いかん、これは眠れる獅子を起こしてしまったかな?実際、がおー言ってるし…。

セイバーが大振りで剣を振り下ろす。
それをバックステップで大きめに下がり距離を取る。

「あ、最初の一撃以外これ使ってねえ…」

自分の掌にあるギターを見る。

続いて、セイバーを見る。えゝ目のハイライトが消えていますね。
どこの難見沢！？

凜と士郎が若干引いてますよ？

「…！（ギョロ！）」

こっわ、何あれ、黒化してるわけじゃないのにオーラが黒いんで怖いなのって…。

あ、士郎がセイバーに駆け寄った。

おお、戻ってきてる。良いぞ士郎。さすが主人公。

凜も駆け寄って…作戦がどうか言ってる。

そしてセイバーが、あって顔をしている。

凜頑張れ。マジ頑張れ。

さてと、今の内にギターの活用法を考えるか。

俺の歌を聞けー！でもやってみるか？いや、歌ってるうちにズバツとやられるな。却下。

フリ…フリ…？

いや、アレただ殴るだけじゃん。却下。

うーんと、あ、音のエフェクトあるし丁度いい技あるじゃん。
振動＋剣技で脳内検索（オタ的知識）に引っ掛かったのが一件。

イメージイメージ……よし！！
この間5秒。

思い浮かべるのは某マフィアマンガのサメの人が使ってた技。

「鯨衝撃！！（あたっこー・でい・すくあーろ）！！」

渾身の力を込めてギターを振り下ろす。
平仮名表記は仕様です！！

「く、二人とも離れてください！！」

「はあっ！！」

俺のギターとセイバーの剣がかち合い、辺りに金属が撃ち合ったよ
うな甲高い音が鳴り響く。

「！？…動け…ない？」

「おっし、成功ー！！
アタックコ・デイ・スクアール

今の技は鯨衝撃っていう技で、渾身の一振りを衝撃波、振動として
相手の神経に伝播させて麻痺させるっていうものなわけよ。だから
ちよつとの間動けなくなる」

「確かに…しかし、何故とどめを刺さないのですか？」

「いや、ただ仕切りなおそうかと思ったわけですよ。俺のせいです。俺が用意してた作戦とか水の泡っばいし」

「ふん、お情けのつもり？」

俺の言葉に凜が突っかかってきた。

「えと、違うんだけど……もういいやそれで、お情けお情け」

「ホントに何のつもり？」

「いいじゃんいいじゃん。あ、そうだ。お情けついでに良いことを教え上げるよ。」

俺への勝利条件。

本当なら俺は不老不死だし、自動蘇生アイテムも持ってるから敗北は確実に無いんだよ」

「そんなこと信じられるわけ……!？」

まさか、あの時の衛宮くんのカードって……」

「カード……カード!？」

凜と士郎が何か思い出したように驚愕する。

「そうそう大正解。よく気づいたねえ。」

ま、そんなわけで本当ならそっちの勝ちはないんだけど、出血大サ
ービス」

俺は仰々しく指を一本立てる。
若干トモダチっぽくなっちった。

「1回。たった1回俺を殺したらそつちの勝ち。

俺は元々の世界（ゲームのKoujuの話だけ）で、蘇生アイテムで1回、自身の命で1回死んだら終わりだったんだよ。だからそれにならうことにした。

そんで、昨日アーチャーが文字通り命を掛けて俺を一回殺したから後一回」

「そんなことをして…あなたに得があるとは思えないのですが？」

ようやく動けるようになったのか、見えない剣を杖にしながら身体を立て直してるセイバーが疑問を口にする。

「そうさねえ、勝ったら教えてあげるよ」

自分で言ってると思うけど今の俺って嫌な奴だね。

「さあ、仕切り直そうか。

俺のオート防御を抜けてさらに俺を殺せるだけの攻撃をしてみな」

俺はギターを直し、新たに武器を出す。

「来いライトニングエスパーダ…」

呼び出したのは光り輝く幅広の片刃の大剣。

この武器も『真に強き者が手にした時黄金色に輝く』とか、『手にした者の力は枯れることなく泉のように溢れ、輝き続ける』といった説明がゲーム内で書いてはいるが今回は概念付加としては使わず

におこうと思ってる。

と言っても、この武器自体の攻撃力が半端無いんだけどね。

「後悔しても…知りませんよ？」

「覚悟しなさい」

セイバー、凜が今までの事はなかったことにするように真剣になっている。

士郎？後ろで何かうるたえてるよ。

そんなわけで、今からはシリアス戦闘と行きましようか。

side out

side：士郎

あの時助けてくれたのはコウジユだったのか…。

確かにカードもあの時から無い。あれ、ならあの宝石は？いや、それは今は置いておこう。なんでわざわざ生かした相手を今殺すのかとかいろいろ疑問はある。けど、今は戦闘に集中しないといけない。

さっきまでは、いつものごとく？コウジユのおかげで場の緊迫感が薄かった。

けど、コウジユが仕切りのおすと言ってからはまさしく戦闘の場となっている。

あの子がさっき出した、ライトニングエスパーダと呼ばれていた大

剣もこの場の圧力を増す原因だ。

コウジュ自身を覆い隠しそんな幅の輝くオーラを纏ったあの刃からはどれだけの破壊力が生まれるのか…化するだけで、致命傷となるのは想像に難くない。

「行くぜ？はああ！！」

コウジュは大剣を持ったまま飛び上がり、回転しながらセイバーに斬りかかる。

「っ！！」

セイバーはバックステップで避け、着地をして隙の出来たコウジュに反撃する。

「せやあ！！」

セイバーが斬りかかる。

コウジュは大剣で防ごうと前に掲げるがその横からセイバーが斬りかかる。

「当たった！？」

しかし、障壁みたいなので弾かれる。

コウジュも一瞬びっくりした顔をしたがまったくダメージは通っていない。

コウジュは再びセイバーに斬りかかる。コウジュはもう防ぐことをせず、連続して切りかかる。

それをセイバーはただ避けるしかなかった。

少しでも気をそらさないと…。

トレース・オン。

自身の胸の内では詠唱し、持っている木の枝を矢に作り替え、放つ！

「おろ？」

しかし、障壁ではじかれる。

くそ、俺には何もできないのか？

セイバーを助けることも、共に戦うことも…。

俺に出来ることは…。

俺に出来ることなど…所詮…。

『お前に出来ることは1つ。その1つを極めてみる。
イメージするのは常に最強の自分だ』

何故か、アーチャーのあの言葉が心の中で強く想起された。

イメージする？

「ぐあー!!」

「セイバー!？」

いつの間にかセイバーが吹き飛ばされている。
ただ飛ばされたただけなようで、すぐに立て直した。

早く何とかしないと…。

武器が欲しい。弓じゃだめだ。剣だ！コウジュを倒せる無敵の剣。

目を瞑りイメージする。

「くっ…」

セイバーの苦しげな声と共に何かが砕ける音がする。けど、今は何故か出来ると思えるこれ（・・・）を優先させる方が勝率は上がるはず。違う、勝利を創るんだ！！

集中しろ！

セイバーを信じて今は集中するんだ！

「引いて！セイバー！！」

遠坂も仕掛けてくれたようだ。

俺では意味が分からないが、遠坂が詠唱らしきものを唱えた後、何かを投げる。

俺は思わず目を開け、確認する。

すると、とっておきと言った宝石を出し惜しみせず使ったのかコウジュにいくつも投げている所だった。

コウジュは全て剣で斬りはらう。

だが、遠坂が使ったのは凍結を目的としたものだったのか、剣から

両腕へと凍っていく。

「やっべ」

「とった!!」

その隙に、遠坂が近づき、ほぼゼロ距離で最後であろう宝石をコウジユに放った。コウジユが凍っていく。

「勝ったのか？」

「ふう」

完全にコウジユの全身が凍った。

遠坂が息を抜く。

案外あつけなk…。

ふと、イリヤに視線を向けた。

ニヤツと笑っているのに気づく。

まさか…。

「遠坂!! 離れろ!!」

だがその瞬間!

「っらああ!!」

コウジユは身体の氷をすべて弾き飛ばし、遠坂の首を捕まえる。

「う…そ…」

「残念だな…。途中までは良かったんだけどな」

遠坂がコウジユの腕から逃れようと暴れる。

「はああ！！」

セイバーも遠坂を助けるためにコウジユに斬りかかる。
だが、先ほどと同じように障壁ではじかれる。

それでも何度もコウジユに斬りかかるが全て弾かれる。

「えい」

凍った大剣をセイバーに投げつけ、セイバーが吹っ飛んだ。
適当な声でもこの威力。本当に理不尽だ。

「遠坂を離せー！！」

「士郎！？」

武器も何も持っていないが、頭が熱くなって、突っ込んでしまった。

「このあんばいなんめ…」

当然のごとく俺はコウジユにいつの間にかその手に戻っていた剣で
吹っ飛ばされる。

「士郎！もうやめてください！無茶だ！！」

セイバーが片膝をつき、俺に制止の声をかけた。
けど、俺は…。

「それでも…俺は…」

「く、なら…」

その瞬間、俺の背後で風が爆発した。

まさか！？

そう思つて後ろを向くと、やはり、セイバーが宝具を解放しようとしていた。

「止める！セイバー！！」

確かにセイバーは回復したが、まだ前回じゃない、俺とのパスが繋がって回復している途中だ。

そんな状態で宝具を解放なんてしたら、また魔力が枯渇して、倒れて、下手をすれば消えてしまう。

「セイバー！！」

呼びかけるが答えてくれない。ダメだ！こんなのはだめだ！！

そう思つた瞬間俺の左腕の刻印、令呪が発動する。

「な…！？」

風は吹き止み、俺の令呪は後一つになった。

セイバーは発動を途中で無理矢理中断したにもかかわらず、片膝を

つく。

「どうして…もう、これしかないではないですか!？」

中断してその状態なのに、完全に発動なんてしたら…。

だから、その手じゃダメなんだ。

今のセイバーにエクスカリバーは使えない。

だから、待ってろ…。

俺の中で思い出されるのは、やはりあのキザな赤い弓兵の言葉。

『現実で叶わぬ相手なら、想像の中で勝てるものを幻想しろ』

何故か、本当に何故か、あいつの言葉はひどく納得できる。

理由は分らない。

でも、それは、自分だけの現実だと分かる。

だから、俺が創る。

セイバーが使える剣を、今勝つために必要な剣を、俺が創る!!

「っ!?!?!」

魔力が身体をうねる。魔術回路を荒れ狂い、自身の限界を、いや、さらにその先を無理矢理顕現させる。

思い浮かべるのは、エクスカリバーと似て非なる黄金の剣。

手には剣が現れる。

「今更何のつもりだ!？」

コウジユは遠坂を持ったまま、剣を今度は俺に向かって振りかぶってくる。

「うおおお!!!」

それを俺は避けずに、正面から今俺が創りだした剣で斬りかかる。
コウジユは大振りだったから、俺が先に斬ることができた。

「ちっ!」

コウジユは途中で斬るのをやめ後退する。
同時に遠坂を離していた。

それは何故か？

「まさか、障壁を斬っちまうとはね」

そう、俺が出した黄金の剣は障壁ごとコウジユの肩口を切り裂いていた。

けど、ダメだ。

コウジユを斬ったと同時に剣が砕けてしまった。

足りない。

「もう一度だ。砕けないはずの剣が砕けたのは、想定に綻びがあったからだ。」

投影…開始…」

再び、先ほどの剣を思い浮かべる。
今度はさらに完全を目指して。

「戦ってる最中に目を瞑るなんて、余裕だな？」

コウジユがゆつくりと近づいてきているようだが、今は無視しろ！

俺が挑むべきなのは自分自身。

ただ一つの狂いも妥協も許されない。

「りゃあ！」

コウジユが斬りかかってくる。

「つつ！？」

それが分かった俺は、まだ作っている途中の剣で、何とか受け流す。

だが、創っている途中の剣は再び砕ける。

もう一度最初からだ。

大体の感覚はつかめた。

今度は、コウジユから離れながら。完成を目指す。

——基本となる骨子を想定し——

——構成された材質を複製し——

——蓄積された年月を再現し——

——あらゆる工程を凌駕し尽くし——

「——ここに幻想を結び！剣と成す！！」

再び俺の手に、光と共に剣が現れる。

「それだけじゃたりねえぜ！！」

コウジユは剣を投げてきた。

「この！！」

弾けた！砕けてもない！

だが、悔しいかなコウジユに勝てる可能性を持つ剣を創ることができて、使い手が俺では役不足。

俺では使いこなすことができない！

どうするかを考えていると、俺の手の上から剣を誰かが握る。

「士郎、手を」

セイバーだ。セイバーが俺の横から一緒に剣を持ってきている。

「まだだ！」

コウジュが俺がさつきはじいた大剣を掴んですぐにこちらへ突っ込んでくる。

おれはセイバーと目を合わせた。

そして二人同時にうなずき、持っている剣に二人で魔力を流す。輝き始める剣。その光は辺りを黄金に染め上げる。

「はああああああ！！！！！！」

「らああああ！！！！！！」

二つの剣がぶつかり合う。

拮抗し、込められた力同士が反発しあい、辺りを閃光と音で埋め尽くす。

——正解——

そうどこかから聞こえたと思った瞬間、拮抗は崩れ、コウジュの大剣を弾き飛ばし、俺とセイバーが持っている剣がコウジュを貫いた。

「これで…あんたらの…勝ちだ…」

そのままコウジュは倒れて、大量の血と共に地面に倒れた。

終わった…のか…

「コウジュ…」

イリヤがコウジュの元に歩いて行く。

「負けちゃったね…」

イリヤはコウジュの血に濡れることもかまわず、横に座る。

「イリヤスフィール…」

セイバーが横でイリヤに剣を向けていた。

「セイバー、もうイリヤを殺す必要はない。コウジュは倒したんだ。俺達の勝ち…だ…」

突然目が霞む。

そっか限界まで力を使ったからか…。

頭でそんな風に妙な冷静な事を考えながら、身体が倒れていくのが分かる。

そして、いつまでも地面がこないなんて考えながら、俺の意識は途絶えた。

S
i
d
e
o
u
t

『Stage24: やつときた折り返し地点(後) … inふえいと』(後書き)

どうでしたか？

これはひどい、と思われる方もいらっしゃると思いますが、温かい目で見てください。

それでは、前書きで書いたようにいつになるかは分かりませんが、またお会いしましょう。

感想お待ちしています。

P.S.

『ファンタシースターポータブル2インフィニティ』が冬発売なそうで、待ち遠しいです。

それからですね、今更ですが、PV4000000越え、ユニーク50000越えを達成しました。
本当にありがとうございます。

これからも応援よろしく願います。

『stage???…予告的な何か…ネギま(笑)』(前書き)

どうもkouです。

ものっそお久しぶりです。

すこし学校が落ち着いてきたのでそろそろ復活をしようかと思えます。

そんなわけでリハビリ感覚でこんなものを書いてみました。

簡単に言えばネタばれや妄想、勝手な設定を練り固めた物なので気分を害する方もいらっしゃるかと思いますが、温かく見守って下さるとうれしいです。

では、どうぞ。

『stage???…予告的な何か…ネギま（笑）』

Fateの世界でのお別れを経て、またあの始まりの場所に帰ってきた。

「おかえりなさい」

「なのじゃ」

「誰？」

そこにいたのは美人さんが二人。

話を聞くと元エミリアさんと…で、八雲紫の格好のあんたは…気にするなと…

で、何？

次の世界？

ハイ了解つす。

「特典に、新たな力をやろうかの。

ついでに向こうでの便宜も図ろうぞ」

なんですと！？

それはありがたい。

って、あの、突然横にどこかで見たような空間の裂け目が…中で目がぎょろぎょろと…

のわゝ！！？

す、吸われt…

結局あんたは誰なんだよ！！？

で、あの紫的な裂け目を抜けた先は――

何この神殿。

あ、メール…え、これが家？って何？ざつと原作4000年前だからゆっくりしていつてねって…

不幸だああ！！

よく見たら宮殿は浮いてて、周りには何も無い。

アカシックレコード使ったら火星だそうな。

どうしてこうなったorz

諦め半分絶望半分でたまに修行しつつ、ふて寝してると誰かが現れた。

「すまないがこの場所をお借りしたい」

ひ、人が来たあ（泣）

嬉しくなった俺はよく考えず魔法使いさん（？）に二つ返事をしていた。

「魔力を使わせて欲しい？いいいいよ！」

「え、何それキーブレード？違う？まあいいや一本頂戴——
ありがとう」

そうこうする内に宮殿の周りの景色が変わっていた。

一言でいうとファンタジーの世界。

やっとネギマっぽくなってきたね。

たまに宮殿を抜けだしたりとかしてなんやかんやでまた月日は過ぎていく。

途中、魔法使い（？）さんの血族さん達を紹介されたりもした。

「どもども」

「魔法無効化の理論？そんな難しいの俺分らんよ？せいぜい概念を――」

それから案外早かった。

出会いと別れが何度もあつて不老の苦しさとそれ故の新たな触れ合いが自分を満たしていく。

そしてまた数百年が経つ。

そこでふと思い出したのが、ここは魔法世界だということ。

思い立ったが吉日とばかりに俺は旅に出る。

旧世界と呼ばれる世界ではまだ中世らしく、ひとまずヨーロッパ辺りを旅することにする。

そして事件に巻き込まれない筈もなく――

「お前、私の妾になれ」

「キモっ！？」

思わず領主っ婆いのをボコったらいつのまにか魔女指定受けたり――

「貴様！吸血鬼たるわt——」

「うぜえ！！」

思わず獣化して闘って、伝説作っちゃったりしつつ旅を続ける。

そして例の金髪少女との出会い。

「なぜ助けた？私は真祖の吸血鬼だぞ？」

「真祖？月落としか…できたりしないよね？」

しばらく一緒に旅をして、別れ、今度は魔法世界でまた一人旅に戻る。

そして月日gry

「え、戦争？ああ、紅き翼の時代がやつとか…」

もちろん原作介入っと。

「やほゝなんか楽しそうな事してるね。混ぜてける？」

「お前何者だ？強えな」

テンプレな流れで仲間になる。

「食事中失礼」

「つて、な、あんたは!？」

「…お、俺の肉の恨み〜!!」

懐かしい出会い。

バトルマニアと居ると必然的に起こる闘い（規模は戦争）

「千の雷!!!!!!」

「ラカンインパクト!!!!!!」

「甘いわ!!!みくみくにしてやんよ!!!!!!」

いつもの野菜でボコボコにしてやるけどね。

「なあ、さっきのつて野菜だよな?なんであんなことできんだ?」

「ああ、あれはネギって言うてだな——」

「すげえんだなネギって!!!よし、もし俺の——が——」

あれこれありながらもなんやかんやで最終決戦（笑）

「ごめんね〜流石に世界を消されちゃうのはさ、嫌なもんでね」

「あなたが、あなたさえ!!!」

そして終戦へ。

様々な遺恨は残したが、世界は一先ずの平穏を得る。

そうこうする内に原作第一巻の開始が近づく。

俺？

俺は――

「てめえらさつさと座れ！！今日から俺がこのクラスの担任だ」

「子供先生とか言っくな！！俺はとっくに成人してんだよ！！」

忙しくも楽しい教師生活。

しかし――

「ネギ・スプリングフィールドです！！今日からよろしくお願いします！！」

ラッキースケベ薬味の登場により物語は加速する。

学園ものによくある青春？物語や――

「この脱がし魔があああ！！！！！！」

「俺に…俺にフラグをたてんじゃねえええ！！！！！！！！」

もちろん戦闘もあり――

「俺を誰だと思ってやがる！！」

「最初に言っておく。あのネギがどうだったか知らねえがこっちのネギまでナメて掛かると痛い目に会っぜ？」

はたしてコウジュの行方やいかに。

魔法先生ネギま！？

く薬味なぞ知ったこっちゃねえ！！く

coming soon ????

なお、作者の都合により本編が予告に沿わない可能性もあることをご了承ください。

『stage???：予告的な何か…ネギま(笑)』(後書き)

どうでしょうか。

前書きでも書いたように、勝手な設定だとかで構成されている上に変更も多分にあるでしょうが現在考えてる簡単な流れです。

Fate編も終わってないのに何やってんだと思われるでしょう(実際に友達に言われました)

しかしこれはあくまで予告的な何かなので、ネギま編を書くのはFate編をしっかりと終わらせてからを予定しています。

それとですね、話は全然変わるのですが、しばらく来ていない間にPVが553、159アクセスでユニークは73、712人となっていました。

思わず声に出して驚きました(嬉しくて)。しかも、更新していかくとも毎日ごとのPVが大体2000ずつ、ユニークは大体400ずつ増えていました。

これは頑張らないとですね。

えっとボキャブラリーが少ないもんで嬉しさをどう表しているのかわかりませんが、とにかくうれしいです。

えゝ長々グダグダと失礼しました。

ともかく、今日よりゆっくりになると思いいますが復活したいと思います。

どうぞまたよろしく願います。

『stage25：衛宮家の憂鬱…inふえいと』（前書き）

Fate編の再開一発目です。

ちよこちよこ書き貯めてたんですが、最初と最後で矛盾が生じて、自分でもびっくりしたこの話です。

では、どうぞ。

『stage25…衛宮家の憂鬱…innふえいと』

side：士郎

俺は――

夢を見ている――。

最近よく見る夢――。

その続き――。

夢の主はセイバーで、いやアーサー王――。

今回の夢は――王の元から配下の者が立ち去る夢――。

そして、去る者をどこか悲しげな色を宿した瞳で見る――

「ん……」

目が覚める。

ここ…は…家か？

「目覚めましたか士郎」

セイバー？

「身体の具合はどうですか？」

どこか今の今まで見ていた夢でのように、悲しそうにそうセイバーが言う。

「どうした？朝からそんな辛気臭い顔をして」

「いえ、夢を見たものですから…」

「夢…？」

あれ、でもサーヴァントは夢を——「うう…ん」は？

少し疑問に思った事を整理しようとしたら、どこからか少女の可愛らしい声が聞こえた。

どこか？

いやいや、俺に掛ってる布団下から…なような…。

とりあえずめくる。

「もう……うるさいなあ……」

そこには白い少女が寝ていた。というかイリヤだった。

「んな！？」

「………」

俺が驚いている間にセイバーは無言で立ちあがり、部屋を出る所だ

った。

「士郎、居間でお待ちしています」

そして、ピシヤンと襖を閉めて、セイバーは行ってしまった。

そんなに夢見が悪かったんだろうか？

それか、おなか減った…？

つて、そんな場合じゃなかった！！

とりあえず、何故ここに居るのか分からないイリヤを起こさないように布団から抜け出して、居間へ向かう。

居間へ行くと、すぐそばにある、台所の所でセイバーは立っていた。

やっぱりおなk「士郎、ご飯の支度をしましょう」

「あ、ああ…」

怖い…。

まあ、なにせよ朝食を作らなければならないことは事実なので、朝食の準備を始める。

何にしようか…。

昨日は大変だったし…よし、朝からだけど豪勢に行こう。

とゆう事でメインに和風ハンバーグで、後はサラダとかを作っている。

良い感じだな。

焼いて煮てと、作っていく。なんだろう…ただ料理を作っているだけなのにすごい嬉しい。

平穩は素晴らしいな。

柄にもない事を考えながらも身体は勝手に動いていく。

「器はこれで？」

「ああ、悪いな」

セイバーが手伝ってくれている。ちなみに、料理そのものではなく、準備とかの方だ。

すると、ガシャンツと器が高い音を上げる。

あのセイバーには珍しく、器を置く際に少し雑に置いたようだ。

チラツと見ると、目つきを鋭くしながら皿の準備をセイバーはしている。

そんなにご飯g——（ギロツ！）——何でもないです……。

ご飯じゃないとしたら…イリヤ？

違うな、セイバーがイリヤに好意を持っていないとしてもあこまで露骨に機嫌を悪くはしないだろ。

まあいつか。考えても分からないものは分からないしな。
思考を中断し、丁度出来上がった料理を皿に盛り付け始める。

よし、我ながら中々な出来だ。

「ふわぁ、おはよー…」

あれ、朝からずいぶん豪華ね」

声を掛けてきたのは遠坂だ。

いつものごとくザ・低血圧！といった感じで、起きてきたらしい。

「おはようございます。凜」

「おはよ、昨日のご褒美というかお祝いみたいな感じだな。
朝からは嫌だったか？」

「全然♪」

冷蔵庫から牛乳を出してコップで1飲みした後に、満面の笑みで答えてくれた。

作った甲斐があるってもんだ。

「「「いただきます」「」」

準備を終え、3人で卓につく。

いつもは後2人、桜と藤姉も一緒にご飯にするんだが、今は居ない。

「それで士郎、これからどうする気よ」

「どうするって？」

「和室に寝てる物騒なお子ちゃまの事よ」

「正確には和室ではなく、士郎の部屋ですが」

「…へ？」

「ふーん」

何故か犯罪者を見るような眼でこちらを見てくる凜。
意味が分からない。

というか、物騒なお子ちゃまってイリヤの事だよな？

「士郎、イリヤスフィールを保護するってことがデメリットばかり
だってこと分かってる？」

「けど、放ってはおけないじゃないか」

実はバーサーカー戦の前に俺は二人にある事を言っていた。
それが、イリヤを保護すること。

バーサーカー戦の前ではしっかり話す事が出来なくて、しかも戦っ

た後は俺が気絶してしまったから遠坂はやっぱり納得してくれていなかったようだ。

「あんな目にあっておいてまだそんな事を言うわけ？」

「ちゃんと言いつけてやる奴がいれば、イリヤはもうあんなことはない」

あれ、そういえば……

「そういえば、反対してたのにちゃんとイリヤを連れてきてくれたんだな。二人ともありがとうな」

「マスターの意に反する事はできません。それに……私はここに帰ってくるまでは気絶してたから違うわよ」……

今、セイバーが何か続きを言おうとしなかったか？

そう思って目を向けるが食事に戻っていた。

？…気のせいかな？

「士郎、聞してる？」

「あ、ごめん」

はあ、とため息を1つついて遠坂が話を続けた。

「だから、あなたは許すのかってきいてるの。イリヤスフィールがした事を全部」

えっと、確かに死ぬ思いはした。

でも、だからイリヤを殺すっていうのは何か違う気がする。

「けど、イリヤはバーサーカーさえ居なければただの子どもなんだ。なのに殺すなんてできるわけないだろ？」

だが――。

「私はアーチャーが殺されたことを許す気はないわ」

「……」

そう…だよな…。

遠坂はアーチャーをやられてる。

イリヤを憎むなってのは難しい話かもしれないな。

そこへ――。

「なによ、聖杯戦争なんてものに参加してるんだからサーヴァントがいつかは居なくなるなんて当たり前じゃない」

「なんですって!?!」

入ってきたのは、先ほどから話題に上っているイリヤ。

お願いだから遠坂を刺激するようなことを言わないでくれ…。

「礼を言います、セイバーのマスター。敵であつたわが身への気遣い、心より感謝します」

今にも噛みつかんとする遠坂を華麗に無視し、俺の前に来たイリヤはスカートの端を両手でつまみ、お嬢様然とした礼を述べた。

「あ、えーと…」

はは、どうかえしたもののか…。

「なーんてね」

次の瞬間には天真爛漫といった感じになり、俺の横に置いてあつた和風ハンバーグの置いてある席につく。もちろんイリヤが起きて来た時用に用意してあつたものだ。

「ああ良いにおい、これ、私の分？」

「ああ」

「うれしい!!」

そういつてイリヤが抱きついてきた。
えらく喜んでくれるもんだ。

やっぱりこうしてみるとただの女のk――。

「離れなさい!この無礼者!!」

うおう！？

セイバーがものすごい剣幕でイリヤに言う。
さつきから話にあまり入ってこなかったセイバーがいきなりだったから余計に驚いた。

「はいはい仕方ないなあ」

イリヤが離れる。

あれ？セイバーには突っかからないんだ…。

まあ、セイバーは突っかかってるけど。

それにしても珍しいセイバーが見れた気がする。

なんて言うか…少し柔軟性が出たというか、感情が前に出てる？

戦闘前はかなりイリヤに対して状況や色々な事を交えながら否定的だった。けど、今はマシ…いや、朝も今も怒ってるんだけど拒否ではなく、ただ怒っているというか…合理的じゃないというか…。

…????

…何言ってるんだろ。

結局のところはよく分からないが、セイバーは一応イリヤがこの家に居ること自体は戦闘後に否定的な意見は出してないし、俺に合わせるって言ってくれたからひとまず保留にしよう。

今はともかく遠坂を納得させるのが先決かな。

「士郎、イリヤスフィールを匿っても百害あって一利無しよ？」

「害なんて…」

「あるわよ。その子はまだマスターなのよ？マスターの資格はまだ消えてないの。それはサーヴァントも一緒に、マスターが死んでも自身の魔力でいくらかは現界できるって言ったでしょ？」

もしイリヤスフィールがそんな野良サーヴァントと再契約したら――

――

「しないわ。コウジユが言ったでしょ？コウジユが負けた時点で私たちの負けだつて。」

それに、コウジユ以外をサーヴァントなんかにする気は無いし、聖杯戦争に興味なんかもう無いわ」

「アインツベルン家の言葉とは思えないわね」

遠坂はイリヤを睨みつけ、イリヤは飄々としている。セイバーはもくもくと食事を続けている。

誰か助けてくれ。

ガタガタ！！

そんなことを思ったからか、何故か突然押入れの襖から音がした。な、なんなんだ？

ガラッ！！

「おじゃましてーす。イリヤには悪いんだけど宝物庫の太分もつて

きたぜ？」

その襖から出てきたのは何故か昨日倒したはずのコウジユだった。

side out

side：コウジユ

「「な、なんで生きてるんだ（のよ）！？」」

凜と士郎がかなりびっくりしながら言ってくる。

「「なんで！？倒したはずじゃ！？」」

「おお、息ぴったりだな。

えーっと、何でかだったな……」

説明せんとダメなんだっけ。

この2人は気絶してたもんな。

「何で俺がまだ居るかっていうと…俺がセイバーと戦う前に不老不死って言ったつしょ？ほんでもって俺は召喚された時点で受肉っていうか生身だったわけさね。

結果、俺が倒されて敗けを認めたからサーヴァントではなくなったが俺は存在し続けてるって訳」

「ありえない…」

凜が頭を押さえる。それに対し、士郎は――。

「……?……?」

いや、今の分かりにくかったか?

「えっと……つまり、俺たちがちゃんと勝てた事には変わりないんだよな?」

「そうそう」

「まあいいわ、良くは無いけど今は置いとくとして……。それにしてもよくこの家に入ることができたわね。セイバーはイリヤスフィール一人でもかなり反対していたのに」

「ってかき、戦い終わった後、2人を運んだの誰だと思ってんのさ?」

「セイバーじゃないのか?」

「士郎、私はあの時点で気絶まではいつていないだけで、満身創痍に変わりありませんでした」

「だから、俺が能力使って運んだんだよ。セイバーに俺はもう聖杯戦争の参加者じゃないって事を説明した上でね」

「あの時は本当に死を覚悟しました。士郎と凜は気絶。その次の瞬間にはバーサーカーが無傷で復活していたのですから」

「それは……」

「言いたくないけど気絶して良かったわ…」

うん、俺がそっちの立場だと悪夢だと思うわ。

「ま、とりあえず交渉といこうや」

「交渉？セイバーとしたんじゃないの？」

「凜、私はあくまでサーヴァントです。確かにバーサーカーすでにサーヴァントで無いことや、私に対して出して来た条件は一考に値するものでしたが、マスターが最終的に判断を下すべきかと…」

「そゆこと。ってなわけで、俺とイリヤをここに置いてくんない？」

「それくらいかまww」できないわ」

士郎（家主）が許可を出そうとしたのに凜（居候）が却下した。

士郎弱っ！www

「言っとくけどただじゃないぜ？」

セイバーも言ってたみたいに交換条件としてこちらも交渉材料を用意してる」

「交渉材料？」

ちなみにセイバーの場合は？」

「魔力の回復、士郎の強化……美味しいモノ」

「「美味しいモノ!？」」

「バーサーカー!!それは言わない約束では!？」

「ありや?そだっけ?ごめんごめん」

「ぷつくく…ご、ごほん…それで?私には何があるの?」

笑ってしまったのを誤魔かす為に咳払いまでしてさっきまでの表情に戻して聞いてくる聞いてくる凜。本当におぜうさまだねえ、カリスマブレイクが得意だ(笑)

セイバーさんもさっきまでのピシッとした態度(ご飯食べてる時点で若干怪しかったが)が嘘のように真っ赤になってちじこまっとうります。

また成し遂げられてしまった俺によるエアブレイクwww

「凜に用意したのはこれ、宝石」

そう言つて、俺は宝石を机の上にはらまく。ちよっとした山にはなる程度の量だ。

「う、こんなに…!!」

「これ全部本物なのか!？」

「ふふん、その宝石たちは我がアインツベルン城にあったものよ」

「それをたった今とつてきたわけさね。俺の能力使えば一瞬だしね」

凜はその俺が持つてきた宝石に手を伸ばそうとしては戻しを繰り返して、いくらか逡巡した後結局手をひっこめた。

「こ、この程度じゃ、み、認めないわよ」

「遠坂？声が震えすぎじゃないか？」

士郎が冷静に突っ込みをしてしまうほどには凜が面白いことになっている。

「じゃあ、これならどうだ？」

こんな簡単にすることじゃないんだろうけど…

カードを出し、襖の方に歩いて行ってマイルームに繋げる。そして手をつ込んで赤いのを取り出す。
出てきたのは――。

「む？コウジユ、私は料理の途中なのだが…」

「子どもか？って、まさか…」

「馬鹿な…」

「嘘、小さくなってるけどまさか…」

「「「アーチャー!!?」」」

side out

> side : 凜<

どういうこと……?

アーチャーが消えた瞬間は見えてないけど、私の令呪は消えた。
だから、死んだと思ってたのになんで……

しかも…ショt…ゲフンゲフン……こんな姿に……

「コウジユ、これはどういうことかね? 私が戻るのもう少し後では?」

戻るのもう少し後?
どういうこと?

「いやゝそれがさ、交渉材料のたm「つまりは行き当たりばったりというわけかね?」そうだよそうですよ! 悪い! ? そうですよね! ごめんなさい! !」

「ねえ? さっきからどういうこと?

アーチャーはバーサーカー達とグルだったって事?」

「うんにゃ、あのアインツベルンの城での戦闘は本物だぜ? ちゃんと闘って、俺は一回死亡、けど最終的に俺がアーチャーを倒したんだよ。」

そして俺がすぐにアーチャーを再構成したんだ。…若干失敗したけど。

その時に交渉してこちら側に来てもらったんだよ。

あ、ちなみにアーチャーも俺と同じで現界はしてるけど聖杯戦争の参加資格はもう無いから」

「「「???」」」

意味が分からないわ。士郎とセイバーも分からないみたい。

「えーっと、つまり何?どついうこと」

「アチャ男ゲットだぜ!」

「・・・」

つい、手元にあった湯のみ(中身はない)をコウジユに投げつけた。

「はぐっ!?

じよ、冗談だよ!!」

サプライズという目的が無かったって言うたら嘘になるけど、俺はアーチャーという存在を消したくはなかったんだよ。だから、再構成なんて事をしたんだ」

「じゃあその存在を消しなくなかったっていうのは何で?」

そう聞くとバーサーカーは、片目を瞑り、立てた人差し指を口元に持ってきて……。

「禁則事項です」

「・・・」

近くにあった湯のみ（士郎が飲んでたやつで中身がまだ残ってる）
をついつい投げてしまった私は悪くないはずだ。悪くないったら悪くない。

「はぐ！？つてか熱っ！！めっさ熱！！」

まったく…。

それにしても、この子の本当の目的は何なんだろうか？

やることなすことに法則性がないというか、適当というか…ともかく分かりづらい。

「まあいいわ…あなた達がここに居るのは認めるわ。けど、もう少し話してもらっわよ？」

・ ・ ・

「まあ大体分かったわ」

「そいつはよかったよ」

「で、結局根本的な理由は話す気は無いと？」

「あはは、ごめんごめん。そっちは話しちゃうと予定が狂っちゃうからさ。」

でも安心してくれていいぜ？あんたらのマイナスになることはしない・・・maybe・・・」

「「「多分かよ!!」「」」

今まで空気になっていた土郎（ひょっとして私の所為？）と一緒にツッコんでしまった。

結局、2人が衛宮家にお世話になることが決定した。

目的は聞けなかったがまあこちらのメリットは大きい。アーチャーの事なども納得できない事ばかりだが仕方ない。

言っておくけど、宝石に目がくらんだとかでは決してない。決して――。

side out

『stage25：衛宮家の憂鬱…inふえいと』（後書き）

どうでしたかね？

矛盾は無いと思うのですがおかしい点があったら教えてください。
うれしいです。

作者の頭がおかしいとかはできたら勘弁して下さい。どうしようもないです。

ではでは、今回はこの辺で……

あ、その前に一つ。

今回のサブタイなんですが、『stage26：狙い撃つぜ！』って
言ってみてください…inふえいと』です。
まあ、分かる人には分かる声優ネタですね。

そんなわけで、次回はその人との戦闘になる予定です。
ではではお楽しみに。

またお会いしましょう。

『stage26:狙い撃つぜ!』って言うてみてください...いっふえいと(前

ごめんなさい。大変遅れてしまいました。

待ってくださっていた方にはホントに申し訳ない。

ひとまず、どつぞ。

『Stage26：狙い撃つぜ！って言うてみてください…いんふえいと』

side：コウジユ

どもどもコウジユです。

って言うても話的には全然時間経ってないけどね。

おっと、メタ発言はこの辺で置いておこうか。凜から衛宮家の滞在許可（あくまで凜から）をもぎ取った俺は、士郎達と共に衛宮家内にある道場に来た。

どんだけ金持ちなんだよって感じだな。この敷地の所有者が高校生なんだぜ？

まあそんなことは置いといて…と、俺と一緒にここに来たのには理由がある。それはこの家に置いてもらうための取引の一つにあった士郎を強くするためだ。

強くする…なんてえらそうなこと言っちゃあいるが俺自身の剣技もまともにできないのに教えるなんておこがましいなんてものだ。

そこで出てくるのが俺の所有する剣達だ。

そして士郎は剣に関してはチートな能力をその身に秘めている。

俺の剣達はこの世界の物ではないがここでは全部が宝具扱いらしいし、特に俺が良く使うような高レベルの物を士郎に渡すと勝手にレベルが上がってくれるだろう。

なにせ士郎は剣の解析、複製ののち自分の世界に加える事が出来るんだし。

まあ、ただ剣を渡してもほとんど意味が無いだろう。

切れ味や威力は剣そのものの物だけど、空間転移や音からの振動操作は俺の概念操作があつてこそそのものだから概念を込めた奴を士郎に渡さないといけない。

……ひょつとして、俺よりうまく使えたりしないよな、士郎。

俺もチートだけど、士郎も大概チートだよな。剣だけとはいえ……。

アーチャーのレベルに至るまでの人生あつてこそその能力が、士郎の生きざまあつてこそかは分からんけど、転生した時に貰う能力としてよく上げられるだけの事はある。

それをさらにチートにしようってんだから、笑えてくるぜwww
さてさて――。

「せいっ！はあっ！……」

「……」

現在は士郎がセイバーと打ち合いをしている。
道場の端では俺とイリヤが見ている。

打ちあい打ちあい……。

とはいえ、一回一回は非常に短い。

セイバーはかなり加減をしてるんだろうが、すぐに1撃が士郎に入る。

それでも、俺からしたらすごいんだけどねえ。

まだ力を制御しきれていない俺じゃあ絶対に打ちあいが続かない自信がある！！

言ってて悲しい…。

それにしても、なんか違和感が付きまとう。
なんだろう？

アニメでは確かセイバーが士郎に対しての心の在り方を変化させていて遠慮してるんだっけ？
それかな？

そういう建前で見てみる。

うむ、確かにセイバーが士郎との接触を避けるに避けてるね。素人の俺から見てもこうなんだからよっぽどなんだらうね。
よくわかんないけど乙女心というやつなんだらう。

「つやああ！！」

「つぐう！！？」

またひとつ終わった。

セイバーの横一閃が士郎の腹にスパツと入って士郎ダウン。
「痛っ…」

打ちこまれた所を押さえながら士郎が立ち上がろうとするが、そこへイリヤが口を開く。

「ねえ、これって本当に鍛錬なの？」

「いやいやイリヤさん、単刀直入すぎませんか？」

「え？」

ほら、士郎も呆けちゃってるじゃん。

「セイバー遠慮してるっていうか、ワザと見逃してるっていうか、本気に見えなかったんだけど…」

「そ、そんなことはありませんっ」

イリヤの言にあせるセイバー。

現在頼が　／／／　↑　ってなってます。

「でも確かに…」

言われてみればいつもより消極的だった様な…」

「っ…」

その言葉に言い返せなくなるセイバー。
さらに／／／に。

「もっとこう…ガッンと正面から打ち合ってくれないとダメにならないってば」

「しょ、正面からですか…」

で、ですが、そうなると展開によつては……
体がぶつかってしまふというか………」

「そりゃ打ち合ってるんだ当然だろ？」

「む…」

士郎の言葉に横眼で頬を染めながら睨みつけるセイバー。

何この可愛い生き物。

俺を萌え殺す気か？

「もうお昼です」

えゝとりあえず、セイバーの恥ずかし紛れの一言により、お昼休憩をすることになりました。

あ、俺まだ何もしてないや…。

昼食は、朝のハンバーグの残りを照り焼き系のタレで絡めたものを使ったサンドイッチだ。

「うわあ、うんうん美味しいゝ。
士郎はお料理上手よねゝ」

イリヤがマグマグといった感じにサンドイッチを食べている。

俺も一口…。

うまか。幸せになれる。

そんな感じに俺もふわふわしてると…。

「待ちなさいイリヤスフィール」

そう言つてセイバーがハンカチでイリヤの顔を拭く。ああ、頬に食べカスがついてたのか。

ハハ、なんかなごむ光景
つてちよつと待てイリヤ

今ついてたのほぼ目の下だったけどどんな喰い方したらそうなるんだよ。

……これも気にしたら負けって奴かな。

「ん…ありがとうセイバー。でも、セイバーは私の事嫌つてたんじやないの？」

「あなたに敵意は無く、士郎は客人として迎えました。
ですから私も最低限な礼は尽くさねばなりません。

で、バーサーカー、いえコウジュは何をしているのですか？」

「あ…つい…」

スイマセン、思わずセイバーの頭を撫でていました。

「ふふ、そんなに嫌われてるわけじゃなかったんだ。仲良くしたかったんだ、未来の士郎のおよみ「イリヤ！」むう…なに…あ、そこか…」

「俺の未来の…何だ？」

「まあ気にするな！気にしたら負けだ！」

「あ、ああ、分かった…」

ふいふ…イリヤさんってば気が早いっての。

食事終了したんで閑話休題。

さて、午後からは俺との練習の時間だ。

「なあ、コウジユは何を教えてくれるんだ？」

ちなみにイリヤとセイバーは道場の壁側で見てる。

「うーんとな、俺が教えるというより剣が教えてくれる感じかな？」

そう言っただけ俺はとりあえず剣を一本出す。出すのは長剣で、初期の長剣だ。ゲーム設定としてある使用者のレベル制限も1となっている。

「来いソード」

名前もそのままソードという。長さは1m20cm位はあるが剣先が丸く、宝具という扱いに一応なっではいるみたいだが威圧感なんて全くない。だって大量生産品っていう設定でもあるもの。

「士郎、これ持ってみ？」

手に現れた剣を士郎に手渡す。

「これ結構大きいけど持て……おお、持てた」

そう言っつてソードを軽く振る。

「その剣に特別な効果はないけど……まあ、刃こぼれとか壊れることは無いかな」

ゲーム内では武器が壊れるという概念は無いし、大丈夫だろ。

「十分すごいぞ…それ…」

「んじゃ、一旦それ返して？」

えくつと次は何が良いかね」

剣を受け取り、直して、次を出す。

レベル制限をとりあえず10位上げてみるかね。

「来いブレイカー」

次に出したのはさっきのソードの色違い。だけど攻撃力はほぼ倍くらいになる。必要レベルは10。

「今度はこれ持って？」

「あれ、さっきの色違いか？
つておお！！？」

今度は渡しても持てずに落として床面にめり込む。

「な、なんでさ…見た目はあんまり変わらないのに今度は持てない
なんて」

「んじゃ、今度はセイバーこれ持つてくれない？」

「はあ、わかりましたが…」

今度はセイバーに、今士郎が持てなかったブレイカーと、先ほどの
ソードを改めて出して2本とも渡す。

「どう違いある？重さとか」

「いえ、まったく言っていないほど。
あえて言うならブレイカーと言いましたか？そちらの方が少し切れ
味がよさそうな感じがする位でしょうか…」

「なるほどね。サンクス。悪いね、実験みたいになって」

「それは構いませんが、これが一体？」

「俺も知りたい。俺からしたらあんなに差があつたのにセイバーだ
と違いが無いとかどうということなんだ？」

これで何が分かるかというと…うん、皆さんお気付きかと思うんだ
けど、士郎君のレベルが低い。

PSP02でのレベル換算になるけどかなりの初心者レベルだ。ゲーム内では初期の方は簡単にレベルを上げられるから、10以下は大変だ。マジで。

やっぱり、魔術使ってブースとしてるからこそのあのスペックなのかね？現時点では。

「今のは武器に設定されてる、使い手に求められるレベル制限によるものなんだよ」

「レベル？」

「そ、俺の武器達にはそれぞれ使用者を選ぶって言えばいいのかな、一定の強さに到達していないと使えない」

「だから俺が使えなくて、セイバーが使えるって状況が出来上がるのか……」

「なるほど……しかし、それが一体？」

「うーんと、実践した方が早いかな。士郎身体強化出来るだけ全開で頼む。回復はできるから」

「身体強化？えっと、分かった」

トレース・オン……」

士郎がいつものキーワードと共に魔術を行使する。俺の頼み道理にギリギリまで行ってくれているのか、皮膚が裂け、少し血が出たりしている部分がある。

言った俺が言うのもなんだけど、見ていて痛い。
すかさず、俺は回復^{レスト}を掛ける。

「これで…良いか…？」

「ごめんな？まだ痛む？」

「大丈夫。それで、どうするんだ？」

「うん、その状態でこれを持ってほしい」

そう言っただけ渡すのは先ほどのブレイカー、士郎が持てなかった方だ。

「分かった、けど…え、持てた？なんで…」

やっぱり、士郎の強化魔術は自分のレベルもブーストしてたってわけか。

常に思い浮かべるのは最強の自分。そこまで持っていく士郎の特性。これが士郎の内面世界の現象の派生だってんだからはんぱねえな。

未来で封印指定を受ける理由が分かる気がするよ。だからと言って納得しちやいないが…。

つと、また思考がそれた。

「士郎、次だ。来い、ブラッディ・フリーユーゲ」

出したのは必要レベル60、ゲーム内レアランクはAの大剣。赤い羽根を模した幅広の片刃。俺が良く使っていた武装の一つで攻撃力は別に高くないんだが、剣を振ると辺りに赤い羽根が舞い散るエフェクトが好きでよく使っていた。赤○字は関係ない。

「こいつは必要レベル60、いけるかな？」

ホイっと士郎に渡す。士郎は恐る恐るだが受け取り――。

「お、持てた。

そういえばなんだけどコウジュ、ちなみにさっきのブレイカーのレベルは？」

「10」

「10！？じゃあこれはさっきの6倍！？魔術を使ったから？」

「そういうことだな。

ま、それが士郎の可能性つてなわけさね。士郎の魔術はいくらでも天元突破出来ちゃうわけですねえ。誰得だよ。あ、士郎か」

しかも、まだ士郎達には言わないけど士郎の中にはエクスカリバーの鞘がある。持ち主を不老不死にするというチートなもので、そのおかげで超回復と言って良いほどの回復力が士郎にはあるから魔術によるフィードバックも極端に少ない。何このコンボ。

「アーチャーが言ってたろ？外敵などいらぬ。士郎の敵は士郎自身だつて」

「ああ、確かに言ってたな…」

何でか妙にしつくりとくる言葉だったから覚えてる」

自分のことだから的確な助言ができるのは当たり前さね。

本当はアーチャーから直接アドバイスしてもらったんだけど、まだネタばらしには早い。それにその辺はアーチャーに折り合いを

つけていってもらって自分で向き合ってもらわなければならない。

「次は投影をしてくれ。対象は…ブレイカーで」

「今度は投影か……」

トレース・オン……」

強化をした状態の士郎ならブレイカー位なら出来る筈。

「よ、よし、成功した」

これで士郎の中にブレイカーが登録された。

ここからが疑問だったんだ。

強化での士郎のレベルの底上げは予想ができたけど、投影によってどれだけ世界を越えられる（侵食できる）か……

そんな風に考え事しているとパキンッとガラスが砕け散るような音が鳴り響く。

「ハア…コウジュ…も、無理だ…グ……」

士郎が膝についておろっていた。おう、ジーザス。

「ありがとう士郎。そこでごめん急ぎ過ぎた。今回復するから」

くそ、士郎の魔力量とかを忘れてた。

・
・
・

カード化していた回復アイテムを使ってほぼ元の士郎に戻ってもらった。

体力はトリメイト。魔力は何故か入ってたフォトンチャージを使いました。本来ファンタシーが2になった時点で無くなったアイテムなんすけど……まあいっか。

「ごめんな、士郎」

「大丈夫だ。問題無い。」

ほら回復してもらったし」

立ちあがり力こぶを出すように無事だと言ってくれる。

若干イノク（ry

ごほん…。

まったく、俺もどうかしてる。興味と焦りで急ぎ過ぎた。

そんな反省しながら落ち込んでいる俺に士郎が聞いてくる。

「そういえば、結局コウジユがやったのは何の確認だったんだ？」

「いやね、士郎が俺の武器を使えたら最強だな〜って思ってたね。レベル無視できるんだったら色々上げるか解析させてあげようと思っただよ」

「それは確かに心強いですね」

「ああ確かに、色々すごかったもんな。……一番インパクトがあったのはネギだけど……」

ああ。ま、確かにインパクトはあっただろうな。だけど――。

「もつと凄いのがあるぜ？」

例えば、星をも砕くと言われるアックスとか、大気を操作するダガ――」

「私が前に見せてもらったものは運命の操作だとか、空間の操作だとか言ってたわね」

イリヤが付け加えてくれる。サイカとツミキリの事だな。

「その辺りを士郎が使えたらな――っと思って思っつしょ？」

中には使用者の力を増幅するタイプの奴があるから士郎には特にそれを使えるようになって欲しかったんだよ」

「そんな物まであるのですか!？」

「昨日のコウジュって本気じゃなかったんだな……」

「いやいや、本気だったぜ？ただ全力では無かったただけでな。

俺の全力↓最強武器達を使う↓冬木ってか地球アボン……みたいな？」

「……」

あー…止まっちゃった。

またまた、キングクリムゾン！！！！

・ ・ ・

「えーまあ、そんなわけで、士郎君にはとりあえずレベルではなく魔術の方のレベルを上げてもらって、ライトニングエスパーダ…昨日俺が使ってた大剣な？アレの効果が力の増幅だからそれを使えるようになってもらうのが俺との修行の、とりあえずの目標です。ワーパチパチ」

「あ、ああ、わ、分かった」

「こ、心強いですね」

「少しでも強くなってもらわんとな。もし修行が間に合わなくてピンチになっても俺が代わりに戦う位はするから安心しな」

「それが一番安心できないって（ません）！！！！」

そんなこんなで修業を続け、いつの間にか夜。

あはは、またまたキングクリムゾンwww

いやだってさ、あの後には、セイバーが士郎ばこって俺が直して、士郎が魔術でアボンして、俺が直しての繰り返ししかしてないんだもんさ。

しゃーねーべ？

というわけで、一気に本日のメインイベント！

ナントカ寺に行こう！！

名前？忘れたよww

龍：ナントカ寺…

やっぱいいや。ナントカ寺で。

そんなわけでさっそく行くとしますかね。

side out

side：士郎

あ、ありのまま体験した事を話すぜ！『セイバー、コウジユ達と修業をしていたと思ったら、いつの間にか晩御飯の片づけをしていた』。な、何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった…頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。

…これで良い？

ああ、いや、今のはコウジユが言えっ…

えっと、とりあえず今日の事なんだが…驚く事ばかりだ。
昨日命を掛けて戦った二人が今日から同居人になる上に、コウジュは俺の師匠？の一人になってくれるっていうんだからさ。

その修業中？にコウジュが見せてくれた武器達がまたすごかった。
最初に渡された剣は宝具ではあってもあまりすぐくは感じなかったんだが、その後に後々俺に使えるようになってもらうっていうので見せてくれたのはすごかった。

出てきた瞬間の威圧感、神聖さ、逆に邪悪なものもあったし、脈動して、生きているかのようなものであった。

そういえば少し不思議だったのはコウジュの武器を見た瞬間に何故かその特性の分かるものがいくつかあったけど…あれは何だったんだ？

コウジュは登録がどうか丘がどうか言っていたけど…。

コウジュはたまに変な事を突然言い出すから気にしない方がいいんだろうか？

本人もよく気にしたら負けだと言ってるし…。

気にしない事にしよう。

その後は、コウジュが魔力込みで回復ができるから限界までやっても大丈夫だったことで、セイバーとコウジュからバシバシしごかれた。

剣術はセイバーとたまにコウジュ、目を慣らすためにつてセイバーとコウジュの試合を見せてもらったりもした。魔術に関しても、コウジュの言う実験（現在の俺のギリギリを探す）というのもやった。そうこうしたらいつの間にか夜で、セイバーのお腹の音でお開きに

なつた。

中々に充実した時間だったな。ただ、かなりぼこぼこにされたけど…。

ま、そんなわけで汗だくだ。

セイバーの事もあるし、先にご飯を先に済ませてしまったから、遅いお風呂になるがそろそろ入りに行こうかな。

風呂場の方に向かうとコウジユを見つける。

玄關に向かう見たいだが出かけるのか？

「出かけるのか？」

「おう。ちよいとイケメンと美女と仏頂面見てくる」

「ものすごい組み合わせだな…。というかスゴイ言い草だな」

「事実その通りだからな。仕方ない。そう言う土郎は風呂？」

「ああ。大分汗かいたからな」

「・・・ふうん」

突然口元を押さえながらニヤニヤするコウジユ。

「…なんでニヤついてるんだ？」

「いえいえ、何でもございませんですの事よ？」

……怪しすぎる。

といつても分からないから仕方ないか。

「じゃあ、入るよ。コウジユも気をつけてな」

「おう」

当初の目標である風呂場に入る。

服を脱いで浴室への扉を開く。

「一体コウジユは何でにやしてたんだ……」

扉を越えて中に入ると先客が居た。セイバーだ。目が合い、互いに固まる。

まさかまさかまさか、コウジユの奴知ってたな！？だからニヤニヤと！？

「あ、あの……」

「わ、悪いセイバー入ってるなんて思わなくて……」

「申し訳ありません。今は遠慮していただけないでしょうか？」

・

こ、ここは諸事情によりカットだ。

急いで着替えて風呂場を出る。

「ふっふっふ…このラッキースケベ」

バツと後ろを振り向くとコウジユがさっきのようなニヤニヤ顔でそこに居た。

「まだ出かけてなかったのか!？
って、コウジユ!! お前分かってて言わなかっただろ!!」

「なはは、はてさてなんのことですしょう?」

「この!!」

「ははは、ああ良いもん見れた、んじゃばいはいきーん!」

問いただそうとしたらコウジユは走って出ていってしまつ。
絶対アレ確信犯だろ…。

はあ…。

風呂は後でいいか。

時間つぶしに遠坂の所に行つてまた魔術について教えてもらうかな。

side out

side: コウジユ

さあさあやってきましたよっと。
なんとか寺。

名前忘れたwww

とりあえず階段を登っていく俺。

いやー、それにしてもさっきの土郎は面白かったな。くっふっふ、
また弄ってやろうwww
そっぴや、原作では風呂の中ではセイバーがやたらとかわいい事にな
ってたなあ。正直言つと見たかったが、少女の身とはいえ中身男
の俺がやつちやうと犯罪だかな。
しゃーない。

つてか長いなあおい、この階段。

こんなけ昇ってやっと頂上d…

「この様な時間に何用か？」

上の方から声を掛けられる。

その方向を見ると、かなり長い日本刀を持った青い着物姿のイケメ
ンが居た。女性が嫉妬するのではという位に艶のある長髪をポニテ
にしている、またイケメン度を上げている。

来た！！佐々木小次郎！！

普通ならイケメン爆発しろと言いたいところだがあんたは許す。って
か握手、いや、あの台詞w（ry

ケフン…すまん。思考がそれた。

「ちよいと所用で…ね」

「ほう。」

夜も遅くに大量の魔力を纏ったものがこの寺にとは……お聞かせ願
いたいものだ」

そう言つて佐々木小次郎、アサシンは長刀を構える。

物干し竿…佐々木小次郎の代名詞とも言つていい、五尺余り（えー
と大体2M位？）もある刀。

俺のコクイントウと同じ位あるかね？

「あんだだつていつたらどうする？」

「ふむ…私に用か」

「そ、俺と一勝負やらねえかい？
来い、コクイントウ・ホオツキ」

こちらも長刀を出す。

「娘よ。お前はサーヴァント…いや、何だ？」

「サーヴァントはこないだやめたよ。」

今はただのヒトだ。人間ではないのがミソだね」

種族的にはヒト属ビースト種ってところかな。

「まあどうでもよい。そのような事は所詮は些事にすぎん。

構えよ」

「くく、いいねえ。痛いのは嫌いだけど、そういいうのは大好きだ」

小次郎は下段に、俺は構えなんて分からないのでノリで小次郎のマネをして下段に構える。

どうでもいいけど（よくはないか）そのうち武術のレベルを上げんといかんね。

それと…、悪いが、話の前に色々覚えさせてもらおうとしようかね？

s i d e o u t

『Stage26：狙い撃つぜ！』って言うてみてください…i n f u e i t 』（後

どうだったでしょうか。

予定ではアサシン戦を越えて交渉にまで行くはずだったんですが…
…。

おかしい…。

まあしかしながら、グダグダしつつ、こんな感じになりました。
内容のグダグダ感はできればまあ気にしないでください。勝手な設定とかも。

ノリと勢いで書いてるものなので仕方が無いな〜といったものごとく
温かい目で見てやってください。

では、今回はこの辺で。

あ、次はできるだけすぐに書きたいと思います。

『stage27：あんたらいチャイチャしたいだけだろ?…inふえいと』

次話です。

やっと邂逅できた…。

ではござ。

『stage27：あんたらいチャイチャしたいだけだろ？…innふえいと』

side：士郎

まったくコウジユは…。

イリヤと揃って天真爛漫だ。たまに本当に姉妹じゃないのかと思うたくなる。

「ちよつと士郎！！聞ってるの！！？」

「うお？！ご、ごめん！」

またやってしまった。

今は遠坂に教えてもらってるっていうのに、考え事をしてしまっていた。

「だから、投影魔術というのは、実在する美術品とか名剣とかを自身の魔力でイメージとして再現するの。

けど、人間のイメージなんて所詮は穴だらけだから本物通りになんて複製できない半端な魔術なのよ。しかも魔力の消費だけは大きい」

コウジユ戦でお魔力がごっそりと持って行かれた上に、最初はえらく簡単に壊れたな。

「セイバーのエクスカリバーなんて聖剣のカテゴリーの中での頂点なんてものを投影しようならものなら、魔力が足りないどころか投影しきる前に回路や脳が焼き切れて死んでもおかしくない。つまり、

士郎のキャパシティーを軽く超えているはずなの」

「けど、俺は一瞬とはいえ成功してた……」

「そう、そこがおかしいの。バーサーク……コウジユが回復してしまったから本当の所は分からないけど、でも、1度は既に成功しているわ。」

ひょっとして、士郎にはアーサー王に対する並々ならない繋がり、縁があるのかしら……」

縁？繋がり？俺とセイバーの……。俺が思いつくなかには無いな。」

「今の時点では何も分からない……か。とりあえず言うておくけど、投影魔術の多様はしないようにしなさい。」

あれだけの事が出来るんだもの、分かっただけで代償が無いと
も限らない」

「けど、コウジユはどんどん使えって……」

「あの子が？」

「……一体……あの子は何か知ってるのかしら？
いえ、いまさら何を知っていても驚かないけど……」

た、たしかに……。

今の俺の中でのイメージは何でもできる、だ。

昼間に見せてもらった宝具たちだけで……世界征服できるんじゃないか……？

「ま、いいわ。ひとまずはこちら側に不利になる事はしなさそうだし、案外うつかりみたいだし、何というか大丈夫な気がするわ」

遠坂がいうk（ギロツ）ッと何でもないですはい。

どっちにしても俺も大丈夫だとは思っている。

セイバーも言っていたが、殺す能力なら十分に持っているがただ楽しんでる節がある、とか…。

楽観的かもしれないが最悪な事態はならないだろう。

「ねえ、士郎。」

昼間はコウジユも一緒に訓練したのよね？」

「ああ。」

中々に充実した一日だったよ」

「ふ〜ん。で、どんなことしたの？」

「宝具を使った実験？みたいのとか、魔術を使った効果を見たりとか、あ、そっぴゃこんなのもあった」

前ももらったカード。

絵柄は違うが、絶対に倒したい敵が現れた時に助けしてくれるって言うて渡されたものだ。

書かれているのは、

真力『エクスキャリバー』

描かれている絵はセイバーが持つのは違い、あまり剣らしくない形をした黄金の剣。

「何なの？えっと、真りよk「うわっ！！読んだらダメだってば！！」わ、分かったわよ…」

横から覗き込む遠坂から思わずカードを守るように抱き込む。

前に俺を助けてくれた（らしい）カードをもらった時は読むと言われたが、今回は読むべき時に読めと言われた。一回きりの使い捨てらしい。

それからもう1つ言われたのが、これはあくまで最終手段で、自分の力が足りないって思った時に、これともう一本剣があると真価を発揮するらしい…。

よくわからなかったんだが、『その時になったらわかる…はず…』と言われた。

・・・とりあえず持ち歩くように位はしておこう。

「あ、ねえ士郎。

今更んだけどあんたってエクスカリバーがどういうものか知ってる？」

「エクスカリバーって言ったら、アーサー王の代名詞だろ？斬れないものはなく、刃こぼれもしない名剣だって…」

「まあそんなとこだと思っただわ。

あのね、本当に重要なのは剣ではなく、鞘の方なのよ」

鞘？あれ、最近どこかで聞いたような・・・。
気のせいかな？

「鞘を身につけている限りアーサー王は血を流すことはない。つまり不死身なのよ」

へえ、あれ？なら...

「なあ、ならどうしてアーサー王は死んだんだ？」

「っ.....」

そうだった.....伝説じゃ、エクスカリバーの鞘は盗まれたんだ.....」

うっかりか...

「なら意味無いじゃないか.....
どうしてそんなこと気にしたんだ？」

「う、うるさいわね！
鞘もあつたら無敵だなーって思っただけじゃない私だってたまには間違える事あるわよ.....」

「たまにか？」

「ん!!!？」

な、何でも無いです.....。

s i d e o u t

side:コウジユ

「どうした娘。その程度か？」

「こんのー!!」

はい、現在戦闘中です。

名乗られて、名乗り返そうとしたら拒否られて、でも、コウジユの名前知られてもどうってことないと付け加えた上で名乗り返して……

いつの間にか斬りあってます。

つてか、そんなことより!!

流される!力任せが通じない!!そんなもって動きにくい!!何で階段であんなに優雅に動けんだよ!!こんちくしょー!!

「ふっ!せいっ!!とりゃ!はあ!!」

斬り下ろしからの流れの四連撃。

気分はマーベラ○コンビネーションww

「隙が大きい技だ」

「…そうですね」

ノリでやって出来ちゃったけど…

小次郎さんに軽く避けられた上に冷めた目で見られてしまった…。いや、ごめんなさい。

「やっぱり、技じゃ到底追いつけないな」

何合斬りあったか…百じゃきかない位は斬りあった。だが、普通に流される。

「なればどうする？あきらめるか？」

「何を言っやらうさぎさん。そんなわけないじゃんよ。予定通り押し通らせてもらっぜ？」

さーて、常に思い浮かべるのは最強の自分…はちよつと危ないので（火力的意味で）、このチートボディの身体能力を信じて押してダメなら引いてみるじゃないけど、力でダメならスピードで勝負だ。見本はあの校庭で見たランサーのしなやかな、どこか獣を思わせる動き、速度。

この身はビースト。身体ハードのスペックも十分。なら後は思い込み（ソフト）の問題だ。

「ふい……」

さて、行くよ？」

「空気が変わったな。面白い」

「っ！……！」

階段がダメなら、周りを囲む木々を使う！それでもダメなら重力など無視すればいい！！

ゲームスキルの中には明らかに重力を無視した、空中でステップを

踏んで何度も斬りかかるような技もある。

双小剣のスキル『レンガチュウジンシヨウ』とか顕著だ。
それを元に自身のイメージを強める。

端的に言えば強く強く妄想しちゃうわけです。

思い（妄想）が俺を強くする！！

スイマセン言いたかっただけです。

とにかく、俺は跳んで跳んでトンデ…。

「ほう、速いな。

だが…その程度か？」

「つく。

ま、まだまだ！！」

自分は獣！自分は獣！！

「これならどうだ！！」

跳ぶ——いや、跳ねるように四方八方から小次郎に斬りかかる。

正直自分もこのスピードに振り回されてる感はあるが、少しずつダメージが通り始めているのが手の感触で分かる。

「これほどとは…っ！…面白い！！」

…？

受け流すのをやめた？でもなんで…？

いや、そんなことより今こそ大ダメージを！！

そう思い、俺は大きく木を蹴りつけ大きく斬りかかるために飛びかかる。

だが――。

「秘剣…燕返しっ！！！」

「っ！！？」

くそ、回避！

…無理！！

なら大人しく受けるが正解。

「ぐううっ！！」

血を流しながら後ろに吹き飛ばす俺。

そして地面にぶつかり、止まる。

オートガード何それ美味しいの？と言わんばかりに斬りつけられたが、この身体自身の防御力のおかげかまだ体は五体満足だ。
でも、動けない。

「本来であるなら泣き別れる筈であつたが…まだ生きているとはな」

「んぐっ！この程度で、驚かれても…困るぜ？」

道具『トリメイト完全回復』…」

回復アイテムのトリメイトを使用し、回復する。カード化してあったから宣言すれば発動する。

一瞬光に包まれた後、俺の身体は一気に元の状態まで回復する。

「いよつと、まったくもって痛いったらアリやしねえ。正直泣きそうです。現在進行形で幻視痛見たいな感じに斬られた所がずきずきしてるんですが？」

俺はマゾじゃないんですが!？」

「……喧嘩を撃ってきたのはそちらであろうっ？」

「……そうでした…ごめんなさい」

そうだった…

「それで、まだ通る気はあるのか？」

少しは楽しめたが、まだ発展途上といったところか。

その回復力には驚きはするが…正直どうでもいい。来るならば斬り伏せるのみよ」

駄菓子菓子ww

そうは問屋が下ろさんのですよ。

「秘剣燕返し、すごい技だね」

「最初はただ、空を自由に飛ぶ燕を斬るだけのつもりであったが、奴らは素早い。」

燕は大気の流れを感じ取り飛ぶ方向を変える。ならば逃げ道を囲えば良い。壱の太刀で燕を襲い、避ける燕を弐の太刀で囲う。そして最後の一闪で斬り裂く。そうすることでやっと斬る事が出来る」

「えらく簡単に言ってくれるけどさ、そんな簡単なものじゃなかるうに。」

あんたが言ったようにするだけならさっきのスピードが出てた俺ならここまでダメージは受けないって。

その技の真髄は速さを通り越して、3つの太刀筋が同時にその場にある事」

「ほう、そこまで見られていたか」

ごめんなさい正直言つと、しつかり見えたわけじゃ無くぼんやりと程度です。原作知識が無かったらわからなんだ。確か…。

「多重次元屈折現象、またはキシユア・ゼルレッチだったな。さっすがは佐々木小次郎。そこに痺れる憧れる」
けど…。

「けど、残念ながらごちになります」

コクイントウを顔の高さまで持つてきて、小次郎に背を向ける形で構える。もちろん秘剣燕返し of 構えた。

その瞬間辺りの気温が下がったかのように寒く感じる。小次郎の殺気が俺に刺さる。

「娘…何のつもりだ…？」

「秘剣燕返しをやるつもり」

「そうか……」

「ならば!!」

小次郎もまた燕返し of 構えを取る。

「やってみるがいい!!」

秘剣! 燕返し!!」

「ひけん、つばめがえしー!!」

一の太刀で頭上から股下までを断つ縦軸に――。

二の太刀は一の太刀を回避する対象の逃げ道を塞ぐ円の軌跡を描き――。

そして三の太刀で左右への離脱を阻む払いを――。

ラーニングっていう能力は便利だけど不便だ。

1度受ければ覚えられるが、理解はできてない。

んなわけで、本能のままに叩きこむわけだ!!

「どうだ!!」

「…まさしく、燕返し。」

よもや…そこまで完全に使われるとはな。

しかしそれでは勝てぬぞ？」

そのとおり、ザツツライ…。

「ま、そうですねー。」

まったく同じ技じゃ、勝てるわけないですよねぇ」

どうしよう…。

え？他の技やら武器を使えって？

ちよつと想像——。

『秘剣燕g』スターライトブレイカー——！！』

とか——。

『秘剣燕g』一斉射撃——！！』

悲惨すぎる……orz

最初は男の意地？みたいな感じで日本刀勝負をしかけただけだったんだけど…うん、他のは無しにしよう。

とは言っても、そうなっちゃうと勝つ方法がねー…。

「そろそろ良いかしら？」

女の声が響く。

声のした方を見ると、黒と紫で構成されたローブで顔の下半分以外すべてを隠した女性がそこに居た。

キャスター来たー！！

まさかの救世主。

「こちらまで出向くとは珍しいな、キャスター」

「その子に興味があつてね」

興味とな？はて……

はっ！！

ま、まさか…

確かキャスターは少女趣味…俺狙われてる！？貞操の危機！！？

「こらそこ！！今失礼なこと考えなかったかしら！！？」

キャスターが突っ込みを入れてくる。

「さらっと心を読むな！！」

心を読むとは…しかもナイスなタイミングなツッコミ…

さすがは古き魔女…侮れん…。

「そつちから出向いてくれるとはね。正直手間が省けた」

「それはよかった。

お客様ですから、しっかりと御持て成しをしようと思ってきたのよ。
元バーサーカー」

「あらら、やっぱり見てたんだ」

「ほう、お前が今回のバーサーカーであったのか」

「そついや、さっきは言わなかったね。

改めまして、元バーサーカーのコウジユだ。
取引をしに来た」

・ ・ ・

「それで、あなたは何の取引を？」

今はさっきの階段ではなく、神殿（おそらくこれが例の、キャスタ
ーのスキル陣地構築で作られたものだろう）に招かれ会話をしてい
る。小次郎は後ろで寡黙に立っている。

「聖杯戦争からの解放、そして新たな人生に興味はないか？」

「！！？」

「とある方法（まあなんのことはない原作知識からだ）であんた
が別に聖杯そのものに興味を持つてるわけじゃない事は知ってるん
だ。

簡単にあなたの願いを言う——。

ぶつちやけ葛木宗一郎と平和にいちゃいちゃすることだろ？」

「ぶつちやけすぎよ！——！」

って、そ、そそ、それが願いなわけないでしょ!!?」

「キャスターよ、それだけ動揺しては答えを言っているようなものだ」

小次郎のクールなツツコミ、新しいジャンルだな、おい。

「だ、だから!!違うつて言ってるでしょ!!」

顔を真っ赤にしながら（フードから覗いてる部分だけで十分に分かる）、手をワタワタ振り回しながら否定してくるキャスター。

何この可愛い生き物…。

「はいはい、でもいいのにかやあ〜?

認めてしまえば葛木宗一郎との甘〜い、甘〜いめくるめくラブラブ生活が待ってるんだぜ?」

俺はキャスターに近づき、耳元で畳み掛ける。

おそらく今の俺はかなりあくどい笑い方をしているだろう（笑）

「ら、ラブラブ生活……」

キャスターの後ろで雷がピシャーンってなるのが幻視できてしまう。

「そつ…ラブラブ生活。」

朝起こしに行ったり、手料理を振舞ったり、正に新婚生活。行ってきますのチューとかしちやったりなんかしたりして。キヤー」

「ちゅ、チュー……？（ゴクリ）……／＼／」

「そ〜んでもって、あ〜んなことやこ〜んなことが……」

「あ、あんなことやこんなこ……と……／＼／」

あわわ……言いながら悩んでるキャスター。どうしようどうしようって感じた。

「ほら、楽になっちまえよ。認めてしまえって。

俺の事見てたんなら、聖杯からの解放だけじゃなく、受肉も出来る事も分かってるんだろ？

イチャイチャラブラブしたいんだろ？

ほらほらさあさあ。

楽になっちまえって」

「……………です」

「何？聞こえなかったよ〜？」

「イチャイチャラブラブの新婚生活がしたいですって言ったのよ！！」

何か文句あるかしら！！？」

「ふふん、やっと素直になったか」

自分で煽っておきながら、最後の剣幕に内心ビビりながら勝った事

を喜ぶ。

「それで？対価は？」

何だか吹っ切れた感があるキャスターは頬を染め、明後日の方向を見ながら聞いてくる。

もう何も言っまい。

「そんな難しいこっちゃないよ。ちょっと俺の手伝いをしてもらうのと、お芝居をしてもらおうかと思ってね」

「内容をいいなさい？」

「話せば長くなるんで簡単に言うけど、とある姉妹を腐った虫爺から救うための手伝いと演技。ついでにとある少年のレベルアップをしたいんだ」

「姉妹…「あんたが知ってる事を俺は知ってるんだぜ？聖杯の器として目星付けてただろ？」…ええそうよ知ってるわ。まったく、反則の塊よ、あなたのその情報能力。」

「いや、それほどでも…」

「褒めてないわよ！

まあいいわ。ひとまず契約成立ってことね」

そのあと、キャスターに原作通りのことを芝居してもらったことをお願いした。

実はイリヤにも芝居の事は前もって話してあるので、時を見て土郎達に情報提供と言う名の意識誘導をしてくれるはずだ。

途中で葛木氏も来ての話し合いになったんだが、怖い。マジ怖いよあの人。何て言えがいいのかね……あえて言葉にすると断崖絶壁を覗いてる感じっていうのかな。何も無い怖さ？あーもう良く分らん。

とにかく、キャスター勢は揃ったんでスケープドールカード（ちゃんと小っさくならないようにしたやつ）を渡しといた。

あ、小次郎は拒否られたよ。

刹那を楽しむのに無用の長物だとかなんとか。

俺としてはそれが佐々木小次郎としての幸せなら何も言っちゃい。

そんなわけで、俺の今日の目的は終了ってことで、帰って寝るとしよう。

あ、最後にキャスターさんに他の事も手伝ってもらえるか聞いとう。

P.S.

手伝ってくれるそうだが、俺のコスプレ大会が開催される事が何故か決まってしまった。

ちくしょう……。

side out

『stage27：あんたらイチャイチャしたいだけだろ？…innふえいと』

どうでしたか？

ようやく、姉妹の仲直りイベント開催できるところまで来ました。
ついでに虫爺もやつつけちゃおう作戦も開催するつもりです。

裏で画策するコウジユにこうご期待。

といつてもいつも通りのうっかりしちやいそうですねえ（笑）

あ、話は変わるんですがゲーム内で出てる初音ミクの服のプロテクターの方ってあるじゃないですか。

あれの背中についてる羽根みたいなのって何なんでしょう？

友達に聞いたら、『ネットで見たフィギュアで空飛んでる感じになつてたから飛行ユニットじゃね？』って言ってたんですけど、よくわかりませんでした。

スピーカーっぽいのも付いてるように見えるし……

むむむ、何かのネタに使えないだろうか…。

ではでは、今回はこんなところで。

皆さんまた次の話しで。

『stage28:やってみた(前編) : inふえいと』(前書き)

今回は修行(?)編です。

そんでもって長くなりそうなので一旦切りました。

本編早く進めと言われるのも無理はないですが、楽しんでいただけると幸いです。

注意事項ですが、いつものごとくキャラブレイクあります。かなり今更ですかね。

では。

『Stage28: やつてみた(前編) : inふえいと』

side: コウジユ

やーやー皆さんごきげんうるわしゅー。

突然だが今日は、ちょっと修行(ってか実験?)してやることにした。

前々からやってみようと思ってた奴だな。

そのために、キャスターに神殿を借りた。

昨日家に帰って次の日、イリヤに回復アイテム渡して、士郎の投影の鍛練ってか鍛錬?の監督頼んで速攻出てきた。

一応イリヤには昨日の事とか話してきた。アチャ夫さんとライダー(むしろ“らいだー”)にも勿論。そういや2人の出番がない。

らいだーとか引きこもり化してきてるし。もうちょっと待っててな。

そっぴゃ、神殿借りる時、何故か節子さんセットと交換だった。

何に使うんだろ…?

まあいつか。

では早速いってみよう。

実験1: 螺旋丸+一方通行^{アクセラレータ}。

えーっと、確かチャクラを乱回転させてだったよな？

とりあえずチャクラって言われてもイメージしづらいんで魔力で代用して…

「魔力を手に集めてゝ乱回転！」

おおゝ成功成功。

オドとかマナとか俺には関係ないみたいだから、とりあえず集めてみたら出来ちまったよ。

どこかの忍者たちがこれを知ったら涙もんだな（笑）

「おっと、ここで終了したらダメじゃん。

えー、続いて…」

右手に螺旋丸作ったまま、カードを出す。

夢幻召喚『一方通行^{アクセラレータ}』。前に学校に行く時に使ったアサシンの奴の一方通行バージョンだね。

効果はもちろんベクトル操作。一定時間能力使用が可能になる効果を持たせてある。

ちなみにこれの場合の服装は、原作であるとする魔術の禁○目録でアクセラレータが着ていた黒にちよっただけ白のラインが入ったシヤツと、黒のジーンズ——のレディースor z

なぜ、レディース。俺はあくまでレディースしか着れないのか？

思考がずれた。実験の続きをしないと…。

「螺旋丸に属性をつけるのは超難しいって話だったけど、これを使
つちまえば…夢幻召喚^{インストール}『一方通行^{アクセラレータ}』！！」

螺旋丸に一方通行の能力を併用して、風を混ぜていく。

ただ乱回転に、風を加えても体積が増えちゃうので、内側に内側に
加えていくのを忘れない。
圧縮して圧縮してと繰り返す。

最初はゆっくり、そしてどんどん風の量を増やしていく。

それをちよつとの間、いや、風王結界余裕で出来ちゃうんじゃない
かっていう位やっていると、螺旋丸からバチッ、バチバチッと音が
始める。

「お、良い感じ良い感じ」

バチバチと、俺の手の中の螺旋丸がもう雷球ってな感じになってい
る。

実はこれを狙っていた。アクセラレータが原作三巻でやっていた風
の操作によるプラズマの発生だ。原作では不発に終わってたけど、
螺旋丸サイズにしたらどうなるのかってかなり気になってたんだよ
ね。

ぎゅんぎゅんぎゅん風を加えて内側に乱回転させつつ、圧縮していく。

「よし、とりあえずこの辺で止めてっと……」

ベクトル操作をやめる。

だが…。

あの、とまらないんすけど…。

あ、ちょ、これなに？

ベクトル操作止めたのに、風が勝手に吸い込まれていく。

もう服がバタバタ言うレベルじゃなくてももう小型の台風位の風が俺の周りに発生している。

螺旋丸がもうまるで掌大のブラックホールです。

あれー？

なんかいやーな予感がするんすけど？

さっきまでぎゅんぎゅん言ってたのに、まるで音まで吸っていつてるのかやけに静かになってきた。

これどうしたらいい？

うん、とりあえず投げようか。

「うつうりやつー!」

近くだと嫌な予感しかしないので出来るだけ遠くに投げる。

ヒュウンと遠くに飛んでいく。キャスターには大分広くしてもらったので、何キロ単位で遠くに投げる。

これだけ遠くなら――。

カッ!!!!!!!!!!

とりあえずいつものごとく結果だけ言おうじゃないか。

結果 神殿がある空間ごとく消し飛びましたorz

悪い、キャスターやっちゃった(笑)

マギア・エレベア
実験2：闇の魔法＋白い魔王。

気を取り直して、次に行こう。

もう一度、キャスターに神殿を作ってもらおう。

申し訳ないんで、俺の魔力を好きに使って良いって言ったら、また作ってくれた。

なんか、さめざめと泣いてた気がするが、目にゴミでも入ったのかな？

そういえば、キャスターによると、限界まで結界を固くしたらしい。内側で核が爆発しようが負けないって言ってた。それを言う時は何でか泣きながら怒るように言ってたけど、なんだろうね？

さてさて、キャスターが頑張ってくれたわけだしやるか。

白い魔王の方は前にやった事あるから良いとして、闇の魔法はやったことないし、『幻想を現実にする程度の能力』で代用だな。できるかな？

いや疑問を持つちゃだめだ。俺はできる子。

まずはっと…。

「咎人達に、滅びの光を。」

星よ、集え。

全てを撃ち抜く光となれ」

ここかな？

「術式固定！掌握！」

あ、ネギま魔法だけど基本日本語ね。あの横にカタカナで書いてるやつとか覚えてないから。うん。

「星光魔〇・・・ふげらっ！！！！？」

さて、また結果を言おう。

結果↓神殿を巻き込んで自爆。

また、キャスターさんに怒られましたorz

また、俺の魔力を使って、さらに強化して作ってもらった。ビックバンでも何でもこいやーだそうです。

あ、その後も何回かやったら成功したよ？

『星光魔王』って名付けました。名付けただって言っても暫定なんだけどね。その内何か良いのが思い浮かんだら名前を変えようと思う。

無かったらそのまんまだけだね。
では皆さんお楽しみの効果です。

原作では薬味小僧が『闇の魔法』により『千の雷』を取り込み、身体が雷化するという効果を得、雷であるために攻撃をほぼ無効、さらに雷並みのスピードを得るという結果になっていたわけだ。

しかし俺の場合『闇の魔法』でSLBを取り込んだ結果、なんと、常時光粒子化に成功！！

つまりあれだ、俺がガンダ○だ！！みたいなチート状態になっちゃうわけだ。

攻撃何それ美味しいの？

しかもだ。身体は光と化しているわけだから、スピードは三十万km/毎秒つまり俗に言う1秒間に地球を7周半できる速さになるわけだ。

さらにさらに、デフォルトのスピードが光の速さなもので、そこに俺自身の速さが加わるとどうなるか――。

時間を置き去りに出来るんです…。

ああ、そんなアホの子を見るような眼をしないで…！！

俺もうる覚えだし、よく理解できなかったけど確か相対性理論がどうか浦島効果がどうかをテレビかなんかで言ってたんだよ。
たぶんそれだね。

それにしても、これはますますチートに磨きが掛って来た。

ただし！！この魔法！！

完成させたは良いが『言霊』使って『ザ・ワールド』した方が早い！！

俺の努力（度重なる自爆）は何だったんだろうか…。

おいこらキャスター肩をポンとかやめろ！

マジで泣きたく…ふえ…。

ごほん！！

よし！ネタ技として割り切ろう！！

んじゃ、次は…と。

ん？ハイハイキャスターさんなんですか？

もう神殿を壊さないでほしいから、派手なのはやめてほしい？

まあ、成功or自爆（イコール神殿破壊）だったし、言いたいことは分かるけどもさ。

仕方が無い。

というわけで、魔法関係はやめて『武術』関連の練習をしよう。

あれ？よくよく考えたら俺にとって武術って死活問題じゃね？

セイバー、アーチャーはマスターの所為で制限受けてたり、ダメー
ジ受けてるっばかったりで身体能力で勝つことできたけど、小次郎
戦じゃあ身体能力だけじゃ中々勝てなかったし…ってか、結局勝敗
決まってるないし…。

やっべ…。

とは言ってもどうすんべ？

この身体になる以前も武術の武の字も知らん男だったのにさ。
ん…？でも、小次郎に隙が大きいとは言われたけど、やった方とし
ては結構完成度が高かったと思われるマーベラ○コンビネーション
(言っの忘れてたけどスマブラね)は勢いで出来たよな…。

ひょっとして…ひょっとしてだぜ？

実は俺には才能がある…止めて石投げないで。じよ、「冗談だから。

じゃなくて、武術も、『幻想を現実に変える程度の能力』で良いと
こまでもっていけるんじゃないか？と思っただけですよ。

カードで夢幻召喚を此間からちよくちよくやってるようにすれば簡
単なのかもしれないけど、あれを使ってしまうと俺自身がやってる
って感覚が薄い。

あれはあくまで本人になりきるっていうイメージの元で作ってるわ
けだから、本人が本人の技を使っても学ぶものは少ない。

カードの効果という条件だから使えてるんじゃないかなるかと考えて
る。某ハンターアニメの『制約と誓約』みたいな感じがね。

っていうか、自分の能力なのになんとなくでしか理解できてない俺
って…orz

俺の能力って、ぱつと聞いただけならチートだがあまりにもピーキー
すぎる。

細かい威力の調整しづらいわ。技を覚えても応用性が低いわ。
そんでもって技を覚えるだけだから技と技の間は武術としての洗練
された動きではないわけだ。

だいぶ脱線したな。

話を戻すと、『幻想を現実に変える程度の能力』でどこまで再現で
きるかって話だ。俺がここまでの戦闘でラーニングによって得た技
術は確かにすごいが、まだ俺の中でバラバラだし理解できていない。
ただのサルマネ状態なわけだ。

しかしこれだと小次郎戦みたいな中途半端な状況が出来てしまうか
ら、俺は俺自身が武術やテクニクを理解して使いたい。

やっぱりさ、バトルマニアとまでは行かないだろうが、俺も男の子
だ。悲しきかな身体は女の子状態だが心は男だ。闘いというものに
憧れがあるし、熱い攻防ってのをしてみたい。

そんなこと言いながらも、俺が思いつける武術なんてアニメやゲー
ムのものだ。使えるだろうか？実用性的な意味で…。

とにかく試しにやってみるか。

エントリーナンバー1番。戦国BASORAより真田幸村の槍の二刀流（2槍流？）から。

いや別に、BASORAに詳しいわけじゃないんだけど、アニメ見ててかつこよかったんだよねえ。

そんなわけで。

「来い！スパア、スピナアター！」

今回は武器の強さは必要ないので、初期レベル武器の内の2槍を呼び出す。

それを両手で持ち、真田を思い出して構える。

ぎりぎりまで真田をトレースする。

いくでござる！！

「燃えよお！！我が魂イイイッ！！

ウオオオオオオうわぶっ！！？」

HAHAHA！！

予想してなかったぞコンチクショウ！！

はあ……。

まあ、いつものごとく結果を言つとだな

槍が…槍が引つ掛かつたんだ…地面に…。

そうだよ!!

槍二本扱つのに身長足んかつたんだよ!!

始めたと思つた瞬間にこれとか…神は俺に恨みでもあるのか!!!?
あ、一応俺もか…。

ちくせう…。

俺はあきらめねえ!

こんな所でやめたらただの負け犬ではないか!!

というわけで、今のは無かつた事にして……。

コホン、エントリーナンバー1番。

BASORAより伊達正宗の6爪流いきます。

これは、片手に3本、計6本の刀を指で挟んで爪に見立てるというものです。

ではでは。

「来い！ツインセイバー！リョウサベラ！アル・セバラ！」

呼び出すのは初期レベル武器の双手剣3セット。

これを両手につと…（ガシャン）…おっと手が滑つちまったぜ。
さて気を取り直してもう一度…（ガシャン）…おかしいなあ…疲れ
てるのかな？

よし、もう一度だ。

こうやって指の間に…（ガシャン）…指の…間…に……。

ふえ……。

おかしいな？何でだろう？前が見にくいよ。
ばやけて見えるよ。

・
・
・

すまんとりみだした。

この身体になつてから、やっぱり精神が引つ張られてるのか涙もろ
k…って泣いてねえ！！

あれは目から汗が出ただけだ！！

まあ、なんだ。結果報告。

手が小さくて持てませんでした。以上。

始まる前に終わってしまった……orz

そうだ！

今のもなかった事にしよう！！

というわけでエントリーナンバー「稽古中に失礼するぞ」…おう？
おや、小次郎さんではありませんか。

「どうしたん？門で見張りじゃなかったっけ？」

「いや、なに、そこに居るキャスターに呼ばれてな」

そう言い、小次郎が俺の後ろの方に視線を送ったのでそちらを俺も見る。

すると、少し離れた所にある建物の影、そこに…。

「へ？」

鼻血を出しながら、地面で悶えてるキャスターさんが居ましたとさ。

完。

って終わっちゃだめだよ！

そして、キャスターさんは何でそんな状況に！？

「キャスター、新たな命令とはなんだ？」

そんなキャスターさんを意にも留めずに話しかける小次郎。
この状況で話しかけるとか、あんた勇者や。

「…起きろ」

それどころかまだ再起動できないキャスターを刀の柄でつつく。

そうしてやっと起きるキャスター。早く鼻のを拭け。

やっと気付いたのか、ごしごしする。

あれ？キャスターさんなんでビデオカメラ持ってんの？

まさか…。

「アサシン命令よ。あの子に武術関係の事を教えてあげなさい。
私は魔術関連を教えるわ」

あんた見てただろ！！？
しかも録ってたのか！？

録ってたんだろ！？
録ってたんだな！？

「って、ちょっと待った！キャスターが見てたのはこの際置いておくとして、なんで教えるって話しになんのさ？」

「あまりにも……ふびん……かわいそうだったから……」

「おい今不憫っていいそうになったよな！？てか、かわいそうって言い直したところでダメージは大きいよ！！俺のライフはもうゼロだよ！！」

「ふむ、確かに……」

横で神妙に頷きながら同意する小次郎。

「あんたはあんたで何同意してんだよ。
その真剣に頷いてる感じのせいでマジ泣きそう」

orz ↑ 今の俺

「勘違いするな。不憫だと思ったのは勿体ないと思った故にだ」

……？

勿体ない？どゆこと？

「天才とまではいかぬが才がないわけでは無かるう。門前での一勝

負の際の最後の動きはそれなりのものであった。それ以前のものも悪くはない」

「ほ、ほんとに！？」

な、なんだってー！？

それにしても、真剣な顔で目の前で評価されたら恥ずいな。

「キャスターよ。良かろう。貴様の事だ、門前の警護の件も何かしら策はあるのだろう？武の土台程度なら見ないこともない」

「あら、断られると思っていたのに。どついう風の吹き回し？」

いや、それはあんたもだろ。

それと、俺の意見は聞かないんですね。

いや嬉しいよ？とてつもなく。

ただ、ちよつとは聞いて欲しかったなっと思ってたりしなかったり。

「いやなに、未来みらいというものに少し興味が湧いてな。
ただの戯れだ」

あれま。小次郎が微妙に性格変わってる？

前向き…って言うのとは少し違うけど、原作で知ってる小次郎はただ強いものとの戦いを求める感じだった気がする。

いや、俺を強くして勝負したいってなら一緒か？でも……………。

あーもう！

結論！

分からん！

「えっと、ホントに稽古つけてくれるのか？」

「うむ」

「ええ」

「やった。ありがとうな」

マジでやった。かなり嬉しいぜ。おそらく今の自分は満面の笑みを
しているだろう。

嬉しさが溢れ出すぜ。

「か、勘違いしないで。ギブアンドテイク。あくまでも私も利益を
得ることをしてもらってからよ」

「勘違いしてもらっては困る。娘が強くなることは私にとっても得
があるだけのことだ」

なにこのツンデレ発言。

「そっか。でも、それでもありがとうな」

「…ええ」

「む、うむ」

> side out <

『stage28:やってみた(前編)…inふえいと』(後書き)

どうでしょう？

なんでだろうか…回を増す毎にコウジユのウツカリが加速していく

……

こんなはずじゃなかったことばかりだ(笑)

続きは出来るだけ早く書きます。

頑張ろう。うん。

そういえば、キャスターさんと小次郎さんのロリ化、シヨタ化なん
ですけどやっぱりしようかと。

皆がちっさくなるとオチとしてしつこくならないだろうかとかとか
考えたんですが、予想外に望まれているようで(笑)

だったらいつてしまおうじゃないか…と…(笑)

まあ、そんなわけでこれから頑張っていきます。

では、kouでした。

『stage29: やつてみた(後篇) : inふえいと』(前書き)

すいません。また遅れてしまいました。

> (――) <

今回はういきとか見ながらできるだけ矛盾が無いようにした勝手な設定とかがありますが気にしないで頂けると嬉しいです。

キャラブレイクもいつもどおりに大変な事に。

なのでどうぞお気を付け下さい。

ではどうぞ。

『Stage29: やつてみた(後篇) : inふえいと』

side: コウジユ

み、皆さん！

こんにちわ!! のわっ!!? ?

調子はどう...? ううお!?...? ですか!?

俺ですか!?

調子自体は割と良い「こら待ちなさい!!」方です。

ですが！

現在進行形で「あなたが避けたら実験にならないでしょう!!」追
いかけられてます!!

やめてこないで！

魔術爆撃しないでくれ!!

「そんなこと言っただって、痛いのにには変わらないんだよ!!

ってか、そんなニヤニヤしながらやられたらいじめられてるとしか
思えないし!!」

「あらあら、私がそんな事するわけ... 無いじゃない」

「今、間が空いた!! 無いの前で間が空いた。

つてぎゃああ!! 増えてる弾幕増してる!!!!」

どうしてこうなった…。

いや、理由は単純なんだ。俺のオートシールドの耐久実験。
俺が頼んだんだよ。

最初は…最初はね、俺が立ってる周りに魔法陣みたいなのが出てきて、いかにも調べてますって感じだったんだけど、途中からキャスターがうんうん唸りだしたと思ったら突然魔術を軽くぶっ放して来たんだよ。

いきなりだったもんで、俺もさ、ひゃうあつとか言ってる屍もちついて若干涙目になってしまった。だってさいきなりだったんだぜ!? しかも結構派手な魔術だったし…ああ、また俺の黒歴史が…で、だな、その瞬間からだよ。キャスターの顔が満面? 味を占めた? ニマニマ? とにかくそんな感じになってどんどんぶっ放してきて――
――今の状況なわけだ。

「ほらほらどうしたの?」

「こ、こうなったら俺も何かしらの反撃を…」

急ブレーキで止まって振り返る。

「うふふふふ…」

「やっぱ無理〜!〜!」

怖い! 怖い! 何あれ!?

ぱつと見じゃあきれいなお姉さん（フードは取ってる）が微笑んでるだけなんだが、よく見たら鼻息荒いよ！目が白黒反転してるよ！
！そしてあのプレッシャー！！
自分が狩られる側だと思わされる。

もうあれ、キャスターじゃなくてハンターのサーヴァントだよ！！

逃げる逃げる。全速力で。ひよつとしたら小次郎戦で出してたくらいのスピード出てるんじゃないだろうか。

再び後ろを見る。

「ウフフフフフフ」

ぎゃーす！マジでハンターだよ！！

ウフフフフ……ってサザ○さんか！？

！！
そんなあなたに追跡者（バイオ的意味も込みで）の称号を上げよう

クラス補正

追跡：A＋

みたいなの！？

ああもう頭の中もよく分からん事になってきた！！

「そろそろ御仕舞にしましょうか」

「…え？」

御仕舞ってどういうこと！？俺の人生が！？

そんな事を考えてると、足元がいきなり光り出す。正体は巨大な魔法陣。

トラップ！？

俺は身体を動かせなくなる。捕縛陣みたいな感じが！？

「っつかまゝえた」

ひっ！？

み、耳元で声が……。

ガクガクブルブル。

ってあれ？捕縛陣みたいなのが消えた。

「あれ？」

「もう終わったわよ」

へ？

お、終わった？

思わず俺はへろへろと地面に座り込む。

マジ怖かった。マジ勘弁。

「ふふ、えらく可愛かったわ。

…永久保存確定ね（ボソ）」

ちよつと待て！最後にぼそつと恐ろしいこと言わんかったか！？

「あ、あんた絶対DSだろ？

何が楽しくてあんなことせにやなんのさ」

「あなたの本当の力を知るために、できるだけ真に迫った状況を作り出すために仕方なく…とっつてもしかたなく演技をしたのよ」

「嘘だ！！」

思わずレナ嬢のごとく言ってしまったよ。

「まあ、ただ実験するのも面白くないし、少しくらいは私の楽しみもちよつと位は混ざったかもしれないわね」

「はい、ダウト！！」

手段と目的が間違つてるとかそんなレベルじゃなく、もう完全に趣旨変わってただろ？あれ…。

でもまあ終わったって言ってたわけだし、一応実験は終わったのかね？

「で、何が分かったんだ？」

「あなたがマゾだということが分かったわ」

「は？」

あんた何調べてたんだ？

つてか、俺はマゾじゃねえよ！！痛みで喜ぶ趣味は俺にはねえ！！

「正確にはあなたの能力がというべきかしらね」

「く、詳しく説明プリーズ」

「あなたがダメージを負う条件を調べてみたのだけど、Aランク以下の魔術・物理に関係なく攻撃は無効^{キャンセル}。ただし、捕縛や精神操作系の間接攻撃は抵抗^{レジスト}が貫通。

そしてここからが、マゾだと評価した理由なんだけど……」

ゴクリ…。

「あなたの幻想を現実にするn「程度」…の能力によってあなたが食らってしまうのではないかという攻撃を自ら障壁を貫通させていたわ」

ナンダッテー。

「幻想を現実にするn「だから程度」程度が何で必要なのよ！「仕様です」はいはい、幻想を現実にする程度の能力をあなたが持てあまし過ぎている結果。その能力の現時点での発動条件があなたが強

く思った、考えたことっていう設定でしかないからデメリット部分も再現してしまっているのじゃないかな。だから…マゾ」

「『とある魔術』に出てきた錬金術アルスマグナに似てるとか冗談半分で話題に出したらたらマジだったわけか…フラグ…orz」

「さて、次に行くわよ」

うーす。

テンション上がらね…。

「次はあなたの攻撃ポテンシャルね。
とりあえずいくつかの魔法は使えると…」

「魔法？」

「そうよ。ああ、あなたは良世界の英雄なのだったわね。
今私が言った魔法はこの世界での魔法よ。
あなたのおかげで魔法が大安売りよ」

「え、いや、まじで？」

俺が使ってる武器じゃなくて？

俺自身の能力？」

「あなたが使ってる武器の効果も結局はあなたの能力で再現してるんじゃないかったの？」

まあそれ抜きにしてもあなたの能力は魔法を行使できるわ。それどころか新しい魔法の概念まで作ってるわね」

新事実発覚！！？

マジですか!?

「ど、どういこと!?!?まじで!?!」

キャスターに詰め寄る。

「ち、近いわよ。役得だけでも…」

その瞬間俺は引いた。二つの意味で。

「引かないで欲しいのだけど……」。

ふう…話を戻すわ。

まず第一魔法『無の否定』これの詳細は既に失われているわ。けど予想は立てられる。無の否定つまりは有の肯定、おそらく創世の事を言っているのしょうね。それもあらゆる代償は無しでよ」

それってもらに『幻想を現実に変える程度の能力』じゃないっすか? あ、でも、神様なら強弱はあるけど持つてるって話しだったし…確かにそうかも。

「第一魔法が『幻想を現実に変える程度の能力』に値するわけだ」

「そうよ、次に第二魔法『並行世界の運営・干涉』…。あのカードを使ってやるやつ。それよね。」

「そうっすね。しかも一回違う世界言っちゃったし…あれ、並行世界どころじゃなく多次元世界か?」

「それと、ラーニングだったかしら…。それでアサシンの技も覚えたのしょう?」

「おお、第二魔法だ」

キャスターが頭を押さえつつ、続きを話す。

「続いて第三魔法『魂の物質化』第一魔法も組み合わせさつてるのでしょうけど、すでに無い肉体を魂から再構成…。はい第三魔法」

「うわ、投げやりになってきた」

けど確かに…。アイテム利用したり、若干失敗したりはしてるけど、一応そうなるのか。

「誰のせいだと思ってるのよ…」。

次！第四魔法…は詳細不明だから置いておいて……この子なら知らない間に使つてそうだけどね（ボソ）」

もしもし、俺ビーストなんで聞こえてますよー。

言わないけど。

「そして第五魔法『青』これも詳しくは詳細が分からないけど『破壊』や『時間旅行』説が有力よ時間旅行というほどでもないけど、時間…止められるのでしょうか？」

「イエス、ママ」

何故か正座している俺。

いや、なんかしないといけない気がしたんでつい。

「『破壊』…は違うけど…でも、さっき聞いた武器の中にそんなの

「があつたわよね？」

「あります、はい」

「そういえば、『破壊』と『時間旅行』のどちらかが結局第四魔法なんじゃないかという説もあつたわね……」

「これって俺が悪いのかな？」

「悪いんだろうなー。だんだんそんな気がしてきたよ…」

「ん？そういえば…」

「キャスターキャスター。あのさ、新しい魔性の概念とか何とか言つてなかつたけ？」

「ああ、それね。」

「言つとしたら『矛盾』…かしら」

「『矛盾』とな？」

「あなたがライダーとセイバーとの戦いの時に、セイバーの宝具をあなたも使つたでしょう？」

「ああこれ？」

概念憑依『エクスカリバー』のカードを出す。

確かにこれは矛盾から逆説的に概念付加させるっていうコンセプトで作つただけ…」

「それよ。一見宝具のランクや威力が下がっていたりと失敗に見え

るのだけど、それはある意味すごいものよ。
問題なのは矛盾性。

例えて言えば、投影で創りだすモノが全て本物という感じがしらね」
贋作を作る魔術である『投影』の結果が本物？
分かるような分からないような…。

っていうかさ。

「それだったら第一魔法じゃないの？」

「第一はあくまで完成品を出すモノだと思うわ。所詮は推測なのだけれど、第一魔法は既にそういうモノだというモノを作り出し、『矛盾』は別物を本物であるというあやふやな状態で停滞させる。そんなもの世界の摂理に反するわ。でもそれをあなたは失敗とはいえ、少しの時間とはいえ形として留めた。

どう？魔法の定義が人手では再現不可能なものであるならこの『矛盾』は魔法になるでしょう？」

うん。

「ゴメン。よくわからないや」

「……orz」

キヤスターさんが得意分野な為にバンバン講義的な話をしてくれたんですがよく分かりませんでした。

「ま、まあいいわ。特別何ができるというわけではないようだし」

「え？」

「じゃあ今の話じゃないじゃん」

「だって、わざわざそんな矛盾を作ってまでしなくても第一魔法で同じようなものを作れるのなら意味はあまりないでしょう？」

「どうせ…このすごさが分かるのは効果ではなくそこに至る事を目的とした研究者質な人だけですよーだ…」

「キャスターさんがついに拗ねてしまいました。」

「実際にしてるわけではないけど、地面に『の』の字を書いてるキャスターさんが幻視できる。」

「こ、これは俺が悪いのかな？」

「えっと、どうにかしないと…」

「あ、そ、そうだ。」

「これって何か応用とかできないかな？」

「…例えば？」

「そこでふと思いついたのは、プリズマ イリヤで使われた技――。」

「『カレイドスコープ』は？どう？」

「原作ではセイバーの聖剣を召喚する際にただ召喚するのではなく、第二魔法の応用を交えて、限定的に並行世界より同時に多重召喚してたんだよね。」

「けど、いちいち並行世界から持ってこなくても、投影したやつに概念を書き込んで低コストで『カレイドスコープ』を使えたら、とて

も素敵な事だとは思わないか？

「…それは面白いわね…。あ、だったらブロークンファンタズム…
だったかしら？アレを使えばもつと面白い事が出来るんじゃない？」

「な、なんと。」

つまり本物（という名の別モノではあるが）を使い捨てできる……」

「あ、もう一つ思いついたわ。その技としての『カレイドスコープ』
をもう少し限局させて、対象を増幅させるという設定にしまえ
ば……」

「なつ、それでいくと例えば燕返し×10みたいなことが……」。

し、師匠と呼ばせて下さい……！」

「あ、なんだか新しい扉が開きそうねその呼び方。
よろしい、今度から私にことは師匠と呼ぶように」

新しい扉ってなんなんすか？

盛り上がってきたテンションが現在直下降なんです。

まあいいや。そんなことより俺専用のチート技ができそうじゃない
か。

みなぎってきた……！！

「でも、1つ残念な事があるわ」

突然シリアスになってキャスターさんが言ってきた。

「残念とは？」

「あなたが魔法を使う事が出来るけど、扱いきれていないから。現時点ではどうやっても獲らぬ狸の皮算用」

絶望した。

あれだけ盛り上げといて似合わない諺使ってまで落とすキャスターに絶望した…orz

ららるる

→現在三角座り中

「えっと、そう落ち込まないの」

「誰のせいだ!!」

どSにもほどがあると思います。

いきなりの俺の剣幕にさすがに悪いと思ったのか、少しオロオロしだす。

「そ、そっといえば言つのを忘れていたのだけねど…」

ああん？

「なんだこのやるー」

「なんで魔力供給の接続を龍脈としているの？」

「????」

なんのこっちゃ？

龍脈との接続ってあれだよな、アインツベルンで結界壊して直してのやつ。

魔力を使ったら使った分だけ、龍脈や辺りから魔力をオートで吸収する素敵半永久機関なんて効果が着いちまったってのはびっくりだお兄さん。

そこ、少女だとk（ry

「龍脈っていうか、辺り？とのやつだろ？
それがどうしたん？」

「……？」

気づいてないのかしら？いえ、この子ならそれも普通にありそうね」

そこはかとなく馬鹿にされた気がする。気がするってかされたよね？

「昨日練習してる時に「やつば見てたのか！」…今はそんなことどうでもいいでしょう？だから、私が言いたいのは何であんな無駄な事をしているのかという事よ」

「無駄？」

「あなたが魔力とかを使うスキルを使う際になんだけど、1度探查

魔術を使つて調べたから分かつたんだけど、あなたがそう言つたスキルを使う際に多分あなたの中で『スキルを使うには魔力等を消費してしまう』という固定観念があるからか、わざわざ魔力…は龍脈から、それ以外はわざわざそれを生成して使つていたのよ」

「ん？」

あゝ…え？

ごめんちよとたんま…

つまりなんだ？

俺は…燃料いらない車に態々燃料突っ込んでやつと車を走らせてる…
…みたいな感じ…？」

「そう…いうことね…」

「つまり俺は、意味もない事やってた…と…」

「え、いや、えっと…そうなっちゃうの…かしら…」

「つまり俺は無駄の塊…と…」

「そ、そんなことはない…わよ?」

「俺…ちよつとどこかで紐なしバンジーしてくるわ」

ふらふら…。

ガシッと。

「ま、待ちなさい!!私が悪かったから!!あなたはまだ使い慣れてないだけで練習したらきつとできるから!!」

まあハプニングはありましたが、キャスターさんの授業?は終了しました。
ついでに頼んでた物を受け取り、今度は小次郎の方へ。

・ ・ ・

「よろしくお願いします」

「そうかしこまらずともよい。」私が教えるのは基礎にも入らぬ部分だ。それにこの身は人々の幻想より生れた身よ。内包する部もまたしかり。故に道標程度にしかならぬであらうよ」

「いやむしろ今の俺にはその道しるべがものすごくありがたいですぜ」

武術ってよくわからんとです。

「ならば早速始めよう。手合わせを交えて行くぞ」

「うい」

小次郎はいつもの物干し竿を、俺はコクイントウをかまえる。そしてほぼ同時、相手に仕掛ける。

まずは互いに袈裟切り。当然のごとくつばぜり合いになる。だが、基礎ステータスはこっちが上だから俺は小次郎を押し返し、そのまま追撃を掛ける。横一闪、だがそれは軽く避けられる。

「やはり筋は良いが、どこかぎこちないな」

「そりゃどう…も!!」

横一闪からの斬り上げを再び小次郎に向かって打ちこむが再び避けられる。

互いに殺し合いではなくあくまで稽古である事を理解しての打ちあいをいくらか行う。

小次郎はあまり打って来ず、そのおかげもあり俺はガムシヤラにではなく、ある程度考えて打ちこむ事をしている。

これなんか楽しい。

打ちあい打ちあい…。

何度が続け…。

「武とは舞。双方の起源は同じであり古くから2つの関係は変わらぬ。流派によつては舞の中に部を隠し継承させることもある」

そついや、どつかで聞いたことあるなー。

舞を制したものが武を制す…だっけ？

「故に武を形成するは舞と同じく流れ・リズム。おまえのそれは読みやすすぎる」

だから全部受け流し、避けられされてたのか。

「流れやリズム…ねえ……」

小次郎が横文字使つとなんか違和感あるなーとかしようもない事と同時に考えながらも流れやリズムというものについて考える。もちろん打ちこみも続けてるよ。

「ふむ…」

「？」

突然、何か違和感が生まれる。

小次郎の動きが変わった？いや、動きそのものは変わってないけど

…俺に合わせてくれてる感じ？

ふむふむ。

そっかこれが流れかどうか動けばいいか。次はどうか。そしてリズムなるほど。わからんwww

いや、分かるけど分からん？

そんな感じ。

結局は感覚的なものだね。最初よりは何かが分かった気がする。

それもこれも、小次郎がえらく手加減とかしてくれてるからなんだろうな。

小次郎って案外教える側向きなのかね？

「小次郎って案外教えるの上手いね」

「……なんのことだ？」

ツンデレだ！ツンデレが居る！！

そこからはまた打ちあい。とは言っても、先ほどより速度やらなんやらがレベルアップしてきてるけどね。

小次郎がギリギリ俺が流れを掴めるレベルでの打ちあいをしてきている。

俺は物覚えが悪いんでゆっくりなのがチョイ申し訳ないな。

そういえばこれってあれに似てる。

えっと…流々舞…だったか？某ハンター漫画で出てきたやつで、互いの力が拮抗するように組み手することで観察眼やら技の流れや

らを修練するって奴だったはず。

俺の場合小次郎が俺に合わせてくれてるんだろうけど、マジで流々舞みたいだ。

武術レベルが上がってきてる気がするぜ！つかちょっと調子に乗ってみたいしちゃったりしてー。

それからどれ位しただろうか。何百ではすまない位には斬り結んだはずだ。今では大分スピードが上がってる。そんななか、小次郎がいきなり止めた。

「私が教えるのはここまでだ」

「え、あ、ありがとございました！！」

いきなりだったんで一瞬固まってしまったぜ。

「あと、これはあくまで助言だがお前の動きは獣に近い。門前で最後に見せたあの動きは特に獣そのものと言って良い程近かった。

しかし、そこに武術を取り込もうとするからか動きが分かりやすくなる。

……理想的な一撃とはなんだ？」

理想的…理想的ねえ……

そこでピンっと思いつく。悲しいかなマンガ脳からだけど――

「速くて、重い…?」

「それもある…だが極端な話にはなるが、一番は必ず当たる事だ。どれだけ速かろうと、重かろうと当たらねば意味はない」

た、確かに…。

チヨイ待った。

速くて重いけど当たらないから意味はない…

俺じゃねえか!? orz

「自分のリズムを見つけよ。流れを見よ」

そういつて小次郎は去っていった。

やばい、カッコよすぎね?

ほれてまうやるー（なに? もう古い?）

冗談抜きにしても男として憧れるぜ!

おい、今少女じゃねえかって言った奴出てこい。直々にみくみくにしてやる。

とりあえず小次郎の教えはこれ終わりのようだ。
また打ちあいしたいな」。

s i d e o u t

s i d e : 小次郎

コウジュ…か…

あの娘を見ていると何か面白い。

虚ろであるこの身がその何かを求める。

いや何かなどではなく未来かのうせいを求めているのだろっな。

現界した際はサーヴァントであるが故に未来みらいはない。サーヴァントに成長はないからな。

面白味も何もない。

与えられたものだけでなど…

しかし自分の存在意義と割り切り、限られた時間でどれだけ楽しめるかと思っただものだ。

あの娘に会うまでは…

今は思う。

新たな命を得、未来を見るのもよいかもしれぬ。

そして私自身の力でこの世を楽しめたらと…な…。

side out

side : キャスター

ホントに何なのかしらあの子。

能力だけで言えば世界征服も片手間で出来そうなものを持ってるくせに全然扱えていないし…。

と思つたら、魔法（この世界での）の当たる能力をたやすく使っているし…。

あの能力の行使できる基準を知った時は思わず笑ってしまったわ。

あの子の妄想やらなんやらが基準なんですもの。

あの子が簡単だと思えば魔法レベルもたやすくしてしまうし、難しいと思えばそこらの魔術師でもできるようなことをできなかったり…。

そういえば、あの子の依頼の『限りなく人に近い器』なんだけど、どうしようかしら。

ああ、器自体はできているわ。使えそうなアイテムももらったし、

あくまで作るのは器であって中身ではないから難易度は低いわ。ただ、どうでなら報酬を吹っかけてみようかなと思ってね…。

撮影会？もちろん行っわ。向こうは最初1時間って言ってきたんだけどそれだと色々できないもの。1日分をもぎとってやったわ。

でも、あの子からの依頼はもう一つ。

そっちも別に何ら難しくもないし、私たちの新たな人生に比べたらもらい過ぎな気もするのだけれど、この前テレビで見たら主婦とは貰えるものは貰っておくものだと思ったから早速実践してみようかと思うのよ。

欲しい報酬は私と宗一郎さまの次の命を生み出すカードの年齢設定よ。

確かに今の年齢でも構いわしないのだけれど、どうせなら結婚の前の恋人からも体験してみたいと思ったのよ。デートであちこちに…
うふふ…

っと、いけないいけない。

とにかく、アーチャーみたいにちびっこになるのは困るけど10代後半位の年齢にしてもらおうと思うわ。

フフ、なんでかしら。

あの子は私の嫌いな神族になろうという子なのに、あの子だけは嫌いになりそうもないわ。

手のかかる子を見ている感じと言えば良いのかしら…。

いいわね、子ども。

いずれ私も…ウフフ…。

ハッ！！

また横道にそれてしまったわ。

まあとにかく、新たな人生というものが楽しみだわ。

s i d e o u t

s i d e : コウジユ

ふう・・・。

何をしてたかって？

小次郎が教えてくれた流れとかそういう感覚を潰さずに、褒めてくれた武術をどう取り入れるか色々してたんだよ。

結果？

ふっふっふ、聞いて驚くなよ？

なんと！

1つ形に出来たんだぜ！！

おいこら少ないとか言うな！！

これでも俺からしたらすごい進歩なんだぞ？

ちなみに完成したのは、ルカや槍を使った薙ぎや払いを重点にした槍術もどきだ。

ベースはティルズのヴェスperiaからのジュディ姉さんの技に、フアンタシースターの技を組み合わせた感じだな。

やってたらものっそいアクロバティックになっちたけど気にしない気にしない。

ま、まだ試作段階で改良点もいっぱいあるだろうさ。

幸い？にも時間はたっぷりあるし、頑張っていこうかな。

武術の名前？一応候補はある。幻想舞闘^{げんそうぶとう}。どう？

厨二臭い？

いいじゃないか。別に。

実はちょっと俺憧れてるんだよ。

俺がそっち系にはまりだしたのって、年齢的にちょっと遅めで不完全燃焼感があるから、他人を気にしないでしかも現実に来るっていう今の状況は割と渡りに船だ。

はいはい、今更ですよね。

でもまあ幻想舞闘。一応俺のオリジナル武術（色々参考にはしたけ

ど）第1段が完成したわけだ。

わーぱちぱち。

この世界も後ちよつとだ。がんばろう。

h o l l o w 編？どうなんだろうねえ。一応俺のシナリオで行くと起きないと思うんだけどね。

その辺はオイオイかな。

さて、時間だ。今はもう夜。

後何時間かしたら、士郎達が帰り途中の宗一郎氏を襲撃するイベントが起こるはず。

準備は万端 仕掛けは上々 後は結果をころうじろ ってね。

はりきつていこー。

s i d e o u t

小話

「ふんふん〜」

「あらコウジユ。一体何を作っているのかしら？」

「ん？これさ」

「段ボール？それから…えっと、いちじょうまつりって書いてあるの？」

「そうそう一条祭り。」

あつとは〜っと。

概念を付加。とりやああ！！！！」

・
・
・

「ねえ、これ…何に使うの？」

「内緒」

了

『stage29: やつてみた(後篇) : inふえいと』(後書き)

どう...でしょう...?

やっぱり厳しかったかな...

コウジユのチート(orz)具合と、小次郎の心情の変化、キャスターさんの...うん、まあとにかく上手く表現できてたらなと思います。

あ、こう直した方がいいんじゃないかななどのアドバイスがあればお願いします。

私自身少しでも良い作品にできたらと思ってますのでんごいありがたいです。

543

さてさて、次回はやっと(正直ごめんなさい)物語が進み、救済編に差し掛かります。

あの姉妹やイリヤの運命やいかに。

では、今度こそすぐに出したいと思ってますのでよろしく願います。

ではまたー。

『stage30:LV上げはゲームでは大事(前) : inふえいと』(前書き

短いけどこの辺で一旦区切ります。

間空いたのにこんなので申し訳ない。

では、どうぞ。

『stage30：LV上げはゲームでは大事（前）：innふえいと』

side：コウジユ

どうも皆さんこんばんはー。

色々と実験やら、準備してる間に士郎達の宗一郎氏襲撃の時間が来た。

俺？俺は勿論高い所に忍んで見てるぜい。方法は…まあ例のアサシンのカードを使ってなわけだ。やっぱハズイっす。

とりあえず俺の事は置いてこう。

丁度今始まった所だ。

とりあえずなんで士郎達がこんな闇討ちみたいな事をしてるかというのだな、最近この辺りでは謎の昏睡事件が起きてるわけなんだが、それというのがキヤスターが力をつける為に生命力（魔力）を集めてるからだ。そしてそれを行っているのがキヤスターだとは気付いたがそのキヤスターのマスターが分からない。

で、まあ御都合主義やら、俺がイリヤに頼んだ情報提供やらで宗一郎氏に当たりをつけたわけだ。けど確信を持てなかったんで凜のガントをかなり弱くして撃って、反応を見て考えようと言う事でこんな状況なわけだ。

もちろん宗一郎氏がマスターなわけだから大当たり。

宗一郎氏に当たりそうになったガントはキヤスターが出てきて無効化。

そもでもって御対面となりました。

一触即発の雰囲気の中言葉を交わす双方。

キャスター勢は士郎達を言葉巧みに挑発する（あ、これ俺がお願いしたことね。原作の言葉を言ってもらってる）。

『葛木！あなたはキャスターが何をしているのか知っているのか？！』

『知っているが、それは悪い事なのか？』

『あんたって人は！！』

『キャスターも中途半端な事はせずいつそのこと命を奪った方が効率も良いだろうに』

ツとまあこんな感じだね。

士郎達の琴線に触れまくりなセリフだね。

おおおっとここでセイバーが宗一郎氏に斬りかかる。

しかし、一通り避けた後宗一郎氏の1、2！！首掴んで地面にドン！でフィニッシュ！！

セイバーさん吹き飛ばされてダウン！！

そこに、宗一郎氏の決め台詞。

『お前はもうs（ry）』

ゴメン嘘。

ホントはこっち。

『マスターの役割を後方支援と決めつけるのは良い。だが、例外は常に存在する。私のように前に出るしか能のないマスターも居るということだ』

能が無いって、いやいや、そんなだけできりゃあ十分でしょ。

キャスターの補助ありとはいえ、拳で地面砕くし。

セイバー圧倒した技術とか…ねえ？

何あれ瞬歩？って感じだぜ？

あ、今度は凜が前に出て魔術を使おうと…宗一郎氏が詰め寄って1撃入れちゃった。

そしてまた――。

『いかに優れた魔術師も呪文の詠唱を封じられては打つ手はあるまい』

うん、ごもつとも。

ってか、宗一郎さん優しくない？

アニメ見ても思ったんだけど、なんか授業みたいじゃね？

今はお芝居だけど、原作でも何故まだ殺していない？とか言いながら、対峙した時に本人が殺してないしさ。

確か宗一郎氏の戦闘技術の名前は『蛇』という殺すためのものだったはずだ。

元々居た組織というか育った環境のせいで感情が無いって設定だったはずだけど、組織の決まりである任務遂行と同時に死ぬという事を自ら止めた位だし、割りと感情あるんじゃないだろうか。ただ、感情の出し方知らないだけでさ。
ものすっごい不器用さんってな感じじゃなかるうかねえ。

ま、俺の勝手な考察だけだな。

実際のところは俺自身が直接まだ会ってないから分からん。

今回の件の説明は全部キヤスターがやってくれたしね。

そうこうする内に、遂に主人公が動き出した。

士郎以外の二人が倒れてしまっている以上へっぽことはいえ前に出ないといけないのは当たり前だけどさ、エクスカリバーを持ったセイバーを撃退した宗一郎氏に強化しただけの木刀って……アーアー言わんこっちゃない。当たり前のように砕かれてんじゃない。

けど、確か原作ではここでとつさに士郎は投影を使う。

出てきたのは…干将・莫耶。

久しぶりに見た気がするね。あの白黒双剣。

士郎はそれを持って――。

ん？あれ？

なんか氷のエフェクト出てないか？

やつば出てる！！宗一郎氏の服が若干凍ってるし！！

これは予定通りに士郎のレベルが原作より上がってるってことか？

これはちよいと予想外だぜ。あれはチラッと見せただけなのに。

あ…。

キャスターが宗一郎氏の防護魔術追加した。

あらま、士郎アボン。干将・莫耶と一緒に後ろに弾かれて膝を付く。

ちょ、キャスターこっち睨まんとつて！！

俺も予想外だったんだからさ！こんなに早く徴候が出るとは…。

さて、キャスターからの交渉が始まったんで戻るか。

実は既に桜つちには会って話をしてある。いつの間にと思いうかもしれないが、割りと簡単だった。あの子、重要人物の割に無防備に一人でいる事多いし。あ、ライダーの事は言ってあるよ。ちよつとだけだけど、会わせてあげたらすんごい喜んだ。ライダー縮んじやったからちよつとあつたけどね。ライダーさん鼻から忠誠心出そうになってたねー。

んで、交渉した後は、ばれないようにキャスターに桜の交渉内容の記憶を消してもらって、後は表面上ただけだけど原作に沿わせるだけって状態だ。

俺の仕事は準備段階で終わってあるから後は高みの見物すればいいんだけど、ドッキリ大成功ーみたいな感じで出てく為に一番良い所で出れるようにスタンバつとかないとな。

あ、うちのイリヤさんの方もキャスターに前に頼んだやつを上手く使って良い感じにしてくれてある。俺ももちろん手伝った。予防策も張ったしね。内容はクフフ……

んじゃ、まあそんなわけで、俺はサラダバー。

side out

side：キャスター

コウジユが行ったわね。

さて、ここからは私の仕事ね。宗一郎さまとの…うふふ…ゲフンゲフン！と、とにかく頑張らないとね。

「ねえ、私たちと手を組まない？

あなた達の目的も聖杯を手に入れる事でしょう？

聖杯を手に入れる方法が他にもあるって言ったら信じるかしら？」

「世迷言を！」

あら恐い。けどセイバーは予想通りの反応ね。

「どういう…事かしら…？」

ふふ、こつちも予想通りの反応ね。

「殺し合いなんかなくても、聖杯は召喚できるのよ。

私はもう聖杯の仕組みは理解したのよ。

協力するのならあなた達に聖杯の恩恵を分けてあげても良いわ」

「どうやって聖杯を手に入れるっていうのよ」

「この土地は聖杯を下ろすに足る霊脈を持っている。あとは聖杯の核となるものと、聖杯を維持する大量の魔力さえあれば聖杯の力は手に入るのよ」

「結構な話ね。それで、あなたの言う大量の魔力は一体何人の人の魂を使えば済むのかしら？」

さすがはと言った所かしら。今の話だけでそこまで推測できるなん

てね。

とはいえ、実際そんな事する気はもう無いからそんな事すると思われるのはちよつと嫌な気分だわ。はあ、この短期間であの子に影響されちゃってるわね。

あと、あなたが言う魔力だけど、あなた達のところのコウジュのものを使っても可能なのよ？お釣りが帰ってくる位に、ね。

やっぱり理不尽すぎるわね。頭がまた痛くなってきたわ…。

「ふふ、そうね…。」

聖杯を呼ぶだけなら、この町の人間すべてを使えば足りるかしら。けど、十分に運用し続けるには足りないかしらね。

まあ安心なさい。幸いにも現世には溢れるほど人間が居るもの。火にくべる薪はいくらでもあるわ」

「火にくべる薪…だと…！？」

赤い髪の子、衛宮士郎だったかしら？
その子の琴線に触れたみたいね。

当然の結果と言えば当然ね。この子たちみたいなのには許せない言葉でしょうし。

「もう一ついいかしら？」

聖杯の核って…魔術師の事よね？

聖杯に触れられるのはサーヴァントだけだけど、呼べるのはマスターだけ。でもあなたのマスターは魔術師ではないみたいだし、代用品が必要って事になるわよね…？

生贄として…」

「生贄！？どういうことだ！？」

本当に優秀ね。

…そういえば、なんでこの赤い子が既に脱落して、男の子の方が残ってるのかしら…。

これがコウジユの言っていた『しゅじんこうほせい』というものののかしら？

赤い子の方からしたらたまったもんじゃないわね。ちょっとかわいそうね…。

「生贄とは野蛮ね。ただ装置として働いてもらっただけよ？

まあ実際にやってもらえば注がれる魔力に耐え切れずに意思というものは消し飛んでしまうかもしれないけれどね。あなた達のどちらかがもう片方の願いを叶えるなんてどうかしら？素敵じゃない？

さて返答やいかに？」

「断るわ！」

「俺も断る！！」

「答えは決まっています！！」

「あら、残念。

じゃあ他の子を使うとしましょう。

別にあなた達以外にも一人、ふさわしい魔術師が居るわ」

ふふ、これで種は撒けたかしら？

そう言い残し私は宗一郎様と共に自分の領域に転移する。

待ってるわよ。あなた達。

s i d e o u t

s i d e : セイバー

士郎と凜以外に、ふさわしい魔術師…？

思考を巡らせようとすると、士郎と凜が同時に誰か分かったようです。

「「っ!?!」」

「まさか・・・」

「あいつまさか、イリヤを狙ってるんじゃない?!?」

！？

イリヤスフィールは確かに先程の条件に十分当てはまる！！

「セイバー先に行ってくれ！！すぐに追いつく！！」

「分かりました！」

士郎の命もあり、私は急いで家へと戻る。

間に合ってください！！

・ ・ ・

もうすぐ家だ。もう深夜だからか辺りは静かになっている。

普段なら、夜としては当然のものとして享受していたものだが、いまはただただ不気味なものに思える。

家に入り、居るであろう居間の方に向かう。

電気が点いていない…？

もう自室に戻ったのだろうか？

そう思いつつも中を見る。

すると誰かが倒れている。

桜！？遅かったか！？

「桜！桜無事ですか！？」

剣を横に起き、ひとまず桜を起こす。

外傷はないようですが、まさか魔術的な何かを…！？

その時――。

トスツ――。

私の胸元で軽く何かが当たるような感覚と音が聞こえた。

え？

視線を落とすと、刃が何度も曲がった歪な短剣を持った桜の腕が私に向かってるのが確認できた。

一体どういう――。

「ふ、ふふふ、ぬかったわねセイバー」

桜から桜の声ではない声が響く。

この声は先ほどまで聞いていたものだ。

「キャスター！」

「この宝具はあらゆる魔術契約を無効化する我が宝具、『ルールブレイカー』よ。」

「ルール…ブレイカー……」

「この子の魔力ではサーヴァント契約までは破棄できなかったけど、あなたの宝具は封じる事ができた。あなたはもう聖剣を使うことはできないわ」

そう言われた瞬間に、何かが抜ける感覚があった。

してやられたということか…！

そう言い残し桜は出口キャスターへ向かう。

「「セイバー！？」「」

どうやら士郎と、凜が着いたようですね。

「すみません、油断しました…。桜がキャスターに……」

く、身体が思うように…。

士郎と凜はそのまま桜が行った方向へ向かう。

本当に、私とした事が…!!

s i d e o u t

どうでしょうか？

と聞いても短いからコメントし辛いですねー。

申し訳ない>（―――）<

言い訳させていただくと、ふと、ゼロ魔編とかとある魔術編だとかをおもむろに書いてみたくなってしまっ…

ああ石投げないで。ごめんなさい。早よ書け言うのはごもつとも！！

559

次は早く書くとか言いながらこのありさまでホントに申し訳ない。

続きのキャスター戦メインは今度こそ早く書けるように……こんな事ばっかしているとフラグになってしまいそうだorz

とにかく頑張ります！！

応援よろしく願います！！

P.S.

もうすぐPVが100万いきそうです！これも皆さんのおかげです
ありがとうございます！！

記念に何かやってみようかなー。

『stage31:LV上げはゲームでは大事(後) : inふえいと』(前書き

やっとできましたー…。

いつもながら遅くて申し訳ない。

では、どうぞ。

『stage31：LV上げはゲームでは大事（後）…innふえいと』

side：キャスター

私は今、柳洞寺の境内で雨空を見てる。

この空はあの時に似てる。

あの時と言っても少し前のこと。

私が現世に召喚され、第五次聖杯戦争に参加が決まった日。

私は、私を召喚したマスターを殺し、彷徨っていた。

殺した理由なんて大層なものではない。ただ、気に入らなかった。
真名を教えた時に裏切りの魔女と言われる事が。

だから、ただ殺した。衝動のままに。

けど、マスターの居ないサーヴァント。しかも、召喚されてすぐの
私が限界し続ける事なんて無理なのは当たり前。

そんな私は、何かを求めるようにただ、ただただ歩き続けた。

目標なんて無く、雨の中をふらふらと。

いつの間にか私は森の中から砂利道に出る。
しかしそこで力尽きた。

これまで――。

そう思い、意識を失った。

ふと気付く。温かい…？

先程まで雨の中に居た筈だ。ではこの温もりは？

目を開ける。そこは部屋だった。そして私は布団の中に居た。

何故？

その疑問はすぐに解消された。

『起きたか？』

そこには男の人が居た。

『事情は話せるか？』

感情の無いかの様な声でその人は私に淡々と続けた。

『迷惑であつたなら帰るが良い。忘れろと言つのなら忘れよう』

続けて彼は出口の方向を言い、席を立つ。

私は問わずには居られず声を掛けた『待って、どうして…』と。

「キャスター。そこで何をしている」

思考の中に入っていた私が声によって現実に戻される。
声を掛けてきたのはあの人、いえ、宗一郎様。

「いえ…ただ、あの日もこんな雨だったなと…」

宗一郎様は1度目を閉じた後、雨がまだまだ降り続く空を見た。私も続けて空を見る。

どれだけ時間が経っただろうか。
空を見ていた宗一郎様が庭の方へ出る。

「傘は…」

「必要か？」

「いえ…」

大雨とまでもいかなくともそれなりに雨は強い。
その下へ気にも止めず、歩いて行く宗一郎様に声を掛けた。

私はただ聞くだけではそっけなく感じるであろう返事に嬉しくなつて追従する。

私も雨の元へ行く。

そして2人で歩きだす。

そして歩いて行く。雨の中を。

お出迎えの準備をするために。

宗一郎様――。

このお芝居が終わったら今度こそ私はあなたと――。

s i d e o u t

s i d e : コウジユ

ども。コウジユです。

あのさ、すんげー出ていきにくい。

俺は今お寺の上に居るんだ。雨が上手く自動防御で跳ね返るようにできるみたいだったから。

何だか嬉しくなって、雨の中で居たんだ。

だけどさ、下の方でなんか良い雰囲気になっちゃってさ。

降りるに降りれないし、空気壊せる感じじゃないから動く事も出来ない。

あ、2人が雨の中を——（キュピーン）——！？

今、誰かがトンデもない死亡フラグを立てた気がする！！

気のせいかな？ 電波？

まあいいや、そろそろ俺も動くかな「コウジユ、降りてきていいわよ」・・・気づいてたんかい」

キャストが雨の中から声を掛けてくる。

「気を使ってくれるのは嬉しかったけれど、もう動かないとでしよう?。」

「はいはい、はあ・・・」

下に降りる。

そこで宗一郎氏と目が合った。

「おっと、そういや、ちゃんと話すのは初めてでしたね。改めまして、俺はコウジユ。今回の計画の首謀者ってやつです」

「葛木宗一郎だ」

おう、超クールだね。

そこからは三人でキャスターの神殿へ向かう。

士郎達をお迎えするために。

さあ、張り切っていいんじゃないか。

s i d e o u t

s i d e : 士郎

俺たちは今、柳洞寺に来ている。

何故か？そんなのは決まっている。桜を取り戻すためだ。

何故桜が？などとも思うが今はそれどころではない。

キャスターは桜を生贄にしようとしているんだ。遠坂が言うには、まだ少し猶予があるはずだから落ち着けと言うができる筈もない。

とある切っ掛けからうちに通うようになった女の子。出会って数年になるがホントの家族、妹の様な存在だ。

今までの桜との思い出が思い返される。

くそ、こんなの走馬燈みたいで縁起が悪いな。
そう思い、眼前に続く長い階段を見上げる。

「行こう・・・」

俺、セイバー、遠坂の3人で階段を駆け上がっていく。

コウジュやアーチャーが居ないのが悔やまれる。

……何を考えてるんだ俺は。

事情は分かっているはずだ。

アーチャーはあんなだし、コウジュはもう参加者じゃない。

巻き込めない。

どこまでも続くかのように思える階段のせいか思考がマイナス方面
へ行っているみたいだ。

今はとにかく桜のことだけを…。

「待って…」

遠坂が途中で止まる。

「凜、どうしたのです?」

セイバーも不思議がっているようだ。

「こっちよ!」

遠坂はいきなり階段横の茂み…森の方へ走っていく。

…?

何か考えあつての事だろう。

俺とセイバーはとにかく遠坂に着いていくことにした。

少し行くと少し大きめの岩の前に遠坂が立ち、詠唱のようなものを唱えながら岩に向かっていく。

すると、空間が歪み、遠坂が飲み込まれていく!?

そつか、神殿に入るための侵入口かなにかか。

俺とセイバーも続いて中に入る。

待ってるよ！桜！！

side：コウジユ

台の上に寝かされている桜に何かをしていたキャスターが明後日の方向を突然向いた。

「来たか・・・」

「おお、あっちって事はやっぱり裏口からかな？」

「そうですね。」

でも良かったわ。折角作った裏口なんですもの、使ってもらわないとね。

さて・・・」

キャスターは魔法陣のようなものを出し、桜に言う。

お芝居とはいえ、少しでもホントのように見えるように桜には精神操作を掛けてある。もちろん同意は貰ってるぜい。

「立ちなさい。始めるわよ」

そして立ち上がる。桜。

……。

原作でも思ったが1つ言いたい。

「なあ、それ必要？」

「それって？」

「いや、桜の格好だよ」

「もちろん必要に決まってるじゃない」

おお、良い笑顔。

つまりなんだ、原作でもそうだったが、桜は今ものすっごいギリギリ…というか、もうぶっちゃけエロいボンテージ姿になってるわけだ。

いや、別に露出部分が多いってわけじゃない。出てるの首から上と、肩をちよつとだけだし。

けどね、ぱつつんぱつつんなんよ。

なまじ桜っちは女性的なラインがあるから余計に危ない。なんという核兵器…。

ってか、今は精神操作で本人の意識が無いが、戻したら大変な事になるんじゃないか？

…あ、これ聞いとこつと。

「このボンテージってさ。キャスターの趣味？」

「違うわよ？即席で作ったモノだし」

「いや、それにしても精巧すぎだつて…。

sonでさ、それってキヤスターが操った状態で着せたのか？わざわざあえてボンテージをチョイスで…」

「言っておくけど、選んだのは私じゃないわよ？

作ったのは私だけど、ちゃんとその子に聞いたもの。一度洗脳を解いて、何着かあるからどれが良いか」

は…？

「え？いや、まじで？」

「こんなことで嘘つかないわよ」

何という事でしよう……。

「確か…先輩がどうのとか、助けってくれる時に困った顔がとか言ってたわね。それで、顔真っ赤にしながら着てたわよ？恥ずかしいなら止めればいいのにね。」

他にせつかく可愛いのも作ったのに…」

「そんなキャラだったっけ？

いや、なんだか考えたら負けな気がする。スルーでいいか」

お前が言っとなとか聞こえたが気にしない。気にしないっいたら気にしない。

さーてと、俺はそろそろ行こうかね。

「んじゃ行くわ。後は計画通りに」

「ええ、また後でね」

俺は士郎達に見つからないように近からず、遠からずな定位置に行く。

今からは少しの間観戦タイムだ。

頑張れよ、士郎達。

俺は温かく見守ってるからさ。

side out

side：士郎

侵入してから長い洞窟のような場所を走り続け、突然明るい場所に
出た。

「まったくやりたい放題ね…」

遠坂が呆れたと言わんばかりに眼前に広がったモノを見て言う。

俺も、ちょっと同意だ。

なにせ、洞窟を抜けたと思ったら広大な地下空間に古代ヨーロッパ風とも言えば良いのだろうか…そういった建築物、神殿が中央の大通りを除いて所狭しとあるのだ。

「これが…キャスターの神殿ですか…」

「こんなものをどうやって…いや、魔術だよな…」

コウジユを見てからあまり驚かなくなった自分が居る。

なんて嬉しいやら悲しいやらよく分からない気持ちになっていると、建物の中からぞろぞろと何かが出てきた？

骨？

見た目は骨でできた人型だ。

だが、剣を持つものなど明らかにこちらへの敵意を持っているのが分かる。

骨兵とも言えば良いだろうか。

「来たわね」

「そう容易くいくわけはありませんか。

少し数が多い。囲まれる前に正面突破をしましょう」

「分かった」

方針を決めて、出てきた骨兵に全員で突っ込む。

「」「」「グウウアアアアア！」「」「」

どこから声を出しているのか分からない骨兵をそれぞれ走りぬけながら潰して行く。

遠坂は宝石魔術やガントで、俺は前にコウジュに貰った大剣（ソード）で、セイバーは自身の黄金の剣をもってして圧倒していく。

コウジュは何の効果も無い大量生産品だとか言ってたけど、十分すごい。使い捨てになるけどいざという時用にと、カードの状態で1つくれた。もう一つの『真力』の方だけだと使いどころが難しいだろうからって後からもう一枚くれたのがこれだ。

見た目に相違ない質量があるはずなのに、俺が感じてる重さはせいぜい鉄心が入った木刀と言うところだろうか。

それに最近、コウジュの回復薬（符？）もあつたから修行の苛烈度も増していたわけで…。

まあ、なんだ。あれこれ言ってたが結局何が言いたいかと言うところ――

倒し切れるんじゃないか？これ…。

数が多いと思ってたけど、心配の必要はあまりなかったようだ。

俺は武器の心配をする必要性は無いし、遠坂はコウジュ達に貰った宝石がかなりあるからバンバン使っている。

セイバーは先程宝具を封じられたが、それがどうしたと言わんばか

りに骨兵を斬っていつている。

「ふふふ、宝石の心配をする必要が無いって言うのはすごく気持ちが良いわ。そらそら!!」

えっと、誰？

遠坂のはずんだけど、今はただの危ない人にしか見えない。

若干相手の骨兵も『おいお前行けよ!』『やだよ、お前こそ行けよ!』みたいな感じになっている。

「凜!士郎!今の内に奥まで走り抜けましょう!!」

「はっ?!そ、そうね行くわよ!!」

「お、おう」

このよくわからない感じになった空気をセイバーが良い意味でぶち壊してくれた。

よし。

気にしないで、とにかく前に進もう!!

剣をカードにはもう戻せないので、持ったまま大通りを走る。

そして、数ある建築物の間を抜け、骨兵たちを退けながら、奥にある上段、その手前の階段まで来た。

ぱつと見た感じではこの階段を上ったら、1番奥の筈。そう思い更に速度を上げる。

だが――。

「よく来たな。」

どうした？私が門番である事は承知している筈だが」

くそ、こんな所で…。

とにかく剣を構え、臨戦態勢を取る。

「まあ、待て。貴様たちは先に行くがよい」

そうアサシンは俺と遠坂を見て良い出した。

…どういうことだ？

「ふむ、不思議か？」

思わず怪訝だという表情をしていたのであろう俺の顔を見て、アサシンが続ける。

「私の使命はサーヴァントからの守護でな。

更に言うなれば私が相對するのは最優のサーヴァント。魔術師の一人や二人を通してしまふのは仕方なからう？」

どういう意図で言っているのか、本心なのか、はたまた思惑があつてか、俺には判断できない。

だが、通してくれるというのなら、行くまでだ。

「セイバー」

「分かっています。私もすぐに」

「頼んだ」

「頼んだわよ」

俺と遠坂はセイバーに後を頼み、先へ進む。

階段も、もう少しだ。

side out

side：セイバー

「感謝します」

「なに、礼には及ばぬ。

お前との戦い、少しでも長く楽しみたいだけのこと。

サーヴァントとして居られるのも後わずか…。この身に残る魔力では朝まですらもつまい。」

「アサシン…」

私と剣を交えただけにしろ、今は助かった。

ただ、少しでも長くと望まれても、急ぎあなたを倒し、武人として強者との戦いを望まぬわけではありませんが、今は先へ進ませていただきます。

「さて、サーヴァントとしての最後の剣を交える相手がお前という事を嬉しく思うぞセイバー」

…？

どこか引つ掛かる言い回しですね…。

アサシンはそれを言った後、おもむろに袖に手を入れ何かを取り出す。

いや、何かではない。

見覚えがあるものだ。

だが、どうしてアサシンがそれを持って――。

「どうしてあなたがそれを持っているのですか――アサシン――！」

アサシンは答えず、その取り出したものを胸に当てる。
するとそれは溶け込むように消えた。

「なに、少し気が変わってな……」

何を意味するのは分からないがそう言い構える。

「これの効果を考えれば死合つには無粋だが、仕方あるまい」

「一体何の事を言っているのです！」

私が言いたいのは――！」

「構えよ……」

今はただ剣を交えるのみ……」

くっ――！！

小次郎の剣気が一気に高まる。

私も構えて、魔力を高ぶらせる。

だが、心の中では今聞けなかった疑問が残り続ける。

何故――

何故アサシンがコウジュのカードを持っているのですか？

まさか、今回の事は――。

side out

side：士郎

「ぐ…こんの!!」

「・・・」

俺は今、葛木先生、いや葛木と戦っている。

理由は簡単だ。

俺と遠坂が、アサシンの横を抜けて階段の最上まで上がると、祭壇のような場所にいる桜を見つけて駆け寄ろうとしたら、葛木が奇襲を仕掛けてきた。

何とか反応して、遠坂を先に行かせ、俺が相対している。

そして現在に至る…というわけだ。

だが、当たらない。

葛木の攻撃は素手、対して俺は大剣だ。

そのため、相手の方が身軽であり、葛木の動きそのものも洗練されている事から基礎的な部分で俺はスピードで劣っている。

とはいえ、こちらは1M以上もある大剣を使ってるんだ。間合いは圧倒的にこちらにある。そして、大剣の重さは見た目に反して少ない。

それでも当たらない。

袈裟、横に一闪、突き、逆袈裟…様々な攻撃を仕掛けても、避けられ、当たりそうになると少しだけ逸らして、そして避けられる。

幸いなことは、葛木の攻撃もまた、俺に直撃していないということだ。

俺が持つ大剣（ソード）は大剣の名に相応しく刃の幅も広い。そのうえ、これは碎ける事が無い。

これを盾にして何とか直撃を防いでいる。ただ、それでも防ぎきれない分があり、俺の防御の隙について俺に向かってくる攻撃が徐々に俺にダメージを与えている。

このままじゃ……ジリ貧だ。

どうすれば……。

「余所事を考えている暇はあるのか？」

「!？」

腹で爆弾が爆発したかのような衝撃が走る。

「ッぐふぁ!!？」

同時にソードを手放してしまった。

しまっ……!!

「っ!」

葛木が追撃をかけてきた。

「やられてたまるかっ!!!!」

俺は咄嗟に黒と白の双剣、干将・莫耶を取り出し、葛木の拳を防ぐ。ガアンと拳と剣がぶつかったとは思えない音が辺りに響くと同時に、俺は反動で後ろに少し飛ばされ、葛木は少し凍りついた拳を開く事で氷を取り去る。

「くっそ!!」

今度はこちらからだ!!

side out

side：凜

「桜…」

私は桜が居る祭壇の前まで来た。

桜は祭壇の上に立ち、その周りに桜を中心として引かれている陣に桜の魔力が吸われていつているのが分かる。

桜：今助けるからね…。

「キャスター!! 居るんでしょう!!」

私はこれを行っている張本人を呼ぶ。
居ないはずがない。

「あああ、少し悔ったかしら。
でも、あなたの大切な桜さんの為ですもの、当然よね」

私と桜が姉妹だと言う事を知ってる…？

「全部…お見通しなわけね…」

「ふふふ、この子の記憶を覗かせていただいたわ」

そう言った後、キャスターは目に光の無い桜の耳元へ行き、何かを
呟き――

「っ…!?!?」

何を言われたのか桜は何も移さない目をこちらに向けてきた。

「う、うあ…うあああ…!あああああああああああああ
あ…!…!…!…!…!…!…」

桜が苦しげな声を上げ、周りの陣が活性化する。

一体何を言ったのよ…!

く、仕方がないわ

「桜、ちよつと痛いけど我慢しなさいよ…!

Set…Los!Zweih?nder!」

魔力を腕に貯め、一気に放出して桜にぶつける。
これなら…

「……」

「くっ…」

桜の前で障壁のようなものに弾かれてしまう。

だったらと、今度は宝石で攻撃を仕掛けてみる。

「これなら!!」

しかし、これもまた弾かれてしまう。

そして無情にも、時間が来てしまう。

「残念ね、時間切れのようよ」

桜がまた苦しみ出したと思ったら、陣が強い光を放ち、桜の足元から黒い、どこまでも黒く濁った闇が凝縮されたような何かが溢れだすように出てくる。

それは意思があるかのように形を作っていく、うねうねと何本かの触手のような形を形成していく。桜を守るように存在するそれは、一本一本が人の腕ほども太い。

なんだってのよあれは…。

近くの物陰に隠れ、それを見ていると触手達が一斉にこちらに来た。

「っ!!!」?

Sechs-ein-plus!
Einh?nder!!!」

慌てて、ガントではなく攻撃用の魔術で、魔力弾を迫ってくる触手達に当てながら回避していく。

「ぐっ!?!」

足に少しカスってしまった。

そして、しまったと思った瞬間には触手達がこちらに殺到していて…。

「んぐあっ!!」

身体が大きく跳ね飛ばされ、何度もバウンドした後地面を滑っていく。

身体が…動きにくい…アドレナリンが出てるからか痛みは感じないのが唯一の救いね。

けど、動かないと意味が無いじゃない!!

動きなさいよ私の身体!!

桜はもう目の前なのよ!?

苦しんでる妹がそこにいるのよ!?!?

「ああああ!!」

吼えるように声を出す。

少しずつ…少しずつ身体が動かしていく。
立って、あの子の所へ！！

「どうしてそんなに頑張るのかしら？」

やっと何とか立てた私に向かって、キャスターが言ってくる。

どうして？

そんなの決まってるわ。

「桜が…私のたった一人の妹だからに…決まってるじゃない…」

「あら？おかしいわね…」

なら何故この子を間桐の家に渡したりしたのかしら？

この子の感情の中にはそれを厄介払いされたという風に感じてる部分があるみたいよ？」

「違う！！」

魔術師の家系は継承を1番上の子どもに伝えるのが習わしだから「つまり妹より習わしを優先したわけよね？」

そんなわけないじゃない！！

私も！お父様も！！そのほうが桜が桜として生きていけるようにって！！！！」

「それをこの子が望んだの？」

「!？」

さつきからキャスターは何が言いたいの!？

「それと、この子が間桐の家で何をされてきたか…それを知ってた同じ事が——」

「…めて…」

キャスターの声を遮るように、かすかに…ちょっとした物音にでもまぎれてしまいそうな声で、しかし確かに聞こえた。

「さく…ら…?」

「驚いたわね、まさか私の呪縛を抜けるなんて…」

キャスターが本当に驚いたと言った体で言う。

「やめ…て…私は…望んで…」

「中を覗いた私が本当の事を知らないとしても?」

桜に向かってそう言った後、キャスターは再びこちらに向いた。

「ねえお嬢さん。この子の髪や瞳は昔からこんな色だった?」

髪と瞳の色?

いいえ、昔は私と同じ黒だった。

「こんな性格だった？」

昔も大人しい性格ではあったけど、暗くはなかった。

「そういえば、間桐の家が魔術師の家系として断絶しかけてるのは……知っていて？」

「ええ、魔術回路を失ってしまつて魔術師としての力はもうほとんど無いのは周知の事実」

「不思議ねえ……じゃあ誰がああのライダーを召喚したのかしら」

何か、魔具を使つたんじゃない？ いえ、そんな簡単に道具にサーヴァント召喚を代替させられるわけが無い。

「やめて……」

桜が再び、停止の意を唱えるがキャスターは続ける。

「これはどうかしら？ 間桐家には、まだ一人だけ魔術を使えるものが居て……そいつは蟲をつかつて対象の身体を弄つて自身の都合のいいように改造が出来たりするらしいわよ？」

加えて言うなら、遠坂の家系であるこの子の属性は高い素養があったのか『架空元素・虚数』なのに今のこの子の属性は『水』。どうしてかしら？ そして、間桐の属性も『水』。スゴイ偶然ね」

「それって……」

「お願い桜…。いままで姉らしい事なんて一つも出来なかったけど、でも、今更かもしれないけど…恨まれていたって私は…」

「違います！！姉さんは！姉さん達を…恨むなんて…！！ただ、知られたくなくて！」

「本当の事…なのね…？」

「うあ…ち、ちが、いや、私は…」

「桜…お願い…教えて…桜の気持ちを…」

悔しい…。

私たちに知られなくなかった…。そんなことが桜の身を襲ってるのに、私は気づけなかった…。

桜が、遠坂桜から間桐桜になってからも私は気にかけてきたつもりだ…。

だけど、まったく気づけなくて…。

髪も瞳の色も変わってるのに…。

それほど気にも止めずに…。

何が…姉よ……。

私は自身の情けなさに、気付けなかった悔しさに、どうするべきかも分からずただ拳を強く握り、血が滲むのもいとわず佇む。

「私は…、私は魔術なんか無くて…良かったんです…」

桜がポツリポツリと話し始めてくれた。

私は悔しさに下ろしていた顔を上げて桜の顔を見る。

「私はただ…あの家で、姉さんと…お父さんとお母さんと…一緒に居れるだけで…それだけで幸せだったんです…」

「桜……」

「本当の事を言うと…最初はちょっと恨んだこともあります。

私は知らない子なの？…何で私がこんな目に合ってるの？…って。でも、でもすぐに思いました。そんなことはないって…姉さんに貰ったリボンを見るたびに、姉さんたちは幸せになれるようにこうしたんだって…。

それで、結局言えなかったんです。送り出してくれた所に助けを求めるなんて…迷惑をかけるなんて…」

「迷惑なわけじゃない！！

桜は私のたった一人の妹なんだもの。そんな事…思うわけ…ないじゃない……」

私はいつの間にか桜に近づき、抱きついていた。

「うあ…ううう……」

あの触手達は私に攻撃する事もなく、それどころか減っていつている。

「私…ひつく……私は本当…姉さんの妹で良いですか…？」

「当たり前…。むしろ私が桜の姉で良いのか…」

「姉さんは私の姉です…。血の繋がった一人の…」

ピシッ…と何かにひびが入る音が聞こえた。

砕けたのは、桜を囲っていた黒い何かと、祭壇を中心に走っていた陣。

そして、黒い何かは消えていく。

良かった…。

桜が戻って――。

「えーと、良い所ごめんなさいね」

「…!!?」

私と桜は声のした方に同時に振り向く。

しまった！！キャスターの事を完全に忘れていた。

慌てて残っていた宝石を手を持つ。

「待ちなさい！」

…まったく、攻撃するならさっさとしているわよ」

…そういえばそうね、でも何で…。

「ね、姉さん…あの…」

後ろにかばった桜が話しかけてくる。

「はあ…。あのねえ？

ちよつとは不思議に思わなかったのかしら…何で、敵である私があれだけ親切な事を言っているのかとか。

まあ、そう思えない状況を作ったのは事実ですけどね…」

????

どうして、キャスターはいきなりこんなにフレンドリーになっているのかしら？

桜も何かを話したってるし…。

「おい、遠坂、桜無事か？」

どういうことか考えながら、私は声のした方、士郎へと顔を向ける。走ってくる士郎。その後ろには、歩いてくる葛木先生の姿が見える。

「無事でしたか！？」

セイバーと…アサシン？小さくなったアサシンみたいなのが今度は

来た。

ホントにどういう事…？

「坊やとセイバーはもう聞いたの？」

「はい」

「あ、ああ。未だに信じきれていないんだけど一応は」

「ということは、お嬢ちゃんだね。」

簡潔に言っわ、今回の事は――

全部コウジュの仕込み、お芝居だったの」

「はい…？」

え、どういうこと？

仕込み？お芝居…？

どうしてコウジュの名前…？？

「最初から説明するわ――」

・ ・ ・

「はああああ！！！！？」

私たちがキャスターたちを狙うのも、桜が攫われるのも、そしてここに救いに来てした一連の事も全部がコウジユの計画！？

「それで！！その張本人はどこ！！？」

思わず拳に力が入る。今ならあの厄介な障壁も素手で壊せそうな気がするわ。

「姉さん！コウジユちゃんは私たちの事を思ってくれたんです。だから恩人なんですよ！！」

「うつ…桜がそう言うなら…」

ダメだ、桜には勝てない。

さっきまであんな事してたのに、私たちの間の壁がなくなったから今までギリギリ我慢してた物が溢れてやまない。それは桜も同じことらしく、どこか吹っ切れたという感じがする。

はあ…。

確かに感謝しないといけないわね。

でも…1発くらいは良いわよね？

s i d e o u t

s i d e : 士郎

よかった…。

遠坂と桜が姉妹だったってのにはびっくりしたし、今回の1連の事が全部コウジユの計画だと言つのに驚きだった。

自分なりに色々考える事があつた身としては、

いささか納得できない部分もあるが、桜達のためだったんだし構わないか…。

2人が嬉しそうにしてるのを見ると仕方ないと思える。

それにしても、計画した張本人は一体どこに――

パチ、パチ、パチ、パチ……

突然、けだるげな拍手が辺りに響き渡る。

コウジユか？

「中々に良い余興であつた……」

コウジユじゃない？

声からして男だ。

そして声のした方向を全員で見る。

そこには黄金に身を包んだ男が居た。

「しかし、飽いた。

舞台の終わった役者はさつさと降りろ。目障りだ」

一体何が起こつてる？

この男は誰なんだ？

これもコウジユのシナリオってやつなのか……？

side
out

どうでしたか？

結局、長くなりすぎたので仲直りして、金ぴかが出てきた所で次回と言う事にしました。

黄金に身を包んだ男…とは言っても聖戦士的な方ではないですよ？
いや、当たり前か…。

さて次回、金ぴかとの初邂逅、そして未だ出てこないコウジュはい
つ出てくるのか…。

楽しみに。

ではこのあたりで、感想お待ちしております。

『 stages2 : きーらーきーらーひーかー... inふえいと 』 (前書き)

ちょっと無理矢理感が大変な事になってるかもです...

では、どうぞ。

『stage32:きーらーきーらーひーかーるー…innふえいと』

side:士郎

いつの間にかそこに居た、黄金の鎧、同色の髪、紅い瞳の男。

そして辺りに浮かぶ数え切れないほどの武器。

いや、宝具。

ありえない。

コウジユもありえなかったがこちらかなりありえない。

改めて見るが、とてつもなく圧迫感がある。

それにしても、何故かいくつかの武器はそれが何であるか分かる。

ただ頭に入ってくるのだ。

ある名剣の原点であるもの、何かの原点としか分からないもの、まったく分からないものや、理解したくないものまである。

修行の際にコウジユに言われた事、『武器…特に剣等場合は注意して見る』というのを思い出し、見たわけだがあまりにも多すぎて圧

倒される。

しかし同時に、今の状況がどれだけまずい状況だということも分かった。

全ての宝具の刃先がこちらを向いているのだ。
良い状況のわけがない。

こいつもサーヴァントなのだろうか？

だが、聖杯戦争に召喚されるサーヴァントは7人と言っていた筈だ。

8人目？

いや、今はそんな事を考えてる場合じゃない。

こちらには怪我人が居る。

この状況を打破するにはどうすればいい…？

「では失せる…雑種…」

黄金の男がこともなげにそう言った瞬間、空中に浮いていた宝具全てがこちらに向かってきた。

まずい！！

とにかく俺の後ろに居るセイバーに遠坂、桜、を守ろうと、回収していたソードを盾に前へ出ようとしたが、それよりも早くキャスタ―と葛木が俺たちの前に出た。

「予定と少し…違う…わ…!!」

「だが、多少ずれる可能性もあるとも言っていた」

前に出たキャスターは障壁を張って飛来してくる宝具を弾き、葛木は懷から青い腕輪を出し、腕にはめた。良く見ると、キャスターの腕にもある。

その効果か、ぎりぎりといった弾き方をしていたキャスターの障壁が強くなった気がした。実際に先程よりキャスターの顔に少し余裕がある気がする。

「……ちっ」

それに対し、黄金の男が舌打ちをした。

そして次の瞬間、向かってくる宝具の勢いが増した。

だが、それをキャスターは弾き続ける。

しかし、障壁に守られていない部分、俺たちのすぐ横の地面がありえない位に決れていくことから1本1本がどれだけ破壊力を持つのが嫌でも分かる。

そんな光景に俺達は圧倒されてしまっていた。

「宗一郎様…今何分ですか？」

「後1分だ」

キャスターたちが何か会話をし始めた。

宝具の弾幕が障壁に当たる音で少ししか聞き取れなかったが、後1分とは一体…。

「小癪な…だが……」

黄金の男が、次は片手を上にあげたと思ったらその手に3本の剣が収まる。

そしてそれをこちらに投げてきた。

「っ！！？」

キャスターが何かに驚く。

次の瞬間、キャスターの腕と葛木の腕から先程の青いリングが砕け落ちるのが見えた。

そのまま3本の剣がキャスターと葛木を貫く、同時にキャスターの障壁が砕け、他の降り注いでいた宝具がキャスターと葛木を襲った。

宝具の弾幕が止まる。

何故か俺達には1本も当たらなかった。

だが、キャスターと葛木は明らかに致命傷となっていた。

「どうして…」

「坊やたち…は…いいから後ろに下がって…なさい……」

俺の口からやつと出た言葉をキャスターが遮る。

口元から血を流しつつも、笑みをやめないキャスターは黄金の男の方を改めて向く。

「……時間だ」

葛木が同じく血を口元から流しながら言った。

それにますます笑みを強くしたキャスターは驚く行動に出た。

「あらあら…全然効かない…わね…あなたの正体を聞いた…けど…この程度…?」

「何だと雑種？」

このタイミングでの挑発。俺たちは動けず、キャスターたちは放っておいても死んでしまっただろう程の傷を負っている。

黄金の男はもう何も話さずただ腕を上げ、こちらへ軽く振り下ろし

た。

「ところがぎつちゃん!!!!!!」

白い影、表現がおかしい気もするがそれが目の前に躍り出た。

って、コウジユ!?

居たのなら早く…

「はうあっ!」

キヤスターたちと一緒に貫かれた。

こうじゅううう!!!!!!?

何しに来たんだよ!?

黄金の男も思わず呆けてしまったのか宝具の弾幕を止めてしまった。

とりあえず言っておこう――

何でさ…。

s i d e o u t

s i d e : コウジユ

い、痛い……。

アチャ夫の無限の剣製に貫かれた時を思い出したよ。

アムリミテッド・ブレイド・ワークス

視界が光に包まれ、身体が修復される。

よし復活!!

ん？やっぱりMだったのかって？

そんなわけはねーよ、全力で否定させてもらっぜ!!

俺がわざわざやられに来たのは――

ゲート・オブ・バビロン

「覚えた!!王の財宝!!!!」

覚えるためだ!

(デデーン)

いや、さすがにもう分かるシチュエーションだよな。

でも、ただ覚えたわけじゃないんだぜ？

黄金の男…金ぴかが使ってる技、空中に浮いてる数々の宝具とそれを打ち出すのは奴が持つてる宝具、王の財宝ゲート・オブ・バビロンの力だが、俺は今、俺自身の能力として覚えたのだ！

いつだったか貰ったメールでもその内できるかもって書いてあったからやってみたけど、中々感覚が掴めないからこんな事をしたわけだ。

あ、前半の桜さん達の方がもちろんメインだよ？
ほんとだよ？

「バカな！？その力は我オレの……それ以前に何故生きている！？」

「そう、王の財宝だよ。
悪いね、覚えさせてもらった」

つと、ちよつと時間がかかったが金ぴかみたいに空中に出てきた出てきた。

俺の後ろの空間から、金ぴかと同じように武器達が顔を覗かせる。

ただ、金ぴかとの差異があるとすれば、俺の方は剣や槍といったものではなくおびただしい数の――

マシンガン（笑）

「ふん、なんだそれは。

そのような数が多いだけの現代兵器で我^{オレ}に勝てるとも思っているのか？

いや、所詮は猿まねか。王^{ゲート・オフ・バビロン}の財宝を真似たのは良いが、中身が無かったようだな。

財を名乗るなら、我^{オレ}の物ほどは無理だろうがもう少しマシなものを用意せぬか」

尊大な仕草でそういうギルガメツシュ。

ちよつとムカ…。

別に良いけどね、精々吠え面フラグ乱立してろ！金ぴか！

「バカにはしていないさ。ついでにいうと、この子達はあるたの財に劣らない活躍をしてくれるんだぜ？」

「ふん、弱い犬ほどよく吠えるというが正しくその通りだな」

俺からしたらアンタがそれだけどねwww

「試したら分かるよ。」

さて、行くぜ英雄王。武器の貯蔵は十分か？」

カードを取り出し、技をイメージする。

そして宣言。

「弾符『メセタ・ファイバー』！！！！！！！！」

「ふん、行けえっ！！！！！！」

金ぴかの武器達と俺の銃達の弾丸が互いを撃ち落とし合う。

「なにいつ！！？」

「H A H A H A、どんなもんだこのやろー」

いやあ、おもしれえ（笑）

なぜ、ただの弾丸が宝具を弾けるのか、まったく分からないんだろ
うな。

ま、簡単に言えば『メセタ・ファイバー』こいつがキーワードさね。

メセタファイバーってのは、P S P o 2 に出てくるマシンガンの技
だ。この技はP P を消費して行う技ではなくお金を消費して弾丸を
放つというものだ。
バレット

この技の利点は、メセタ、つまりおカネが無くならない限り撃ち続
ける事が出来ると言う所にある。

ついでに言うと、金ぴかの宝具を打ち出すというのは、一つ一つの
真名解放を出来ているのではなく通常時の宝具の神秘に依存してい

る程度の様だ。対して俺の宝具の効果発動は『概念を操る程度の能力』から来るものなわけだ。

つまり……

「ハチの巣にしてやんよお!!」

あはははははは!!!!!!

見る! 宝具(金ぴかの)がゴミのように打ち落とされていくぞ!!!!

ま、マシンガンは元々一発の威力がかなり低い。

いくら、ランクSのものを使おうとも拮抗がやっそこさみたいだね。

んじゃ、次に行こう。

カードを取り出し、

またしても効果を想像し、スペルカードを作成する。

そして宣言。

「終戦『ファイバータイム』!!!!」

マシンガンを撃ち続けたまま、追加スペル発動。

効果は、マシンガンだけでなく全ての重火器を取り出しつつ放すというもの。

装填する技は勿論全て攻撃力向上タイプですとも、はい。

「ちいいいっ！！！」

金ぴかが本腰を入れて宝具を撃ち出して来る。
だがしかし、もう遅い（笑）

マシンガンは撃ちつつ付けたまま出てくる重火器。
ハンドガン、ツインハンドガン、クロスボウ、ロングボウ、ライフ
ル、ショットガン、グレネード、レーザーカノン。

正にリアル弾幕の完成（笑）

しかし、まあいつものごとく俺はポ力をやらかしちまうわけだ。

「ちょ、コウジュ！！兆弾！！兆弾がつのわあっ！！！！剣も来てえ
！！！！」

「コウジュ止めてください！！弾ききれません！！！！」

「キャアー！！！！かすった！！！！今かすっイヤー！！！！」

「…はう（ばた）」

あれー？

そして続けて聞こえてくる、ゴゴゴゴギギギギという空間が軋むよ

うな音。

はて？

って、あ……。

やっべ。とにかく撃ちまくったから、流れ弾でこの空間が潰れかけてる！？

そうか、一応ちよつとやそつとじゃ壊れないようにしてとは言ったけど、術者は後ろで死んでる（リアルに）んだし、神殿の保持ができな状態で、あれだけの宝具やら攻撃やらで空間も飽和しちゃったわけか！？

こりゃ、やばい。

「ちつ、空間が持たんか…おいその雑種！！」

いつのまにか互いに撃ち合いをやめており、金ぴかは俺に向かって何かを言ってくる。

「なんじゃいの？」

「貴様！王の財を真似るという大罪、またすぐに償わせてやる！！覚えておれっ！！！！」

それだけ言って、金ぴかは消えた。

何その囁ませ犬発言。

最初に懸念してたより金ぴかを圧倒するのは簡単かね？
俺の能力もupしてるし…。

計画の変更もあり…か…？

ってか、今の霊体化したのか？いや、空間移動系宝具の原点を持ってもおかしくはないからそっちっぱいかな。

いいなー。王の財（もどき）は手に入ってたけど、どうせなら中身も欲しいなー。

確かに俺が持つてるのは規格外だけど、どうやってもPSP02の世界観上近未来的なのとかが多いから、明らかに宝具っぽいのも欲しいっす。

「ふむ……」

「こらー！！ふむとかのんきなこと言っでないで脱出の手伝いをしなさいよ！！」

「うおおっ！！？」

やばい。そうだヤバい状況だったんだ。

「扉！！扉その辺にない！？」

これはさっさとスペル使っでいつものように移動しようと、扉を探す。

「あんたがなんか考えてる間に消えたわよそんなもんは！！ってああ！！出口に続く道も！！」

以外に元気だなー凜…。とか現実逃避してる場合じゃないやー！

「すまん！！失敗しても俺を恨むなよ！！」

俺は、『ツミキリ・ヒョウリ』、以前にイリヤとライダーに見せたツインダガーを出す。

ハンドガードの付いた巨大なナイフを逆手に持ち、内包する『空間操作』の概念を能力で操作し、士郎達の方を向く。

実はこれ、あんまり練習出来てないんだよね。現状どうしても距離とかの制約が着いてしまう。

「え、ちょっと!?!?恨むなってどうい——」

「答えは聞いてない!?!ツミキリ・ヒョウリ!?!空間を切り裂けつ!?!」

ヒョウリを士郎達に向かって振り下ろす!!

「うわああああ!?!」

「っ!?!?」

「いやああああ!?!」

「.....」

思い描いていた空間の裂け目が士郎達のそばに出来、飲み込まれていく。

とりあえずは上手くいったかな?

すかさず俺も、キャスターと宗一郎氏を抱えて裂け目に飛び込む。

なんか、また蘇生が遅れてるし、空間またぶっ壊しちゃったし、これはまたまた怒られるしかないかね？

そんな、緊張感がない事を考えながら俺は飲み込まれていった。

ちよつと待て…小次郎どこ行つた？

あれ？

s i d e o u t

s i d e : 士郎

「うわあああ!?!」

「きゃあああああ!?!」

「…!?!」

俺たちはコウジユに双剣？で斬られたと思ったたら落ちる感覚があり、
そしてしばらくしたら――。

「ぐはっ！？ぐえっ！！？」

「きゃっ！？」

「くっ！？」

地面に打ちつけられた。ついでに背中におm…ゲフン…遠坂様が乗
ってこられました。

セイバーは横で着地したのが見えた。

…そんな場合じゃなかったな。状況判断をしないといけない。

「あれ？ここって柳洞寺の門？」

遠坂の声に反応し、俺も当たりを見渡す。

確かにここは柳洞寺の門前…ってことはさっきの双剣は移動するの
が能力だったのか…さっきみたいに見ても分からないってことはか
なり高ランクってことだな。

今更だけど、この武器の情報が分かる奴は何でなのかい加減教え
てくれないだろうか…。

助かるって言えば助かるんだけど、ちょっとだけ気味悪くなってきた。

ニヤニヤしながら、チート野郎めとか言ってきたから大した理由
があつて隠してるわけではないと思う。というかコウジユが言うな。

……現実逃避もここまでにしておう。

「皆無事か？」

「私は大丈夫よ。桜も居るわ」

「私も問題ありません」

「私もだ」

じゃあ後はコウジュだk……。

！？

「今一人多くなかったか！？」

「私の事か？」

そこに居たのはどっかの紅い皮肉屋みたいに小さくなったアサシンだった。

「あ、あんた何で……」

「ふむ？私はずっと居たぞ？」

え？

いや、確かに金色の男が表れる前に居たのは覚えてるが、その後は記憶にない。

「ただ、私はずっとクラススキルで姿を消していたがな」

おい…。

「あんたサーヴァントなら闘いなさいよ！！」

遠坂はさっきの、キャスター、葛木と黄金の男との戦いの際の事を言っているのだろう。

あの二人は敵だったが、コウジユの計画だった事から味方、少なくとも敵ではなくなった。かばってくれたりもしたし…。そんな2人が目の前で貫かれて倒れていくのを見せられたんだ。遠坂が言いたくなるのも当たり前だろう。

「ああ、そのことかそれは――」

アサシンがごく平然と何かを話そうとするが、すぐに遮られた。

「すたんっ、着地っと。

10点！！」

コウジユが上から何かを二つ抱えて目の前に落ちてきた。恐らく自身もあの宝具である神殿から抜けて来たのであろう。

バーンという効果音が似合うような登場の仕方をしたコウジユの手にある二つのモノに目をやると、それはキャスターと葛木の死体だった。

「おおう？何この状況？」

「コウジユ…それって……」

「ん？キャスター達だよ？」

ああそっか士郎達は知らなかったっけ。

大丈夫、多分もうチョイしたら起きると思うから」

そう言いながら、コウジユは2人の遺体を改めて肩に担ぎ直し、柳洞寺の門をくぐって中へと入っていく。

「けど、起きるって言ったって…2人は…」

「ああ、忘れてたわ…学校の時のもあの子だったけ…」

遠坂は頭痛が痛いと言った感じで頭を押さえながら同じように中に入っていく。

セイバーとアサシンは無言で同じように入っていく。

あれ？ほったらかし？

慌てて、桜を抱え、俺も追従して中に入っていく。

・ ・ ・

「あのさ、柳洞寺に居た筈なのに何でいつの間にか俺の家に居るんだ？」

さっきまで柳洞寺に居た筈なのに今は俺の家に居る。柳洞寺の門を越え、中にある家屋の引き戸を開けたらそれは俺の家の引き戸になっていた。

ふと後ろを見たらやはり柳洞寺の庭やらが写っているのに前を向いたら俺の家の中…。

今更な気もするが思わず口に出てしまった俺は悪くない筈だ。

あ、桜は近くの部屋に真っ先に寝かしてきてある。

「説明めんどいから俺の能力で空間繋げた結果だと思っときゃいいよ。」

そついやさ、さっき何の話してたんだ？」

俺がぼろつと言ったことに適当に答えながら、担いでいたキャスタ―達を下ろし、自身の疑問をぶつけてくる。

なあ、俺ってこの家主だよな？

別にえらぶろうつてわけじゃないけどさ…。

泣いて良い？

「いいけど、その次は私の質問だからね？」

さっき話してたのはアサシンの事よ。こいつバトルジャンキーみたいなこと言ってたくせにさっきまでずっと隠れてたらしいわ」

「あ、小次郎隠れてたんだ」

「うむ、最初は当初の予定通り私も時間稼ぎに参加しようと思ったのだがな、ほれ、このように身体が小さくなってしまつて刀が振れなかったのだ」

「ぶはっwwちよ、それ……」

つて俺笑えねえじゃん…orz」

コウジユはアサシンの事を聞き噴き出した（俺もちよつと危なかった）がすぐに何故かものすごい自己嫌悪に陥った。

「アサシンが小さくなつてるのはどうせアーチャーの時と一緒になんでしょ？それからそっちの死体やつてる二人も。

どういう理屈かはこの間そこまで教えてくれなかったけど、そういうスキルをあんたが持つてるのは聞いたし、今更あんたが何しようとかあんまり驚かないわ」

遠坂、俺はもうちよつと時間がかかりそうだ。

魔法って何なんだろうな…。

「私が聞きたいのは今回の事件を起こした理由よ。それからあの金ぴかの奴。」

キャスターが言っただけ、全部あんなの掌の上だったんでしょ？」

「まーね」

「まーねって…軽すぎるだろ！こっちは桜の事とか色々焦ったんだぞ！…いくら何でも怒るぞ！！」

声を荒げて言う俺にコウジユは唐突に真剣な顔になって俺に言うてくる。

「ホントに悪いね。でもさ、あんたには嫌でも強くなってもらいたいんだ。だから今回みたいな事を起こした。金ぴかのあいつの件は俺自身の部分が強い。でも、キャスターの件は全部士郎達の、いや、ほとんど士郎のレベルアップのためだ。」

理由はまだ言えない。いや、これからも言えないかもしれない。しかも、ほとんど俺の独りよがり。偽善かもしれない。悪と呼ばれることに近いかもしれない。

けど、これだけは信じてくれ。

俺はハッピーエンドが好きだ。その為には必要な事なんだ」

コウジユの紅い瞳に見入る。いつものおちゃらけていて楽しそうな瞳ではなく、ただ真剣さを映したその瞳は俺に何も言わせなくする卑怯だ…とも思う。怒れないじゃないか。

それは遠坂も同じだったらしく――。

「そんな目されたら強く言えないじゃない。まったく…」

「ゴメンな…」

軽い口調とは裏腹に本当に申し訳なさそうに言ってくる。

「良いわよ…それで？話せるとこまでの説明をしてくれるんでしょ
うね？」

「ああもちろんだ。
つとちよつと待ってくれ。キャスター達の蘇生が遅い。今回はなん
でだろ…。直ったと思ったのに…」

仕方ないか。士郎、この二人寝かせるのにどつか借りて良い？」

もうコウジユはいつもの常にどこか嬉しそうにしてるコウジユに戻
っていた。

「あ、ああ。空いてる所を適当に使ってくれ」

「さんきゅ」

「私が見ておこう」

俺が言うと同時にコウジユが二人を担いでアサシンと共に部屋を出て
いく。

「はあああああ…」

コウジユが出てすぐ、遠坂は机に項垂れた。

「大丈夫か？」

「大丈夫なわけではないでしょ。正直満身創痍よあれだけの事があったんだから。しかも、詳しい事もどこまで聞けるんだか分からないし、どっかに当たる事も出来ないし」

そう…だよな…。

普通に今に居るから忘れてるけど、戦いの後なんだ。項垂れるのも仕方ない。

「どうせだったらコウジユに先に回復して貰うんだったわ。戻ってきたらしてもらおう」

そうこうする内にコウジユが戻ってきた。

遠坂が今言ったように回復だけしてもらい話を続ける。

「さて、話の続きだけどこから言おうかねえ」

「とりあえずはあの金ぴかの事からで良いわ。一体何者なの？」

「あいつは——」

「あの者はアーチャー。前回の聖杯戦争に召喚されたサーヴァントの一人です」

コウジユの言葉に重なる様にセイバーが言った。今まで黙っていたので少し驚く。いや、知っている事の方に驚く。

「あの者に私は「求婚された？」！？
どうしてそれを！？」

「今更その辺は気にしない気にしない」

「……」

コウジユの言う通り、私はあの者に聖杯戦争の中求婚されました。勿論、斬って捨てましたが」

「ちょ、ちょっと待って！

セイバーは前回の聖杯戦争でも召喚されてたの！？」

「はい。

そしてあの者と剣を交えています。あの大火災の中で……」

大火災。

その単語を聞いた瞬間。町が燃えていくあの光景が、町の皆が助けを呼ぶ暇もなく燃えていき、呼べてもすぐに炎にのまれるあの地獄が脳裏に浮かぶ。

「前回私は最後の二人まで残りました。もう一人はあの黄金の男です。マスターは分かりません。いえ、あの者の正体も結局掴めませんでした」

「どういうこと？あれだけ派手に宝具を使ってるんだから分かって
も良さそうなのに」

「では、凜。あの数ある宝具の中に一つでも見覚えがあるモノが
ありましたか？」

「それは…」

俺も思い出す。けど、いくつかは解かる事は出来なかったは知るこ
とはできた事を思い出す。

「原典…」

「士郎？」

誰が言ったのか疑問を投げかけてくる。

だが俺は、あの光景を見て知った事をただ口に出す。

「原典だよ。何でかは分からないが頭に入ってきた。全部かどうか
は知らないがいくつかは宝具の原典というものらしい」

「宝具の原典って…どういう——」

「正解だよ士郎。特訓の成果ありってことかね。
とりあえず後は俺が言うよ」

良くわからない事だらけだが、セイバーに会話を譲ったコウジユが
俺の続きを言ってくれるらしい。

「コウジユはあの者を知っているのですね？」

「ああ。」

それと、士郎が言った原典ってのは本当だよ。

実は士郎には真眼スキル、剣とか限定だけど適性があるんだ。まだ全然だけど、それでもいくつか分かったみたいだね」

そこで指をピンっと一本立ててコウジユは続けた。って、真眼とか初めて聞いたんですが？

「さて問題です。数多の宝具の原典を湯水のごとく使い、自身を王と呼ぶあの男は誰でしょう？」

もう、微妙に俺の事について流される事には慣れてきてしまったので、とにかくコウジユが出した問題を考える。

「原典…大量……」

「そして…王…」

「まさか……」

どうやらセイバーと遠坂が同時に答えを導き出したようだ。

「はるか古代にあらゆる宝具はたった一人の元にあったわ」

そこで俺も分かった。

つまりあいつの正体は――。

「『古代ウルクの、最古の英雄王、ギルガメッシュ』」

「That's right」

side out

side : コウジユ

金ぴかの正体を皆にバラした。原作ではこの時点では士郎達は金ぴかの正体には気づけないんだが、前もって知ってる方が対処はしやすい筈だ。これからは士郎達もあいつと相對する可能性がある。俺がすぐに助けに行けない場合、俺が行くまではもってくれないと助けられない。

「なんだってそんな奴がまだ現界してるのよ」

凜が俺に聞いてくる。えつとどこから話そうかねえ…。

「ちょっとややこしい部分だから整理しながらいくぜ？」

まず、凜はサーヴァントが現界し続ける方法って何があると思う？」

「現界し続ける方法？」

……えつとちょっと待てね。とりあえず前提条件としてサーヴァントは聖杯を介して現界という神秘を可能にしてるから聖杯は必要不

可欠…。聖杯はあらゆる願いを叶える願望器だから聖杯で現界を願えば良いのかしら？」

「さすが凜だね、おしい。確かに聖杯によってサーヴァントを現界、いや受肉させる方法はある。

けどな、前回の聖杯戦争には勝者は居ないんだ」

「え？それって…」

「事実です凜。コウジユの言う通り前回の聖杯戦争で景品である聖杯を得た物は居ないのです。

私がこの手で、前回のマスターである衛宮切嗣に令呪で命じられて壊させられましたから」

「「!？」」

凜と士郎が同時に驚く、ただし、2人が驚いたのは月の部分だろうな。

士郎は衛宮切嗣という部分に、凜は聖杯をわざわざ壊したという部分に。

「まあその辺はセイバーに聞いてくれ。俺は知識として知っているだけ出し、全部が全部知ってるわけじゃないからさ」

聖杯が穢れている事はまだ言えない。だから、切嗣が聖杯を壊した理由も言えないんだ。すまんな士郎。

「それでさっきの続きだが、あの金ぴかは聖杯ではなく他の力によってその身を現界し続けている。

でもさ、考えてみたら答えは単純なんだよ。

聖杯の役割は3つ。まず呼び出すためのゲート。そして聖杯戦争中のサーヴァントの現界の維持をバックアップ。そして願望器としての器。

ここで重要なのがバックアップの部分だよ。確かにサーヴァントの維持にマスターからの供給は必要だ。けどさ、サーヴァントという一種の奇跡を人一人で何日も現界し続ける事が可能か？戦争中は『魔法』に近い宝具という奇跡も使用するんだぜ？」

「…？」

なるほどね…そういうことか…」

「？」

ホントに凜って優秀だよ。今のだけで分かれるとかさ。

「つまりだ士郎。サーヴァントが現界し続けるだけなら聖杯が必ずしも必要じゃないんだよ」

「いや、つまりどういうことだ？」

「士郎、つまりね。既にサーヴァントはこちらに来てるんだからゲートの役目は必要ない。だから後の問題は魔力だけ」

そこに俺が続ける。

「そう、聖杯が無いと現界させ続けるのがあくまで困難なだけだ。だったらだ、足りないならどっかから取ってくればいい」

「でもコウジユ。私も自分でそう考えたとはいえ、他のところからっ

ていう部分が分らないのよ」

「そうだよ。そんなことが可能だとしても、困難って言う位なんだから相当の魔力が必要なんだろう？」

「おいおい、忘れちまったのかい？この町はあんたらの町だろ？最近何が起こってた？」

「ちょっと待って！

町って言ったらガス漏れ事件の事よね？でもあれはキャスターが魔力を吸うために……」

そこで、考え事をしていた士郎がポソリポソリと言い始める。

「いや……遠坂、まだある。他にも事件があった。

俺も詳しく聞いたわけじゃないけど、刀とか槍の類の長物での辻斬り事件」

「それだよ」

実際は他の供給方法も使ってるがそつちを言っちゃうと士郎達の事だ。猪のごとく突っ込みまうから言えない。それと、まだ触れてないがああ金ぴかのマスターについてもな。

「そんで問題はさ……。

新たにこの地には聖杯が現れたからあいつも聖杯に触れる事が出来るって部分なんだ。

聖杯に触れられる条件はサーヴァントである事だからな」

「最悪…。辻斬りめいた事をしてまで生き残ってる奴に聖杯を得る権利が残ってるなんて…」

「ああ、あいつに聖杯を渡すわけにはいかない」

「私も渡す気はありません」

決心をする二人。

「俺も自分の事を大概チートだとは思ってる。

けど、あいつの持ってる宝具の中には俺と相性の悪いやつもあるかもしれないし、俺はかなり…ごほん…えっとちよつと不器用だから予想外の事が起こった時はどうなるか分からない」

ここまでは原作知識があつたし、それにそつて何とか事を運べたから金ぴかとかの動向もある程度予想はできた。

けど、ここからは…。

ここからは何が起こるか分からない。

「後少し、後少しでこの聖杯戦争も終わる。
だから絶対に生き残ってくれよ?」

「「「ああ。(ええ。)(はい。)」」」

side out

小話

「ねえコウジユ」

「はいはい？」

「きれいに纏めたつもりかもしれないけど、私の不満は解決してないわよ？」

「え？」

「話を聞いてたら聞きたい事も増えたし、じっくりO H A N A S H Iしましょ？」

「…ジーザス」

ドナドナドーナー（泣）

小話2

「あれ？縁側になんか座ってどうした…ってなんで今にも泣きそうな顔してるのさ…」

「お金をな…勢いで使いすぎてしまったんだ……うう…」

「…えっと」

「ああ、気にしないでくれ。自業自得なんだよ。

ちょっと調子にのっちまってパーっとなっちゃったただけだからさ。

……はあ……」

ご利用は計画的に（泣）

『stage32:きーらーきーらーひーかー…innふえいと』(後書き)

どうでしたか？

聖杯の設定だとかはウィキ見ながらしたりとか矛盾はないと思うんですが、あまりにもおかしかったらお教えください>(一一)<

誤字も…直せたと思うんですが…こちらもよろしく願いします>(一一)<

では、今回はこの辺で…。

感想、お待ちしております。

P.S.

自分でコウジユが今使える技術を纏めてみたら笑うしかなかったです。

チートwww

なのにまともに勝ったことないとかwww

『stages:」ランサー」じゃなくて」らんさー」…ここ大事(前編)

どうもです。

またやっちゃったです。

前後篇:orz

あ、今回は説明?みたいな部分があるんですが、あまりにも矛盾しているとかがあったら報告してくれると嬉しいです。

では、どうぞ。

『stage33:”ランサー”じゃなくて”らんさー”……ここ大事(前編)……』

side:コウジユ

ちわつす！

み、みんな聞いてくれ！！

ちよつと予想外の事が起きた。

今起こった事をありのまm(ry

とにかく何が起こったかというとな……。

今は、話が終わった後、もう遅いからって一旦寝ることにして、次の日の朝だ。

アチャ夫さんにお茶を入れてもらって居間でくつろいでたんだ。

そしたらさ、看病に行ってた小次郎が2人が起きたらしく連れて来たんだ。

今回は何で復活遅かったんだろーとか、小次郎がお姉さま方が放っておかない『ユーやっちゃいなYO』の人の事務所に所属できそうな感じの少年になったなーとか考えながら後続で入ってくる二人を見てただけどさ……。

そこから問題なんだよ……。

まず、メディアさん。

御希望通り、ロリではないが大人でもない微妙なラインというのは成功したみたいだけど、元々神聖な雰囲気をもった美人さんだったから、小さくなって可愛さプラスしたら『マジカルめいあちゃん』みたいな感じになってしまった…。なんだこれは…予想外の破壊力です…。

そして、次。

次が更に大変な事に…。

メディアさんの次だから勿論、葛木宗一郎氏なんだが…。

入ってきた瞬間の俺の反応は『どこの七夜のしつきーですか？』って感じた。

キャスターさんの強い（強迫じみた）希望により宗一郎氏もキャスターと同年代、シヨタよりは上だが（ry な年齢に現在になっっているわけだが、顔がそこそ似てる。そこに拍車をかけるように雰囲気似てるんよ。こう、暗殺者のな？でもまあこっちは本家に比べてギラギラした感じとかが無い分、『文化系な七夜さん』といった感じになってしまっている。

何という予想外な宗一郎氏の幼い頃…。

とりあえず一言言わせてもらおう、イケメン爆発しろ…。

そういえば、キッチンに居るアチャ夫さんから『何！？プリュンス
タッドの姫君の…いや、違うか…』とか聞こえてきた。ってかあんな見たことあんのかよ…ってことはこの世界って月姫の関係者やっぱ居るのかね？

いや、考えるのはよしておこう…。

なんか変なフラグ立っちまったら目も当てられねえからな…。

あれ、この時点でフラグだったりする？

s i d e o u t

s i d e : 士郎

キャスター達が起きて来た後、少しひと悶着があったが今はそれは置いておこう。

桜はまだ寝ているみたいだが、キャスターがもう起きるだろうという事で、朝ごはんは準備だけして待っている。

とはいっても、アーチャーがやってくれたので俺は手持無沙汰だ。だから、朝特有の霞がかった庭をなんとなく歩いていた。

すると…。

「士郎…ですか…」

「セイバー、こっちに来てたんだ…」

セイバーの横に行き、少し沈黙が場を包むが聞きたい事があったのを思い出す。

「なあセイバー、少し話があるんだが良いか？」

「なんでしょうか？」

「親父の…ことだ…」

「切嗣ですか」

「ああ、前回のセイバーのマスターだったんだよな…？
どうして言ってくれなかったんだ？」

「それは…言いにくかったからです。

正直に言つと切嗣がどんなマスターであつたかあなたに言いづらかった。私はあなたの過去を見ました。そのあなたの中の切嗣を壊したくはなかった」

それって一体…。

「切嗣は生粹の魔術師でした。良くも悪くも…。10年前、コウジユが昨日言っていたように最後まで私と切嗣は勝ち残りました。そして、私がああ金色のアーチャーと対峙している間に切嗣は相手のマスターを倒したのでしょう。確かに聖杯は私たちの前に現れました。」

しかし切嗣は最後の令呪を使い、私にその聖杯を破壊させました。次の瞬間にはあの大火事が起こっており、聖杯が無くなったため私は英霊の座へと還りました」

何故親父は聖杯を破壊したんだろうか。

昨日コウジユははっきりとは言わなかったが、今セイバーが言ったように親父は勝利して正規の手順で聖杯を手に入れたんだろう。

なのに…。

分からない…。

「私は今でも信じられません。私の記憶にある切嗣はまさしく生粹の魔術師。己が目的のためには手段を選ばず、阻むものは何であれ排除する。残忍というわけではなかったし、殺人鬼というわけではなかった…。けれど彼は、あらゆる感情を殺し、あらゆる敵を殺した。」

そこまでして彼が信じたモノが何であつたかは私にはわからない。ただ、その目的であつた聖杯を前にして、彼は私に破壊を命じた。あの時ほど、令呪の存在を呪った事はありません…。

しかし私は、再び聖杯戦争に参加する事ができた。

今度こそ私は、聖杯を手に入れる」

拳を握りしめ、自分に言い聞かせるようにセイバーは宣言した。

聖杯を手に入れることは俺も賛成だ。あんな危ない奴に渡す事はない。

だが――。

俺は昨日から考えていた事をセイバーに言うことにした。

「聖杯があれば、こちらに居られるんだろ？ だったら――」

「私は…残るつもりはありません。聖杯を手に入れ、元の私に戻るだけです」

「そして、王の選定をやり直すのか…」

少し前に俺は、セイバーの望みを聞いた。

――王の選定をやり直す。

それをセイバーは望んでいると言った。

セイバーはアーサー王、騎士王と呼ばれる程のブリテンの伝説の王だ。伝説の内容は諸説あるが、岩に刺さった剣を抜き王となり、円卓の騎士と共にブリテンを統一するというものだ。そして、その終わりも…。

幾多の神秘、伝説に包まれたアーサー王の終わりはアーサー王の死と共に国が滅びる事で締めくくられる。

そしてセイバーは、その王国が滅びた原因は自分にあるから、過去に戻り、自分が抜いてしまった剣による選定をもう一度行おうとしているのだ。

だがそれは――。

俺はセイバーの過去を何度か夢で見た。令呪による繋がりのおかげで、記憶が夢として流れているのだろうと言っていたが…。

とにかくその夢きおくの中で見たセイバーは王としての責務をちゃんとこなしていたと思う。自身の心を消し、国を治める王システムであるうとした。その結果は伝説に残っているようなものに相違はない。

ただ、その王システムを見て民は思ってしまったのだ。アーサー王には心が無いのでは…と。

王システムが求めたのは効率、確実な勝利だ。それは確かに勝利をもたらす。だが、効率の為には捨てる必要のある物もある。

それが民に少しずつ、けれど確実に不満を蓄積させていった。

その結果起こった謀反。それは、アーサー王が遠征に出ている際に起こった。国に帰ってきたアーサー王はその自身が守らなければならぬ国に自ら攻め込んだ。その戦の中で致命傷をセイバーは負ってしまふ。

謀反を起こした民や騎士が悪いとは一概には言えない。けど、アーサー王、セイバーだけが悪いわけでは決してないと思う。

それを全て無かった事にするというのがセイバーの願い。

俺が偉そうに言うのはおかしいかもしれない。けど、これだけは言

える。

そんなのはおかしい。

王の責務は十分に果たしていたんだ。それでも国は滅びたんだ。ならそれが、こんな言い方はどうかもしれないが運命だったんだと思う。

「セイバーはもうここに居るんだ。後は自分の事をやれば良いじゃないか」

セイバーは何も答えてくれない。

「自分を変えるのに、過去を変えるんじゃないかって居間を変えるんじゃないダメなのか？セイバーは今ここに居るじゃないか！」

思わず、大きな声で言ってしまう。

それに対しセイバーはしばらくの沈黙の後――。

「士郎、もうこの話は終わりにしましょう……」

「……！？」

それだけ言うと、セイバーは中に入って行ってしまった。

「馬鹿野郎……」

つい、口に出してしまう。

どうやってら分かってもらえるんだ？

中に入る気にもならず、ただそこに立ちつくす。

「女の子にやろうはねえんじゃねえの？」

どこからか突然声が響いた。この声はコウジユ？

「いよつと……」

スタッという音と共に上から俺の目の前に降ってきて、着地する。

「む、のぞき見は良くないぞ……」

聞かれていた気恥かしさから、少し反発した言い方をする。

「言つとくけど、俺は最初から居たんだけ？そこにセイバー、士郎……と来て話し始めたから降りるにも降りれなかったんだよ。俺、基本獣に近いから耳ふさいでも聞こえるし」

コウジュは、俺は屋根に上ると降りれなくなる呪いでもあるのかね…と良くわからない事を言いながら、やれやれといった感じで首を振る。

そうだったのか。

でも、やはり聞かれていた事実は恥ずかしさを消してはくれない。

「そんでさ、少年は何を悩んでるん？」

「少年って…どう見てもコウジュの方が――」

「俺の方が年上だつての！！」

それにサーヴァントに見た目関係ないし」

そつえばそうか。

でも、見た目が…な。

今怒ってるのもぶんぶんって擬音語が使えそつな感じで年上には“まったく”見えない。

「おい、てめえ。今俺にぼこぼこにされても文句言えない事考えなかつたか？」

「い、いやいや、考えてない考えてない」

見た目はあれだが、軽く殺気を感じたので慌てて否定する。

「ま、いいや。で結局なんなのさ？」

「えつと…」

言いくいって…。

これって一応恋愛相談みたいなもんだろ？

見た目だけとはいえ、俺より小さい女の子に言うのは憚^{はげ}れる。

「ま、居たから大体分かるけどな」

「って、そうじゃないか！！だったら空気読んでくれよ！言いくいに決まってるだろ！！」

「あえて読まなかったに決まってるじゃないか」

何こいつ当たり前の事言ってるの？みたいな顔をされた…orz

でもまあ聞いてたんならと、少しずつ俺は話し始める。

「あのさ、聞いてたと思うけどセイバーの願いの事なんだ」

「過去の改ざん…ね…」

「ああ。でも俺はそんなことよりセイバーには前を向いてほしいんだ」

「難しい問題だなー」

「なんでだ？」

「だってさ、人間誰しもやり直したい過去の一つや二つあるだろうよ。それがセイバーの場合はちよつとばかり規模が大きいだけさね」

「ちよつとばかりして…」

コウジユは過去の改ざんをセイバーはするべきだって言うのか？」

「うんや、だから難しい事って言ったんだよ。客観的に見れば、どちらの間違っているし、どちらも合っていると言えると思うね。」

王の責務、セイバー自身、そして士郎、歴史の重さ。どれも視点もベクトルも違うんだ。答えなんてそうそうないよ。

ただ…俺的にはセイバーはこちらに残ってほしいけどね」

「コウジユ的にはってのは何でなんだ？」

「いやだつてさ、本人はどう思ってるかは知らないけど、アーサー王の伝説は決して悪い意味で残ってるわけじゃないじゃないか。それってつまり、当時の民は氣に入らないから謀反起こしたかもしれないけどさ、歴史はアーサー王を騎士王と言うほどに認めてるわけだ。童話や、劇なんかになっちゃう位にさ。」

確かに王としてまだやりようはあったかもしれない。けど、何をどうやったら正解なんてないと思うんだよね。もし、歴史の改ざんに成功して選定からやり直したとして、その後の国は本当にセイバーが思ってるようなちゃんとした歴史を歩むのか？

アーサー王が守って、生きて、子孫を残した人々が同じように生を全うできるのか？」

俺はいつの間にかコウジユの話に入りこんでいた。ただただ聞き入ってしまう。

「だからと言って、生きていた人は生きていくべきで、生き返る可能性があるので歴史では死んでるから死ねというのもおかしい話で

はあるけどな！」

ま、ここまでは客観的な話だね」

最後の部分に俺はハツとする。

そうか、そういう見方もあるのか…。

誰しも生き返れるなら生き返りたいだろう。

「ほんで、こつから俺の感情的な話になるけどさ。

俺はセイバーに、王として自身が辿った道を、救ってきた命に後悔はしてほしくない。

良かれと思って救ってきた命なんだ。最後に国は滅びたかもしれないけど、その中で皆が感じる事が出来た幸せまで否定してほしくないはない。

そんなのって悲しいじゃん？

それにセイバー自身にも幸せになってほしい。

俺はセイバー自身の幸せを見つけて欲しい。

俺は傲慢だから中の良い人が幸せじゃないのは嫌なんだ」

「……」

「つと俺の話は置いとこうか。

そんで士郎的にはセイバーに残ってほしいんだよね？」

「ああ、もちろんだ」

「いやー、青春してるねえ」

「茶化さないでくれ！」

「ゴメンゴメン。」

よし、じゃあおいちゃんからちょっとしたヒントを上げよう。

セイバーは多分今迷ってると思う。王の責務か、自身の感情か……。それは士郎にも言えることだね。士郎も居てほしいという気持ちとセイバーの事を思う気持ちで揺れてる」

「気持ち……」

改めて思い返す。

多分俺は、あの土蔵で、初めてセイバーに会った時点で惚れていたんだ。

けど俺はセイバーの心に触れていく中で、セイバー自身の事とか色々と考えて、結局よくわからない事になって――。

「まだ時間はあるんだ。そう急ぎなさんな。といって、時間が有り余ってるわけではないから気を付けないといけないのはいけないんだけどな。」

とにかく考えてみ？」

そう言ってコウジユは家の方に向かう。

「士郎、朝飯行こうぜ。どうやら桜が起きたみたいだぜ」

「分かった」

考えてみよう。俺は結局どうしたいのか。どうしてほしいのか。最

初から――。

「あ

」どうした？」

コウジユが途中で立ち止り振り向く。

「さっき俺が言った事、あくまで参考程度で自分がどうしたいかを考えてくれよ？あれが正解ってわけでもないし。何よりさ…えっと…恥ずい…／＼」

コウジユの表情にちょっとドキツとする。

俺の方が背が高いからコウジユが自然と上目使いになり、白い肌にほんのり紅みが増したコントラストが…ってダメだ！俺は一体何を！？

振り切るように首を振り、コウジユに返す。

「わ、分かった、了解した、無問題だ！」

「…？」

まいつか、んじゃ行こうぜい」

コウジユはそれだけ言って、タタタッと居間へ向かう。

何だか知れないが、いろんな方向に罪悪感が浮かび、少し立ち止まる。

ご飯終わったら、ひとまず座禅から始めるべきかな……。

side out

side : コウジユ

ご飯を食べ終わったんで、今日は用事があるからそと行こうと玄関まで行ったんだが、そっぴゃ話を桜達にしないといけないんだった。

とててとと戻る。

居間に入ろうとしたらすれ違いで士郎が出ていく。

なんか、逃げちゃだめだ逃げちゃだめだって、どこぞのセカンドチルドレンばりの事をぼそぼそ言ってたけど、一体何と戦うんだよ……。

まあいいや、はなしはなしと。

「はい皆集合」

手をパンパン鳴らして言う。

その声に集まって来る。

元々今に座っていた凜、セイバー、キャスター、イリヤに、片づけをしていた桜、アーチャーが集まる。

宗一郎氏は学校だ。ついでに言うと、虎の姉さんも一緒に「飯食べたけど同じく仕事で学校へ。休校中でも先生の仕事があるそうだ。」

虎姉さんの出番？

さあ？ww

「さて、今回集まってもらったのは……なんだっけ？」

「私に聞かないですよ」

イリヤが冷たい……。出番が少ないからだろうか…？

「あの……」

手を上げながらそう言ったのは桜だ。

「はいはい桜っちゃんですかい？」

「聞きたい事があるんです、間桐家の事で…」

「それだ！それを言おうとしてたんだったww」

バシンっ！！

「ごめんなさい…」

叩かれた…痛い…。

「えつとですね、間桐家なんですが実質潰しました」

「「「え？」「」」

凜、セイバー、桜が驚く。イリヤ、アーチャー、キャスターにはとつくに伝えてあるので、反応なしでお茶を飲んでる。

「それってどういうことですか？」

「桜つちが不幸になった原因である間桐臓硯を排除したんだ。あいつが間桐の支配者だからな、あいつが居なくなつた間桐家は実質潰れたという事さ」

「殺した…んですか？」

自分の不幸の原因だつてのに、氣遣えるなんてホントに優しいねえ。

「いんや、こいつを使つたんさ」

俺はカードを出して、見せる。

カードの表面には、禁忌『一条祭り』の文字と、黒い背景にポツンと有○みかんの上から一条祭りとマジックで書かれた段ボール箱が描かれている。

「こいつはな…とりあえず入ったら簡単に出れない。ある種の世界を構成。中に何か居る。戻ってきて多分性格変わってたりするかも。」

とにかく、訳が分からないという概念を注ぎ込んだよくわからん宝具だ。

説明になってないけど事実その通りだから俺も良くわからんのさ。技として作った筈なのになんてか宝具化しちまった位だし…」

「そ、そうですか」

桜が若干引き気味になる。作った俺でも何かこれ怖いもん。当然だよな…。

とりあえず直す。

ちなみにどんなふうに使ったかというと――。

はいダイジェストドン！

・
・
・

『ちわー宅配便です』

『あ奴らおらんのか…仕方ない。ハンコはどこに押せばいいんじゃない？』

『あ、ここをお願いします…発動（ボソ）』

SYGYAAAAA!!!!

『な、なんじゃこれは！？ぐああああっあ………』

パクッ…

『何これ怖い…』

・ ・ ・

ガクガクブルブル……

タイヘンナモノヲツクツテシマッタ……

ナカカラデテクルナンテ……

「そ、そついえば兄さんはどうなったんですか？」

俺がガクブルしだったので、桜が話題を変えてくれたようだ。
良い子やー。

「あ、それ私も気になる」

凜が続けて声を上げる。

「え？

・
・
・

あ！ああ！！あのワカメね。

たぶん、昔のあいつはもう居ないよ。真・WAKAMEになつて
だろうね」

「あんた今忘れてたでしょ…しかも真つて何したのよ…」

ジトーとした目で凜がこちらを見ってくる。

「何って…どつかの軍隊に所属するオホモダチのまん前に鍛えてや
ってくれって張り紙と共に放りだしたただだよ？」

カキンっていう擬音が聞こえそうな位に場が一瞬で凍る。

「…そろそろ戻そっか？」

「」「」「戻さなくて良い（です）（わ）！」「」「」

はい。

「ごほん…。」

さて、最後に桜つちの今の状態を教えようかな。何してんのか、
丁度士郎も居ないしな」

「私の状態、ですか…」

「あいあい。」

桜つちの身体の弄られてしまった部分の事なんだが、キャストにも手伝ってもらってなんとか戻せたよ」

キャストが始まる前から色々準備してたわけだが、桜つちの身体の弄られ方は正直許せなかったね。弄られるなんて言葉だけじゃ言い表わして良い事じゃないだろうな…。桜つちの元々受け継いでいる属性を間桐家の属性に無理矢理変えて、その状態を無理矢理固定し続けてたんだ。そのために桜つちの中には何匹もの魔術媒体である蟲がかなり居た。キャストも同じ女性としてかなり許せなかったのだろう、蟲を桜つちの中から排除する時の悲痛な顔は忘れられない。

原作知識からだが、蟲に犯され続けた結果がこれだった筈だ、文字通りの意味で…。

「私の身体が…：う、うあ…グス…：」

余程嬉しかったのだろうな。涙が後から後から出てくるが嬉しそうなのが雰囲気に分かる。

「もう安心していいよ。君の中に居た本体も取り除いた」

「本体ってというのはどういう事？」

凜はその部分が引つ掛かった様で聞いてくる。

そっぴいやそこまでは言ってなかったから仕方ないか。

「桜つちの中にはな、身体をいじるためのとは別に特殊な蟲が居たんだよ。そいつが居た場所は心臓だ」

自身の心臓がある位置を指差し言う。

「その蟲つてのはな、桜つちにこんな事をした張本人の本体だつてわけさ。奴は本来なら寿命を迎えて居てもおかしくはない年齢なんだ。じゃあなんで生きてるのか。その答えが自身を魔術の蟲と化し、生き永らえる事。そしてその本体を桜つちの中に隠していたってわけだ」

臓硯も昔は良い奴だったらしい。世界の悪を無くすため、聖杯戦争というものまで創って第三魔法を求めた。だが長い時の中で魂が劣化し外道になったとか…。

だからといって、桜つちにした事は許せるわけがないので一条祭りの刑にしたわけだが…。

「で、その本体の蟲を宝具の一つ使って斬り取って返したわけだ」

軽く言っただがこれは割ときつかった。魔力とかそういうのとは関係なしに身体から何かが抜けていく感覚があった。

方法としては『サイカ・ヒヨウリ』を使って運命・歴史の操作をし

た。一応扱いきれるか分からなかったのでキャスターさんに意識誘導の魔術を使ってもらって“できる”と確信した状態で行った。書き換えたのは本体が桜うちにまだ入れられてないっていう風にだ。本来なら蟲全部に対してやるべきだったんだろうがそれだと士郎との出会いやら想いやら他の部分も一緒に消えてしまいそうだったので止めた。いや、一番の理由は俺が未熟だからだ。心臓から蟲を切り離し、書き換え、本体が家に居るのであるう臓硯の元に居るという風にしたので記憶が残っていた。歴史の書き換え、運命の操作、つまりは因果律の操作だ。それによって書き換えたのならそれがあつた事實は全て消えないとおかしい。事実が“起こらなかった”のだ、その記憶も“無くてはならない”その消す瞬間に立ち会った者ならまだしも、臓硯には記憶が残っていた（確認をキャスターとしたので分かった）。

やはり、創造みたいなのとかいろいろできる様になってチート度も半端無くなってきたがやはり思うようにいかない事はまだまだあるようだ。

「ありがとうございます……」

俺が回想みたいなのをしていると桜うちが俺の前に来て深々と畳に着くほどに頭を下げながら礼を言ってきた。

かなり喜んでくれてるのか、声が、なんとか嗚咽を押さえながらといった風だ。

「ははっ。喜んでくれてなによりだぜ。俺も頑張ったかいがあつたつてもんだ」

やっぱり嬉しいもんだね、感謝されるってのは。

「あ、そうだ。

も一つ言つとかないと…。桜っちが凜と姉妹喧嘩？してる時に使つてた黒い影みたいなのあるじゃん？

あれ、実はまだ多分使えるんだよねー」

そう、例の触手だ。アレの正体は聖杯からの魔力供給により生来の持つ魔術素養『架空元素・虚数』と、間桐の『吸収』をかけ合わせた『影』、とは言つても劣化番で、俗に言う黒桜程のエグさはない。本来ならありとあらゆる生物を溶解し、吸収するほどの力があるが、あの時の擬似聖杯はリミッター付けたりと所詮は御芝居用だし、あの時点で桜っちの身体は戻っていた。

元々は、属性が異なる間桐の魔術に無理矢理慣れせられた体では生来の素養を引き出すことは本来なら不可能である上に、魔術師としての教育を受けていない所を聖杯によって無理矢理に負の感情を『影』として表出していたのだ。

それを、桜っちの身体を戻した際に属性も戻ったためにキャスターがこれ幸いと新たな擬似魔術回路みたいのを作り、蟲から間桐の素養『吸収』を抽出して再現したのだ。

あの時のキャスターはマジで恐かったな。魔術特性を奪われた上に家系を断絶されて良い気味って、ウフフフって笑いながら言ってたからね。

ガクブルガクブル…。

「えっと…そこにいるキャスターからのサービスみたいなもんらし

いよ？」

そう言うのと、照れたのか無言でフードを深くかぶり直すキャスター。だけど、頬が赤くなっただのは見えてるとです。小さいとただの萌えキャラだなー…。

つと続き続き。

「桜つちの魔術の才能って実はものすごいらしい。魔術の名門である遠坂の後ろ盾がないと封印指定されて、ホルマリン漬けの標本にされる位にさ。だから、これからは自衛手段があった方が良くってわけで『影』の出番なわけだ。

あ、でも最初から敵なしなわけじゃないからちゃんと練習やら修業は必要だとさ。

ま、幸いにも教師は事欠かんわな。

優しいお姉ちゃんに士郎と一緒に教えてもらうとかいいかもね。キャスターも教えてくれるだろうさ」

「姉さん…と…先輩と… / / /」

たくましいな、おい。

今の今まで涙流してたのに今はもう妄想の世界に飛び立ってるぜ。

さくら、恐ろしい子…。

さつてと、そろそろ行くかね。

話も終わってたしな。

「さて、話も終わりだしちょっと出てくるぜ」

「ひよっとして釣りの日？」

イリヤが扉を出ようとする俺に話しかけてくる。

何だかイリヤと話したの久しぶりな気がする（メタ的意味で）。
これはきつと電波だな。うん。

「うい。青くてピッチピチの釣ってくるぜい」

「そう…。じゃあ私もそろそろな訳ね」

「ああ、よろしくな」

「ええ。キャスターお願いできるかしら？」

「分かったわ」

俺は居間を出て玄関へ向かう。

今の会話？

ま、伏線だな。

おっと、メタ禁止だな。

では、まずは商店街辺りに行くとするかね。

・ ・ ・

「おっちゃん。それ各種10個ずつちょうだいな」

「あいよ。いつもありがとよ。」

それにしても毎度思うが良く食べるなあ嬢ちゃん」

「おっちゃんのが美味しいのがイケないんだよ。つつい食べちまう」

「そいつは悪い事をしたな。お詫びにサービスしてやるよ。ほい」

「いつもありがと、はい代金」

「おう。またよろしくな」

何してるのかって？

たい焼き買ってんだよ。前食べてはまちやって、常連さんになっちゃったんだぜ。

はぐはぐ…。んまー／＼

釣りはどうしたって？

準備は万端 仕掛けは上j（ry

ま、その内わかるさ。

俺は歩く。ひたすらぶらぶらと。たい焼きを食べながらぶらぶらと。

冬木市の大体は見ただろう。時間もだいぶ経ったのか、日が落ちるのが早いとはいえ、太陽はもう沈み始めている。

そろそろ…かな…？

俺は最後に士郎達と戦った、あのアインツベルンの森の中の広場に来た。

はぐつと…。

最後のたい焼きを口に放り込む。ついつい数十あったやつ全部食べちゃったよ。イリヤ達の分残すの忘れてたwww

「さてつと…」

貴様見ているな！！！」

あ、イタイとか言つて引かないでねー？

厨二的なあれでもないし、『皆近づくな！俺の中に封印されてる奴
g（ry）』的なものでもない。

皆なら気づいてると思うが、これこそが釣りだ。
ただし釣るのは、英霊だけだね。

「よう、嬢ちゃん」

はは、釣れた。

「や、どうも」

「どうやら気づいてたみてえだな。いつからだ？」

「最初から…かな？」

来ると分かってるんだから警戒しないわけないっしょ」

「ごもつともだ」

最近さらに獣化しているのか五感がかなり強くなっている。
普通にしてるだけならちよつと敏感位だけど、今回みたいに警戒し

てたら分かる事が出来た。ついでに気配みたいなのも。英霊の尾行に気づけるとかマジちーとぼでい。今更だけど（笑）

「じゃあ嬢ちゃん。早速で悪いんだが死んでくれ。何の恨みもないんだがマスターの命令なんぞでな」

「おろ？俺を殺しに来た割には不満気だね」

「ったりめえだつての。何でこんな無関係そうなの、いや、今まさに殺されそうつてのに平常で居られる時点で普通じゃねえか…。何もんだ？」

「ふーん。あいつランサーに何も言っていないんだ。そいつは好都合では自己紹介といこうか。俺の名はコウジユ。少し前までバーサーカーを拝命していた異世界の英雄だ。ちなみに今無職」

俺は手に武器を呼び出す。呼ぶのはスピア、『トライデントクラッシュャー』。見た目はあまり槍っぽくない。幅広の長方形の刃が手持ち側が少し広がるように付いており、白く輝いている。先端が無いためにあまり突く為ではなく斬る事に適しているように見える。白く輝いているのは白き輝石とかいう珍しい鉱石を使っているかららしい。概念は無し。ただし、HP吸収効果と特殊エフェクトで粒子が舞う。

「どうやったかは知らねえが受肉している英霊か。なら、全力で行くぜ」

「んじゃ、槍比べといこう」

手に持つトラクラさんをヒュンッと軽く振る。
振った軌跡を光る粒子が舞いとてもきれいだ。
そして、持ち手の真ん中辺りを片手で持って後ろに引き、半身で構える。TOVのジュデイスの構えだ。

「槍だと？」

はっ！ランサーのクラスに槍でケンカ売ったことを後悔させてやるよ！――」

s i d e o u t

『stages33:”ランサー”じゃなくて”らんさー”…ここ大事(前編)…

どうだったでしょうか？

はい、中途半端ですね。ごめんなさい…orz

皆さんの心の中は今まさに「作者エ…」となっている事でしょう。

ランサー編はすぐに出せる……のかな？

vsランサーはほとんどかけてるんですがバゼ…失礼、噛みまみた…ダメットさんをどうしようか悩んでおります。

確か仮死状態なんですよね…。

とどめ刺して復活させてやろうか…。

まいっか、なるようになりますよねww

ではでは今回はこの辺で。

ばいちゃ(＾O＾)／

P.S.

いつも誤字報告ありがとうございます^^

すごい助かってます。

『stage???：クリスマスだしとりあえず座談会してみたな話』（前書き）

どうもです。

まあ内容は題名通り。

だ、大丈夫ですよ？本編の続きはちゃんと書いてますから…（汗）

では、こつこつのを前からやりたかったっていう私の練習にどうかお付き合ってください。

どうぞ。

『stage???：クリスマスだしとりあえず座談会してみたな話』

コ「メリークリスマス!!コウジュです!」

k「まーす・・・kouです・・・」

コ「おりよ?テンション低いね。どうしたん?」

k「・・・なつたんです・・・」

コ「はいな?」

k「イブのイブではしゃぎ過ぎちゃって・・・」

コ「おいおい、ほんばんはこれからだぜい?」

k「うゝ頭痛い・・・」

コ「とりあえずこれやったら寝ちまいな。だからがんばれ」

k「そうします。」

えゝ、ごほん。どうも作者のkouであります。
メリークリスマス」

コ「めりーくりすまーす!」

k「つてなわけで、クリスマスですがいかがお過ごしでしょうか?
やっぱり恋人がいる人はデートとかですかねー」

コ「あのさあのさ」

k「はい？」

コ「クリスマスって何すればいいんだ？」

k「そこから？」

コ「あ、言葉足らずだったな。クリスマスだからってここで何すればいいんだ？」

k「・・・」

コ「ちょ、おい、こら。何で目をそらしやがる。

あれか、また見切り発車か」

k「ソナナワケナイジャナイデスカ。H A H A H A」

コ「どこぞの隙間妖怪よりうさんくさいんですが？」

k「ごほん、さて今日こんなものを開いたのはですね・・・」

コ「無視かこら」

k「やっぱりクリスマスだし、前々からこういうのやってみたかったつてのもあって決行に移したわけであります」

コ「やっぱり見切り発車じゃねえか・・・」

k「ホントはコウジユの撮影会でも特別編でやるつかとも考えたんですが・・・」

コ「待て！座談会で良い！！だからやめるモチツケ！k o o ーになれ！！」

k「いや、あんたが落ち着いて下さいよ。よくわからん事になりますから」

コ「いや、ごめん。あれだけは絶対やりたくないんで過剰反応しちまった・・・」

k「何言ってんですか。やる事は決定事項ですよ？いつやるかっていうのが決まっただけで」

コ「やっぱ・・・やらないとダメ・・・？」

k「上目使いで見てもダメです。決定です」

コ「ちっ」

k「舌打ちって・・・それにしてもえらく体が馴染んでるみたいですね。上目使いとか女の子の武器使ってくるとか。

もういいじゃないですかそのノリで着せ替えパーティーもやっちゃまいますようよ」

コ「しまった！？ってかやらねえよ！？俺中身男だかね！？最後の一線は守り通すからね！？」

k「駄菓子菓子（笑）、私は殺されたくないのですやります。実はあ

る方に、ついでにイリヤとらいだーさんのもやってくれってから言われてますし」

コ「誰にだよ!？」

イ「誰によ!？」

ら「誰にですか!？」

k「おや、イリヤさんにらいだーさんいらっしやい。あと、まだ呼んでませんよ？」

イ「あなたが紹介を全然入れない内に気になる事言うからでしょ!？あ、皆様メリークリスマス。イリヤスフィールよ」

ら「私も同じく気になって出てしました。メリークリスマス。「らいだー」です。」

・・・あの、どうしてかぶせてくるんでしょうか？そして何故私の名前を平仮名表記に変えるのですか？」

k「それはもちろんポンコツモード、もといロリッ娘モードだからです」

ら「・・・ひどい。久しぶりの登場でこの仕打ち・・・」

イ「ちょっと、話を誤魔化さないでよ。何で私も着せ替えパーティーに参加することになってるのかしら？らいだーならまだしも。それにある方って？」

ら「もう泣いていいですか？」

k「んとですねー、ある方ってのは大体察しが着くでしょうが紫の魔女、現魔女っ娘のキャスターさんです。

実はですねー、前にイリヤってコウジユと空港でウマウマしたですよ？」

コ「確かに…したな…

軽く俺の黒歴史だ…orz

何で俺あんなことしたし…」

イ「確かにしたわね…私もあそこから離れたい一心でやってしまったわけだけど…

で、それが？」

k「それね、○○○動画にupされてます。

キャスターさんがそれを見てイリヤにも興味が出た…というわけです。

あ、らいだーさんは私がついでに写真渡しときました」

コ&mp;イ「はあ!!?」

コ「ちょっとそれどういう事だ!?!」

イ「○○○動画って確かインターネットとかのやつで色んな人が見れるやつじゃなかった!?!」

ら「私の扱い…orz」

k「まあそんなわけで、今とある業界ではこの美少女2人は誰かって話題を呼んでるとかいないとか。魔女さんがマネージャーとして名乗り出そうとしているとかいないとか…」

コ&mp;イ「・・・orz」

k「ま、頑張つてね。いつの間にかファッションショー+デビュー疑惑になつてるけどwww」

コ&mp;イ「人事だと思つて・・・」

k「正しく人事だねwww」

ら「あ、あの・・・」

k「らいだーさんどうしたの？」

ら「きゃ、キャスターも今は小さくなつてますよね？だったら巻き込めば考えを変えてくれるかも…」

コ&mp;イ「それだ!」

k「なるほど!」女の子4人のカルテットデビュー!面白いかもしれな
つづけらあ!?!?!?」

——kouさんがログアウトしました——

コ「今の見たか？」

イ「ええ」

ら「魔術砲撃…自分がやるのはやっぱり嫌なんですね…」

コ「kouが逝ってしまったんで、ここからは俺が進行を務めるぜ」

k「まだだ…まだ終わらんよ…ふっ…」

コ「いや、もう無理だろ。ってか追撃くるんじゃない？」

k「大丈夫。話は付けてきた」

コ「速えなおい。で、なんて？」

k「コウジユとイリヤとライダー、更にセイバーを生贄にささげ、私はキャスターを召喚する」

コ「何遊○王風にさらっと生贄にしてくれちゃってんの！？そしてセイバー乙w」

イ「もういいわ。私はもう諦める。どうせもう私は終わって」
pされてしまったもの…」

それからセイバー乙ね」

ら「私は…少し興味があつたり…

あ、セイバー乙です」

k「まあここまで話ときながら、実はどんなふうに使ってないからいつやるのか分からないんですけどね（笑）」

3人「」「作者エ・・・」「」

k「そんな目で見ないでくれませんか!？」

あ、やる事は決まってるんでその辺は安心してください。

では次の議題に行きます。次はPSP02の続編インフィニティについてです」

コ「クリスマスどこ行つた？」

k「逆に聞きますけど、クリスマス関連の話ってあります?」

イ「いや、何かしらあるでしょう・・・」

ら「じゃあ、『クリスマスといえば』で思い出す思い出とかどうでしょう?」

k「あ、それいいですねー。じゃあコウジユから」

コ「俺!? まあいいけどよ。えーと、クリスマスだろ? んー、ショッピング行ったり映画を一緒に見に行ったり、あ、イルミネーション

ン見に行ったりもしてたかなー」

k「一緒に!?!」

イ「彼女!?! ねえ彼女!?!」

ら「デートですか?」

コ「いや違えよ。デートじゃないし。妹と寂しくよく遊びに行ってたんだよ。あいつモデルから多分彼氏居るぜ?」

k「何だ妹ですか…!」

イ「ちよつと待つてk o uとらいだー集合」

イ「ねえ? 妹と行くにしても内容がデートすぎない?」

ら「私も思いました。普通に考えて彼氏が居るならクリスマスにそっちに行かない訳はないでしょう」

k「た、確かに・・・」

イ「って、あんた作者でしょ? 何か知らないの?」

k「うーんと、実はよく考えてないので分からなかったり…!」

イ「使えないわねえ・・・」

ら『本人に聞けばいいのでは?』

k & a m p ; イ『それだ!』

イ「ねえコウジユ?」

コ「なんだ?俺をのけもにして何話してたかしらねえが…」

イ「妹さんの事教えてくれない?」

コ「ん?あいつの事?まあ良いけど…ってさつきからこればっか言
ってる気がする…」

イ「そんなの良いから」

コ「はいはい。えーっと、名前は亜衣沙。あいさ今は高校3年の受験真っ
盛りな18歳だな。一応陸上部のエース。あ、料理部も一応やって
たっけ。後は…大分モデル位かね?
それから…あ…」

3人「」「あ?」「」

コ「いや、ちょっと言いにくいんだけどある事情があってな、亜衣
沙って義妹になるんだなーって思いだしたとこ。かなり小さい頃から
一緒に居るからすっかり忘れてたぜ」

イ「はい集合ー」

k & a m p ; ら『準備は万端』

イ『これって…確かテンプレとかいうやつじゃないの?』

ら『まさしくその通りですね』

k『何だこれは…、いつから青春系に路線変更した…』

イ『なんであなたが手綱を取れていないのよ……
って、あ……』

ら『どうしました?』

イ『ちょっと待って、嫌な予感がする……』

イ「ねえコウジユ」

コ「今度はなんだよ……」

イ「ハイハイふて腐れない。

それで聞きたいんだけど、あなたの周りに、幼馴染み、妙に懐いてる後輩、気の良い先輩……などなどそういう人居る? 勿論女の子で」

コ「おお? 何そのギャルゲ…

あ、でもまあ似たようなのは居るな。

何故か先輩の俺に突っかかる後輩に、やたらクールで最近全然話してないけど何でかずっと学校一緒に幼馴染み、ボディランゲージが

激しくてよく俺を殴ってくるバイト先の先輩…
字にしたらあれだけど実際はなんもないぜ？あれ…言ってる泣きそ
うになってきた…」

k『テンプレ青春学校ものk t k r』

イ『これもう絶対そうよね』

ら『誰得ですか？これ…』

イ『ああもう終了終了！この話題パス！！』

k『そうですね。色んな意味で後が大変になりそうだ』

イ『誰よこんな話題を振ってきたのは』

ら『私が悪いんですか！？』

コ『なんだ？俺だけ言って終わり？ひどくない？』

k『むしろ被害者は俺達です』

イ『まったくよ』

ら『私の…扱い…シクシク…』

k「あのさ、俺はもう諦めるから良いけど、こんなことしてる間に尺がもう無くない？」

イ「もう？」

まったく…結局クリスマスにほとんど関係が無いただの無駄話じゃない。kouなんかこんなものするなら早く続き書けよって感想もらえば良いのよ」

k「あの、その通りなんだけど泣いていいですか？」

ら「シクシク…」

コ「あのさーホントにもう余裕ないよー。早く締めちまわないと…」

k「わわわ！じゃあ私が軽く締めますね。」

ええ今回いつの間にかこんなことになっていましたが、この度の内容は使うか使わないか微妙な感じですね。特に後半。マジ誰得。それでもってこういう座談会風ってわたくしkouのあこがれでもありますんでまた機会があれば行うかも？

やるとしたらインフィニティ関係の話とか、コウジユのスキルとかの話とかしてみたいなー」

コ「今回みたいなのや、今kouが言った内容とかをまたしてほしい方は“俺（私）得”と、別にいらないんじゃないやねと言う方は“誰得”と感想コーなまでどうぞ。」

他にしてほしい事がある方は一緒にどうぞ。これクロスしてほしいとか、こんなのどうか」

k「ちょっと！？締めろって言うつといて割り込まないでくれませんか！？ってというか何勝手に言ってるんですか！？」

イ&a m p：「ら」募集中なうー」

k「ちょ、今更私が言うのもなんですけどキャラ！キャラ違っ！」

コ「えーそんなわけで、グダグダとしてきましたが今回はここでじゃーねー」

イ「ごきげんよう」

ら「では」

k「え！？えつと、で、ではまた！」

『stage???：クリスマスだしとりあえず座談会してみたな話』（後書き）

どうでしょう？

こういので良いのだろうか…。

まあ本編の方もちゃんとできてるか怪しいし、要精進ですね。

さあ、続きを頑張ろうー！

感想お待ちしております（^^）／

P・S・

ランサー戦自体は書き終わったけど、ランサーがおかしい…。
どうしてこうなった…。

『Stage34:”ランサー”じゃなくて”らんさー”…ここ大事(後編)…

新年、明けましておめでとございます。

これからもわたくしkouとコウジユを始めとした『テンプレ…マジで?』ヲをよろしくお願いします。

今回、ランサーのキャラブレイクが著しいのでこんなランサーは嫌だという方はバックをよろしくお願いします。

『Stage34:”ランサー”じゃなくて”らんさー”……ここ大事(後編)……』

side:「ウジュ

「っはああああー!!」

「なんの!!」

ランサー……クー兄さんでいつか。クー兄さんの鋭い突き、それを払いながら近づく。

「あめえっ!!」

だが俺が近づくより早く戻した槍で再度付きを放ってきた。

「っ!?!月光!!」

俺は上に飛び、クー兄さんの真上に行き、真下に来たクー兄さんに投げつける。

「ちっ!」

それを横に飛ぶ事で避けられる。

ずガンっ!と槍が当たったとは思えないほどの音と共に小さなクレターがクー兄さんが居た場所にできる。

「ま、そう簡単に当たらないよねー」

「あつたりめえだ」

俺は着地し、トラクラを再び手に取る。

「続けて行くぜ！月影刃！！」

身体を伸ばすように素早く突く。ただし今の俺の身体能力でやると音を置いていける程のスピードだ！！

「っらああ！！」

突きに合わせて払いながら自身の身体をずらされた。

「今のを反応するとはさすが最速と名高いサーヴァント！！うりやつ！」

「おらっ！はっ！その最速に本気でガードさせた嬢ちゃんに言われると嫌味にしか聞こえねえ…ぜっ！！」

突きや払いの応酬で、互いの槍を反らし、避け、防ぐ。

本気かもしれないけど絶対全力ではなかったよね今の…。

やっぱり技術じゃ中々追いつけないか。槍兵に槍で勝負で挑んでるわけだし余計に。

まあだからと言って、負けてやる義理はねえけどなあ！！

こつからはごり押しでいかせてもらうぜ！！

薙ぎ下ろしをしながら俺はランサーに突っ込む。

「幻狼——」

「甘いつて言っただろおがぁー！！」

その俺に対しランサーはそれよりも早く神速の突きを以てして対応する。

が…。

「っな！？」

ランサーが俺に突きを喰らわせてる時点で既に俺はランサーに背中を合わせるように居る。いや、正しくはランサーの槍が貫いている方にも俺は居る。

俗に言う残像っていうやつだ。正確には俺のは幻影だが…。幻狼斬…。TOVの技の一つ。本来は、正しく残像を残すほどの急加速で敵の後方に抜ける技だが俺が出来たのは、前にキヤスターと話した技としてのカレイドスコップ（もどき）を応用して自身の幻影を置いて自分は敵の後方へ空間跳躍とぶというもの。

いや、本当はちゃんとした技を練習してたんだが、イメージが先行し過ぎて能力のせいでこういう技として出来てしまったんだよね…。

そういえば、某“狩人×狩人”に出てくるカストロというちょっと可哀そうな人の“ダブル”という能力に似ているかな。

現段階ではチートに頼った荒技。幻狼斬もどき（笑）。
時間があつたらちゃんとした武術として再現したいです…orz

「――斬っ！…！！」

「ぐあっ！…！」

後方に出た俺の斬撃と同時に前に居る俺は霞と消える。

斬撃を喰らったランサーは前方へ吹っ飛ぶ。

いや、感触がおかしい！！

「っ痛ってえな…。ったく、今のはどういう理屈だ…？」

立ち上がったランサーの背中には確かに俺の斬痕があるが、致命傷には程遠い。

さすがは、英雄ってことか…。

「あの状況で反応して前方に飛んだわけか…。恐れ入るよ」

「仮にも英雄って呼ばれてんだ。わけねえよ」

振り向き、俺の方を向くランサーの顔はまだまだ余裕の笑みを浮か

べている。

まったく――。

「ズルしてこれかよ…」

ここでランサーを倒しとかないといけないから、まだ武術として完成してない技を使っただけなのにさ。

「ズル？」

はっ！さっきのは嬢ちゃんの技なんだろう？だったら使えばいいじゃないか。手加減してる奴に勝つてもなにも嬉しくねえ。

全身全霊で来い。我が槍で貫いてやるからよ」

そう言いランサーは構える。

か、かつこいい…。

さすがは兄貴。そこに痺れる憧れる！！

「ありがとう。言い訳だけど、最初は純粹に武術でいこうと思ったんだけどね、ランサー強すぎ。さっきのは空間跳躍とかの複合技だから使いたくなかったんだけどさ」

「お褒めに預かり恐悦至極ってか？

つつか、さらっと技の秘密言っちゃってるけどいいのか？」

「…」

「ついでにいうと最初の方で使った俺の真上に出てくるやつもその空間跳躍とかいうのになるんじゃないかねえのか？」

「……」

「まあ俺にとつちやどうでもいい事だな」

ランサーに指摘されたのは“月光”の事だな。あれも確かに対象の上空に空間跳躍もどきをして使ってる。

本家本元本体がリアルに空間跳躍っぽい事になってて武術化を諦めてたから忘れてた…orz

「こ、ここからは諸事情で全力は出せないけど本気で使える技使っていくから!!」

最後のところで声が裏返ったが気にしない。
顔が熱で赤くなってるかもしれないけど気にしてはいけない。

「おーおー来やがれ来やがれ。もっと俺を楽しませてみな、嬢ちゃん」

「ラウンド2だ!!」

「せいっ!!..おおらっ!!..てやつ!!..!!」

「

「ふん!はあ!!..せいやあ!!..!!」

再びの応酬を始める。

斬って、突いて、斬られて、払われ、薙ぎ――。

「そうだっ！！それだっ！！！！良い感じじゃねえかつ！！！！」

「まだまだあぁっ！！」

一度俺はバックステップで下がり自身の槍、トラクラを両手で腰だめに構える。

「突き合いか？おもしれえ」

ランサーも同じように構えた。

さあ、突き勝負と行こうか。

「ドゥース・スカッド！！！！」

フォトンアーツの技の一つ、連続突き技のドゥース・スカッド。本来は最後に槍投げをする槍スキルだがそんな無粋なマネはせず、ただただ突きの部分を繰り返す。

ちなみにこの技、空間を貫き次元を破壊する衝撃により敵を吹き飛ばすという概念が存在する。

今は使っていないよ？

ってか早々使う気ないけどそんな物騒なの…。

…!!？

ま、まさか…。

これは確認が必要だ…。

槍を大きく薙ぎ払うように振り、ランサーを飛ばす。
飛ばされた時に自身から飛んだのか、軽々と後方で着地するランサー。
！。

そこで俺は一旦槍を下ろす。

「どうした嬢ちゃん？」

「貴様（ジョ○ヨ）を、見ているな!!」

「…何の事言ってるんだ？」

「ジョ○ヨだよ!! ジョ○ヨ!!! あんたぜえったい読んでるだろ

っ！！？」

少しの沈黙の後…。

「な、何の事を言ってるんだかわからねえぜ…」

何の事やらといった風に掌を上にして否定するランサー。
いやそれもろに嘘ダウトだろ。

だつて——。

「動揺しすぎだし、ついでに言つと…その見事なジョ○ヨ立ちをやめてから否定しやがれえっ！！！！」

「なん…だと…！？」

おい、何なんだよこのランサー。何か無駄に親近感わくんだけど…。

なんだあれか？大きいお友達（イケメン）なのか？
ランサーじゃなくてらんさーなのか！？

つてか、無駄にセリフやらポーズが似合うなおい！！

「……」

「おい嬢ちゃん…。その目やめてくんねえか？」

「いや、だつてさ…さつきあんなかつこいい事言つてさ、場を引き締めて、良い感じの空気になったと思つたらこれですよ？俺が言えるこつちやないのは重々承知だけどさ…なんというか…ねえ…？」

「は、はまっちまつたもんは仕方ねえだろ…！？
良いじゃねえか別に…！あれか！？サーヴァントはマンガ読むなつてか！？そいつはサーヴァント差別だろ…！」

これ俺の所為じゃないよね！？
サーヴァント勢がキャラブレイクしまくつてるのは分かるよ。俺が関わつた結果だからさ。

けどおれランサーとまだ関わつた覚えないよ…！？
なんで既にキャラブレイク…！？
あれか！？バタフライエフェクトとかいうやつか！？
それともマスターであるマーボ―神父の所為か！？テコ入れ！？

あーもう誰か助けて…！
わけ分からん…！！

「あのさー、らんさー…」

「なんかニュアンスが…気のせいか？いや、それで何だ？」

「ランサーの趣味って釣りじゃないの？」

「ああ？何で知ってやがる？」

「それは気にしない」

「まあ良いが…確かに釣りは好きだけどよ、サーヴァントの俺が釣りできる所までマスター放っぽって行く訳にはいかんだろうよ」

「それでマンガやらに？」

「いや、近所のガキが持つてくるんだよそういうのをよ。まあ警戒しながらでも十分読めるから読んでたらいつの間にかって感じた」

「なんか近所の子に懐かれてる!!？」

「まあ戦闘時以外は気の良いイケメン兄さんだから分かんなくてもないが…」

「それにしてもよっぽど気にいったんだね…」

「まだジョ○ヨ立ちしてる位だし…。めっさ、自然に立ってるし…」

「じ、事情は分かったよ。おれもマンガとか大好きだから分かんでもないし」

「そうか…」

「ちっ、どうせなら違う出会い方したかったぜ。良い話ができそうじゃねえか…」

「そう言つて槍を構え直す。」

「ちよ、いきなりシリアスに持つて行かんといて！」

俺そんなに器用じゃないっすよ!?

「ん、うん、そだな。確かにランサーとはゆっくり話とかしてみた
いね」

実際にみたい、色々楽しそうだ。

よし、落ち着いた。

俺もシリアスに突入――

「OHANASHIは嫌だけだな」

「それも知ってるの!?!」

なんと、ランサーはなのは式OHANASHIも知っていた。

って、だから空気の下が!!

「だがもう遅え。俺のマスターの命は嬢ちゃんを殺すことだ。我が
宝具を使ってきっちり殺して来いってな」

いやはや、えらく警戒されたもんだね。

でも当然っちゃ当然だな。チートって言葉すらあほらしくなる位
にチートなもの。使いこなせてないけど…。

そっぴゃ、宝具…ってことはゲイボルグだよな？

あーなるほどね…。

金ぴかに一度殺されたのに復活した所から高速再生かなんかだとマ
ーボー神父は考えたつてところかな？そんでもって、回復後は技を
覚えられる…と考えた…。だったら回復できない効果を持つ武器
で傷を付けて死んでもらおうと…そういうことか。

でも残念。

多分俺って、直死とか、を喰らっても死なないと思うよ…。

これって最近気づいたんだけど、最初に不老不死を貰ったのに、態
々スケープドールを渡された理由がずっと引掛かってたんだ。俺
が使ってるみたいに相手に渡すためか？でもそれならムーンアトマ
イザー（パーティーメンバー復活アイテム）で良いじゃないか。“
死”というものが確定してる人間を復活するのと死ぬ前に保険を掛
けるのとの違いか？

そんな感じでちよろちよろ考えてた時にふと気付いたんだ。
ひよっとして、保険じゃないかって。

不老不死でも死ぬ可能性はある。いわゆる不死殺し。どういう理屈
なのか、不死という部分を封じながら殺す事で不死殺しを成してい
るのかその辺りはよくわからないが確かに存在するその武器や概念
で殺されたとしても、スケープドールがあるから結局蘇る。

なにせ、スケープドールの発動条件は“死ぬ”事だ。

それに、俺はこれまで色々と試行錯誤（失敗は成功の元）しながら
スケープドールを弄ってきたが、よくよく考えると厳密には復活ア
イテムではないんじゃないか？

だつてさ、“復活”ってのは所謂“回帰”の事だ。だつたら死ぬ前後で同じ状態じゃないといけない。けど、俺は前後で違う状態になるように扱えてる（能力による恩恵である事は否定しきれはしないが）。ゲーム内でも死んだら溜めたゲージがゼロから戻ったりしている。

だから、極端な考えになるし、ただの当てつけと言われても仕方ないが、スケープドールは“復活”っていうより“転生”に近いんじゃないか？

ついでに考えていくと、それならムーンアトマイザーを渡されなかった理由にも繋がる。

だつて――。

「おい嬢ちゃん！」

「のわっ！？」

「たく、いきなりぶつぶつ何言い出してんだか」

しまった…。

いつの間にか思考に没頭してた。

何してんだか…orz

まあ、とにかく多分死ないだろ。

簡単に言えば現状の俺の身体は“死”すらも“生”であるって事に

なってるんだと思う。

…これって輪廻ってものになんか喧嘩売ってない？

まいつか、なんか今更だな。うん。

「えっと、ごめんなさい…」

「それは良いんだけどよ、半分は俺の所為でもあるからな。それより続き、どうするんだ？やるなら構えな」

そう言いランサーは再び構える。

「あ、待った」

どうせなら今言つところかな。

「あのさランサー。俺があんたを倒したら俺の願いを二つほど聞いてほしいんだけど」

「…普通言つなら一つだろ？
それで、なんだ？」

「それはまあ後のお楽しみって事で」

「はっ！そんじゃあ聞くことはなさそうだな」

「そいつはどーかねえ？」

んじゃラストバトルと行こうぜ!!」

・
・
・

「いやー楽しいね?」

「否定はしねえが、やればやるほどこっちの技術が吸い取られていくってのはあんまり良い気分じゃあねえな」

どれ位やってるかは分からないが、第3ラウンドを始めてそこそこ経った。

ちなみに、俺の声が結構軽めだが実際は違う。

刹那の間に何度も攻防を繰り返し、死が見え隠れする死合いの真っ最中なわけで余裕はない。

ランサーが言うようにちよつとずつランサーから学んでいるから何とかもっているだけだ。

ダメぽ寸前です。はい。

「考え事とは余裕だなあっ!!」

またやってしまった!!

ランサーの槍が顔に向かって迫る。

「こんにやろおお!!」

それを無理矢理身体を後ろに倒すことでかわすが、ギリギリのため額でかすり、帽子が貫かれて飛んでいく。この体制じゃあ追撃をかわせないかな。

これは第3ラウンド終わりかね…。

だが…

「!!!!?」

ランサーはそれをせずに固まっている。

何故？

いや、けどこの機会を逃すのは惜しい!!

倒れる身体をバク転の要領で一回転させて体勢を立て直し、改めて槍を後ろ手にランサーに向かう。

しかしランサーはハツとするかのように体勢を立て直し迎撃態勢を取る。

「さっきと同じかあ!!!?」

その俺にランサーの突き、構図としては先ほどと似ている。

だが、そんなことする訳がない。

「無影衝!!」

槍に突かれ、一瞬消えるが俺はその消えた俺の後ろから再び現れ斬りかかる。

「つち!

今度は前か!!」

突きだしていた槍を跳ね上げ俺の斬撃は防がれる。

「なら、嵐月!!」

大きく袈裟掛けに振り払い、球形の乱気流を作ってランサーへぶつける。

「くそっ!!」

ランサーは大きく後ろへ飛び、それを避ける。

「槍術系混成接続……」

とか言ってみちゃったりしてー。

いや、言いたかったただけだね。

「天月閃……」

俺はそのまま近づき、思いっきり踏み込んで上空に蹴り上げる。

「ぐはっ!!」

「如月…」

縦に回転しながら下から連続で切り上げ、最後に蹴り上げる。

「崩蹴月…風月…尖月…」

「かはっ…」

蹴り上げと同時に、踵落とし、落ちたランサーを逆立ちしながらカポエイラをしながら再び蹴り上げていき、さらに空中で2段ジャンプ（虚空瞬動？）で追撃の突きでさらに上空へかち上げる。

「止め……」

我に仇名す者を…冥府へ送りし…朧月の棺!!」

続けて空中で連続で斬撃と蹴撃を流れる様に加え、最後に大きく斬り上げ――。

「はあああああ!!!!!!」

霸王…籠月槍おお!!!!!!」

ありったけの魔力を自身の槍に叩き込みッ!

投げつける!!!!!!

「なんだ…嬢ちゃんの槍は空中が本来使う場所だったのかよ…。
今のは見事だったぜ…」

俺が投げた槍の所為で腹にドでかく風穴を開けそれでも倒れずに、
ゲイボルグを杖の様にしながらも立ったままのランサーが言うてく
る。

「ありがとう。」

ってなわけで、先の約束についてなんだけど…」

「ああ、好きにしな。」

この状態じゃあもって一分もないだろうが…」

よし、了承は得た。

「どもです。んじゃあ…ってい！」

俺は例のごとくスペルを取り出し、ランサーの残っている胸元の辺
りの掌底と共に撃ちこむ。

「ぐほああっ…！…！」

何…しゃ…がる………」

ランサーはそのまま倒れ動かなくなる。

鬼畜？いやでもしんどい時間を短かい方が良いじゃん。

はたから見たらただの死人に鞭打つ状態だけでも。

そんな誰に対する言い訳か分からないものを考えてると、倒れたラッサーの身体が光に包まれる。

ちなみに今回は時間差設定してないのですぐ発動する状態。更に言うところ、今回はちつさくならないように設定した。…できてるはずだ。出来てる…よね？

「いつてええええ！！何しやがる！！！！」

「つておお！？どうなつてんだこりゃ？」

ランサー復活。

— なんだけど…。

はあ…。

またやってしまったorz

ランサーとの目線がさつきより近い。

まあなんだ、結局いつものあれだ。
ちっさくなっちまった…。

いや、まてまて。

完全に失敗したわけではない。
新社会人が高校生になった程度の失敗だ。
ちよつとは進歩してる。

他の人にしたらただの失敗かもしれないが、俺からしたら大きな進歩だ…。

それでも思わないと辛すぎる…orz

「おお！令呪が消えてる上に受肉してんのかこれ！！すげえなおい。
でもなんで小さくなってんだ？」

うぐはぁあつ！！

もうやめて！俺のLPライフはもうゼロだよ！！

「お、おいどうした嬢ちゃん！いきなりさめざめ泣くなよ！！」

・
・

・

「ええ、申し訳ない。もうだいじょぶです。はい」

「なら良い…。」

それで、説明はしてもらえんだろっな？」

「あいあい。えーっとですねえ——」

・ ・ ・

「嬢ちゃん、何でそれを知ってやがる」

キングクリムゾン（笑）中にお願いを言いました。

一緒に身体が陥ってる状態も。ちなみにちっさくなってる事について言った時はつつかれた。ホントにゴメン。

それで、俺が言ったお願いについてだが、1つ目は、この聖杯戦争を終わらす手伝いをしてほしいという事。

そして2つ目がさっきの言葉に繋がる。

その二つ目ってのがダメ…じゃなかった…バゼットさんの所に案

内してほしいというもの。

ついでに、ランサーの真名も知ってるし、バゼットさんが本来のマスターなのに、今のマスターに令呪を奪われたせいで従ってる事も言った。

「何で知ってるかって……えーっと、簡単に言うとアカシックレコードに接続できるから……ってことで」

いつものごとくの良い訳。

そういや最近使ってないな。拗ねてたりして（笑）

「ちょっと待て。簡単に言うこっちゃないだろ。

つていうか、それなら何で場所がわからねえんだ？」

「……あは（笑）」

「~~~~っ。

もう良い。そつちは置いておく。約束とはいえ、これも契約だ。雇われる側に必要な情報でもねえしな。

それで？何であいつの所なんだ？

あいつはもう……」

「死んでないとしたら？」

「……！！？」

「確か……自身を仮死状態かなんかにしてまだぎりぎり生きてる筈」

「ほんとなのか!？」

クー兄さんは俺に詰め寄り、首元を掴んで思いっきりゆすりだす。

やーめーてー。

うう、吐くってこれ…。

「ちょ、やめて!？」

吐く!マジ吐くこれ!！」

「わ、悪い…。

それでマジなのか？」

「まじまじ。そんなわけで案内してほいんさ。
ほつといたら死ぬんでな」

「そうか…。あいつが生きてんのか…。
ははっ、殺しても死にそうにねえ奴だとか最初に思ってたがホント
に生きてやがったか…」

嬉しそうに微笑むランサー。

ぬおっ!？

さすがイケメンカッコよす。

でも、その顔は本人に見せてやってほしいね。

「それは後にしようぜ。本人の前で喜んでやってくれ」

「ああ。こっちだ」

・ ・ ・

はいまたしてもキングクリームゾン（笑）

わはw w超便利w w w

そんで、今はもう…なんだっけ、双子館？確かそんな名前のバゼットさんが拠点にしようとし、そして令呪を奪われた屋敷に来ている。そして、中々にきれいでいかにも高そうな雰囲気の方がたくさんある部屋の中、血まみれなバゼットさんが転がってる真ん前まで来た。

「うつわ、見事に血まみれ、そして片腕が無い」

令呪を奪っていく際に腕ごと持っていかれたんで片腕が無い。グロいね。

「あのよー、嬉しくなって来ちゃったが…、改めてみると死んでる様にしか見えないぞ嬢ちゃん」

「うんや、生きてる…よ？」

なんか俺も直接見たら心配になってきた……」

「おい……」

ジトーつとした目で見てくる。

あう…仕方ないこんな時は…

「確認するよ。」

たららったらら携帯電話（耳なし青ダヌキ風）」

「ちなみに俺は大〇のぶよのが好きだ」

おいしいっ！

近所の子どもさん、ランサーにそんなのまで教えてんの！！？

その近所の子見たくなってきた。

「こいつでアカシックレコードに繋いでみて確かめるんさ。」

えーっと、バゼットさん、現状、仮死…AND検索でいつか」

「アカシックレコードってそんなググる感じでできるもんだったっけか？」

「できるもんは仕方ない。

ツと出た出た。えゝ何何？

現在の状況、『仮死じゃね？』ってか案外蹴ったら起きるんじゃね？
やってみ？』って書いてあるね。

……………」

「おい、ホントに蹴ろうとするんじゃねえよ！！」

「冗談だつてwww」

ソナワケナイジヤナイデスカー…。

ねえ？

そつ、続けてランサーに言いながら俺は大杖ロッドの一つ、前にも使った

『えこえこステッキくん』を取り出して構える。

「えゝまずは仮死状態を解除して回復すれば良いかな？

レジェネ！！レスタ！！！！」

バゼットさんが光に二度包まれ、服に血が付いてはいるが血色がよくなり、腕も元に戻ったバゼットさんになった。

寝息がかすかに聞こえる。

ふむ、割りと簡単にできたな。

腕も回復したのは行幸だ。ちょっと心配だったんだよね。

「ありがとよ、嬢ちゃん」

「良いつて良いつて。」

これは俺が勝手にしたいと思ってやった事だからさ」

「それでも、言わせてくれ。感謝する」

「なんか照れくさいな…」

つとそうだ、このまま地面に寝かせとくのもアレだし移動させなきゃだな。

うちまで連れてくかな」

「おっと、そいつは俺がやるよ」

「そっか、んじゃ着いてきてくれ」

よし、これでまた一つクリアっと。

順調順調！。

あとは金ぴかと、マーボー神父と、聖杯と――

あれ？割とまだあるくない？

まいつか、タイミング的にはほとんど同じタイミングでする事だし、

後ちょっとって言ってもさして間違えではないか…。

では、最後までクライマックスで行くとしようじゃないか…！

> side out <

> 小話 <

「あああ！！」

「どうした嬢ちゃん」

「ん？いや、さっきバゼットさん回復させる時の事なんだけど…」

「なんだけど？」

「ランサーにやったみたいにカード使って、止め刺しても良かったんだと思うただけ」

「ちょ、おま、それはさすがに酷過ぎるだろ！！」

「ジョーダンジョーダン…ｗｗｗ」

> 小話2 <

「どこでもドア。はい到着つと」

「うお!？」

「ここは…ああ…あの小僧の家が…。
すげえな」

「えっへん」

「しかしそうすると背丈を元の状態に出来ないのが謎だな」

「……………言わないでくれ…orz」

> 小話3 <

「そついやさ」

「あん？」

「おれがランサーに最後の大技くらわす前にランサー一瞬止まった

じゃん？

あれって何で？」

「ああそれか。」

それはお前さんの帽子が取れた時に耳が見えてからだよ」

「耳って…これ？なんで？」

「なんだ、知らねえのか。」

俺はちよいと犬つてのに良い思い出が無くてな。反応しちゃっただけだ」

「あ、そついえば犬耳っぽいのだっけ俺…」

>了<

どうだったでしょうか？

いや。まずは謝るべきですかね。

ホントに申し訳ない。

去年中に上げる筈だったんだけど、まあ色々あって年が明けてしまいました。

実は今書いてるこれも寝ずになるので、結構限界です。うう…眠い…。

座談会は…今日中に何とか仕上げよう…うん。

ではでは、今回はいつもに比べ少ないですがこの辺で…。

時間的にはまた後で…になるのですかね。

では失礼をば…。

感想お待ちしております。

『stage???…年越したんでとりあえず座談会してみたな話』(前書き)

あは、2日になってしまった(笑)

コメントない…。(_ _) <

では、短いですがさっそくどじろ(> O >) /

『stage???…年越したんでとりあえず座談会してみた話』

kou&コウジユ「新年明けましておめでと〜ございます!〜!」

k「いやーめでたいですねー」

コ「めでたいめでたい」

k「…」

コ「……って、おい続きは!?!」

k「おおうつ…すみません軽く意識飛んでました」

コ「ったくよー。しっかりしてくれよな」

k「いや、実はですね。朝投稿して、ちよつと寝て、それでこの座談会なんですけどね、一度消しちゃったんですよねー」

コ「おいおい」

k「そのせいでちよつとめまいが…」

コ「まあなんだ、次は気を付けな」

k「うい」

コ「さて、気を取り直して続きをやっていこうじゃないか」

k「そうですね。では…」

コ「見切り発車落ちはなしだぞー」

k「失礼な。ちゃんと用意できてますよ。

では、まず一個目の話題は前回できなかったインフィニティについてです」

コ「おおー！いいねいいねー！」

k「正式名称『PHANTASY STAR PORTABLE 2 INFINITY』、ここでは略してインフィニティで通しますが、この作品は前作PSP 2の続編になるわけですね」

コ「内容としては、平和が戻った筈の世界に新たな種族が現れるってものだったな」

k「はい。その名も“デューマン”です。ヒューマンが変化した結果なる種族だそうです…色々秘密がありそうですねー」

コ「特徴は、生気の無い白い肌に眼帯…。この種族が今回の物語の根幹にかかわってきそうだな」

k「はい。そしてですね、今回デューマンが増えるにしたがって、新ヒロインが参戦しちゃいます」

コ「増えちゃいます!!」

k「名前はナギサ。CVは水樹の奈々さんです」

コ「ちなみに黒髪眼帯美女っていう見た目だったりする」

k「紹介文にはある理由から放浪している18歳の少女で、礼儀正しいものの一般常識に欠け、たびたびとんでもない事をしでかしてしまうそうです」

コ「とんでもないことってなんさ!？」

k「とんでもないことなんでしょうねー」

コ「マジで何やらかすんだろ……」

k「待ち遠しいですねー」。

しかし!!心配はいりません!!」

コ「はっ!!そうか!!」

k「そうです!体験版の配信はもうすぐそこです!!」

コ「11日……」

k「そう11日……」

コ「あのさ…これなに？」

k「いや何って…」

コ「座談会じゃなくてただの宣伝じゃん、これ」

k「おお…」

コ「ま、いいか。楽しみには変わらないし」

k「いや、そろそろ次の話題にいきましょう」

コ「さよか…」

で次の話題は？」

k「…次は、あれだ。正月っぽい事しましょう」

コ「正月っぽい事？」

k「例えば…カルタとか、羽根つきとか…」

コ「いや、座談会でやるこっちゃないだろ」

k「そうですか？楽しそうですねー」

コ「まあ仮にやったと仮定しよう」

k「します」

コ「ちなみに参加メンバーはサーヴァントの皆さんなわけだ」

k「はいはい」

コ「正月っばいか…？」

k「いや、羽根つきしてるんだから正月なんじゃないんですか？」

コ「甘い。そいつはリンディ茶に蜂蜜を足した以上に甘い」

k「……甘いどころの話じゃなさそうですね」

コ「例えばセイバー」

k「腹ペコ王様が羽根つきですか…顔が罰ゲームで落書きされまくって涙目な所が思い浮かぶんですが…」

コ「そんなわけないじゃん。最初はそうかもしれないけどさ、あのかなり負けず嫌いなんだぜ？」

羽子板に魔力通して全力全壊になるに決まってるじゃん」

k「……めちゃくちやになつた衛宮邸の庭が思い浮かびます…」

コ「じゃあ次はアチャ夫ね。あの人もなんだかんだで負けず嫌いです」

k「……あー、羽子板2つでさりげに投影使っちゃったりしてるんでしょうねー。」

羽根の貯蔵は十分か！！って感じですかね…」

コ「そうなるだろうな。ランサーは…」

k「ちょっと待ってください。やってるところを思い浮かべたんですが何故かあの人ゲイボルグ使ってるんですが？」

コ「あの人なら普通にやるだろうな」

k「と、とにかく他の人…そ、そうだ！ライダーなら！！」

コ「あの人桜つちがなんか言ったら本気出すもん。『ライダー頑張つて！！』『イエス、ユアハインス！！』みたいなノリになるの分かりきってるもん」

k「じゃあ…アサシン…」

コ「秘剣燕返しー」

k「じゃ、じゃあキヤスター！！」

コ「コタツでみかんを剥いてるところしか思い浮かばない。あの人インドア派だぜ？ジャージが似合っても運動しないタイプに決まっている」

k「金ぴかさんは…」

コ「あああれ？癪癪起こして試合終了ってか退場？」

k「ああ、あの人実は身体能力はさほどだったりしますもんね…」

負けが続いたら確かにキレそうです」

k「あ、そうだならバーサーカー…はいいです」

コ「待てやこら!!」

どという意味だ!!」

k「だって…ねえ…?」

コ「う…否定できない気がする…」

でもまあわかっただろ?」

k「はい、重々分かりました…」

じゃあ、麻雀とかはどうです?」

コ「麻雀って正月っぽいかな?」

k「何を言ってるんですか。麻雀ていうのは元々福を呼ぶものなんだそうですよ?」

コ「へえ、豆知識だな。でもだめだ」

k「へ?なんでです?」

コ「運だけで勝つやつとか、天然の燕返し出来そうなやつとか、変な技でズルしそうなやつがいっぱい居る。ってかそんなのしか居ない」

k「あははー。じゃあカルタ」

コ「もう…分かるだろ…？」

k「申し訳ない…orz」

コ「てわけで次の話行こうぜ？

あ、そういや、今回ゲストはなしか？」

k「あれ？御存じないんですか？皆さん年明け旅行に行かれましたよ？

ちなみに私もこの収録の後合流する予定です」

コ「お、おい！！聞いてないぞ！！？」

k「そうなんですか？」

コ「どういうことだよー！！」

k「あれ、でもイリヤさんが言ったって言ってたはずなんですが…」

コ「そんな事聞いて…あ…orz」

k「なんか思い当たる節でもあったみたいですね」

コ「仕方ない、俺もこの後合流って事で…」

k「はあ、分かりました」

コ「ちなみに場所はどこなんだ？」

k「海鳴市です」

コ「え…？」

k「では次の話題へと行きましょう」

コ「ちょ、ちょい、タンマタンマ…！
今海鳴市って言った？！」

k「ええ言いましたが…どうしました？」

コ「どうしたもこうしたも海鳴市だぞ…！？魔王誕生の地じゃないか…！」

k「だからって早々何かあるわけじゃないですか。私達が行った時に限って大事件が起こるとかそんな事が起こるわけじゃないじゃないですか」

コ「はいフラグ成立」

k「あ…」

イ、いや大丈夫です大丈夫です…めいびー…」

コ「はあ…」

k「つ、次の話題…！」

コ「次は何？」

k「コウジユの能力についてです！！」

コ「俺の能力…？」

k「そうです。不思議に思いませんでしたか？能力を失敗する時としない時の差が激しい事に…」

コ「いや気づいてるよ。気づいてるけど直せないんだが…？」

k「ふっふっふ…それも当然です。例えば成功した時、アインツベルンの大結界修復時や神槍のスペルを使った時、まあ他にもありますが…これらは全て——」

コ「ゴク…全て…？」

k「つと、ここでお時間が来てまいりました」

コ「お、おい！！俺の力の秘密は！！？それが分かったら俺お仕置きされずに済むんだろ！！？教えてくれよ！！」

k「いえいえ時間が無いので今回はこの辺りで。力は本編で語られるでしょう。」

そんなわけで皆様、今年も私どもをどうぞよろしくおねがいします」

コ「ちょ！！」

あ、これからもよろしくしまっす！！

っておい、kouのやつどこ行きやがった！？

ああもう…今回はここでお別れだな。

では、今年も皆にとって良い年であるように願ってるぜ。

では…！また次回をお楽しみに…！

って、ホントどこ行きやがった…！置いてくんな…！…！」

『stage???：年越したんでとりあえず座談会してみたな話』（後書き）

はい、第二回座談会終了です。

インフィニティ楽しみですよー。

ダウンロードしてこっちのただでさえ遅い更新スピードが落ちない
か心配です。

私が気をつけりゃいい話っちゃ話なんですけどね。

ではでは、毎度この作品を見て下さっている皆様方、これからもよろしく願います。

『stage35:ダメダメ言わないでください!!あ、俺が言ったんじゃない

最初に言いますごめんなさい>(――)<

長らくお待たせいたしました。

前が2日だから…もうほとんど2週間か…リアルキングダムゾン。

『stage35：ダメダメ言わないでください！！あ、俺が言ったんじゃない

>side：コウジユ<

「たっだいまー」

どうも、戦場カメラマン……ごめん、考えてなかったわ。

とりあえず、おっす。

今俺は能力でドアくぐって衛宮邸まで一気に帰ってきた。後ろにはクー兄さんと干された布団の様にグデーっとなったまま寝ているバメットさん。ありゃ、混じっちゃった。

まいつかwww

とにかく、2人を連れてきたんだけど…

部屋に入ったら何故か腹抱えてプルプル震えながらうずくまってる遠坂と、顔が真っ赤の士郎。

「なんぞ…？」

思わずつぶやいた。多分俺以外の誰が見ても同じような事をつぶやくと思う。

「ひいー…はう、笑った笑った…あら、おかえりなさいコウジユ」

ああ、なる。笑ってたのか。

それにしても、何を笑ってたんだ？いや、恐らくは士郎の何かを笑ってたんだろうけどな。

「ねえ聞いてよコウジユ、士郎ったらね」

「ちょ、遠坂！？」

士郎はかなり必死に、凜を止めようとして口を防ぐ。

あー、士郎さん？反対の手ヤバいとこ触ってますよ？

あ、はたかれた…。

「まったく、どこ触ってるのよ！」

「わ、悪いっ…！」

さすが主人公。その程度で済むか（笑）

これがワカメだったら魂ごと消し飛ばされてるだろうにｗｗｗｗ

「んで、士郎がどうしたん？またどっかでフラグ立てた？」

「いーえ、どちらかという回収に行く感じがしら。明日セイバーとデートしに行くんだってさ」

デートとなｗｗ

「それは面白…もとい…めでたいことだねー」

原作であつたデートイベントだね。ニヤニヤせずにはいられなかったシーンなんて印象に強く残ってるよ。デート後に金ぴかがちよっ

かいかけてくるのもあつて余計にね。

「いま、面白いつて言いそうになってなかったか？」

気のせい気のせいwww

「それで凜は爆笑してたわけか」

「そういうことよ。」

所で…後ろの二人つて…あれ？片方は…ランサー！？」

驚いた凜は宝石を構える。

それにしてもよくわかったな。

小さくなってるから、もうランサーに似た小っさいどっかの子にな
ってるのに（笑）

らんさー（小）みたいな？www

「ストップストップ。2人はもう味方だから一応。
それに片方は気絶中だから起こさないようにな」

「…っ。」

…わかったわ」

凜は再び座ってくれた。

ふと、士郎の方に顔を向けると、苦虫を潰したようなといった微妙
な顔をしていた。

あ、そっか。

士郎は一回ランサーにやられてるんだっけ。

そろそんな顔になるわな。

「士郎、納得いかない部分もあると思うがそこはちよいと目を瞑ってくれないか？」

「…そう…だな。」

態々争うのもおかしいし」

表情的にはまだ納得してないって感じだが、それでも理性で抑えてくれたようだね。

うん、良い子良い子してやるとこだよ。やらないけど。

「それで、どこで拾って来たの？」

凜がジトーっとした目でこっちを見てくる。

こっち見んな！！っと言いたいけど、俺の目ごころの行いのせいだな。

「拾ったというより釣った」

もちろん餌は俺。

「おいおい、嬢ちゃん方そいつはひどくないか？」

クー兄さんが扱いが不満だったのか今まで黙ってたがさすがに口をはさむ。なんかもうクー兄さんっていうと違和感あるな。特に兄さんの部分。クーさんで言いやもう。

クーさんはついといった風にその辺の座布団を繋げて、その上にダゼットさんを寝かせている。

…あれ？本名なんだっけ…。

「そんなわけで…あれ、どんなわけだ？…まいつか、そんなわけでランサーの協力を得る事が出来ました。わーぱちぱち」

「そういう契約しちまったからな。約束は守るが…そろそろ、内容を教えてくんねーか？」

よろしい。説明しよう！！（笑）

「単刀直入に言うよ。俺の目的は…聖杯をぶっ壊す事だww」

「…なんだって？」

「…」

ランサーがキョトンとした顔をこちらへ向けてくる。
士郎、凜は既に言っているから驚きはしない。

「嬢ちゃん…、本気か？」

「モチのロン。本気と書いてマジです」

「理由を聞いてもいいか？」

「それは私達もまだ聞いてなかったわね。もうそろそろ教えてくれても良いんじゃない？」

ふむ…、そうだな。もう良いかな？

丁度セイバーも居ないし…。

俺が考えたハッピーエンドを目指す分にはさほど問題はないかな。

現時点で問題となってくるのはセイバーの本心。

セイバーの本心が王の責務で占めてしまうか、それとも現在を望むか…。

実際問題として、セイバーが現界し続ける事は聖杯無くても俺のスケド（スケープドール）で可能なわけだ。

ただ、セイバーは英霊として少し特殊で、本来の身体がまだ生きている。

これだとただ単純にスケドを使えばいい訳じゃないので、そこだけは注意が必要である。でもまあぶっちゃけ、手間がかかるだけで問題は無い。

なので、後はセイバー自身の問題だ。

聖杯が穢れてるとかそんなの抜きにしてセイバー自身がどう思うか。それが俺がセイバーに思うハッピーエンド。

改めて考えるとほとんどやる事終わってないか？

あとは、金ぴかマーボー組を倒して、ちょこちょことするだけ…

いや、この世界では慢心は死亡フラグだ。

後ちよつとだからこそ、全力で行かないとな。

そのためにもこのメンバーには言っとかないとだよな。

「まず先に聞いとくけど、ランサーは聖杯に望みつつある?」

「ねえよ。俺は聖杯に願いを持つちやいねえ。

俺はこの聖杯戦争そのものが願いだからな。強い奴とやりあえればそれで満足だ」

「んじゃ、無問題だね。

この度召喚される聖杯…これはもう汚されているんだ」

「…どういう…こと?」

予想外に冷静だな凜さんや。驚くどころの話じゃないってことかな? アーチャーは声に出さないが目を見開いている。士郎は…よく分かってないみたいだね。

「汚されているってのは文字通りの意味だよ。聖杯は汚されている。あれはもう願いを叶える願望器なんて物じゃなくなってるんだ。いや、確かに願いを叶えることはできるだろうよ。けどなその方法が問題なんだ」

「方法? 生贄が必要だとかって事?」

「いんや、それすらも生ぬるいよ。

その方法ってのはな、『破壊』を持って成就するんだ」

「なんですって!?!」

「おいおい、マジかよ…」

「ゴメン、よくわからないんだがどういう事なんだ？物騒なのは分かるんだが…」

士郎エ…。

いや、良いんだけどね。実質士郎は素人なんだからさ。

「例えば…そうだな、さつきランサーが言ってた“強い奴と戦いたい”っていう願いを聖杯に言うとするだろ？」

「…ああ」

「そんなの願わねえけどな」

例え例え（笑）

「そしたら多分、各国の重要拠点が吹っ飛ぶだとか、核ミサイルが誤作動起こして他国に落ちるだとか、文明の崩壊だとかが起こるんじゃないかな」

「ん？それがどうしてさっきの願いに繋がるんだ？」

「その結果何が起こる？戦争が起こるのは確実だろうよ。戦争なんてものが起こったら人々は強くならざるを得ない。文明の崩壊も…残された資源を巡っての闘争、奪い合い、『ヒヤッハー』や『汚物は消毒だ！』な世紀末が簡単に着ちまうだろうな」

戦争が技術を発展させるっていう話はよく聞く話だ。

戦争なんていう極限状態だ。普通なら踏みとどまる所で踏みとどま

れなくなる。そりゃ技術力は上がるだろうな。

戦争の結果生まれた技術なんてそこら中にある。
例えば新幹線に使われている技術、あれは元は戦闘機の開発技術を流用したって話だ。

つまり、何が言いたいかというと、人は極限状態ではどこまでも突き進む。

まあ悪い意味ばかりでもないのは事実だろうけどさ。

「たまったもんじゃないわ。世界最強を願ったら、多分世界中の人間が死ぬんでしょ。自分以外に誰も居ないんだもの、当然1番になるわよ…」

それどこの独裁者スイッチ…。

改めて考えるとホントろくなもんじゃねえな。

まあ、聖杯自身も被害者と言えなくもない。中に取り込まれているのも然り。

「汚れた原因は確か第三次の聖杯戦争。そこで、アインツベルンがイレギュラーサーヴァント阿部：じゃなかった『アベンジャー』を召喚した。アベンジャーの正体はアンリマユ、つまり“この世全ての悪”だった。

それ以来の筈だ、聖杯が穢れたのはな…」

“この世全ての悪”^{アンリマユ}は善悪二原論のゾロアスター教において、絶対悪とされる存在だ。

それを当時のアインツベルンが勝利に固執し、ルールを破って例外

的な方法で反英雄として召喚してしまうわけだ。

ただ、問題があった。

召喚されたのはアンリマユであってアンリマユではなかった事だ。

その正体は、拝火教を信じる古代のある村で、「この世全ての悪性をもたらししている悪魔を仕立て上げること、人間全体の善性の証明とする」という身勝手な願いの結果、一人の人間がこの世全ての悪を体現する悪魔「アンリマユ」の名と役割を強制的に背負わされ、人々に心から呪われ蔑まれ疎まれ続ける中で「そういうもの」になっ

てしまったただの人間だった。しかしその在り方は人々の願いの結果であつたことから願望器である聖杯が反応し、聖杯は汚染されていった。それが穢れの正体。

「また厄介なものを…」

呆れたと言わんばかりに言う凜。

まっただ。

「あなたが壊そうとする理由は分かったわ。でも、さっさと壊さないのは何でなの？」

おあふ…。

核心突いてくるな！。

……当たり前か…。

「それはあれだよ、大火災。既に中身があるから少しでも漏れちゃうとどうなるか分からないっしょ？
だから俺がある方法で聖杯を壊す」

「ある方法っていうのが知りたいんだけど？」

「それは…まだ言えない…かな」

俺がやるやり方は卑怯だし、まだ知ってほしくないってのもあるんだけどねー。

実はやり方自体についてはイリヤにすら言っておらず、知っているのはキヤスターだけ。

嫌われるとは思ってないけど、なんだかなー。

「…そう。まあいいわ。今更だもの」

ゴメン。超ゴメン。

「あのさ…」

士郎が何かに気づいた様で俺に問うてくる。

「どつたん？」

「親父は…気づいてたのかな…3回目からって事は当然前回の聖杯戦争も穢れていたってことだよな…。それを親父は願いを捨ててまで寸前で壊したって事は…」

「おやおや、士郎にしちゃ鋭いじゃん。明日は槍どころかゲイボル

グが降るんじゃないだろうか」

「どんな状況だよ。というか普段俺の事をどういう風に見てるかよく分かった。」

それで、どうなんだ？」

「That's rightだ士郎。切嗣氏は寸前で気付いた。故にセイバーに命じて壊させた」

切嗣氏とアインツベルンの関係についてはまだ言わなくてもいいかな？

聖杯戦争っていうものの中では重要度が低い。どころか、士郎の場合100%足枷にしかない。終わってからゆつくりと話すべきことだしな。ついでに言うとその方が弄れて楽しいwww

遊べる所はとことん遊ぶ！！

それが俺！！

楽しい事は良い事だ。うん。

「ほー、小僧の親父さんは前回の勝利者だった訳か。けど壊したと…。やるねえ」

クーさん今の会話だけで大体解かっちゃったげですか！？
こっちとしては説明する必要が無くて楽だけどさつ。

さすが兄貴と言わざるを得ない。兄貴の称号は伊達じゃない。今の見た目はあれだけど…。

「どうやらそうらしい。いまいちピンと来てないけどな。って、俺の名前は小僧じゃないぞ？衛宮士郎だ」

「あいよ」

飄々と笑いながら返すクーさん。一々漢を魅せやがるZE。見た目あー（ry

「それにしても、親父悔しかっただろうな…」

士郎が悲し気に顔を下むながら声に出す。

なんのこと？

俺が首を傾げているのを見て、士郎は続けた。

「いや、親父にさ、どんな願いがあつたのかは知らないけど、それを諦めてまで聖杯を壊したのに結局大火災が起こってしまったんだ。結果的に見たら被害の規模はまだ少ない方なのかもしれないけど、それでも親父なら…さ…」

遠くを見つめるように何かを思い出しているであろう士郎。

何か…とは言ったが十中八九切嗣氏にあの大火災の中から士郎が助けられた所を思い出しているのであろつ。

勘でしかないがそう確信できる。

俺は実際に見たわけではないがそのシーンはアニメで見た。

アニメは所詮虚構だが今日の前に居る士郎達は現実。だからこそあのシーンがより俺の中で鮮明に思い出された。

大火災による地獄絵図。救いなんてあるように思えない。そんな中で切嗣氏は一人に少年を見つける。今にも死に絶えそうなの少年。それが士郎だ。

——士郎の原点。

士郎は確かその時にみた切嗣氏の表情を見てこう言った筈だ。

『助けられたのは俺なのに助けた方が救われた顔をしていた』

細かい言い回しは違うと思うが士郎がそう思ったのもさもありなん。

俺は、FateのZEROの方をほとんど知らないから切嗣氏の詳しい内情を知りはしない。けど、当時の切嗣氏は罪に苛まれており、ほとんどの人が死人となった炎の地獄を歩き続けた中で生存者に出会えたわけだ。

「確かに…ね…」

「報われねえってのは、辛いもんだしな」

「自分が原因だなんて…ホント——」

…？

あれ…？

「ちよいタンマ。切嗣氏は直接あの大火災に関わってるわけじゃない筈だぜ？」

「「え…？」」

> side out <

> side : 士郎 <

大火災は親父が聖杯を壊したからじゃ…？

どういうことだ？

「あれ？俺言ってんかったけ？切嗣氏はあの大火災の原因って言えは原因だけど直接は関与してなかったはずだぜ？

詳しい事は俺もしつかりと知らないんだけど、切嗣氏の相手、つまりあの金ぴかのマスターが切嗣氏の足止めを願い、既に現界していた聖杯がその願いに触れてしまっただけで、願いをかなえなかったのが真相だった筈だ。実際は資格をまだ持っていないのに触れたから余計にこじれたとか色々あるのかもしれないけど、根本的には切嗣氏は大火災を起こした訳じゃないよ」

「じゃ、じゃあ聖杯を壊した結果が大火災じゃなかったのか…！？」

思わずコウジユに、机の上に身を乗り出して聞いてしまう。

「おおぅ！？」

「そうなの？」

身を引くコウジュだが、遠坂も気になったのか詰め寄る。

「そ、そうだよ……。ってか近い！！」

それから俺たちは情報を纏めてみた。

相変わらず、コウジュは色々と隠しているようだ。

理由としては、今は必要ないだとか、俺達が知ることによって計画が変わってしまった時に対処できないかもしれないからだそうだ。

それで……。だ。

纏めた情報なんだが――

1 ・金色のサーヴァント、ギルガメッシュは聖杯を望んでいる。

2 ・ギルガメッシュは前回の聖杯戦争からの生き残りである。

3 ・ギルガメッシュはセイバーを狙っている。

4 ・ギルガメッシュは前回の聖杯戦争で、聖杯からこぼれ出たモノをかぶったために現界し続けられている。ただし、魔力の補充をするため人を襲っている。

5・今回の聖杯戦争は実はもう終わっている。

——なるほど…。

「「「って、ちょっと待て!!」「」」

「う…?」

首を傾げるコウジユ。ちょっと可愛い…。

じゃなくて!!

「後半二つは俺聞いてないぞ!?!特に最後!!」

「聖杯戦争がもう終わってるってどういつ事!?!」

「あ、俺はノリだからな」

「ランサーエ…ゴロ悪いなこれ……」

「じゃなくて、聞いてない？言ってなかったけ？」

「言ってない」「」

当然のごとく遠坂と声が重なる。

「……わはー」

「誤魔化すな……」

「ゴメンなさい……」

コウジユが土下座をする。あの角度で何であの帽子落ちないんだろ…。

「ってそうでもなくて!!」

「聖杯戦争がもう終わってるってどういう事なの？」

「ギルガメツシユの方もだ」

コウジユはあははーっと苦笑した後、先の疑問について答えてくれた。

「いやー、ゴメンゴメン隠し事すぎてどれを話してないのか忘れてたぜ。ギルガメツシユの方は簡単。前回のわたくしめの説明不足でございます。あわよくば、そのまま流してくれたらなーっと……」

そしてまた土下座。

なんだろう…やっぱりコウジユって実は遠坂家の関係者じゃないのかって最近ほんとに思うんだが…

「前に俺が言ったのもあながち間違いじゃないんだ。けど、ギルガメッシュは聖杯の中身かぶったおかげで現界し続けられてて、でも魔力が要るから人を襲ってるって感じなわけです、はい。」

「ふーん。で、終わってるっていうのは？」

あの、遠坂さん？ 恐いんですが…。目が笑ってないです。声はいつも通りなのに…。

ああ、コウジユが震えてる。

「聖杯戦争が終わったというのはですね、ランサーを先程倒して来たので、本来の参加者である7人のサーヴァントの内残っているのはセイバーだけな為聖杯戦争自体は終わっているというわけです。金ぴかは仲間はすれなので…」

ああそっか、聖杯戦争で倒すのは他の6人のサーヴァントだもんな。実質ランサーが最後のサーヴァントだった訳だから、セイバーの勝ちが決まってるんだな。

あれ、でも待てよ…という事は…

「聖杯が危ないんじゃないか!？」

横で遠坂がハツとする。

「そ、そうよ！！聖杯が！！」

ずっと土下座していたコウジユが顔を上げる。

「それは大丈夫。ぬかりないよ。聖杯を召喚するためのカギは全てこちらにある。一応何があっても大丈夫なように対策もしてる」

鍵… ってなんだ？

「そつか…」

横に居る遠坂は何か納得したみたいだ。

「鍵って何なんだ？」

「今は内緒…」

「あーそうね。士郎は知らない方が良いかも…」

「なんだよ、俺だけ仲間はずれかよ…」

疎外感… というわけじゃないが、少し寂しい。

俺のことを考えてくれたの事だとは思うがそれでも… な。

「うあ… 士郎そんな顔しないでくれよ。ものすっごい罪悪感感じるぜ。」

秘密にする俺が悪いとは思っけどさ、今士郎に話しちゃうとつつ走っていきそうだからな」

むう…

思わず顔に出てたか。申し訳なさそうな顔をするコウジユに俺も罪悪感を感じる。

けど、俺が突っ走ってしまっっていう事は、それなりの危険か何かがあるってことだよな？

俺としてはそんなことを元サーヴァントとはいえ、女の子にさせるのはやっぱり心苦しい。本人は女の子扱いされるのを嫌がるけど、それでも俺からしたら女の子だ。

とはいえ、コウジユの言うハッピーエンドっていうのを目指すためには必要な事なのかもしれないし…。

まったく不甲斐ないな…。

「さて、真剣な話はここまで終わりにしよう！疲れた！アーチャー！お茶ちょうだい！！」

「まったく…私は使用人ではないのだがね」

押入れからアーチャーが出てきて、そのままキッチンの方へ向かう。

衛宮家の押し入れはその内に青い狸でも出すんだろうか…。

「ちょっと！元とはいえ私のサーヴァントなのよ！アーチャー私もお茶ー！」

「おう、俺も頼むわ」

遠坂とランサーも便乗する。

もう何この状況。

俺の葛藤とかは何だったんだらうか…。

俺が言うのもなんだけど、聖杯戦争はこんなので良いのだらうか…。

あ、終わったんだっけ…。

はあ…。

> side out <

『stage35:ダメダメ言わないでください!!あ、俺が言ったんじゃない
どうでしたか？

繋ぎな感じの今回は何を書こうかホント難産でした。
ネタがあまり仕込めなかった…そして短い…orz

お待ちくださった皆様ホントに申し訳ないです…。

うー。

年明けだから忙しいし…せっかくインフィニティの体験版ダウンロードしたのに全然してない…orz

えー、次回はですね、デート編、金ぴか来襲第二弾になります。

次はまだイメージが付いてるんで今回よりは早く書けると思います。

諸君 私はISが好きだ。

・

・

・

(略)

・

・

・

よろしい ならばキャスト装備だ。

って、ちょっと引かないでください!!

いや、これは先日友人が――

「なーなーISインフィニット・ストラトスやつと始まったな」

「あれは良いものだ(笑)」

「インフィニティーもやつと配信されたな」

「あれも良いものだ(笑)」

で、何さ?」

「いや、なに、キャスト装備とISって似てると思わなイカ? (にや」

——という事があったわけですよ。2人とも原作読んでるし、時間があったら書いてみようかなと思ったり。

も、もちろん本編優先ですよ!!?

だから石投げないで!!

つて、ちょ!?

それ投げるものちゃう座るものや!!

作者はログアウトさせられました

『Stage36:デートは闘い…だそうだぜ? (前編) …innふえいと』

>side:コウジユ<

オッハー。

なんか懐かしいな…。しみじみ思う。

おっと改めまして、おはよう。

今はあの話が終わって次の日の朝だ。

つ・ま・り、士郎君の半告白シーン到来なわけだ。

わくわく。

とりあえず、現状説明から言ってみよう。

現在居間に居る訳なんだが、居るのは俺、士郎、キャスターだ。バゼットさん(思いだしたww)はまだ起きていない、ランサーは朝からどこかに行った(釣竿を持って出ていったが、何かあってもキャスターが強制転移で呼び戻すから大丈夫)。

アチャ夫さんは『マイルーム』にでも居るんじゃないかな。

桜は部活の何かがあるってさ。ライダーも一緒に動いてもらった。

リアルに太陽がまぶしいとか言ってたな(笑)

ライダーに、桜について行ってもらったのは勿論護衛のためだ。桜も狙われる可能性が一応まだある。ちなみにライダーの格好だが、な・ぜ・か持っていたロリサイズの穂群原学園制服だ。あと、いつものメガネ。俺も着せられそうになったのは置いといて、ライダーさんものすっごい嬉しそうにしてたなあ。桜っちとおそろいだとか

言つてさ。良きかな良きかな。

ただ、一つ問題があるのが今の状態のライダーさんだと護衛に見えない点だ。どう見ても背伸びして高校の制服着てるちびっこな桜っちの妹さんだよ。威圧感とまでは行かなくても相手に警戒させる程度には護衛っぽさが必要だと思うんだ、俺。まあ、リーチ以外の基本スペックはそのままだし大丈夫って言えば大丈夫だろうけどね。それにいざとなったらキャスターn（ry

あ、そういえばライダーが生きてる事まだ士郎達には言っていないんだけど、どうしようかな…。

士郎達つてのは士郎、凜、セイバーなんだけど、前にライダーさんを確保してからずっと会わせてなかったし、もう隠れてもらう必要はないんだけど、今更言うのもアレだし…。

そ、そうだ。あの時俺つてライダーを連れてそのままあの場を去っただけだし、今まで俺がサーヴァントに第二の生を生きてもらつてるところからきつと気づいてる筈だよな？周知の事実過ぎてつっこまれてないだけだよな！？何故黙つてたとか言つて罰ゲームとかないよね！！？

よし、気づいてると思つとこう…。後はなるようになるよな…。

話がそれたんで戻すと、今、居間に居るのは俺、キャスター、士郎、凜なわけだが、俺とキャスターはテレビを見て、士郎と凜は机を挟んだ向こう側でずーっとデートとはあーだこーだ話をしている。主には言つたが凜が士郎に享受している感じだ。机の上にはずらつと雑誌が積み重ねられている。デートスポットやらがどうとか書いてあるようなあれだ。

どこから持ってきたのか気になるが、凜はそれらを指し示しながら『デートとは闘いなもの』と格言じみた事を言つた後はデートコー

ス、店と言ったものの確認をしながら士郎にいろいろ吹き込んで
る。

どうでもいいが、士郎が行くのに凧が行くかの如くなノリだね。も
しくは士郎のママ的立ち位置？ww

それにしてもマジで凧さんのテンションたっかいな！。士郎はもう
たじたじだぜ？

そんな2人を視界の端に移しながらニュースの合間にやってる今日
の運勢を見ているとセイバーが入ってきた。

慌てて士郎と凧は机の上の本を片付ける。

おい、セイバーがビクツて若干引いてるぞ。

「お、おはようございます…」

「「お、おはよう…」」

「ぶっ…くくっ……」

ムリ…助けて誰か…くくっ…

「えっと、セイバー…」

「あ、はい」

このよくわからん空気を脱出させてくれたのは士郎だった。士郎は自分の横、凜が居るのと反対側に座布団が空いているのでそこに呼んだ。

「・・・」

「・・・」

おまいらなんかしゃべれ？

何これちょー居辛いんすけど？

ちなみに、現在はさっきと打って変わって青春な空気？が漂っている。

よくある他人を寄せ付けないあれだ。

士郎は話をどう切り出そうかと視線を向けてはまた下げて、セイバ―は最初は良く分かってなかったみたいだが途中から士郎と目が合

う度に顔を少し染めて同じように目線を下げる。

なんていうか痒い！あああ！！やあめえてえ！！

さつきとは違う意味で助けて欲しい。俺、おかしいか？

ってかなんで、凜とキャスターは無事なんだ？

凜は士郎達を見ながらニマニマしている。

俺の隣のキャスターさんは『あらあら』といった感じで2人を見ている。あんたなんでそんなほんわかお姉さんキャラやってんだよ。キャラ違うだろ！？『私も宗一郎様と……！』みたいなトリップするのがデフォじゃなかったけ！？正直に言おう違和感しかn――

「コウジユ？どうかしたかしら？」

「何でもありません！sirr!!」

こっわ！威圧感ばねえ！！この空気だけと思わず声を上げてしまった。それ位ヤバかった。ってか、俺心読まれたりしてないよな？

「コウジユうつさい！！！！」

「……ごめんなさい……」

凜に怒られてしまった……。もうほんと俺はどうしたらいいんだよ……。

> side out <

> side : 士郎 <

「デート…ですか？

それは何でしょう、あまり専門的な訳語は使わないでほしい」

俺は今、一大決心をしてセイバーを誘っている。

ただ、返ってきた言葉は少々予想外ではあったが…。

デートの説明ってどうすればいいんだ？

「えっと、デートっていうのはだな…

あ、女の子と遊びに行くっていう意味だ」

これならどうだろう。

「女の子…とは私の事を言っているのでしょうか」

「もちろん」

「言葉の意味は分かりましたが、意図が全く分かりません。そんな事をする理由は何ですか？」

「・・・」

クロスカウンターというものを喰らったらこんな気分になるんだろうか。

これ以上どう説明すればいいんだ？意図…という部分で考えれば俺がセイバーの事が気になるからっていう事になるんだろうが…。この状況でそれをいきなり言えと？いや、別に恥ずべき感情なわけでもないし、むしろまっすぐ表現するべく告白w——って俺は何を！？

頭の中でパニックを起こしていると、遠坂から声がかかる。

「士郎、さっさとしないと」

「うぐ…」

時計を見る。そろそろ家を出ないとゆっくり回れない。

「分かってはいるんだが…」

ボキャブラリーの少ない自分に自己嫌悪に陥りそうになる。勉強は苦手ではないんだが、こういう感情を吐露する事や説明っていうのはどうも苦手だ。

そんな事を考えていると、遠坂はよしと声を出した後、セイバー

に向き直り――

「良い？セイバー。」

デートっていうのはようするに逢引の事なの」

「っ！」

爆弾発言をした。

つておい！！遠坂さん！？しつかり言えない俺のせいだけどそこま
でストレートに言われると恥ずかしんだけど！？

誤魔化しまぎれに咳払いを一つする。

っ！？

今、豚と牛？鳥も？つてどこからか声が聞こえた気がする。合びき
肉じゃないんだから…。

つて犯人はコウジュか！

！

…何でそんなに疲れた顔してるんだ？

「男の子が好きな女の子にアピールするチャンスってわけなのよ」

隣では恥ずかしい説明がまだ続いていた。

「もう良いからさっさと行けよ！あとリア充爆発しろ！」

良くわからないが馬鹿にされた！？

コウジユは突然、席を立ち、俺とセイバーの所まで来ると手を引く張ってきた。俺たちはそのまま立たせられる。

「士郎、準備は？」

「え、えつと出来てるけど…」

持つていくものは小さいリュックに入れてあるので、それを持つていくだけだが——なんだ？

「よし、ならいい。さっさと行つて来い」

コウジユは俺とセイバーの手は握ったまま、器用に障子戸を足で開け、玄關の方に俺達を引く張つていく。

コウジユのいつものごとくな突発的な行動だが、今回はかなり感謝したい。さっきの空気は俺もさっさと抜けだしたかったからな。

よし、覚悟は決まった。

このまま俺はセイバーと今日一日デートw——

「待ちなさい！どうせならオシャレをしていくべきよー！」

できなかった。

そこにはゴスロリ…？でいいのかな…とにかく黒と白のフリフリとしか形容できないレースがふんだんに使われた服を掲げるキャスタ——が居た。

> s i d e o u t <

> s i d e : コウジユ <

いつのまに!?

くそ、さつさとこのリア充どもを送り出して俺も自分の事をしよう
と思ってたのに…。

「どういつつもりだキャスター…」

「今言った通りよ。外出、それもデートというものをするのだから
それ相応のおめかしが女の子には必要じゃない?」

聞くだけなら確かに正論。セイバーの為を思っ言っているような
言葉…。

だが!!

「それが本音じゃねえだろあんた!! 明らかに目がそんなセイバー

の為じゃないことを物語ってるぜ!!」

「そんな事は百も承知よ!」

ぶっちゃけやがった!?

誰かこの人どうかしてください!!いやマジで!!

「えっと…キヤスターさん?」

今まで黙っていた士郎が後ろから声を出す。

あまりのキヤスターの勢いに今まで固まっていたのかね?
なにはともあれ、言ってやれ!家主としてガツンと!!

「男は黙ってなさい」

「はい……」

家主よっわ…

今更か…。俺も何期待してたんだか…いや、この考えはさすがに酷いな。

よし、ここは俺が一肌脱いでやろう!!

「セイバー、士郎…」

「どうしました？コウジユ」

セイバーが答えてくれる。士郎さん律儀に守らんでも…。

「ここは俺が一肌脱いでやろう」

ふっふっふ、今の俺男らしくね？

俺は男らしくガシツとキャスターの腕を掴む。

「俺がここを押さえる！お前たちは行け！！」

「くっ、コウジユ。すみません！！」

「ありがとうなコウジユ！！後それってこの間コウジユが言ってた死亡フラグっばいぞ？」

2人は俺達の横を抜け早足で玄関を出ていく。

おかしいな。士郎が不吉な事を言ってたような…。

死亡フラグ…？

「あらあら、コウジユ。あなたが着てくれるのね？私はどっちでも良かったのだから文句はないわ」

「え？あれ？」

「一肌…脱いでくれるのよね…?」

……え?

やっちゃった?

アーツ……。

「汚されてしまった…」

「良いじゃない似合ってるんだから」

「そいつ問題ちゃうわ!!!!」

変な関西弁が出てしまった。

はあ…。

あ、現状？

さっき言ってた俺のやりたい事ってのはズバリ尾行だ。
ちゃっちいとか言っくなー！！

これは必要だからやってるんだ。今まで大まかな流れは原作沿いに
してこれたけど、なんの拍子に死んじゃうか分からない訳だからな
このデートイベントなんてアニメでは覚醒イベント的に死ぬ寸前ま
で行って、力が目覚めるパターンが起きる訳だけど、見方を変えれ
ばものっそり死亡フラグだ。
だから必要なわけだ。

わけなんだが――。

どうして俺はこんな格好に？

どう言い表せばいいのか…黒ゴス、絶対領域、フリルでひらひらほ
わほわ……………orz

帽子も獲られ（誤字にあらず）てしまったので獣耳が出っぱなしだ。
堂々としてたらコスプレにしか見えないと言われたが…何といえ

いいのか今まで目立たないようにしてきたので恥ずかしい…？

「ほら堂々とする！怪しまれるわよ？」

「そんなこと言ったってさ…ていうか自分だけ認識阻害掛けるのひどくないか？」

「あら、私はできるからやってるだけよ？悔しかったら自分で掛ければいいじゃない」

「うぐ…」

できない事はない。アサシンのカード使えば良いだけだからな。

だが…！

あれは代償が大きすぎる。なにせ革ベルトだからな。認識阻害だけ見たらものすごい良い効果なんだが、あれは真昼間からできる恰好じゃない。それにたぶん魔力抵抗の高いキヤスターには見つかるだろうし、そうなったら破滅だ。

「うー、うー…」

「うーうー言わない。ほら早く行くわよ」

ちくせう…。

尾行にしに来たのになんでこんな目立つ格好でしなきゃならないんだよ。

あ、ちなみにキャスターは俺が今着ているやつの色違いを着ている。
ふりふりほわほわやつな。

私も一緒に着てあげるからあなたも着なさいとか言われた時はなんか今日のキャスター優しいと思ったが前提としてキャスターのせいで着る事になった訳だから、あれおかしくない？な状況だ。しかも認識障害エ…。

これだから頭脳派は。

ってこの言い方だと俺が頭悪いみたいだな。

俺は頭は悪くはないと思うぞ？

まあ良くもないが…。

そのおかげかチートを持余してるんだろっしな。

「ほら、次のバスが来たわよ」

「ういー」

しゃーない。

とにかく尾行するか。

最近諦めてばっかりな気がするなあ…。

そっぴや、結局キャスターさんはなんで着いてきたの？
下見？そっぴですか…。

「さつてと、2人は――」

「あそこよ」

キャスターさん超便利。魔術で士郎達の位置が分かるんだってさ。
今だけはレーダーのクラスを授与しよう（笑）

しかし――

「ん？どこだ？」

人ごみで見えん。

「つぶ……」

「おいてめー、今俺の身長見て笑っただろ。ちょっと俺よりでかいからって」

「いいえ、思ってないわ」

こっち見て言いやがれ。

つと、早くしないと余計見つからなくなるな。

ほんとなら小一時間問い詰めてえところだが、今は尾行が優先だ。

とりあえず、キャスターが言ってた方向へ向かう。

「服屋」

「この店に入って行っただな。この辺で居れば見つからないかな？」

「何やってるの入るわよ」

「ちょ、見つかるって！」

「堂々としてたればれないわよ。結構中は広いし」

「うーん、まあ了解」

「あ、ホントだ結構広いな。来た事あったのか？」

「ええ。あ、ちょっとその店員さん例の物持ってきて」

「かしこまりました」

「はは、例の物で通ってしまう位には常連さんなわけね…

で、セイバー達はっと、あれか」

目線を向けると店員さんの一人が服を持っているセイバーにどうぞ広げて御覧になって下さいと言ったら、セイバーが文字通り腕いっぱい広げて破く所だった。

さすがセイバーと言わざるを得ないな。

「ちょっとコウジュこっち来て」

「な、なんだ!？」

手を引かれ俺は連れて行かれると、何人かの店員さんがそれぞれ違う服を持って立っている所に着いた。いやーな予感。

持ってるのほとんどがまた今着ているのと同じくらいふりふりだったりする。

「あー、キャスターさんこれは何でせうか？」

「何って服よ？」

何当然の事を言ってるのといわんばかりの顔でこちらを見てくる。

あれれーおかしいぞー？

思わず某体は子ども頭脳は大人な少年探偵がよく言う口癖が出てしまった。

「あのさ、俺って土郎追いかけたんだけど？」

「だったら早くしないといけないわね♪」

え、二回目の『アーツ』？しやれになんねえつて！！

「ほら早く。時間が無いなら厳選してまずはこれを――」

「ちょっと待てえー！」

「何でそんな服がこんな服屋にあるんだよ!!」

「禁則事項です」

店員さん達が息ぴったりに良い笑顔で答えてくれる。

ホントいい笑顔だなコンチクショーーーー！！

「戰略的撤退！！」

「ちつ、逃げられたか。仕方ないわね全部買っわ。いつも通りに配送でお願い」

「ありがとうございますー」

「映画館」

「定番だな」

「ええ」

とはいえ、見ているのはバトルものだ。普通なら恋愛ものだと思うがセイバーがデート相手だからこっちの方が良いのだろうな。

それにしても――。

「・・・」

「・・・」

「ねえ」

「何さ」

「こっ、生ぬるいというか、物足りないというか」

「それはそうだろ。俺たちは元とはいえサーヴァントだ。聖杯戦争と比べたら当然だって」

「・・・」

「・・・」

「なあ・・・」

「何・・・？」

「ポップコーン・・・食べるか？」

「・・・いただくわ」

ポリポリ・・・。

「ファンシーショップ」

「セイバーとのデートで何故このチョイス」

「まったくね」

実際にはアニメでセイバーはここで運命の出会いと言っても良いライオンのぬいぐるみと相まみえる訳だが。

確か何気にセイバーは可愛いものが好きな筈だ。
ペンギン型のかき氷器だったかにも一目惚れしていた筈。

「ここも結構大きいし、ちょっとやさつとじゃばれなさそうだな」

「そうね…っ!？」

「どうした…って、あ…」

キングクリムゾン!!!!!!!!!!

「「はっ!？」」

「ありがとうございますー!」

「コウジュ…」

「何だ…」

「あの坊や…中々やるわね…」

「まったくだ」

取得：ぬいぐるみ（白犬さん、白ぬこさん、黒ぬこ姉妹、へびさん、きつねさん）

「海岸沿いの公園」

これだけは言っておこう。

船乙（笑）

ちなみにどういう事かというと、前回の聖杯戦争で海上戦を余儀なくされたセイバーが宝具使って運悪く船が巻き込まれた残骸がむなくそこに鎮座しているというｗｗｗ

ついでに、遠くに見えるセイバーさん。

自分がやりましたと士郎に自首し、こんな感じ。

セイバー（´・ω・´）

士郎（；_；）

え？俺達？

ニヤニヤ（・・）（・・）ニヤニヤ

こうだけど何か？w w w

「大橋」

あ、キャスターさんはログアウトしました。
もう十分だつてさ。

あと、何か寄る所がるとか行つてたな。閉店前に回収がどうか。

何気にエンジョイしてるよなあの人。

そんな事を橋の上で考えていると、下の士郎とセイバーがシリアス
タイムに入った。

ふむふむ、熱いねコンチクショ―。なんて言うのか情熱的？

恥ずかしくて見てらんないぜ。

夜の帳もあり始めて、人気は少ないけどさ。
良くやるよほんと。

あ、下の会話が喧嘩っぽくなりだした。

喧嘩と言っても、犬も食わないという例の痴話喧嘩だ。はたから聞いてたらリア充氏ねと言いたくなるような感じの。

『——これ、本当はコウジユには言うなって言われてるんだけど——』

『——え？——』

ちよつと待てえ！！！！！

その前振りに出てきた本人上に居るんですけど！？気づいてないからこそ言っただろうけどさ！！
っていうか、その前振りって事は、この間の——。

『——あの子が言ってたんだ。セイバーが望んだ結果、最後は国が滅んだのだとしても、それを否定してほしくない。その中で皆が感じたであろう幸せまで否定してほしくないって——』

うおおおおお！！！！やーめーてーええ！！！！

恥ずかしくて死ねる！！

既に俺のライフはゼロだ！！！！
だから続きなんて言わないで！！

『——俺もそう思った——コウジユの言葉を借りることになるけど——だから——』

『士郎!!』

パンっ・・・!

恥ずかしくて下の会話がちょっと耳に入ってこなかったんだが、なんか急展開。

セイバーが士郎の頬を打^ぶった。

え?何?何があつたの?

いや、ホントはこんなの聞いちゃいけないんだろうけどさすがに気になるって!!

っていうか、俺の言葉を言っただからじゃないのか?

気持ちの整理がついてない時に一気に言われたらそうなるだろうけど。打つとはねー、あのセイバーが。こんなシーンはなかったから変わったのかね?

『勝手にしろっ!!』

さっきの言いあいからまた少し問答した後、士郎が走って去っていく。

セイバーも少し意固地になっている様で、大橋に留まっている。

ただ、その顔が今にも泣きそうに見えるのは俺の気のせいではないと思う。

ここは一緒か、士郎は家に向かつてるみたいだし。

コウジユ、セイバーは予定通りこっちで見えておくけど

キャスターから念話が入る。

んじゃ、頼む。多分大丈夫だと思うけど、金ぴかが来たら教えてくれ

分かったわ

さてさて、俺は士郎の方に行くか。

俺の言葉が士郎の考え方に少なからず影響を与えている。

俺は口下手だから大層な事は出来ないと思うが、ほったらかしというのは気に入らないし、フォローというか、アフターサービスというかをやるうかね。

s i d e o u t

どうでしたか？

今回も短いですが、ちょうどキリが良いのでこうなりました。

本当は金ぴか出すとこまで行こうかなと思ったんですけど、そこまで行くと長くなりそうだったので…。

今回は勿論金ぴかストーリーカー編。文章では分かりませんが高笑いに
こうご期待あれ。

それにしても更新スピード遅いな自分。

他の作者様はすごいとホント思いますね。毎日高クオリティーで続けてらっしゃるんだから。

見習わんといけんとです。

あと、いつものごとく誤字脱字も。

誤字報告感謝です。ホント。

多すぎて言えないというのも当然だと自分で思う位に多いのでちよ
くちよく直していかないとです。

時間欲しい（´・ω・`）

インフィニティ全然できてない。

あ、皆さんはコード手に入りましたか？

どこかでお会いしたらよろしく願いします。

ビーストの Kouju とデューマンの Lyass です。

では、今回はこの辺りで。

クライマックスまで目前。走りぬけられたらなと思っております）
^^ゞ

感想お待ちしております。

『stage37:デートは闘い…だそうだぜ? (後編) …いんふえいと (前

やっとできました…。

長らくお待たせしました。ではでは、どうぞ。

『stage37:デートは闘い…だそうだが? (後編) …inふえいと』

side: 士郎

腹が立つ…。

セイバーに対してじゃない…自分自身にだ…。

セイバーをあの大橋に一方的に置いて帰ってきた俺は自身の部屋に
ふてくされるように仰向けに寝転がる。

自分の思いを、セイバーに今を生きて欲しいって事を言っで、けど、
セイバーから言い返されて…コウジユが言わないでほしいって言っ
てた言葉まで使って……

思わずセイバーに叩かれた頬を軽く触る。
未だ熱を持つ頬が無駄に自己主張している。

「何をしてるんだろ…俺は…」

などと、自嘲せずにはいられず、部屋に響く自身の声でまた嫌にな
る。

そこへ――。

「おかえり」

戸の向こう側から、透き通った声が届く。

「コウジユ…か。ただいま」

「入っても良いか…？」

「あ、ああ」

了承するが、顔にもみじがあるため顔を隠すように二の腕を乗せる。

「んじゃ、失礼するぜ」

戸が開く音と共にコウジユが入ってくる。

「えーっと、あーうん、そのーだな」

「・・・」

コウジユは何かを言おうとしてはすぐにやめてを繰り返す。

どうしたのかと顔を覆っていた腕を少しだけ上げて声が聞こえていた方を見る。

「「あ…」」

予想外に近くに居たコウジユと目が合う。

「っ！？」

と、同時に俺は目にはいけないもの見てしてしまい慌てて腕を再び下ろす。

その…なんだ…、えつとだな…俺は寝転がっているわけで…コウジユは背が低いとはいえ、ミニスカートなわけで……

つまり、中を見てしまいました。ごめんなさい…。

「…？」

あっ！！てめえ！！」

俺の態度からどういいうことが気付いたのかドゲシッと俺の脚を蹴ってくる。

既に夜と言って良い時間ではあるのだが、障子紙を通して入ってくる月の光があるから結構部屋の中は明るい。おかげでしっかりと見えてしまったわけで…。

「ごめんなさい…」

ホントにごめんなさい…。

「…まあいいや」

コウジユの声音がいつもと同じ緩いものになった。どうやら許して

くれたようだが、また手を上げたら大変な事になる気がするのだから来ないが内心ではいつまでも土下座をしています。ホントに、はい。

「いって、不可抗力ってのもあるだろうし、まあさすがに恥ずかしくはあったが…。ちっ…、多分今顔赤いな…。」

よし顔を上げるな。そのままでいろ。オーケー？」

「お、おーけい…」

「はあ…。」

それで、士郎はこんな所で何をしてんだ？」

「何って…。」

何と答えればいいのか。

セイバーと喧嘩して、セイバーを置いて自分だけ帰ってきて、ふてくされて寝てる？

改めて考えるとどうしようもない事をしている。
喧嘩したにしてももう少しあったらろう、俺。

「うーんと、俺って口下手だから間接的というか、オブライトに
というかそういうの苦手だから喧嘩売ってるみたいに聞こえたらゴ
メンな。」

今日は…楽しかったか？」

「ああ…。」

「セイバーに楽しんでもらえたか？」

「…ああ」

楽しいと言ってくれた。

それにあの微笑みが嘘だとかそんなものじゃなく、心の底から楽しんでくれた。

「…伝えたのか？」

「……」

ああ、伝えたよ。

でも俺の言葉じゃ…。

セイバーに届かなかった。

「伝えたんだな……」

俺の言葉を使って」

コウジユの…言葉…？

「悪いな、見てたんだ。全部ってわけじゃあないんだけどな」

「見て…た？でも何で…」

俺は慌てて起き上がる。顔の事とか諸々忘れて、コウジュの真意が気になって起き上がってしまう。

「あ……」

「~~~~~／／／」

起き上がって目にしたのは先程と同じものだった。コウジュは俺の正面で胡坐をかいて座っていた。

「っ……!」

「!？」

俺はコウジュに壁まで吹き飛ばされた。

そして…

トスっ…

首の辺りに何かが刺さる音が聞こえた。

「落としてやろうか…両方…」

斬り落とす!?!両方!?!ドコとドコ!?!

というか、これって——。

目に映るのは先が二つに分かれ俺の首をはさみこむように固定する、赤よりも紅い血のような色の槍。

一度コウジユに見せてもらったロンギヌスの槍だ。

何故にロンギヌス!?

有名なかのロンギヌスとは違うらしいが、それでもあらゆる防御を貫く概念を持つというものらしい。コウジユいわくこれでランクBらしい。

この禍々しさと宝具特有の神聖さがこれでもかと俺に圧迫感を与えているこれだ。

「おい…俺は真面目な話ができねえ呪いでも掛ってんのか? やつちやいけねえってのか? どう思うよ」

槍の柄を持ち、帽子のせいでよく見えないが目が据わっているのは確実なコウジユが問うてくる。

「い、今のは俺が悪いと思うので謝ります…。ごめんなさい…」

首に伝わってくる冷やりとした金属独特の温度もあって、1ミリも首を動かせないため、変わりとばかりに頭の中で土下座を敢行する。深く深くだ。

槍が無かったらもちろん実際にやっている。多分デコが擦り減る位に…。

確かに下着を見てしまったからというのもあるが、何故かそうしな

ければならない哀愁をコウジユが漂わせているため、せずにはいられない。

コウジユは、最近よく見るため息を1つ吐いて今までの空気を霧散させた。

「いいさ、どうせ俺のせいだもん…」

なんでだろうか、遠坂と一緒に泣いているデフォルメされた絵が後ろに見える…。

「…悪い。話を戻すぞ」

コウジユはロンギヌスを抜き、どこかへと消した。

「何だっけか…、あーそうだ、理由だったな。」

気になったからってのが一番大きいかな。一応護衛とか他の理由もあつたりはするんだけどさ。

やっぱり、俺が助言した訳だし？気になるっしょ。

尾行してた事については謝罪するよ」

尾行された事自体はそんなに怒りとかは湧いてこない。

コウジユの言う『気になった』というのも恐らくだが、興味ではなく心配から来たものからだろう。普段からお茶らけた態度ばかりだし、真剣という言葉がこれほどまでに似合わない子なんていないと思うが、それでも、真剣に心配してくれる優しい子だというのは分

かってきた。あの遠坂もコウジユの秘密主義的な部分を、だからこそ怒るに怒れないと言っていた。

本人は否定するだろうけど、優しいってのは俺も分かる。

「尾行は…ちょっと恥ずかしいけど怒ってないさ」

「そ、そっか…」

「それに、謝るのはこっちの方だろ。コウジユは言わないで欲しいって言ってた言葉を使ってしまったんだからさ」

「俺も…別に怒ってないよ。理由は前にも言っただけど恥ずいからだし。」

でもまあ、士郎があのタイミングで言うのはちょっと予想外だった。恋は盲目っていうか、よっぽど気が急いていたのか…」

「そう…なのかな…」

焦り――。

聖杯戦争はもう終わった。

あとは、聖杯を、ギルガメッシュをどうにかするだけ。

それが終わればもう――

――セイバーは居なくなってしまう。

セイバーは新たな人生を拒否している以上、聖杯を壊してしまったらセイバーと別れなければならない。

望んでも――

ってそうだ。コウジユなら

「なあコウジユ！セイバーが望んだら、コウジユなら他のサーヴァントみたいに聖杯が無くても二回目の人生って歩めるのか！？」

俺の問いに、コウジユは顔色を曇らせながら答える。

「んー、多分難しい…かな…

セイバーの状態っていうか、世界との契約時のことって聞いたことがある？」

「いや、ないけど…」

一応夢を通して見た事はある。

契約に至った所も。

でもコウジユが言う状態っていうのが分からない。

「セイバーはな、厳密に言えばまだ生きてるんだ」

「生きてる？」

「セイバーは生前…と言つては微妙だけでも、致命傷を受けた。そして今にも死にそうになっている時に後悔し、願つてしまい、それを世界が契約として聞き届けてしまった。サーヴァントは本来呼ばれた後は座に還る。けど、セイバーはその契約した時点へ還り、そしてまた呼ばれる。」

つまり、セイバー自身の時がその契約の時点で止まつてるんだよ。凜が言つてなかったか？

サーヴァントが前回の聖杯戦争の事を覚えてるのはおかしいって。けどセイバーが覚えてる。それは特殊だからなんだよ。」

「そう言えば…」

確かに、いつだったかそんな事を遠坂は言つていた…気がする。

「俺のは死んだ瞬間に生き返らせるからな。だからセイバーには現状どうしようもない」

そっか…

「そんなことより!!」

まず仲違いをどうにかしろよ」

「うぐ…」

言い返せない。

「なあ士郎。士郎は結局セイバーにどうして欲しいんだ？」

「俺は、セイバーに今を生きて欲しい。王としてじゃなく、セイバー自身を生を…」

頑張って頑張って、自分を殺してまで尽くして、それでも報われな
いなんて嘘だ。

「だったらそれでいいと思うんだけどね。俺の言葉なんか使わなくてもさ。大事なのは士郎の気持ちなわけで、まあセイバーの気持ちも大事だけどさ。
少なくとも俺の気持ちは極端に言えば二人には関係ない。

はあ、当事者同士の問題に茶々入れた俺の判断ミスかねえ…」

深く深くため息をつくコウジユ。

「そっいや、仲違いの原因ってそれ位か？」

「えっと、大まかには…そうかな…」

あ…」

「何さ？」

「士郎にだけは言われたくないって…」

「その辺聞いてないな。どういう事？」

「俺が、セイバーは闘う事に向いてない。もう自分の為に生きて欲しいって言ったんだ。自分の事を考えて行動しないあなたにだけは言われたくない…って…」

後半はだんだん尻すぼみになってしまふ。

死者の考えだとまで言われてしまい、あの時は自身も気が高ぶっていたからそうでもないが、今改めて反芻するとダメージが大きい。

しかも好意ある人物に言われた訳だから…あ、軽く泣きそうだ。

「おい、ヘタレて自分の世界入るな」

「へ、ヘタレてないぞ!？」

男としてそれだけは否定させてもらう。

「はいはい。」

それでなんだけど、それは言われても仕方ないと思うぜ？」

「そ、そうなのか？」

「そりゃそうでしょ。」

自分の行動を考え直してみたら分か…らないか。だからやってるわけだし。士郎だし」

「うぐ…」

またしても言い返せない。

それに、胸に何かが刺さったように胸が痛い。

男として泣いては駄目だと思う。

けど――

思わず手で目元を触る。

良かった。まだ泣いてない。

s i d e o u t

side : コウジユ

「話をしよう…あれは――」

シリアスシーン？

はっ！！www

出来ねえからいつも通りやってんだろぅが…（血涙）

ごほん。

取り乱してしまった。

えゝ、今から士郎の中の意識改革を始めようと思います。

その為のお話。

OHANASHIじゃないよ？

ちゃんとした？お話だ。物語ともいうね。

「それはある一人の魔王のお話。優しい優しい、黒の王の――
――」

話すのは勿論、シスコン魔王のお話。

妹の願い『優しい世界』を作るために世界に喧嘩を売って勝っちゃ
う話です。

ある少女と出会い、王の力を得た少年は世界を一度ぶっ壊し、作り
替える。

その最後はその身に世界中の恐怖を集めて――死ぬ。

かくして世界は平和になったのでした。

「そんな奴がいたのか…」

「異世界の話だよ。あくまで…」

Fateの世界があるんだ。無いとはいえない。ちょっと詐欺っぽ
いが、気にしてはいけない。

「けどな、世界は救われたけど、その話は決してハッピーエンドじ
やない。めでたしめでたしで終わらない。というか終わっちゃいけ
ないと思うんだ。何でだと思う？」

「…分からない」

「その魔王の妹の本当の願いはな、兄と共に暮らすことだったんだ。
仲良く、のんびりと…」

それに、魔王に力を与えた少女だって、残された。
そして、魔王自身が救われていない」

「……………」

「自身を勘定に入れないなんて、まるでどこかの誰かさんみたいだな」

「……………」

士郎は何も答えない。

当然だろう。士郎の中の“正義の味方”というのは自身を犠牲にしても誰かを救うというもの。
でも、それじゃあ救われない人も居る。

「……は——」

「んあ？」

士郎がぼそぼそと何かを言い始める。

「……コウジユは……どうなんだ……？」

「俺？」

ははん、そんなの決まっている。

「俺がハッピーじゃねえハッピーエンドなんか許さねえ！」

「つぷ……」

何故笑うし……

「何かおかしいか？」

「いや、あまりにもコウジユらしいと思ってな」

「ぐ……／＼／」

なんかすんげー良い笑顔で言いやがる。

「とにかく！！」

俺が言つて良い事かは微妙だけど、自分を勘定に入れろ！それで救われる人がいるんだから“正義の味方”だっていうなら自分も救つてみやがれ」

「……………」

「士郎の夢は？」

「“正義の味方”だ」

「じゃあ聞くけど、士郎は正義の味方になりたいのか？それともならなきゃいけないのか？」

「それ……は……」

「質問を変える。士郎は何のために正義の味方になりたい？“人助け”をしたいからか？それとも“贖罪”がしたいからか？」

「……………」

士郎だから全部だろうな。

確か、士郎の中ではあの大火事の中で助けを求められても助けられず、自分だけが助けられた事の贖罪と、その助けてくれた人との約束がかなり大きかった筈。

「俺は別に士郎の根幹を否定するつもりはない。とは言っても肯定するつもりもないが…」

「どっちだよ…」

苦笑気味に士郎は俺に返す。とはいえ、先程までの士郎よりは少し楽な顔をしている。

ふむ、士郎の中で何かのヒントになったかな？
それなら嬉しいが…。

「俺は士郎じゃないし、士郎が通つて来た道を識^しってはいても知らない。」

だから俺からはこうした方が良いんじゃないかとは言えてもこうし
るとは言わないし、言いたくない。

士郎も嫌だろ？ 知りもしない癖にあーだこーだ言われるの。

まあ、俺が言ってる事も既にそれに値するかもしれないけどさ」

「そんな事はっ！！……………ないと思う…ぞ？」

「なして疑問形？」

まあいいや、ってまた言っちゃった…orz

あー、つまりだな。士郎は別に正義の味方になりたいんだからなれ

「ばいと思うけど、やり方を間違えんなよって話」

「けど、間違えたやり方って言われてもな…」

「簡単じゃねえか。誰か泣かしたら“間違い”だ。簡単だろ？“間違い”じゃなくても少なくとも正解ではないじゃんよ」

「ははっ、確かにな」

「笑っていこうぜ？皆で助け合えたら万々歳だ」

「ああ、それは確かにハッピーエンドだ」

「だろ？さっきの魔王の言葉を借りるなら“救って良いのは救われる覚悟のある奴だけだ”ってね」

「はは、なんだよそれ」

「う、うるさい！自分でも微妙だと思ってんだからツツコムな！」

さてと…

俺は障子戸の方へ向かう。

「そろそろお姫様を迎えに行く時間じゃないか？」

「や、やばい！！もうこんな時間か！！」

現在はもう夜が更けて、深夜とまでは行かなくても良い子なら寝ていてもおかしくない時間だ。

士郎は慌てて立ち上がり、俺の横を抜けようとする。

その士郎の手を掴み、少し引きとめる。

「コウジユ？」

「さっきの、お前が助かる事で救われる奴の中には俺も含まれてる。だから、似合わねえし、ボキャブラリーの少ない頭を使って言ったんだ。それだけは――」

「ああ、こんな小さい子にまで言われたんだ。皆で笑えるようにしてみるよ。」

「じゃあ行ってくる」

「そっか…」

「つて、おい！！誰が小さいかあああ！！！！」

「はあ、もう居ねえーし…。」

「ほんと口下手だなあ俺…」

もう居ない士郎が走っていった方を向きながら、呟く。

「口下手という割に、えらく何かを指し示す事を言っていたと思うがね？」

士郎が走っていった反対側の廊下、そこには壁にもたれるようにし

て赤の弓兵が居た。

こいつ聞いてやがったな。

後一つ言つと身長がアレなんで似合わないぜ？（笑）

「誰のせいだ!!」

「ナチュラルに心を読むな」

「顔に出ていた」

あらら。

「正直気付かなかったぜ。どこから聞いてた」

「どこからだったか…。君が可愛らしく顔を染めたらしい所は聞いたな」

ほぼ全部じゃねえか。

「って誰が可愛くだ。まったく、諜報はアサシンの仕事だろ？」

「バーサーカーの身で何度もしている君に言われるとは思わなかったよ」

「・・・」

「何かね？」

「ひねくれ者」

「では私は君にツンデレという言葉を贈ろう」

「誰がツンデレだ！！というか、どこで知ったし！」

「いやなに、キャスターが君の事をそう言っていたのでね。あと、イリヤと凜の事も」

「そっちが本物だ。俺は違えよ」

否定しつつも自分がしている事を反芻すると、若干ツンデレっぽい事をしている気がして胸の内でも何とも言えないものが生まれるのを感じていると、アーチャーが静かに話した。

「私は…間違っているのか？」

「何が？」

「知っていて聞くのかね？」

「こりゃ失敬。」

んー……さあ？」

「さあって…おい…」

いつもの口調が崩れてまでツッコミをするアーチャーに内心笑いつつ俺は続ける。

「俺には分からねえ。さつきも言ったが俺は所詮他人だ。交友関係とかそんなのは抜きにして、他の人なんだ。そいつ本人の事なんて本当の意味で知らない。ただまあ、俺理論で行くと、泣く人が居る以上間違いに近いだろうな」

「泣く人が居る…か。まったく、痛みいる言葉だ」

「所詮は俺理論だけだね。あと、絶望的なお知らせ」

「…何かね？」

「過去の自分を殺した所で恐らくあんたが為した事は消えない」

アーチャーの表情が凍る。

「タイムパラドックスって知ってるだろ？」

「ああ」

「あれ、多分あんたには適用されないぜ？」

「何？」

「もう既にあの士郎とあんたは別人だ。証拠は簡単、俺が士郎に話した事をあんたは士郎として記憶にあるか？ないだろ？」

「確かに…ないな。しかし何故？」

「知らねえよ。推測はいくらでも立つがそれが本当かなんて根拠を知る方法を俺は知らねえ」

根拠がない以上それはただの過程だからな。意味はほとんどない。

それに、俺は衛宮士郎には他のルートがある事を知っているから余計にこの世界の士郎を殺してもアーチャーが消えるとは思えない。

「そう…か…」

「とはいえ、前にも言ったがあんたは第二の人生を歩んでるわけだし、新たな正義の味方を探すのもありなんじゃねえか？」

「・・・」

「どうするかは自由だって前にも言ったが、俺っていう可能性に賭けてくれると嬉しいね」

「そうだな…」

どちらにしろ、自由と言いながらとりあえずの目標を潰された気がしないが、心惹かれるものがあるのは確かだ」

「うぐ…」

だからこういうの嫌いなんだよ。

「悪い…」

「クク、冗談だ」

からかわれただけかよ！！

まあ、今の笑いはいつもの皮肉気なものではなく本当の笑みな気がしたのでまあいいか。

実際に俺も悪かったしな。

「実際の所はな、あの二度目の生を受けた後の話の時点で君のハッピーエンドに引かれてはいた。

その後にも、とある言葉がきっかけで考え直した部分もあるしね」

「きっかけ？」

「いつだったかな、とある女の子が『自身が辿った道を、救ってきた命に後悔はしてほしくない。

良かれと思って救ってきた命なんだ。最後に国は滅びたかもしれないけど、その中で皆が感じる事が出来た幸せまで否定してほしくない。

そんなのって悲しいじゃん？』とね…。私に言われた言葉じゃないが、胸が痛かったよ。

どうしたのかね？」

俺は胸元を押さえながら必死に恥ずかしさで死にそうなの気持ちを抑えてんだから、少しそっとしておいてくれ！！いや、してください！！

うわーうわー！！

他人から聞くとこつも恥ずかしい事をいつていたのか俺は！？

ホントもう穴があつたら入つてそのまま埋めて欲しい。

アーチャーがじゃん？つて俺のマネをして言つた部分にツッコミを入れられない程度には恥ずかしい！！

あ、ちよつと落ち着いてきたな…。

「つて、あんたいつから盗み聞きが趣味にn」あの時私は、食事の用意が終わつて君のマイルームに戻つていた、ついでに言つと君が拒否しない限り、君視点で外が見れるテレビがあるのは気のせいだったかね？」そうでした……orz」

自業自得じゃねえか…。

「それで、君の言うハッピーエンドの為にあと必要なのは何かね？」

俺の落ち込みようからか、話を反らしてくれるアーチャー。

「とりあえずは…やっぱり士郎の強化が先決だな。細かい事はキヤスターが準備してくれてるし、金ぴか達の事もたぶん戦力的にけるだろうし、聖杯も俺が喰らえば良いし」

うん完璧だ。ちなみに士郎の強化は金ぴか戦を目指し手がメインではありません実は（笑）

いや、金ぴかもメインっちゃメインなんだけど、予想外に士郎の成長速度が速いからね、そこは予定変更。既に士郎にはその後用に強くなってもらったために金ぴか達には踏み台になってもらうことが決定しましたwww
わーぱちぱちwww

「前から言おうと思ってたのだが、その喰らうとか聖杯を弄るだとかの表現はどうにかできないものかね？」

「ムリダナ（・×・）

この表現が一番合ってるし、俺が使っ道具的にもなww」

「分かった。無駄だという事がな」

失礼な！

「あ、そういえば。アーチャーに見てもらいたいものがあったんだよ」

俺は手に魔力を集中させ、ある魔術を発動させる。

「これ…は…『投影』…まさか、無限の剣製から？」

「おうよ。なんとかね。つてか難しすぎるでしょこれ？」

「しかし何故それなのかね？」

俺の手の上にあるものは剣ではなく、たい焼きww
そりゃツツコまれるかww

「いや、練習をこれでしてたからつい……」

UBWをラーニングで覚えたとはいえ、投影自体も練習したかったんでしたんだけど、予想外に難しかった。ラーニングで覚えたとはいえ、エミヤシロウの『投影』はUBWからの派生だしいけるとは思ったから余計にね。

で、なんでたい焼きかというと、とある桜がきれいな島の魔法を思い出して、あれって投影っぽくねとか思いながらやったら何故か出来たんでそのまま練習に……。

最初は、何でUBWの派生の練習の筈なのにこっちの方が軽くできちゃうの？とか、腹ペコキヤラ確定？とか、無限の菓子製？とか考えただけ。

美味しいから良いやと納得した。その後にはちゃんと剣もできたし。

「む……少し、というかなんか疑問はあるが、その『投影』がどうかしたのかね？」

「いやー、士郎に自分の中の物を自覚してもらおうかとね」

「君が教えるത്？」

「だって、アーチャーが士郎に教えろ」「断固として拒否する」だろうと思ったからね。ヒントとしてかね？ヒントさえあれば俺が士郎

正直、舐めていた。

英雄王ギルガメッシュ。

コウジュに諭されてから、とにかくセイバーに言いたい事があって、伝えたくて、橋まで戻った。

そこにはまだセイバーが居てくれて、自分の思いを改めてぶちまけて、まだまだ言いたい事はあったがセイバーの手があまりにも冷たかったからひとまず家に帰ろうとした。

——その矢先だった。

『どこに行く？それは我の物だ』

あいつが現れたのは。

最初は俺が囿になっている間にセイバーに逃げてもらおうと思ったが、コウジュに言われたことが脳裏に浮かんだ。だからセイバーと共に一当てした後、体勢を立て直そうかと思ったのだが、奴はそれを許してはくれなかった。

『ゲートオブバビロン』

コウジユは確かそう呼んでいた。

そこから出てくる数え切れない程の宝具。

その宝具たちは真名解放などしてはいなかった。

だが結果はこの様だ。

俺は胴や、全ての手足を撃ち貫かれている。

セイバーは撃ちだされた宝具は避けたが、ギルガメッシュが取り出した、エアとかいう禍々しい剣の様なやつを真名解放してセイバーに瀕死の重傷を負わせた。セイバーもエクスカリバーを真名解放したのに……だ。

「ぐ……セイバー……！」

「士郎……そこに……居るのですか……？」

俺のすぐ傍に飛ばされていたセイバーに話しかけるが、セイバーから返ってきた言葉は弱弱しく、瀕死である事を俺に容易く分からせるものだった。

だというのに――

「あなただけでも……逃げて……ください……」

セイバーは俺の事を逃がそうとする。

出来るわけがないだろうがっ！！！！

自身の身体に鞭打ち何とか立ち上がる。

穴のあいた部分からは力を入れたせいでブシッと勢い良く血が吹き出る。

それがどうした！！

良くも悪くも稽古の時に痛みになかなからずの耐性はできた。

これ位！！

何とか立ち上がり、武器を作りだす。

コウジュに改めて貰ったあの剣じゃだめだ。

あれでは勝てない。

だったら、あの時投影したあの剣を！！！！

「トレース・オン！！」

イメージ
投影するのはコウジュと戦った時のあの黄金の剣！！

手にしっかりとしたあの時の剣の重さが伝わってくる。

成功だ。それを構え――

「『投影』…か…。

つまらぬまねをする」

そんな俺を見てギルガメッシュは何かを取り出す。それは黄金の剣。奇しくも俺が投影したそれとよく似たものだ。

「お前の持つ、王を選定する岩に刺さった剣は、北欧の支配を与える木に刺さった剣が流れたもの。これは更にその源流」

何…？

それじゃあ…

疑問を持つちゃいけなかったのに、俺は思い浮べてしまった。

「どう足掻こうが、複製が原典には――」

次の瞬間には奴は俺の前に居て――。

「勝てん」

そして俺は剣ごと胴を逆袈裟に斬られ、軽くふるわれただけのそれは、俺の胴に紅く太く線を残してもあまりある威力で俺を再び後ろへ吹き飛ばす。

「が…は…」

痛い痛い熱い――

「士郎――でか――!？」

セイバーが何か言ってきたりしているが良く聞こえない。
自身の血の音がうるさすぎる。

うるさいうるさいうるさい。

セイバーの声が聞こえないじゃないか。

その内、セイバーは奴と話したようだ。

「セイバー、早く我の物になれ。さすればその小僧を助けてやらん
事もない」

な…に…？

そんなのは嫌だ…。

「…わか――」

「そんなのは駄目だ！答えるな！…!」

いつの間にかあれ程うるさかった血の音も静かになっており、身体
も少しだけ回復したため、俺は再び立ち上がる。

だがやはりというか、すこちは回復したとはいえ身体中に穴が
あいている事実は変わらない。

「何をしているのですか！？もう無理です止めてください！！こんな事であなたに死なれたら私は——」

この期に及んでまだ俺の心配をするのか。

ははっ、コウジユの言っていたことが改めて身にしみる。

しかし、今はそんなことより——

「うるさい！！少し黙ってろ……」

「しかし私は——」

「俺には！！セイバー以上に欲しいものなんてない！！」

「士郎……」

「俺の中にはお前の代わりになるものなんて一つもないんだ！！」

腹が立つ。

ああ、本当に腹が立つよ。

セイバーにこんな思いをさせてしまう俺の弱さにも。

あくまで俺を助けようとするセイバーにも。

そして何よりもセイバーにこんな思いをさせている英雄王に！！

腹が立つ！！！！

「だから俺は、こんな奴にセイバーを渡してたまるのか！！」

「たわけ。それは貴様には過ぎた宝だ」

「失せろ！英雄王！！！」

「雑種が…セイバーの存命に手間がかかるがお前を潰すか」

英雄王があのだんな剣を持っていない左手をこちらに軽く振る。

その後方にゲートオブバビロンが開き、こちらに射出される。

こうなったら、あの壊れない概念を持つ剣を一旦出して…

そう思いカードを素早く出し、剣を具現化させようとするが――

ガガガガガガン!!

英雄王が放ってきた剣達は横から飛んできたな何かに弾かれ、こちらに届く事はなかった。

「誰だ!!?」

英雄王が飛んできた方向を向いて叫ぶ。

俺もその方向を向く。

そこに居たのは――

「じゃっじゃーん。真打ち登場!!」

あのいけすかない、アーチャーに似た赤い軽鎧と外套に身を包むコウジユだった。

s i d e o u t

s i d e : コウジユ

いやー、ちょっとビックリした。

何故かっていうと、ギルガメの行動が記憶にある原作と微妙に違う。むしろ、今までが一致してるのがおかしかったのかもしれないが、本当に焦った。

本来なら士郎が新たな力を顕現して、ギルガメのエヌマ・エリシュを押し返す筈だったのに、まさかゲートオブバビロンの方を使うとは。

それでまあ慌てて、俺も『投影』品を撃ちだして横から撃ち落としたりした訳なんだ。

ああ、アーチャーもどきの格好なわけ？

それは勿論投影使うんだから、これを着ないとな。

PSP02にはアーチャーが着ている赤原礼装が存在するからそれを改造して着ている。

ただやはりというか、まことに残念ながら赤原礼装は赤原礼装でも女物に改造してある。
いわゆるアチャ娘だ。

PSP02をしている時、俺が育てていたKoujuは女の子であったため。性別制限があって着れなかった赤原礼装を着れるようになって嬉しくは思うが、アチャ娘であるため、嬉しさが急暴落というのは別の話である。

「また貴様か！小娘！！」

「小娘言つな！！このデコッパチ！！」

「なにい！！？」

「ずっとオールバックにしてると広くなるぞこの予備軍め！！！」

なんて、どこかで聞いた事実なのかどうか良くわからん事を言っ
て金ぴかを弄りながら士郎達との間にまで跳んで降り立つ。

「コウ…ジュ…」

「話は後だ。」

士郎、俺が今から時間を稼ぐ。その間にお前は勝てるものを作れ」

「勝てる…もの？」

「そうだ。簡単だろ？勝てるものを作るだけだ」

「だが…」

「ヒントは俺の闘いにあるかもね？
さて、トレース、オン。」

そう士郎に小さい声で伝えると、俺は手に白黒の双剣、干将莫耶を取り出す。

「いくぜっ！！」

「捻りつぶしてやる！」

side out

side：士郎

勝てる…もの…

「ゲートオブバビロン！！！」

「———フリーズアウト停止解凍、ソードパレルフルオープン全投影連続層写……………！！！！」

目の前では剣の撃ち合いが行われている。

ギルガメツシュは原典を、コウジュは投影したものを。

いくつもの宝具のぶつかり合い。

その一発一発に信じられない程の威力と神秘を内包している。

中でも。コウジュの物に目が行く。
なぜだろうか、妙に既視感がある。

同じ『投影』だから…？

そのとき、ドクンッと何かが脈動したような気がした。コウジュに
貰ったカードか？

そんな事を考えていると――

「士郎？」

いつの間にか、すぐ近くまで来ていたセイバーが心配気にこちらを
見てくる。

「なんでもない。

それより、勝てるものを作らないと」

とにかくイメージを――

『勝てるものを幻想しろ…』

再びあのいけすかない赤の弓兵の言葉が脳裏をよぎる。

いけすかないがあの言葉は真を射ている。

俺に必要なものだ。

『イメージするのは常に最強の自分だ』

最強を幻想しろ!!!
イメージ

side out

side:コウジュ

くっ、難しい!!

多重投影等を用いて金ぴかの宝具を撃ち落とすが、純粋な投影の身で行うのは中々精神をすり減らす。

概念強化などをすれば楽になるのかもしれないが、それでは投影ではなくなってしまう。

そしたら士郎の眼にヒントとして映らない可能性がある。

だからやっているのだが…

「ああもう!!」

金ぴかの宝具を続けて投影したもので撃ち落とす。

「I am the bone of my sword（身体は剣で出来ている）!!」

前方に二次色に光る、花卉の様に展開する盾を展開する。そこへ金ぴかの宝具が降り注ぐ。

きつつ…!! だけどやらせねえ!!

その状態で展開している盾に後から後から魔力を注入して、展開させ続ける。

後ろでは、士郎が何かを出すためか目を瞑り集中している。

あれ？ひょっとして見てないし聞いてない？

そして、光が辺りにあふれる。

まあ良い！

本来の成功だけでも納めてくれるならな。

士郎が紡ぎだしたものは光り輝く黄金の――

「天地乖離す（エヌマ）――」

な！？いつの間に！？

盾の向こう側では金ぴかがゲートオブバビロンから射出しつつこちらに乖離剣エアを真名解放しようとしていた。

つてか、そんな器用な事で来たのかよ！！！！

「――開闢^{エリシュ}の星っ！！！！！！！！」

くそっ！！何とかこのアイアスで止め――

「コウジュ！！避けてください！！！！」

――ようかと思ったが、セイバー達の準備はバツチリの様だ。

士郎が投影した“黄金の鞘”の後ろに2人でエクスカリバーを持って構えている。

なら、邪魔者は避けようじゃないか。

俺は瞬時にアイアスを消し、横へ力の限り飛ぶ。

次の瞬間には大きな爆発が大量の光と共にそこに顕現した。

「ちっ…」

しばらくすると、爆発で舞い上がった土煙やらが晴れる。

それと同時に金ぴかの方は何か不都合が起きたのか霊体化をして消えていく。

よっしゃ！！

細かい所は違うがこれでまた前に、ハッピーエンドに進んだ。

いっえーい!!

この喜びを誰かと分かち合おうと、ひとまずは士郎達の方へ向く。

「え・・・? / / /」

だが二人は――

「士郎…あなたが私の鞘だったのですね… / / /」

2人は抱き合っていた。そんなもっていい雰囲気。

え、マジで俺お邪魔虫系？

え？俺いらない子？

ボスケテ…orz

side out

どうだったでしょう?

思ったより金ぴか戦は派手になりませんでした。

コウジュは今回裏方です。

それもこれも、最終戦の為!!

士郎は着々とLVが上がっております。

スピード上げるとか言ってるんですがどうかほほえましく見守っていただけると幸いです。

844

えー、今回遅れた原因ですか?
シリアスシーンです。

そんなものはなかった?

いや、結構頑張ったんですよ?それでも…。

改めて思います。日本語って難しい。

さて、次回はいよいよ、最終戦…の序章。あのシーンはどうなるのか？ すごく期待。いや、ホントお願いします。

では、今回はこの辺で。感想お待ちしております（＾Ｏ＾）／

『stage38：死因をマーボーにしてやろうか！…innふえいと』（前書

どうもです。

皆様お久しぶりです。10日ぶりに…なるのかな…？

今回は一気に書きたい所まで書こうと思ったんですが、どうにも長くなりそうだし、ここまで引っ張っておきながら一旦切らせていただきました。

では、どうぞ。

『stage38：死因をマーボーにしてやるつか！…innふえいと』

>side：士郎<

——…は…？

剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣——。

辺りを見回すと、そこら中に剣が刺さっている。

地面は鉄錆の様な赤土——。

上を見上げる。

空も同じ色——。

それだけではない。

——歯車？

空には、この剣だらけの大地を囲うように歯車が浮いている——。

——止まっても仕方が無い。少し歩こう。

歩きながら刺さっている剣群を見るとふと気付く。

見た事もない剣が多いがいくつかはつい最近見た記憶がある。

——コウジュに見せてもらった剣…だよな？

見覚えのある剣がちらほらと刺さっているため、それらを一本一本見ていく。

するとどこからか声が聞こえた。

——身体は剣でできている——

——あれ？どこで聞いたんだっけ。

何故か、大事な事のような気がして、一度立ち止り、必死に思い出そうとする。

——ダメだ。思い出せない。

ダメだという単語を思い浮かべてはいるが、まだどこかで諦めきれない。

——もどかしいな。

心内にもやもやとした物を抱えつつ再び歩き始める。

すると——。

——これは、エクスキャリバー？

それは、自分が思いを寄せる人の宝具と似た名前を持つ剣だった。

自分がコウジュに、カードとしてだが貰ったモノ。

黄金色の、斬るためではなく儀式用と言われた方が納得できる、剣としては歪な形をした剣だ。

—— 使え…… ——

目の前に刺さるそれが俺に対してそう言っている気がした。

右手を伸ばす。

心臓の音がどんどん速くなっていく。

更に剣からこう言われている気がした。

—— 汝、我を使うに値するか……？ ——

心臓の音が速まって行くのが止まらない。

それでも手を伸ばし、手が持ち手に触れ——

・ ・ ・

「っー!!」

はあ、はあ、はあ、……。

心臓が痛い。

どくどくと血流を速め、自己主張してくる。

「ここは……?」

辺りを見回す……までもなく見慣れた自分の部屋だ。

という事は今は……。

「……夢?」

脳裏に浮かぶのは剣の刺さった赤銅色の空間。

それはあまりにもリアルで……。

どうやら自分は布団に寝ているようで、とりあえず自身の身体を起こす。

そこで、右手に違和感がある事に気づく。

何か持っている？

右手に持っていたのはカードだ。

それは、コウジユに渡されたカード、真力『エクスキャリバー』…。

「何で持つてるんだろ？」

考え事を始めると、寝起きでくぐもっていた思考が廻り始める。

ただ、それによって思い出されるのはカードについてではなく――
―。

「そ、そうだ、俺達あいつと…」

——ギルガメッシュ。

金の英霊と戦った事。

しかし、記憶が途中で途切れてる。

俺とセイバーはあいつと戦って…

あれ…？

あいつを退けた後どうしたんだっけ…？

そこへ。

「士郎？目は覚めましたか？」

「覚めたかー？」

戸を開けてセイバーとコウジユが入って来た。

「あのさ、俺…」

「痛みはまだあるか？傷自体は完全に回復している筈だが…」

俺の言葉にかぶせるようにコウジユが話してくる。

「え？あ、ああ痛みとかはないよ。

ってそうじゃなくて！！あいつと戦った後どうなったんだ！？」

それに答えてくれたのはセイバーだ。

「あなたはギルガメッシュを退けた後、倒れたのです。安心して気が振けたのでしょうか」

「そうだったのか…ありがとう。回復は…コウジユがしてくれたのか？」

いくらこの体が丈夫だって言ってもあれだけの傷があったし、まだ夜中っぽいから多分あれからそんなに経ってないだろう。

思い出すのはコウジユの回復系のカード。

どういう理屈で回復出来ているのかは分からないが一瞬で回復できる。

ついでに思い出す…、いや、思い出してしまう修行のこと。

回復できるからギリギリまで、しかも一瞬で回復するからすぐに再開されて――

ガクブルガクブル……。

「うんにゃ、違うよ。俺は何もしてない。それはお前が自分で治したんだよ」

自分で？

「あなたが最後に顕現させたあの鞘を覚えていますか？」

ギルガメッシュの宝具を押し返したあの鞘のこと…だよな？

あの幻想は意図して生み出したものじゃなかった。

というよりは、何かを出そうとしたのではなく、ただ勝てるものを、セイバーを、自分を勝利に導くものを幻想した結果出てきたものだった。

「覚えてはいるけど、あれって何なんだ？」

「あれはエクスカリバーの鞘。私が生前所有し、手を離れ戻る事になかった鞘です…」

エクスカリバー…の…？

確か、持ち主を不死身にするとかいう…それが俺の中にあつたのなら俺が異常ともいえる超回復能力があつた理由にはなる。

理由にはなるが…何故？

何故、そんなものが俺の中に？

「なあ、何で…」

「それが何故あなたの中にあるかは分かりません」

「俺知ってるよ？」

「そっか…」

ん？

アノ、コウジュサン？

イマナニカオカシナコトイイマセンデシタカ？

「コウジュ！あなたは知っているのですか！？」

「いや、だから知ってるってば。あと、今真夜中だから、しー…」

人差し指を口の前に持ってきて静かにするよう促すコウジュ。

それはそうだけど、大声出しても仕方ないって！！

俺もセイバーが出てなかったら代わりに出してたし。

「あのさ、俺が言うのもなんだけど、もう俺が何知っててもそのた
びにツツコムのしんどくない？」

確かにそれはそうだけど、なんか言われたら腹立つ。

俺だけじゃない筈だ。

横のセイバーもぬぐぐといった風に我慢しているし。

「そんでだな、何で士郎に鞘が入ってるかだけど、実際は単純な話
さね。

誰かが士郎に入れた。それが答え」

「それは誰なんだ？」

いや、ひょっとして——」

誰かが俺に入れた。

その事を聞いた瞬間、コウジユに聞こうとしながらも俺の中で思い
浮かんだ人がある。

親父だ。

何故親父が浮かんだのかは自分自身まったく分からないが、直感的に絶対そうだという確信があった。

「親父…？」

「おおー！？どうした！？正解だけど無事か！？どこか頭打った！？」

「それはさすがに失礼だろ！？セイバーもそう思うよな！？」

さすがにこう何度もこういう扱いされると反論したくなる。セイバーも同意してくれるだろうとそちらを見る。

「・・・」

何故顔を反らすし…orz

「ごほん…えー、切嗣が入れたという事ですが…いつ？いや、そうか、大火事…」

「その通り。それが唯一士郎を生かす方法だったからな」

大体の事は今ので予想はついた。が、詳しく聞きたい。その思いがコウジユ達に届いたのか、よく言われるように顔に出ていたのか、話し始めてくれた。

「士郎、切嗣氏はな、前回の聖杯戦争でエクスカリバーの鞘を触媒にセイバーを召喚した。けど、切嗣氏は鞘をセイバーに返さずに自身が持つ事にしたんだ。その方が勝率が上がると考えたから。実際その考えは正解で、勝ち残った。けど、あの大火事。闘いが終わって、生存者を探して、探して、探して…やっと見つけた少年は瀕死の重傷。その少年を生かすためには鞘の力を借りるしかなかった」

「エクスカリバーの鞘は持ち主を不死身にするほどの癒しを与えてくれます」

それが、俺の治癒能力の正体…。

「奇しくも、親子二代にして同じ戦闘方法になったわけだな」

そっか、親父も…。

そして一つ合点がいった。

セイバーと俺の縁だ。

いつだったか遠坂との話で『セイバーに対する並々ならない繋がり、縁があるんじゃないか』、だから魔術師として半端な俺が（言って

て少し悲しくなった）“セイバー”というクラスを引き当て、“アーサー王”を呼び出す事が出来たんじゃないか言う話をした。

それが鞘だったわけだ。

だが、そうなると……

「悪い…セイバー。お前の鞘を…」

知らずとはいえ、セイバーの鞘を俺は取り込んでしまってるわけになるんだよね？

俺としては正直何度も助けられているわけだし、命の恩人ならぬ恩鞘？になるわけだからありがたいのだが…。

「いいえ、謝る必要はありません。その鞘があつたおかげであなたが助かってきたというならそれは正直誇らしい。それに——」

セイバーが頬を赤く染めて、うつむく。

どうしたんだ？

「——その、なんというか、繋がり…？があるというか。それはそれで嬉しい…？というか…私は何を言っているのでしょうか…？
／／／」

時が止まった。

空気が凍るとかそんなのではなく、ある意味嬉しい止まり方。

だが、その止まった時に対し、自身の顔が一気に熱くなっていき、心臓は早鐘のごとく鼓動を早くする。

俺も何が言いたいのかわからない。

いや、これだけは言える。

セイバー可愛い…。

「はぁ…俺はおじゃま虫なわけだな…」

そして時は動きだす…。

動かしたのはコウジユだ。

ゴメン、一瞬居る事忘れてた。

コウジユは立ち上がり、戸を開ける。

「コ、コウジュっ！／＼
い、今のは違います！ーいえ、違わなくはないんですが！ーいや、
そうではなくて！ー！／＼」

セイバーが顔を赤くしたまま、出ていこうとするコウジュに弁解しようするかのごとく話しかける。

が――。

「ハイハイ、御馳走さん御馳走さん。こんな甘え所に居れるかつての。俺はちよつと行くとこあるから行くわ。ゆっくり養生しな。2人でな…」

そう言ってコウジュは出ていった。

むう…

一気に気まづくなる。

いや、気まづいと言っても嬉しいものではあるのだが…ってこんなことやってるからコウジュにリア充氏ねとか言われるんだよな…。

「士郎！あ、あの――」

意を決したようにセイバーが話を始めた。

「お腹はすいてませんか？」

「あ、ああ…そうだな。すいてる」

嬉しい沈黙とはいえ、そのまま続ける訳にもいけないし、不自然な話題転換ではあるがこれに乗るしかこの恥ずかしさはどうにもならない。

実際にお腹も、意識すると自己主張を始めた。

そのため、2人して、台所の方へ向かうことにした。

これひょっとして、またコウジユに弄られるのかな？

> s i d e o u t <

> s i d e : コウジユ <

おはろー、皆。

現在俺は、いつだったかキャスターに教えて貰った防音結界を俺の周囲に張って屋根の上に居る。

ちなみに、これは外と中の音を遮るもので、色々と便利な魔術だ。

まあ、そんなに習熟度は高くないので俺の半径1mほどだけだな。

なんでそんなものしてまで屋根に居るかって？

聞こえるからだよ！！！

いちゃいちゃラヴラヴ士郎とセイバーがしてるのがな！！！

いや、さつさと屋根に避難したから音声だけではあるんだけどね？

けどこの獣耳^{ケモノミミ}、どんどんよくなってるから息遣いとか、衣擦れとかの細かい音も拾っちゃまってさ…。

見えない分余計に生々しくて…。

さらに原作とかアニメのシーンが思い出されてしまつて…。

音からシーンが俺の中で補完されていくわけだ。

恥ずかしいたらありやしない。

ちなみに流れるには大体アニメ版に似てるかな？

当然、アニメになつてない部分もあるわけだが…。

うーんと、簡単に言うとな——。

セイバーが士郎に何か食べたほうが良いつて言つて、セイバーが台所に立つんだけど、料理したことないセイバーに作れるはずもなく、結局二人で作る事になるんだよ。

台所に二人、セイバーの後ろから士郎が手を握つてこうやるんだつて教えてつつラブ空間を発生させるわけだ。

ま、まあ、ここまでは、まだ、なんとか、ぎりぎり許容範囲だ。

けどな？この後からだ。

俺が屋根上に引きこもるといふ、日本語的に意味分からん状況を作りださざるをえなくなつたのは。

セイバーの手を後ろから握つてゐる土郎の顔は必然的にセイバーの耳元にあるわけで、その状態で、土郎がささやくようにセイバーに今を生きて欲しい旨を今度はしっかりと自分の思いを言つてくんですよ。けどまあ、セイバーはまだそれを受け入れられず、戸惑いやらなんやらで心内を複雑じくさんにしながらその場を去るんだ。

土郎はすかさずセイバーを追ひ、もう一度セイバーに自分と居て欲しいと告げて、更に口づけをする。

セイバーはその口づけが終わつた時に『卑怯です』って言つて今度はセイバーから口づけを…。

はいこつから18禁！！！！

もう無理！！

この時点でやっと遮音結界思い出して引きこまりました！！

はうあ…。

耳押さえても聞こえてくるっていう地獄。

真剣に死ぬかと思いましたが。皆知ってるかい？人って恥ずかしさで死にかけるんだぜ？

っていうか、テンパってしまっただわはわと、どこぞのちみっこ軍師達みたいになりながらここまで聞いてしまったけど、どうしてさっさと遮音結界思い出さなかった俺！！

士郎の部屋でその後の展開を思い出して屋根上に避難したは良いが、予想外にラヴ空間形成（もう固有結界扱いでよくないかと思える位の）が早く形成されてしまったせいで…オートデバガメで悶えて俺のライフはゼロ状態。

顔が真っ赤どころの話じゃねえよ。

この年で三角座りで顔埋めて耐えることになるとは…。あれ？一度死んでるから年齢はリセット…？まあどっちにしろよく耐えた俺。

よし、ふう…。

ちょっとは落ち着いてきたな…。

それにしても、セイバーがかなり原作と変わってきてるな！。もち良い意味だね。

セイバーの反応がかなり柔らかく感じたのは気のせいじゃない筈だ。

セイバーが士郎から離れた時の反応も自身を否定されたという想いよりも戸惑いや嬉しさでどうしていいか分からなくなっただけで感じ、その後の卑怯だって言葉は自分で気づいてるか分からないけどかなーり嬉しそうな色を含ませてた。

極めつけは自分からキスした事。

これは素直に嬉しい。俺がハッピーエンドを目指した結果、少なくとも現時点で2人の中は原作以上だ。色々とうだうだしちまったが少なくとも結果がここにある。

「……」

キスシーン思い出したらまた頬が熱持ち始めた。
落ち付け俺。

落ち着くためにたい焼きを投影してかぶりつく。落ち着くために何でたい焼きだよとかはツツコンだら負け。

ハムハム…。

「まずい…」

失敗した。さっきまでよりは比較的落ち着けてはいるが、美味しそうなのは見た目だけで味は最悪だ。

別にそういうのに耐性が無いわけではないと思うんだが…何でだろうか？

やっぱり知り合いだからかね？

でもまあ、マズすぎて逆に冷静になった。

結果オーライとしておこう。

「ははっ」

冷静になったらなっただで笑ってしまう。

決して夢の国に居るリア充ネズミのマネとかじゃないよ？

なんか嬉しくて笑っちゃうのさ。

はたから見たら変人かね？真夜中にニヤニヤしてる屋根上少女ってのは。

「何かうれしい事でもあったかね？」

背後でいくつかの気配が生まれる。

「ああ。

ハッピーエンドに近づけてる実感が持てたもんでねー」

後ろを振り向くとサーヴァント勢（勿論セイバーは抜いて）がそこには居た。

「改めてみると、サーヴァントが勢ぞろいってのは壮観だな」

まあ全員小さいけど。

言わないけどな。

「1人は下だけどな」

ニシシと軽快に笑いながら言うランサー。

あんだ、絶対明日の朝に『昨日はお楽しみでしたね』とか言つつもりだろ。

「ふん、今の状況を分かっていない。特に原因の小僧は…」

いつもの皮肉気な言い方をするアーチャー。けどあんだが言っつなよ。もう既に別人とはいえ、あんだも自身の過去で似たような事やってるだろ？

「別によからう。今の状況だからこそとも言える。それに、主が言えることではなからうて」

「む…」

アサシンの言葉に二の句を継げないアーチャーwww
ちなみに、全員の真名をそれぞれ知っているため、他のサーヴァントもうんうんと頷いている。

「はははっ」

その様子に、俺は思わずまたしても笑ってしまう。

「さすがに笑われるのは心外なのだがね…」

先程までのヒネた言い方ではなく、どこか拗ねる様に言うアーチャ
ー。

「違っつて。何て言うか平和だなーって思っただけ」

本来ならこんなことは起こり得ない。俺というイレギュラーが居るからこそその異常。本来の聖杯戦争は正しく戦争だ。だから、こんなにも“異常”であることが“平和”だ。それがたまらなく嬉しい。その原因は自分であるのだから。

「けどよ、そいつは聖杯戦争に一番似合わねえ言葉だと思うぜ?」

「違うないwww」

笑いながら言うランサーの言葉に俺はさらに笑みを深める。

「でも、私は平和であっても良いと思います」

眼鏡ではなくいつもの魔眼封じの眼帯に元のサーヴァントとしての服（ロリver）を着ているライダーが言う。

「「それも違えねえww」「」

その言葉に俺とランサーが同時に笑いながら答える。

答えたのは俺とランサーだが皆が同じ思いなのがそれぞれ表情に出ている。

「明日…なのよね…？」

魔女としてのローブを目深にかぶったキャスターが聞いてくる。

「ああ。いつのまにか日をまたいでるんで実質今日だけど、まあそうなる」

いよいよ…。

……いよいよだ。

実質の日にちはそんなに経っていないのに、それでも一日一日が濃

かったからとても長い間ここに居た気がする。

だけだよっと、“ハッピーエンド”を始められる。

「キャスター準備は？」

「勿論整ってるわ。あのこもね」

「さんきゅー」

「そういう契約だもの、当然よ。その分しっかり対価を払ってもらうけどね」

「俺、これが終わったらコスプレするんだ……」

ゴンっ！！

「痛っ！？何するし！？」

「それ死亡フラグじゃねえか」

ランサーが槍で俺の頭を小突いて言う。

あ、やっぱこのランサーは分かるんだ。
染まってるねー。

だがまだまだのようだな！！

「フツ…甘いな。死亡フラグを乱立させる事で死亡フラグを回避し生存フラグを立てる秘義を知らんのか…？」

ちよつとアーチャー風味にニヒルにカツコつけて言ってみる俺。

「なん…だと…？」

どうやら俺の勝ちなようだ。
元二一ト予備軍舐めんなし。

言つて涙が溢れそうになつたなう。

「あの…、死亡フラグを折ろうとする事が死亡フラグなのでは？」

「あ………」

「「「「おい…」「」「」」

あははのは…つと。

俺もまだまだだつてことだな。

それにしても、いつの間にかライダーも染まってるんだね。

何々？マイルームにキャスターがパソコン設置してくれた？

え…、俺初耳なんですけど……。

ごほん、でもまあ俺には死亡フラグ関係ないみたいだし大丈夫つしよ。

あれ？でもそれって逆に考えるとUNLIMITED DEATH
FLAG？

何それ怖い…。

「うん、なかったことにしよう」

「「「「だからおい」「」「」」

A H A

「さつてと、キャスターさんそっぴいや向こうはどんな感じ？仕掛け
てきた？」

「いいえ、まったくよ。舐めてるとしか言いようがないわ」

「って事は、ひょっとして向こうに完全にこっちの戦力バレてないって事？」

「そうなるわね」

「さすがに、ありえねー」

慢心すぎっぞ（笑）

あらゆる宝具の原点持つてるんだったら遠見の鏡的なものをもってるだろっに使わないとか、ねえ？

俺だけなら何とかする自信があるのかねー？

まあ昨日の橋の下での戦闘も『アーチャー』のカードを使っただけでかなり苦戦してたしな。そう思われても仕方ない。

ああ、ちなみに『アーチャー』のカードというのは、ちよくちよく使う夢幻召喚スペカのアサシンのやつアーチャー版ね。

ラーニング出来てるUBWだけではなくそこからの派生魔術や技術の模倣を積み込んだカード。

中々の出来だと自負している。素質とかが必要だけど、それさえあれば、今日から君もアーチャーDAができるチート仕様。

他のサーヴァントも鋭意制作中です。

「けどあっちが慢心してるなら好都合。ぼこぼこにするだけさね」

「俺的には困ってっつのは気にいらねえが、コウジユの言う通りの奴ならそれでもなかなか楽しめそうだな」

「うむ。身体の変化による不都合もある故丁度良いだろう」

「うぐ…」

ランサーとアサシンがそう言うてくるが、アサシンの一言は中々に俺の心をえぐってくる。

これでもちよっとは進歩してるもん…。

はっ！！？

い、いかにいかに、また身体に引っ張られてる。

「と、とにかくだ！！明日は予定通りに行こう！！
士郎達の方も予定通りにつてことで！！」

「あいよ」「ああ、了承した」「心得た」「分かったわ」「分かりました」

「んじゃまあ、後はゆっくりして行ってね。

今日は俺が見てるからさ」

「お願いするわ」

俺が無理矢理終わらすとサーヴァントの皆はキャスターが作ったゲートに入っていく。ゲートは俺のマイルームに繋がっており、中で明日までゆっくりするのだろう。

俺は俺で明日の為にゆっくりするかねー。

一応警備しながらだ。

向こうはこっちの戦力を士郎達＋俺だと勘違いしてくれてるみたいだし、ここにきて俺以外が見つかったら計画変更しなくてはならなくなる。今までこっちを確認してないからと言ってこれからもしないとは限らないし、今日は俺が担当だ。

屋根瓦に寝転び空を見上げる。

「良い月だ…」

満月ではないが、白く気高く周りに光る星と共に俺を優しく包んでくれる。

映姫…じゃなかった…英気を養うためにたい焼きを投影して口にくわえる。

「うん今度は成功だな」

あの商店街のたい焼きを思い出して作ったたい焼き。でもやっぱり本物も食べたいな！。

そんな風にうだうだしながら夜を過ごす。

それにしてもキャスターさんの発想には脱帽だ。マイルーム使用の条件の一つにあるマイルームに行く際はどのタイプの扉でもいけるというものを利用してゲートの魔術からいけるようにするんだもんな！。しかもいつの間にかマイルーム改造されてるし。前見た時点で何故か奥に何個か部屋が増えてたし、さっき聞いたネット環境とかどうやったんだ？

あれかな、キャスターって陣地作成と道具作成のスキルあるしその関係でかね？

その内教えてもらおう。

ってか、俺の部屋マイルームなのに全然俺が使えてない件について…orz

S
i
d
e
o
u
t

どうだったでしょう？

今回は最終戦前のシーンなわけですが、良い感じで表現できている
でしょうか？

ボキャブラリーが少ない自分に絶望した。

しかも実はこれ、活動報告でも言ったんですが一度消えてるんです。
ナントコッタイ。

でも、やはり最終戦まじかという事で結構テンション高めで書きま
した。

それが変な方向に行っていないか心配です。

行っていないよね？

でもまあ、せつかなのでこのまま最後まで行くつもりです。

最終戦は前後篇でまとめる予定です。

そして、後日談的なものを入れてネギまへ。

スーパーネギタイム始まるよー。

では、F a t e 編も残りわずか。応援の方どうかよろしく願
いします。

そしてどうかお楽しみに！！！！

【以下、もう過ぎちゃったけどバレンタインという事で小話（i f）
をば】

士郎「ん？」

コウジユ「あ、士郎じゃんとっしたんだ？」

士郎「いや、それはこっちのセリフなんだが…

何してるんだ？」

コウジユ「見て分かるじゃん。チョコ溶かしてるんだよ」

士郎「ははっ…やっぱりそうだな」

けどさ、さすがに学校の給食を作る為に使いそうなサイズの鍋を使つてたら聞きたくもなると思うぞ？」

コウジユ「そうか？まあ鍋は実際その類なんだけだな」

士郎「なんでさ…」

ま、まあいつか。うちには大食いは何人も居るし案外足りない位だったりして…」

コウジユ「何言ってるんだ？これ俺の分だぜ？」

士郎「なにそれ怖い…」

とか妄想してみたり（笑）

もう過ぎちゃいましたけどねwww

『stage39:やつぱこは』最初っからクライマックスだぜ!!!」だ

まず一言!!

PSP02iインフィニティ発売おめでとございます!!!

ネット注文だったんで届いた時は思わずひゃっほいしましたwww

そして次の一言!!

ごめんなさい!!>(――)<

気づいたらこんなに経ってました(;´Д`)

書いては消して書いては消してで、思うように筆が進みませんでした。

これがスランプと言うやつでしょうか?

たださえ微妙なクオリティなのにこれ以上下げたくないでござる(

´ω´、)

まあとにかく完成したのでどうぞ!!

『stage39:やつぱりは、最初っからクライマックスだぜ!!!』だ

>side:士郎<

目が覚める…。

そのまま体を起こす。

「ん…」

自分が起きた事でセイバーも起きたかと思ったが大丈夫だったようだ。

改めてセイバーの顔を見る。決戦が間近だというのは分かっているつもりなんだが、どうしても嬉しさがこみ上げる。

このまま見ていたいのには山々だが、そうも言ってられない。仕方なく布団から出て服を着る。

「士郎…?」

どうやら、セイバーを起こしてしまったようだ。

「あ、ごめん。起しちゃったな」

「大丈夫です」

セイバーはそう言い、布団を出す。だがまあ、あれの後なので当然セイバーも服を着ていないのでセイバーの白い肌が目に写る。

「「あ…」」

俺は慌てて目を反らし、セイバーは急いで服を着始める。

昨日（実際は今日だが）互いに見たというのに改めて見ても互いに視線を外してしまう。表現のしがたい気恥かしさだ。朝になって日の光があるから余計にだろうか…。

「お、俺、先に言ってるっ」

「は、はいっ」

恥ずかしさでいたたまれなくなって部屋を出る。

「朝ごはん…いや、その前に——」

頭を冷やすためにも少し外に出てみるか。

このまま行っても弄られるだけだしな。

玄関を開け、外に出る。早朝故に辺りは薄く朝靄が掛っている。

「……」

どこから歌みたいなのが聞こえる。

「中庭の方か？」

足をそちらへ向ける。

すると、聞こえていたものがやがてしっかりと耳に入り、やはり歌だという事が分かる。

でも誰が？

中庭を見渡す事が出来る位置に行ける、最後の角を曲がる。

誰も…居ない？

「誰…かの為に生き…て…」

よくよく聞くと、どうやら声は上からしてくる。

屋根上か…。

場所が分かった所で歌の方に意識が集中する。歌とかはあまり聞く方ではないが、思わず聞き入ってしまう。

「あ…り…の…ま…ま…で…」

…ふむふむ、これもなかなか良い感じにできたかねえ」

聞き入っている内に終わってしまったようだ。

場所が分かった時点で歌の方に耳が聞き入ってしまったから誰か分かっていなかったが、今の声で分かった。

歌っていたのはコウジュみたいだ。

「士郎か、どしたん？」

予想通り屋根に居たコウジユが飛び降りてくる。

猫が着地する時みたいになやかに音も軽く着地する。

「たまたま外に出たら歌が聞こえたから、誰だろうかなって気になつてな」

「いつのまにかそんな時間か…ずっと歌ってたから気付かんかったぜ」

「あれからって…あ、ごめん…」

コウジユが部屋を出ていく時気を利かせてくれたのを思い出した。

「あやまんнатて。」

俺は嬉しいんだぜ？少なくともお前らが望んだ結果だろ？」

「ああ、それだけは確実だ」

それだけは確実に言える。

「あ、そついやご飯ってもう作るのか？」

「え？あ、ああ、今からだ」

「そか」

そう言つて玄関の方へ向かうコウジュ。

歩きながら鼻歌を歌っている。リズムが先程の歌と同じだが今度は少し陽気な感じに歌っている。アレンジなのだろう。

コウジュって歌上手いんだな。

あ、そう言えばさっきの感想をまだ言つてなかったな。
勝手に聞いたとはいえ、感想は言いたい。

「コウジュって歌上手いんだな。よく歌うのか？」

「!？」

ごほっげほっ!?!?

うあ、えと、お前何いきなり言つてんだ!？」

コウジュは、むせながらこっちに振り向き顔を赤くしながら一気にまくし立てる。

「いや、せっかく聞けたんだから感想言おうかと」

「む…、むーその、なんだ、さんきゅー…」

玄関の方を向き直し、顔をこっちに見せないようにしながら言うが、かすかに見える頬が赤くて微笑ましい。

言ったら殴られるがな。

落ち着いたのか、歩き始めるコウジユ。俺もその後について歩き始める。

「前はよくカラオケに練習とか行ってたからつい懐かしくてなー」

カラオケ!?

英霊ってカラオケ行くのか!?

異世界だから!?

「よく妹とか先輩とかと言ったもんだぜ。点数勝負とかな。お昼代が良く浮くんだよ」

妹!?!先輩!?!新事実が続々と発覚!?!

というか、えらく所帯じみてないか!?!お昼代って…いや、コウジユが食べる量から考えたら切実な問題か!?!いやいやいや、そういう問題じゃないだろ今は!!

「か、カラオケとかあったんだな…」

「いや、普通街にはいくらでもあるじゃん」

何当たり前な事言ってるの?という顔をされる。

これって、俺がおかしいのか!?

教えてくれる人は居ないので、釈然としないまま、俺はコウジユの後を着いていくしかなかった。

朝食を食べ終わり、片付けも終わった後、俺は外出の準備をする。言峰教会に用があるのだ。一昨日に言峰に聞いた黄金のサーヴァントについての情報、少し調べると言っていたから何か追加情報がなにか気になったため足を向けることにしたのだ。

念のためセイバーと共に向かう。

このタイミングでサーヴァントを連れずに歩いて、最悪殺されるなんて事になったら全てが水の泡だ。

というか、むしろ身内の人間にぶん殴られる。

殴られる程度で何をと思うかもしれないが、それは甘い。パフェに砂糖を並々振り掛けたものより甘いというものだ。

考えてもみてくれ。基本全員サーヴァントだぞ？

他の遠坂や桜だって油断ならない。

遠坂は中国拳法を使えるし、桜だって最近魔力の使い方とかをサーヴァント勢に教えて貰ってるみたいで身体能力が格段に上がっている。ついでに言うところにはもれなくライダーが付いてくる。下手をすれば姉の遠坂も…だ。なにそのコンボ。そういえば、気づいたら

ライダーがナチュラルに居間に居たんだが何故誰もツッコまないの
だろうか？いつもの“気にしたら負け”というやつかな。

まあ一旦それは置いて、実はいつだったか勝ち抜けて腕相撲を
したんだ。ちなみに魔力の使用は可だ。

どうなったと思う？

一位：コウジユ

二位：ライダー

三位：セイバー

四位：ランサー

五位：桜

六位：アーチャー

七位：遠坂

八位：俺

といった感じだ。キャスターは不参加なんだが、これをどう思う…？

男勢全員でorzってしまったのは言うまでもないだろう。

それから、改めて思うがツッコミどころが多すぎる。

まずコウジユ。あの子は力だけで絶対に世界を落とせる。ライダー
とセイバー以外ピクリとも動かせなかったんだぞ？何故それが戦闘
でいかせないのかかなり謎だし…それを言ったらコウジユが泣き
そうになったのは別の話。

まあ後のサーヴァント勢は良いとして、遠坂姉妹、あなた達何して
るんですか！？

遠坂はまだ分かる。自力なら俺の方が上なんだが、やはり魔術の構成や効率が上手いから魔力有りだところという結果になってしまう。

ただ、問題と言ってしまおうと悪いが、桜の事だ。

五位ってなんでさ！？

アーチャー六位だぞ！？

アーチャーがいつもの口調で『やはり女性強いな…』って言いながらorzってたのはかなりシニールだった…。

まあ俺もその横でorzってたんだけどな…。

妹みたいな存在である桜にやられた時の悲しさと言ったら…はあ…

世知辛いな…。

キャスターとコウジユが共同で悪ふざけた結果こうなったらしいんだが…。

それで何の話だったか…あ、そうだ、長い回想になったが今はセイバーと共に言峰協会に向かっているって話だったな。

「土郎？考え事をしていた様ですが…」

「いや、何でもないよ。」

ただあえて言うなら、男の意地って何なんだろうなって思ってたさ…」

「そ、そうですね…
無理だけはしないでくださいね…？」

考えていた内容を誤魔化そうとしたはずが、内心がポロっと出てしまっ

若干引きながらも心配してくれるセイバーのおかげで少し元気が出てくる。元気がなくなった原因の一人はセイバーじゃなかったっけ？って思った奴。それは正解だが胸の内に秘めておくのが正解だ。

そうこうする内に俺達は教会の前まで来ていたようだ。

さてと、何か有力な情報があるだろうか。

扉に手を掛けの中に入る。

「言峰…？」

あれ、いないのか？」

声に出ずが出てくる様子はない。

別に時間を前に決めたわけじゃないから居なくても不思議ではない。

——ないのだが…。

何だこの違和感は…？

言峰が居ないというだけでどこか変な感じがする。

違うな、そんな単純なものじゃない。

自身の奥底から這い出る嫌悪感。

生理的嫌悪感とも言えは良いのか、とにかくここに居たくない。

「士郎、待ってください。ここはおかしい」

「ああ、俺も思った。このドロドロとした粘着質な感じがかなり気持ち悪い」

ドロドロとした粘着質――。

ああなるほど。

口に出してやっと理解した。

“言峰”だ。

この違和感の正体は言峰だったんだ。

目の前に居ないのに言峰と対峙した時のような感覚。

「ホント今日はどこかおかしいな」

どういう事だ…？

気持ち悪さの原因を考えるとセイバーが訂正する。

「違います、士郎。
以前もおかしくはありました。それが、今日は前に増して濃い。
注意してください、何かあります」

以前より？

恐らくセイバーが言っているのはセイバーを召喚した夜にここへ来た時の事。

でも濃いつていうのは？

俺が気づかなかっただけでここは前からこうだったってことか？

言峰が居ないから本来のこの空気を感じる事が出来ている？

けどそれはおかしい。ここは教会だ。居る人間があんなのもここは教会。この空気とは反した位置になくはならないはずだ。

「そつえば以前は言っていないませんでしたね」

セイバーはいつもの甲冑をその身にまとい俺の前に出る。

「ここはあまりにも空気が澱んでいる。聖なる場所とはかけ離れた所です。

そして、今日は特にその澱みが酷い」

戸惑いながらも歩みを進める。

訳が分からない。どついう事なんだろうか…。

とにかく言峰を探そうと奥の扉を見つけたので、扉に手を掛けた瞬間――。

——ドクン……

「ぐお……!？」

「士郎!？」

突然、俺を圧迫感が襲う。同時に子どもがすすり泣くような声が頭に響く。

頭の中を這いずるように圧迫していく声達、助けて、どうして、いやだ……いくつもの声が俺の中を駆け巡る。

身体が傾く。

「どうしたのですか!？」

セイバーがすかさず支えてくれる。

頭を押さえて声を聞く。

こんな声聞かなければ良いはずだ。だが同時に何故か聞かなければならないと俺の中の違う俺がそう囁く。

——あっちだ……

——行くな……

行くように言うのも俺だし、止めるのも俺。

いくつもの哀しみの声が、二つの声が、俺をどんどん満たしていく。

足が前へ、教会の奥へと進み出す。
意図したものではない。

だが進んでいく。

ゆつくりと、確実に、俺に何かを訴える“何か”に。

「士郎！！しっかりしてください！！」

肩を貸してくれていたセイバーが俺の前に出てきて止める。

でも、俺は多分奥に行かないといけないんだ。

「セイバー…俺、行かないと…」

「……」

口に出した時点で俺の脚は前へ進も始めている。

セイバーは俺の顔を見て無駄だと悟ったのか、はたまた別の何かを感じ取ったのか、俺を制止するのを止め、何も言わずに再び俺に肩を貸しながらついてきてくれる。

「ごめん」

「謝らないでください。しかし、一体何がそこまであなたを？」

「わからない。でも呼んでるのだけは分かる」

俺とセイバーは教会の礼拝堂に当たる部分を通り抜け、中庭を囲うようにしてある通路を歩いていく。

——奥へ……——

——やめろ……——

それなりに奥行きのある通路を歩いていくと、下へ降りる階段があった。

——降りて……——

——引き返せ……——

俺たちは二人して階段を降りる。

——ようこそ……——

——まだ間に合う……——

階段を降りていき、日の光のない地下へと入っていく。どんどん頭に響く声は大きくなる。

「ぐ……」

「っ……!?!」

降りていくと、そこそこ広い場所に着く。けど、ここじゃない。

俺とセイバーは鼻を押さえる。ひどいにおいだ。臭いはすぐそこに見える部屋からだろう。

そして俺の目的地もそこだ。

そして俺達はその目的の場所へと足を踏み入れた。

「何だ…これ……」

「澱みの原因はここですか…」

あまりにもな光景に思考が止まる。いや、止める。
止めたくなる光景がそこにある。

セイバーも、冷静に言っている様には聞こえるが、わずかにだが声が震えている。

俺達を包むのは単純な忌避感。
今すぐこんな場所など離れたい。

だが同時に足がその場に張り付いたように動いてはくれない。

それほどに目の前の光景は眼について離れない。

眼前には石で出来た台座がいくつも奥に向かって規則正しく並んでいる。

そしてその上にそれぞれ死体がのっているのだ。

日本は火葬だが外国では土葬にするそうだし、死体を一時的に預かって安置しているとかだったら普通ならあるかもしれない。

だが、目の前の光景はあまりにも異常で、異質で、とにかく日常にあつてはならない光景だ。

いや、日常でないものを何と定義するにしてもあつてはいけないものの筈だ。

台座の乗る死体達は1つとして通常の人の形を保っているのではない。

かろうじて人であつたであろうというものばかり。

そう、かろうじてだ。

俺が人の形を知っているから、部分部分を見て、人の、更に言うと子どもだったのであろうと分かる。

それほどに身体を構成していたであろう四肢が、胴が、頭部が、内蔵や筋肉、血管に至るまでがバラバラとそこに並べられている。

極めつけはどの死体も妙に生々しいこと。

先程まで聞こえていた悲しみの声が、怨さの音が、よりクリアに聞こえてくる。

目の前にあるのは明らかに死体だ。

バラバラになったものをとりあえずといった感じに纏められただけ。

そして何年もそのままだったのであろうか、腐敗はかなり進んでいる。

なのに、明らかに死に体であるのに、生々しさがある。

まるでまだ生きているような――

声も、その原形など忘れてしまったのではというほどに崩れた声帯からだしているような――

「よく来たな衛宮士郎、そしてセイバー」

動けないでいる俺たちに声が響く。

「言…峰…」

悠然と部屋の奥から歩いてくる言峰は、人を不快にさせるだけの笑みをその顔に張り付けて近寄ってくる。

「いくら教会とはいえ、勝手に奥まで入ってくるのは考えものだがね」

いつもと同じその口調がやけに俺を腹立たせ、止まってしまってい

た脳が一気に熱を持ち始める。

「これはなんだ!!」

未だ平然とした態度を取る言峰に言葉をぶつける様に発する。

「ふむ、そういえば君も可能性はあったわけか、呼ばれたのだろうか…。さて、これらが何かという質問だったな。

しかし見て分からないかね？死体だよ、少し特殊ではあるが…」

だがそれでも態度は変わらなかった。

「特殊…とは一体何の事を言っているのですか？」

今度はセイバーが聞く。

言峰は歩みを止め、笑みを静かに深める。

そして、そんな言峰と俺との間に、俺を守るようにして前へ出るセイバーに言峰は答える。

「これは食事だよ。彼のね」

彼？

一体、誰の事を…？

俺はそう思ったが答えはすぐそこに居た。

「昨日ぶりよなセイバー」

言葉と共に部屋の奥から出てきたのは、あの黄金のサーヴァント――。

「ギルガメツシュ…？何故お前が…」

今までも空気は重く、最悪だったが奴が来る事で一気に圧が増す。それに屈する事が無いようにとにかく疑問を口に出す事で抵抗しようとしたが、ギルガメツシュは俺など視界に入って居ないかのごとく無視し、話を続ける。

「昨日の今日で我に会いに来るとは中々に殊勝な心がけだ」

「戯言をつ…！」

セイバーはエクスカリバーを構え、いつでも戦闘を開始できるようにする。

それに対しあの黄金の鎧をまとってはいるが余裕の態度で対峙するギルガメツシュ。

何故こいつがここに居る？改めて考えてみたが、ははっ、そんな疑問に意味はないじゃないか。

いい加減認めろよ、俺。

奴がここに居る、それが何よりの証明。

「言峰…お前がギルガメッシュのマスターだった訳か…」

だが、それに対し言峰は少し予想外だった。

俺の言葉に言峰は一瞬笑みを消した後、より深い笑みをして言葉を返す。

「ふむ…？聞かされていないのかね？」

「何が言いたい…？」

突然何だ…？

「あの銀の髪の少女だよ。あの子は私の事を知っているようだったが？」

「だから何が言いたい…!!？」

「いやなに、私は君達が手を組んでいると思っていたのだが…予想が外れたようだ」

は…？

思考が一瞬止まる。

何を言っているんだ？

コウジユの事を言ってるんだろうけど、あの子は当然仲間に決まってる。

一瞬、言峰が言うように何で教えてくれないのか疑問に思うがすぐにその思考は破棄される。

あの子は仲間だ。

俺に言わないのは何か理由があるんだろう（一瞬無い気もした）。

言峰はおそらく、俺達の不和を狙ってこんな事を言っただろうが失敗したな。

雰囲気呑まれそうになっていた身体が一気に軽くなる。

余程焦っているようだと言峰。

お前とはそれほど相対した回数があるわけじゃないけど、あまりにもらしくない。

俺の前に居るセイバーも少しけ甥が取れたように感じる。

セイバーも同じことを思ったようだ。

「おそらくあの子は聖杯を横からかすめ取るつもりではないのかな？獅子身中の虫とはこの事だな。

どうだ衛宮士郎？私と取引しないかね？」

俺たちにお構いなしに続ける言峰。

「取引？」

「そうだ。私の役割は聖杯の持ち主を見極める事。君は既に勝者だ。資格は十分にある。」

しかし、彼女が邪魔だ。聖杯を召喚するのは私がやっておこう。その間に君は――」

これもコウジユに助けられたって事になるかな？
さっきまでは雰囲気吞まれてかなり焦っていたが、いまでは言峰に対して感じるものはいわゆる三下のそれだ。

「ははは……」

思わず笑いを我慢できずに漏れ出す。

「どうした？」

何かおかしなことを言ったかね？」

「ああ、言ったよ」

「まったくですね」

「何……？」

こいつが何を目的としているのか、聖杯で何をしようとしているのか俺は分からない。分かるのはろくでもない事だろうという事くらいだ。だがそれで十分。

あの子が言峰側に着く筈が無い。
そう断言できる。

俺はよくお人よしだと言われるが、コウジユこそお人よしだと思う。
そんな子がこいつと居る所なんて想像もできない。

秘密？それがどうした。

必要ならやればいいと思う。というか、知っていたら俺は即ここに
特攻していたと思うから、それを予想しての事だと思う。
これもコウジユのお人よしの一つだろうな。
少し胸が温かくなる。

それにしてもコウジユはその場に居なくてもエアブレイクを出来る
んだな。

未だこの部屋に居るのに一気に空気が和らいだ気がする。

いつもは困りものだが今はありがたい。
こわばっていた身体が軽くなった。

「あんたよつぽど焦ってるみたいだな。
あんたの事に詳しいわけじゃないが、それでもこれだけは分かる。
今のあんたはらしくない」

「士郎の言う通りです。余程焦っていると見える。それほどにあの子は脅威ですか？」

心に余裕が出てきたので、いつも俺がされる側だった皮肉気な言い方をする。

なにか違う？ 難しいなこれ。一気に言峰の笑みが消える。

凶星みたいだな。

…ふと疑問に思ったんだがコウジユってひょっとして言峰の目的とかも知ってるのだろうか？ 知ってるんだらうな…。

少し、ほんの少しだけ、言峰がかわいそうになった。

まあいいか。

とりあえずこの部屋の原因はコウジユに聞くとしよう。

そのためにも今は目の前のこちらをどうにかすることが優先だろう。

「ギルガメッシュ…」

「滑稽だな言峰よ。まあよいこの状況でうすら笑いが出る小僧には少し腹が立っていた所だ」

ここに来て言峰のあの気持ち悪い空気が強くなる。

「殺すなよ。あとで使う」

「分かっている」

それだけ言つと言峰は部屋の奥へと消える。

そして周囲には無数の武器が出現し始める。

「小僧、軽く死んでおけ」

コウジュ：「やっぱり『エアブレイク』は直した方が良い。
この落差はやっぱりしんどい。」

どこからコウジユがくしゃみをするのが聞こえた気がした。

> s i d e o u t <

> s i d e : コウジユ <

ふえつくし!!

あ、どもども、コウジユだよん♪ナンツッテー♪

すまん忘れてくれ……orz

いやー、変なテンションで失礼。いつも通り？泣いていい？

まあとにかく変なテンションなのは理由がある。

何だと思う？

実は俺、既に教会の地下室の中に居るんだよねー…。

うん、そだよ。目の前で戦闘始まつてるよ？

出ていかないのかつて？

やだなーもう。出るタイミング逃しちゃったんだよ。出るに出れないみたいなのww

度々ごめんなさい…orz

で、でもな！？理由があるんだよ！！

俺の周りにな、居るんだよ。いっぱい。

何がつてそりゃあ――

『ねえねえお姉さん、誰に向かって言ってるの？』

『独り言とか不気味だよなー？』

『ねー』

てめえらにだけは言われたくない。

つまり現在進行形で俺の周りにはたくさんの半透明で浮いてる子達がいっぱい居るわけだ。

幽霊ってホントに居るんだねー…。

あ、胸元に鎖とかついてなくて少し安心したのは秘密だぜ。

最初はさ、ずっと来れなかったからここにある死体の状態を確認しに来たんだ。そして、出待ちしようと気配消して隠れようとしたんだ。

ホントは最初に来るべきだったんだろうけど、獣であるこの身体はこの場所を忌避するようで、中々来れなかった。臭いとか気配とかあまりにもきつかったんだ。

ちなみにそれはキャスターさんと一緒に解決済みだ。

それでまあ気配者遮断して侵入してみたらこの様ですよ。

飛ばし過ぎ？すまん…。

じゃあ簡単に説明するぞ？

まず、部屋に侵入。ちなみに例のアサシン装備な。

← 死体のあまりにもな状態に吐き気を催しながらも、自重。

← けど、失礼ながらやっぱり気持ち悪い。

← 壁にもたれていったん休憩。目を瞑って精神を落ち着かせる

← さて、落ち着いたし…と目を開ける。

←
いっぱい居る

←
目を瞑って再び開ける

←
いっぱい居る

←
俺、固まる

←
幽霊の子ども達が色々話し始める

←
固まり中

←
突然幽霊の一人から痴女呼ばわりされる

←
再起動&キレる

←
←

←
そうこうする内に士郎達が来る。
どうしてこうなった…orz

ゴメン簡単に言うとか言っというてこの様だ。

それにしてもこの子達何で恥女とかって言葉知ってるんだ？

『まあ僕たち生きてたらそれなりの年齢だからね』

『精神年齢上がるのは当然でしょ。条件そろえれば外に行けるから知識も入ってくるし』

さいですか…。

「っていうかさ、いい加減分かってくれたか？

この服装は特殊な効果があつて、隠れるために必要な効果があるから我慢して着てんの。おk？」

『つまりあれでしょ？ 厨二っつこでしょ？』

「違いーって言つてんだろっが」

ちなみに全部小声で話してるからね。

セイバーも金ぴかも気配察知は苦手な部類なのか、このアサシン服が進化して着てるのか小声位なら出しても今のところばれていない。何で分かったかっていうと、周り浮遊してる子達が俺にツッコミさせるもんだからつつい…。

けど、おかげで余計にこの子達の言葉攻め？が勢いを増して、ツッコミしまくってる間に出るタイミングを逃してしまった。

目の前でさ、金ぴかが2人に王の財宝から宝具出して撃ちまくって、士郎は俺が渡した大剣を盾にしつつ干将莫耶で弾いていて、セイバーはエクスカリバーで素早いステップと共に時に避け、時に弾いてをしている。

混ざりたいなー。

最近獣の本能なのか、元々そういう気質でもあったのか聞いてみるとホントにうずうずするのが強い。

『ねえねえお姉さんあの人たち仲間？』

「ん？そうだけど何だ？」

『いやー、あの金色の人倒してくれないかなーなんて思ってね。横で「ぶぎゃーwww」とか「ざまあwww」とか言いたい。聞こえはしないだろうけど』

え、何この子黒いんですけど…。

『あ、それ私もー』

『俺も俺もー』

やだこの子達、黒過ぎる。

『つーかよー、あいつマジうざいんだけど。人の事毎回毎回喰ってマズイって文句言うんだぜ？上手いって言われたいわけじゃねえけどよー』

えー、何この子達。シリアスシーン何それ美味しいの？をナチュラルにしないでくださいよホント。毎度のことながら俺が言えることじゃないんだろうけどさ。

マーボーがどこかに行く前からシリアスなんてものはなかった？

ノーコメントで…。

「やっぱりあいつの事嫌い？」

『『『『当然』』』』

基本的に俺と会話してる子たち以外も後ろで当たり前だと首を縦に振る。

ソーデスヨネー。

「あ、じゃあ言峰は？」

『『『『死ねばいいのに…』』』』

またしても後ろの子たちも頷く。

デスヨネー。

ってやっぱり黒いなこの子達…。

いや、当然か。

それだけの事をしてきたんだからな。

むしろ魂とはいえ、歪んでないのがスゴイ。

ここの穢れた空気の中にずっといる事もあるし魂が歪んでもおかしくないと思う。でもこの子達は笑える。強いな、この子達。

「他の人とかも恨みそうになった事は無いのか？」

『あるに決まってるじゃん』

え？そこは無いよっていう感動のシーンじゃ…。

『そうそう、最初は意味も分からず身体が死んでるのに魂を縛り付けられてずっと食べられ続けたわけだし恨むなとかまず無理っしょ』

『だよー』

他の人に聞いても何で私達だけがみたいなー？』

『でもね？』

いつからか考え方が変わったんだよ』

「考え方？」

『うんうん、あの二人は私たちみたいなのに頼らないと生きていけないんだねーとか、養ってあげてるんだとか、とりあえず可愛そうなんだなーとかね。そう思い始めたら何て言うか呪いみたいな恨みは消えたかな。他の人に対してもお門違いだし？』

まあそんなのとは関係なしに鬱陶しいとかは思うけどあの二人』

「うわー…」

みよんに優しい目をしながら言う子達。

言峰エ…。ギルガメエ…。

もう俺そんな目でしかあいつらの事見れない。

まあ、どっちにしろこの世界の言峰は三下臭しかしないから同じか。何でいきなり三下になったかは分からんけど…。

『そう思ったら身体が楽になってさ、それからそこそこな幽霊ライフ？を送ってるかなー』

『学校もタダで行けるしねー』

おばけにや学校も試験も何にも無いんじゃないのか？

『あーでもレポート書けないのはつらいなあ。良い研究議題みつけたのにさあ…』

マジでノー〇ル賞ものだと思うんだよねー』

研究議題って…お前ひょっとして大学課程も見に行ってるの！？

ってか、ノー〇ル賞って…。

下手すると普通に俺より賢い？

『俺は見たいアニメ見るのに誰かの家に言って後ろから見るとかないのが辛いなー…つかパソコンでイヤホン着けて見んなよな、音声無しじゃつままないじゃん』

『あ、私もそれ思う。生中継とか音声有りでみたい。後コメントしたい』

後ろからとか恐えよ！！

ホント何してんだよお前ら!!

『あ、そういえば最近青タイツのお兄さん見なくなったよね?』

『あーあの人面白かったのにね!。』

実体化して色々教えてたらリアルにジョ○ヨ立ち似合う人になってたもんね!。

あれは笑ったwww』

犯人はお前らかー!!!?

ってか実体化!?

何この高性能幽霊達!!

俺多分この世界に来て一番驚いたよ!?

うわぁ!!

ツツコミたいっ!!

大声でツツコミたいっ!!

『ところであ…』

「なんだ？」

『あの人たちピンチだよ？』

「え？」

視線を士郎達の方に向けると、2人が鎖（多分^{エルキドゥ}天の鎖だと思っ）に捕まっていて、今まさに浮遊する武器軍に貫かれようとしていた。

ちよ、え？えええ！？

> s i d e o u t <

> s i d e : : 士 郎 <

くそっ！！

すこし余裕を持ちすぎた！！

これじゃあギルガメッシュの事を慢心王って笑えない。

コウジユに貰った大剣を出して盾にしつつ何とか凌いでいるが、きつい。

今のところ何とか出来ていてもスタミナや魔力がいつか尽きてしまう。

セイバーはまだ余裕がありそうだが、あいつがこのままずっと宝具の雨だけで攻撃してくる訳が無い。

なんとか活路を開かないと！！

そう思ったのがフラグだったのか――

「このままいつまで凌げるか見るのも面白そうだが時間が押し^{エルキドゥ}てな。これで終わりだ。天の鎖^{エルキドゥ}！！」

黄金の鎖が空間を割くように現れ、俺とセイバーを絡め取る。

「これで――」

ギルガメッシュが剣を一本手に取り、それを――

「――終わりだ」

――投げってくる。

ぐっ！？くそ！！

疲労もあつてかまったく動けない。

そこで思い出したコウジュに貰った切り札。

これって、手に持つてなくても宣言すれば出せるか！？

ポケットに入れっぱなしになっているとっておきに一縷の望みをかけ、宣言しようとする。

「真力『えく』やらせねえよ！！」コウジュ！？」

俺たちの前に飛び込んでくる影、コウジュは手に持つ剣で俺に向かってきていた剣を弾いた。

「貴様……」

「やーやーまたあつたじゃんよーギルガメ」

どこから出てきたのかコウジュは悠然と俺たちとギルガメッシュの間立つ。

そこで目に着くコウジュが両手に持つ剣。

両方とも見た事無い。

右手に持つ、赤と黒のどこか生態的なもので構成されている剣は鍔の部分が黒く光を発している。

左に持つ剣は前に見せて貰った『蛇腹アルビーノ』に似ていて、刃の部分が紫色に怪しく光っている。ただ、アルビーノとは圧倒的に存在感が違う。

特訓のたま物か、剣の類をみると自然と解析するようになっていたから目に着く。

だが解析できない。

いや、理解したくない。

俺の中の何かが全力で拒否している。

出来るのは分析までだった。それも本来ならしたくない位の何かが俺を襲ってくる。

「あ、士郎。これは解析するな。多分飲み込まれる」

思い出したように、こちらを見ずに俺に忠告してくるコウジユ。

言う通りに解析しないようにする。

できれば先に行って欲しかったのは山々だ。

というか、コウジユさんは一体どこから？
やけに良いタイミングだったような……。

いや、コウジユだしなあ……。

この言葉だけで全て納得できてしまう俺は悪くない筈だ。

「我の名前はギルガメッシュだ！！無礼にもほどがあるぞ貴様！！」

「はいワロスワロスwww」

よっぽど嫌いなのか、あくまでも小馬鹿にしたような態度でギルガメッシュと対峙するコウジユ。

「許さん！！」

ギルガメッシュがその態度に腹を立て、再び宝具の雨がこちらへ放つ。

それに対しコウジユは、今度は反対の手に持つ剣を大きく振るい――

「邪鞭ウロボロス！！全てを飲み込め！！ヴィヴィ・デッサ！！」

ウロボロスと呼ばれた剣はコウジユが振るう事で伸びる。

俗に言う蛇腹剣、コウジユが言うには光波鞭と呼ばれるそれは飛んでくる宝具をことごとく触れるたびに、飲み込むように消していく。

「私の宝具が！？きつさまあああ！！！！」

「これで終わりだと思っな！！」

コウジュは言いながらもまだ舞うようにウロボロスを振るう。

次第にコウジュの前に魔法陣の様なものを描かれ、傍目にもその中心に力が集約されていくのが分かる。

「でええりやあああ！！！」

魔法陣に集まる力がはち切れんばかりになった時、最後にコウジュは唐竹割りに大きく上から振り下ろす。

魔法陣を割るように振るわれたウロボロスは魔法陣に集まる力と共に伸び、斬撃として宝具を飲み込みつつギルガメッシュに迫る。

「ぬおおおおおっ！？」

ギルガメッシュは宝具を打ち出すのをやめて、全力で横に跳んで避ける。

「ぷはっwwぬおおおだってww」

笑いながらコウジュはこちらを向き、右手の剣を俺とセイバーを捕える鎖に振るう。

「滅ぼせ魔剣レーバテイン」

その言葉の通りに剣が触れた部分の鎖は消えるのではなく滅びる。

助けてくれるのは嬉しいがもう少し離れた部分でやって欲しい。

ホントに申し訳ないが正直怖いです。

もう名前からして破滅をもたらす災厄の剣だし…、この鎖を切っちゃう位だし…。

解放された俺とセイバーは再び構えて対峙する。

「もう許さんぞ貴様……」

先程までの事が無かった事のように無然とした態度でこちらを睨みつけるギルガメッシュ。

「許さん許さんうつさいっての。」

さて、セイバーに士郎、ここは俺に任せて行け」

「コウジユ？」

「どうしてですか？」

セイバーも疑問に思ったのか質問する。

「ここは俺一人で十分抑えられるさね。セイバー達はいったん外で回復した後、言峰を追ってくれ」

それを聞いてハツとする。

そうだ、あいつは聖杯の出し方を知っているようだった。

放っておく訳にはいかない！！

「分かったコウジユ！！ここは任せた！！」

コウジュだけに任せていくというのは正直気が引けるが仕方が無い。
俺とセイバーはすぐその階段を上っていく。

「行かせはせん!!」

「やらせるかよっ!!」

後ろで再び戦い始める音が聞こえる。

だが、コウジュを信じ、振り向かずに一気に駆け昇る。

任せたぞコウジュ!!

> side out <

『stage39:やつぱここは、最初っからクライマックスだぜ!!!』だ
いかがでしたでしょうか？

今回はアニメ編で言うランサーの兄貴がお亡くなりにな（お帰りに
？）なる所まででした。

ホントは最終戦の途中まで行こうと思ったのですが予定していた所
まで行ってしまうとページが大変な事になってしまいそうだったの
で、最終戦は一気に行ってしまうす！！

あーそれからマーボー神父の三下具合…。

どうしてこうなったしwww

いや、ホント何でこんな事に…

書き直しを何回かしている内にマーボーがこうなっていたんですが
…謎だwww

最初はまとも？だったのにwww

まあいつか。

コウジユと関わったら今までも皆大なり小なりキャラブレイクして
しまってるし。

けど、こんなマーボーは嫌だ！！という方には悪い事をしましたか
ね？

それについては申し訳ないです。

さてさて、いつものようにグダグダとしてしまいましたが、次回の更新についてです。

当初の自分の中の予定では2月中にF a t e編を一段落させようとしていました。

今日？27日？え？（；。A）

というわけで、2月中は無理となってしまうました。楽しみにしていてくださった方には申し訳ない。

いつものごとくですが、少しでも早く上げますのでお許しください。

では、次の回に…再見！！

P . S .

P S P o 2ならびにP S P o 2 iをされている方でこの敵が嫌だ！
！というものを感想にて教えていただきたく思います。B O S S クラスも込みです。

こういう能力が嫌だなども教えていただくと嬉しいです。

あ、これは次のネギま編にて使おうと思いますのでこういう風に出して欲しい等もありましたら、どんどん出していききたいともいます
！！

P・S・2

使って欲しい武器、このネタ良いんじゃない？

など、インフィニティ込みで教えていただくと嬉しいです。

前回にも教えていただいた分でまだ出ていない分はネギま編にて勿論既に出す予定です（＾Ｏ＾）／

正直、武器あり過ぎてどのネタ使うか悩むのであります…（・・ω・・）
（

P・S・3

ではでは言ってから長くなりましたが最後にインフラモードでお会いすることがあればカード交換などよろしく願いいたします！！

ちなみに、○○の許嫁様と“ちびちび同盟”なる者を作ってインフラって見ようという話がありますので良かったら参加してください
^^

参加規約はただちみつこいことです（笑）

『Stage40: やっぱここは、最初っからクライマックスだぜ!!!』だ
皆様!! お久しぶりです!!
この度はホントに長らくお待たせしました。

と、同時に多大な心配をおかけしたことを申し訳なく思います。

活動報告にも書きましたが、色々立て込んでおりまして、全然こちらを触れなくなっていたので投稿出来ませんでした。

地震に関して心配して感想版の方にメッセージを下さった方もおりまして、ホントに嬉しかったです。そしてすぐに返信できなくて申し訳なかったです。

地震…。

津波の映像とかは某動画掲載サイトとかでも見れますが、画面ごし
での恐怖だったのですから実際に直面された方というのはどれほ
どのものかと想像もできません。

一刻も早く、皆さんが安らげる日が来る事を望まずにはいられませ
ん。

そんな中ですが、少しでも皆さんの暇つぶしや、元気のもとになればとアップさせていただきます。

今回（スイマセン今回ですね）、ページの都合上、途中で切りました。

またかよ、等々、お思いになる事はあると思いますが、えっと、まずはどうぞ！！

あ、ちなみにネタが今回いつもより気持ち多めに入っています。

『Stage40:やっぱここは、最初っからクライマックスだぜ!!!』だ
>side:コウジユ<

「はははははははっ!!!どうした!!!?先程までの勢いはどこへ
行ったぁ!!!?」

宝具が降り続ける。

剣も。

槍も。

斧も。

ありとあらゆる宝具が俺に向かって降り続ける。

俺を貫かんとして。

俺を殺さんとして。

「んー、さー」

「先程からその言い草っ!!!雑種に分際で無礼であろうがぁあ!!!」
「!」

降り注ぐ宝具の勢いが増す。

あ、こんちゃです。いつものごとくコウジユです。

皆さんいかがお過ごしでしょうか？

わたくしめは現在、件の黄金色のサーヴァント、ギルガメッシュと闘っております。

場所は言峰教会。

その地下聖堂でございます。

とまあそんな感じで状況説明を誰にともなく自分の中で考えたりしちゃってるのには理由がある。

その理由ってのはここが地下聖堂で、周りに例のあの子達の身体があるからだ。

って、なんか適当に言ったら駄洒落になってるな。しょーもない。

いやいやそんな事じゃなくてだな。

身体が俺と対面してるギルガメの後ろにあるんだよねー…。

あ、それともう一個困ってる事がある。

ギルガメッシュの宝具に関してだ。

—— 可愛いそうじゃね？

さっきから俺は『ウロボロス』で降ってくる武器の内、当たりそう
なやつだけ飲み込んでいってるんだが、どうも宝具が不憫でならな
い。

最初は全部やってたんだけど、弾くと周りを壊しちゃっし、もうど
うしようもない位に不憫になるし…。

幽霊の子達の話聞いたから余計になのかな？

どれだけ数に自信があるのか知らないけどさ…。

「ふん、その宝具我に渡すならば許してやらんでもないぞ?」

金ぴかさんが既に面白い事になってる件について。

この勘違いは痛いなー…。

まあいいか。

そろそろ士郎達はここから離れただろ。

よし、終わりにしよう。

あーでもなー、マジでやると絶対ここが潰れるし、もし金ぴかが乖離剣とか使ったら教会どころかここら一帯がなあ…。

「渡さぬならば我が直々に！！^{エルキドゥ}天の鎖！！」

むむ？

あれさつき壊さなかったけ？

ああ、やっぱり魔剣を扱いきれてなかったのかね？

正直触れた物を壊すって能力怖くて使いきれねえんだよな。壊しちゃいけないもんまで壊しそうだし。そのせいか無意識で壊しきれなかったのかね？ヘタレ言うなし。

あと、この剣うるさい。壊せ壊せうるさい。この剣の概念として“闇を根源とする魂が宿っており、使い方を誤ると全てをその身に取り込まれてしまう”ってのが確かにあったけどさ。こんな感じになるとはね。とにかくうるさすぎて集中できない。

うん、そっちのせいっていう事にしておこう。

というか、丁度良い!!

ついでに実験もやってみよう!!

さあ!!遠慮なくやりたまえ金ぴか君!!

今のセリフなし。なんかドMなセリフみたいだから。

空間から現れる無数の鎖が俺の身体をぐるぐると縛り付け、締め付ける。

ぐるぐるぐるぐる――。

――っつっつっい!!

どんだけくるむんだよ!!

俺の身体で出てる部分が顔だけじゃねえか!!

って口もか!?

窒息して死ぬわ!!

「これでとどめだあっ！！我に逆らった事、地獄でなげけえっ！！」

「ムー、ムー」

なんとなく抗ってるように見える。

あ、棒読みワロスww

「今更遅いわ！！貫け我が宝具よ！！」

そして再び数多の宝具が俺に向かって降り注ぐ。

「ふははははははは！！！！他愛無い！！所詮は雑種か！！！！」

俺の身体は貫くに貫かれ、穴が開いていない場所などない位に穴だらけだ。

正直痛え…。

けど、最初に比べて何でかマシだ。
慣れたのかな？

それとも脳内物質とかの問題か？
なんにせよ、こういう時は便利だ。

以前に比べ、そんな事を考える余裕がある。

そして、貫かれた俺の身体は、既に回復しようとしている。さすがは不老不死。

「ついでだ！！もっていけえい！！」

追加で、新たに禍々しい何かを纏った剣や槍が降り注ぎ、貫く。

おそらくこれは――。

「ハハハハハハハハハ！！！！

それらは不死殺した。

これで貴様も終わりだな」

やっぱりな……。二つの意味で……。

不死殺し。やっぱり使ってきたか。なんだかんだで俺の存在は不安材料なんだな。慢心王といえど、そういった気持ちは当然あるよな。

つてことは、さっきまでのはただの強がり？

そう考えるとちょっとかわいく思えるから不思議だ。

まあその何百倍も腹立たしいけどな。

そしてもう一つ。

ギルガメはやっぱり俺の不死が俺自身のモノからだけのモノだと思
ってるみたいだな。

実際俺の身体は蘇生がストップし、血液は流れるまま足元に血溜ま
りをつくっている。

意識は何かあるが、この身体は明らかに死に体だ。指先一つ既に
動かせない。それ以前に感覚が一つもない。当然か。

「ふん。所詮幕引きはこんなものか。

さて、我も聖杯の元へ行くとするか」

ギルガメッシュが俺に刺さっている宝具や、天の鎖を消して、歩い
ていく。

言葉通り聖杯の元、柳洞寺の出現ポイントへ向かうのだろう。

一方、支えを失った俺の身体が床へと放り出される。

ぐしゃっと、俺の身体が倒れたからであろう音がやけにハッキリと
耳に届く。

とりあえずは原作通りかね？これで。

ランサーの位置が俺だけど、それは仕方ない。

ここを壊さずに金ぴかだけを蹴散らす術を現在の俺は持っていないからな。これが一番穏便だよな。

「…っ」

あー、やべ、もう無理。
意識が跳ぶわ。

ハッキリ死ぬ感覚があるのはそういや、初め…て…だっけ……

あー…床、冷てえ……。

「はっ！？」

『あ、起きたー？』

「ここ…は…あーそつか」

そっぴや、誤魔化すためにワザとやられたんだっけ？

『はー、無視かよ。まあ百歩譲って無視は良いとしても、こういう起き方したら“知らない天井だ”は鉄板だろjk』

「何言いだしてんの！？ってあれ？」

起きぬけに耳に入ったよくわからん助言に、ついツツコミを入れてしまう。

「って、おお？」

同時にからだを起こすと、俺を囲うようにして幽霊の子達が居た。

『起きた？』

「うん、まあね。どれ位経った？」

『うーんと三日位？』

「ナンドストー！？」

『嘘だっ！！！！』

「嘘なのかよ！！？」

「ってか、使い方違えよ！！！！」

もう何この子達怖い。

幽霊だからとかそんなものが些細な事に感じる位に怖い。

何がっていうと……あ、そうだ、俺がツッコミに回るしかないって
言えば分かるかね？

…言ってて悲しくなってしまったorz

『ちなみに現在は夕方。まあそこそこは寝てみたいだね』

「そっか夕方か…」

思ったより時間が経ってるな。

スケープドールに時間差の概念入れたけど、そんなに空けるつもり
なかったんだけどなあ。

失敗か？それとも、不死殺しの関係か？

要検証だな。

不幸中の幸いは、キャスターに予めバックアップに入ってもらって
るから不測の事態が起きてもある程度対処できるように計画してあ
る所か。

らしくない？

分かってんよ！！

けど、いい加減念のためってのを用意しないとして自覚が…さ…o
r z

『ねえねえ、どうかした？

or z ってるってことは、黒歴史でも思い出した？』

「違うよ！？」

確かに思い出したらなるだろうけどね！？」

ホントに悉く俺にツッコミをさせるな、おい！！
（トツ）

ツツコミと同時に、俺の頭の中で現在黒歴史作成中っていうテロップが流れた気がしたが、心の隅に直し込み…じゃだめだ、その辺にそーい！をして、今自分がやるべき事、ここにやりに来た事を思い出す。

やりに来た事――。

――この子たちをどうするか。

「あのな。皆に話があるんだ」

『やべえぞ皆逃げろ！！O H A N A S H Iされるぞ！！！！』

「するかああああ！！！！！！！！」

ホントにブレねえなこの子達！！！！

『嘘だよ嘘。なんか辛気臭い顔をしてたからついね』『む…いや、だけど、大事な話だ』

『え、まあしかたないわねえ』

先程までと変わらず、笑みを絶やさずにこちらを全員で見してくれる。けど、しっかりと聞く体制になって、俺の言葉を待ってくれる。

「あのな？生き返りたくはないか？」

>sideout<

>side:士郎<

俺とセイバーはコウジユに言われたように、一度教会を出てから回復するために家へと向かった。

もう回復用のカードが一枚しか無いのだ。内心、このまま言峰を追いたくて仕方が無いがそれでやられてしまっっては元も子もない。

それに、家には他のサーヴァント達が居る。

戦闘能力が大幅に下がっていると言っていたが、それでも助力を得られれば格段に勝率は上がる筈だ。

とはいえ、時間は刻一刻を争う。

俺たちはとにかく急いで家まで走った。

だが――。

「士郎、気を付けてください！！

何かおかしい！！」

「ああ、結界が無い！！」

我が家の見える位置まで来ると、いつもと違った雰囲気を感じてくる事が分かった。

急いで門前まで来ると、顕著にそれが強くなる。

いつも我が家を包んでくれていた結界、更にはキャスターが張っていた結界までもが消失しているのだ。

遠目には屋敷に異常はない。荒れた様子も見られない。

だが静かすぎる。

少なくとも遠坂やサーヴァント達は朝の時点で起きてきていたのに。

「とにかく中へ行こう!!」

「はい!!」

俺達は急いで玄関へ向かい、中に入る。

「なんだ…これ…」

中に入った俺の目に飛び込んだのは、中を嵐が通ったのではないか
と思えるほどに荒れた自分の家だった。

それにそこら中に飛び散っている血痕。

嫌な想像が頭を巡る。この家には遠坂達が残ってたはずだ。

「遠坂!! 皆!!」

「士郎待ってください!!」

靴を脱ぐのも忘れ、走る。

血痕はどうやら居間の方に向かうように付いている。

「こっちか!？」

壊れるほど勢いで戸を開け、居間に入る。

「遅かった…じゃない…の……」

「遠…坂…」

「凜…」

そこに居たのは脇腹を押え、普段着ている赤の服を血の赤で更に染めて血みどろになり、床に血で水溜りを作った遠坂だった。

「まさか…綺礼が…ゲホツ…っ…コウジユが隠すわけ…ね」

「遠坂もう良いしゃべるな！！セイバー、タオルと洗面器を！！」

「はい！！！！」

血を吐きながらも何かを言う遠坂。

その姿は今にも消え入りそうで――。

とにかく止血をしないとイケないと思った俺はセイバーに流れ出る血をどうにかするため、タオルと洗面器を持ってくるよう頼む。

俺はその間、何とか無事だった包帯を使って止血をしていく。

「士郎…回復カード持って…ない…？」

「あ、ああ！！ある！！！！」

焦っていて忘れていたが、後一枚だけだがコウジユに貰ったモノが

残っていた。

それを慌てて使って遠坂を回復する。

「うぐ…」

「どう…だ？」

「え、ええ…かなりマシになったわ…」

少し辛そうな顔をしたが、カードの効果で先程までからは考えられない位に血色のよくなった顔を見て安心する。

血も止まっているようだし、全快できなかったが一先ずは安心と言ったところか。

「ふう…ありがと衛宮君。ホントに死ぬかと思ったわ」

「士郎！！タオルを…もう必要なさそうですね。よかった」

そこへ、物を取りに行ってもらっていたセイバーが戻ってきた。

部屋に入り、遠坂の顔を見てどうにかなった事に気付き、張りつめた空気を霧散させる。

「ふふ、ありがと」

遠坂もそれに答えるように柔らかに微笑みながら礼を言う。

「それにしても一体何があっただんだ？」

それを聞くと、一気に遠坂の顔が曇る。

そして、苦虫を潰したような表情になりながらも語り始めてくれた。

「ごめん…イリヤを守れなかった。綺礼の奴に連れていかれちゃった…」

「イリヤが！？」

「しかも言峰にかやつぱりこっちに来たんだな…けど何でイリヤが？」

「イリヤはね…聖杯を降臨させるための器なのよ」

「器…？」

「ええ…」

それって、キャスターが桜を器にしようとした（演技だったけど）みたいな感じか？

でも、それだと遠坂の言い方からして違うし…。

「コウジユの事もあって忘れていたのだけど、イリヤはその為に作られた存在なの」

「作られたって事は…ホムンクルスってことか？」

「そうよ。それもただの…って言い方には語弊があるけど、普通に作られたホムンクルスではなく聖杯降臨の為に特化されている筈よ。魔術師っていうのは魔術回路を持った人間のことなんだけど、イリヤは魔術回路を人間にした子なの」

遠坂は続けて言う。

「イリヤの体調が悪くなったのっていつだったか覚えてる？」

「イリヤが…」

いつだったんだ？

前々から行動が一定しなかったからよく覚えてない。

「以前から時折体調を悪くしていたようですが、完全に起きてこなくなっただのはランサーが来た日です」

セイバーは覚えていたのか教えてくれる。

けど、ランサーが来たからって…。

「聖杯を召喚させるために必要なのは大聖杯と小聖杯。大聖杯は膨大な魔力の受け皿なんだけど、それはたぶん柳洞寺のどこかにあるわ。あれほど召喚に適した霊地は無いからね。」

そして問題は小聖杯。これがイリヤに当たるわ。役目は6騎のサーヴァントの受け皿。理屈は今省くけど、簡単に言えば鍵みたいなもののよ」

そうか…今分かった。

イリヤがずっと寝ていたのは内側にあるサーヴァントの力の所為だったわけだ。

「しかし…、それでは何故コウジユはこちらに来たのでしょうか？」

あ、確かに。

コウジユがその事を知らない筈がないし、最初は主従関係だったかも知れないけど、長年一緒に居た家族の様な仲の良さだった。

それこそ姉妹のような。

そんなコウジユがイリヤを放って言峰教会に来た理由って何だ？

いや、でもそういえばこっちは――

「そういえば、此処に居た他のサーヴァント達はどこへ行ったんだ？」

「そういえば、屋敷の中に他の気配がありませんね」

俺に続けてセイバーが言う。

「ランサーは多分あのバゼットって人を避難させてたはず、ライダーには桜を連れていってもらったけど…、後は分からないわ」

ってことは、アーチャー、アサシン、キャスターが行方知らずか。

「そつえば、コウジユはどこに居るの？
聞きたい事があるんだけど…」

「えつと…」

コウジユなら大丈夫だと思う。けど、コウジユ自身が言った事とは
いえ置いてきたという事実は少し言いづらい。

「凜、コウジユは私達を逃がすためにギルガメッシュと言峰教会で
闘っています」

そんな俺を見てかセイバーが代わりに答えてくれる。

「コウジユは言峰を追って言って俺たちを逃がしてくれたんだ。
けど途中で、念の為に回復してから万全の態勢で行った方が良く
って気づいてこっちに帰ってきたんだ」

「それで私がこのザマで、最後の一枚を使わせたってわけね…。ホ
ントに選択を失敗したかな…」

選択？何か失敗したのだろうか。

ん？今チラッと短剣の柄の様なものが遠坂の後ろで見えたような気
がしたが…何で隠すんだ？

そんな疑問を俺が持った事に気付いたのか凜がこちらを向いて言う。

「こ、こつちの話だから士郎は気にしないで？

それにしても、士郎がねえ……」

俺の疑問は解消されずに、遠坂はそれを誤魔化すように目を細めながらニヤニヤとこちらを見る。

前半は例のすっかり関係の事なのだろう。ツッコムのは可哀そうなことなんだろうな。

だからと言ってこちらにシフトチェンジはやめていただきたい。

その笑みは嫌な予感しかない。

「士郎が一度引く事を選ぶなんてね。少し前なら一直線だったのに、これはコウジユさまさまかしら」

「む……」

「ふふ、すねないの。良い兆候だって褒めてるんだから」

褒められた気がしないのは俺だけじゃない筈だ。

さて、と――。

「そろそろ行くか」

話している間にかなり回復出来た。

数十分とはいえ、それだけあれば俺の中にあるセイバーの鞘が回復してくれる。

全快には遠いし、身体はまだ重たいが強化の魔術で何とかなるはずだ。

それに、イリヤが拐われたんだ。これ以上時間を掛けられない。

「はい」

「ええ」

俺が立ちあがると、セイバーと遠坂も立ち上がる。

つて遠坂！？

「と、遠坂！？その傷で行くつもりか！？」

「何言ってるのよ。回復してもらったから今のあなた達とそう大差は無いわ」

そう、どこかあの紅い弓兵に似たニヒルな笑みを浮かべながら言うが、辺りに散乱した血液を考えると、余裕があって浮かべてるものとは思えない。

あのコウジュのカードは回復とは言っても時間回帰のように全てが戻ってくる訳じゃない。つまり失血した分や疲労感は拭えない。

コウジュが使うと何故か消えるが、それはコウジュの能力が原因らしい。何故“おかげ”ではなく“原因”という言い方かというと、キャスターに聞いたらコウジュが無意識で能力を発動しているかららしい。だから教えたら効果が無くなる可能性があるとも言っていた。知らない方が幸せというやつだ。

とにかく、俺達ではそこまで回復出来ない。

それに遠坂に使ったのは『モノメイト』、小回復のカードだ。回復出来ていてもやはり遠坂はまだまだ動くべきではない事に変わりはしない。

「そうは言っても凜…」

セイバーがその事について言おうとする。だがそれを遮るように遠坂が言う。

「さっきも言っただけど、今のあなた達と変わらないわ。それに、今は一人でも多い方が良いでしょう？他のサーヴァント達が当てにできない以上ね」

確かにそれはそうだが…。

「ほらっさっさと行くわよ！！」

一発あいつを殴らないと気が済まないわ」

俺がどうやって説得しようかと考えていたら遠坂はさっさと玄関の方へ歩いていってしまった。

「実際、凜が居るだけで勝率は上がります。説得は無理でしょう」

セイバーが俺にそう言うが、心配なものは心配だ。本当ならセイバーにも闘って欲しくない。

男が女の子の後ろに隠れてなんて俺は嫌だ。むしろ守りたいと思う。

けどそんな甘い考えでは勝てないと知った。

だから俺は選んだ。
共に戦うことを。
共に在ることを。

それは大切な人を危険に晒すことかもしれない。
けどそれで救えるものもあると知った。いや、教えてもらった。

だったら――。

「そうだな、行こう。イリヤが待ってる」

「はい、マスター」

自分の中の思いを整理し、現状優先されること、聖杯の破壊とイリヤの奪還について考えたら遠坂の手は必要だと覚悟を決める。

さあ、あの三下神父と慢心王を倒しに行こう。

そしたら晩御飯だ。

今では二桁にも上る衛宮家の食卓の人数だが、だからこそ腕が鳴る
と言うものだ。

そのためにも勝つ――！！

ん？女の子がどうか言っていたクセにコウジユはそんな扱いして
なかった様な…だって？

いやだって、コウジユはコウジユだから……。

> s i d e o u t <

> s i d e : コウジユ <

『やだね』

俺は幽霊の子達に生き返りたくないか？と聞いた。
今のはその答え。

「何故…だ…？」

俺は、この子達が生き返りたいと言っていた。
でも違った。

『俺達はさ、もう疲れたわけよ。おっさん臭い言い方だけどな』

『確かに生き返るのも良いかなーとは思うけど、私達はもう眠りた
いのよねー』

『ま、俺達はもう死んじまってる訳でさ。それでいいんだよ。それ
に居場所がない』

「居場所なら何とかして…」

『そういう意味じゃないよ。戸籍とかそんなんじゃないんだ。
俺達はもう死んだと納得した。納得して今まで幽霊として存在し続
けてしまった。』

これで生き返っても、俺達は幽霊のままだ』

晴れ晴れとした笑顔でそんなことを言う。

「意味が…分からねえよ」

『あーもう何であんたが泣きそうな顔してんだよ』

『普通逆でしょ？もう…』

だつてさ、俺は……。

『あーもうほんとに泣き出しちゃった。』

あのね？生き返らせてくれるって言うてくれたこと自体はホントに嬉しいのよ？』

『けど俺達の望みはそれじゃなくなっちまった。今の俺達が望んでるのは解放なんだよ』

『そうそう。私たちはちゃんと死にたいのよ。向こうで親も待つて
るだろうしね』

そんな…悲しい事言っなよ…。

何でそんなに笑ってられんだよ。

くっそ、あのマーボー神父と金ぴかめ。

こんな良い奴らに死ぬ事を望ませるなんて。

『ほらほら、そっちはそっちでやる事あるんでしょ？』

「ある…けどさ…」

『ならさっさとそっち行けよ。どうせあの神父と金ぴかの奴んどこ
だろ？』

「ああ…」

『だったらサクッと俺たちをやって行っちまいな出来るんだろ？』

「できるけど…さ…ホントに良いのか？」

『良いの良いの。俺たちはもうほんとに良いのさ。十分十分。だからあんたは俺達を気にせず行け。』

あれだ…えーっと、立って歩け、前へ進め、あんたには立派な脚があるだろう』

『それなんか違う』

『あ、そう？じゃあえーっと、呪いのように生き、祝いの様に死ぬ』

『うっわ、今の私たちにぴったりスギじゃん？』

「それエロゲーじゃねえか。未成年」

『良いんだよ。幽霊に年齢なんて関係ない。っていうか、俺が知ったの格ゲーの方からだから本編知らねえし』

この世界にあるのかよ、おい。MUGONまであるとは…。

「よし、分かった。来いコクイントウホオズキ」

『奇跡も魔法もあるんだよ』

「またネタか!？」

…いや、それ知らねえや」

『なんだよ血貯まり知らねえのかよ』

こいつらの事だからネタだろうとは思ったが、ホントにそうだったとは…。

物騒の言葉が聞こえた気がしたがそっちはスルーしよう。

『じゃあこれだな』

『ザワ…ザワ…』

「ホントブレねえなお前ら!!」

『なんですかもう』

分かりづらいネタやめい。それあれだろ？茜色に染まる…なんだっけ？とにかくそこに出てくる歯ブラシを武器に戦える不思議っ娘だろ？むしろよく覚えてたな俺。

はあ、これはあれか、元気づけられたのかね？

でもまあ、いつまでも俺が泣いてるわけにはいかねえよな。

この子達とはほんの数時間前に会っただけだが、それでも笑顔が似合う子達だと分かる。だったら俺は笑おうじゃねえか。笑って送り出してやる。

「まったく、ぶれなさすぎだよ…」。

よし、んじゃいくぜ。こいつは死者の国に渡る際の渡航証と言われている。こいつを使ってあんた達はちゃんと死を迎えられる筈だ」

『おお、俗に言う冥界に行けるのか』

『幽々子お姉さまに会いたーい』

『こまっちゃんの横と一緒に昼寝したい…』

『やつぱドウだろjk、ヤマザナドウ希望!…!』

「そんな機能ねえよ!…!」

…繋がったりしねえよな…?」

東方系のゲームもあんのかよ…。
いっぺんこの世界のメディア関係を確認すべきか…。

俺はコクイントウを腰だめに構える。
そして概念を強化し、そして願う。どうせならこの子達が言っような東方勢が居る冥界に繋がりますように。

『んじゃ、かたき討ちよろしく』

『ぼっこぼこにしといてね』

『ド派手に逝くぜ!…!』

『おいなんか一人バギー船長混ざってるぞ。例の赤鼻のやつ』

『『誰が赤鼻だあッ!…?』』

『増えてるし…』

「はは、じゃあいくぞ？要望通りにド派手にだ。」

送るぞコクイントウ！！」

要望に答えるために構えを変える。コクイントウを頭上に構え直し

振り下ろす！！

「月牙…天衝おおっ！！！！」

『『『斬魄刀…だと……』』』

俺の目の前には崩れた教会がある。教会を潰すのはどうかとも思ってたが、穢れが酷すぎたし、それ以前に金ぴかと戦った時にはもう致命傷だった。

月牙をできる限り手加減したがそれでも無理だったなんて事はない。だから仕方ないと自己完結する。事故完結ではないのであしからず。

俺は合わせていた手を離し、閉じていた目を開ける。

「ホントに面白い奴らだったな…最後の言葉が『斬魄刀…だと…』ってなんだよ」

今まで数十分かけてホンの数時間の出会いを反芻した後、最後の言葉に対してボソッとツツコミを入れてしまう。

最後まで俺にツツコミさせるとはな。

突然俺の横に気配が生まれる。

「良かったの？」

空間から溶け出るように現れたのはキャスターだった。

「もちろんさね。あいつらがちゃんと死ぬことを選んだんだ。それがあいつらにとってのハッピーエンドだっただけのこと」

「あなたが良いのなら私は良いのよ。」

ただ…泣くのか笑うのかどっちかにしなさいな」

「泣いてねえよ…」

泣くわけにいくか。笑って送るって決めたんだからな。

「そう…」

それからしばらく経つと、キャスターが再び話しかけてきた。

「そろそろ行くわよ。日が暮れてきたわ。ギルガメッシュは貴方を殺したと思ったからあちらはセイバー達を待つて行動に移ることにしてみたんだけど、とうのセイバー達が柳洞寺に着いたわ」

「ん…、了解だ」

なら急がないとな。

多分セイバー達だけでも勝てるだろうけど、ハッピーエンドの為には少し足りない。

さてさて、ハッピーエンドを始めに行こうじゃないか。

俺は最後に、懷からカードを出す。
教会はまだ崩れただけで、地下聖堂にはまだあの子達の亡骸がある。
だから、最後にここを消し飛ばす。もちろんド派手にだ。

その為に宣言する。

「紅符『不夜城レッド』」

> s i d e o u t <

> s i d e : : 士 郎 <

「歓迎しよう、衛宮士郎」

俺とセイバー、遠坂は今、柳洞寺まで来ていた。それは勿論、この
聖杯戦争を本当の意味で終わらせるため。最後のサーヴァントと、
そのマスターを倒すためだ。

そんな俺達を迎えたのは言峰綺礼。今回の元凶にして、前回の聖杯戦争で一つの街を焼いた男だ。

「見たまえ、これが聖杯だよ」

そして、言峰の後ろには黒い球体が浮いている。

こんなものが聖杯？

黒とは言えない黒。空間に穴があいたような色だ。純色ではなくあらゆる色を混ぜてできた黒の様で不快感を湧き立たせる。とめどなく溢れる泥は、瘴気や災い、この世の全ての悪と言えるものが形となって吹き出ているようだ。そうとしか表現できない泥。

そしてその中心にはぐったりとしたイリヤが埋め込まれるようにして存在している。遠目にも荒い息をしている事は分かるがとても無事とは言えない。

更に言うと、この状況は考えられる限りで災厄だ。

「この時をどれほど待ち侘びた事か。頃合いも良い。今丁度聖杯に穴があいた所だ」

言峰の横にはギルガメッシュが居る。疲弊した姿ですらなく、悠然と言峰の横に並んでいる。

つまりは――

「嘘…、コウジユはギルガメッシュの所に行ったって士郎は言った

わよね…?」

「ああ…」

遠坂が俺に聞いてくる。当然だ。俺は遠坂に、コウジユは俺達の代わりに言峰教会に残ったと言ったのだから。

しかし、この場にギルガメツシュが平然と居るその事実は当然のごとくある事を俺達に思い浮かばせる。

なんだかんだであの子はハチャメチャな子だったけど、あの強さは本物だ。何か目的があって負けるならまだしも、コウジユが負けるなんて考えられない。実際コウジユ1人で十分に聖杯戦争を終わらせる事が出来るほどの力を秘めていた筈だ。

しかし、この場にコウジユはおらず、ギルガメツシュが居る。

「コウジユ…ああ、あの小娘の事が」

変わらず悠然とした態度で、ギルガメツシュはコウジユの名を口に出す。

「あの小娘は我が殺してやったわ!!」

ふ、はははははは!!!!」

我慢しきれぬと言った風に、高笑いをするギルガメツシュ。

「そんな馬鹿な…」

セイバーもコウジユが勝つと確信していたからか、思わず声を漏ら

す。

「ふん、それほどまでにあの小娘が勝つと思っていたのか。しかし、容易かったぞ？」

エルキドゥ
天の鎖……」

ギルガメッシュが横へ手を伸ばす。すると虚空からいつものごとく宝具が現れる。

現れたのは鎖だ。

俺達を教会で縛り付けたあの鎖。

「これは対神宝具でな。神性が高いほど拘束力が増す。コウジュなど聞いたこともないがそれなりに神性が高かったのであるうよ。ピクリとも動かんかったぞ？」

後は不死殺しの概念を持つ宝具で串刺しにしてやった。それだけで死んでいったわ」

嘘だ……。

あのコウジュが神性を持っているとかは別に良い。そもそも、俺達はイリヤに別世界の英霊であると聞いているのだから、知らないのは当然で、聞いても意味は無い。

しかし不死殺し、これで貫かれたら……。

コウジュは自分で不老不死だと言っていた。実際に生き返る所をこの目で見ている。

その不死性を殺す宝具で貫かれたら、いくらコウジユでも…。

いや、けど…。

俺はその事実をどうしても受け入れられない。受け入れたくはない。それはセイバーと遠坂も同じようだ。驚愕と苦悶の感情を混ぜ合わせた表情をしている。

サーヴァントとはいえ、数日とはいえ、俺達は家族のように衛宮家で過ごした。秘密を持っているとはいえ、聖杯戦争をハッピーエンドで終わらすと語ってくれた。普段のコウジユは、見た目の割に大人びた事を言ったり、かと思ったら年相応に見える事をしたり…そんな子が…死んだ。受け入れられる筈が無い。

今から闘う事すらも思考から抜け落ちて、コウジユが居ない事で狂ってしまった計画について立て直さなければならない事も頭の中で整理できないで居た。

どうせまた、そこら辺からヒョコツと現れるのではないかと思ってしまう。

しかし、ギルガメッシュが持つ鎖が、数多の宝具が、その存在感を俺達に感じさせる度に、コウジユが死んだという事実が俺達の中に染み込んでくる。

「先程までの威勢はどうした？我は今までずっと考えていたのだ」

ギルガメツシュはこちらの事などお構いなしに言葉を続ける。とはいえ、相も変わらずその目に移しているのはセイバーだけのようだが。

「嫌がるお前をどう組み伏せ、この泥を飲ませようかとな」

恍惚とした表情で語り始めるギルガメツシュ。

その身に宿すおぞましい感情が辺りに充満する。直接向けられているセイバーはどれほどのものか。

その空気に触れ、俺達はやっと闘わなければならない相手だと再認識し、気を入れ替える。

コウジユが居ないかもしれない。でも、俺達が勝たなければならない事実是不変ならないのだから。

「泣き叫ぶお前を踏みつけ、その腹が身籠るほどの泥を飲ませ、耐え切れず我の足元にすがりつく…」

ギルガメツシュが言の葉を、感情を乗せて発する度に空気は歪むように穢れていくように感じる。

「その穢れきった姿を早く見たいものだ!!」

瞳孔が開ききった目でセイバーを見るギルガメツシュ。

それに対し、既に再び戦闘態勢を取っているセイバーも言葉を叩き

つける。

「そのようなおぞましい事を考えられていたと思うだけで身の毛がよだちます！！」

そのような言の葉を述べた事を後悔しなさい！！」

黄金の聖剣をその手に構え、ギルガメッシュに向ける。

「ああ、それで良い。それで良いぞセイバー。
そのお前を組み伏せてこそだ！！」

その言葉と同時に、セイバーとギルガメッシュは互いに距離を縮め、剣をぶつけあい始める。

そして剣の応酬が続けたまま、この場を離れていった。

残されたのは、俺と遠坂と言峰、そしてその後ろにある聖杯と埋め込まれたイリヤのみとなった。

「私も、ギルガメッシュではないがこの時をどれほど待ち望んだ事か。

ましてや、あの忌々しい衛宮切嗣と遠坂の血筋の者がこの場に居るとはな、喜ばしい限りだ」

言峰が厭らしい笑みをして話し出す。

確か、遠坂にとって言峰は兄弟子に当たるんだっとな。

「綺礼、さっさとイリヤを解放しなさい」

自身としても聞きたい事は山ほどあるだろうが、それを置いてイリヤの事を聞く遠坂。

「それはできない相談だ。聖杯は現れたが、まだ不安定だ。接点である彼女にはその命が続く限り耐えて貰わねばならん」

「お前は何が望みなんだ!？」

「聖杯よりうみ出る力、際限なく溢れ災厄を巻き起こす。この中にはあらゆる悪性、人の世をわけ隔てなく呪うモノが入っている」

「それが何だったのよ!!」

「人というものは死の瞬間にこそ価値があると思わんかね？生存という助走距離を持って高く飛び、空へ届き、尊く輝く。私はその輝きこそを見たいのだよ」

興奮冷め止まぬといった風に声を上げ、離し続ける言峰。

「10年前の火災は悪くなかった。あのような地獄にこそ、魂は炸裂する。人における最高の煌めきがなあ。

無念のまま朽ちてゆき、叫ぶ人間に胸打たれるものがあつただろう？歪な形ではあるが、私ほど人間を愛している者は居ない。

故に、私程聖杯に相応しい者も居ない」

悦に浸った言い方で自身の望みを言いきった言峰を俺は、溢れんばかりの怒りのこもった目で見ている事だろう。自分自身こうやって自己評価できるのが不思議な位に腹が立っている。

いつだったかコウジユが言っていたな。『心は熱く、頭は冷静に』、と。自分の事でなんだが、心が熱くなったら頭が冷静でいられる事

は無いと思っていたが、案外あるもんだ。

俺は今完全にキレているんだろう。隙を探せと頭が考える。その一方で今にも走り出してこいつを殴りに行ってしまいそうだ。

許せるか？あの大火事を自身の欲望の為に起こしたこの男を。

許せるか？“人”という存在をここまで自身の為に貶める男を。

放っておけるか？破壊という形で人の輝きを見たいと、バカげたことを言うこの男を。

俺は許せない。

正義とか、悪とか、俺はまだしっかりと答えが出たわけじゃない。

けど、これだけは言える。

こいつが居るとハタ迷惑だ。大多数の人間が不幸になる。

だったら俺はこいつを倒す。倒さなければならない。最初からその事実が変わらなかったが、今俺の中で更に膨らむ。

こいつを倒すのは確定事項だ！！

「…遠坂」

「…ええ、援護するわ」

小声で隣に居る遠坂に声をかける。こちらの考えに気づいてくれたようだ。

「ふむ、来るか。あの小娘さえいなければこちらの優位は動かん。だが、聖杯が完成するまでしばらく猶予があるな。よろしい、時間を潰そうではないか」

言峰がそう言い切る前には俺は走り出していた。

「はぁあッ!!」

「この程度なのか
？衛宮切嗣の遺志を継ぐ者が…」

俺は、言峰に干将・莫耶で斬りかかる。
それを言峰はギリギリのところで回避し、拳を打ち込んでくる。

それを凌ぎ、払い、時には回避し、再び、斬りかかる。
遠坂は俺の後方から、ガントや宝石魔術でこちらを駆使し、俺の援護をしてくれる。

だが攻めきれない。先程からその繰り返しだ。

その原因は言峰の背後にある聖杯の所為である。

「ほら、次だ。この世全ての悪をその身に浴びろ」
アンリマユ

触手が、泥の塊が、俺と遠坂に向かってくる。

言峰が操っているであろう、聖杯。いや、アンリマユと呼ぶべきか。

アンリマユは俺達を飲み込まんとな一人に対して過大な量でこちらに触手として迫って来る。時に泥を自身で飛ばして、時に言峰がその手で巻き上げてこちらへと飛び交う。

弾幕、とまでは行かなくても厄介なことこの上ない。唯一の救いはそれほどスピードが無い事か。

「つるあああ！！！！」

絡みつこうとする触手を俺は剣で弾き、横へ跳躍する。
本来なら出来ないのであろうが俺が今持っている干将・莫耶はコウジユに見せて貰った方だ。

こちらの干将・莫耶の効果は凍結。斬りつけた場所が凍りつき、固体となった触手を弾く事が出来る。出来るとは言ったがほんの数瞬だ。凍った場所をすぐに後から後から違う泥が覆い、再び俺を追う。だが、その刹那の間に避ける程度の事はできる。

「投影か…。それにしてもよく避ける」

予想の範疇と言わんばかりにこちらの抵抗を見物する言峰。くそ…、アンリマユが邪魔で近づけない。

「さて、次はそつちだ」

今度は泥の触手を遠坂の方へ向かい始める。しかも、今までより数も大きさも段違いに多い。

「きゃっ!?!」

遠坂は魔術で弾きながら避けようとするが、一本が遠坂に当たり動きを止める。

そんな遠坂を待ってくれるはずもなく、残りの触手が迫る。

「ちっ!?!」

遠坂の方へ走りながら手元に在った干将・莫耶を遠坂の方に投げる。だがその程度ではせいぜい数本かすった所を凍らせるだけだ。

トレース・オン
「投影開始!?!」

続けて凍結の方の干将・莫耶を投影し投げる。

2回、3回と続け、最後は自身で遠坂の前で触手をいくつか凍らせ、遠坂と共にその場を離れる。

「ごめんなさい、助かったわ」

「お互い様だ」

言葉の通り、先程から言峰に迫る時に、後方からの遠坂の援護で助かった部分が多々ある。

「私はここだ。早く来た前」

手でクイツと、掌を上にしてさっさと来いと言わんばかりに手招きして言峰が挑発してくる。

悔しいけど奴のいう通りだ。

距離を一向に縮める事が出来ない。

次はどう動くべきか…。

コウジユ達鍛えられたからか、余裕はないが余力はある。

そんな風に次の行動をどうするか悩んでいると――。

「うぐっ！！？」

俺達の前に誰かが飛びこんでくる。

「セイバー!?!」

その誰かはセイバーだった。

地に伏すセイバーを急いで抱き上げ、状態を見る。

「ぐっ、すいません士郎。思いのほか飛ばされてしまった…」

俺の腕の中から起き上がるセイバー。

よかった…、見た目に反してダメージは少ないようだ。

「ギルガメッシュ、どうした?」

「いやなに、そろそろセイバーに泥を飲ませようかと思ってな」

「ふむ…、そうだな。聖杯の方もまもなく完成のようだ。頃合いかな…」

言峰の横に着地して現れるギルガメッシュ。

まだ摘んではない。セイバーも立ち上がり既に戦闘態勢。遠坂も先程のダメージからは復帰している。俺も、多少の疲れはあるが余力を残している。意思もまったく陰りはしない。陰る訳が無い。

なら、あきらめる要素がどこにある!!!?

不利な事は変わらない。

確か、この聖杯はアンリマユとなっではいるが、元来地脈からのマナを吸い上げ貯めこみ、その魔力をもつてして願いを叶える。

そしてその泥がギルガメッシュと言峰の中にあるわけだ。

ジリ貧。

まあ、そんなものは最初から分かってる。

『勝てるものを幻想しろ……』

頭に浮かぶのはいつものごとくあいつの言葉。

ピンチになったら助けしてくれる正義の味方——じゃないが、何故かこういう場面で脳裏に浮かぶ紅い弓兵。

なんでだろうな。

またお前かと言いたくなるが、今は妙に心強い。

そして——。

『読むべき時に読め。その時になつたら分かる…はず…』

最後が頼りなかったが、コウジユの言葉も思い出す。同時にポケットに入れていたカードを取り出す。

あの時は、もう一本剣が必要だという、そのもう一本が何か分からなかった。

今なら分かるぞコウジユ。

『ヒントは俺の闘いの中にあるかもね？』

その言葉はギルガメッシュに殺されそうになった時、助けに入ったコウジユが俺に向かって言った言葉。

全部分かってて言ったのか？コウジユ。だつたらとんだ策士だ。一つ一つが布石で、今、俺の中で結ばれた。

今こそ使つぞ、コウジユ。

思い出せ！

聞こえてきたあの詠唱を思い出せ！！

「――I am the bone of my sword.
(身体は剣で出来ている)」

俺は2人の前に出る。

「士郎!？」

「避けてください士郎!！」

遠坂とセイバーが俺に声を掛けてくれる。

当然だ。俺達の目の前には、泥を飲ませるというギルガメッシュの意を汲んでか、または自身の気が済んだからか、先程まで触手として俺達を苦しめていた泥が今は壁として俺達を飲み込もうとしている。

この量じゃ避ける事はもう不可能だ。ここら一帯を飲み込むだろうな。

だが、そんなものは今の俺には関係ない。

勝つんだ!!!!!!

「真力『エクスキャリバー』!!!」

右手にずしりとした重み加わる。

剣から溢れんばかりに力が流れ込む。

勝てるものを幻想しろ!!

今はこの泥が邪魔だ!!!

盾を!!!

俺達三人を守る為の盾を、城壁のごとく俺達を守る壁を強く望む。

するとどこからともなく頭に思い浮かぶ盾のイメージ。

これは光の花弁?

いや、今はこれが何かなんて関係ない。

俺の可能性だつて言う位だから今の俺が知る由もないだろうしな。

頭に浮かんだ盾を思い浮かべ、投影する!!!

「^{ロー・アイアス}熾天覆つ七つの円環!!!」

「

俺の目の前に光で出来た七枚の花弁が展開する。

「何っ!?!」

「馬鹿なっ!!!?」

壁に向こう側から驚愕する声が聞こえる。防がれるとは思ってなかったのだろう。

投影した花弁は俺達を飲み込もうとする泥を弾くように防ぎ続ける。やがて泥は量を少なくしていき、遂には迫っていた泥は消える。

同時に投影していた光の花弁が割れて消える。

「す、すごいじゃない!!!士郎!!!」

「ロー・アイアス…、ギリシャの英雄アイアスが用いたとされる盾

」

「そういうものだったのか、今の」

「知らずに使ったの!？」

「その剣のおかげ…ですか？」

セイバーが俺が黄金の剣を持っている事に気付いたのか聞いてくる。

「ああ。コウジユがくれたとおきってやつだ」

そういえば、遠坂達の疲れが吹き飛んでいる…というか、活力が湧きでている様に見える。俺自身も同様だ。力が溢れると同時に思いが強くなっていく。
それもこの剣の効果なのか？

「言峰、泥を増やせ。

我があの生意気な盾を突き破る」

淡々とそう言いながら、ギルガメッシュは自身の周囲に数多の宝具を

今度はギルガメッシュもくるのか!?!？

俺は再び前に出て、盾を投影しようとする。

が――。

「あ…れ…?」

足がふらつく。

頭はもうろうつとするとどころかハッキリとっていて、心は戦おつと、勝とうとしているのに身体が付いてこない。

どうなっているんだ…?

「「士郎!!?」」

セイバーと遠坂が俺を支えてくれる。

何で俺の身体は動かない?

まるで自分の身体では無くなったような感覚。

早く盾を出さないと…。

ギルガメッシュが浮かべている宝具がこちらへ向かい始める。

その後ろには再び波となつてこちらを飲み込もうとする泥が控えている。

「貫け」

だが、無情にも俺の心に反して身体は動かず宝具の軍勢が迫る。

「――」
フリーズアウト
停止解凍、
ソードバレルフルオープン
全投影連続層写………！！！！
「――」

迫る宝具の軍勢は、俺達の後方から飛来した数多の剣によつて全て弾かれた。

身体を動かす事が出来ないでそちらを見る事は出来ないが、聞かえてきた二つの声は知っているものだ。あの男と、そしてもう一つはひどく予想外の少女の――。

> sideout <

『Stage40: やっぱここは、最初っからクライマックスだぜ!!!』だ
いかがでしょうか？

まあそんなわけで、書き終わって見てみると、20ページ普通に超えちゃったので終結編ラスト部分はFate編エピソードと共に明日、明後日には出そうと思います。

1・またかよwww

2・いいかげんにしやがれゝ(？、Δ)(ノ

3・良い演出だ「。Δ」

4・どうせそんなこつたろうと思ってたZE (「」)b

恐らく皆様の内心こんな感じでしょう。個人的に3だと嬉しいななんて思ったりしちゃってます。

ちなみに、いつも見てくれてる仮編集的なポジに居る方は普通に2でした。

ははは…ごめんなさい。ホントに。

>(「」)<

えーでは、最後に補足的なものをします。

コウジュが教会吹っ飛ばすのに使ったスペルカード、紅符『不夜城レッド』ですが、これは東方に出てくる『うゝ』でお馴染みの吸血鬼おぜう様が使うスペルです。

みんな大好きエターナルロリータの一人ですね。

なんせ二つ名が『永遠に幼き紅い月』ですから（笑）

それでどんな技かというと、自身を中心に紅い十字の十字架型のオーラが発生し、そのオーラで敵を攻撃できるというものです。

ではでは、今回はこの辺で ノシ

『stage41：ラストダンスとまいろうか・・・inふえいと』（前書き）

どもです。

えっと、今回もちょっと遅れてしまいました。

すいませんなんか書いてたらテンションおかしくなっていたのまにか20ページに増えちゃいましたwww

ではどうぞー！

『Stage 41：ラストダンスとまいるつか・・・innふえいと』

>Side：士郎<

「フリーズアウト——ソードパレルフルオープン停止解凍、全投影連続層写……………！！！」

声と同時に、金属と金属がぶつかり弾かれる音が連続して辺りを満たす。

連続する音は多すぎてそれが一つの音であるのではないかという程の数だ。

つまり、ギルガメッシュの射出してきた音と俺達の後方から飛んできた剣軍の数は十や二十では到底無い程の量だという事。

「む…？」

未だギルガメッシュから疑問の聲が上がる。自身の宝具を弾かれた事によるものだろう。

剣の雨が止み、俺の前に二つの影が降ってくる。紅い影だ。

2人は降り立つと同時にこちらへ振り向く。

その影は2人ともに先程聞こえてきた声の主であった。

「まったく不甲斐ない」

「ふふ、まあ良いじゃない？姉としては中々だったと思うわ」

片方はいつものニヒルな笑みを浮かべるアーチャー。

そしてもう一人は――。

「ん？どうかしたかしら？」

――イリヤだった。

なんでさ！？

なんでさっ！！？

思わず二回言ってしまった。
だが仕方ないはずだ。

俺は目の前に居る2人の向こうに居るギルガメッシュと言峰、のさ
らに向こうに居るイリヤwith聖杯。

次に目の前に居るイリヤ。

「…？」

目が合うと、首を横にこてつと傾げる。

2人居るんだけど？

あと、つつこみ忘れそうになったけど姉って…？

「器が二つ…？言峰、どういうことだ？」

「私にもわからん。

双子か…？いや、そういう話は聞いていない」

ギルガメッシュと言峰が2人のイリヤに疑問を持つ。持たない方がおかしいというものだろう。

「ふむ…いや、些事か。器として機能しているのなら構わぬな」

「確かに些事だ。続けよう…」

しかし、あいつ等にとっては小さな事でしかなかったようだ。

俺からしてみれば、いや、俺の後ろに居るセイバーと遠坂にとってもどう表現する事も出来ない驚愕だというのに…。

コウジユと居た事でそういった驚きに対する耐性が付いていたつもりだったが、どうやら気のせいだったようだ。

「エア…」

そんな状況に着いていけない俺の事をギルガメッシュが慮る訳はない。

ギルガメッシュがその手に取り出したのはつい昨日も見ただの宝具。

俺とセイバーを苦しめたあの宝具だ。

ギルガメッシュは宝具に魔力を込め始める。合わせて、エアと呼ばれたその剣は剣の名に似合わぬその歪な刀身を回転させ、込められていく魔力を今にも放とうと荒ぶらせていく。

「あ、そうだ士郎。ちょっとジツとしていてね」

イリヤが何かを思い出したのか、トトッと俺の方へ近寄ってくる。

正直この子は今の状況を掴めてるんだろうか？

近寄ってきたイリヤの向こう側でギルガメッシュは魔力を込め終えたのかこちらへ今にも放ちそうだ。とはいえ、俺は意識がはつきりしてるとはいえ動けないのでどうする事も出来ない。

「^{エヌマ}天地乖離す——」

あ…。

「――開闢^{エリシユ}の星っ！！！！！！」

血のように禍々しい赤に見える魔力の嵐が俺達に迫る。

「^{ロー・アイアス}熾天覆う七つの円環！！！！

」

終わったと思った。しかし、俺達に迫る赤い本流をアーチャーが止めた。

その方法は俺が先程やった事と同じだった。

光で出来た花弁は俺達の前で赤い本流を防ぐ。

「士郎、あなたはまだ力の使い方を知らな過ぎるわ。道具『フォトンチャージ』」

アーチャーの事などお構いなしと言った風に、いつもの雰囲気のままイリヤが俺との会話を再開する。同時に懷からカードを取り出した。

そして宣言。

俺の中に何かが入っていき、満たされる。身体の不調も、先程までが嘘のように身体が動くようになる。

「これは…?」

「魔力の極端に急激な不足による欠乏症と言った所かしら。貧血の魔力版みたいなものね。ついでに言っと、戦闘中だったからアドレナリンが出て意識が変に残っちゃったのよ」

イリヤが俺に対する疑問に答えてくれた。

「イリヤ…長くはもたない。避けるなり何なりしてくれると私としては嬉しいのだが?」

「あ、うん、分かった」

何なんだろうなこのシールドでカオスな光景というか状況は…。

イリヤを隔てた向こう側ではギルガメッシュとアーチャーが戦闘を現在進行形で行っている。というかギルガメッシュの攻撃をアイアスの盾を使って塞ぎ続けている。盾は割れては修復されを続け、アーチャーは笑みを浮かべてこちらへ肩越しに話しかけるが冷や汗が流れているのが見える。

原因は当然俺達だろう。

コウジユのせいでギルガメッシュは弱く見えるが、実際には強い。宝具の雨もそうだが、あのエアという剣、更に昨日ギルガメッシュは真名解放まではしていないが宝具の能力を使用していた。そのどれもが驚異だ。コウジユのせいで弱く見えているだけだな。

それをアーチャーは盾を魔力で無理矢理維持し防いでいるのだ。

冷や汗の1つも出るといふものだろう。

「えっと、イリヤ…で良いんだよな…?」

「私以外の何だと言うの?」

そうですねあなたはイリヤさんにしか見えません。

ただ、向こうで器にされてる子もイリヤさんにしか見えません。

「そうだな、うん、イリヤだ。ありがとう回復してくれて。だから避けようか」

「…?」

何がだからなの?」

首をかしげるイリヤ。

天然か!?

天然で言っているのか!?

今俺が避けようって言った瞬間アーチャーが目にあるがとこの意を含んでこちらを見たぞ!?!あのアーチャーが!?!

「ああ、もう!?!」

「キャッ!?!士郎!?!」

俺はイリヤを抱えてその場を離れる準備をする。
そして後ろの二人にも声を掛けようとするがそこには誰も居なかつた。

あれ……？

いや、とにかく今は避難を！！

今しなければいけないことを思いだし、退避する。

次の瞬間にゴォツと退避する俺達の後ろを力の奔流が通りすぎる。

アーチャーが防ぐのをやめ、回避したようだ。

……お疲れさまです。

「ちょっと士郎！！聞いてるの！？いい加減お姉ちゃんを降ろしなさい！！」

腕の中でイリヤが暴れたので慌てて降ろす。それなりに離れたから大丈夫だろう。

あれ？今また姉って言った？

「姉ってなんだ？」

「あ…。いや、えと、今は良いじゃない？」

うん、まあ…戦闘中に聞くことではないか…。

そんな風に無理矢理納得というか後回しにすることを決め、ギルガメッシュ達の方を見直すと、声が掛かった。

「士郎！！ご無事ですか！？」

「士郎無」…よね…そうよね………」

声の主は、先程忽然と姿を消したセイバーと遠坂だった。

「2人ともどこに行ってたんだ！？」

どこぞのホラーモノじゃないが、忽然と後ろに居た人間が消えたのだ。心配しない筈がない。

「え…いや、なんというか……」

「予想外というか…ある意味予想通りの人物のところよ」

「…？」

誰の事を言ってるんだ？

「ああ、そういう段取りだったわね。どう驚いた？」

イリヤがセイバーと遠坂に話しかける。

段取り…？

話しは俺を置いて進んでいく。

「正直…まだ意味が分かりません」

「私はどうせこんな事だろうと思ったわよっ！-」

頭を抱えて言うセイバーに、自棄になったかの様な遠坂。

だからなんなのさ…orz

「ふふん♪説明しよう。
なぜなにコウジユの時間だよ」

遠坂…、お前が自棄になって『どうせこんな…』なんて言いなくなった訳が分かった。

聞こえてきた声は俺が死んだと思っていた人物、コウジユ。何故に不死殺しをくらって生きているのか…。

コウジユはいつもそうだ。
もう訳が分からないよ…。

> s i d e o u t <

> s i d e : イリヤ <

ふふ、コウジユだと思った？
けどお生憎さま、
私よ。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

えらく久しぶりな気がするわね…何でかな？

あ、そういえば。ずっと隠れてたっけ。

私のこの身はホムンクルス。聖杯の器として調整された身。

ホムンクルスと魔術師、衛宮切嗣との間に生まれた存在。

そんな私は本来、死ぬ運命からは逃れられない筈だった。

——んだけど、コウジユがねー…。

私はこの聖杯戦争で死ぬはずだった。それはこの身体が聖杯の器である以上仕方ない事だ。何故なら聖杯戦争が進むにつれ私の中の杯は満たされていき、最後にはその中身が“私”を消して本当の意味で“器”になる筈だったの。

もし、“私”が残ったとしても、この身体はもうボロボロ。この聖杯戦争の間さえ持てば良いといった風に改造されているから、もったとしてもあと10年も生きられない身体。

それをコウジユは助けてくれた。
ホントにコウジユはお節介。

え？どうやって助かったのだった？

私もよく分からないのだけど、人形にコウジユがキャスターの力を借りて、私の“器である”という概念を切り取って人形に移したらいい。

寿命に関してもどうにかするって言ってたけど、どうするのかしら？

まあ、出鱈目だとは思っけど今更よそんなの…。ついでに言っとキャスターも大概チートよね…。

コウジュの能力をブーストできるわけだし。

洗脳でどうこうできるってどうなの？

そしてその洗脳を受け入れるってどうなの？自身の目的とはいえ、その目的も他人のためなのよ？

ホント…バカ…／／

でもそのおかげで、今私はここに居る。

何故かアーチャーの格好をしているけどね？

ふふ、でもこれはこれで面白いわ。並行世界の私はアーチャーの力を継承してるんだって。だから私はコウジュの“夢幻召喚『アーチャー真』”に適性があつたそうよ。

誰かの後ろに隠れずに闘えるのは良いものね。士郎のピンチに刺そうと現れる姉…良い感じ。

改めて、士郎を見る。

“私”が向こうで聖杯に半分取り込まれてるのに“私”が目の前に居る。それで状況が分からなくて頭の上に“？”がたやすく幻視で

きる。

これが萌えてやつね!!

ゲフンゲフン…。

今のは忘れてちょうだい。最近、人形を変わり身にコウジユのマイ
ルームに潜伏してたからライダー達と会う機会が多くて…。ちよっ
と…、ほんのちよつとだけ染まっちゃったかな…？

ああいうゲームもばかにできないものよね…。

けど、そんな士郎を見て楽しんでたから、ついつい私が姉だつてこ
とを言ってしまった。まあ、誤魔化せたから良いわよね？

「イリヤ!!早くしてくれ!!」

あら、もう一人の弟君からお呼びがかかってしまったわ。

今はコウジユと一緒に来たのであるうランサーとアサシンと共に、
ギルガメッシュ達を押さえる。

宝具の雨と聖杯の泥で弾幕張ってるからさすがに防ぐだけっていう
のはしんどいかな？泥は触っちゃいけないし。

…仕方ない。

さすがにちよつとは説明が士郎達に必要なだし、コウジュは士郎にあいつらを倒して欲しいって言ってたから私も行くしかないわね。

ホントならあいつらをぶち殺したいのだけど…。

何故って…？

そんなの分かるでしょう！！？

あいつ等の後ろにあるのは私なのよ！？

それも裸にされた！！

見た目幼女でも私は××歳近くなのよ！？

乙女の柔肌をさらした罪は重いわ。

あのロリコンどもめ！！

それに、コウジュに聞いたんだけど切嗣が会いに来れなくなった原因の一つってこいつらにあるんでしょう？

ドウシテクレヨウカシラ…。

まあいいわ。コウジュは士郎にあいつらを倒させてって言ってたけど、別に手伝っちゃいけないなんて言ってないし、ふ、ふフフフフ…。

もう一人の弟君にも手伝わせて、消し炭にしてあげるわ。

私が貰ったこのカードを使いこなす方法はただ一つ。最強の自分を思い浮かべる事。

なら簡単だわ。最凶の自分しか頭に思い浮かばないんだもの。

フフフフフフ。

s i d e o u t

s i d e : コウジユ

颯爽登場！！銀河美少…

……これは危険な香りがする…。

って事で来たぜよ。ラストバトルなう。

俺の目の前には驚いている土郎。

そして向こう側ではギルガメとマーボーがこちらを向いて驚いている。

あ、アーチャー達の所にイリヤが向かった。

もうちょっとゆっくりしてってね？士郎に軽く話すからさ。

「コウジユ…生きてたのか…」

「俺が死ぬ？本来の意味で俺が死ぬ事なんてそうそうねえよ」

士郎は俺が死んだと思ってたのか。

俺今さっき来たところからいまいち状況が分からのんだけど…

まあどうせ金ぴかが自信満々に「不死殺しで貫いてやったわー!」
的な事を言っただらう。

うわー容易く眼に浮かぶぜい…。

それにしても、どや!!このカオス!!（笑）

俺がアーチャーの服を夢幻召喚の形で再現したのがイリヤのアチャ娘化フラグだと気づけた者が居るだらうか？

居たら尊敬しますマジで。

本当なら例の、某割烹着の似合うマッドなあの人の声だと噂のステッキ、カレイドステッキがあれば良かったんだけど。

あれは作れねえわ。

夢幻召喚機能インストールが付いたモノなら出来てもあの人格やらなんやらは無理。色んな意味で無理。キシユアのじっちゃんマジリスpektつす。あの人格をよく作れた的意味で。

なんにせよ、アチャ娘化は成功した。

戦闘技術も、イリヤが人形と入れ替わってからずっと引きこもって練習してたから普通に今の士郎より強い。練習相手には事欠かなかったしね。ライダーとかさ。腐ってもサーヴァントだから。

ライダーに関しては違う意味でそっち方面行きそうなので桜が心配してたけど…まあそれは別の話だ。どうせ落ちは二人ともとかだから。

あ、そだ。

軽くネタばれ含めて状況の整理と行くか。

俺はあの教会を出た後、迎えに来たキャスターと共にマイルームに向かった。

マイルームにはイリヤ、アーチャー、アサシンこと小次郎、ランサ

ー、桜、ライダー、そしてベッドに寝かされてるバゼットさん（で合ってるよね？）が居た。

俺が教会に行ってる間はキャスターに衛宮家の事任せといたんで皆で避難したみたいだ。

凜はどうしたんだって？

それは…あれだ、原作通りにするためだ。うん。

あ、そう言えば途中でセイバーと凜が消えただろ？

気付いてる人も居るだろうが犯人は俺です。

ツミキリ・ヒヨウリでちよちよいとね？

足元の空間まで斬って繋げて、この部屋に落として生存報告+回復をして上げた。して上げたっていうか俺が来るの遅れたのとか色々俺のせいでもあるから回復させていただいたが正解だな。ちゃんと謝ったよ？また後で改めて謝るけどね。

さてさて、そろそろ話を進めようか。

「さてさて士郎、聞きたい事がちよつとは「山ほど」「…うん、山ほどあるだろうけど、今あんたは何がしたい？」」

原作なら俺達はここに居らず、士郎とセイバーの身で倒した。他のルートだと違うけど、俺が基礎にしたルートはそうだ。

だが、この場には俺達が呑気に会話してられる程に戦力が余ってる。マーボ共ざまぁwwww

だから選択肢は幾つかある。

さてどんな変化が起こっているやら。

「あいつらを倒す。それだけはしないとイケない」

「ちなみに理由は？」

「はた迷惑だ」

は？え、どういうこと？

「はた迷惑？」

「ああ…。」

あいつらが目指してるのは他人に迷惑を掛ける事でしかない。だったら理由はそれで十分だ。少なくとも俺の中であいつらは悪だ」

く、くくく…ちょ、止められないwww

なるほどねー。はた迷惑、確かにそうだww

さすが俺とでも言えば良いのかね？

緊張感もへつたくれもねえよ。

「はははww

うんうん、確かにあいつらははた迷惑な存在だな」

「笑うなよ…」

少し不貞腐れた様に言う士郎。

でもゴメン笑うの止められないわ（笑）

「まあいいじゃんいいじゃん。これは嬉しくて笑ってんのさ。いやゝ士郎からそんな風に聞けるとは思わなかった。

俺は一応、士郎があいつに個人的な復讐しても良いと思ってるんだぜ？切嗣の死因は戦争終了時に浴びた泥が原因でもあるんだ。それにもう一つ、後で詳しい事は言うけど、イリヤもある部分であいつに不幸にされたんだ」

切嗣氏がイリヤに会いに行けなかったのって、アインツベルンの爺が拒否してたのと、泥の呪いのせいで身体機能やらなんやらが落ちて、無理矢理イリヤに会う程の力が無かったからだった筈。

そついやイリヤさん上手く闘えてるかな？

チラッとそつちを見てみる…と…。

うん見なかった事にしよう。とりあえず頑張ってるみたいだね。話終わる前に倒さないでね？

視線を士郎に戻す。この状況で考え事を出来る士郎は、原作の士郎より肝が据わってるな。俺の所為？デスヨネー。

「確かにあいつは、あの大火事を起こしたし、たくさんの人を殺して、更に未だ飽き足らずに何かしらの災害を起こそうとしてる」

考えを纏めた士郎が俺に宣言する様に言う。

「だから俺はあいつを倒せさえすればそれで良い。親父の望みも、今じゃ聞けないけどかたき討ちじゃない筈だ」

「なーるほどねー。くく、ホントにそれで良いんだな？」

「ああ。」

あ、でも…」

ふっきた表情でそう言う土郎。そして最後に何かを思い出したようだ。

「なんさ？」

「いや、イリヤがどうなのかなって。コウジュが後でっていうからよく分かんが不幸の源だったんだろ」

コウジュがの部分をさりげなく強調して言う土郎。
そんなに不満かよう…。

それにしてもイリヤか。

今向こうで無双してるんだけどどうやって聞こうかね？

『なに？コウジュ何か用？』

突然頭の中に声が響く。あ、念話か。その手があつたな。

前衛で親の敵と言わんばかりに（リアルにそうだが）闘っていたイリヤがバックアップに回りつつもこちらに念話を繋げてくれたようだ。土郎にも同時に行っているのかイリヤの方を見て首をかしげている。

『いや、作戦変更の可能性が出てきたからさ。』

士郎は別にかたき討ちをする気はないみたいなんよ。ただあいつらを倒せば良いってさ』

『ふん』

『ついでに言うと、切嗣氏が敵討ちを望む筈が無いと思っつてさ』

『分かったわ。士郎がそういうなら私も遠慮しとくわ』

さすがお姉ちゃんってところだな。というか、この世界のイリヤはお姉ちゃんキャラで行くのかね？ツンデレと相まってどこぞの白ネコとキャラかぶりしそう…。

そんなしょうもない事を考えているとイリヤはけど…と話を続けた。

『けど…、個人的な恨みがあるから復讐自体はさせてもらうわ』

念話ごしなものすごいオーラを感じる。というか、遠くからホントに感じる。だって、黒いオーラが幻視できるもの。

おーい誰だー？イリヤにビジュアルユニットのブラックハート渡したのー。先生怒らないから手ー上げなさい。

いや、どちらかというと黒色のブースト？

身体から噴き出すように見えるから。

倒したら通常より経験知貰えそうだな。同時に呪われそうだけど。

それはおいといて、個人的な恨みって何だろ？

聞いたら後悔する気もするけど、聞かずにはいられない。

『ところで個人的な恨みって…？』

『ふフフ、ふフフフフフフ…あのね、あいつ等の後ろにあるの
って…何？』

あ…。

『私の身代わりの人形とはいえ、器になる程の精巧に出来たモノな
のよ？それが裸にされて晒しものに…』

「え？あここに居るのって人形なのか！？」

そこ！？そっちに興味が言っちゃったの！？

『士郎…？』

『は、はい！？な、なな、何でありましょうか！！！？』

そっぴや士郎にまだ言ってなかったな。ごめす。

いまやつと疑問の一つが解けたのであろう士郎はなるほどと聖
杯の方のイリヤを見た。

だが、それがいけなかったのだろう。

イリヤの冷たい声が念話として、周りの時間を凍らせるかのごとく
届く。

その言葉が直接向けられている士郎がドモッて変な話し方になるの
は仕方ないと思う。

『何を見てるのかな？かなー？』

ちよっ！？リアル離見沢とかやめいつ！！

『見てないであります！！大佐殿！！』

大佐！？イリヤが大佐！？

『まあいいわ。手伝ってくれるわよ…ね…？』

『了解しました！！』

士郎エ…。

頑張れ超頑張れ。

『コウジユ？』

『わっほい！！？な、何さ？』

『聖杯の方は任せるわ。言峰もよろしく。』

けど、あの金ぴかは私が貰うわ。片方さえいれば発散できるでしよ
うし』

『了解しました！！』

ゴメンよ士郎、このイリヤは無理だわ。
俺も同じ穴のむじなだったわ。

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺は今からラストバトルを始めようとしていたらいつのまにかイリヤが指示を出していた』な…何を（ry

うんまあそういう事だ。

魔法少女リリカル イリヤ始まります…。

「貴様！！何故生きている！！」

俺達もイリヤ達の方へ来た。向こうも聞きたい事があるのか戦闘は一旦止まっている。

「あのさー、言うと思うのか？」

「ふんっ！相も変わらずのその言い様。一度で死なぬなら何度でも殺してやるまでのこと」

相も変わらずはあんだだよ。自信満々の所申し訳ないが後ろでマ-

ボが冷汗かいてんぞ…。

それにしても、ギルガメのカリスマブレイクが半端無いな。

まさか聖杯の所為？

聖杯の泥に触れるとカリスマブレイクするとか？

怖すぎる…。

「出来れば私も聞いてみたいものだな。何故ランサー達が生きているのか」

冷汗かきながら俺への質問。
ブルータスお前もか…。

仕方ないからヒントを上げよう。

「ふふん、仕方ないからヒントだ。
ギルガメッシュの言ってる方もランサー達の方も種は一緒だよ。種も仕掛けも御座いますってね？」

「ふむ…命のストックといったところか…。それも回数制限もしくは数が豊富な…」

「何故バレたし…」

「……当たり前だ……！」

「はうあっ！！？」

何人かから同時にはたかれる。大きい帽子かぶってるからってそんな威力で叩かなくても良いじゃないか！！
身長伸びなくなったらどうすんだよ！！
伸びるかどうかは置いといてな！！

くう…、それもこれもマーボアの所為だ。
カリスマブレイクやらでつついっ俺がちょっと可哀そうだなって思った所に質問して情報を得るとは…。
汚いさすが神父汚い。綺礼だけどきたない。

「よ、よくぞ見破った。「何えばってんのよ…」ちょ、やめて！」
追加で凜にはたかれる。

「ごほん！よくぞ見破ったつと言いたところだが、無意味だ。貴様の言う通りこの身は命をストックしている。
故に！！この私を倒しても第2第3の我が現れ貴様を倒すであろう
！！！」

マジでリアルにな。

「ならば先ほども言ったようにそのストックが無くなるまで殺しに殺せばいいだけの事よ！！！」

そう言つて、ギルガメッシュが宝具の雨を降らせる。

「待てギルガメッシュ！！ちっ！！！」

マーボー神父もギルガメッシュを止めようとするが、無駄だとすぐに判断し、自身も聖杯の触手から泥を撃ち出す事に切り替える。

それをアーチャーとイリヤがローアイアスで防ぐ。

「しゃーない。ホントのホントに最後のバトルだ。とっとと終わらそう」

ラストバトルっぽく舌戦とか無いけど、あっちが仕掛けてきたんだから良いよね？答えは聞いてない。

「コウジユ、さっき言った通りギルガメッシュはこちらで潰すわ。だから…」

「おーけー。マーボーと聖杯はこっちでだな。行くぜ！！」

俺はロンギヌスの槍を取り出し、アイアスを飛び越え突き進む。

「俺も行かせてもらっぜ！！最初っからクライマックスだ！！」

「私も行かせてもらおう！！ふむ…目標を斬り捨てる！！」

…これは中々しっくりくるな」

クー兄さん、小次郎も続けてアイアスの隙間から飛び出て、ギルガメ達の方へ走り寄る。

何気に距離がある上に、この弾幕をくぐりながらだから中々たどり着けない。

3人で弾幕を潜り抜けながら、時には武器で弾きながら向かう。

「さっすがに！…多い！！…なつと！！！」

「けどよお！！つりやああ！数だけだ！！」

「確かに！！むっ！？泥は弾くな！！」

三人で進んでいる途中で、突然小次郎が離脱する。比較的近くに居たランサーが小次郎への車線上に入る。

小次郎の方を見ると、小次郎はその手に何も持っておらず、小次郎が寸前まで居た所に泥に取り込まれていく小次郎の物干し竿があった。

「マジかよっ！！？」

続いて、小次郎の援護に回ったランサーも飛び退く。その手にあの紅い槍はもう無い。近くに泥に飲み込まれていくそれが見て取れる。

「おいおいおい！！？止めてよね！！」

小次郎とランサーがバックステップをしつつ避けて行くが量が量だ。得物が無い二人にはいささか捌ききれない。

俺は慌てて2人の車線上に入る。

「厄介…ちょっとだけ…！！」

某ピンクの髪をした写メ取るのが趣味な騎士様の口マネをして余裕

ばく振舞うが実際は無いです。

俺もロングヌスを振り回すが宝具は弾けても泥が弾ききれない。弾いたと思っても生物のように手元に上ってくる。

「キモイつての！！適当にシールド！！！！×10！！」

ロングヌスを一度消す。そして俺は言葉通りに適当にシールド関係のランクが低いのを10個眼前に出す。

「悪いな嬢ちゃん！」

「恩に着る！！」

同時に2人と共に後方へ下がる。

「ほう、いくら不死者でもこの泥は避けるのか。ならば！！」

言峰が俺達が引いた事に気を良くしたのか続けて攻撃してくる。

泥は波のように質量を持ち始め、俺が出した盾を飲み込まんと迫る。

すぐに盾は飲み込まれていった。

「ふははははは！！！！他愛もないではないか！！」

なんか腹立つんですけどあいつ！！！！！！

俺達三人とスイッチする様に再びアーチャーとイリヤが前に出てロ
ーアイアスで防ぐ。

しかし、言峰はそれ諸共に飲み込もうと大きな波を泥で作りこちらへ向かわせる。

「調子にのんなああ！！邪鞭ウロボロス！！喰いつくせ！！！」

士郎を助ける時に使った蛇腹剣を出して、刃を伸ばし出来る限り、波へとぶつける。

『朽ち果てる』『死ぬ』『嘆け』『絶望しろ』…

「うぐ！！何だよこれ！？」

俺の中に何かが流れ込む。

「コウジュ！？」

「イリヤ！！！」

「分かってる！！！」

士郎が駆け寄ってくる。イリヤとアーチャーが再び波を防いでくれるみたいだ。

それにしても、頭が割れそうに痛い。

多分、思わず出したウロボロスで泥を喰ってしまったから“この世全ての悪”の一部が俺の中に流れ込んでしまったんだろう。

『壊せ』『死ぬ』『奪え』『堕ちろ』

原作で士郎は言峰に泥の中へと入れられている。

よくもまあ士郎はこんなのを短時間で退けたな。

まあラスト一話だから尺的な意味で短かったのかもしれないが…。

でもまあ俺もここでやられてる訳にはいけないので、さつさと黙ってもらいましょうかっ!!

「ツミキリオモテ!!サイカオモテ!!」

俺が出したのはツミキリヒヨウリ、サイカヒヨウリの片手ダガーverをそれぞれ一本ずつ。

込められた概念はツミキリの方が『絡まりし事象の鎖から、その姿を表すとされる断罪の小剣。全ての悪しき罪を調律し、怨念や苦悩を絶大な力へと昇華させる』、サイカの方が『絡まりし事象の鎖から、その姿を表すとされる連鎖の小剣。哀しき事象の因果律を集約させ、その身に取り込み力と成す』。

概念を使用して、内側の気持ち悪いのを純粋な力に消化する。

「ぶはーっ!!気持ち悪かったー…」

思わず一息つく。

「無事か!?!」

「コウジユ無事なの!?!」

俺の眼前に居る、アーチャーとイリヤが心配して肩越しに言うてる。

「無事なのか!？」

続けて士郎も言ってくれた。

他のメンバーも口には出さないが目で言ってくれている。

「心配掛けたな、無事だぜ」

ホントに心配掛けたみたいだな。

この失敗は取り返さんとだぜ!!

俺は、いつのまにか倒れていた身体を起こして立ち上がる。

「まーったくあの泥マジでめんどくせえよ。もう二度と触りたくない」

「まったくだ。俺の槍をさっさと返してほしいもんだ」

「私のモノもだね…」

あ、そっか。2人のはあっちで取り込まれて…。

俺は代わりになるモノとして武器を二つ出す。

「ロングヌス、コクイントウ。この子達を代わりに使ってやってくれ。とはいえ、その子達も取り込まれる可能性があるから気を付けてくれよ」

「おうサンキュー」

「ふむ、よいものだな。喜んで借り受ける」

例のごとく身長がアレなんで微妙な事になっているが2人の得物に一番近いのがこの二つな筈だ。

けどどうするかねー。

「だったら嬢ちゃん“速く”だ」

「その手があつたか！」

どうしようか悩んでいたらランサーが提案してくる。その方法はイリヤの特訓時にちょっと遊びでやってた方法。その時はキャスターの弾幕を潜り抜けるために使ったんだが…。

何気に良い手かも。

「んじゃ、俺が泥を、ランサーは宝具を使ってことでおk？」

「大丈夫だ。問題無い」

うん、フラグな気がするけど分かってて言ってるから大丈夫だよな。

「ふむ、ならば私はこちらに居よう」

ってわけで、仕切り直した。

ランサーと俺で再びアイアスの隙間から飛び出す。

「またやられに来たかー!!」

「アンリ・マユー！」

泥と宝具が迫る。

それを先程言った通りにランサーは宝具を弾き、俺は両手のツミキリとサイ力で泥を斬り裂きつつ、自らの力に変換して突き進む。

「泥がつ！？」

言峰が俺に泥が効かない事に驚く。

当然だろうな。

言峰：泥効くじゃん。これで勝つる山（。　。　山）

が次の瞬間には…。

言峰：泥…え…？（；　ㇿ　）

って感じだもんなwww

いやぁホント何でもありだ。概念操作さまさまだね。

俺とランサーは前後に並びながら、迫るものによってすぐさま順番を変わって弾幕を潜り抜けていく。

泥、泥、宝具、泥、宝具、宝具……。

無限のごとく湧いてくるそれらを潜り抜け後少しと良ところで絞めに入る。

「てめえらに足りないもの！それは！！」

「情熱！」

「思想！」「理念！」「頭脳！」「気品！」「優雅さ！」「勤勉さ！」

「そしてエなによりもオー——」

「「速さが足りないっ！！！！！」」

「何いっ！！？」

「くっ！？」

正直やりたかったただだが、上手い事ギルガメとマーボーの目前まで来る事が出来た。

「ランサー！！」

俺はギルガメッシュの横に入りこみギルガメッシュを力チ上げる。

「あいよお！！！！波動球！！」

「ぬおおおおああ！！！！？」

その力チ上げられたギルガメを、ランサーが槍で士郎達が居る密集地へぶっ飛ばす。

「ランサー！こっちは任せろ！！」

「んじゃ、後は任せたぜ！！」

ランサーはそれを追いかけて、戻っていく。

『unlimited blade works！！！！』

そう聞こえたのと同時に士郎達、向こうに居た組は全員消えた。

んじゃ、俺は俺のやる事しようかね。

言峰だけなら大丈夫だけど、この聖杯に対して無事で済むのは俺だけっぽいし、やっぱこうするしかないし。

「ギルガメッシュ！！」

「お前はこっち！！」

言峰がそちらへ触手を伸ばそうとするがそれを俺が叩き斬る。

「分断されたか…」

「やっぱその聖杯は面倒なんですねー」

「その双剣…厄介だな。だが、生身の部分に当てれば問題はないか」

「はん！逝つてよし！！」

何本もの触手が俺に迫る。それを斬りつつ、その場に止まることなく動き続ける。

速さはこっちが圧倒的に上だ。

「幻想舞闘…！！猛舞凄連斬！！」

幻想舞闘シリーズ、双小剣編。元はPSP02の技の一つ、モウブセイレンザン。

舞うように斬りつけ、反撃のスキを与えない超高速の攻撃を放っていく。

「続いて連牙宙刃翔！！！」

これも元はPSP02で、レンガチュウジンショウ。

宙を翔け刃を舞うように振り下ろす。極めたモノの刃には計り知れない力が宿るという技。

この技完全に空中蹴って攻撃繰り出してるんだけどどうなってるんだろ？

謎だ…。

まあ見た目かつこいいし、使い勝手良いし、かつこいいから良いよな。

「せいやっ！！」

「貴様さえいなければ！！」

俺に迫る触手を何本も斬り伏せ、最後に放った斬撃で袈裟掛けに大きな傷を負った言峰が話します。

っていうか、迫る触手って…なんか卑猥だな…。

リアルに今の俺に対しては絵的に色々ヤバいし…。どっかの人に規制されるレベルな気が…。

気のせいだな。うん。

「あんたばかりかあ？」

例えば俺がいなくてもあんたの野望はここで潰^{つい}えていたよ」

どこぞのチルドレンのマネをしながら言う。

「何を根拠に…」

「あんたがしてる事が悪だからさ！世間一般で考えてな！！悪は滅びるもんだ」

「なら正義とは何だ！？お前も衛宮親子の様に自身が正義の味方だ

「とでも言うつつもりか!？」

「そんなもん俺が知りたいね。いつだってそれを決めるのは自身じやなくて相手だからな。それに、俺は正義なんて崇高なもんを背負うつつもりはねえ」

「なら貴様は何の為に闘っているというのだ?アインツベルンの娘の為か?衛宮士郎の為か?はたまたこの町の為か?」

「はっ、分かりきった事聞いてんじゃねえよ。」

「そんなもん決まってる…自分の為だ!!」

「自己中心的だな」

「てめえだけには言われたくねえよ。だがまあその通りだ。俺は自己中心的なんだろうよ。」

「けどな、助けたいから助けて何が悪い?」

「そして偽善か…」

「それこそ正義とは何かって話になるだろうがよ。文字通り偽の善っていう位なんだからな。」

「けどな、やらねえ正義抱えるくれえなら、自分で動く偽善抱えてた方がマシだつての!!」

「いちいち正義がどうか考えて行動するかつての。」

「その程度で…その程度の考えで私の邪魔をするのか!!?」

「士郎が言ってなかったか？お前、はた迷惑なんだよ」

「はっ… お前も衛宮士郎か。どいつもこいつも衛宮衛宮…へどが出る。」

「それほど衛宮が好きか？」

ストップ！ストップ！！！

何で好きとかの話になるんさ！！？／／

「お前もどこの英霊かは知らんが元は生きていたのだろう？ならば、破壊騒動を感じた事がある筈だ。その身を焦がす思いが！！全てを壊せと！！破壊せよと！！」

「それほどの力を持つなら尚更の筈だっ！！！！」

あの…聞いてます？

「って聞いてるわけないか。はあ、1人テンション上げちゃってさ。」

斬撃で俺が斬った部分を手で押さえながら声高に叫ぶように言う言峰。

「そんなはっちゃけて言うから血がだらだら出てるじゃん。」

「破壊衝動ね…。確かにあるな。特に俺は獣人だし、バーサーカーのクラスを頂いちゃった位だからな」

「そうだろう？ならば私を肯定しろ。そうすれば…」

「だけど、俺は根本的に痛いのは嫌いなんだよ！！」

大っ嫌いです。なんかよく死んでる気がするけど…。

それは能力の関係とか、実験とかの為だから！！

どこぞの天人みたいにM疑惑は俺には必要ないからな！！

「は…？」

いや、突然素の反応すんなよ…。

「俺はな。痛いのが嫌いだ。不死だから回復するけど、死ぬ度に痛い、当然のごとくな」

「それがどうした？」

「それがどうしただと？はっ…

俺はな、痛いのが嫌いだ。確かに闘うのとか生来身体動かすの好きな部分あるから闘いに対する喜びがある事は否定しねえ。けどそれは相手も望んでこそだ。

他人の痛がるのを見て喜ぶドS趣味はねえ！！そんなの見る気なんざさらさらねえんだよ！！

お前みたいに、闘いを望んでもいない人間をただただ一方的に虐殺するのを肯定できる訳がねえ！！」

「フフ、何を言うかと思えば…」

何が可笑しいのか満面の笑みをこちらに向けてくる。

士郎が気持ち悪い笑みと言いたくなるのも無理が無いと思うな。

「何がおかしい？」

「いやなに、バーサーカーのクラスを得たお前なら理解できると思っただが…所詮お前は“そちら側”か…」

「虐殺したくなるような“そちら側”は元よりお断りだよ。あの子達をあんな風にするそちら側なんてな」

「ならばどうする？私を殺すかね？」

両手を広げ、さあとでも言わんばかりにこちらへ笑みを向ける。

でも俺はお前をどうするかは既に決めてあるんだよ。

「だが断る。だから、お前に復讐はするがお前だけは殺して“やんない”」

こいつだけは殺すもんか。こいつの命を背負う気はないし、こいつは生きて償うべきだ。死んで終わりになんかするもんか。

「ならばっ！！」

言峰の周りにあった

泥が言峰を包みだした。

『お前が死ぬが良い！！！！』

ええ…。何これ？

包む泥がどんどんどんどんと力サを増し、質量を増やしていく。

それは次第に聖杯すらも飲み込み、巨大になっていき――。

「何というデイダラボッチ…」

――最終的に、巨大な人型の怪物になった。

ホントにどこぞのジ○リの出てくる獅子神様最終形態みたいな感じになってるよ！？しかも色違いver！！向こうは薄い青でどこか神々しさがあったけど、こっち真っ黒！！

『完成した聖杯の力を見せてやろう…』

口？っぽい所がパクパク開閉したと思ったら、腹の底に響く声でそう言ってきた。

こいつは予想外だ…

(´・ω・｀)

とりあえず俺は、両手の剣を構えて突っ込む事にした。

side out

sideo：士郎

「unlimited blade works!」

そう、アーチャーとイリヤがギルガメツシュがこちらへ飛んできた瞬間に言っと、辺りはいつしか見た剣と齒車が支配する世界に変わっていた。

最後の言葉を言う前に言っていた詠唱もやけに容易く俺の中に入ってきたが、この世界こそが俺に入るべきものだったのだと理解する。

いや、訂正だ。

理解させてくれた、そう言うべきだな。

先程から、俺が手に持つエクスカリバーが熱を持っているかのように脈動し、俺に何かを流し込んでくる。

そして同時に、これこそがコウジユが俺に見出していたものだとして理解する。

剣の世界——。

アーチャーとイリヤは“unlimited blade works”、無限の剣製と呼んでいた。

どういう理屈かは分からないが。

この世界は俺の世界でもあるようだ。

分からない事だらけだ。

アーチャーの事も、イリヤの事も、そしてこの世界が俺の世界でもあると思ってしまう事も。

けど、無駄なんだろう。

ここはそういうものなんだ。

理解するのではなく、ただ認めれば良い場所。

「どう？コウジユのプレゼントは」

空間そのものから溶け出すように現れたキャスターは、俺の横でそう言った。

あれ、そういえば今まで居なかった様な…。

「聞いてる？」

俺の前に来て、下から覗き込むように聞くキャスター。

今は身長が小さくなっているから自然とそうなるが、それにしても以前の威厳というか、カリスマ性？が無くなっているな。

改めてそう感じながらも、俺は他の思考で埋め尽くされている。
当然この世界に着いてだ。

視線を前方へ戻す。

そこでは、2人の紅い弓兵がその名とは違い、地面に刺さったいくつもの剣を駆使しながらギルガメッシュの宝具に対応していく。

俺はそこから目を離さずに答える。

「確かにこれはすごいよ。」

どこか懐かしさすら感じるほどにこの世界は俺に合ってると思う」

「ならよかったわ。コウジユも報われるわね」

再び俺の横に戻り、俺と同じように遠くに見える闘いを見るキャストター。

俺は再び、視線はそのままにキャストターに質問する。

「そういえば、今までどこに居たんだ？そういえば、ライダーも居ないし」

「ああ、そういえば坊やは知らなかったのよね」

キャストターは指折り数えながら言ってくれた。

「まず私だけど、私は今回結界担当なのよ。柳洞寺の結界だって私が弄ってあるし、この固有結界だってホントは現実世界を塗りつぶすように現れるものだけど、それだと分断できないから結界を応用

して少し層をずらして世界を構築する様に調整してるわ。コウジユとあの神父が居ないでしょ？」

層をずらすとかはよくわからなかったけど、コウジユと言峰が居ない事で分断が成功した事は分かった。

「次にライダーだけど、ライダーは桜とあのダゼット？とにかくラッサーと一緒に来た女性を守っているわ。念の為だけだね」

あれ？バゼットさんじゃなかったっけ？

まあ今は関係ないか。

とにかく他の皆が無事でよかった。

「さて、後ろの2人はいつまで呆けているのかしら？」

そう言って、俺への説明を終えたキャスターは後ろを振り向く。

後ろに居るのはセイバーと遠坂だった。

あまりにもあまりな状況のカオス具合に思わず呆けてしまったのだろう。

根が真面目な二人の事だから許容しきれなくなったのだろう。

俺？俺はもう諦めの境地に至ったから、うん…。

「キャ、キャスター、出来れば私はこの状況や、いえもう全ての状況解説をお願いしたいのですが？」

「私も…さすがにこの状況はコウジユだからで済ませてはいけない

様な…。いや今までと変わらないと言えば変わらない?」

やはり、2人はついていけないようだ。

そんな2人の質問は無視して、キャスターは続ける。

「今から総攻撃するけど、来るかしら?」

そう満面の笑みで言う。

「速く終わればそれだけ速く質問タイムが取れるわよ? ついでにストレス発散」

その言葉をキャスターが言いきる前にセイバーと遠坂は既にその場に居なかった。

ギルガメッシュ…ご愁傷様です。

「坊や、あなたはとうする?」

「当然俺も行く。この状況とはいえ、女の子にばかり戦闘任せるつてのもあれだしな」

俺は手の中にあるエクスカリバーを強く握り、走り出す。

「俺も行かせてもらっぜ?」

「当然私もだ」

いつのまにか、ランサーとアサシンが並走していた。

いや、えと、ホントにご愁傷様ですギルガメッシュ。

「このて…ぐふぁ！？…程度で…おぐ！？…やられると…がはあッ！？」

金ぴかも、こうなりやただの、サンドバック。

字あまり。

そう言いつつも、俺もその闘い？に突っ込んでいくのだった。

俺達はあの後すぐにギルガメッシュを倒すことが出来た。

ギルガメッシュがあの不遜なものの言い方を崩さずに文句を言ってきていた気がするが、ちよつと涙目になって言う様はかなりシニールだったただけは言っておこう。

そのギルガメッシュももうここには居ない。なぜなら――。

「まったくひどいですよ。死んでしまったらどうするつもりだったんですか？」

俺の近くでキャスター達に文句を言っている金の髪の少年にギルガメッシュがなつてしまったからだ。

「ん？どうかしましたか？」

俺が目線をやったのに気付いたのかこちらを見てくるギルガメッシュ（少年）。

「もうわけが分からん」

「確かにそうですね」

「とりあえず何でお前そんなに性格変わってるんだよ」

「さあ、何でしょうね。僕としてもあの性格は意味が分かりませんし」

「自分の事だろうに…」

でもまあ、今のギルガメッシュは敵ではなさそうだ。

「じゃあ元の世界に戻すわよ？アーチャー、イリヤ」

「心得た」

「了解したわ」

キャスターが2人に指示を出した後、指を鳴らすと世界を構成するモノは崩れていき、さっきまで居た柳洞寺の境内へと場所が戻る。

「何これ？」

出てきて早々に目に入っただのは、ビルのようにバカでかい人型の何かだった。

「なによ…これ…」

遠坂が口に出したその言葉は俺も今まさに言いそうになった言葉だ。

なんだこれ？

「うわ、何あれ気持ち悪い」

続いてイリヤがそう言った。

改めてみると本当にでかい。ウルト○マンとかが闘うべき大きさだ。

「む…？あれは…」

誰か戦っていませんか…？」

セイバーが巨人の首の辺りを見てそう言う。

俺もそこへ目をやると、確かに何かの影が飛び周りながら攻撃して行っているのが見て取れる。

少し速くて見づらいが、目を凝らし見てみる。

そうやって何とか見れたのは人型の白い狐の姿だった。

「狐…？」

黒い巨人があまりにも大きい為対比しにくいが、白狐は2mはあるだろう。縦横無尽に空を駆け巡り、黒い巨人を何度も斬りつけ――

「――あれ？あの持ってるのって…」

よく見ると白狐の手には手の甲から前腕に掛けてあるブレイドの様な部分とは別に、二本の剣をその手に持っている。

その剣に俺は見覚えがあった。

コウジユの『ツミキリ』シリーズだ。

持っているというよりは無理矢理握っているといった感じだが、ともかくそれで攻撃しているという事はあの白狐の正体は自然と決ま

ってくる。

「あの狐って、ひょっとしてコウジュ？」

「コウジュなのですか!？」

「嘘!？」

俺が知らず出していた疑問に驚く声を上げるセイバーと遠坂。

「へー、よく分かったね士郎」

俺の疑問にはイリヤが答えてくれた。

「大正解、あの狐はコウジュだよ。コウジュがあの姿になったって事はもう終わりかなー」

先程までのギルガメッシュを相手にしていた時の修羅のごとき（実際にイリヤ自身が「今の私は阿修羅すらも凌駕する!」って言いながら嬉々とした表情で何度も斬りつけていた）イリヤとは打って変わって、手をヒラヒラさせながら近くの木にもたれに行く。

というか、やけにつやつやしているイリヤ。やりきりました私!！といった風に。

それにしても、コウジュだと分かったのは良いが、ホントにそう簡単に行くのだろうか？

ついさっきまでコウジュって結構危なくなかったか？

いつもの、遠坂のごときうつかりの所為である状態だったのなら仕

方ないが…。

というか、今更だがあの白狐がコウジユならあのでかいのは言峰？

どこからともなく「俺は人間をやめるぞおお！」と聞こえた気がするが気にしない。

ともかくにも、今の言峰（仮）に対しての大きさが違いすぎてそう簡単に倒せるとは思えないんだが…？

『劍軍師団』『ツミキリ』……！……！……！』

そう聞こえた瞬間にコウジユの方を向く。

コウジユは獣特有の形をした、むしろ爪でひつかくことを前提とした手で器用にカードを持ちながら宣言して居る。

先程まで剣はどこに行ったのかと探すと、回転しながらコウジュの上方から降ってきた。

それをコウジュが蹴りつけ、言峰（仮）に向かって飛ばす。

それと同時にスperlが発動したのか、蹴り飛ばされた2本のツミキリはその本数を次々に増やし、どこからともなく次々に現れるツミキリ達は黒く巨大な敵の身体に次々にささり、あるいは斬り裂き、どんどんとその体積を削っていく。

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

声ならぬ声を叫びながら巨大な身体が小さくなっていく。

えと、ホントにあっさりと終わってしまったっぽいんだが…。

あ、コウジユが何か二つぶら下げて持って来た。
コウジユはまだ白狐のままだ。

『たっだいまーそっちは終わった…っばいな。シヨタギルさんいるし』

「困ったモノです」

それに、手を横に開きながらやれやれと答えるギルガメッシュ（小）。

『オイオイどこの超能力者ですかこの野郎。
まいつか、これにて一見コンプリート!!』

そう言いながら、持っていたものを下ろす。
それは、ロープでぐるぐる巻きにされ、口もふさがれている言峰と、
タオルを巻かれたイリヤ（変わり身）だった。

『いやー、終わった終わったー』

腕を上大きく上げながら伸びをするコウジユ。勿論、人狐のまま
なので威圧感が半端無い。

「まったく、所々であなたがボカをするからこっちは大変だったの
よ？」

バックアップする身にもものね」

キャスターがコウジユの前に出てそう言う。

結界とかを担当していたと言っていたから、他のサブ的な部分もキヤスターが行っていたのだろう。

ご苦労様です。

「アハー…。ごめんなさい…orz」

素直に土下座するコウジユ。だが狐の姿なのでシュ（ry

「まあまあ良いじゃねえか、なんやかんやあったがこれで終わりなんだろ？」

つと、これ返しとくわ」

そう言っつてフォローするランサーはとても兄貴らしかった。小さいが…。

そして、いつのまにか回収したのか、泥に飲み込まれた筈の自身の槍であるゲイボルグと、先程借りていたロンギヌスを持ったまま前に出てくる。

「私もだな」

アサシンも同じく、自身の得物と借りていたコクイントウを持って前へ出る。

『役に立って良かったよ』

そう言って手を伸ばし、受け取ろうとするコウジユ。

だが――。

「待つて!!」

イリヤが制止の声を掛ける。

『なんさ?』

「ね、ねえ…、長くない?」

イリヤは制止を掛けた声とは裏腹に、恐る恐るといった風に声を出す。

それにしても長いって何の事だ?

その疑問の答えはすぐに分かる事になった。それも最悪の形で。

「その獣化…ナノブラストだっけ…?その白い狐の姿は初めて見たけど…そういうものの…?」

『あれ?そう言えば…』

コウジユは今まで気づかなかったようだが、どうやらこの狐化（他にもあるようだが）は時間制限があり、イリヤが知るモノよりやけに長いらしい。

そして、コウジユがはて…？と、首を傾げた瞬間、背中から黒い翼が噴きだすように現れる。

そして身体は、今までの純白の毛色が嘘のように段々とあちこちが黒く染まっていく。

『あ、やべ…暴走しちゃった…』

「「「「総員退避いいいいっ！……！！！！！！」」」」

イリヤ、アーチャー、ランサー、キャスターが突然そう叫ぶ。

それも切羽詰まった様にだ。

だが、俺やセイバー、遠坂は何の事が分からずに首を傾げるしかない。

『ぐ、ぐお…グルル……』

コウジユがバックステップして俺達から離れた。

コウジユの様子がおかしい。

どこから放たれているのかと目をやると――

「コ、コウジユー!!?」

――黒く染まったコウジユからだった。

「ぼうつとしてないで、あなたも攻撃態勢に入りなさい!!あなた達も!!!!」

キャスターが状況が未だ分かっていない俺や、セイバー、遠坂、それからきよとしたギルガメッシュ（小）に叫ぶように言う。

「来るぞ!!」

「多分1分凌^{しの}げば何とかなる筈^{はず}!!」

「――I am the bone of my sword
d（我が骨子は捻じれ狂う）!!」

「了解だ!!」

「心得た!!」

アーチャーと、イリヤは少し下がり、続けて詠唱する。

ランサーとアサシンは走って黒くなったコウジユの方へ駆けっていく。

「早くしてくれよ!!」

「長くはもたん!!」

キャスターは先程から忙しく何かをやっている。

アーチャーとイリヤが俺の方に駆け寄ってくる。

セイバーと遠坂は事ここに至って、状況が逼迫ひつぱくしている事に気付いたかのように、構える。

そして、俺もやっと今分かった。

喰われる。

この重苦しい重圧がそう語っている。

俺が未だ持っているエクスカリバーもまた、闘えと俺に語りかけるかのごとく、熱を持つ。

気付けば俺はあの世界へ至ろうと、詠唱していた。

——体は剣で出来ている (I am the bone of
my sword

)。

「イリヤ!!」

「分かつてる!!」

その俺に重ねるようにアーチャーとイリヤも詠唱し出した。

血潮は鉄で（Steel is my body）、心は硝子（and fire is my blood）。

幾たびの戦場を越えて不敗（I have created over a thousand blades）。

ただの一度も敗走はなくUnknown to Death）、

ただの一度も理解されない（Not known to Life）。

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う（Have withstood pain to create many weapons）。

故に、生涯に意味はなく（Yet, those hands will never hold anything）。

その体はきつと) So as I pray、――

「――剣で出来ていた」 unlimited blade
works)「」

side out

『stage41:ラストダンスとまいるつか・・・innふえいと』（後書き）

どうだったでしょうか？

コウジュがラスボスという落ちですww

最初からこの構想はあったのですが、間にちよこちよこネタを挟んだら大変な量に…

やりたい事やった感がかなりあると思います。

けど、反省はするが後悔はしてないというやつです（＾Ｏ＾）／

それにしても、書けない事を思えば自分自身量が増えるってのはかなり嬉しいんですが、結局エピソードは別という事に。

あと、戦闘後にどうしたかっていうのもですね。

Fateラスト…連続で出した方が良いでしょうかね？

今まで何度もお待たせしてるわけだし…。

ふむ…とりあえず文章見直しかしながら、出来次第出します。

では、今回もこの辺で ノシ

P . S .

前にもした質問なんですけどコウジユの現時点でのスキルとかステータスって見たい方っていらっしゃるんでしょうか？いらっしゃるようなら喜んで書きますゝ（＾o＾）

多分あとがき辺りにですが。

『Stage 42：ハッピーエンドが始まった・・・innふえいと（終）（前

お待たせしました！！

ふえいと編終了です！！

予想外の展開等々、“どうしてこうなったww”がいつにもまして多いかもしれませんが気にしないという方はどうぞお進みください。

では、後書きにて…。

『Stage42：ハッピーエンドが始まった・・・innふえいと（終）』

side：コウジユ

「誠に申し訳ありませんでした・・・」

わこつです。間違えた…こんちゃです。

現在土下座中です。

理由は勿論、あれですよ。

——暴走——

うん、暴走しちゃったんだな

わあわあごめんなさい！！反省してるから叩かないで！！はうあう
…。

ついさっきのことだ。

ふと気づいたら辺りは何も無かった。

な、なにをいつてるのk（ry ……っとこれは最近やったからまた
今度な。

とにかく暴走したと思った瞬間からの記憶が無くて、意識が戻った

ら辺りのモノが色々なぎ倒されている、というか無くなっているという状況だった。

あの美しかった柳洞寺の庭はもうどこにもない。

白砂利が敷き詰められ、清流を幻想させる庭はどこにも…。

周囲を覆っていた木々達も全てが地面ごとなぎ払われ、土砂災害かと言わんばかりに掘り返されている。

そして、柳洞寺の本堂やそのほかの建物――

――そんなものは無かった。

本当にそこに建物があつたのか疑問を持ってしまふ程にそこには建物を構成していたのであろう何かが少し残っているだけだった。

「本当に危なかったのよ？私があらかじめあなたから魔力供給と『フォトンチャージ』のカードを受けていたから良かったけど」

そう、不幸中の幸いというか、こんな事になつてしまつてはいるがこの周囲には結界が張られている。それも、かなり強力で俺も概念操作やらで手伝つて謹製のモノだ。そうでもしないとこの最終戦はかなり不安だった。いつだったかアーチャーに語つた俺が敗北する可能性の一つである“自爆”が特に心配だったのだ。

俺がギルガメと戦つた際に、何か不測の自体が起こつた時、俺が冷静に対処できるかどうか。下手をすれば、何かが暴発してここ周辺

どころか冬木市がアボンの可能性が高かった。

最初にギルガメとの戦闘時に案外イケるかもという自信はついたが、不測の事態というのは予測が不可だからそういうのであって、実際に俺がそれに対処できるかと考えたら……察してくれ……orz

なんやかんやで、俺は概念の操作を軽く使っているように感じるだろうが実際は違う。

それでも細心の注意を払っている。

高ランク武器の概念は本当に半端が無いんだ。

それを俺が戦闘時に焦って出したら……考えるだけで汗が止まらな
つての。

さっきは冬木市が……なんて言い方をしたが、高ランクには惑星斬りの概念を含むものもある。

俺自身は使う事のない様に祈っているが何かの拍子に出したら聖杯戦争がどうか言ってる場合じゃない。

ここでキャスターの結界の話に戻るが、キャスターと共に層をズラすタイプの結界をここら一帯に予め張ってあった。最初からキャスターが張ってあった柳洞寺の結界に紛れ込ませるように細工してだ。

ギルガメやマーボーが人払いの結界を張るとは到底思えないので、そういった意味もちろん含んでだ。

向こうはキャスターは死んだと思っていたから、元々の結界に対しても精々結界が地脈の上にあるから残っている程度にしか考えなか

った筈だ。

その所為で衛宮邸に回していた結界の術式や制御とかも柳洞寺に張る方に回したので、言峰が衛宮邸に侵入する時に防御が薄すぎて気付くかと思ったが、杞憂だったようだ。

とにかく、今回張った結界にキャスターには全力を尽くしてもらった。

戦力を削ってもそうする必要があったからだ。

まあその結界も俺が暴走した所為でほとんど削ってしまったらしいんですけどね…。

ナノブラストには制限時間がある。当然、暴走状態でもだ。

それがあつたのも助かった要因らしい。

ゲームでは短くて不満を持つ事もあつたけど、在って良かった制限時間！！

「まったく、なんでナノブラストを使っちゃったのかしら…」

イリヤが呆れた風に、はあ…とため息一つ付きながら言う。

「えっと、そういえばなんでだろ…？最初は普通に闘ってたんだけど…」

普通についていう部分に自分でも疑問を持つ。

だってチートだもの。

普通って言葉を俺が使ったらダメな気がする。

それはおいといて、普通ってのはアレだ、いつもの人の姿ってことな。

「よくよく考えたら獣化した時って結構おぼろげだなー。闘ってる最中にいつものごとくより獣のごとき動きで速く速くって斬りまくってたら身体が熱くなってやけにテンションが高くなって…」

「もろにそれじゃねえか…」

疲れて座っているランサーがホントに疲れた声で俺に言う。

「ごめんなさい…」

獣のごとく獣ごとく…で、獣になってしまったというオチか。

あれ、これって結構シャレになんかね？

俺の基本スタイルが獣の柔軟さだから、熱戦になる度に獣化してたらヤバイどころの話じゃねえじゃん…orz

これは修行かなー…。

あ、そういえば根本的な事を説明してなかったぜい。

本来、PSP02での獣化ナノブラストというのは俺の現在の種族たるビーストの必殺技的なものだ。そして、そのナノブラストにはいくつか種類があつて、その内のいくつかが暴走状態というものになる。暴走状態になる方法はランダムだ。特定の設定をして、ナノブラストを使用する。そしてそのナノブラストの制限時間終了時に低確率で暴走状態に移行する。

そして、暴走状態と通常時で何が違うのかというと、通常時に比べ、暴走状態では飛躍的に攻撃力が増し、フレンドリーファイアというものが発生する。つまり、パーティープレイなどをしていると、本来攻撃判定の対象にならない筈の味方にも攻撃が当たってしまうのだ。それも、先に述べた様に攻撃力が大幅に上がっている状態だから下手をすれば即死となる。

プレイが上手な人ならば、その暴走状態も上手く利用してしまうわけだが、今は別の話だ。

で、その暴走状態なんだが、俺の場合、フレンドリーファイアがどうとかじゃなく、文字通り暴走状態になるようなのだ。

暴走時は意識が飲み込まれ、ただ破壊をまき散らす。

どうしてそんなに詳しく知ってるのかって？

そりゃ当然以前にもあつたからさ……orz

それは本当に偶然だったんだ。

イリヤに付き合つて俺も修行してる時に、ナノブラストを使う機会があつてそのときになつちまつたんさ。

暴走時は基本的にこの身一つで破壊の限りを尽くすんだが、それでもその時使っていたキャスターの神殿は崩壊してしまった。

その時もかなり怒られたね。

イリヤとか、死にそうになったおかげでやけにカード使用時の違和感が無くなったと言いながら俺に剣の雨降らせてきた位だ。

い、いやー強くなれて良かったね？

「えい！」

「痛っ！！？何すんのさ！？」

「えっと、何か無性に腹が立って…」

イリヤに殴られた（泣）

それにしても、ホント修業しないとやばいなー。

俺を迎撃する為にアーチャー達が色々したとはいえ、俺って能力無使用のこの身一つでこの惨状作っちゃってる訳だしさ。

ホント結界張っててよかった…。

「……………」

あ、忘れてた。

ミノムシマーボー神父が足元に転がっている。

さっき捕獲したやつだね。

ちなみにイリヤ（変わり身）は俺が持っている（倉庫の意味で）。
一応聖杯ではなくなったとはいえ、魔術の意味は高いからな。

「それどうするの？」

凜が指差しながら聞いてくる。その目はとても冷ややかだ。それも仕方ない。幾ら魔術師として父親の弟子、つまり凜の兄弟子に当たる人物でも血まみれにされたらそうなるだろう。理由が理由だしな。

「すっかり忘れてた」

まずは言峰をどうにかしないと。

俺はある宝具を呼び出す。

「来い、魔弾ミストルテイル」

呼び出したのは片手銃のハンドガン一つ、魔弾ミストルテイル。

ハンドガンとは言うが、これは銃の形はしていない。

フォトンで出来た光球、そしてその台座、それらを3つの少し丸みを帯びたブレイドが包むようにして在り、銃身を造っている。

込められた概念は、『生けるもの全ての生死を分かち力を持つ、天命を授かりりし短銃。この銃に射抜かれたものは運命の選択を迫られ、その決断によって魂が正しい場所へと導かれる』というもの。

それを俺は言峰に向かって構える。

「お前の罪はお前が償え、言峰」

バンツという音と共に、弾丸が発射され言峰に当たる。

「……!!?」

着弾した瞬間言峰は、気絶したのか、ぐったりとしてしまう。

「コウジユ、何をしたの?」

イリヤが恐る恐る問う。

何故にそんな引き気味に聞くんですかい?

そう疑問に思ったが、よくよく考えたら目の前で人が撃たれたのだ。恐る恐る聞いてしまうのは無理もない。いくら魔術の世界では非道な事が多いと言ってもここまであからさまなものが目の前で起こったのだから仕方ない。

「あの皆さんそんなやつだったみたいない目で見ないでくださいな。別に殺してないから」

俺がそんな風に弁解していたら丁度良い事に言峰が目を覚ましたのか、もそもそと動き始める。

「ほ、ほらな！！大丈夫だったじゃんよ！？」

「・・・・・・・・」

ジトーとした目で見られる。

すみません、若干不安でした…。

そんなことはさておき、起きた言峰のロープや、口元を縛っていたものも全て外す。

「ちょ、外していいの！！？」

凜が驚いて言うが、大丈夫だ、問題無い（キリッ）。

全て外した言峰は何もしゃべらない。

「あれ…?」

何も言峰が話さないの、やっぱり何かミスったのかと思って首をつい捻っていると、突然言峰がシュバッという効果音と共に正座をしました。

「すまなかったあああ!!!」

そしてそのまま、額を地面にこすりつけて土下座をした。

それはそれはもう見事なDO GE ZAだ。

思わずザ・ワールドが起こっちゃう位にな。

「大成功!!」

しかしながら俺的には大成功なので何も文句は無い。

「ほんとおおにすまなかったあああ!!!」

嗚咽交じりに言峰は土下座を続行中。

周りの人間は全員未だ復帰できていない。

「って、どうなってるのこれ!!!?」

最初に復帰したのは凜だった。

俺に詰め寄り、現在進行形で土下座中の言峰を指差しながら問うてくる。

「ならば教えてしんぜよー」

はたかれた…（・ω・）

「ごほん、えー、俺が言峰にしたのは言峰の感情の歪みを弄ったって言えば良いのかな…」

「歪み？」

他のみんなも既に復帰しており、俺の話を聞いていた。士郎の疑問に答える為に俺は続きを話す。

「歪みって言うっても俺の主観的なものになるんだけど、言峰の中の判断基準ってのが大多数の人間と根底が違ってしまっている結果、今回みたいに死の瞬間の人の輝き見たいとかって考えに至ったと思うんだ。」

だから、俺は言峰の中のそういった悪感情を反転させて道徳心とかそういうのを当社比大幅アップってところさね」

「それをしたから…こんな言峰になったのか…？」

「That's right!!」

つまりアレだね、映画だと突然良い奴になる少年になぞらえて言うのと、綺麗な言峰だね。

名実ともにキレイになれて良かったね♪

自分のしょうも無さに泣けてきた…orz

「ああああ、私というものはどうしてこんな事を…！」

土下座していた言峰はいつのまにか膝立ちになって空に向かって懺悔的な事をしていた。

「私一人の命で釣りあうとは到底思わないがこうなったら私の命を捧げ——「やめんかい！！」ぐふ！？しかし！！こうでもしないと…！」

言峰はいつのまにか持っていたナイフで首を掻き切って自殺しようとしていたので思わず殴って止めた。

同時に腕だけロープで再び縛り、拘束する。

俺は言峰正面に行き、話を続ける。

「あんたの罪は消えねえし、あんた1人が自殺した所でどうなるってもんでもねえ」

「そうだ、私はたくさんの人を…人を…本当に何という事を…！！」「うるせよ！」がふっ！？」

目の前に居るのにいきなり大声で叫びながら泣くから再び叩いてしまった。聴覚が良くなってる事もあったのだからかなりうるさかった。

耳キーンてなってるし。

「だから、よく聞け言峰。俺はあの教会でお前とギルが弄んだ子達と接触する機会があった。そこで話をしたが、あの子たちはかたき討ちをしてくれて俺に言った。けどな、一言もあんだ達を“殺してくれ”とは言わなかった」

「それってあの地下の…」

士郎はあの地下礼拝堂に行ったから俺が何の事を言ったのか気づいたのだろ。士郎は幽霊の子達を実際に見た訳ではないんだろ。それでも、子どもたちを弄んだという結果はあそこにあった。

“かたきを討つ”、この言葉本来の意味なら殺してくれていう意味になるんだろ。あの子達が言った言葉に“殺してくれ”の意味は含まれていなかった。俺の思い込みで言われたらそこまでだが、ホントに短時間とはいえ、それ位は分かったつもりだ。ボコボコにしてくれとかは結構言ってたが…。

「だから俺はあんだを殺さないと決めた。あんだの感情を弄った事が本来のあんだを殺したっていう事にもなるとは思っし、ただの詭弁だとも思う。」

けど、あんたはここで今生まれ変わったんだとそう信じたい。そして、残りの人生を全てかけて償え。何をして償えとは言わねえ。けど、あんたは生きて償うべきだ」

「ああ！！分かった！！この身この全てを掛けて償いをし続けよう！！」

俺は言峰を縛っていたロープを切り、言峰を自由にする。

「では、一分一秒も惜しい！！さっそく行ってくる！！！」

次の瞬間には言峰は走り出し、その場を去った。

「すまん。凜とか士郎も言峰に対して色々言いたい事も、どうしようもない感情もあったろうけど、俺の勝手でこうしちゃった…」

俺は士郎達に顔を向けずに言う。

親が死んだ要因でもあるし、あの大火災を起こした張本人だ。それに、直接殺されそうにもなっている。思う所などいくらでもあるだろう。

こうしたのは俺の勝手だ。

自己満足で、自己中のな考えで、人道的な部分でもやっちゃいけないことをしてるんだろうなと考えつつも結局自分の思うようにやってしまった自分に自己嫌悪をしていると頭の上に何かを置かれる。

「わふっ…ん？」

何を置かれたのかと思い手をやるとそれは士郎の手だった。

というか、なんか犬っぽい声を出してしまった。意識なんか当然し

てない。俺もとうとう末期か？

「別に俺は良いよ。遠坂は？」

「私も良いわよ。というか、例えばの話この状況で私がダメって言うとかどれだけ鬼畜なのよ」

「2人とも…」

「確かに思う所が無いって言ったら嘘になるけどさ、でもあいつはもうあの惨劇を起こそうとはもうしないんだろ？」

「うん。それは確実。あとで何かあっても大丈夫なようにもするつもりだし」

条件で発動する呪い系の魔術とかそういったモノをキャスターに依頼するか自身でどうにかしようと思う。

概念操作の際にかなり強力に願ったから大丈夫だとは思うが念の為

「なら良いさ。俺は惨劇を止めたかったただけだし、少なくともこの結果誰か助かる人が増えるなら良い事だろうしな」

「腹を刺された身としては一発思いつきり殴りたかったところだけど、まあ仕方ないわね。許すつもりは到底無いけど、これはこれで良い事なんでしょう」

俺は目元をぬぐい、2人をしっかりと見る。
そして頭を下げる。

「…ありがとう」

「お礼なんてする必要ないさ。な？」

「ええ、これは私たちが納得しただけなんだから」

良いと言われたが、もう一度心の中になるが大きくお辞儀し、ありがとうとお礼を言う。

「あのー、空気読めない発言になるので悪いのだけど、僕はどうすればいいかな？」

学校で先生に質問する時のように片手を上げて言うシヨタガメッシュ。

そういえば、忘れていた。

ギルガメッシュはシヨタ状態の時自動で良い子になってしまうのでミストルテイルで撃つ必要はない。

どういう理屈かは俺にもわからないんだが、確か…原作のhow編だったかで、何故かシヨタ化しただけで良い子になって町の子とサッカーしてた筈。

それをうる覚えだが頭の中にあっただけで試してみたら大正解だった。原作でシヨタギルが大人ギルの事をどうしてあんな性格なのか分からないと言わしめるほどだった筈。

はあ、どうせなら全編やつとくべきだったな…。

で、そーいやってなかったけどギルがシヨタ化した方法は、いつもの如くスケドを使ったのではなく、今回はキャスター作の医薬品を使用した。

ギルガメッシュは泥を浴びて既に現界し続けることが可能になっている。

それでも魔力を一般人から奪っていたのは自身の理由としての能力というか、真名解放などの魔力使用に対して必要だからだと思う。スケド使ったら自己発電が容易とまではいかないがサーヴァント時より効率よく行えることは確かだ。

だから、何か他の方法を考えていたらキャスターがこれを使えと渡してくれた。

どうも製作途中のものらしいのだが効果は確実というもので、何かドロドロした緑色の液体Xをビーカーで見せてくれた。

曰く、アンチエイジングの為らしい。

スケドで復活し、受肉した場合、身体は成長していく。つまり老いがあるのだ。

あんたまだ見た目少女じゃないかと言ったら、殺されそうな目を見た。

あなたも女の子なら今からしときなさいと何故か俺の分まで渡されたのは別の話だ。

でまあ、ギルガメツシュにそれを使う事（人体実験？）が決まり、実際に使ったみたいだが、もくろみは成功。推測でしかなかった部分もその通りに進み、万事okだ。

そしてシヨタギルをどうするのかというところ…。

「シヨタギルくん、君にはやってもらいたいことがある」

俺は今までのシットリ気味の空気を振り払うように、腕を組みながら不遜な態度を取る。

「シヨタって…まあ今の僕はそうですけど。それで僕にやって欲しい事というのは？」

「まあちよいとした手伝いさ。あとで詳しく言うよ。これはあんなにしかできない事だからな」

すまんがまた後でって事でな。

その前にやることがあるんだ。

了承してくれたのか微笑むシヨタギル。

素直でええ子や〜。

何であんな慢心王になるのかホント不思議。

ってなわけで、今回の聖杯戦争の締めとして最後にもう二つハッピーエンドを迎えよう。

まず一つ目、対象はイリヤだ。

「さて、俺には後もう二つこの場でやらなければならない事がある」

「どうしたの？突然」

俺のいきなりの話の転換にイリヤがそう言う。

今からする事はイリヤにも言っていないから当然だ。

「俺はさっきツミキリシリーズを使って、それを媒体にアンリマユと化していた穢れた聖杯を斬りまくって自身に取り込み続けた。もちろん浄化しながらな。」

さて問題です。聖杯はどこへ行ったのでしょうか？

「あなたまさか！？」

イリヤがすぐに気付いたのか驚きながら言う。

イリヤが気付いた事は正解だろう。というか俺が分かるように言ったのもあるだろうが正解であろうことは確実なので、全てをイリヤが言いきる前に俺は続ける。

「ピンポーン。俺の中にあるんだよ聖杯ちゃん。むしろ俺が今聖杯？みたいな」

俺は2本のツミキリを使って、それを媒体にアンリマユを喰らった。俺がずっと『喰らう』と言ってたのはこの事。

浄化した状態なので、本来の聖杯としての機能がある。つまり願望器としての機能があるのだ。

願いを叶えてしんぜよう。ほっほっほ。

…このキャラが俺に合うことは一生無いな。

「嘘だろ…」

「信じられない…」

士郎と凜が驚愕の声を上げる。今まであれこれしてきたけどさすがにこれは信じられないか。

あ、他のサーヴァント達にはもう言っている。だから驚きはしない。シヨタギルは信じられない様な眼をしているが。

俺はそんな風に驚いてくれた士郎達を傍目にある剣を出す。

「来い、『聖剣エルシディオン』」

出したのは、いつだったかアインツベルン本家で結界をぶっ壊してしまった時に使った聖剣、エルシディオン。

「それは…」

イリヤが見覚えがある剣に声を出す。

「今聖杯は俺の中に溶け込んでる状態だからな。こいつを使って明確な形として使おうと思った訳さ」

未来をつくる概念の拡大解釈になるが結界の時もいけたし大丈夫だろう。

よくよく考えたら聖杯取り込まなくても俺自身の能力で願いを叶えられるんじゃない？と考えた諸君。それは半分正解だが半分間違えだ。確かに、貰った能力を駆使すればどんな能力も叶えられるかもしれない。

けど、俺は駆使できないんだ。

今の俺では『幻想を現実に帰る程度の能力』は足かせでしかない。何度も助けられたのは事実だけど、この能力は確信に近いモノが無いとマイナス部分の思考がどんな結果をもたらすかわからないんだ。貰った当初チート乙wwとか思ってた自分が恥ずかしい。今の俺が乙だなorz

で、話は戻るが、何故聖杯を取りこんでいる状態だとオツケーなのかというと、俺は完成した聖杯はあらゆる願望を叶えるという事実を知っているから、その事実を理由づけとして願いを叶える訳だ。

自分でも何が言いたいのがよく分からないがニュアンス的にはそんな感じ。要は、確信があれば良いってことだ。

練習っていう事実もまた確信を持っていくのに大事な事だが、それじゃあどれだけかかるのか分からん。だって求めたい結果があらゆる願いを叶えるだし。

とにかく俺は今、一つだけ願いを叶えることができる状態だ。

それを今使用する。

「で、だ。俺は今この聖杯を使いたいんだが、使うに当たって一つ、セイバーに聞きたい事がある」

「な、なんでしょうか？」

セイバーの方に目線をやると、少し前からの驚きの連続で色々と処理しきれずにキョドっているセイバーがそこに居た。

ごめんなさい俺のせいですね。

後悔はしてないがな！！

「セイバーに聞きたい事つてのは、セイバーはこの聖杯戦争の勝者な訳でこれの所有権は本来セイバーと士郎にある訳だ。つまり、セイバーの願いをどうする？士郎もな」

忘れている人もいると思うがこの聖杯戦争の勝者は士郎・セイバーチームだ。

他の部分が濃すぎて、あ、そういえばって感じなのは俺の所為なわけだけど…。うん、ごめんなさい。

ホント謝ってばっかだな俺。数えたら大変な数になりそうだ。

「私は、いいません。私が叶えようとしていた願いはもう必要ない。そう気が付きました。

私の国は滅びるべくして滅びたのだと。

私は良い王ではなかったかもしれない。だけど、その事実を消してはならない……と」

「俺もいらないよ。俺が叶えたい願いは聖杯を使って叶えるべきものじゃないしな。」

「っていうか、セイバー前にも言ったけど、セイバーは良い王だぞ？少なくとも俺はそう思うし、歴史もそう言ってくれてる」

「士郎：／／」

「イチャイチャ固有結界を発動する2人。砂糖を吐きたくなる甘ったるさだ。」

「サーヴァント勢は経験豊富な様で若いねーっていう目で温かく見守っているが。」

「俺はそんな経験豊富ではないので甘々空間に当てられている。」

「「」ほん！！」

「「」／／／」

「気付いてくれてようでナニヨリデス。」

「んじゃ、この聖杯は俺が使っね？答えは聞いてない」

「何でそうなるのよ！！」

バシン！！

「はうあっ……」

また叩かれた…。

「あのねえ！聖杯っていうのは…」「エルシディオン！！願いを叶えるぞ！！」って聞きなさい！！」

長くなりそうだったので次に行きますww

勿論、願いの対象はイリヤ。最初に言っただようにな。

「イリヤに人としての寿命を俺は願う」

願ったのはイリヤの身体がホムンクルスから人の身体になる事。
ただ寿命を延ばすだけならイリヤの人格を人形に入れればよかった。
けどそうしなかったのは俺のわがまま。

イリヤの身体は、切嗣氏とイリヤのお母さんであるアイリスフィールの愛の結晶だ。

だから、その繋がりを無くしたくはなかった。

ホームクルスではなくならない事がアイリスとの繋がりがなくなる可能性に繋がるとも考えたが、そこは聖杯だ。ご都合主義位叶えてみせるだろう。

「コウジユ…あなた最初から…」

「んとまあ…そういう事さね／＼」

イリヤを優しく光が包んでいく。

そんなイリヤの方を向くと、イリヤは驚いた表情で俺の方を見ながらそう言った。

俺は自身の頬が熱くなるのを自覚しながら、恥ずかしいのでそっぱを向く。

そっぱを向いた方に居たサーヴァント勢にニヤニヤした表情で見られたのが不愉快だったが、まことに不愉快だったが、まあ甘んじて受けるとうしよう。

イリヤを包んでいた光が晴れる。俺は自身の中から何かが無くなった感覚と共に、終わったのを感じて安堵のため息と共に聖剣をしまふ。

「っ!!」

直した瞬間イリヤが抱きついてきた。

俺の方が身長が低いとはいえ俺は仮にもサーヴァントとして召喚された身、危なげなくイリヤを抱きとめる。

「ありが…とう…／／」

「気にすんな。これは俺の願いでもあったからな／／」

涙交じりに、そうイリヤに感謝され再びますます頬が熱くなる。

「それでも…ありがとう」

「ん…」

これでイリヤは少なくとも平均的な人間の寿命ぶんくらいは生きれる筈。

事故とかでもない限りだが、その辺は大丈夫だろう。事故で死ぬ魔術師とか想像つかねえよ。

「これでイリヤの身体は子どもでもできるし、良い婿さん貰ってラブラブ私生活でも送りな」

「ばかコウジユ…／／」

涙を流しながら微笑むイリヤはホントに可愛かった。

うん、俺も頑張った甲斐があったってもんだ。

こんなに可愛いイリヤが婿さんを貰えない訳が無いww

「なんだか、助け出されたお姫様と騎士みたいね」

「確かにな。両方とも姫さんみたいな外見だが」

「ふふ、確かにな…」

キャスターにランサー、小次郎が俺達を茶化す。

「…／／」

「…固有結界使ってやろうかしら…／／」

そんな三人に俺はただ恥ずかしくなって帽子を深くかぶるだけだった。

イリヤは照れかくしに物騒な事を言ったがただの照れ隠しなのでホントに発動する事は無いだろう。ないよな？

「つと、そろそろかな…？」

照れたまま固まっていた俺達だが、俺はもう一つの要件を思い出し、イリヤの頭を一撫で（俺よりイリヤの方が背が高いのでやりずらか

ったがそこは意地だ）して離れる。

さて、次はセイバーといこうか。

俺はセイバーの方に向き直る。

その時にはもうセイバーの身体を淡い光が包んでいていた。

「セイバー……」

「そんな顔をしないでください。私はこの聖杯戦争に呼ばれて幸せでした。答えは得ましたから……」

そう言い、優しげに微笑むセイバー。

セイバーを光が包んでいつているのは、セイバーの現界を維持していた聖杯が無くなったからだ。

つまり、セイバーの身体が帰ろうとしている。

他のサーヴァントは既に受肉しているがセイバーはそうは行かない。

そんなセイバーの姿を、士郎は言い表しようもない表情で見ながら、セイバーの手を握る。

「士郎、凜も……ありがとうございました。コウジユにも、心からの感謝を……」

「礼を言われるようなことはまだしてないよ」

「これで…お別れなのか…？」

「はい。聖杯が無くなった今私をこの時代に結びつけるものは無くなりました。私は自身の時代へ戻ります」

「コウジユー!!」

士郎が俺の方を向く。

士郎は俺にスケドを使って欲しくてこっちを向いたのだろう。

けど、無理だろう。

「士郎、セイバーの身体はまだセイバー自身の時代で生きてる。スケドは死ぬ寸前で回復させるものだ。幾ら向ここのセイバーが死にかけてるって言っても…無理だ」

何度も同じことを言うようになるが、俺が疑問を持ってしまっている。確信が無い。

「くっ…」

「士郎…仕方がないではないですか。確かに、王としての使命が終わっている以上、私がこの世界であなたと共に居るのも良いのかもしれない。」

私自身、前の私では考えられませんがそれを望んでいる。

しかし、コウジユの言った通りに私の身体は遥かな時代を挟んだ向こう側にあるのです。

そして、聖剣を賜った身として最後にしなければならない事もあります」

セイバーの身体は既に、今にも消えそうな程に光に包まれている。

「セイ…バー…」

士郎は思いつき、最後だと言わんばかりにセイバーの身体を抱き寄せる。

「お別れです、士郎。あなたに出会えて…、あなたを愛せてよかった……」

士郎が離れる。そして目元を拭い、精一杯の笑顔でセイバーを見送る。

「俺もだ！セイバーに会えてよかった。そして俺も愛してる」

そしてセイバーを包んでいた光は一層強くなり、セイバー自身が光となって消えていく――。

s i d e o u t

s i d e : 士郎

セイバーが消えてゆく。

俺は、今にもこぼれ落ちそうになる涙を必死に我慢し、笑顔でセイバーを見送る。

この柳洞寺に来る前にもセイバーと少しだけ話をした事を思い出す。
コウジユが何をするかは分からないが、そのままを受け入れようと。
別れる事になっても、それが俺達の…運命だから——。

「ところがどっこい！―そうは問屋が下ろさんです！―」

コウジュがツミキリシリーズの内、どれかは分からないが二本を左右に持ってセイバーの服の裾を持った。

「な！？コウジュ！？」

「行くよツミキリ・ヒョウリ！―」

次の瞬間、セイバーとコウジュは消えた。

「え…？」

思わず呆けてしまったが仕方無い事だと思う。

「たっただいまー!!」

「ただいま…戻りました…orz」

俺が呆けて（遠坂もだが）しまつてすぐ、一分程で2人が再び俺の前に居た。コウジユはついさっきまでと同じでよく分からないテンションで、セイバーはとてつもなく疲れた姿で。

「なんでさ…」

ホントに訳がわからない。

え、どういう事なんだ？

なあ!?

「ホントどういう事なんだ!？」

俺は思わずコウジユに詰め寄り、肩を持って揺さぶる。

「おおぅ!?!は、離すから…話して…!ち、違った…話すから離し

て！！！」

コウジユが何故言い直したのか分からないが、確かに揺さぶったままじゃ聞けないのも確かだ。

「で、どういうことなの？」

いつの間にか俺の隣には遠坂が居た。遠坂も気になるのだろう。

「何をしたかというと簡単！！セイバーの時代に一緒に行って現場でスケドを使っただけ」

語尾に音符が付いているかのごとく可愛らしくコウジユが言うが――

――許さない。

俺はすかさずコウジユの両方のこめかみにグーにした拳を当て、ぐりぐりと高速でする。

「にあああああつ！！！！！！？」

相当痛いのか、俺の手を持って話そうとするが俺は離さない。

俺は女の子に手を上げるのはしたくないんだが、これはそう言ったレベルの話では無い。

というか、これはコウジユが俺にさせているのだ。うん。

「酷いよ士郎……」

手を離れた瞬間に、涙目で頭を押さえてはうあうと言わんばかりに

コウジュは座り込んでしまう。

「……コウジュが悪い（わ）（です）……」

遠坂とセイバーと声が被る。皆も思っていたようだ。

「なんで教えてくれなかったんだよ」

「うぐ…ぬか喜びさせたくなかったんだよう。俺時代超えれるとか本気で思わなかったし、超えてもセイバーの元にちゃんと行けるかどうか分からなかったんだよう…。確固としたイメージが無いとどこに飛ばされるやら…。まあセイバー自身を指標にしてなんとか行けたけどさあ…。帰りは士郎の中の鞘をセイバーに強くイメージして貰ってなんとか…。うう痛い…」

まだ涙目で頭を押さえているコウジュはそう言う。

「ってことは、悪い事をした？」

時代を上手く超えられるかって事は下手をすればその失敗した時代に取り残されたかもって事…だよな…？

「う、ごめん…！」

俺はすかさず謝る。

「良いよ、別に。言わなかった俺が悪いし…」

少し拗ねるようにそう言うコウジユ。

ゴメンな、ホントに。

「どうせなら謝るんじゃないくて、ありがとうを言って欲しいな。これで、士郎とセイバーの思いが成就する訳だしね。」

にししといった感じに笑うコウジユ。

それならと俺も、セイバーもコウジユの前に行く。

「「ありがとう。コウジユ」」

精一杯の礼をする。

「ふふん、どういたしましてどういたしまして」
これで名実ともに感謝の念を堂々と受けられるってもんさ。さっきは“まだ”何もしてなかったからねえ」

なるほど、それであんな妙な言い回しをしたのか。

セイバーの事で頭がいっぱいでその場では流してしまったがそういうことだったのか。

もう一度言うよ。

ありがとう、コウジユ——。

S i d e o u t

S i d e : コウジユ

いやー何とか成功して良かったぜい。

正直出来るかどうかは五分五分だった。

ツミキリ・ヒヨウリは予想以上に素直に俺の言う事を聞いてくれる。
だが素直すぎて、俺がちよつとでもイメージに失敗すると大変な事になる。

さすがにちよつとは練習したんだが、それでもしたのは空間を越える事だけで、時間を越える事はしなかった。

ぶつつけ本番だったが、なんとかなって良かったよ。いや、マジで。

と、言う訳で——！！

「ハッピーエンド！！！！！！！！」

俺が当初考えていたハッピーエンドとは違うが、それでもこれはハッピーエンドだ！！だよな！？ですよね！？

文句ある奴は後で職員室に來い！！俺は居ないけどな！！

兎にも角にも、これでハッピーエンドだ。

正確にはハッピーエンドの始まりになるんだろうが細かい事は置いて！！

この嬉しい気持ちをどうしてくれようか！！

今のも踊り出してしまいそうだ！！

『テテテテーテーテーテッテテー』

おや、何の音だろうか？

一瞬マジで何の音が分からなかったが、そう言えばこれって俺の携帯じゃね？

久しぶりで懐かしさすら感じるよ、このFFのレベルアップ音。

「お、FFの戦闘終了時の音じゃねえか。聖杯戦争終わったと同時に鳴るとかしゃれてるなあ」

ランサーが俺の方に来てそう言う。

え？これレベルアップ音違うん？

節子…それレベルアップ音ちゃう！戦闘終了音や！！

そんな風に頭で流れた。

え？マジで？マジで違うの？俺、これが鳴る度にレベルアップ音がどうたら言ってたような気がするんだが…？

にわかでFFやってるからこんな事になるんだね…鬱だ…orz

「……orz」

「ど、どうした…？」

「うつん、なんでもない。ただ、過去の自分をぶん殴りたいだけ…」
「それは大丈夫じゃねえよ…」

まあとにかく内容を見るか。

『おめでとう。汝の願^{なれ}いが叶った事を我も嬉しく思うのじゃ。
さて、さっそくじゃが本題に入らせてもらおう。

クリア特典と言わんが、汝に良い事を教えよう。

汝に『虚無』『混沌』の適性が現れた。前者は汝がレベルアップしたからプレゼントみたいなものじゃ。後者は…汝、泥に当たったじやろ？どうやらその時にラーニングしてしまったらしく、どういふ事が汝に適性が現れてしまった。

とはいえ、まだ両方とも適正ではない。使いこなすには当然修業は必要じゃろ。頑張るがよい。

P・S・

適性ではないとは言ったが、縁が出来た事には変わらない。

何かの拍子に暴走させんようにの。正直何が起こるか分からん。

P・S・2

この度めでたく汝の称号が“神様見習い（笑）”から“神様見習い（混）”になったのじゃ。喜ぶが良い

P・S・3

汝には次の世界に行ってもらふ必要があるんじやが、10年で全て

終わらせるがよい。次が迫っておるので申し訳ないが10年じゃ。

ではの』

え？

『虚無』と、『混沌』？

メールを見て固まるしかなかった俺。

そんな俺は足元の自体に気付かなかった。

「コウジユー！！足元！！」

キャスターが突然俺に向かって叫んだ。

何だろうと思って、メールを見てフリーズしかけていた頭でありながらも足元を見る。

「なんぞ！？」

俺の影が質量をもったかのように蠢き、そして膨れ上がる。

「え、ちょ、マジで何これえ！！？」

叫ぼうとも状況は変わらない。

周りの誰かに助けを請おうと見回す。

しかし既に全員が少し遠くに離れて避難済み。

この薄情者おお!!!

そう叫びそうになる直前、蠢いていた影が突然止まり、ただ膨れ上がる。

そして――。

ペッ！

影は生き物のように何かを吐きだした。

『ええええええ!!!!!!?』

全員で驚愕する。

何せ、その吐きだされたのは――。

「おお、ここはどこかいのう……?」

プルプルと震えるお爺さんだったからだ。

っていうか、この人って桐の蟲爺じゃねえか！！！？

俺が一条祭り送りにした奴！！

なんか普通のおじいさんになってるし！！

ど、どういこと！？

俺の頭の中はホントにフリーズしかけだ。

何が起こっている！？

しかし、このカオスな状況は更に追い打ちをかける。

ヒラヒラと、頭の上の方からカードが二枚ゆっくりと落ちてくる。

俺はとりあえずそれを取って、そして見た。

後悔した。

喰符『全テヲ喰ライ血肉トス（ワタシオマエマルカジリ）』

喰符^{キヨム}『無限・虚無世界（ヴァニティワールド・ジ・アンリミテッド）』

——と、それぞれそう書かれていた。

嫌な予感がする…。

むしろ嫌な予感しかしねえッ！！！！

え、何これ。ねえ何なの！？

俺作ってないよ！？

どこから出てきた！？

そして何が出てくる！？

っていうか私！？女の子！？

どういふこと?!?!?

いや、もちつけ俺…。

じゃなかった、落ち着け…。ビークール…。Be kool—

——よし。

整理しよう。

俺は今何の因果か、『混沌』ならびに『虚無』という属性を手に入れたわけだ。

そして称号も神様見習い（笑）から神様見習い（混）へとランクアップというかむしろランクダウンでしかないものになった。

よし、ここまでのツッコミどころ。説明中に既に思わず突っ込んだ気もするが、今は置いておこう。

まず、何故『混沌』、『虚無』なんて属性を手に入れたんだ？

まず『混沌』はメールにもあったように泥に触れたからラーニング
って事だよな。

何その御都合主義。

しかもいらねえよ。有難迷惑だよこの御都合主義は。クーリングオ
フは無理？これほど知らない御都合主義は初めてじゃないかな！？

混沌って何だよ。

そして落ちてきた、スペルカード。

いくらなんでも物騒すぎるわ！！

それに、ワタシ！？さっき俺の影が生物みたいに動いてたけどひょ
っとして関係ある！？女の子なの！？性別あったの！？俺の影どう
なってるの！？

そして次、『虚無』。

虚無って何だよ。

いや、意味は分かるぜ？

けど、混沌に増してまずいものしか思い浮かばん。

例えば、桃色爆発小娘だとかなっ!!

他にも…、魔王…とか…。

っていうか、ヴァニティーワールドって、それもジ・アンリミテッドって——。

—— もろに大魔王のベル様じゃねえか… ホントありがとございました…orz

ちくせう…どうなってやる。

両方とも世界滅ぼせそうなスペカじゃねえか…。

神様になる為に俺ってこんなことしてんじゃないかったか？

っていうか、そう！そうだよ！！俺って神様見習いじゃないの！？俺もう魔王とかそっち方向に進んでない！？

どこの一番後ろの大〇王だよ！！

将来の職業：魔王ってか！？

神になったとしてもクトゥルフとかみたいな邪神系にしかねそう
にないぞ!?

あれか!?!調子にのってSLBで魔王様ごっことかやってたせい
か!?

ごめんなさい!!もうしません!!全力で謝りますのでもっと俺に
優しい何かをください!!!

———ムリだよね…。

はあ、まあいい。良くはないがどうしようもないから仕方が無い。
称号が神様見習い(混)とかいう混沌を意識したいのか、存在が力
オスだとも言いたいのか、それとも文字通りぐちゃぐちゃとでも
言いたいのか分らん称号を与えられようとも諦めるしかない。

だからお前ら可愛そうな目でこっち見んなし!!!!!!

あれから長い年月が経った。

そう、今日であの時から10年。

約束の時間だ。

そしてここは衛宮邸の庭。

居るのはたくさんだ。

イリヤ、サーヴァント勢全員に、士郎、凜、桜、慎二（良い奴なマツチヨ）、美綴綾子。

そしてここから驚きのメンバー、白レン、レン、遠野志貴、アルクェイド、遠野秋葉、シエル、シオン、弓塚さつき。

うん、この世界って遠野家あったよ。つまり、月姫の世界でもあったようだね。

お姉さんびっくりさ。

自分の事を俺がわざわざお姉さんと言ってる事からどれだけ驚いたかは分かっていたただけたかな？

まあ色々あったんだよ。

アインツベルンを正式にイリヤに継がせるために爺さん共をぬっこぬこにしに行ったり、イリヤにカレイドステッキをマジで持たせてみようと時計塔行ったり、そしてそこで何の因果かアルクエイドについてキシユアのじっちゃんから頼まれたり、驚きながらも行ったらホントに月姫だし、なんやかんやでさっちゃんたち助けちゃったし（まあまだ吸血鬼ではあるんだが）、案の定士郎達が魔術師協会に目を付けられて、結局協会もOHANASHIに行かなければならなくなったり、と色々あった。

いつだったかこの国だったか戦災被害にあってる所へチャリテイーコンサートしに行った時に、ムキムキ慎二が素手で戦車に無双してたっけ…。

最初誰だか分からなかったし、『80パーセントオオ！』って言いながら突っ込んで行ったからビビったビビったww

それから、綾子についてなんだが、その後一段落した時に、退院は済んでいたから士郎の学校を見学という名目で会いに行った。その

時一緒にキヤスターと行ったんだけど、どうやら綾子ってば魔術的なものに縁が出来てしまっているのだそうだ。それが先天的に持っていたモノなのか、後天的にあの時か、はたまたそれ以外で発現してしまったのかは分からないが、記憶を消したからといって放っておくのは危険な状態のようだった。だからある程度知識を教えてあげるか、もういつそのことこちら側の世界に入るかを決めた方が良いつて事になった。もちろん本人の意思を尊重してだ。結果は、ここに居るのが答えだ。

生来の姉御肌もあって、一緒に行動している。ただ、魔術には適性が無かったから装備は俺のモノを使ってる。種族ヒューマンとして色々調整できたのは幸いだったな。

ちなみに結構強い。英霊とまでは行かないけど、元々運動神経も良いし、槍を薙刀として使う事で結構な戦闘力がある。

綾子にまで戦闘力が求められる世界であるってのは悲しい事だが、綾子が自分で決めた事なので俺も納得している。

最近ランサーと仲良い気がするんだけど、このままくっ付くのかね？

あ、レンと白レンだけど、なんか色々してたら使い魔じゃ無くなった。どちらかというと言霊に近いな。単独行動できるようになっちゃった。

白レンとは俺が契約する事になったし…なんでさ？

まあ契約とは言ってもパスを繋ぐ程度のものだし、白レンは自律行動できるからあんまり意味は無いモノなんだけど、なんかどうしてもって…。

そして、何よりも俺の中で大変だったものがこれだと断言できる。

——会社作っちゃった。

うん、突然この子は何を言ってるんだろうと思つのも仕方ない。

けどな、仕方無いんだ（血涙）。

俺達つて、自分に関してはナルシストみたいになるから言いたくないが見てくれが良いんだよ。男女とも両方にな。

そして、キャスターさんの趣味。

お分かりだろうか…。

当然のようにアイドル養成とかその他もろもろをする会社になっちまったwww

会社自体は考えてたんだ。

その為のショタギル君でもあるし。
なにせ彼、黄金律っていう何もしてなくてもお金が手に入るっていう羨ましすぎるスキルを持つてるからね。

で、まあ、ギルのおかげもあって基盤はどうとでもなるんだが、その方向性に悩んでたら、キャスターが…キャスターが……。

とりあえず例の撮影会は当然行われた。写真もいっぱい取られたさ。動画もな！！

そしてある日、二〇動とかネット巡りしてたら、例の動画やらがネット上で話題になってたんだよ！！！！

分かるかこの気持ち！！

とりあえず裏切りモノを探した。

犯人はランサーだった。

とりあえず埋めた。

で、でだ。

それを知ったキャスターは、もうこのままYOUいっちなよ的なノリで会社をそっち方面にもっていきやがった。

おかげでアイドルデビューだよ。

まさか、好きだった歌（カラオケレベルだけど）がワールドワイドな話になっちゃうとは…orz

当然イリヤやキャスターもだぜ？キャスターはマネージャーで忙しいからってあんまりしないが。

もちろんアイドルやらそっち関係だけでなく、開発やらレジャー系やら、もうその会社なんなのって位に手広く手を広げている。

月姫勢と出会ったのはその位の時期だったかな、もちろん人員確保しましたよ。月姫勢にも可愛いどころ綺麗どころいっぱいなもの。

一時期、俺、イリヤ、レン、白レンでアイドルグループ結成した時もあった。

合言葉は『このロリコン共め！！』

ご褒美らしいよ？

他のメンバーも交代とかで色んなグループ作ったなー。

あ、そういえばアルクエイドだけは最後まで歌関係はやらなかったな。写真集はやったけど。

後、アルクの姉にあたるアルトルージュが来たときはビックリしたっけ。

ま、結局期間限定ユニットの生贄になったけど。

うん、思い返すと良い思い出だな。

恥ずかしい思いばかりだったけど、面白かったと言えば面白かったし。

会社の売り上げのほとんどは紛争地や難民の手助けとかのボランティアに回した。

だってうちの会社の重役の何人か、っていうか土郎達だけど、正義の味方だもん。あ、名実ともになっちゃったよ？

おかげで、会社の社員さんもいっぱい増えたし。

子会社とかいろいろね。

色々言っちゃいるが、俺はあんまり経営方面は関わって無いから詳しい事全部知ってる訳じゃないんだけどな。

あ、最後にもう一つ、忘れられないものがある。

『Fate/stay night』なんだけど、この世界でゲームになっちゃった。細かい部分は違うけどな、バーサーカーが俺とか。

何でだろうな。俺知らないよ？

まあ開発に関わった身ではあるんだがな。

で、何が問題かというところ、何故かコウジルートが付け加えられている。

俺ルートとか誰得！？

いや、一応18禁じゃなくて、通常ゲームソフトだよ？
グロシーンあるから年齢制限あるけどさ。

ホント誰得だよ。

おかげで自分のフィギュアが出来たりして秋葉行けない。元の世界でも行った事無かったから入り浸ろうと思ったのに…。

ま、行くけどね。勿論祭典にも行ったぜ？変装してだけど。

自分の薄い本にはビビった。うん。

まあそれだけ好いてくれてるってのは嬉しいんだけどね。

やばい、本格的にアイドル思考になってる部分がある。

俺は中身男なんだぞ！？

しっかりしろ！！俺！！！！

と、まあ長い長い回想だったが、とにかく今日でお別れだ。

挨拶はほとんど済ませてある。

最近ずっとお別れ会してたしな。

お別れ会なのにずっとはおかしい？
常識とか俺達には今さらだぜ？

そして、今俺の前には扉がある。

さっきメールが来て、これをくぐれとの事だ。

もう一度、何気に長かったこの世界での事をさらっと思い出す。

色々あったなホント。

悔いは無い。

いや、あるか。どうせならイリヤの結婚式とか見たかったなー。俺の生前の妹の見れなかったし。

あ、ここで皆さんにご報告があります。

士郎の野郎やりやがりました。

セイバーとの間におめでたです。

それだけじゃありません。凜と桜もです。

公認ハーレム築きやがったんだよあいつ。

ちなみに遠野家の志貴君もです。赤ん坊はまだいないけど時間の問

題じゃないかな？あんなにいっぱい居るんだし。

あ、でも白レンは何でか志貴の方に行かなかったな。はて？契約も俺としたし。

ま、本人たちが幸せそうなんで別に良いけどねー。

ホントダヨー。

でも、ホントにイリヤの花嫁姿は見たかったなー。
今じゃもう成長してボンツキュッボンツな美人さんだぜ？

かなり言い寄られてた筈なんだけど、浮いた話は全然出てこない。
なんでだろ？

「何考えてるの？」

「いや、イリヤの花嫁姿見たかったなーっ」と

「ばか…／＼」

はたかれた…；；；

「まったく、いつまでたっても変わらないんだから…」

「当然じゃん？俺は俺以外の何者でもない」

「厨二乙ww」

うつせえよランサー！！
また埋めてやるうか！！

「でも、ホントに変わらないわ。初めてあなたを召喚した時の事が昨日のように思い出される。
ホントに変わらないわ。身長とか…」

「サラツと人が気にしてる事言うんじゃない？！」

そうなんです。

おれを残して皆成長しました。

サーヴァント勢も完全に受肉してるから当然な。今丁度20代だ。
スケドの効果で10歳くらいまで若返っちゃってたからな。

だから！！俺を残して皆本来の身長位まで戻ってる。

レンと白レンすらもちよつとずつ、ホントにちよつとずつだけど成長してるんだぜ？

不老不死とか…けっ…。

「もう、拗ねるんじゃないわよ。そんな事してもかわいいだけなんだから」

「可愛い言うなつての。何回言えば良いんだよ。俺は元男だつての」

「だってホントの事じゃない？」

足元に居た白ネコが声を出して言う。白レンだ。

ちなみに、今言ったように俺はカミングアウトした。いい加減言っべきかなって思ってたし。ふーんで終わったけどな！！

「ま、それは置いといて、もう行かないとダメなんじゃない？」

白レンを地面から持ち上げて胸元に抱えるイリヤ。

この二人、元々犬猿の仲だったのに、今は中良いよな。いや、喧嘩するほど仲が良い？何で喧嘩してたのか知らないけど。まあたぶんキャラが被るからとかそんなんだろう。

「まあそうだな。とはいえ、俺は不老不死で、時間を操る方法も知ってる。予定通り、力を得たらこの時間帯に戻ってくるさ。案外俺がこのドアくぐった瞬間未来の俺が来たりするかもよ？」

「そうだったわね……」

それでも寂しげに言ってくれるイリヤ。

しかし、すぐに笑顔に戻って言う。

「じゃあ、言うとしたあれね」

いつだったか、俺が言った言葉。アニメだったか何だったかは忘れたけど、受け売りの言葉。

また会える事を願って――。

「「「またね」「」」

『また!』』

イリヤ、白レンの後に控えていた他のみんなも言ってくれる。

俺は、寂しくはあるがまた会える事を“確信”しつつ、ドアノブをひねりくぐった。

「のわあああああ!?!?!?!?」

ドアをくぐったら落ちた。

最後までこんな扱いかよ——!?!?!!

side out

『Stage 42：ハッピーエンドが始まった・・・innふえいと（終）』（後

いかがだったでしょうか。

突っ込みきれない？申し訳ない。やりたい事やったらこうなりましたwww

フラグはとりあえず回収した…かな…？

違うフラグが立ってるような気がするけど、それは気にしてはいけない罨です（笑）

さて、お次はネギま編。皆さんご存じの通りに変態という名の紳士がたくさんいらっしやる作品です。
自分でもどうなるやら…。

しかし、少しでも皆さんに楽しんでいただけたらと思います。

これからも引き続き私の小説をよろしくお願いします（＾O＾）／

P・S・1

ご指摘していただいた誤字等、いい加減直さないと、というか、軽く見返すだけでもひどいと自分でも思います。

それでも見ていただいてる皆様ありがとうございます。

4月から3カ月ほど忙しくなりそうなので今の内にどれだけできる

か分かりませんが、少しでも読みやすい環境を作っていければと思います。

誤字訂正等して下さる皆様、改めて感謝申し上げます。ありがとうございます> (――) <

P・S・2

ネギま編に入るにあたって、一話あたりの量を減らそうと思います。最低5ページ位でいけたらと思います。

最初の方とかはあまり話の発展がし辛そう等、苦肉の策ではあります。ご了承いただけたら幸いです。

だからといってクオリティが下がる事の無い様に気をつけたいと思います。

では、いつもながら長々と失礼いたしました。

これからもよろしく願いします。

作者のkouでした(＾O＾)ノ

『Stage 43: プロローグからはっちゃけた結果がこれです・・・innネザ

どうもです(＾O＾)ノ

ついに始めました厄m…ごほん!!…薬味h…げほっ!ごほっ!
!ネギま編!!

なんだかんだでここまで来ました。なんか感慨深いものがあります。

これもひとえに皆様のおかげです!!

さてさて、今回の話ですが、しょっぱなからぶっ飛ばしております
(笑)

どいう意味かは見れば分かるかもといった感じですね。

では、前置きはこの辺で、どうぞご覧ください!!

『Stage43:プロローグからはっちゃけた結果がこれです・・・innネザ

side:コウジユ

「あぐうあつ!？」

ドスンと地面にぶつかり、落下していた身体が止まる。

「おかえりなのじゃ」

「お疲れさまでした」

「えーつと…誰？」

落ちてきた場所は、俺が最初にチートパワーを貰った場所だった。

そして、先客が居たのか声が耳に入る。というか、俺に向かって掛けられたものだな。

声のした方を向く。

そこにいたのは美人さんが二人。

片方は着物(というか、十二単?っぽい)を着た、まさしく大和撫子といった体風の黒髪ロングな美人さん。

もう一人は、蒼銀って言えば良いのか、そんな色をした地面に着きそうな位の長髪をリボンみたいなので軽くまとめた……何故か東方の八雲紫の服装をしている美人さん。すっげースタイル良いなこの人たち。特に蒼銀の人。

間違いないく、道端で会えば目が行く。それどころか、止まって見て夢だろうかと考えてしまうくらいには美人さんじゃなからうか。実際、呆けるように見惚れてしまった。

「おお、忘れておった。我の名は光夜、シンキが一人光夜じゃ。よろしくのう」

蒼銀の人がそう自己紹介してくれた。光夜さんというらしい。見とれてしまった事を気付かれていないのか普通に、というか、フレンドリーに挨拶してくれた。気付いてて、ツッコまなかったのだったら更に言い人だな。うん。
ところで、シンキって何さ？

「私は、あ……いえ、エミリアで良いです。最初にあなたと会ったエミリアが私だったので」

はいな？

次に自己紹介してくれた黒髪美人さんはあのエミリア（神）の人？

つまりエミリア（偽）？

「偽はさすがに酷いです」

「心読まれた!？」

「いえ、顔に書いてありました」

そんなピンポイントに書いてあったの俺!？

「くくく…」

光夜さんに笑われた!？

口元を押さえながら上品に笑う光夜さん。

笑うのを抑えようとするが、我慢しきれないといった感じだ。

ただ、おかしくて笑っているという感じではない。

優しい笑い方だ。

「くく…す、すまぬの。どうにも懐かしくてついな。ふふ…」

懐かしいとな？

俺…っていうか Koujū か、その姿に似た知り合いでも居たのかな？

「今の汝の姿は我の親友、^{なれ}というか家族じゃな、その姿とほとんど同じなんじゃよ」

「あ、そうだったんですか。まあ自分としては綺麗な方の笑顔を見て役得ですけど…」

あ、一応敬語は使わないとな。

ただしエミリア（偽）、あんたは駄目だ。

「あの…私と光夜様で対応違いますか？」

「え、当然でしょ？」

「な、何ですか！？」

確かにエミリア（偽）さんも美人だし、着物似合ってるし、神様のオーラって言えば良いのか？そういう神々しさがあるんだけど、最初があれだからなー…。

何回あんたを殴ろうと思ったか。大分その気持ちは薄れてきたけど、これ位は許して欲しいもんだ。

「くく、ホントにそっくりじゃ。マイペースな所とか特にのう」

「ま、マイペースですか…？」

そういえば、今更だけど目の前に居る2人は神様なんだよな。やけにナチュラルに会話してるけど。

そらマイペースって言われるか。

それか、自分のペースでいられるほどに、F a t e世界を経験したことで度胸が着いたのかな？

そうだとしたら嫌な度胸だなー…。

「うむうむ。ま、あ奴は汝と違って活発的ではなかったがのう」

むむむ、そこまで言われると気になるな…。

「いやすまぬ、これでは話が進まぬな。汝も、いや汝だからこそい
ずれあ奴と会う事があるじやろうし、続きはその時にしようかの」

「えっと、分かりました」

俺だからこそ？やけに気なる言い方だなあ…。

けど、その時になったら言ってくれるなら良いか。

「そういえば、本題っていうのは？」

「うむ、次の世界の話じゃ」

「ああ、そういえば」

割と忘れそうになる俺がしなくてはならない事。

“世界を回って修行する”

某モンスター映画になぞらえて言わせて貰おう。

お次はなんだ？

「ではでは私から、
行く先は…『ネギま！？』です！！」

どこからか出した原作一巻をこちらに見せながら、言うエミリア（偽）。

「ネギまか…って変態ばつかじゃねえか！！」

学園ラブコメ？はっ、俺はそんなものだとは認めねえ。

まあ学園は良いとしてもラブコメではねえ筈だ。

ラブコメってるの数人じゃね？

っていうか、ラッキースケベとか、ただのスケベとかそんなんばっか発動してないか？

まず主人公が自称紳士の変態薬味だもんよ…。

嫌な予感しかないっす。

今の俺、少女だからな…orz

「た、たとえ変態だったとしても、変態という名の紳士なので大丈夫ですよっ！！」

「結局変態じゃねえか！！内側紳士でも外側変態だよなそれ！！内外ともに紳士プリーズ！！」

「あ、あれ…？」

こいつ天然か！？

天然なのか！？

天然なんですね！？

頭をひねりながらフロローに失敗した事に今更ながら気づくエミリア（偽）。

だからあんたはエミリア（偽）なんだ！

「はあ…、あーちゃん、ちつとも成長せんもう」

やれやれと言わんばかりにため息交じりに言う光夜さん。

昔からこんな感じなんだ…。

「ちょ、ちょっと待ってください光夜様！！今の無し！！無しでお願いします！！／／」

ワタワタと今のを無かった事にしようとするエミリア（偽）。

なんか姉妹みたいだな。

見てて和む光景だ。

うん、さっきのは無かった事にしよう。

別に、精神の安全の為に考えなかった事にしようとかそういう訳ではない。ないったらない。

「で、ネギまに行くのは良いとしていつの時代？大戦期？学園編？」

大体のテンプレだと、この二つかな？

大戦期は主人公の薬味の親父が活躍する時期。学園編は薬味がメイン。

あ、中世ヨーロッパっていうのもあったな。

ヒロインの一人…で良いのかな？ともかく、そのヒロインの一人のロリババア筆頭エヴァちゃんが吸血鬼化するのが中世ヨーロッパの辺りだ。

それに介入ってのもあった筈。

「行くのははるか古代じゃ」

(。；。A)

「わんもあぷりーず？」

「はるか古代じゃ」

「なんだって!？」

古代って何!？何があるの!？何をすればいいの!？

「Fateの世界では、力の使い方を学んでもらったのじゃ。次は神様としての第一歩を進んでもらうつもりじゃ」

神様としての第一歩…？

「神として認識される事。崇められろとまでは言わぬから、まあ氣楽に頑張るがよい」

楽しんで来い、と言外に含ませて言う。

その心配りは嬉しいんですが…。

ただ…。

「この姿を見て誰が神だと思っただろうね…orz」

思ってくれたとしても何の神様!?

ロリか!?

ロリ神か!?

需要があれば何でもいいのか!?

そうだと言っならまずはその幻想をぶち壊すつ!!!!(割と死活問題の為)

「まあ確かに、パツと見て神様がどうかって言われても神様だとは言えないですね…」

苦笑しながら言うエミリア(偽)。

「来い、コクイントウ」

俺はコクイントウ・ホオズキを構えて、それを振りかぶ

「何で私に振りかぶってるんですか!？」

コクイントウを振り下ろそうとした相手であるエミリア（偽）が抗議の声を上げる。

「え、だって…ねえ？」

「ねえ？」

光夜さんが乗ってくれた。服装がゆかりんだしノリが良さそうなので、乗ってくれると思っていたがホントに乗ってくれて嬉しい。うーんと、気の良いお姉さんって感じかな。

リアルに相見えるとは!!

元男として何となく嬉しい!!

って、待て俺!!元男ってのは実際そうだが、過去形として諦めるな!また戻れる筈だ!!

「もう良いですよ…どうせ私そんなキャラ付けですよ」

「これこれ、そう拗ねるでない」

拗ねたエミリア（偽）を胸に抱いて、頭を撫でながら慰める光夜さん。

なんだかんだでエミリア（偽）も美人さんだし、とても目の保養になる。

和むわー。

って、そっぴや話全然進んでない。

何の話だっけ…？

「えっと、何の話だっけ…？あ、俺が見た目神様っぽくないって話…だった…ちくせう…orz」

「可愛いし良いと思うんじゃないのう」

エミリア（偽）の頭を撫でながら言う光夜さん。
撫でられたままのエミリア（偽）の顔は蕩けきっている。はうと
言わんばかりだ。不覚にも萌えた。

ゲフンゲフンっ！

「可愛くても神様に見られなければ意味が無いのでは…？
っていうか、もしそれで崇められたとしてもそれは神として崇めら
れたんじゃないくて、違う何かとしてだと思う」

例えば、リアルロリBBAとしてだとか…。

言って悲しくなるこの状況をどうにかしてくれ…orz

「ふむ、それは確かにのう…。

お、ならば見えるようになれば良い話じゃな。予定より早くなるが…まあ汝なら使いこなせるじゃろ」

そう言つて、光夜さんはエミリア（偽）…いい加減この言い方めんどくさくなってきたな…を撫でるのを止め、こちらに歩いて来た。

「ぐ、ごほん…！」

光夜様良いんですか？予定だと中盤辺りだったんじゃない…」

先程までの自分を誤魔化すように咳払いを一つし、そう言つエミリア（偽）。

「そろそろ（偽）外してくれませんか！？泣きますよ！？」

「どうぞ」

「うう…」

ホントに泣きそうだよ！？神様なんだよね！？

とはいえ、さすがに泣かせてしまうのは男として（ここ大事）ダメだと思つので、呼び方を変えよう。

「でも、エミリアって呼ぶと違和感がなあ…どう見ても大和撫子だし、着物着てるし」

「うぐ…」

「名を言わぬからじゃよ」

「け、けど、あまり好きじゃないんですよ…本名という訳ではないですし…継いだ身としては仕方ないんですけど…」

話が見えない。そしてまた話がそれてる気がする。

「我儘じゃのう…、仕方無い。いい加減話を進めんといかんから今から汝はあーちゃんじゃ」

「え！？う、でも、はい…」

どういう関係なのか今まで放ったらかしにしてたけど、光夜さんは上司なのかね？そのせいか強く出れないエミリア（偽）改め、あーちゃんは渋々と諦める。

「すまぬな。さて、汝に新たな力を授けよう」

改めて近づいてきた光夜さんは、ぽむっと俺の頭の上に手を置いた。

そして、何をするんだろうかと俺が考えていると…。

「そうじゃのう…まずは一度、眠るが良い」

「はい？…ってあれ……？」

俺の影が突然膨らみ、俺を一気に飲み込む。

驚く間もなく、意識が薄れていく。

とても心地よいまどろみだ。

春にする日向ぼっこみたいな…。

そこまで考えて本格的に意識が消えた。

頑張っ
て…ね…

『はっ！？』

なんだ今の…？何か聞こえた気がしたんだけど…気のせい？という
か、あれ？さっきまで何してたんだっけ？というか、今俺寝てたの
か？

ひょっとして、さっきまでの夢…じゃないな。さっきまで居た空間と一緒に。

っていう事は最後に眠らされたのも現実だったって事だよな？

はて、何で眠らされたんだろ？

「起きたかの？」

声がする。この声と話し方は光夜さんか。

声のした方を見ようとする。

やけに身体が重たいな…。

なんとか、顔を声がした方に向く事が出来た。

向いた方向には光夜さんとあーちゃんの2人が立っていた。その姿は少し小さい。俺から離れた位置に居るようだ。

やけに遠い所に二人ともいるな…。

『どうしてそんな所に居るんですか？』

やけに声が頭に響く。何て言えば良いかな。カラオケでマイクが話を拾っちゃった感じって言えば良いのかな？

そういえば、この声の響き方獣化した時にちょっと似てるな。

そんな事を考えていると、光夜さん達が近づいてきた。

「いやなに、巻き込まれては困るのでのう。
どうじゃ？身体の調子は」

身体の調子？ん〜やつぱり体が思い……まで、おかしいぞ。

なんで…、なんでそんなに――

――光夜さん達が小さい？

『なにこれ？』

光夜さん達が俺の下の方に居る。

それ以前に地面が遠い。

これじゃあまるで、光夜さん達が小さくなったんじゃない、俺が
大きくなったみたい…。

「フルビースト、とでも言えば良いかの」

そう言いながら光夜さんが指をパチンと小気味良く鳴らした。

すると目の前に鏡が現れた。

「なるほど、だからフルビーストね……ってなんじゃこりやああああああ！！！！！！」

鏡の中にある俺の姿は先程までの俺の姿ではなかった。

そこに映っていたのは獣だ。それもとてつもなく大きな。

どこかKoujuの髪を思わせる白銀色の毛並みをした、全体的には狼と狐を混ぜたような姿で、そして所々に神聖さを表すかのように煌びやかな装飾が付いている。炎をそのまま形にしたようなかなり長い衣が、この身体の周りを漂うようにあったり、首元や肩口、足元等にある装飾は黄金や漆、黒などで上品に、そして神々しく飾り立てている。

そんな装飾の中何よりも異様なのが、仮面と背中にある五重塔（？）だ。

顔に一角が付いた仮面が一つ、そして手足（前足と後ろ足？）にそれぞれ狐を思わせるような仮面が一つずつ。計5個の仮面。あ、よく見たら五重塔（鏡に入りきらない）の部分にも仮面が付いている。だから計6個の仮面。仮面はまだ良いとしても何故に五重塔？why？

「ふむ、これなら良いじゃろう」

「はい、これなら大丈夫です」

「ちょっと！？」

2人で納得してないで説明してくれませんか！？」

うんうん頷きながらこちらを下から見ていた2人に思わず吼えるように言う。この姿だと文字通りに吼えるようにだ。

「その姿はの、先程主に与えた力の一旦じゃ」

「光夜様がコウジユさんに私たちはちょっと変わった“変身”能力です。そして今の姿はその中でも先程光夜様が仰っておられた“フルビースト”になります」

『はい…?』

・ ・ ・

詳しく聞いてみたんだが、とりあえず纏めてみるとこんな感じだ。

1 変身能力というか、存在の置換能力。自身の身体をなりたいモノの状態へ持つていくというスキル。

2 光夜さんが俺に触れてやった時に、俺の影が膨らんで俺を包んだのは、影は俺の一部だからそれを媒体に、聖杯戦争終了時に会得した『混沌』属性を影に持たせて、泥で体を覆って形作るようにこの状態を創って（誤字にあらず）いるらしい。

3 とはいえ、材料ではあるが変身後は完全に肉体として完成するので血とかは出る。出さなくするのとかの応用技術は練習で会得し

なさいだつてさ。

4、なりたい姿は基本的に自分に関わりがある姿か、イメージしやすい姿で無ければならない。現在の姿は獣化ナノブラストの姿から関係性を持たせて、さらに光夜さんが神っぽい姿で思いついたモノを設定してくれたものらしい。

5、感情が高ぶってしまうと、ナノブラストで暴走するかの如くこの姿になり、暴れてしまう可能性がある。

6、この姿はPSPo2の続編にあたるPSPo2∞（ファンタジースターポータブル2インフィニティ）に出てくるBOSスクラスの一体の姿を参考に行っているらしい。

『ちょっと待てええ！！！ツツコミ所多過ぎんだろぅが！！！！』

最後の2つ何！？暴走するみたいにこの姿になって暴れるの！？ただの獣化の暴走であの惨状になっちゃうのにこの姿でやったらどうなの！？？

ていうか、PSPo2iって何！？続編！？そんなの出てたの！？』

「うむ、ほれ…」

そう言つて光夜さんは再び指を鳴らす。

すると目の前の鏡に映像が流れ始めた。

流れたのはPSPo2iのOPムービーやプロモーションムービー、トレーラー、CM、ついでと言わんばかりに公式ホームページやら、

ニコ生放送やら……………」

「鬱だ…死のう…。死ねないけど…」

正直に言って、俺のライフはゼロを通り越してマイナスです。話を聞いたら俺が死んだすぐ後に発表されて、その数カ月後、死んで大体半年位で体験版配布、そして販売となっていたらしい。

俺はPSP02が好きだった。武器集めに何周も同じミッションをこなしたり、ネット回線上で色んな所に住んでる人と楽しく遊んだり、レベル上げ手伝ったり、それでも楽しくてやり続けたさ。

なのに、続編だった？

『ううゝ、ううゝ、ううー！！この気持ちをどうすればいいんだ…。やりきれねえよ…』

現在の重い身体を寝転ばせ、というか投げやりに放りだすように倒れる。

「す、すまぬ…！…！」

「う、ごめんなさい…！」

2人が謝っているようだが全然頭に入っていない。

頭の中を占めているのはさっき見せて貰った映像だ。

旧文明人はやつぱり薄着だなーとか、三木さんなにやってんすかwとか、奈々様がヒロイン？k t k rとか、あれカートリッジシステムじゃね？とか、新種族のデューマンカッコよすぎね？とか、なにあれチャージ2？ばねえーとか、武器が欲しかったようなデザインのやつ増えてるとか……ぐるぐるぐるると頭の中を回っている。

とにかくやりたかった…orz

「そ、そうじゃー！！言つのを忘れておったがインフィニティのソフト込みでP S Pを汝の倉庫に入れておいたのを忘れておった！！それでどうか気を治めてはくれぬか…？」

なんだって！？

(((; . D (((! ?

俺は一気に身体…は慣れなくて無理だったので、顔だけを光夜さんの方に向ける。

「勿論K o u j uとして汝が育てておったデータも入れてある。正直すまなかったとしか言いようがないが——」

だが、もう既にさっきまでの俺とは違った意味で頭の中では思考がぐるぐると高速回転を始めていた。

やれる！？やれるの！？インフィニティ！？
ヒャッホー！ーイ！ー！！

＼(。＼)(／。)/

「ってあれ、聞いておるかの？」

「何でしょうか光夜さん！！私めに何か御用でしょうか！！」

「い、いや、機嫌が直ったのなら構わぬ…」

少し引き気味にそういう光夜さん。ごめんなさい！！でも嬉しくて嬉しくて！！！

さっきはちよつと難しかった身体を起こすのを難なくやり、嬉しくて身体を揺らす。

なにはともあれ、さっそくさっき光夜さんが言ってくれたPSP+インフィニティを倉庫から出してみよう！！

いつものごとく、空間から自分の欲しいモノを取り出すイメージを脳内で作り能力を行使、同時にそれを受け取る為に手を前に出し――。

手…？

ポフン…

そんな擬音と共に件のPSPが出てきた。俺の前足の肉球の上に…。いや、まだ大丈夫だ。戻れば良いんだから人の姿に。

…で、どうやるの？

…（ノド）…。

「申し訳ない…」
「すみません…」

『良いっす…別に出来ない訳じゃない…』

一通り心の中が落ち着いたので、話を再開した。

ホントに申し訳なさそうに2人が謝ってくれたので、気は晴れないが女性の前でいつまでもうじうじする気にもならず、気を取り直した訳だ。

話によると、今の姿は変身の練習を俺がしやすいように軽く固定してあって、この状態からKoujuの姿をイメージして、コウジュの状態に戻るという練習を光夜さんは考えていたらしい。

だから練習すればまた人の姿になれるという事だ。

まあ、人の姿にはなれるんなら問題ないさ。うん。ちょっと我慢するだけさね。

「むう、少し浮かれてしまっていたようじゃ…」

顔を曇らせてそう言う光夜さん。

女性をこんな顔にしておく訳にはいかないと、生前でもあったのか微妙な男の意地を発動させ、話を反らす事にした。

慰めろよだって？

俺にそんな高等技術は無い。あつたら彼女の一人も出来てるっつの。

『そ、そういえば、やっぱり神様ってすごいですね！！さっきから色々ちよいとやってますし！！』

「む？いや、それほどでもないよ」

そう言つて光夜さんがほほ笑む。

良かった…。なんとかできたみたいだ。

「ふふ、気を使わせてしまったようじゃの」

出来てなかった…。

ま、まあいつか！

元の微笑みに戻ってくれたし！！結果オーライ！！

「またまた、謙遜をしないでくださいよ光夜様。あんな事出来るの
早々居ないじゃないですか」

あーちゃんも気を取り直して会話に加わる。
というか、光夜さんってそんなすごいのか？

思わず頭をひねっていると、あーちゃんが答えた。

「光夜様がやったのは簡単に言えば世界の上書きなんです！！」

「これ！あーちゃんやめぬか！」

恥ずかしそうに光夜さんはあーちゃんを止めようとするが、興奮したあーちゃんは構わず続けてしまう。

「さっきの鏡は違うんですけど、コウジユさんをその姿にした能力の基礎や、そもそもあなたが転生…というか憑依をした際にお渡しになったチートの能力とかも全部、『縁^{えにし}』の力で行ったものなんです！！」

興奮冷めやらぬと言った感じで一気にまくし立てられた。

で、『縁』って何ですか？縁結びとかの縁で良いのかな？

「まったく…、仕方ない続きは我が言おう。我は東方風に言つと『縁を司る程度の能力』を持ってゐる」

「縁は、縁結びの縁？」

「うむ。縁とは繋がりじゃ。人と人、世界と世界、物質だつてそうじゃの。分子や原子レベルの話じゃがあれも繋がりじゃ。森羅万象全ては繋がりを以てしてその存在を確立してゐる。

我はそれらを司つてゐるんじゃよ。汝に力を与えた方法も汝とその力の縁を結んだだけじゃ。最初に渡した分はほぼ完成形で渡したが、変身の方は基礎だけという違いはあるがの」

さすが神。チートだ。いや、チートどころの話じゃない様な…。

「あれ、でも、神は全能つて言いますよね？他の神様はできないの？」

俗に言う創造神とかそういうクラスなら出来そうなものだけど…。

「とんでもない！！光夜様の力はもつとハイレベルです！！」

まだ興奮中のあーちゃんが言う。

「光夜様の能力はただ加えたり書き換えたりするのではなく、もつと存在因子のレベルでの話になっちゃうんです！！」

簡単に言えば、“元々そうだった”という風にしてしまう訳です！

そしてさらに、光夜様の能力は制限がありません!!」

余計に分からなくなってきた。
分かるのは光夜さんがとんでもない事だけ。

「制限が無いってのは…?」

「普通、創造神といえどもその能力には限界があります。例えば、自身が創造した世界の中では全知全能でも、外の世界、つまりは他の創造神が作った世界にはその能力が干渉しきれない、もしくは制限されてしまうんです」

一気に話が多次元世界やらクラスのものに…。

ってちよつと待て!!

「って事は、光夜さんにはその制限とかが無いんだよな!?!つまり創造神とかより上の存在!?!」

「その通りです!!」

創造神がいつぱい居るって話だけでも驚きなのに、更にその上!?!確かにかなりの美人だし、神々しさすらあるけど、気の良いお姉さんだよ!?!優しいし!!

「あーちゃん!!」

「ふひゃい!!?」

「まったく…するならするでちゃんと説明せぬか…」

あーちゃんを止めた光夜さんは、ため息をつきつつ、話を続けてくれた。

「確かに世界とは幾つもあるし、創造神も幾柱もおる。そして我が持つ能力はそれらに対し何の制限もなく使えてしまう。しかし、我は神々を支配するとかそういう立場ではない。既にその席からとうに退いておる」

退いて…って、どちらにしろ過去形ではあっても偉い人なんじゃ…。

「我と後2人、ああ我らは厳密には神ではない故に“人”と数えるが、この3人は世界そのものに近い。いわゆるプログラムみたいなもんじゃ。世界を構成する為のな。故に最初は色々しておったが、若い者に後を任せて隠居の身なんじゃよ」

いや、隠居って…その姿ですか?年齢だとかの概念が無いからだとは思うけどさ、普通にお姉さまですよ?

「さて、世界とはどういうものだと思うかの?」

なんか授業じみてきたな…。

『世界ってあれですよ?並行世界や、多次元世界とかがあって…』

「うむ、その通り。しかし、間違いでもある。」

実際には世界に形なんて無いんじゃないよ。世界は想像できるだけ数がある。と人は言うが、そもそも数えると言うのがおかしいんじゃないよ。どこまでが一つの世界かなんて誰が決める？ 我からしてみれば世界は一つじゃ。内側に、見えない隣にあるだけで、結局は一つ」

ホントに授業になってきた。しかもこれ俺が知っちゃって良いの？ まだ見習いだよ？

これ世界の根幹の話じゃね？

「ただまあ所詮世界は既知の中が全てじゃ。未知の世界も出会ってしまえば自身の知る中。我はこの存在上、世界に近い故に色々知っておるし、能力的にも規格外ではあるかも知れん、実際自分でも最強クラスだとは思うが、所詮は既知の中の話じゃ。ひよっとしたら我が知るこの広大な世界の全ても所詮はかこの鳥かも知れん」

ごめんなさい。その時点で俺よりはるかに規格外なのでその上が居るかもとか言われても規格外って事は変わらないっす。

「それに基本的に我、というか我ら3人は放任主義じゃ。いつまでも子に構っても鬱陶しがられるだけじゃからの」

あれ？

突然家庭の話みたいになつたぞ？

光夜さんも天然っていうか、マイペースっていうか…。

「もう、光夜様ったら…。別に鬱陶しがったりはしないですよ！ まあ、最近はお外の世界を知らない創造神が、自分の作った世界で暴れまわって、お外の世界にも影響出始めたから接触すると喧嘩売って

くるとかは偶によくありますけど」

偶に？よく？どっち？

「くく、どっちにしろ我ら3人はいざという時に存在するだけじゃ。
“そのもの”と“構成”と“バックアップ”。下手に介入してもめんどくさい事にしかならん」

なるほど、よく分らん。

これって俺の頭が悪いから理解できないのかな？
それとも、理解しない方が幸せ？

とりあえず保留にしよう。うん。

「さて、色々と話の寄り道をすぎたの。そろそろ、次の世界に向かってもらおう」

すっかり忘れてたよ（笑）

「次は最初に言った通りネギまの世界じゃ。介入などは好きにする
が良い。別に修正力などは無いからの」

あ、良いんだ。っていうか修正力とかほとんど考えてなかったやww

「修正力はその世界がそう設定しているかしていないかの違いではないからの、汝が行く場所には無いことが決まっておる。

……まあ、あったとしてもあんまり意味は無いじゃろうがの。色んな意味で……」

最後にぼそぼそと何か言った気がしたけど小さく言っただって事は別に知らなくても良いって事だろう。

いつもならビーストだからそういうのも聞こえるけどさすがに聞こえなかったみたいだし……。

「向こうには家を用意してあるでう。そこで修業に明け暮れるもよし、寝て過ごすもよし、適当に過ごしてくるが良い」

『了解であります』

なんだか次は楽そうだ。

Fateの世界で結構頑張ったから、原作が始まるまでは自由気ままに――

――ニートになる!!

「では、次に会うのは汝の体感時間で何千年も先になると思うが、

またここで再び相見えよう。何かあればメールするが良い」

「また会いましょう。コウジュさん」

光夜さんとあーちゃんが手を振って（俺がでかいので下の方で）くれる。

俺は、この姿だと手を振る事が出来ないので、軽く会釈する。

それに合わせて、光夜さんがまた指をパチンッと鳴らした。

そっいえばこの巨体でどうやって世界渡るの？

その答えは突然この身を襲った浮遊感で理解する事が出来た。

『結局これかああああ！！！！不幸おだああああ！！！！！』

side out

side: 光夜

ふむ、これで良い。

色々話し過ぎてしまった気がせんでもないが、行く行くは知って
もらう事じゃ。

能力も予定より早まったが、まああの子ならノリと勢いでモノにし
てしまっじやろ。

それに“あの子”も起きた様じゃしの。

「光夜様嬉しそうですね」

隣に居たあーちゃんが我の方を見て微笑みながらそう言う。

「当然じゃ。また一つ夢が叶ったんじゃからな」

「でも、言わなくてよかったんですか？」

「勝手な事じゃが、言う訳にもいくまい。我がしたのは力を“与え
た”のではなく“引き出した”だけとはの」

悪いと思うが、言った所でどうにかなるものでもない。

コウジユなら受け入れてくれるじやろうが、今はまだ言うには早い。

あの“身体”のスペックだと自身で気付くか、それとも“あの子”が接触するか…何にせよ時期尚早は変わらずじゃの。

「あ…、えっと、これ言っちゃって良いのか分かりませんが…」

言い辛そうに、しかし聞きたいといった風なあーちゃん。

「喰らう能力…おかしくなったのって光夜様がしたんですか？」

喰らう能力…ラーニングとして渡した事にした能力の事じゃの。

しかし――。

「我は何もしたらんよ？」

そう、何もしていない。

おかしなことに喰らう能力は本来『能動的』なものであったのに『受動的』なものに変質しておった。

「それって、コウジユさんになる前の庵^{いお}さんが関係してますか？」

「うむ…正直、こちらとしては嬉しい誤算ではあるが…まあ能力がヘタレてしまったんじゃろうの…」

「ヘタ…いや、まあ確かに否定はできないですけど…」

あははっと苦笑しながらあーちゃんが言う。

けど、実際そうじゃし。

「あ、それともう一つ」

なんじゃ？まだあるのかの？

「変身的能力で男にも練習したらなれる“可能性”でしかないですが、在るって言わなくてよかったんですか…？」

「あ…」

「…また今度メール入れときます」

「すまぬの…」

s i d e o u t

『Stage43:プロローグからはっちゃけた結果がこれです・・・innネザ

いかがでしたでしょう？

まあ俗に言う厨設定ですねww

自重はしないし後悔もしませんが…。

すいません今さらでしたねww

勝手な設定で気分を害した方がいらっしやったら申し訳ない>（
ー）<

さて、今回御出演いただいたお二人、光夜さんとあーちゃんさん。

きれいなお姉さんは好きですか…？

まあそんな感じのお二人です。

二人はこれからもちよくちよく出てくるキャラです。直接物語の方
には出ませんが片方はこの話の根幹に関わる人物ですし、もう片方
は…まあ使いやすい案内役という事でww

あーちゃんエ…ww

ちなみにあーちゃんの本名はもう皆さん気付いてらっしやる方が大

半だとは思いますが日本神話で有名なあの方です。

それにしても光夜さんの能力…自分で設定したにしてもチートすぎるな…ww

それに対してコウジユの能力はどんどん進化していつてる筈なのに、全然強く見えない不思議…。

あ、変身した（させられた）獣の姿はPSP02iのヤオロズという…萌えキャラ？の姿をしております。擬人化した絵を何枚書いた事かwww

ってなわけで、ヤオロズなうなコウジユをこれからもよろしく願います。

あ、そうだ。最後にネタばれ的な地雷を置いていきますwww

こっというのが嫌な方は見ない事をお勧めします。

コウジユの所に届くメール……。

今回の話でもありましたがあーちゃんが送っているモノです。

しかし、それにしても内容と本人の性格が違いすぎると思いませんか？

さてさて何がどうなっているのやら。

…という地雷でした。え、気付いていらっしやった？

何…だと…orz

きつと気づいたあなたはエスパーなんですよ。

これなら他の地雷も気付いてらっしやるよねえ…。

まあいいや！！私はこれから自重せずに地雷を、そしてフラグを造り続けていきます！！！！

変なテンションで失礼しました。
では、また（＾Ｏ＾）ノシ

『stage4：ラピュ〇はホントにあったんだ…。でも俺は知らない…。』
どもです。二週間ぶりくらいになるんでしょうか？

予定通り5ページくらいのサイズとなりました。

前回ですか？

あれは…まあ作者の脳がはっちゃけちゃったんですよwww

兎にも角にもどうぞ！！

『Stage 44：ラビュ〇はホントにあったんだ…。でも俺はいらない…』

Side：コウジユ

『あべしっ！！』

前回もこんな登場の仕方だった気がする。

ただし今の身体は巨大な獣なので、ドオオン！！と巨大な音と共に地面を揺らした違いはある。

『で、ここどこ？』

見渡すと――。

『神殿…？』

目に入ってくる光景はまさしく神殿、それもこの身体をもってしても余裕がある程の大きさを誇る神殿だった。

『なんだっけ…ぱる…ぱる…ぱるしー？…な訳ないな。えっと…あ、あれだパルテノン…！』

ようやく思い出した、10年以上前にまだ自分が一般人だった時に教科書か何かで見た建物の造りに似てるんだ。

んで、ここに出てきたって事はここが俺の家って事だよな？

いくらなんでもでかすぎないか？

『とりあえず自分の家を…家？家のレベルじゃねえ様な気がするが、把握はしとくべきだよな』

倒れていた身体を起こし、中を探検してみる事にする。

・ ・ ・

『おおー広いじゃん！！』

俺が最初に落とされた所から奥に來ると大広間があった。

石造りの神殿だから家具とかは一切ないが、そもそもこの建築様式が美しいためそんなものはいらないだろう。
舞踏会なんて簡単に開けそうだ。

開く気ないし、舞踏会がどんなのかよく知らないけどな…。

・ ・ ・

『次は……玉座……？』

大理石で作られていて、そこに色々装飾されている。派手ではなく、
荘厳といった体風だ。

それにしても誰のためだ？

いや、俺の家って言う位だから俺のなんだろうけど、まあ今の姿じゃ使わないな。

訂正――。

人の姿でもそうそう使わんだろな。

絵としては需要があるのかね？

玉座でふんぞり返る幼女。

そんでもって光夜さんみたいな話し方してさ。

『おおゝ勇者よ。死んでしまつとは情けないのうゝ』

げふん…なんでもない…………。

・ ・ ・

『さってさて次は何かね？』

この身体だから分かりづらいが、かなりの大きさのドアを押し開け、中へ身体を滑り込ませる。

『図書館…？』

中に入り目に写ったのは、見たこと無いほど大量の本棚。

『なんか東方の紅魔館にでも在りそうだな』

冗談で言っただがパチュリーさんとか小悪魔居たりしねえよな？

とりあえず――。

『むきゅー』

・ ・ ・

他にも庭園やら厨房やらと色々あった。

そして、次に見つけたのは温泉だ！！

『やつべーよこれ。日本人としての心が揺さぶられる』

岩風呂やら露天やら色々あるぜよ。

滝みたいなのとか、温泉とは別にジャグジーとかサウナとかもあった。

『なんとかパークみたいな感じだなー』

感動だね正直。

こんなの旅行でもそうそう見た事無い。

もう見てるだけでつかりたくてつかりたくてウズウズしてくる。

というわけで、行ってきます。

しかし――。

『この姿じゃ足湯じゃん…orz』

悲しいかな、今の姿は“おっきなけもの”さんだ。

『うあゝ、足から伝わるこの暖かさが心に沁^しみるぜい…』

滝の方で全身浴びることが出来たので何よりでした、まる。

・ ・ ・

『お次はなんだーつと…』

温泉を浴びた後、身体をプルプル振るわせて（自分がやる事になるとは思わなかった）、そういえば自分が今付けてる装飾の五重塔と

かが全く濡れてなかった事に首をかしげながら探検を続行していると次の部屋への扉を見つけた。

当然、今自分は探検しているので中へと入る。

『まさかの宝物庫』

なにやらよく分からない道具から、黄金の像までとりあえず高そうなモノを並べて在ったり、山積みになされてたりする部屋だった。

とりま山の方へ行くかね。

『ふむふむこれは…天秤？なんか禍々しいな、ポイっと。

えっとこれは？水晶のドクロって…クリア報酬でもいらないのにいるかっての。

次は、本？中身は…ってエロ本じゃねえか！！何で宝の山に…って誰にとつての宝だよ！！いらねえ！！まったく…。

んで次ー、千年パズル…？うん、違うよね。ポイっと。

えーっと、次ー、ったく掘り返すのも楽じゃねえな…、お、これなんだ……ZUN帽…？気のせいだな。ポイっと。

次々、お、何だこれ？ニンジンのネックレス？兎詐欺かっての…でもこれらもらったとこ、倉庫よ開け。

さて次は何じやるな…っと、おお！って何だこれ石板？ギアスのマークあるんすけど…似てるだけ？でも、この鳥のマーク…まいっか、そーっい。

で、次ーっと―――』

いやー宝探しというか、宝掘り楽しいね。

この身体大きいから掘るのも一苦労だ。その上、宝は俺に対して小さいから、触って何か確認する事が大変だ。

なんせ“にくきゅー”だからね今の俺。

幼女にくきゅーとかじゃなくてリアルけものにくきゅー。

誰得？

俺、肉球結構好きだけど、自分が肉球持つてるんじゃ触れねえ…。肉球の感触がするっていうキーホルダー思わず買った位には好きなの…。

え？いい加減見つけたモノに対する突っ込みをしる？

やだよ。

他にも巻きますか巻きませんか？って書かれたトランクとか、古い銅鏡とか、どこかで見たような浮いてる鏡とか、真つ黒い1mちよつと位の球とか、赤いビー玉位の大きさの宝石みたいのがあった。

ちなみにそれらは触ってない。

だって、今にも呪われそうなオーラが感じられたんだもんよ。幻視できる位にさ…。

もしくは触れた瞬間に違う物語が始まりそんな気がしたんさ。

つまりはそう言う事だ。

『もうここ出よう…、宝物庫ってか、ただのトラップ部屋に思えてきたし…』

そんなわけでさいならー。

・ ・ ・

目の前にはまたしても巨大な扉。

『で、これはなんだろうねーっと、お？』

ただの玄関だった。

いや、だってどれも似たような無駄に凝ったドアばかりだしさ、こういう間違え起こしても仕方ないって。

それでまあ、その扉をくぐって外に出る。

正面玄関なだけあって、そのまま向こうの方へ道がある。どこの貴族かっての。

そこをのっしのっしと歩いていく。

その内行き止まりに出くわす。

行き止まりっていうか、そこから先に道が無いみたいな？

うん、さっきから突っ込まなかったんだけどね、もう無理だわ。

『この宮殿空に浮かんどるやんッ！！！！！！！！！！！』

ラピユタ！？

なあこれラピユタなん！？

樹無いけど！？

飛行石っぽいのがひょっとしてどこかにあるのか！！！？

いや、待て待て、落ち着け。
これは罠だ。

何が罾かとかは聞いてくれるな。
兎にも角にも罾なんだ。

ここで俺が焦ってポ力をやらかすと思うつぽだ。

よくよく考えてみる、ここはネギまの世界だ。

よく思い出せ。この場所…見覚えがある。

冷静に思い出せ――。

Q：ネギまで空に浮かぶ宮殿といえは？

A：ラp…いや違ってた！！

真A：墓守人の宮殿

――ですよねー…orz

はっ！落ち着け！！？

無理だったのコンチクショウ！！！！

何故！？何！？why！？

さっきまで自分が見た事もない…事もないか、アインツベルン城で見た事ある…けど、それでもモノ珍しい場所で、しかも心くすぐられるモノや、どこのリゾートかと思わざるを得ない内装にワクワクしていたのにこのオチだ。

“墓守人の宮殿”ってあれじゃん、ラストダンジョンじゃん。

おらワクワクしてきたぞ。

←

馬鹿なの？死ぬの？

何このコンボ。上げて落とす？

バツかじゃねえの？

…俺…orz

誰が言ったか、“良すぎると碌な事がねえ”って言葉が頭をよぎった。

その言葉を知った時は良いなら良いじゃんとか思ったもんだが、今まさにその気持ちがあったよ。

嬉しかった分、落ちるとorz度が半端ないね…。

いや、待て。待つんだ俺。
まだ決めつけるのは早い。

ひょっとしたら俺の記憶違いかもしれない。

ここが“墓守人の宮殿”だと決まった訳じゃないではないか。

例えば…そう、さっき言ったただの（？）ラピュタの可能性だってある。

見た目が違う？

いやいや、きつとあれだよ、キャストオフしたんだよ。もしくは、
一時期話題になったクールビズ。

樹が無いのもあれだ、ほら、温暖化。
枯れちゃったんだねー。怖いねー。

でもまあ、万が一に、いや億が一にここがリアルに“墓守人の宮殿”
”だとしてよう。

だったとしても原作通りにここがラストダンジョンになるとは限らない。

それ以前に、原作のラストダンジョンの主たるラスボスが居ない。
名前なんだっけ、ライスメーカー？いやいや、そんなおいし…じゃ

なくて、間抜けな名前のラスボスはいねえから…そうだ！ライフメーカー！！

そのライフメーカーが居ない訳で、この世界ではここは俺の家な訳で、ならば何も恐れる必要は無い。

あれ？そういえば今何年？

原作でライフメーカーが我が2600年の苦悩…絶望だっけ？…とにかくそんな事を言ってたから、西暦が始まる前にはライフメーカー…長いから命造さん…が存在するとして、今現在誰も居ないって事はそれより前って事だよな。でも、古代って光夜さんは言ってたからもつと前かな？

あんまり原作遠いと二ト極めちまいそうだから、遠くないと良いな…。

あ、今のフラグだったりしないよね？

というか、そもそもこの周辺に人は居るのだろうか？

どの時代でどんな生活してるのかとか知ろうにも人が住めそうな場所が周りに見えない。

さみしーよー。

誰でもいいから来てくれないかな。

この世界に来てまだ数時間と経ってないが超寂しい。

「わおーん……」

あ、間違った……。

「こーん……」

どっちにしろ、空しく響くばかりだ。

ロンリーウルフならぬロンリーフォックス。

一匹オオカミ的なカッコいい意味じゃなく、一人ぼっち的なね。

『長々と失礼……落ち着いてきた………』

……って誰に言ってたんだ、俺……orz

既に末期ですね、分かります。

はあ、もういいや。次行こう。

・ ・ ・

『ここは…寝室…でいいのか？』

次に入った部屋は何と言えは良いのやら、部屋の床がクッションで出来てるって言えばいいのかな？

ふかふかしてる。

『とりあえず寝室（暫定）でいいや。他の用途は考えられんし』

決まった所で寝転んでみる。

『ふかふか〜っと。うむうむ、これはなかなか』

身体が適度に沈んで心地よい。

『おお〜、これはやばいな〜、まぶたの上にまつこでr……zz
zz…』

・ ・ ・

『まさか公明の罠だったとは…』

いつの間にか夜でござる。

所々にあるガラス窓から月の光が差し込み、神殿の中を薄く照らし
ている。

ちなみに月光が入ってこない所は何故か蠟燭の火が付いていた。

独りでに付くとか便利すぎだぜ。

…誰かが付けただとかだったら俺マジで泣くからな？

オートだと俺は信じたい。

『ゲフン！

あーそれにしても探索途中で寝ちまうとは予想外だよホント』

俺は今、再び神殿の中を歩いている。

何でって…そりゃ勿論もうちょっとで探索が終わるからだ。

いや怖いけど。確かに怖いけど途中でやめるの嫌だし、というか、全貌を理解してない所でぐっすりとか無理だから。

はいそこ！さっき寝てたじゃんとか突っ込み入れないように！！

あれは不慮の事故だから！！

カウントしないように！！

よしよし良い子だ。なでなでしてやろう。

『中身男に撫でられて嬉しいやつはそうそういねえか…WWW

って、お？階段の間？』

神殿の端っこの方に、つまりは最後の区画に来たんだが、そこは大きな吹き抜けと共に大きな階段が遙か上に続く場所だった。

『はて？上見えないんだけどどうなってんの？いくらなんでも大きすぎやしませんか？』

どう考えても異質だ。

先程まで探検していた訳だがここは他と違う。うん確かに他もおかしかったけど、ここは一線を隔している。

だってどう考えても、いくらこの神殿が大きいからってこのサイズの階段入らんよ？

外にさつき出た訳だけどこんなモノが入るような立てられ方してるようにも見えなかったし…。

なんさ？

重要な場所なんだろうか？

『行って確かめるしかないよねー…』

のっしのっしと、この身体で階段を上っていく。

ラストダンジョンによくありそうな階段だよ。

無駄に幅拾くて、吹き抜けになってるからちよいつと視線をずらしたら下が見える。

『そんであれだ。こういう所ってゲームだと無駄に経験値くれるモンスターとか。雑魚モンスターのはずなのに無駄にカッコよかったり、大きかったりするモンスターとエンカウトするんだよね。もしくは何の尺取りだと言わんばかりに同じ景色がぐるぐるーっと

…』

・ ・ ・

尺取りの方だったか！！

長かった、無駄に長かった。

出てきたのは空中回廊みたいな所。

なんか儀式する場所っぽい。

『わっほい、あからさまに重要拠点だわさ』

中心の広場みたいな、台座がある所に行ってみる。

周囲にはよく分らん柱みたいなのとかがこの台座アンド広場を中心に浮いてたり、設置されたりしている。

そんでもって――。

『わはー。魔法陣だー』

なんかかつこいい魔法陣が広場に描かれている。

勿論台座は中心にあるぜよ。

なんかヤバげだね。

“なんか”とかそれに類似する抽象的な表現を使う俺を許してくれ。

訳が分からないんだから説明のしようが無いんだ。

ただ、これから何が起るのかは分かる。

予知能力者じゃなくても大半の人が分かるだろうさね。

『うわー、なんか光り始めたー』

ま、どうせそんなこったろつとは思ったよ。

もう驚かないぜ。

泣きそうにはなってるけど…。

辺りを光が包む。

同時に、俺の身体は宙に放り出されたかのように重力の軌くびきから解放された。

> side out <

『Stage 4：ラピュ○はホントにあったんだ…。でも俺は知らない…。
いかがでしょう？

やはり、いきなりサイズダウンしたら物足りないという方が大半で
しょうか…（笑）

でもまあしばらくはこの形になると思います。

ついでに言うと、次にあげる事が出来るのはまた2週後か、3週後
かになると思います。

だれか時間を止めてくだしあ…。

では、またお会いしましょう。

P・S・

いつもの話ですが中に出てきたあれこれにツッコンだら負けです。
ダメですよ！！絶対ですよ！！（笑）

『stage45:このー木、何の木、気になる木...』ってあからさまだなオイ、

やーはー、皆さんお久しぶりでございます。

さて、さっそく本編へ行きましょう。

ではどしどし。

『Stage45：このー木、何の木、気になる木…ってあからさまだなオイ、

>side：コウジユ<

『んでさ、どうする？』

「さあ、今生まれた私に言われましても…」

やあやあみなさんおはらっきー。

お狐様なう（？）なコウジユさんだよ。

ん？俺が話してる相手？

そうだよな気になるよな。

ってわけで話しは数時間前に戻る。

『親方あああああ！！！！空からおっきなけもみみがああああ！！！！』

現在遙か上空なう。

とりあえず、空から落ちてるって事でテンプレ的な事を言ってみる。

慣れって怖いよな。

多分上空何千メートルってところから落ちてるのにこんなに冷静でいられるんだぜ？

っていうか今更だけど落ちてる側が言うセリフではなかったな。

『うわふんっ！！！！！？』

んで、そうこうする内に地面は目の前で、轟音というか爆音？を辺りにまき散らしつつ、着地とは名ばかりのダイレクトアタックを地面に敢行した。

『痛え……』

今現在、“おつきなけものなう”なマイボディは一体どれ位の質量があるのかは知らないが、いつものごとくクレータを作ってしまった。当社比何割が増しのやつな。

痛みは不思議とないが、衝撃の瞬間に脳が大きく揺さぶられたのか、ものっそいふらふらする。今は重量あるからダメージが大きいのだろうか。

「おおーう…揺れる…この感覚は慣れねえな…って慣れちゃダメだろ！？…っつ、気持ち悪い…」

思わずセルフツッコミを発動しちゃったせいで思いっきり身体を動かしてしまい、二日酔いの時に頭を思いっきり動かしたみたいな感じに気持ち悪くなってしまった。

痛みが無いだけ良かったが、それはそれで気になるな。直接ダメージが無いのは障壁があるからか？どうせなら間接ダメージのこの気持ち悪さもどうにかしてほしかったぜマイボディ。

今は“手”が無いので頭を押さえる事も叶わないし。

やったとしてもシユールな光景にしかならねえ。あえて言うなら、『やっちゃまったぜ』って感じに頭を肉球で押さえるわんこ。

まあ見られる心配は無いっちゃないんだが、やった瞬間何かに負ける気がするのとおりあえず立ちあがる。

『っつと…、大分マシに放って来たけどそれでもまだふらつく——』

——ばきん——

えつと…何の音…？

音がしたのは足元。

俗に言う前足の下だ。

『ええ、なんか足上げ辛えんすけど…でも上げない訳にも…』

悩んだ拳句、ゆっくりと前足を上げる。

『樹…？』

樹というよりは木。樹齡何年も経っているようには見えないそれが俺の脚の下にあった。

折れた状態で。

『踏んだ…？踏んじやつた…？』

どうしようこれ…。

見事に真ん中で折れちまってる。

放置……はなんかやだな…。折ったの俺だし。

添え木とかしたら大丈夫かな？無理だな。俺の今の身体じゃ。

ってか、今の俺の身体かなり大きいのにこの木折れるだけで済むってすごいね？普通ペツチャンこになるんじゃない？

あ、ひょっとしてすごい木かなんかだったり？

いやいや、そんな訳ないか。

っと、思考が変なところに行ってたな。

ともかく、直す…治すで良いのか？とりあえず元に戻してあげたい。

『うむむ…』

どうしようか考えてる内に頭の気持ち悪さとかが治り始めた。

でもいい案は浮かばない。

それからしばらく考えてみたが、結局浮かばない。

とりあえず、頭の中を整理する為にも、一度深呼吸してみる。

ふう…。落ち着いた。ちなみに賢者タイムではないのであしからず。

んでまあ、そこでふと周りの景色をまだ見てなかった事に気づいた。落ちて気持ち悪くて、木を踏んで、どうしようか、と悩むしかまだしてなかった。

気分転換は必要だよねってことで見てみる。

現実逃避じゃないよ？

まあそんな訳でさっそく――

――うん、予想外だわ。

現実逃避できないじゃんこの景色じゃ。

あ、現実逃避って言っちゃった。まあいいや、とにかく今の状況を整理する。

とりあえず俺の前には折れた木。

獣な俺。

俺と木を中心にクレーター！。

何も無い荒野。

……荒野…？

そついや、ここどこ？今更だけど。

ぐるっと一周見ても何も無い。まるでこの場所が中心みたいなの…。

っていうか、荒野に木が一本だけって罪悪感半端ないんだけど…。

いや、他にいっぱい木があったら放置するってわけじゃないけどさ。

やっぱり、荒野の一本折っちゃったわけで…。

だから、治すって！！

治すからそんなに責めないで！？

脳内で『うわーないわー』という言葉が何度も響く。

電波とか、妄想とかその類なんだろうけど、圧倒的にこの状況で悪いのは俺だから、電波だ妄想だと振り切る事が出来ない。

とりあえず散策は後にして先にこの木をどうにかする事を決定する。

けどどうするべや？

回復系で俺が使えるそうなのと言えば…やっぱりモノメイトとかが無難

か？

けど、木だしなあ…。

メイト系はどうしても生物に対する回復というイメージがあるから微妙なラインだ。レスタによる回復も同様だ。

木も広義の意味では“生物”だけど、どちらかというと“物”に近い感覚がある。

メイト系とレスタは保留にして他にも手段が無いか考えてみる。

どうせならこの際に新しい回復魔法を練習してみる？

いやいや、いくらなんでもそれで失敗してしまうとシャレにならん。

回復が発動しただけなら良いけど爆発とかしたらヤバイ。

・ ・ ・

やばい、ヤバい事に気付いた！！俺の気のせいかもしれない！けど、割りとはかにできないレベルで可能性がある！！

え？なんのことだよって？

えっとだな…、この木なんだけどさ――

――世界樹…つまりは神木・蟠桃じゃね…？

いや、間違えだったらいんだけど、俺がさっきまで居た所って『墓守人の宮殿』っぽいつて言っただじゃん？

それでもって、確か原作で『墓守人の宮殿』ってのは魔法世界と旧世界をつなぐゲートでもあつた筈なんだよ。
ムンドウス・マギクス

なにが関係あるのかだって？

大有りだよ！！

二つの世界をつなぐゲート。ゲートってのは二つの場所をつなぐものだ。で、その二つの場所が魔法世界と旧世界。さらに細かく言うと、魔法世界の『墓守人の宮殿』の儀式場と旧世界の“世界樹（正式名称、神木・蟠桃）”だ。

つまり、この木って……orz

やらかした…。

しかも、しかもだ。

さっき俺はゲートって言ったが、確か、そのゲートってのは現実世界と魔法世界を結ぶ楔くさびでもあった筈だ。あれ？二次設定だったっけ？いや、でも、現実世界と魔法世界を結ぶゲートってだけじゃなかった筈だ。

少なくとも、原作で敵組織の“完全なる世界”コスモ・エンテレケイアがゲートの特性を利用して世界滅亡をやるうとしてた。

その原作が始まる前に目の前の世界樹（仮）が折れちゃったわけだけど…ね…。

あれ？でも世界樹が無いなら“完全なる世界”コスモ・エンテレケイアの作戦発動しないから良いんじゃない？あーでも無いなら無いで違う方法でやるか。いや、それ以前に楔つてのがマジなら原作崩壊とかいうレベルじゃないか。もうなんていうか世界崩壊？

原作開始前に世界終了のお知らせとか…orz

待て。

まだ間に合う筈だ。

この木はまだ死んじやいない。

折れただけだ。

折った犯人のくせに何言っただという声が聞こえた気がするが、
気のせいだよな。

ともかく、この木を何とかすればまだ間に合う筈だ！！

そんなこんなで再び思考タイム。

あれこれとしばらく考えると突然キューピーンと閃いた。

いわゆる逆転の発想だ。

『対象を回復出来ると考える範囲の存在にしちまえば良い…』

後にして考えれば、神様見習いとはいえ、色んなものに喧嘩売って
るこの思考。

病み始めてたんだろう。

けど、現在の俺はいつものごとくノリと勢いでこれを実行しちまう

訳だ。

ひゃっはーなうー!!

『えっと、あれは確か…来い！エリュシオン！！』

呼び出したのは一本の片手剣。セイバー精霊を呼び出すと言われ、刀身が紫色の闇で形成されており、中に誰にも読めないとされる文字が浮か
び上がる剣。

『ふふふ…こいつさえあれば…』

精霊を呼び出すって言う概念だけど、まあそのへんもノリと勢いで、
木と剣を媒体に召喚するというイメージで行おう。召喚っていうか
顕現って言った方が近いかな？アクチュアライズ！！みたいな？

ちよいと話はそのるがあのドラゴン出てくるアニメの女性陣エロす
ぎだと思う。
分かる人少ないかね？

さて話を戻す。

さっき失敗がどうか、爆発がどうか考えてた気がするけど思考
の隅にそーいしておく。

そして、手で持てないので口で挟んで上に掲げ、そこから――。

『ふらえりや（喰らえりや）！！』

木に向かって振り下ろす。

同時に、メイトシリーズで回復する事を忘れない。

そのまま召喚しても、元がぼっきんいつちゃてるからね。俺の所為だけど。ともかく召喚した精霊もぼっきん逝つちゃてる状態だとダメなので、っていうか意味無いので、グロ回避のためにもすかさず回復する。

溢れる光。

集まる力（多分魔力的なモノ）。

それらは収束し、人の形へと変わっていく。

『成功…？』

気付くと目の前には一人の少女が膝を抱えるようにして浮いている。いや少女が正解か？

薄い緑色、出てすぐの芽の様な綺麗で鮮やかなエメラルドと評していい髪に、羽根っぽい耳、緑と黒で彩られた不思議な服。ぶつちやけ、テイルズシリーズのシンフォニアに出てくる精霊マーテルさん（幼女ver）だ。

その子が抱えていた足を伸ばし、続いて目をゆっくりと開く。

開いた目は辺りを見た後、こちらを向く。

「おはようございます。独立型精霊ユニット……名前はまだありません。操作説明を行いますか？」

『ネタに走ったー！！！！？』

『でまあ、そんな訳で今に至ると…』

「誰におっしゃられているのですか？母上様」

『母上やめい。精霊化したのは俺だけど、親ってわけじゃないって言ったじゃん。そもそも折ったのも俺だし』

「いえ、自我を生み出してくれたという意味でやはり母が妥当かと。理由が何にせよ」

。そう言いながら足を折って寝転ぶ俺の首元にじゃれつく世界樹（仮）

なんで高感度こんな高いんだ？

ってかマジで母は止めて欲しい。

『ってか最初のあのネタ何で知ってたん？』

「何ででしょう？推測としては幾つかありますが、もっとも有力なものは母上様から流れ込んだ…が妥当でしょう。召喚、いえ顕現していた際に大量の魔力と共に何か流れ込みました。その私の中を満たす熱い何かが先程の言葉を言えと囁いたのです」

どこか恍惚とした表情で言う世界樹（仮）。

おい幼女。その言い方なんかエロいから止めような？

母上様って言うのも。

ところで、“流れ込んだ”ってのは何でだろ？まあテンシヨおかしかったし、初めての試みな訳だし何が起こっても不思議ではないけど。そもそも魔力すら込めた記憶ないし。

「ところで母上様」

『だから母上様やめい。で、なんだ？』

先程までの表情はどこに行ったのか突然真剣な顔でこちらを向く世界樹（仮）。

「名前を頂きたい。先程からどうもよろしくない呼ばれ方をしているようですし」

ナチュラルに人の心読むなし。

とはいえ名前か…。

確かにいつまでも世界樹（仮）ってのもあれか。

名前…名前…。

とりあえず原作通りの――。

『蟠桃「却下です」』

どうやらお気に召さないようだ。

「どうやら“原作”？とやらの神木・蟠桃という名を口にしようとしたようですが不愉快です。この見た目で蟠桃とかwwというレベルです。そもそも蟠桃って何ですか？別に桃はできませんから。それならまだ世界樹と呼ばれた方がマシですね」

おお。そして何故原作という言葉が出るし…。そんなものまで流れたん？今更だが原作って何だろうねってレベルになっちまったな。

はいはい、いつものごとく犯人は俺ですよ。

「で、なにかありませんか？ はりーはりー」

『ええー…』

side out

side：マーテル

「安直ですね」

『決めたのに…orz』

世界樹（仮）改め、マーテル・ユグドラシルです。

私は目の前の、元は男、次は少女、現お狐様な母上様（面白いのでこの呼称は継続中）に召喚もといて顕現していただきました。

最初は木であった私を折り、それを回復するために顕現してくれたようですが…。

「傷モノに…したくせに…／／／」

『おま、その言い方だと！！いや、ある意味そうだけど！！パキッとやっちゃったけど！！』

しかし、私としては今この身が意思を持ってここに居る事が出来ている。それが全てです。

「けどまあいいでしょう。それなりに考えた結果の事です。今よりこの身はマーテル・ユグドラシルと名乗ります。今後とも良しなに、母上様」

『もう俺泣いていい？母上様って言うくせにデフォルトで反抗期なこの子をどうにかしてほしい…orz』

マーテル・ユグドラシル。いわゆる元ネタのゲームと容姿が似ているというか、ほぼ同じな為にこの名前に落ち着いたようですね。

本当に安直です。

しかし、まあいいでしょう。先程も言いましたが考えてくれた結果の様ですし。

あ、そういえばこの知識…、母上様から流れてきたものと推測しています。それにしても不思議な感覚でした。

少しおかしいテンションでやった結果かもと本人は言っていました。が、私の意思が顕在化した時、つまりはこの知識が流れ込んだ時、まるで第三者が手を加えたような…。

ふむ…、これはただの感覚ですし、あの場には母上様、そして私しか居なかった筈です。

流れ込んだ知識の中で答えが見つかるかもしれませんが、途切れ途切れな上に膨大な量。何故か原作知識と呼ばれるモノや、ネタ知識というものはハッキリとしているのが誰かが選別したかのようですが、これは第三者というものを仮定したなすり付けや思い込みに近い考え方ですね。

偶然…そう、偶然としましょう。

今の所は…ですが…。

さてさて、母上様で遊ぶことを再開しましょう。

ふふふ、さあどうしましょうか。

s i d e o u t

『stage45:このー木、何の木、気になる木…ってあからさまだなオイ、

どうだったでしょう？

久々に更新したと思ったたらまた無茶しやがって…と思われる方が大半ですかね？（笑）

さて、世界樹の精霊化はやってみたかった一つです。

性格に関しては元ネタと全然違う事になってしまいました…、何ででしょう？

私にも謎です。

当初はほんわか系の筈だったのに…。

まあいつかwww

やりたい事は他にもまだまだあるのでちょこちょこ出せて良ければ
って感じですね。

さてさて、今回話の中でゲートに関する話を出しましたが、現在手
元に原作が無い状態、さらに、原作自体がクライマックスという事

で色々とずれが出て来てしまうという事もあるかもしれません。
そういう場合は直していくので、気付いたら前読んだ時と内容違
じゃねえかって事もあるかもしれないかもしれませんがご許ください。――
――

あ、現時点でおかしい表現していたらどうぞツッコみください。

作者の都合になりますが、直していききたいと思います。

はあ、時間止まんないかな……。時間が欲しい――！

ってなわけで、今回はここで失礼します。

ではでは（＾Ｏ＾）ノシ

『Stage:???』

IS編

「ISってあれか?」いっぺん死んでみる

分かってます。みなさんが仰りたい事はよく分かります。

本編書けやと。続きどうしたと。

すいません。忙しくてまだ欠けて無いのでござる…(、・ω・、)

そのためつなぎ的な意味で、以前から脳内妄想を形にしてみました
この話を晒そうかと思いました。

ただし!!この話は作者の妄想が著しく厨二もいい加減にしろよと
いう事に、また、設定等がどこ行ったといったもない様になってお
ります。

設定としては幾つかの世界を渡った後にこの世界へというモノとな
っております。

最後にもう一度、厨二病の濃さにお気を付けてください!!

では。

『stage:???』

IS編

「ISってあれか?」いっぺん死んでみる

「今度はISの世界じゃ」

「ちなみに能力制限が当然ありますよ」

「はいはい了解」

「なんじゃ、えらく反応が薄いのう」

「こつ何回もやってると当たり前だろjk」

「つまらん」

「まったくですね。あ、光夜様!!」

ひそひそひそ…」

「承認するのじゃ」

「な、なんだ?

つておい!!なんだその釘バツト!!なんか血が付いてるし!!」

「いってらっしゃいなあ」

「あでゅーです」

「痛つてて…どこだここ…なんかの研究室…？」

「誰？」

どこの不思議の国のアリスですか？

「えっと、通りすがりの魔法使い…とか言ってみちゃったりして…
…だめ？」

「……」

「えーっと…」

「…面白そうかも」

「え…？」

俺が出会ったのはアリスな服を着てる研究室には似合わない少女。

名前は篠ノ乃束。
しののたはね

インフィニット・ストラトス

ISを作り上げた天才にして、この世界を作り替えた天才。

ISとは宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。だが、いつしかISは宇宙に出ることなく、地上で活躍し出した――

――兵器として。

それが製作者の意図してのモノなのか予想外の事なのか、本人以外知る者はいないだろう。

ただ一つ言えるとすればISとは兵器と言われるだけあり、一機あれば国一つ滅ぼすなど容易いと言える事だろうか。

それほどの技術。欲しがらない国はない。ISのコアと呼ばれる、代替のない部分は数が決まっており、それぞれの国家が保有するところが決まる。

そうして世界は変わった。

ISは様々な国家や団体の思惑が重なり、スポーツとなった。同時にその結果が国家の権威を示し、自国を優位に立たせるためのモノとなった。

ただ一つ問題があるとすれば、ISは女性出ないと動かす事が出来

ない。

女性優位の世界が生まれるのは当然と言えよう。

あゝ、つまりなんだ。俺が言いたいののはだな。転移そうそうこの人に会うつてのは最初っからクライマックスってことだな。

「へえゝ異世界人なんだ」

「ちがいm…「あ、ちなみに言わなくても分かるから」どうやってんだよ…」

「とりあえずなんか面白そうな匂いがするねゝ。あ、そっだ。ちーちゃんと一緒に実験付き合ってくれない？」

「実験…？」

「うん、そっ」

うわゝ、すんげーいい笑顔…。やめてくんない？可愛いけど怖いから。

「ま、聞いてくれるはずもないわな」

その後、束っちとちーちゃんこと織斑千冬おりむらちふゆと色々していく事になった。

あ、ちなみに、どうやら時代的にはISの発表はまだみたいだな。作ってる段階なそうな。

どつりでちーちゃん（仲良くなったから束っちと2人そう呼んでる。殴られるけど）がまだ“お姉さま”になってないわけだ。カリスマはやたらあるけど。

「コウジユ…そっちはどうだ…？」

「余裕」そっちは？」

「誰に聞いている？」

「そいつは申し訳ない（笑）」

そつこうする内に発表の時期が来た。

いや、発表自体は終わってる。

今からやるのはその力を知らしめること。

どうやるかって？

偶然にも各国からミサイルが一斉に俺達が居る、そしてISが作られている国——日本——に向かって発射された。

その数は十や二十ではきかない。百や千でもない。その数は軽く五千発。原作確か二千だったような

…多くな？そしてたまたま海岸沿いに演習に来ていた俺達が丁度いいし落とす事になったわけさ。

「お、見えてきたな—」

「とは言ってもまだまだ何キロも先だな…。

見えるのはこれがあるから…お前は肉眼だったな…？」

「んあ？なんか言った？」

どこか疲れたように言うちーちゃん。

俺のせい？ワロスwww

「それよりどうする？」

「順番？じゃあ、じゃんけんポン！！」

「…私からか」

そう言った瞬間には、もうミサイル軍に向かって飛んでいくちーちゃん。

俺の出番無いかね？

まあ無いに越したことないけど——っておろ？反対側にも来たんだけど…。フラグっちまったか？

とりあえず、こっちでやるかね？

「おーいちーちゃん」

プライベート通信——とは言ってもまだ俺らしかIS乗りはいないが、それを聞く。

『なんだ？あと、後で殴る』

「それは勘弁。いや、こっちにも来たからこっちはやっとかぜい？」

『了解だ』

そうして今度は自分がミサイル軍へ飛び立つ。

俺の装備（IS）『まほろし幻星』

名前で分かる人もいるだろうがPSP02のファンタシースターの部分を適当に漢字2文字にしてあるだけだ。PSP02の装備を使っただけこの名前が良いと思ったんだ。束が漢字じゃないとダメって言ったから試行錯誤した結果とかでは断じてない。

つまりは、ほとんど俺自身の能力なわけだ。IS自体の能力は絶対防御と足場位かね？あとは細かい通信とかかな…。

装甲はキャスト装備の流用…っと。

なになに、ハイパーセンサー？生身で十分ですけど何か？

あーちなみに足場っていうのは、このISに飛ぶ能力が無いわけで、そのために、反重力なんたらでそのたびに足場を作って跳んだり走ったりを空中でできるようにしてある。

なんで飛べないのかって？

それは、何て言うか物足りないからかな。自分で翼出して飛んでた方が速いし、走るのも俺自身の方が速い。だから足場だけIS頼みなんさ。この世界じゃ翼も虚空瞬動やらの異能系は封印だからな。

つまりぶっちゃけちゃうとフェイクだ。あたかも攻撃がISによって制御されてるかのようにしてあるんさね。

ごめん、また嘘ついた。

実際は飛ぶのに違和感バリバリで走れるようにしたら、PICでの足場作りや反動とかの慣性制御やらなんやらにISCコアのエネルギーがほとんど喰われちゃった結果、武器は自前のモノをつてなった

パッシブ・イナーシャル・キャンセラー

わけだ。仮にも神様（仮）だからね。ついでに言つとビーストだからね。俺の身体能力にISが悲鳴あげちゃうんですよ。全力全開で足場作つて空中を跳び跳ねでもしようものならすぐにエネルギー無くなっちゃうたりする。裏技が一応あるけど、それを使わなかったら一歩目で派手にぱーんつと逝つてしまう。

はいそこIS乗る意味あるの？とか言わない！！

乗りたかつたんだから仕方ないじゃないか！！ISとして微妙な事になつてるのは否定できないけど！！

次に見た目はと言うと、見た目も

ISとしては異形かな？

PSP02の『エターナルフォーム』を基に、形状がISっぽくなるように束つちが調整してくれた。ああ、ちなみに『エターナルフォーム』ってのは、天使をモチーフに翼をイメージしたパーツを各部に配置した衣装（？）だ。

エターナルフォースじゃないぞ？ブリザードとか後ろに付けんなよ？

それを他のISみたいに色んなパーツを付けたりして、俺の身長である121cmそのままの『エターナルフォーム』だと小さいにもほどがあるんで大きくしてある。

でもまあ、それでも全長2Mと、3MクラスのサイズがあるIS達の中では小さいし、走るために足の装甲とかも小さいからスリムだ。

アンロック・ユニット
否固定浮遊部位は、全て翼をイメージした細身のブースターにしてある。

最初に付けてくれた攻撃用のごついやつは正直邪魔になったんで外した（笑）

外した時に束つちが不機嫌になってお詫びにコスプレ大会させられたのは忘れたい事実だ。それでもってちーちゃんも巻き添え食らったのは内緒だ。

んで最後に、武装の方はというと、異能系統についての制限がこの世界の科学技術で再現可能なら使用可能だが、概念の使用やは当然ながら使用不可だ。

だがしかし、ISには量子変換という技術を持つてして武装を量子の状態で保有、格納できる。簡単に言えば所持量は少ないけど王の財宝だ。

つまり俺の倉庫は使えるわけだ。勿論、俺の方はISに入れるんじゃないって俺自身の力で量子変換ばく出してるだけなので現界は無い。剣だろうが弓だろうが銃だろうが、現代兵器っぽい見た目（ここは普通に制限付いてた）のものならいくらでも出せる。

さて、まとめに入ろうか。この幻星は足場の生成の連続使用、ならびに俺の身体能力マックスでの過負荷がなければエネルギーはほとんど減らない。あとはダメージさえ受けなければかなり燃費が良い部類に入と思う。攻撃関係は俺自身の力だからな。まあ大半の攻撃は避けられるからあんまり関係ないか。むしろ、避ける際の俺の身体能力をISが慣性制御する事でエネルギー系が減っていったりする。そこまでの回避を早々求められはしないのが幸いといったところか。

ま、そんなわけで長々と言って、結局何が言いたいかというと――

「チート万歳www」

――拠点防衛なら俺に制限は無いということだ。

俺はいつしかやったように、大量の重火器を辺りに出現させる。

「おおー、揃いも揃ってわらわらと――」

――来やがって。

「ハイマツフルバースト!!!!!!」

SEOD開放したりはできないけど、一斉射撃を開始する。

かなり離れているが、ミサイルの量が量だ。
爆破音がすごい。

「汚え花火だ…」

決まった！！

このセリフこういう時に似合いすぎじゃね？

まあミサイルっていう名の一発で何百万単位の諭吉さん飛んでく花火だけだね？

あー、超気持ちいい。

最近こつこつやって無かったから解放感が半端無い。これなら少しは残して単一仕様能力で遊んでも良かったかも…。

え？どんな能力かだつて？

禁則事項だぜ！！

うわ！？ちょ！？そんなの投げないで！！？ごめんなさい！！調子に乗りました！！

言います！！言いますからそんなのダメ、あ、アーツ！！！！

えー、ごほん、俺のISの単一仕様能力の名前は、その名も『千裂白虎』だ。

これは、名前から分かる人もいるかもしれないが、というかさっきの説明の中でいっ——。

『しゅーりょー。全部落としたね。そんなわけで戻ってきてねーちゃん、ちーちゃん』

おっと、終わりみたいだな。言えない事が残念だ。ゴメンな。

って俺は誰に言ってるのだろうか…。

まあいいや。

とにかく戻ろう。

「りょーかい」

『分かった。ああそれと、東、お前も帰ったら一発だ』

俺の声に続いて、通信を通してちーちゃんも戻る事を告げる。ついでに殴る事も。

『そんな〜』

「あはははwww」

『コウジユ、お前もだと覚えてるか？』

「そんな〜」

くそう、そう言えばさっきそんな事言ってたな…。

忘れていたかったぜ、その事実。

その後すぐに、世界はISの存在を認めた。認めざるを得なかった。当然であろう。発表時に添付されていた性能は夢物語だと思ってい
たら真実。それどころかそれ以上のスペックがある事を、たった二
機で世界に知らしめたのだ。

数千はあったミサイルをたった二機で全て落とし日本の本土を守つ
た英雄。後にこの本土防衛を『白騎士事件』と呼ぶほどの歴史を刻
みつけた。原作ではちーちゃん一人で白騎士事件だが、俺も基本色
は白だからこの度めでたく白騎士の1人となっていたりする。

まあ実際には、認めざるを得なかった背景として、各国がこの二機
を捕獲しようとか戦闘機や考えられる限りの兵器を用いて捕獲しよう
としたがかする事すらなく全滅してしまった為という部分もある。
これは歴史の闇に葬られてしまった為、知る者はほぼ居ないが…。

世界に広まったISという技術。当然各国が求め、開発者である束
つちが日本国籍であったことから、日本に各国が今度は外交的にア
プローチした。それらはアラスカ条約、正式名称「IS運用協定」
を結ぶに至り、技術独占を日本にしないよう情報開示とその共有な
どを取り決めた。

そして、そのアラスカ条約の元、世界は一気にISが支配する世界
へと変わる。

ISは特別な技術が必要である為、IS学園を作り、各国は貪欲に
知識を求めた。

『モンド・グロッソ』と呼ばれる世界大会を作り、技術を知らしめ、
各国への抑止力とした。

各国に渡された、ISの核となるコアは全部で467個と限られて
いる。

IS操縦者となれるのは女性だけ。

これらも十分に世界を変えた。

世界最強の兵器を扱えるのは女性だけ、当然という他無い。

コアが限られているのだから当然ISの搭乗者も絞られる。競うよ
うにしてISという権利を求め、一種のブランドたりえるのも当然
だろうな。

元男としてはかなり複雑な気分ではある。

世の中の男性諸君強く生きてくれ…。

！？

ちょっと待て！！俺！！

なんでも男やめたみたいない方になってんの！？

危ない…何という罫…。

男性諸君！！さっきのは取り消す！！
共にがんばろう！！

でもその一方で、俺自身としてはこうなった原因を取り除く気には
なれない。

これは原作ではなく、この世界の束っちゃちーちゃん達に触れ合う
事で知った事が所以である。

篠ノ乃束という子は根本的に、めんどくさい事はしない主義だ。
そんな子がなんでIS何ていう技術を作って、更にそれを世界に知
らしめる必要がある？

改めて言おう。篠ノ乃束は面倒な事はしない主義だ。けど、例外が
ある。

それが自分の世界を構成する誰かが関わった時。

束の世界を構成するのはいつだって大事な人達だけ。妹の筈に、ちーちゃんこと織斑千冬、その弟の一夏、今は俺も入れてくれてるようだが、たったそれだけだ。

たったそれだけだが、束にとってはそれで十分だ。

十分世界を作り替える理由になる。

他の人からしたら自分勝手と思われるかもしれない。

けど、束は大事な人の為なら世界を作り替えることもいとわない。俺はそんな束を否定する気にはなれない。

えっと…暗くなっちまったな。

とにかく、束の大事な人を“何か”から守るために行った訳で、俺はこの世界を否定する気はない。

とはいえ、男を奴隷のように扱う部分はそんな部分とは関係なしに腹が立つのではあるがね？

だからやっぱり男性諸君には頑張ってもらえないのだろうか？

あ、忘れてたけど、原作はそんな女性優位となった世界で唯一ISを使える男として、ちーちゃんの弟の一夏くんが活躍するお話です。

一夏エ… W W W

いや実際に一夏君には何回も会ったけど、あれは一級フラグ建築士

の臭いがぶんぶんする。

だからあんまり深く考えないようにしてたから忘れてた。

普通に良い子なんだけど、行動や言動の節々にフラグ建築を始めやがる。それも天然で、突然にだ。

あれは危なすぎる…／／／

ゲフンゲフン！！

今のは無し！！忘れてくれ！！

「こーちゃん。早く来て手伝ってくれない？また罰ゲームやりたい？」

回想しながら我ながら濃い日々を過ごして来たなーと灌漑にふけていたらアリスもどきが俺の前で、物騒な事を言い始めた。

「ちょ！？シャレにならないからやめて！？
いい加減恥ずかしさで死ぬ俺！？」

あ、今？言ってなかったっけ？

今はさっきも言ったISの世界大会『モンド・グロッソ』第二回大会です。

飛びすぎ？

稀によくある。

気にするなwww

「いい加減集中してくれないかな？かなー？」

「それ気にいったのか？教えたの俺だけどやめてくれない？正直鳥肌がインフィニティ状態っす…」

「だったら早く準備！！ちーちゃんは終わってるんだからね！！」

「はいはい」と

現在、第二回『モンド・グロッソ』準決勝。

まさかの、準決勝で前回大会優勝者とのバトル。

前回は諸事情で出なかったんだよねー。

いつか話す時が来るのであろうか？

まいつか。

準備できた俺は、フィールドに飛び出る。

俺のISは浮遊が出来ない為、空中に居るちーちゃんの目の前で足場を作成して降り立つ。

「やっと来たか」

「ちよつと諸事情で…」

「どうせぼつつとしていたんだろ」

「何故分かったし」

「当然だ。お前とは短くない時間を過ごした私だぞ？」

何この人。カッコよすぎて惚れそうなんですけど…。

というか、弟君のあれは姉弟セットで持ってたんですね。

天然カリスマ？とでも言えば良いのかわからんが、とにかく怖いよ。

「事実だけど、俺がそのセリフ言ったら恥ずかしさで死ぬるかも」

「…ほう？」

あれ？なんか地雷踏んだ？

「待たせておいてその言い草が。
良いだろう。」

終わってから一発と思っていたが、この試合中に嫌というほど叩き
こんでやろう」

あ、あは、あはははは…。

ちーちゃんはその手に持つブレード（雪片）を構え直し、怪しく光
らせる。

オワタ…orz

「待てえっ！！！！」

「待てと言われて待つやつが居るかあっ！！！！」

逃走中なう。

まさか、待てと言われてのくだりを俺が言っことなるとは思わなんだ。

ってうおわっ！！！！？

か、カスッた！！

今カスッた！！！！

「ちっ……」

舌打ちやめてえ！！

後ろから魔王が迫ってくるよ！？

なんて、遙か彼方に過ぎ去った記憶にある曲の一説を引用しながら言ったところで事態が好転するわけもないな。

「ハアッ！！」

ふあっ！？

あぶねえって！！

今の軽く首チヨンパものだったんじゃない？

白いのに黒い！！

装甲の白が嘘のようにオーラとかが黒い！！

「フフ…」

なんか笑い始めたああああ！？

え、どうゆうこと！？

なんで笑ってんの！？

ちーちゃんは突如止まり、俺を追いかけるのを止めた。
俺も合わせて、恐る恐るではあるが止まる。

「えと、どしたん？」

戦々恐々としながら、同じ高さまで近づき声をかける。

髪で眼の辺りに影がさしていて、口元が笑っているだけなのでかなりこわいっす。

「いやなに…」

そう言いながら、顔を上げたちーちゃんの様子は先程までとは打って変わったものだった。

浮かぶ感情は――

「お前と競い合うというのが久しぶりだと気づいてな。心踊ると言ったところだ」

――ただ楽しいというもの。

まったく、戦闘狂かつての……。

だが、元々美人さんなこともあって、見慣れない者が見ると一瞬で虜になるであろうある種獰猛と言って良い笑み。

いや、見慣れてても止まってしまうか。実際今の俺は止まってしまった。

そらお姉さまと呼ばれるわけだ。

まったく――。

「まったく千冬さんは男前だね」

だが同時に、俺の中で何かが目覚める。

ドクンと……。

「誉め言葉か？」

何か？

は、何をいつてるんだか…。

「誉め言葉だよ」

目覚めたのは、いや、吠えて叫んで餓えているのは獣だ。

この世界に来て、出てくる場所の無かった俺自身。

どこの厨二病だと自分でも思う。

戦闘狂とか他人に言えねえじゃねえかとも思う。

だけでもう無理だ。

あの笑みを見た瞬間、俺の心臓は早鐘の様に鼓動を早め、今もドクンと自己主張を続けている。

文章だけ見ればどこの色恋話だって話だが、そんなもんじゃない。

ずっとしてなかったからか、戦え^{やれやれ}闘えと煩い。

けど、そんな自分は嫌じゃない。

「コウジユ、瞳孔が開いているぞ」

「それを見て喜んでるのは何処の誰だ？」

「やっと本気になったわけか」

「あんな笑みを見たらどうしようもなくな…」

「嬉しい限りだ」

「戦闘狂め」

「お前が言っな」

「違うない」

俺は、本気でいくために装甲の幾つかをパージ、格納する。

「使うのか？」

「あつたりまえじゃん」

「本気か？」

「本気じゃないと意味ないっしょ？」

「本当に嬉しい限りだ」

先程までの俺はもうどこかに行ってしまった。
今ここにいるのは一匹の獣だ。

俺もちーちゃんと同じ様な笑みを浮かべていることだろう。

俺は続いて、ある武器を呼び出す。

呼び出すのは巨大で、少し変わった籠手。

全体的に白く、そしてそこに黒い横シマのデザイン。籠手の先は、人の腕の形はしておらず、蒼く美しい突起が4つ付いている。まさしくそれは爪のそれだ。

PSP02の武器のから、セイクリッドダスターやカザミノコテ等を流用して作った。

それを腕に着ける。巨大とは言っても、ISのサイズから考えたらちょうど良いそれを着けた俺の姿は獣を彷彿させるものになっているはずだ。

いつだったか言いそびれていたな。

センレッドヤッコ
『千裂白虎』

ワンオフ・アビリティー
俺の単一仕様能力だ。

通常なら第二形態から発現するものだが、この機体は前にも言ったが異質だ。ISの常識など通用しない。だから、この機体も第一形態時から単一仕様能力が使える。それを今発動する。

「行くぜ…？」

俺は前に倒れるように姿勢を低くしていき、地上と身体が平行になる位に倒れた時に思いっきり自分の愛機が作り出す仮の地面を蹴る。

> side out <

> side : 千冬 <

目の前からコウジュが消えた。

比喩的な表現ではなく、文字通りだ。

『千裂白虎』——、久しぶりに見るな。

いや、見えてはいないか。

消えたのだから。

見えない理由は単純だ。

ただ速すぎて見えないだけ。

「っ!!」

感覚を頼りに右手に持つ剣『雪片』をそのまま右方へ斬り上げるように振るう。

ギーン!!と甲高い音が響く。

振るった右腕に思い感覚が余韻を残している。

なんとかいけるか…?

自分らしくもない疑問を持つ。しかし仕方ないだろう。あいつのスピードは生半可じゃない。

実際私の眼にはさっきから何も写っていない。

「はっ!!」

再び感覚を頼りに後方へ振り返りざまに雪片を振るう。

今度も何とか反応出来たな。

まったく、ひどい単一仕様能力を発現してくれたものだ。

いや、解放か…。

なにせ単一仕様能力とは名ばかりで、ただ単に身体能力全開で移動ワンオフ・アビリティーしているだけなのだから。幻星自体がコウジユに適応しようとして、なんとか完全開放を時間制限つきではあるが行えるようにした結果…という見方をすれば単一仕様能力ではあるかもしれんが、通常の単一仕様能力とは根本が違うから微妙な所だ。

それにしても、改めて思うが自身のISのシールドエネルギーを削りながらの高速移動。

私の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）に似ている。

だが私のモノはあくまでこの機体の能力。

しかしコウジユの方は自前だ。ISに頑張らせるとかもう意味が分からない。

チートというモノのひどさをこれを使われる度に思う。

なにせ搭載されているハイパーセンサーによる知覚補佐があってもほとんど意味が無い。

対応できているのはただの勘だ。

それなりにコウジユと付き合いも長い。

言葉にできるほどではないが癖も分かるし、この千裂白虎状態のコウジユと戦闘を行うのは何度も行っている。

「くっ!!」

左右ほぼ同時に攻撃が来る感覚があったため慌てて後方に下がりとつ、攻撃が来るであろう両側に雪片を振るう。

しかし、片方を弾ききれなかったのかシールド残量が消費されている。

「相も変わらずの速さだな」

『じゃあこちらは相も変わらない戦闘センスだと褒めとくよ』

通信越しに声が届く。

自分の事のように嬉しそうに言うコウジユに私自身も嬉しくなる。あいつはなんだかんだ言いながら戦闘を楽しむ癖がある。本当に痛いのは嫌いな様だが、スポーツのような試合は好きな部類だろう。本人はやけに否定するがな…。

そして、この状況は楽しい。

あいつが来る事を勘を頼りに知るしかないが、それでも楽しい。

私はコウジユが千裂白虎を発動してからほとんどその場を動いていない。

それは何故か？

動く意味が無いからだ。

私が現在使用しているこの機体、暮桜は確かに、そこらのISとは比べようもない位の速度を誇る。

しかし、コウジユの幻星まぼろしの前には意味を持たない。むしろ現状においては無用の長物だ。

動けば動く程にその分に思考が割かれ、隙を大きくしてしまう。

だからこうして、来る瞬間に合わせて剣を振るう。

“まぼろし”とはよく言ったものだ。そこに居る筈なのに居ない。居たと思っても次の瞬間には文字通り幻のごとく姿を消している。

先程から何度も仕掛けてくるが、何とか凌いでいる。

とはいえ、勿論このままだとジリ貧だ。私のシールドエネルギーは削られていく一方だからな。

だからと言って負ける気はそうそうない。

こちらにも単一仕様能力は存在する。

それも一撃で相手のシールドエネルギーを削ることが可能なものがない。

私はそれを当てる事が出来る瞬間を待てば良い。

いつもと同じパターンだ。

だがこれで良い。

シンプルだが、だからこそその効果がある。

さあ来いコウジユ。一太刀の元に斬り伏せてみせよう。

> s i d e o u t <

> s i d e : コウジユ <

あれから時が流れた…。

え？モンド・グロッソはどうしたって？

うん、負けちゃったぜww

いやーなんであのタイミングで零落白夜、エネルギー消滅斬撃を俺に当てれるのかね？光速とまではいかなくともかなり速さには自信あつただけだね。

なんていうか公式チート？ちーちゃんは良く俺に理不尽とか色々言ってくるけど、俺のはあくまで種族とか能力とかがあるからだ。けどちーちゃんは普通の人間だし、この世界には能力とか無いのにあるんだ。どこぞの戦闘民族か？小太刀二刀流とか使いださんよな？

んで、その後は警戒してはいたんだが結局一夏が攫われて、俺一人で助けに行くからお前は優勝しろってちーちゃんに言っただが結局来ちゃって、2位ちーちゃん、3位俺に相成った。

あ、ちなみに言うの忘れてたと思うけど、白騎士事件の時も、モンド・グロッソの時も俺はバイザーで顔を隠していた。

お偉いさん方は幻星の中の人が俺ってのは知ってるけど一般には知られていない。

3位はこの誰だと噂やら某掲示板がすごい事にww

え？なんで正体を隠すのかって？その方がかつこいいからに決まってるじゃん（キリッ

うん、正直に言うね。ちよいと厨二病な黒歴史を作っちゃったから表に出たくないんだ！！

ごほん…。

もう一個報告する事あった。って言うかこれは随分前なんだが、俺が元男だっっていうのがちーちゃんと束つちにバレた。いや、正確には知られていた？束つちは予測できたらしいし、ちーちゃんは勘って言ってた。それで確かめるためにカマを掛けられてアボンです。

それからコスプレショーの罰ゲームとかが増えたのは言うまでもない。

「あの……」

「ん？ああ悪い。さて、初めましてだな。今日から君らの担任として色々教えていく事になるコウジスフィール・フォン・アインツベルンだ。後ろ長えからコウジユ先生で良いぞ」

あ、すっかり思考の海に浸ってしまっていた。

思考を戻そう。挨拶もまだだったしな。

そう。今日から俺は先生だ。

「え、あんなに小さいのに……」

「何才なんだろ……」

「身長と一部がおかしい……」

「けもみみ……？」

「テイクアウトはok……？」

ちなみに俺の担当は1年2組。ちーちゃん担当の1組の隣……なんだが……そろそろ突っ込もうか。

ちっさい言っな！！歳は一万年は超えてるよ！！身体的特徴はほつとけ！！その手の動き止めい！！アウトだよつ！！

……つと、まあ実際に突っ込める訳もないので、心の中だけで叫ぶ。

「まあ見た目的に教師にゃあ見えんかも知れんがよろしくな。授業もしっかり覚えるんなら適当にやりゃあ良いよ。ただし、授業妨害をしたらネギの刑だ」

「「「「「ネギ?」「」「」「」

クラス全員が同時に疑問を口にする。

まあネギまの時もそうだったが初見じゃわからんよな。

だもんで説明しようと思ったたら隣から――。

『キヤアアアアア――!!!!!!』

と、悲鳴というか雄たけびというか、歓声?が聞こえてきた。

はあ…、そういえばこれも言うの忘れてたな。モンド・グロツソ後、ちーちゃんはめでたく“お姉さま”になっちまった。つまりは“C H I H U Y U”になっちまったわけだ。

だから隣のクラスでは、職員室で用事があつたから遅れてきたちーちゃんに隣の子たちは今まさに対面して興奮マックスってわけだ。

まあいいさ。あのカツコよさに惚れちまったんなら仕方ない。

ただ――。

問題は、その隣のクラスの声に反応する子たちがこのクラスにも居たことだ。

「「「千冬さまっ!?!ヒッ!?!?」「」

思わずといった感じに立ち上がった生徒が三人居た。

先の声はその子達だ。

じゃあなんで最後に悲鳴が上がったか…だが…俺が投げたからだ。
顔のぎりぎり横を通り過ぎるようにな。今は後ろの壁にビインと
いう音と共に突き刺さっている。

何が？

もちろんネギだよwww

「さあ、俺の挨拶は終わりだ。今度は君らの自己紹介を始めようか。
ああ、その君ら座っていいぜ。ただし、隣のクラスには休み時間
に行きな」

「「「は、はい…」」」

さて、ここからは飛ばし飛ばしで行くでしょう。

疲れたとかそういうのではない。ただ単にイベントが少ないだけだ。
だって主人公隣のクラスだもんよ。

そんな訳でドン。

（セシリア編）

カット！！ww

特に関わって無いな。

精々イチー（一夏）に久々に会って、ここで先生やってる事を驚かれて、フラグ：立てられそうになって：何故か一緒にこけるという状況で押し倒される形になって、ついでに言うといッチーの手は何故か俺の胸の上に…。

ネギで全力で殴っちまったが問題は無い筈だ！！

ていうかあいつ、殴られる寸前に『山田先生と…』とかボソツと言いやがった！！

追撃のもう一発を当然入れた。

で、まあ、気絶させちゃったせいで稽古が遅れたんで、教師特権で

稽古手伝って上げたりした。

あとは…ああ、のほほんちゃんと仲良くなったね。

いわゆるケモ耳仲間だ。

俺のはモノホンだけどなww

後は…、合同授業か…いや特には無かったわ（笑）

で、イッチー対セシリアは原作通りセシリアの勝ちで終わり。

けど、なんであの時イッチーってば、一次移行の後の負けられないのセリフの時にちーちゃんと一緒に俺の名前出したん？

はて…？

まあいつか。

んじゃ次。

（セカンド幼馴染編）

「授業はもう始まっているぞ。さっさと戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ。何だもう一発貰いたいのか？」

「ちよいたんまだ。ちーちゃん」

「コウジユ先生。助けにk——」

「俺がやるww」

スパーン！！

・ ・ ・

「いっぺん氏ね。死ねじゃなくて氏ね」

「ちょ、コウ姉さん！？なんで!?!」

「それが理解できないからだろ？」

「ライバルとはいえ、涙を誘うな……私も頑張らねば……」

「ん？筈なんか言ってたか？」

「い、いやっ何でもないぞ!!」

「てめえ、人の話聞けよこらあ!!」

スパアアン!!

・ ・ ・

「なあ鳳」

「なんですか？」

「頭のそれ…ザザミ装備に似たのなかったっけ？」

「違うわよ!!」

・ ・ ・

で、問題の無人機乱入。

え、凰戦？そんなものは無かったww

『一夏！あたしが援護するから突っ込みなさいよ！武器それしかないんでしょ？』

『その通りだ。じゃあそれで行くか』

通信を通して、教師陣が引けるモニター室に響くイッチーと凰の声。続けて聞こえるのは映し出された映像に遜色無い戦闘音だ。

「もしもし織斑君！？織斑君聞こえてます！？凰さんも聞いてます！？」

そこにやはり心配なのかヤマヤこと山田マヤ先生がお折り返しの通信を二人に入れる。

「本人たちががやると言っているのだから、やらせてみても良いだろう」

「織斑先生！？何をのんきな…」

「落ちつけ」

そんなヤマヤに、ちーちゃんが微笑と共に言う。

パツと見は元が美人なだけあつて綺麗な微笑みだ。

けど、長年の付き合いで分かるようになったがこれは原作通り…。

「こういう時はコーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラする」

あゝあ、やつちゃった。

「先生…それ塩です…」

「……／／」

「あいつかわらず、ちーちゃんは可愛いなww」

思わず口に出してしまった。

それがいけなかった。

「今は織斑先生とお呼びください。アインツベルン先生？それと、私は冗談がきらいです」

そう言つて、ちーちゃんは俺の頭を掴んで――。

「にゅあああああああ！！！！！！？熱つちいいいい！！！！」

塩コーヒーを流し込まれた。俺は猫舌なんだ！！！！幸いな事に味は感じないが、のわあああああ！！！！

近くにあつたお水を一気飲みする。

「照れ隠しにしてもひどいぜい」

「何かおっしゃりましたか？」

「いえ何も!!」

そんな漫才をしている間にディスプレイに映る状況は変わっていたようだ。

「一夏さん!!」

「一夏!!」

セシリアと箒が画面に向かって叫ぶ。

おっと、こいつはやばいかな？

「ちーちゃん、ちょこつとまだ舌がヒリヒリするから保健室行ってくるわ」

「だから織斑s…いや、行ってきたくれ。あとは頼む」

「おーらい」

そう言って俺は部屋を出る。

勿論行く先は——ね？

>side:セシリア<

コウジユ先生つたらこのタイミング保健室だなんて！！信じられま
せんわ！！

こうなったら私が！！

「織斑先生！！私にISの使用許可を！！」

「そうしたいところだがな…これを見る」

そう言つて織斑先生は空中投影ディスプレイにある情報を浮かばせ
る。

「遮断シールドがレベル4に…？」

驚愕と共に筭さんが口に出したその情報はISを使用できたところ
で一夏さん達が闘っているアリーナ内部へ入れない事を示している。

更には扉が全てロックされている。

本来、アリーナでIS戦を行う際に余波や流れ弾から観客席等を守
る筈のシールドが、今は一夏さん達を閉じ込める檻へと、助けを阻
む壁へとなり果ててしまっているということ。

これでは…。

「あのISの仕業…」

「そうだろう。これでは避難する事も、救援に向かう事も出来ない………一名を覗いてな……」

最後にボソツと織斑先生が何かをおっしゃった様ですが、失礼ながら私の眼は既にディスプレイの方へ戻り、一夏さんへ意識が言ってしまった。

どうすれば、あ、そうですわ……！

「でしたら政府への救援を……！」

「既にやっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できればすぐにでも部隊を突入させる」

ということは……。

「待っていることしかできないのですね……」

「何、どちらにしろお前は突入部隊には入れないから安心しろ」

え……？

「なんですって……！？」

「お前のブルー・ティアーズは一对複数向きだ。お前が複数の方に入ればむしろ邪魔になる」

「そんな事はありませんわ……！この私が邪魔など……！」

「では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連続稼働時間は？」

あう…。

「分かりました…。もう結構です」

「分かれば良い」

はう…。

織斑先生に言葉で潰された時に頭を落としていたので再び顔をディスプレイへ向ける。

そこには凰さんの援護にまぎれ何度も敵に迫る一夏さん。しかし攻めあぐねているのか決定打を全然入れられていない。

「こういう時はもどかしいな。一時期は最強とうたわれてはいたが、ISが無ければただの女でしかない」

「織斑先生…」

微笑みながら余裕をもってそうおっしゃる先生ですが、先程の件で助けに行けない自分をとてももどかしく思っていらっしゃるのは明白ですわ。

そんな思考に陥っていると、突然声がスピーカーに乗って響く。

『一夏！！男たるもの、その程度の相手に勝てなくて何とする！！』

箒さん！？

響いてきた声は今の今まで一緒に居た箒の箒さんの声。

いつの間に！？

「ち、篠ノ乃め…。やはりあいつの妹なだけはある！」

そう言つて織斑先生が操作盤の方へ行き、余裕の態度を崩してまで何か操作を始めた。

申し訳ありませんが、チャンス…ですわね…。

そう思つた私はそろそろと部屋を抜け出す。

「オルコット」

「はっ、はい！！？」

気付かれていた！？でも箒さんの時は全然……。

「3番ゲートへ向かえ。遠いが、遠距離型のお前なら狙える筈だ」

「わ、分かりました！！」

思考がごちゃごちゃとして、考えがまとまりませんでした。が、とにかく言われた場所へ、この場から逃げるように私は駆けだす。

「“最速”が行ったから大丈夫だとは思うが、用心はしろ」

そう背中に話しかけてくださった織斑先生ですが、すでに走り始めていた私は、その意味を考える事もなく、その場を離れるのだった。

> side out <

さて、あと壁一枚でアリーナなんだが、三年組がそこで色々しているが中々開かないようだ。

んじゃ、代わるかね？

「三年組の皆、さんきゅう。あとは俺がやるよ」

「せ、先生！？けど、向こうからの乗っ取りはかなり強固で全然抜けませんよ！？」

端末を扉横の制御盤につないで何かしているその子は端末での作業を続けたままこちらに目をちらつと向けて言う。

「はあ、マジメさんだな。こういう時は、アイザックさんを見習え。ダイレクトハッキングかましゃあ良いんだよ！！」

そう言って俺は携帯を取り出す。

そして、

5 5 5 Enter!!

ピ、ピ、ピという電子音と共に4つのキーを押す。

そして――。

「マテリアライズ!!」

次の瞬間そこに居たのは『幻星』に身を包む俺。

「先生って専用機持ちだったんですか!!?」

「ちょっと待って!!それよりあの機体って!!」

ふっふっふ…。良いぞこのシチュ。

さいっこーに盛り上がる!!

厨二病?

良いじゃないか。

したいようにやればさ!!

ちなみに変身部分に的確に突っ込める人は拳手。

そんでもって友達になろう。

『一夏！！男たるもの、その程度の相手に勝てなくて何とする！！』
つと、これは箒の声か…って事は原作通り、無謀にも生身でアリーナに突っ込んで行ったな？

“あれだけ苦勞していたシールドを生身の人間がいつの間にか抜けてアリーナに居る”という疑問は後にして俺もそろそろ行かんとな。

「さて…木偶の坊。シールド残量は十分か…？」

(二人の転校生編)

前回、急性厨二病を発症してしまった俺は放課後、よく屋上に来るようになった。

もちろん仕事は終わらせてからだ。

「ららるる」

「コウ姉さん、何してんだよ」

「おう、一夏。青春してるか？俺は今厨二病による時限爆弾のダメージをどうしようか考えてる最中だ……orz」

「えっと…大丈夫？」

「大丈夫なもんかね…」

そこで、三角座りをしていた俺は顔を上げて、そこに居るもう一人に意識を向ける。

「それで、結局どうしたん？」

「いや、新しいルームメイトを紹介しようと思ってさ」

「シャ、シャルル・デュノアです！あの、『幻星』の操縦者さんですよね！！憧れてました！」

「……orz」

現実って虚しいね。正体バレのことから容易にあの厨二が脳裏に蘇る。

痛い、痛すぎる！！調子に乗らんかったら良かった！！

アリーナに出てからも調子に乗って、モンド・グロツソでよくやってた、なんちゃって虚刀流・七花八裂とかやらんかったらよかった。

テンション上がるとコウジュはついやっちゃうんだ

そしてその結果がorzなんだけどね。

「ふう、で、憧れてくれるのは嬉しいけどさ。どこが良かったんだ？」

シャルル…、シャルロットが俺の存在の所為でこんな風になっているとはねー。

「あのキョトー流という技を使う所です！！」

「ぐあはっ！！？」

なんという満面の笑みで言ってくれやがる。

天然な所が更にお恐ろしい。

向日葵を思い浮かばせる笑みで強烈なブローを入れられた気分だ。

それも力を抜いちまった瞬間を見計らったかのようなタイミングで。

ちくせう…。

・ ・ ・

「ところでシャルル。胸のサポーター俺にも分けてくれない？最近、女性からのセクハラが増えてさ」

「ええ、いいです…すよ？」

あれ…？

ええええええええええ！！！？気付いてたんですか！！！！？
一夏にもまだバレてないのに！！！？って言うか何で分かったんです
か！？」

「匂い。だって女の子の匂いしかないぜ？お前……」

「匂いって……変態……？」

「違いよ!!!俺は鼻がかなり敏感なんだよ!!!」

少しずつ距離を取るシャルルにネギでツツコミを入れながら言う。

• • •

合同授業の時にはこんな事もあった。

「コウジユ先生って、こう見るとラウラっちと似たような容姿だね」

そんな風にのほほんちゃんが言うもんだから――。

「ふん、全然似ていない」

「ふん、全然似ていない（キリッ）」

ツドオオオオン！！

「アインツベルン先生。後で報告書をよろしくお願いします」

「はい……orz」

・ ・ ・

そんなこんながありがたながらラウラっちのISがヴァルキリー・システムVSの所為で暴走する事件まで来る。

っていうか、目の前にラウラっちが居る。

「さーて、眠り姫。起きる時間だ！！引きこもってないでさっさと出てこいー！！」

ISを展開して俺は突っ込む。

さてさて。

偽とはいえ最強さんよう、最速の称号を貰った俺の前でその姿を取ったんだ。どういう事が分かるよな？

ついでに叩きこんでやる。

「色々あったなー」

「兄上、手が止まっています」

「ああ、悪い」

何この状況？

いや、俺が分からんのに他の人が分かる訳ないか。

俺の膝の上に今ラウラがいて、俺は頭を撫でてるとこなんだよ。

どうしてこうなった？

思いつくのは、原作で一夏がラウラを解放した時にISを通して心で触れ合ってたっていうことを俺が代わりにしちゃったから…だと思
う。

しかもない俺って内在意識は男だから元の男の姿でラウラと対話を
した。

だからこその兄上って言う呼び方なんだと思うが…。

これってフラグ立てちゃった？

「そつえば、兄上。来襲から臨海学校だそうですが、何を用意し
ていけばいいでしょう？」

「ああ…。明日買いに行くか？」

「はいっ…！」

フラグ…だよなあ…。

さてさて、次の舞台は臨海学校。東はどう出てくるかな？

第のデビューの為に俺を動けないようにするとは思うから、観戦だけになるのかねい？

それが過ぎてはまだ、生徒会長のたてなっちゃん（職員室で割と会う。っていうか茶飲み友達？妹居るらしいけど会った事ないなそう言えば）のイッチーへの介入やら、文化祭がある。“亡国企業”がどついう風に出てくるのか、原作通りか、俺が居る事でパラドックスが起こっているのか、さてさて…。

まあ俺はただハッピーエンドを目指すだけだ。

> f i n <

(> 以下、 N G という名のやるつと思つてやれなかったシリーズ <)

> T S 転生後に T S して男になると思いきや男の娘で生徒で V S セ
シリアで I S がこれ <

「それが…あなたの I S ですよ…?」

「おうよ」

俺の身を包んでいるモノは、 P S P o 2 でミクプロテクターと呼ばれた例のあれだ。

正直、見た目的に I S じゃない。ただのコスプレだ。

当然束つちの仕業です。本当にありがとうござ (r y

げぶん、詳しい説明という。

グレーの肩だしカッターシャツ。

赤ネクタイ。

緑の短めスカート (中は何故か絶対みえない仕様)。

インカム。

長めブーツ。

背中に機械がかった細長いプレートの様なものが2立つ対をなして翼のようになってる。

ちなみに固有武装は当然アレだ。

異常!!!間違った!!!

以上!!!

何?おかしいって?

そんなもん俺が一番わかつとるわい!!!

けどさ、悪いんだけど――。

「馬鹿にしますの!!!?もう良いですわ。撤回するチャンス上げようと思いましたが、どうやらいらないうですわね!!!」

――これもチートなんだわ。

「まあまあ落ちつけ。チヨロリア」

「だ、だれがチヨロツ!!!?」

「とりあえずは俺の歌を聞いてけ」

背中 of 両翼からジャコつとスライドする音がする。と同時に両翼からモーター音の様な重低音、続いて周りの音が消える。

「お、音が！？一体何が！？」

「こいつのコンセプトは歌…つまりは音、振動だ」

言いながら俺は両腕に例のアレを量子展開する。

「今度は緑黄色野菜！？ホントに何がしたいんですの…！！？」

「言つたる？歌を聞いていけと。さあ、開幕だ。一曲目、――

――」

【はいここまでです。ノリで考えたために深い所まで能力を考えられなかったなのでこの設定は使いませんでした。というか、一応考えただけど、いくらなんでもチートすぎると言う事で。完全一発ネタですしねww IS 編本編で使つてる方もそうとうとか言うツツコミ話でお願いしまするww】

（＞限定的に男に帰れるため、千冬から一夏のサポートを頼まれた。ただし、教師としてく）

「ふう、千冬姉も教師だから仕方ないとはいえ、こんな時間に…まあいいか、今日から俺も男同士気軽に過ごせる訳だ。えっと確か隣のクラスの担任の…コウジユ先生だっけ？そう言えばしっかり見た事とか無いけど、千冬姉いわく話しやすいって言ってたし、良い

付き合いができると良いな。

「つとここか」

こんこんつと。まあノックは必要だな。

「失礼します。今日から——」

『え…？』

挨拶をしながら中へ入る。一瞬女の子みたいな声が聞こえたような…。

「——一夏です。よろしくおん……え？」

「あ…？」

目の前に居たのはどこか幻想的とさえ言える。女の子だった。

着替えてる途中なのか裸の…。

銀色の長髪で、獣の耳の様に少しハネテいるのがワンポイントだろうか。あれ？動いてないか？

華奢な体躯の割に自己主張の激しい胸部。

ルビーのような紅い瞳が俺と目がっあっていて——。

「うわああああ……！！！！？」

「し、しつれいしましたあああああ！！！！」

部屋間違えた！？いやちゃんと確認したぞ！？じゃあ何で先生の…
それも男の部屋で女の子が着替えを…まさかつ！！！！

【はい、これもここまでです。こっちは結構いけそうな気がしたんですが、シャルの二番煎じになってしまいう気がして…。まあ言いたい事は皆さん分かったでしょう。結局コウジュはヒロイン候補にされてしまうとwww フラグをたてられてしまうとwww】

さてさて、ここまでお付き合いいただき感謝です。ただの思い付きでつつぱしたこのIF。

ISで熱い展開とかやりたかった結果がこれです。

機械の名称とかそういうのが苦手であつちこつちぼかして、作者の色々もぼかしたらこんな感じですねwww

ISで虚刀流とか悪ふざけ以上の何物でもないwww

コウジュの特性『獣』と『PSP02』を組み入れながら考えたんですけどどうしてこうなったんだろうか。

とりあえず厨二要素入れたかった訳ですが…www

あ、ちなみにミクプロテクターのやつはですね。

操縦者の前に半透明の鍵盤が現れて演奏すると、両翼から音が周囲に放射。音により特定の粒子を制御。それにより弾幕を限定空間内に形成。

弾幕はナイフ型！！曲はナイトオブナイツ！！とか考えたりもしましたwww

ハイハイ厨二厨二wwwどうぞ罵ってやってくださいwww

では、やりたかったからやった、後悔も反省もしない、ただし恥ずかしかったりはするただの作者の妄想IF。これにて閉幕でございます。

『stage:???』

IS編

「ISってあれか?」いっぺん死んでみる

どうでしょうか。

やはりイタタタ…な内容でしたかね?

けれど熱いパトスは止められなかったんだぜ…。

あ、今更ですか? 申し訳ないwww

ただの妄想の塊なせいで設定とか矛盾しまくってる所も多いし、機械関係が苦手な為ISの売りでもあるそっち関係を出せていないし、これをちゃんとしたモノに仕上げるのは無理そうです。

だからこれで自分的には満足です。

そんなじこちゅー内容ですが、暇を潰していただけたら幸い。

では、またのご利用をお待ちしております(^ O ^) /

『Stage 46：題名を思いつかなかった訳じゃない。ホントだぜ?・・・』

ちゃっすです!!みなさんお久しぶりでございます!!

最近忙しいわ、そのせいか時間感覚が無いわでよく分からない状況です。

忙しいのも少なくとも後2カ月ほどは続きそうだし..。

まあそんなのは関係なしに私の妄想というかは頭で元気に形成中ww

ちよくちよくでしか出せなくて申し訳ないですが、皆さんのお暇つぶしになれる事を願って――

どうぞご覧ください。

『Stage 46：題名を思い浮かつた訳じゃない。ホントだぜ?・・・』

>side:コウジユ<

「死ねばいいのに…」

『おい!?!』

「失礼噛みまみた」

『どう噛んだらそうなんだよ!?!』

「では改めて、チねば良いのに…」

『改める必要どこにもねえよ!?!黒いんだよお前!?!』

「氏ねじゃないだけマシかと」

敬えとまで言わないから、せめて普通に接して欲しいっすマジで…。

つと、はい皆さん、とうっとうる。

元気してるかい?

俺は今日も元気にケモノってるぜよ。

ところでとうとうるってどういう意味？

まあそんな事は置いといてつと、実は世界樹の精霊マーテルとの邂逅から実は数年が経っている。

え、早い？

いや、そうは言われてもねえ…。

とはいえ、何もなかった訳でもないし、軽ーくあの後の事を言ってみるかね？

えつと――。

「どうしても母と認めてくれないんですね…。」

『いや、そうは言われてもなあ… やっぱ罪悪感というか…それ以前に流れ込んだとかいう情報から俺が元男だって分かってんだろ？ま

あ今のデカイ獣な姿じゃあ男か女かったのがよー分からんだらうけどもさ」

「どうして認知してくれないの！？遊びだったんですか！？」

『何でいきなりそのノリ！？昼ドラ苦手だからヤメテ！？』

「むう…じゃあ…」

『じゃあってなんだよ…それでお次はなんだ？』

「……（うるうる）」

『いや、嘘泣きにも程が——』

「ばっちゃんが言ってたー！」

男がやってはいけないことが二つある。女の子を泣かせることと、食べ物粗末にすることだってー！」

『たぶんそのばっちゃんと後半のセリフのおばあちゃんは別人だ！！ってか、ばっちゃん誰だよ！？』

「……」

『何でこっち見てるん！？俺がばっちゃん！？さっきのセリフ好きだけれどリアルに言った事無いと思うよ！？っていうか、母からばっちゃんって格上げ！？格下げ！？』

「フ…ww」

『こいつ今鼻で笑いやがった！！格下げか！？格下げのつもりで言ったのか！？もうそれなら母で良いよ！！むしろお願いします！！』

「はい、母上と呼ばせていただきます。どうもありがとうございます」

『はめられた…orz』

待った。今の無し。気のせいだ。ログには残って無い…そういう事にしといてくれ。

えっと、仕切り直し——。

『ああ、お腹空いたぜよ…』

「帰ればいいじゃないですか」

『いや、来る時ゲート装置みたいなので飛んで来たんだけど、こっ

ちにそれっぽい無いし…』

「はあ…」

『はあ…って何でさ？何でため息…？』

「いえ、母上様はやはり抜けている部分がありなんでしょう」

『それ酷くない！？』

「ヒヨウリシリーズ…忘れちゃったんですね。可哀そうに。やはりおばあちゃん——」

『違いし！！忘れてねえし！！この身体で使えるかどうか分からないかったただだし！！』

「私召喚したでしょうに…馬鹿ですか？死ぬんですか？ぶぎやあーですか？」

『うぐ…うう…あう………』

たんまたんまたんまー！

今のも無し！！いやマジで！！

はあ…回想っていう形だと嫌な事しか思いださねえから、普通に言うか。

とりあえず、帰れないと思ってた俺はマーテルの“助言”により帰ることができた。

久々な感じがする墓守人の宮殿（仮）。

もうね、泣きそうになりましたよ。

例えて言うとか、新築の家に住み始めて一日目に誘拐された感じ？例えきれてないのは気にしない。っていうかそのままだなwww

しかしながら戻れたから良しとしようじゃないか。あんまり多くを求めたらいけないよな。何かの…ってか誰かの意思によって送られた感がぶんぶんするわけだけでも、気にすることによって余計なフラグは立てたくない。

だから俺は気にしない。何故かマーテルと一緒に宮殿に来ていようとも。

『何でいるんです？』

「ゲートをくぐったからに決まってるじゃないですか」

いや、そういうことじゃねえよ。

作りだしたゲートをくぐって、寝室まで行って、さあ寝るべと思っ

て横に寝転がったら、ポスつとお腹の辺りに何かが倒れるようにして触れたので眼を向けたらこいつは居やがった。俺の長めの毛に埋もれて、すんげえいい笑顔でもふもふしとりましたよ。

サイズ差がありすぎて潰してしまいそうだから動けないし、どけるように言ってもちつとも動こうとしやがらねえ。さすがに二回もつぶしちまうのはなあ…。

「はあ気持ちよすぎる。この毛皮でマフラーとかを……」

動いていい気がしてきた…。

とは言いながらも、潰す可能性がある以上ヘタレな俺は動けない。サイズ差が全長で言うとガン。ムと幼女、高さで言うとト。ロ×2と幼女位の差がある。ちなみに後者はユーハクの兄弟じゃなくて、ジ。リ映画の方で、都市伝説で死神扱いされてるやつな。

はあ仕方ないかと、俺は眠かったのもあってそのときは寝た。

次の日。前日にできなかった話をマールテルとした。何故ここに来れるのかと。

聞いてみると俺の目の前にいるのは本体じゃないらしい。分体とかいうやつで本体は木として残ってて、俺が召喚した精霊体だけを魔力でコーティングしてここまで来るとか。一応眼には見えないけど有線らしく、パスが本体と繋がってもいるらしい。

何その分身の術。何で生まれたてでそんなに高性能？それも俺の中の知識からだって？俺のどこにそんなものがあるんだよ…。アニメとかの知識を真似してやったらできた？お前高性能すぎない？

ってか有線って…でもそれなら余計に来れないような…。それに
いても聞いてみたら、どうやら俺が飛ぶ原因になった儀式場と世界
樹のあった場所はゲートとして固定されたようだ。俺の知識からマ
ーテルは儀式場と世界樹のあった場所が強い“縁”で結ばれた結果、
高次元での接続が続いてる状態で、ちよつと魔力を込めるだけで行
き来できる位にはお隣さんになってしまったらしい。何故俺の知識
からマーテルは理解できて俺ができないのだろうか。最近“縁”と
いう言葉をどこかで聞いた気がするが、同時に思い出せばいけな
いような気がすることに関係あるのだろうか。俗に言う気にしたら
負けるな。

ともかくにもマーテルは宮殿に自由に行き来できることが決まっ
たわけで、っていうか帰るつもりないらしい。本体に何かあればす
ぐに分かるのでしばらくこっちで生活しますねとはマーテルが俺に
初日に宣言したこと。

ま、いいけどさ。

それから始まったんだよ。よく分からない二人っきりの生活がな。

「ご飯にしますか？お風呂にしますか？それともご飯にしますか？」

『どれだけ飯プッシュしてんだよ！！飯はさつき食っただろうが！』

いつのまにか食事を作る係になっていたマーテルはやたらと俺に食
わせようとする。料理作るのにはまったんだってさ。

最初は俺が投影使ってタイ焼き食べてたんだけど、やっぱり食事なんだからちゃんとしたものをもって思っ、て、必死にアチャ夫の料理を投影して食べてたんだ。けど結局は投影。俺の魔力を使っ、てその分の投影を行っ、てるわけだからお腹が膨れるわけじゃない。というか、効率的にはマイナス。しかも量が半端ないんだよね。その場しのぎにはなるけどなんか空しい。無駄に疲れるし。俺は体積的に当然のことながら、マーテルもどこに入るのかという位に食べる。というか、木っ、て雑食で良いのか？いや、元が俺の魔力なら…っ、て今は普通に普通の食材使っ、てるか…。枯れないよな？まあ本人が満足してゐるなら良いけどさ。

ごほん、話を戻そうか。

俺達は、別に食べなくても不死だから死ぬわけじゃないけどお腹が空くものは空く。マーテルも魔力に依存する存在だから食わなくても良いんじゃないんだけど、アチャ夫料理を食べてからは毎食用意しろと言いだした。

けどいつまでも魔力で作るのは前述したように嫌だし、だから言っ、て今の俺が作れるわけもない。

それからどうするか悩んで数日たっ、たある日、我慢できなくなっ、たのか、マーテルが突然大量の本と共に俺の前に現れてこっ、このたまっ、た。

「主様や、わっ、ちにまかせるがいい」

『それキャラ設定的に俺が言っ、べきじゃね？狐だけど。そん、でもっ、て作れないけどさ』

それ以来マールテルはハマっちまった。

最初に食べたモノはたい焼きだけど、食事として食べたのがアチャ夫飯だったせいか、妥協はせず、かなりレベル高いモノを作れるようになっていった。

こつちとしちゃあ美味いモノを食べれるんだから嬉しいのは嬉しいんだが、今は待ってるものが料理だからって食べれる量以上のものを作るのは止めようぜ？

腹八分、腹八分ですよ！！

結局回想になってる件について…。

まあ所詮は俺だからな！！予定通りに進む訳がない！！

俺って何でいつも自分のセリフで自爆するんだろ…orz

とりあえず次行こう…。

『はあ、そろそろ新しい刺激がほしいなあ…』

「リアル鬼ごっこかどうかですか？」

『鬼より怖えよ、お前。長距離砲撃ばかりか撃つし。シューティングゲーでやられる側とか誰得？』

「少なくとも私は得ですね。楽しいから」

その良い笑顔腹立つんですけど？

魔王の称号付けるぞこの野郎。もちろん管理局の方のな。

「とか言いながらも母上様だって得してるじゃないですか。なんですか一度食らったら覚えるって。せつかく障壁を通して覚えられる悲しさ分かりますか？しかもこっちは理論から式まで理解した上で魔法として行使してるのに、結果だけを感じて持つてくるなんて」

いや、まあ、それ言われると…。

『誠に申し訳ありません…』

マールテルってかなり優秀だし、その上負けず嫌いなのか次から次から新しい魔法を覚えては試そうとするおかげで、俺の自動障壁を通った高威力魔法は全部覚えちゃいました。

魔法の矢を使えないのに千の雷使えるんだぜww

「まあ、覚えてただけで理解できてない訳ですから、応用とかされないだけ気分的にはマシですが・・・実質まだ振り回されてる状態ですし」

うぐ…。それもまた事実…。

この体魔法使いにくいんだよねえ…。だって手がないし。自身を起点に放つ魔法系統は体外口から出さなきゃならん。

ただし魔法は口から出る。

厄介な身体だぜ。未だに人の形になることができない。というかなり方がわからない。たぶん、あの厨二くさい俺の陰から出た闇？混沌？とやらを操る必要があるんだろうけど、どうするんだ？確かネギまの魔法には影を操作する魔法があったはずだからそれがヒントになったりするかな？

ちなみにマーテルは、何故かというか、世界樹だからなのか全属性に適性がある。その適正にも大小はあるが全部使えるという素敵精霊さんだ。異世界の魔法も組んだりしたりする。

しかしながら影魔法は使わない。精霊っぽくないから嫌だそうだ。

なんのこだわりなんだか。

そのこだわりのせいなのか、俺の知識の中にあつた精霊と深くかわる物語、神曲奏界ポリフォニカシリーズにならつて雷系統の魔法をよく使う。リスペクトは勿論、メインヒロイン、クリムゾン・アーニヒレイタ紅の殲滅姫たるコーティカルテ・アパ・ラグランジェスだそうだ。ポリフォニカの

世界は精霊と人間が音楽を通して心を通わせ、良き隣人として暮らす世界。精霊たちは精霊雷と呼ばれる力と、紋章のような羽が特長的だ。そしてその世界は精霊と“神曲”と呼ばれる特殊な音楽を通して契約した神曲楽士達を中心に波乱万丈な物語を展開していくというものだ。大まかな説明でいえばこんなものだろうか。実際にはもっと細かな設定とかがあるがそう簡単に言いつくせるものでなし、とりあえず知ってほしかったのは紋章のような羽と雷が特徴だということ。

何でそれを言ったかというのと、どれだけリスペクトしてるんだか、マーテルは千の雷を紅くして放ってくる。ちなみに俺のラーニングしたのはその紅い方だったりする。どうやって紅くしたのか聞いたら難しくて意味がわからなかった。理論？式？魔力関数？何それおいしいの？

そういえば威力もえらく上がってたからそっちも聞いたっけ。まあ帰ってきた答えは“モチベーションの問題”だったが…。いや、確かに大事だとは思っけどさ。

「あ、そっぴやき。ポリフォニカをリスペクトしてるのは良いけどさ、神曲とかもやっぱり設定をなぞるのか？」

「当然でしょう。契約のフレーズとか言ってみたいです」

「でも本物の新曲がどんなのか分からないじゃん、どうするん？」

「その辺は決めてあります。とにかく私の心に響く音楽でしたらOKです」

「ちなみにジャンルは？」

「ボカ。ですね。東方VOC。Lでも可」

おい、皆！！ここでどっちか歌ったら契約してくれるってよ！！

「そうそう居ねえよ…。お前との契約条件が音楽って教えたとしてもそのどっちかに行きつくやつはいねえと思う」

「そうでしょうか？案外なんとかなりそうですけどね」

いやいやいやいや、どんな偶然だよ。世界樹の前で突然、ボカ。か、東方VOC。Lを歌うもしくは演奏するってどんな奴だよ。会ってみたいよ。というか居るなら俺も契約位しても良いかもしれない。というか友達になろう。一緒に歌おうぞ。

ごほん、閑話休題。

とにもかくにも色々あったわけだ。この身体から早く人に戻りたい一心で修業しまくってただけで何年か経ってたのはびっくりだったけどなwww

でもこの数年で進歩したのって、ネギま魔法（ただし大半が口から出る）を覚えたのと自分の影が波打つようになった位だ。

しかも、かなりの集中力を使って、渾身の力を込めて、それでやっ

とだ。

どうも俺自身のスキルや技の習得率はかなり低い。

よく考えたら今まで習得した技でまともなやつはほとんどない。何かしらマイナスがあつたり望んで習得したものじゃ無かつたり、変な過程を経てだつたり……。

普通に習得した技つて幻想舞闘（槍編）だけな気がする。いや、あれはあれでかなり大変な思いしたけどさ……。ぎりぎりな模擬戦とかさ。けど、まとも言えばまともな修業だつたと思う。

マギア・エレベア

だつて考えてみ？ 闇の魔法とかあるけど、自爆何回もしたりしてるしさ。スターライトブレイカーとか神槍『スピア・ザ・グングニル』つてノリで使つて習得したけどばれてると思うけど実は威力の制御ができないんだ。他には、羽根もあつたな。あれも……ペガサスたんふおーえーばー……ゲフン……他には何があつたっけ？ あ、扉のスペルも習得したか。今はナチュラルに使つてるけど最初のH・O・T・Dの世界に繋がった瞬間はマジ焦つた。フラグツてしまったのをどうにか消せないものだろうか？ それから……秘剣とゲートオブバビロンか、けどあれだつて喰らう↓死にかける↓けど覚える↓ふはーん。

俺つてやつぱ才能ないのかねー……。

『ラーニング』と、『幻想を現実に変える程度の能力』が無かつたらひとつも習得できなかったんじゃないだろうか。

前者は言わずもがな、後者はイメージのブーストを手伝つてくれる。逆にイメージの中に“出来ない”という考えがあつた場合、習得を阻害してる部分もあるけど、何度も何度も繰り返し返していけば“出来

る”が“できない”を塗りつぶしていく。とつさの場合だとマイナス要素だけど、全体で見ればこの二つがあれば技系統はどうにかなくなってしまう気がする。

ただ、いつだったか言ったように、この二つで習得した技は過程を吹っ飛ばして結果だけを出してしまうから柔軟性というか、応用するのが難しい。そういえば、マーテルも言ってたな。

本来なら一つの魔法を使うにしても、術式、魔力、その他細々した要素も込みで魔法という結果をもたらすものだ。…ってマーテルが言ってた。

簡単にいえば数式だ。

同じ魔法でも威力が違うのは、単純に込められた魔力によって威力の底上げがなされているとか、術式そのものが洗練されていて無駄が無く魔力伝達の際のロスが少なく燃費が良いとか、そういった要素を途中式の時点で変化させて答えが変わるわけだ。

だけど俺の場合、途中式は無く、そのまま答えだけを持ってきてるから中々制御とか応用が出来ない。

マギア・エレベア
闇の魔法みたいなのは応用って言えば応用なんだけど、それも結局イメージによつてこんなものか？と結果をイメージで補正してしまつて習得したから原理とかよく分かつて無い。

だって、魔法とか無い世界で生まれたし。

まあこれは良い訳にすぎないが、一度マーテルと同じように術式とか理解しようとしたがまったく意味不明だったのだから仕方ない。

どうせチートをくれるならこういう外堀を埋めるタイプじゃなく、内側の、アンサートーカーとか超直感的な内面チートの方が良かったんじゃないかなろうか。

だって、神様として『幻想を現実に変える程度の能力』を貰うしかないにしても、光夜さんの采配で何とかなるなら同系統じゃなくて組み合わせて発展できるやつにしてくれたらよかったのに…。

ゴメンなさい…。調子に乗りました…>(――)<

ただでさえチートなのにこれ以上望むのは分が過ぎるってもんだろうな。

でもさでもさ、憧れるもんは憧れるんだよ。

見稽古とかやばくない？いやあれはラーニングと同系統か。だった^{シ・エンド}ら、完成とか？あれって、見た能力を完成させた状態で習得だったよな。あ、でもこれも完成してしまったら応用には行けないか…。

じゃあアンサートーカーだと…それはそれでつまらなそうだ。かといって超直感だと…見えた(キリ)にしかならんな。あれだな、この二つはシリラスとかカリスマとセットじゃないといけねえわ。つまり俺には…だからなんで自爆するんだ俺…。天井どころの話じゃねえ…orz

えっと、うーん、結論。やっぱ今のままで十分チートだし、考えて自分だけの力を見つけてるって意味では楽しめるって事でおk。考えるのがめんどくさくなったとか、他の能力が思い浮かばなかったとかじゃないんでその辺は気にしないように。

そういえばさっき思考の端に引っ掛かった、同系統のどっちかあればもう片方の意味が無くなるってなんでだろ？

逆に、自動防御とラーニングはマーテルが文句を言う位に相性良いのに。

防御固い。かといって防御抜いたら覚えられる。改めて思うけどそんなのが敵だったら絶望するな。Fateの俺じゃなく本来召喚される筈だったバーサーカー（ヘラクレス）の強化版の能力だしさ。

はて…？

まあ今度会った時でいいか。忘れて無ければ。どうせ俺が考えても分かんし。

——答えは簡単…この身は所詮バックアップ…。集めさえすれば良い…。——

「…?」

「どうかしましたか?」

近くに居たマーテルがこちらに来る。

「今何か聞こえた気がしたんだけど…、マーテル何か言った?」

「いえ、言ってませんが…。もしかしてボケが始まったんですか…? やっぱりおばあさん」

「やめい!! ホントそういうのもうやめて!!? 事あることにいじめて楽しいか!?」

「はい。それが何か?」

「絶望した。もうとりあえず絶望した…orz」

空耳だったんだろうか? それともまたマーテルの悪戯か? この数年

の間に知識が大量に増えたせいかやたらと巧みな手口を使ってくるようになったし、またその類だろうか？正直無駄な部分でも努力家なので勘弁して欲しいんだけど。

はあ、兎にも角にもほんともう色々あった。思い出したくない事が大半な気もするがなんでだろう？まだ数年しか経ってないのに……。あと何年経てば原作になるんだろうか。

タイマー的なもの欲しい。

あ、そういえば携帯があつたっけ。教えてくれるかな？

……………この身体じゃ操作できないから見れないじゃんorz

しゃーない。あと数年はこの姿のままで我慢だ。人型になったら確かめよう。それでもってPSP2iをやるう。やっぱりやりたいモノはやりたいし。

よし、その為にも今日は寝よう。明日からもっと修業頑張ってさっさと人型にならんとだからな。

つてなわけでお休み！！

> s i d e o u t <

『Stage 46：題名を思いつかなかった訳じゃない。ホントだぜ？……』

いかがでしょうか？

まあ天井化しつつあるコウジユのヘタレ具合。そこに黒いキャラが現れたらこんな扱いになるのは至極当然www

もつともつと弄っていければなあ…www

とはいえ、いい加減本編とはいかなくても先に進んでいいんじゃないかと思われる方もいるでしょう。

その辺どうすべきかまだ悩んでたり…。

流れとしては、古代編↓中世編↓英雄編↓現代という流れのつもりですが、古代編をどこまでやるか…。

オリジナルストーリーを入れるか…。入れるにしても長さは…。とりあえず皆のアイドルエヴァにゃんのとこまで行こうか…。

悩みどころです。

連載の方で核心に迫ってるから、どうなる事やら…。

っていうか結局ライフメーカーは男？女？

見た目がアニメ版Fateで出てた能登声の騎士様にそっくりなん
でびっくりしたんですが…私だけ？

まあ兎にも角にも、次回をお楽しみに！！

ご意見感想お待ちしております！！！！

では（＾Ｏ＾）ノシ

『stage???…えくすとらすてーじ……innふえいと』(前書き)

祝!!一周年きねーん!!!

つてわけで、案としていただいたお着替え祭りを敢行いたしますですよー!!!(↑眠くてテンションがおかしい)

では、どうぞー!!

『stage???えくすとらすてーじ・・・innふえいと』

悪夢の始まり。それはイリヤの何気ない一言から始まった。

聖杯戦争を終え、時計塔との一悶着も終わり、構想にあった会社についての話をマイルームで行っている時の話だ。

・
・
・

「ねえ、ずっと気になってたんだけど…」

これからについての真剣な話も一段落し、くつろいでいるとイリヤはそう口にした。

「なんさ？」

答えたのはコウジユ。

現在マイルームのリフォームを行った為、バーと化している部屋のカウンターで、隣に座るイリヤを見つつ、カウンターにうだーと頂垂れながら答えた。

「奥にあるあれってドアよね？何の部屋なの？」

言いながらイリヤはそのドアを指差す。ベッドなどがあるプライベ
ートルームの壁際にあるものだ。

その指差す方向をコウジユは見て言っただけかと考えながら
とりあえず説明する事にした。

「あれは着替ドレスルームえ部屋だよ。正確にはドレッシングルームだったかな
…」

「ふーん。そんなのあったんだ」

期待はずれだったのか、さして思う所が無かったただけなのか平常通
りのまま答えるイリヤ。

そこで話は終わるかと思いきや、予想外の人物が無駄に食いつい
てきた。

「なんですって…？今、ものすごく気になる単語が出た気がするの
だけれど…？」

言いながら近寄ってきたのはキャスターだった。

いつもの暑苦しいローブは脱いで、現在の見た目に合った可愛らし
くも、子どもっぽくならない様な服装のキャスターは、何故か少し
鼻息を荒くしながら近づいてきた。

その様子に少し引きながらもコウジユは改めて答えた。

「着替え部屋がどうかしたのか？」

「そう、それよ。着替え部屋って事は、何か服があるんでしょ？」

じりじりとコウジュに詰め寄りながら言うキャスター。

カウンターで座っているコウジュは後ずさる事も出来ず、ただ身を引きながらキャスターの続きを聞く。

「前から気になってたのよ。コウジュの…スペルカードだったかしら？それを作る時に偶にどこからか服を持ってきて使ってたでしょ？イリヤの女の子版アーチャーの服もそうだし、あなたが偶に使ってる憑依召喚系統のスペルカードもそうだし、自分で買った服もここで着替えてたわよね？」

矢継ぎ早に言うキャスター。

コウジュとの距離は既に鼻と鼻を突き合わせるような距離になっているが、あいにくと今のキャスターの様子からは、かつての傾国の美女の姿は微塵も感じられず、コウジュはただため息を一つ付きながらその質問に答える。

「えっとだな。正確にはあの中にある訳じゃなくて、あの中から俺の共有倉庫に繋がってて、そこからアクセスして服を着替えてるんだよ」

ゲーム内では当然ながら画面にコマンドが現れ選択する訳だが、実際にコウジュが使ってみると、中は白い空間が広がっており、空中にゲーム時の様な画面表示が空中投影されていた。

「それと、俺があれをよく使うのは便利だからだ。選んだら一瞬で

着替えれるからさ。何でかサイズもオートで変更されるし」

ゲーム内で衣装チェンジする際に着替えるという工程はないためか、ドレッシングルームでは空中投影された画面でゲーム同様に選択をすれば一瞬で服が変わる。

これはコウジユにとって未だ女の子モノの服というものに慣れず、着替えるという自身の身体をどうしても意識してしまう工程も飛ばせる為、重宝していた。

そして、サイズに関してもゲーム内で服を購入する際に性別についての概念はあってもサイズに関しては無かったからか無かった。こちらで買った服に関しても共有倉庫を通したらサイズの概念がなくなるという便利士様だ。

「へえ〜。すごいじゃない」

黙っていたイリヤがただの着替え部屋で無いと知り、改めて興味が湧いたのか話に加わる。

「違う。間違っているわコウジユにイリヤ。確かに便利だし、着る為に必要なタイムラグはなくなるわ。けど重要なのは、あなたが今着ているもののほかに可愛い服はあるのかどうかよ!」

おかしい。そう思わずにはいられないコウジユ。

間違っているとかそういう話だったか考えるが、どう考えてもそうは思えない。何故、可愛い服があるかどうかの話になるのか分からない。

しかしながら目の前で聞いたそうにしているキャスターに答えない訳にもいかず、コウジユは答える。

「あ、あるにはあるけど…男モノも女モノも結構集めたから…」

PSP02には称号というシステムがあり、その中に衣装を集めるというものがあつた為に集められるだけは集めた。まあそんなのは抜きにしてもエミリア（神）が、集めていたモノ以外も共有倉庫に入れてくれていたが…。

とにかく、衣装は色違いも含めて数百では済まない数を持っているコウジユ。

しかしそれを言ったのがいけなかった。

「「ほう…」」

突然目が鋭くなるキャスター、そして何故かイリヤ。

コウジユは嫌な予感がした。召喚されてここ数年、世界に嫌われているか、弄られているのかと考えてしまう程に精神的不幸を味わって来たコウジユの勘が危険信号^{レッドフライト}を告げていた。

コウジユは逃げる事にした。

しかし回りこまれた。

逃げられない！！

「「どこへ行くこうなのかしら？」」

フッフ、と表面上は優しく、しかし目はぎらぎらと得物を逃がさまいと告げながらコウジユを二人して囲む。

逃げられないと悟ったコウジユは作戦を変える事にした。

「あ、えつと、そ、そうだ！！ひよつとしたら俺以外に使えなくなってるかも！！ビジフォンみたいにさ！！」

ビジフォンとはPSP02で、マイルーム内に設置されている端末の事だ。ビジフォンでは、ゲーム内でのモンスターの討伐回数やアイテムの収集記録、照合などが確認できるようになっている。それが、コウジユのマイルームではパソコンとしての機能も持っており、皆が居る前で使用したりしていたのだが、何故かコウジユ以外は使用できないという仕様になっていた。ライダーをオタ道に引きづり込んだパソコンはビジフォンとは別に設置されていたがそれは今は別の話…。

兎にも角にもそれを思い出したコウジユは、ドレッシングルームもその仕様かもしれないと、最後の望みを賭け、言う。

「使えそうよコウジユ」

いつの間にかコウジユを挟んで経っていた筈のイリヤは件のドレッシングルームの方へ行き、中を覗き込んでいた。

「神は死んだ…」

orzな体勢をし、落ち込むコウジユ。

その姿を見て、部屋内に居た他のメンバーが集まる。

サーヴァント勢、士郎、遠坂姉妹だ。

「なんだあ？ずいぶん楽しそうにしてるじゃねーか」

子どもの姿ではあるが、アロハシャツに短パンという姿がやけに似合うランサーがニヤニヤしながら来る。

「楽しそうに…はしておらんだろう。こちらが見る分には楽しそうではあるがな」

そっというのはアサシンこと小次郎だ。普通の少年が着るような柄物のＴシャツに短パンという出で立ちだ。キャスターに強制されて短パンではあるがその姿は妙に似合っている。

「あの、お二人とも…後でコウジユちゃんにボコボコにされても知りませんよ？」

次に話に加わったのはギルガメ、金ぴか等と呼ばれ、噛ませ犬臭満載だったギルガメッシュだ。今は少年の姿であり、あのふてぶてしい態度はどこへやら。短パンが似合う活発そうなイメージを受ける。最近友達と遊ぶのが楽しくて嬉しくて仕方がないただの少年と化している。

「ちゃんづけするなし！！」

そのギル少年に、ちゃんづけされた事について文句を言うコウジユ。

「あ、ごめんなさい」

ちなみに、ギル少年が言ったボコボコにされるといのは、いつだったかランサーやキヤスターがコウジユを弄って、ぷっちんしちゃったコウジユが聖杯戦争最終決戦時の様にビースト状態になり、更に凶化して、殲滅されたというだけの話。

「長い事話してたつてのに、ホントあんたたちは元気ね」

「まったくです」

「まあまあ姉さん、セイバーさんもそう言わずに…」

「ははは…」

疲れた様子の凜とセイバーに、苦笑交じりに続く桜と士郎。

そこへ――。

「ねえ！これどう？」

イリヤが先程まで来ていたモノとは違う服装で出てきた。いつの間にかちゃっかりマイルームで一人着替えを済ませてきたようだ。

着ている服はエミリア・レプカとゲーム内で言われるものだ。

上は黒のブレザー風で両肩に小さく突いている羽根飾りと、黄色のネクタイが可愛いデザインとなっている。下は黄色いラインが入った赤色の短いスカートに、膝までの黒いブーツ、露出している両足

のの片方には、ワンポイントで小さなバッグが付いている。

「……おおー……」

全員から感嘆の声が上がる。弄られていたコウジユも立ち上がり声を上げていた。

普段着てる大人しめのお嬢様然とした服装も似合うが、今着ている服もとてもよく似合っていた。

活発なイメージを持たせる服装ではあるが、白く綺麗な髪と、黒い服との対比もよく、いつもとはまた違った可愛さをそこに披露していた。

「ドレッシングルームだっけ？あれは良いものね。ざっと見た感じ可愛い服が他にもいっぱいあったし。」

余程気に入ったのか、その場でクルクルと回るイリヤ。

「私もちよつと見てこようかしら」

キャスターがイリヤの言葉を聞き、次は自分がマイルームへ向かう。なぜかコウジユを引っ張りながら。

「別に使っても良いから1人で行けよ！！」

「あらあら何を言ってるのかしら？私はあなたに対してファッションショーを行う権利があるのだけれど忘れているのかしら？」

「うぐっ……」

コウジユはキャスターに対してあるお願いをする際に、条件としてファクションショーの権利を渡していた。

それを言われてしまっではどうする事も出来ない。

それがあつたから逃げようとしたのだが、まあ、コウジユがそういつたイベントから逃げられる筈も無しといったところか（笑）

・
・
・

『さあ！早く出るわよ！！』

『ちよつと待てえ！！無理！！マジで無理！！こんなの恥ずかしすぎる！！！！！！』

マイルームの外に居る者達にはそんな問答が聞こえた。これは先程からずっとだ。

マイルームでは戦闘を行えないというルールがある為か、引っぱり合いをしているだけのような様子だが、中々出てこない。コウジユは例外なのだが余程焦っているのか、戦闘者ではなく技術者のキャスターといい勝負をしまっているようだ。

『やー！めー！てー！！！！！！』

『大丈夫大丈夫！可愛いから！！あえて言うならエロ可愛いから！』

『エロ！？よけいやだてのおおお！！！！』

『じゃあ——』

『……』

それからしばらくして、キャスターが何かを言った途端、外のモノには聞こえなかったがコウジユが突然大人しくなった。

そのまま二人が出てくる。

「うう…不幸だ…何で俺が…」

「フフフフ、可愛いんだから良いじゃない。可愛いものは見せてこそよ」

未だ躊躇いながらも出てくるコウジユと、よく分からない理論を言いながら出てくるキャスター。

キャスターは着替えなかったのか、先程までと同じ服だ。

対してコウジユの服装は一変していた。

「……………ぶふうっ！！」「……………」

そしてその姿を見た全員が同時に吹く。

「な、なんだよう…こっち見んなし!!」

今のコウジユを見た者が噴くのも、さもありなんといったところだ。一言で言うなら今コウジユが醸し出している雰囲気は“危うい”だ。

今コウジユが来ているモノは、いつもの帽子、行く所に行けば売られているような膝までの白いヒールが高めのクラシカブーツとゲーム内で呼ばれるブーツ。

しかし残りが問題だった。

それらはゲーム内ではフラクソジャケット、もう一つはビキニスイムボトムスと呼ばれるものだ。

後者はよく売られている黒色のそれだ。

次にフラクソジャケットだが…そちらは簡単に言えばチャイナ服に似た中華服とでもいいえば良いか。色は白で、脇から肩にかけて切れ目が入っている長めの袖、足の付け根まである前後の部分には淡いピンクでさりげなく花をイメージさせる柄がワンポイントで描かれている。

さてお気づきだろうか。

この服は前述したとおり足の付け根までしかない訳だ。

そして、今下半身に付けているのは膝までしかないブーツと――

——黒のビキニだけだ。

そう。ハッキリ言って正面から見たら穿いてないようにしか見えな
い。

見た瞬間に全員が嘔いてしまうのは仕方ない事だろう。

「ほら、いつまでも止まってないで…」

「お、押すなって！行くから！！」

下の裾を押さえながらもキャスターに押されて残りのメンバーの前
に出てくる。

そして——。

「「「「「「「「ぶはっ！！？」「「「「「「「」

——もう一度嘔いた。

コウジユが来ているフラクソジャケット、実は正面から見ると気付
けないが、サイドが無い。袖との斬り目、つまり脇の下から生地が
無いわけだ。

そのおかげで色々と見えちゃヤバいものが見えてる。

胸元はインナーがあるがぴっちりしたものの上、現在は前生地部分

を下に引っ張っている為、かなり身体のライン等が強調されている。ついでに言うと手は引っ張る為に前に来ている為にサイドの防護力は皆無だ。

次いで腰元はビキニの紐が見えるが、横から見てもやっぱり穿いてない様に見える。

「もう良いよな！！な！？ホント恥ずいんだからさ！！」

パンツじゃないから恥ずかしくない等とどこぞのウィッチの如く割り切れる訳もないコウジユは必死で裾を引っ張る。当然と言えば当然だ。水着も下着も守備範囲は変わらない。

コウジユは変わらず裾を引っ張り続ける。

少しでも前部分で隠せる部分を増やそうと前かがみになりながらも引っ張り続けるが、結果上目遣い、ついでに本人は気づいていないが涙目な為、現在の状況で言えば逆効果だ。

身長は121cm、しかし一部分はわがままボディなため、可愛い、エロい、その他もろもろが混ざりに混ざって世の紳士諸君も暴徒になっ
てしまっ
い
そう
な
勢
い
だ。

「……………」

思わず全員が目を反らす、男性陣だけでなく女性陣もその姿を見続ける事は自身にとって何かアイデンティティを壊すと本能で感じ取り目を逸らしてしまったのだ。

「何で一斉に目を反らすんさ！？いや、別に見て欲しいわけじゃな

いよ！！！？けどそんな一斉に反らさんでもって俺は何を言ってるんだ！！？のわぁぁん！！」

そう言っただけでなくなっただのかコウジユはマイルームへ駆け込む。

「「「「「「「（あれは駄目だろう。色んな意味で…）」「「「「「」

そんなコウジユを見送る全員の考えは奇しくも一致していた。

・ ・ ・

「次は俺以外！！これ絶対！！」

いつもの服装に戻ったコウジユはまだ涙目のままそのたまう。

その姿にドS心が刺激されるものが何名か居たが、これ以上やるといつかの惨劇を呼び起こすと自重した。

その結果、次に着替えるのは男性陣になってしまった。

『ふむ、私はこれにしよう』

『着物もあるのだな。ならこれを』

『あ、これいいですね』

『んじゃ、俺はこれかな』

『お、良い感じのがあるじゃねえか』

どうせ一瞬で着替える事が出来るし中は広いんだからと一斉に中に放り込まれた男性陣。

思い思いのモノを着て外へ出てくる。

アーチャーは480オツソリアスーツを選んだ。見た目は：普通に執事服だ。確かに妙に似合っているが、面白味はあまりない。

小次郎はイロハフブキと呼ばれる、桜の花びらが美しく彩られた着物に似たものを選んだ。下は袴状のモノが機能性を損なわないために前後ろで無くなっており、サイドに緩やかに広がる。中はズボンになっているが和風なイメージを損なうものではない。そして、口元のマフラー状のモノが口元を隠しており、現在の少年の姿でも損なわれていない元来の凛々しさを際立たせている。

色はシンプルに白だ。

ギル少年はミヤビカタを選んだ。これは普通に半そで半ズボンの浴衣だが、元が良い為よく似合っている。ちなみに色は金に近い黄色。好きな方向性は小さくなくても変わらないらしい。

士郎が選んだのはジャツジメントコートだった。クール系の主人公が着てそうなそれが琴線に触れたのか、それとも名前が良かったの

か士郎はそれを選んだ。

そしてランサーはソルプロテクトと呼ばれる、所々にさりげなく装飾が施された細身の騎士甲冑を選んだ。色は当然蒼だ。

「「「「「おおー」「」「」」」」

コウジユ含め、女性陣は男性陣を見て声を上げる。士郎以外が身長が低くなっているとはいえ、元が良い上に、その所作一つ一つが決まっている為よく似合う。ただ、アーチャーに関しては似合っているが普段の様子から意外性が無い為、反応は普通だった事をここに記す。

・ ・ ・

そこからはもう全員が吹っ切れたのか祭り状態だった。

ダイジェストにして見るとこんな感じだ。

・ ・ ・

「あ、私良い事考えた。桜、ライダー。次行くわよ」

「は、はい」

・
・
・

「で、これでどう？エロ主従をイメージしました」

「は、恥ずかしいです…／／／」

「あの…これはさすがに私も…／／／」

「「「「「ぬふおあっ」「」「」「」

「これが…全て遠き理想郷…」

「あれ一種の宝具じゃないですか…？」

「けしからん…」

「ちょー！！イリヤ！！マジカルプリンセスとルナプロフェシーはやばいって！！それ先端と間しか隠せてないから！！」

そんな感じで男性陣が鼻血たらしたり前かがみになったり――。

「せっかくアチャ夫、アチャ娘服が色んな色であるんだから戦隊モノでもやってみる？」

「イリヤがキャラ崩壊。けどそれ面白そうだなwww
えっと、赤は当然本家アーチャーで白はイリヤ、黒は俺でいつか。
アチャ娘服なのが嫌だけど、後はバランス的に男二人だろ？って事は黄色はギルで、青はランサーってところか」

「で良いんじゃない？」

「戦隊名は…アチャ夫戦隊ソウケンジャー！！とかどう？ちなみに双剣と創剣をかけてます」

「説明乙…ってところでさっそく着替えましょう」

・
・

・

「アチャレッド！」

「アチャイエロー！」

「アチャブルー！」

「アチャブラック！」

「アチャホワイト！」

「二人はアチャキュア！！！」

「持ちかけた二人が裏切るな！！！」

なんて事があつたり――。

「む、私の騎士甲冑もあるのですか」

「ん？セイバー気になる？丁度女性五人だし戦隊モノでできるぜい？」

「フフ、それも悪くはないですね。私がモチーフなら戦隊名は――」

「」

「暴食戦隊タベルンジャーで良いんじゃないか？wコウジユもいるしw」

「コウジユ」

「許可します」

「エクスカリバー約束された勝利の剣アアア！」

「ぐはあああああ！……！？」

「ふん、普通に騎士王戦隊セイケンジャーとかで良いじゃないですか」

「……（うわー、予想外にノリノリだー……）」

「……」

などと、コウジユの許可を得て、セイバーがランサーに制裁を加えたり――。

「んじゃあ、凜！次俺がチョイスするぜ！」

「はいはい。」

・ ・ ・

「どうよ！！そんでもって装備『セレブティックオーラ』！！これで普段お金持ちになりたいと嘆いている凜にセレブな気分をプレゼント！！」

「スゴイ。たしかに高貴なオーラがそこに居るだけでこちらへ」

「セイバー達にもそう感じるの？来ている私も何だか心が穏やかに……」

「まあ所詮は気分だけなんで、実際お金持ちになる訳ではないんだけどね。ギルが持つてるような黄金律のスキルを付けた訳でもなし」

「おちよくってんのかああああ！！！！！！」

と、コウジユが弄る側になったり――。

その後も様々な服を用いてこの祭りは行われた。

「いやー、黒歴史だな…orz」

「ええ…無かった事にしたい位に…」

「私は大満足よ？あ、今回のを上手くこれから使えないかしら…」

「マジでやめて！？」

「俺達は…まあ眼福だったかね？」

「まあ…そうですね。…マイナスも大分大きかった気もしますが、
何でブルーメランパンツが…orz」

などと、ダメージを受ける者が大半の祭りとなってしまった。ぶっちゃけキャスター以外全員だが。

今回はこれにて閉幕となったが、キャスターの事だ。ドレッシングルームなんて便利なものがあるんだから活用しない訳が無い。というか、最後の方はキャスターがポーズやらなんやら指示を出して、それに皆が付き合うようになっていた。テンションがおかしくなった面々は、気付いてなかったが、素面の人がその状況を見たらこう

言っただろう…PVでも撮ってるんですかと。実際にキャスターは魔術を使って何かをしていたし、これでお金が入ったら新しい衣装を等、彼らにとって危険な言葉を吐いていたのだが、疲れ始めていたのでその耳に入る事はなかった。

「ふう…ともかくこれで俺の交換条件は無くなったし、安泰だな」

我らが主人公はそう呟き、疲れた体をいやすためにプライベートルームにあるベッドに倒れこんだ。

——その背後で何かのディスプレイを見ながらニヤけるキャスターの姿に気づかず…。

その後、今いるメンバーやこれから出会う者達がメディア面で有名になったりする訳だが、この時の宴が映像として出回ったのかは、その時の参加者しか知らない。

【END】

『stage???：えくすとらすてーじ・・・innふえいと』（後書き）

いかがでございましょう？

いつにも増して飛んだ内容だなーって思われた方は拳手をお願いします。いや、見えんけどねwww

なんでしょうね。途中危ない内容になってる気もしますが、日をまたいでやってた弊害と思って許して下さいww

あ、あとこれ以上内容を掘り下げると大変な事になると思ったので自重しました。

え？できてない？というかもつとやれ？

あはは、何をおっしゃいますやら（笑）

さて次はだれを標的にs（ry

あと、ホントはこの会では月姫キャラを出そうかとも思ったのですが、そこまでメンバーが増えちゃうとただでさえ埋もれているキャラ

ラが居るのに、もっと大変な事になると思い止めました。

さてさて、次回は本編の方へ戻りますよ。

書きたい事はいっぱいあるんですが、それぞれがバラバラなネタと
いうか伏線なのでうまくまとめるのに必死な訳ですが、1週間以内
に出せたらなーと思っております。

嘘じゃないよホントだよ？

ではでは、今回はこの辺りで。感想等お待ちしております。

(*) (ノシ)

『stage47:マーテルまじマーテル・・・innegima』（前書き）

まじですんません!!

一週間とか言いながら結局オーバーしてしまった…。

アクセスを見に行ったら、予定していた日に見に来て下さった人が増えてるし、詐欺ってしまい申し訳ないです。

まあそれは一旦置いときまして、どうぞ。

『Stage47:マーテルまじマーテル・・・innネギま』

side:コウジユ

『解せぬ...』

「何がですか？あ、ほうほうこうなっているのですか…。なかなか面白いですね。これ」

やーやー皆さん。ぐーてんもーげん。元気にけもけもしてるかい？

実は今、俺は非常に欲求不満だ。

はいその青少年。ガタツとかしないように。ちなみにこんなの

←）ね。

（（（。；。D（（（！？ ガタツ

言っとくけどエロい意味ではない。

俺が今欲求不満になっている原因は目の前に居るマーテルが持っているモノの所為だ。

持っているというか、やっているだな。

何してると思う？

ふ、ふふふふ…。この野郎、俺の目の前でPSP02iをやっているんだよ！！

俺がこの姿だから出来なくて何年と我慢してるのにこいつは、こいつは……！！

「なんですか？」

そう言いながらこちらを向くマーテル。

そうなんだ。この子俺の目の前でやってくれてるんだ。つまりやれない俺に見せてくれてるんだ。普段なら目の前で見せつけるようにやりそうなもののに、俺がどれだけやりたいか知ってるからか、『1人でやつてもつまらないので……』とか言いながら俺の前に来たんだ。これがあるか、デレ期か。

「不満があるなら向こうでやりますが……」

『ごめんなさい……』

ちくせう……。

こういうツンデレってやたらと胸にしみわたるぜ……。

いつもながらのキングクリムゾンで始まったが、軽く経緯ってのを思い出そうかね。

事の発端はマーテルが図書館の本を全て読み終わった事に繋がる――。

「暇です」

『暇……って、読書飽きたのか？』

「違います。読み終わりました」

読み終わった！？マジで！？

あはは、いくらなんでも……、と思ってマーテルを見るがその目はマジっぽい。

「いや、さすがにあそこにある全てではないですよ？ただし、読みたい物、必要なものは読み終えてしまったのです」

それでもすげえって。

あの図書館（あれはどう考えても図書室とは呼んではいけない。規模的に）は、かなり不思議な構造をしている。ぶっちゃけて言えばこの城で不思議じゃない部分なんて存在しないが今は置いといて、とりあえずこの図書館の不思議な部分を上げてみよう。

1、外周とかから考えて部屋の大きさが異常。下手したら迷う広さです。

2、気付いたら本が増えてる。何という無限書庫ww

3、当然と言わんばかりに漫画やラノベ、アニメとかのDVDやら映画コーナーもある。パソコンもあったな。ネットも繋がってる。

3は俺得なんで何の問題もないか。あるとすれば今の俺だと自分で操作やらが出来ない事かな（血涙）

そついや週刊誌とかもあるんだけど充実しすぎじゃない？つてか、ネットはどこに繋がってんだ？こつちの世界まだ古代だぞ？

あ、ちなみにネギま関係もあった。原作メンバーに見られるといくらなんでもやばいからな。まあわざわざここに見に来る奴なんていないだろうし大丈夫だろうとは思っけど念のために俺のマイルームに移しといた。

んで1は…まあ魔法の世界だしね。空間の概念なんてあつて無い様なもんだろうさ（遠い目）

そして最後に3だ。これが一番不思議。多分光夜さんかあーちゃんさんが増やしてくれてるんだろうけど、頑張り過ぎじゃない？つて位毎日増える。これも何か魔法的な力使ってるからそれほど力はいらないんだろうか？さすがに買って送ってる事は無いと思うが…。

買ったとしたらシウルすぎる…。

とまあ、関係ない考察的なものも入ったが、莫大な量があるというのは分かってくれた筈だ。

だと言うのにマーテルは読み切ったそうなの。

「正直、増える分を読んだとしても暇ができてしまっんです。やれやれ…」

と、付け加えるマーテル。

数年で読破とかどうやってたらできるんだ？あ、魔法か。

もうなんか何でも魔法って言葉で納得してしまう自分が怖い。むしろそれで納得できてしまうマーテルの方が怖い。

「で、何かありませんか？」

いや、そんなこといわれても…

『あ、映画とk「見終わったに決まってるでしょう」でっすよねー…』

んー、暇を潰せそうなの…何かあったっけ…？

マイルームにF a t e世界の時の暇つぶし道具あるかね？

『ひよっとしたらマイルームになんか置きっぱかもしれんから行ってみ？』

「ああ、そういうばそんなものもありましたね。もう何千年もほったらかし状態のやつが」

…この巨体じゃあ入れんのだから仕方ないじゃん…。

そう心の中で思いつつ、最近使う事のなかったカードを、倉庫からマーテルの前に出す。マイルームへ入る為に必要なスペルだ。使う事が無かったんで渡してすらいなかった。この子普通に転移魔法使えるから他の用途で使う事もないしね。あ、なんで転移魔法使えるのにカードが必要かってのは、F a t e世界でキヤスターと試したんだけどマイルームに直接転移は俺しか無理で、例外としてカードを持ってたら出来るって結果が出たんだ。だからカードを渡したんだが…どうしたん？

渡したカードをじっと見て動かないマーテル。

何を思ったのかそれを両手で持って――。

「えい」

『ちよっ！？何してんの！？』

突然曲げやがった。って、ああ！！曲げるどころかそのままくしゃくしゃに――！！

『マジで何してんのって!?!』

「ふむ、やっぱりですね。能力由来のカードだからでしょうか…それとも…」

ふむふむと一人納得しながら、こちらには何も答えずカードを見ている。

「さて…ゲート!」

そして一人突っ走るままにマーテルは自身の影を媒体に空間移動の魔法を使って消えてしまう。

そして取り残される俺。

『これ、泣いても良いかな?…答えは聞いてないからなこんちきし
ようう…うううう……』

・ ・ ・

「うん、なかなか良いものあるじゃないですか」

そう言いながら何かを大事そうに抱えて、俺の影から出てくるマーテル。

結局さっきのは何なんさ？

とりあえず聞いてみるか。

『なあマーテル、さっきのは何をしてたんだ？』

「ふふ、これがあの…しかし中身が…」

聞いちゃいねえよ…orz

もう良い寝る！！

皆お休み！！

side out

side：マーテル

おや？私の番ですか？

母上は…あ、寝ちゃったんですね。眠かったんでしょうか？ふふ、
こういう所は見た目同様に幼いですね。まあ見た目で言えば私も同
様ですが。

おっと、本題を忘れていました。暇つぶし道具の話でしたね。

え？

その前に、私がカードで何をしていたのか知りたい…ですか？

むう…まあいいでしょう。

私がカードを曲げて確認していたのは、単純に曲げて元に戻るかです
すよ。

気になりませんか？あれの材質。

で、実際に曲げた訳ですが、普通に帰りやがりましたね。多分母上
様が能力で創った材質ですから、触った感じたあの紙なんです、
次の瞬間には元の状態に戻ってました。

はあ、相も変わらずでたらめです。感覚だけで能力を使っているか
らこんな矛盾が出るんですよ。本人が矛盾を固定してしまえる能力
を持っているから尚更性質が悪い。

知ってましたか？母上様って、実はちゃんとした魔法を使えないん
ですよ？ちなみに私が言っているちゃんとした魔法というのは、こ
の世界のルールにのっとり、魔力をもつてして精霊という名の力の
塊に指向性を持たせ、術式に沿って発動するというものです。この

際、精霊については横の置いておきます。問題は術式に沿ってという部分。いつだったかも言ったかもしれませんが、母上様はラーニングで覚えたものはそのまま結果だけを持ってきます。つまり毎回、魔法を創ってしまってる訳です。本人気付いてないでしょうねー、それがどれだけの事をしているのか。

むしろ母上様本人は術式に沿って行使してないから強弱付けにくいとか、応用できないとか色々愚痴ってますが、正直ぶん殴ってやるうかと何回思った事か。いやまあ、模擬戦でやらかしたりはしてるんですがね。

ごほん、とにかくにも、母上様にはあの感覚で何でもしちゃう癖をどうにかしていただかなければなりません。

何でかって？

決まってるでしょうに。

見ていて冷や冷やするんですよ。術式を理解、分解、再構築。どちらかというと学者はだな自分からして、結果だけ出してくる母上様の魔法の使い方はどうも怖いのです。というか実際に偶に制御を失敗して自爆してますからね。何度か巻き添え食らった事ありますし……。

渡された記憶の中にSLBをマギア・エレベア闇の魔法で掌握するというものがありました。どうしてSLBそのものはアインツベルンの地で割と容易く使用できたのに、闇の魔法で掌握しようとした途端に自爆という結果になったというのも母上様が感覚で魔法を創っている事に原因があります。

SLBはそもそも砲撃です。当然母上様も“そういうもの”として

創ってしまったている訳で、それを捻じ曲げて闇の魔法で掌握しようとしたんですから、どこかで齟齬が生まれるのは当然です。まあ、自爆して、その結果ダメージを受けラーニングが発動して学習効果が向上したのは正直驚きましたけど…。

ふむ、改めて考えるとおかしいですね、母上様の持っているスキル。何故か神との邂逅の部分だけ綺麗に知識が入ってきていないので確認等は出来ませんが、どうもきな臭いのですよね。本人は『ラーニング』や、『幻想を現実に帰る程度の能力』、その他もろもろだと思っているようですが、どうもそのあたりが…。

これは…証拠も何もない考えで、1人の研究者として、私の信条に反するものですが母上様が渡された能力は――

ぶちんっ…

――あれ…？何でしたっけ？何かを考えていたような…ああ
そうだ。私が暇つぶしに見つけてきたモノの話でしたね。

いや、申し訳ないです。最近こういう事があるんですよ。何を考
えていたのか忘れてしまっんです。後に残るのは変な既視感^{デジャヴ}だけで
歳でしょうか？見た目は幼女（ちよつと成長したが）のままでも生
れて結構経ちますからね。

まあそんなことは今は置いておきましょう。

で、ですね。私がマイルームからもってきたのは――。

side out

side: コウジユ

起きた…。

うん、やっぱり身体に精神が引つ張られてるんだな。無視されたか
らって不貞寝するとか…orz

元大学生（男）として考えられねえ。

この身体になって既に、元の男として生きた年数はとうに超えた。

けどさ、男としての意識が完成されて、その状態で“転生”本来の生れた所からっていう人生のやり直しではなく、憑依のに近い形で今の俺が始まったからか、変わらず“俺”は男だと言える。けど…。

…女の子の意識に引つ張られる。ただ身体に引つ張られるというか、持っていかれるというか…、近寄ってくる？まあとにかくそんな感じの変な違和感があるのは何でだろう。男の意識はそのままに、何かが合わさる見たいな…。

そもそも、TSになるっていう経験がある訳ではないので、普通に（というのも変だが）そういうものなのかねえ？

まあいつか。あまり深く考えても仕方ないさな。

とりあえず、いつだったか言ったように最後の一線だけは守り抜こう。絶対に。

さて、そろそろ現実にリトライしようか。

眠ってた頭も再起動できたし。

頭を足元に居るマートルに向ける。

「ほほう。ふむふむ。ここは…おや、これは…悩めますねー」

なんぞや？なんかカチャカチャという音と共に何かしてるのは分かるんだけど…。

もう少し頭を動かして覗きこむ。

目に入ってきたのは――。

『PSP！？ってか俺のじゃね！？それにやってるのって…！』

「ん？ああお借りしてますよ？それにしてもこれ面白いですね。キヤラ作りだけでかなり時間を費やしてしまいます」

そう。この少女、俺の目の前で現在、おれのPSPを使ってPSP O2iをやってやがるんだ。

『ちょ、おま！！俺が出来なくて我慢せざるを得ないってのに！！』

「・・・」

ああ！！そつえば

そつえばじゃねえよ！！

ってかそれどこから持って来たんだよ！？

あ、あーそうか…。マイルームか。マイルームには俺の倉庫に繋がる端末があるからそっから持って来たのか。

他の部分は…もう突っ込むの疲れたし良いや。だってマーテルだもの。そして俺だもの。

あれだよ。諦めつてのが肝心だよ。

とりあえずこれだけ聞いとう。

『それで、楽しい？』

「めっさ楽しいです」

良い笑顔だなこんちきしょう!!

『で、冒頭に戻る…と』

「メタ発言乙」

どうも。

あの後、俺が自分のPSPに関してぶつぶつ落ち込んでたらどこからともなく目の前にマーテル用のPSPと要りそうだったのでいった内容のメールがぁーちゃんから届いた。

おしい。俺が嘆いてたのは俺のPSPを使われてたからではなく、俺が使えない事だから。ぁーちゃん天然疑惑浮上。いや、やっぱ確定。

んで、その後は俺の見える位置でマーテルがマイPSPとなったそれでキャラ作成からやり始めた。

かれこれ数時間が経っている。

ちなみに、現在マーテルがやっているのはエミリア編だ。

PSP02iはPSP02の続編なわけだが、そのPSP02の分のシナリオがエミリア編だ。俺の知識から流れ込んだ分にエミリア編の知識もあるみたいなんだが、どうも実際に自分がやらないと気が済まないらしい。分かるけどもね。マイキャラも作ったわけだしさ。まさかニューマンで男の娘キャラを作るとは思わなかったが。

ともかく現在エミリア編を攻略中。

懐かしいなーと思いつつそれを俺は見ている。たまにうずうずして手（前足）が動いてしまうのはご愛敬って事で。

「うわ、痛い人が出た。笑い方がどこそのシスコン魔王と同じな件について」

痛いと言っちゃだめ！

厨二病マックスな事言ってるけど…。

そんな感じで時間が過ぎていく。

そういえば、改めてPSP02見てて思ったんだけど幻想舞闘にジャストガードとか取り入れられないかな？ローリングも。

ジャストガードは敵の攻撃に合わせてタイミング良くガードすればダメージゼロプラスごく短時間のダメージレジストができるし、ローリングもどこぞの魔物狩りなゲーム見たいにローリング中は無敵状態が短時間存在する。上手くそのゲーム概念を戦闘で使えたら…最強じゃね？

…でもないか。

ローリングはともかく、ジャストガードはかなり難しいし。

オンラインでやっているとありえないジャストガードを魅せて（誤字

にあらず）くれる人も居るが、俺はそこまで玄人ってわけでもない。
要検討ってところか。

まあ俺が先にしないといけない修業は影の制御だけだな。

影の制御さえできれば俺は念願のPSPo2iができるようになる。
そうすればこんな思いはしなくて済む。

…今はまあ、マーテルがやってるエミリア編が気になるので後でしよう。

やったるでー！！

side out

『Stage 47：マーテルまじマーテル・・・innegima』（後書き）

どうでしょう？

自分でも内容薄いなあとは思っていますが中つなぎ上必要な部分だったかもしれません。

後々のための“コウジュ”に関する伏線を張りたかったんで、前回も合わせて考察みたいなものを長々と書きました。

他の作者の方みたいな理路整然とした伏線の張り方を出来てないの
でひょっとしたら後々にいじるかもしれませんがその時はお知らせ
という形で言うかもしれません。

あ、ちなみに次話も似た感じになるかもです。ただし次回はヒトに
戻る予定。

そしてその次で原作の重要人物に登場していただく予定です。まあ
現時点でつてのを考えたら分かるかもしれませんが。

まあ何にしてもそろそろ盛り上がる展開を書きたい（↑自分が書く
の遅いから掛けてないだけ）お年頃。

模擬戦でもいいから書いてみた方が良いのかな？

前に一度やった新技の実験とかもありでしょうかね？

さてさて、では今回はこの辺で失礼します。

感想やこうした方がいいのではないか等、色々お待ちしております。

P . S .

本編でマーテルさんにおかしなことが起こった件についてですが、あの音は何かが切れた、切断されたという風にお考えください。
俗に言う伏線ですね。

上手い事回収できるかなあ…。

『Stage48：そういえばこの世界ってさ・・・innegima』（前書き）

皆さん今晚は！！作者のkouです！！

いやー暑いですね。思わず普段出来る事なら行きたくない学校に冷房目的で言ってしまう位暑いです。

さて、今回は後書きにて発表があります。

良ければ見ていってください。

では、ひとまず本編へどうぞ。

『Stage48:そういえばこの世界ってさ・・・iノネギま』

>side:「ウジユ<

走る走る――。

「はあっはあっ――!」

逃げて、隠れて、ただ走る――。

「くそっ!!何でこうなった!!」

倉庫から武器を取り出す。魔法を使ってる暇は無い。しかし、それなりの破壊力が必要だ。更に言えば長距離での

ならば…と、現在の俺に必要なそれ呼び出す。

「来い!コンバットカノン!!」

レーザーカノン系統のそれを肩に担ぐ。黒く、機械的で、巨大なカノンを俺を追うものが居るであろう方向に向ける。

「ファイアっ!!」

光粒子による砲撃を放つ。

人一人なら容易く飲み込むであろう太さの光が相手に向かって走る。

しかし――。

「当たらなければ、どうという事はありません!!」

俺が撃ち落とそうとした対象は、俺が放った粒子を掻い潜り、距離を詰めてくる。

「ちいつ!!」

カノンを直し、改めて距離を離す為に再び走る。

「素直に逃げれば良かったものを!!」

後方から響いてくる声はまだ遠い。

だが、相手には魔法がある。それも、厄介なレベルのモノが大量に。そんな事を考えていたからか案の定、背中越しに魔力の集束を感じる。

「百重千重と重なりて走れよ稲妻!!術式合成!!魔法の射手、雷

の千矢!!」

聞こえた詠唱は、俺の中の警戒レベルを最大まで一気に引き上げる。広域空間殲滅魔法に収束と補足の効果を加えられた術式。文章にすれば簡単なものだが、対象とされた側からすればたまったものではない。

「センシライコウ千矢雷狗・紅!!」

千の矢に千の雷。一本の矢に対し一つの雷をその身に宿し、合成された魔法は名の通り千の狗となって俺を追う。

彼女の特性とすらなりつつある紅をその身に宿し、収束して爆雷となる為に、雷狗達は俺に喰らいつこうと迫る。

この世界の基本魔法とも言える魔法サキタ・マギカの射手。矢一本の威力は精々が魔力を込めたストレートパンチ位しかない。だが侮ってはいけない。この魔法の真価はその多様性にある。術式が簡単な為に数を作る事ができ、補足・捕縛を行う事も出来る。また、収束する事での破壊力上昇も可能だ。それらの特性を組み込んだのが『千矢雷狗』だ。

選択肢が多い分制御が難しいが、それに見合った恩恵を得ることができる魔法だと言えるだろう。広域殲滅魔法の火力、そこへ補足、捕縛、収束の概念。厄介なことこの上ない。

さあ、そいつが俺のすぐそばまで迫っている。どうしようかねえ？ ツミキリヒヨウリで空間を飛ぶか？ いや、広域空間攻撃であると同時に対象補足攻撃である以上、長距離をまだ飛べない俺ではすぐに

再び補足される。

じゃあ迎撃か？千もの数を撃ち落とす？速さもシャレにならないのに？攻撃に攻撃を当てるなんて器用な真似は今の俺にはできそうにない。

無理だ。

つてことは素直にガードしかねえか…。

「来いカザミノコテ。ほんでもって、混沌『カレイドスコープ・矛盾展開』…」

蒼い炎を纏った籠手型のシールドを左手に装着し、続いてスperlカードを宣言し、影が伸びて右手に巻きついた次の瞬間には左手に出したものと全く同じカザミノコテが右手にも出来上がる。左右対称という違いはあれど、それは何故か同じモノに見えるモノだ。

「さーて、厨二くせえ技まで出したんだ。しっかり凌^{しの}がせてもらうぜ？」

装備者の運動性能を大きく引き上げる籠手を両手に装備、タイミング良くガードをした後はホンの数秒無効化時間がある。それを繰り返して、ラグを作ってしまったも左右交互にカバーしていけば――。

「そうはいきません。術式解凍、千の雷^{バイ}×10!」

――うん。

ムリダナ（・×・）

「無駄にカリスマがあるっぽく戦闘を行おうとするからそんな事になるんですよ。まだ勘が戻ってないんでしょう？」

「いいじゃん。カリスマが欲しい年頃なんだよ……」

「やーはー、みなさん。にーはおはおだ。ちょいといきなりの展開にビックリさせちゃったかな？そうだったなら許してくれ。どうしても気がはやってしまったんでやっちゃったわけだが、とりま何をしていたかってのから始めようかね？」

「ま、簡単に言えば模擬戦をしてたわけだが、その模擬戦をする事に

なった理由つてのが俺のテンションがおかしい理由なんだわ。

いつもおかしい？

おいてめえら正座して謝れ。

…いや、否定できねえな。ごめんなさい。

んで、理由なんだが……実は皆気付いてんだろ？

戻ったんだぜい！！！！

いっつあ、K o u j u ボディになー！！

いや、正確には戻るようになって結構経つんだが、今日晴れて自身を固定することに成功したんだ。

だから、この身体の慣らし運転の為に模擬戦ってわけさ。

いやー、長かったね。マーテルがP S P o 2 i 始めてから何年たったんだろ？

千年はいつてないと思うんだけど…マーテルが言うには外の世界っていうか、世界樹がある日本の…のちの関東辺り？では人が集団で生活し始めて、文明が出来始めてるらしい。ずっとヒッキーしてた

んでまったくこの世界について把握してなかった事に今更気付いたんで、その内に世界を移動する術式を整えて世界旅行してみようって話になってたりする。

魔族とか住んできるとこも出来れば見てみたい。ってか会ってみてみたい。原作では悪魔が居たし、魔法世界とは別の所から召喚されてるようだったから魔界みたいなものもあるんだろう。つまりは魔王とか居たりするんじゃない？魔王とか居るのかね？

夜闇の魔法使いに出てくる魔王とかだったら笑うwwwけど、例のポンコツ魔王には会ってみたいwww

話を戻そう。

とにかく長い事練習をした訳ですよ。

最初は影を操る所からだったんだけど、よくよく考えたら態々この世界の操影術を参考にとか考えなくても、俺は似たような技を使う術者に会ってるんだな。

勿論、前回のFate世界の桜っちの事だ。

原作ブレイクしたから黒桜にはならなかったが、キャストが影（ヤンデレモード）？）操作の魔術を改造して桜に渡したのを覚えているだろうか？

聖杯戦争が終わってから俺があの世界を出るまでにそこその時間があった訳だが、当然その間に合った諍い事いさかの中で桜はその技術を

磨いた。

磨いた理由つてのが自身の身を守る為じゃなくて、士郎に着いて行く為つてのが何とも…いじらしいよねえ…。

まあそのおかげか、魔改造桜になつて、めでたく俺の自動障壁オートレジストを突破出来ちゃうほどになりましたとさwww。

俺も調子に乗つてBASAOのお市の技とかを教えたりしたしね。教える時に携帯アカシックレコードさんが手伝ってくれたんで余計に真に迫つた桜改になつてたりもする。

お、俺の携帯なのに俺以外の人に親切だから何日か泣いたなんて事は無い。絶対はない…orz。

でまあ、そんな訳でラーニングは済んでるんで、その操作技術をなんとか応用して俺も自分の影（混沌？）を操作できるようになりました。

操作できるようになつたと言っても、その時点では精々が立体として形成、精密操作を行えるようになっただけで元の姿に戻る存在置換は全くできなかったけどね！！

ただ、お市みたいに手を作れるようになったんで、PSP02iができるようになったのは最高に嬉しかったがね。

ちょっと身体のサイズが違うから画面見辛かったりもしたけど、や

りたい物はやりたいからね。

一重に愛だよ（キリ

んでまあそれが第一段階：らしい。らしいってのは久しぶりのメールが届いてそこに書いてあったからだ。

ちなみにどんなのだったかというところ――。

『第一段階しゅーりょー！！よかったね！！まあ所詮第一段階だけどww

私たちにとっては小さな一歩だけど、君にとっては大きな一歩だ（キリ

影、闇、混沌、虚無、とりあえず黒っぽいイメージの厨二代表属性詰め込んでぐっちゃぐちゃにしたそれなんだけど、もう名前は決めたかにゃ？名前は早く決めた方がよい。名は体を表すというように、名前というのはその存在を個とする為に必要なものだ。だから名前を決めてその存在を確立してあげるんだね。そうすれば少しは操作しやすくなる筈だよ。

ああそういえば、今できるのって形成だけな訳だけど、早く存在を上書き出来るように頑張ってるね。ぶっちゃけるとそれって“原初の混沌”とか“創世の土”とかそんな感じのやつなんだけど、いまじやあ精々が粘土こねて形にしているだけでしょ？レベル上がると色々できるから頑張ってるね。等身大俺の嫁とか楽勝で作れるからwww

概念を書き足すっていう感覚で良いかもね。

まあ結局のところは自分の一部から作ってるんで空しくなるだけかもしれないけどwww

とりま、がむばれww

——とまあ、こんな感じだった訳だが…言葉遣いが所々腹立つんだけど何でだろう？というかこのメールは誰が出してるんだ？光夜さんではなさそうだし、ということはあーちゃん？…いや違いよな誰かに頼んでるとか？アカシックレコードの方も確かこんな感じだったんだけど、今度光夜さん達に会ったら担当の人のチェンジをお願いしよう。

と、本題はそこじゃなかったな。

“原初の混沌”とか“創世の土”って単語があつたんだが…後ろは教授的意味じゃないよな？いやでも、文章からして…ひよつとしてこれは俺にもやっと創作系のスキルが…？

ひゃっほーい！！ってならざるを得ないよね。

今まで何でか物騒なスキルしかなかったが、これで勝つる！！ってなもんだ。

前の世界じゃあ自分で作れない分キヤスターに交換条件で必要なものを作ってもらったのが割とトラウマなんだよなあ！。

あんのドSめ…。嫌だつて言つてんのにあんなモノ…。悪魔に魂を売つてゐる気分だつたぜ…。

カット！！！！！！

うん。鬱になりそうなのでカットね。

さて、この後メールの内容を参考に修行して、俺は第二段階に至つた。

今回はメールなかったけど第二段階つて事で良いと思う。
出来るようになったのは作ったモノに色を付けること。

あのメールにあった“俺の嫁”ができるようになった訳だ。

生前に好きだったキャラを作つてみたよ勿論。

メールにあつたように…虚しくなつたよ…勿論。

あ、メールにあつたように一応名前つけたんだけど、実質この技に名前はまだないんで募集中つて感じた。

その名も闇繰りやみくり（仮）。その内天啓つていうか神の声が聞こえたら変えるかもしれない。

…神の声とか自分で言つてて痛いな…orz

とりあえずそれは置いて、この『俺の嫁（仮）』ってかなり便利なんだよね。実質これどこぞの忍ばない忍びで有名な漫画の影分身みたいなもんだし。ただこっちは自動^{オート}じゃなくて手動^{マニュアル}だけだね。しかも今はまだ操る事に集中しないといけないから戦闘には使えない。まあ元々今の俺じゃあ戦闘力を持たせれるわけじゃないんで、簡単に崩れるんだけどね。

しかしながら、成功した時は色々したもんだよ。

え？エロい事？

してないよ？えっちなのはいけないと思います。

いや、だって、今俺TS中だぜ？推奨できる訳ないじゃん。なんか見られる側になっちゃうとさあ。なんていうかさあ。

ん？内側男じゃなかったのかって？

あっ！？

推奨！！やっぱり推奨！！

良いよね、うん。やっぱり最低限男としてね。

ごほん。

……まあそんなのは別として好きなキャラにそんな事は出来ないっ

ていうのが強いだけなんだけどね？

ヘタレ言うなし！！

あ、それからこの第二段階でやつとこさ限定的だけどKoujumoード、つまりは人型に戻るようになりました！！自分に自分という概念を重ねるっていう文章にしたら分かりにくいやり方なんだけど、なんとか戻れる目処ができました。

ただ、限定的っていうのが…… たつたの三秒なのよね…orz

この時点だと、3秒経ったらどこかの賢狼様が変身する時みたいになぶわぁと身体が膨れちゃうんだよなあ。

そのせいで初めて成功した時、横で見てたマーテルがせっかく一緒に喜んで近づいてきたのにプチっとしちやっただんだよねー…。

1週間たい焼きセルフサービスの刑になりました（´・ω・｀）

それから最終段階。これが勿論完全に人の形に戻った状態。つまり今の状態だな。

今となつては完全に時間制限なくKoujuになる事に成功した。“ヤオロズ”という存在に“Kouju”の概念を上書きして存在そのものを転換。存在自体が変わってしまえば“変身”みたいに帰るっていう事は起こりえない。結局は自分の意識の問題だ。能力的な意味でも思い込みが大事って事だな。

それにしてもこの能力使い勝手良すぎだ。

色々と試行錯誤してる間に面白い事も出来るようになったしな。

一つ目は獣化に関して。

Fate世界では、ゲーム内で言う所のゲージ、今の俺で言う所のダメージもしくは心の高ぶりによって発動できるようになってるっぽいけど、あれがいつでも発動できるなら最強じゃね？と俺は思った訳ですよ。

その過程で出来たのが完全獣化、フルビースト半獣化、ハーフビースト四半獣化だ。付けた名前に関しては気にしないでほしい。そのままの方が分かりやすいくない？ただ良いのを思いつかなかっただけとかでは断じてないのであしからず。

さて説明なんだけど、フルビーストは言わずと知れたヤオロズモードの事だ。長い事ヤオロズってたからかイメージしやすかったように比較的簡単になれた。ただ、ヤオロズだからか装飾品の五つの仮面を壊されると元に強制的に戻っちまう。ただ、他の部分で融通が利くのが特徴だ。どうやらヤオロズモードは魔力やらなんやらが無制限らしい。どうも世界とリンクしちゃってるみたいなんだ。ヤオロズ↓八百万みたいな繋がりのかね？自分の事ながらホント良く分からんチートボディ。あ、ちなみに今のKoujuモードは魔力が無限ではありません。Fate世界はなんか龍脈と繋がっちゃったけど、今回はそんな繋がりが無いからね。まあ、ほとんど無限も良い位にあるんだけどねwww

んで、後ヤオロズモードで出来るのはゲーム内でヤオロズ様が使ってる技は当然のこと、俺が覚えた魔法もいけるし（口から限定だが）

、そして何よりも嬉しいのがサイズ変更できるようになった事かな。
何？そこなのかよって？

当たり前だろう！！

子犬サイズから山サイズまでなれるんだぞ！？特に子犬サイズ！！
わんわんお！わんわんお！！

あ、ヤオロズ様は狐だった。

ごほん、えっと、欠点は先に言った仮面と細かい作業ができない事
（大雑把な広域空間殲滅しかできない）、後微妙に性格がヤオロズ
様っぽく遊び心を持つちゃう事かな。

今はマシだけど最初とか何故か勝手に一人称妾わいわになってたし、今でも
気を抜いたら『どれ、一つ妾に試練を受けて見ぬか？』とか口か
らぽろっと出る。

さて、次がハーフね。こっちは元のナノブラストの事だ。ただ、こ
っちは結局ゲージを貯める必要があるっぽい。最後まで簡易化は無
理だった。はあ、無敵状態欲しかったな…。

ん？チートがるんだから良いじゃないかって？

良くない！！攻撃魔法じゃ防御できないんだぞ！？攻撃は最大の防
御っていうけどそんなの嘘だ！！カウンター系統を使われたら意味

無いし。不死だと言っても痛いものは痛いんだ！！俺に安全を！！
安らぎを！！

こほん。

んで、最後のクォーター、これが完全に新しくて、手足とかクォーターの名の通り身体の4分の1が獣化する。これ結構気に言ってるんだよね。手足が肉球ハンドになるし、ふさふさの尻尾が生えてくるしなんかカッコよくね？あ、仮面も頭に1枚付く。代わりにいつものおっきい帽子は消えて、髪型は数房を残して後ろに向かって逆立てるように流すような髪型だ。勿論仮面はやオロズ様のやつね。

ただ…、欠点挙げるとすれば、身体スペックはそのままってことと、しかも武器を持ってないってところか。

はい、ただの見た目装備ですみたいなものです…orz

ナノブラストなら持てたのに何で？

いつだったかの六爪流やろうとした時みたいに握る事が出来ないんだ。むしろこっちの方が酷いか、一本も持てない訳だし…。何でかって言うと肉球があるから細かいものを持てないんだよ。だから攻撃方法はひっかくとか吼えるとかそんな程度です。

。。。 (ノド、)。。。。

まあそんな感じで獣化を面白い(泣)感じに改造できました。たま

にフルビーストで寝る位には使ってるかな。Koujuモードで普通に布団かぶっても良いんだけど天然の毛皮で寝るのも中々に気持ち良くて偶になってるんだよね。

さて、闇繰り（仮）最終段階でやれるようになった事はもう一つある。

それが、“俺の嫁”の派生形、影分身（仮）がある程度形になったんさ。

これをやる上で気付いたのが自分が理解しているモノほど概念の付加はしやすいって事だ。考えてみれば当たり前の事なんだけど、よく知ってるモノの方がイメージしやすいのは当たり前だよな。光夜さん風に言えば“縁”が強いつて事かな？しかもイメージが強かったらそのままそのイメージにスペックを乗せる事が出来る。実際は何割も減るんだが、元が強い人とかのイメージで作ってしまうれば雑魚相手なら余裕で何とかなる位の戦力は作れる。要練習だな。

そんな訳で、もっとも縁の深い自分を影人形（仮）に重ねれば、はい影分身って事だ。しかしながら、結局手動のマニピュアルマルチタスクなのはみたいに並列思考つてのが出来ない俺では数を出せない。

まあ、4体で十分だけどね。やりたい事できるし。

出来るようになったやり事は何かって？

うーん、じゃあヒントな。

フランちゃんうふふ♪

これで十分っしょ。分かりやす過ぎるかww

ああ、そういえば、さっきの模擬戦で使ったスペルカード、混沌『カレイドスコープ・矛盾展開』オフショーンセットってのはこの影分身もどきの応用だ。察しが良い人はとくに気付いてると思うが、いつだったかキヤスターと話してた“矛盾”の魔法の使用方法の答えの一つだ。なんでもか、矛盾の魔法は『矛盾を操る程度の能力』とか言うのになつてたから、『概念を操る程度の能力』と合体させて、俺式カレイドスコープを完成させたという訳。

いや、完成というには程遠いか。

増やす存在の基盤というか代償が要るからな。

さっきのと言えば影がそれにあたるな。影を腕に巻き付け、形を力ザミノコテにしてそこに存在を上書きしてる訳だから、実質的に代償が要る訳だ。

キヤスターとの話で出てた技の理想形は無から有を生み出す事だから、ね？

魔法を増やす場合は、詠唱時間とか術式操作とかは使われないが同じだけの『魔力』×『増やす分』必要となる。

増やすモノはあまり体から離れてたら作れないという欠点もあったりする。

なんだかんだで使い勝手が難しい。

これも要練習って事かな。

さてさて、えらく長い話になったな。最初の模擬戦の話からどれだけ発展させるんだって話だな。

うん、今日は寝るとしよう。疲れたしね。

話はまた今度って事で。

んじゃ、おやすみ!!

ちよりーっす。やぁやぁコウジュだぜい。

あの長ったらしい説明をしてからまたもキングクリームゾン。今回は数日だったから短いって言えば短いけど。

ん？何かあったのかつて？

実は…それがさ…。

今日は皆に言わなければならないことがあります。それもかなり重要な事。

それは――。

――息子が二人できました。

あははー…驚いた？

いや、俺も驚いたよ。

今も驚きで何言ってるのかよく分かって無いからね。

俺がわかんねえのに、他の人が分かる訳ないか。

簡単に言えば、マールテルがやらかしたって事なんだけど…。

とりあえず説明行くか。俺の考えを整理する為にもな。

ってわけで回想ドン！！

・ ・ ・

「ふいー、今日もあんがとなー。大分この姿にも慣れてきたぜい」

「ふふ、それはよかったです」

「んじゃ、昼飯にしようぜい」

「あ、今日はちょっと用事が…。ご飯は冷蔵庫に入っているのです」

「ミマセンが…」

「またかよ…。昨日もだったじゃん。いや良いんだけどさ…忙しいの？最近始めた旅行とは別なんだろう？」

「えつと、まあ、でも多分今日で終わると思います」

「…？」

「まあいつてらっしゃい。気を付けてな」

「はい。では、空間^{ゲート}転移」

「これで何週連続だ？そういえば、人モードに戻る前からちよくちよく居なくなってたよな…？最近地球への転移制限をクリアできたからって浮かれ過ぎてしゃしないか…？」

「あれ？このシチュってなんか浮気されてる夫が家で待ってるパターン？」

「あはは、何言ってるんだか。そもそも俺夫じゃねえし。」

「…飯、もう冷めてるかな…」

「ただ今戻りました」

「おかえり、いつにもまして遅かったじゃん。んで、終わったのか？」

「はい！」

「おおっ、ナイス笑顔……」

「えっと、それですね……一つお話が……」

「はいな？」

「子ども……欲しくはないですか……？」

「……………はいな？」

・ ・ ・

まあそんな感じでマーテルが言って来たんだが、ちゃんと聞いてみると、どうやら子どもを二人保護したらしい。

焦った。いつマーテルルートに入っただのかと思った。

いやそもそも精霊と子供って作れるのか？それ以前に俺は今女な訳だけでも……。

カッ！この思考は危険だ！！

…話を戻そう。

最近転移の魔法を完成させたマーテルはさすがにPSP02i一択では暇を潰すには難しかったらしく、俺が一人で練習してる時には別の事（獣化とかで巻き込まれないように）をしている。その暇つぶしが今は世界旅行だ。

俺？俺はほら。PSP02iするのも忙しいし、修行あるし、インフィニティとか、プスポニティしないといけないし、後一番大事なのがここ何千年かこの宮殿から出て無いから引きこもり癖がついちかった

うえ…何言ってるんだか…。

ともかく最近世界各国を飛んで、あちこちの出来始めた文明に触れて歴史を体感する事をしてるマーテルなんだが、ここ何週間…？何カ月…？は俺の修業は関係なしにどこか行くことが多くなった。

その理由ってのが二人の面倒を隠れて見てたからみたいだ。

その2人はどうも捨て子らしく、しかも住んでた集落で爪はじき者になっていたらしい。

そんな2人が俺の目の前に居る。

シヨタ君が二人。どこかで見たような見た目のこの子達。

ついでに言うと、なんか見た目に対して雰囲気がすごい気がする。なんかオーラの的なものが。

「な、なんじゃここは…」

「マーテル姉さん…」

マーテルの後ろに隠れながらも、きよろきよろして辺りを警戒している二人。偶に俺の方を見てはお薄い得ている。

えっと、この二人を俺にどうしろと？

てか俺って怖がられる見た目してる？

「やったね母様、家族が増えるよ？」

「ちよっ」

「（ビクッ）」

マーテルが鬱セリフを言ったんで思わずツツコミをしたんだがそれに対してビビる子達。

「母上様。この子達をここに住まわせてあげてくれませんか？」

さっきまでの表情が嘘のように、いつになく真剣な面持ちで俺に言うマーテル。

「んー俺は別に構わないよ？未成年者略取ってわけじゃないんだろ？」

ふざけてる時なら、PSP02iのキャラデータから掘り下げてシヨタ魂疑惑を吹っかけるんだが、こんな初めて見る真剣な表情をされたんじゃ俺も正面から向き合うほかない。

「勿論理由があります」

「理由…か…。俺が知ってもいいかな？」

パツと見でも重たい内容である事は分かる。それを俺が知って良いものか分らない為、マーテルの後ろの二人に眼を向け、出来るだけ優しい声で聞く。

「（コク）」

あらやだ可愛い…。

ってだからそんな場合じゃないんだって。

そんな事を考えていると、マールが静かに話し始めた。

「この子達は…この世界での、正確には地球で最初の魔力持ちです」

“最初”か…。

「それも、後々に現れる事もないであろう程の魔力と才能を持っています。それらが分からない者達からすれば、魂が圧倒され、離れてしまいたくなるほどに…親の方の理由も恐らくそれでしょう」

「なるほどね…」

それが最初に感じた妙な雰囲気の正体ってことか。

格とでも言えば良いのだろうか、存在の濃さが明らかに違う。

前の世界で幾人かの英雄を目の前にして、ある程度慣れている俺でも“違う”、“異質”だと感じるのだ。何の異能的な防御を行う事が出来ない人々からすればさもありなんと言ったところ。

「最初に見つけた時は、魔力の操り方を覚えれば集落での扱いも変わるかもしれないと思い、向こうで少しずつ教えていたのです」

「けど、溶け込む事は出来なかった」

「はい…」

その言葉に後ろの二人が表情を暗くする。

つてことは元々はもつと気配が濃かったってことか？そしてある程度制御できるようになったから、周りの人間に溶け込もうとした。

「うーん、厳しい事を言うようだけどそれじゃあ難しいよ」

「な、何故ですか！？この子達は何も悪い事は…」

「冷静になって考えろつて。いつものお前なら分かる筈だ。周りの人間はこの子達が“異質”である事を知ってしまっているんだ。人つてのは異質なものにはどこまでも残酷になれる。そいつはどこの世界でも似たようなもんらしいぜ？」

まあまだ世界はここで三つ目でしかないけど、それでもこれは人間の業だと思う。どうしても心の中で差別や区別つてのは生まれてしまうもんだ。人間が心を持つ限りな。

「では…どうすれば…」

「簡単なこつた。異質で無くなれば良い」

「…？」

「要はきっかけさえあれば良いんだよ」

俺は思いついた計画をマーテルに話す。

とは言っても使い古された手だ。

赤鬼さんと青鬼さんのお話とまるっきり一緒だ。

赤鬼さんは村の人と仲良くしたいがその見た目から村の人たちはすぐに逃げてしまう。そこで青鬼さんは一計を講じ、自身は村を襲い、そこに赤鬼さんが村人を助けるために青鬼さんを撃退する。村の人たちは守ってくれた赤鬼さんに感謝し、仲良くする事が出来るようになった。

簡単に言えばこんな感じだったかな。

まあとにかくこれに似たような状況を作り、このシヨタツ子二人が村を守るといふ単純なシナリオ。襲う役は俺で良いだろう。闇繰り（仮）を使つて適当に怪物をになつて集落を襲えば良いだけだし。

「上手くいくでしょうか…？」

「単純だからこそ。上手くいくと思うけどね？まあそれでも無理だつたらここに住めばいいさ。部屋もいくらかでも余つてゐる事だし」

「はい」

一気に笑顔になマーテル。

うんうん、やっぱり女の子は笑つてないかね？

それにしても、よっぽどこの子達に入れ込んでるんだな。マーテルがここまで取り乱すなんて…。いつものクール系毒舌キャラはどこへやら。

「何か失礼な事を思いませんでした？」

「ふふ、いいや思ってたないよ」

温かい気持ちになりながら答えたら思わず笑みが出ってしまった。

いぶかしげな眼をこちらへ向けるマーテルを見て俺はさらに微笑んでしまう。

「あ、そういえばこの二人の名前は？」

「そういえばまだでしたね。二人とも自己紹介を」

「ワシはフィリウス・ゼクト・ユグドラシルじゃ」

「わ、私はミトス・ユグドラシルと言います!!」

「・・・」

マーテルさん、ちょっとあっちでお話しよっか？」

> side out <

> 小話 <

「おい、完全に原作キャラのあの二人だよな。ゼクトともう一人、最初、そんでもってあの見た目」

「はい」

「はい」…じゃねえよ！何でかここにあつた原作は週刊誌共に薬味とフェイトの最終戦闘が終わった所で更新されなくなったから結局どうなるか分からんのに…ってかゼクトは原作まんまの見た目だから良いけど、もう片方ってやっぱあの人だよな？何で名前がミトス？」

「私が付けました。あなたの息子になるって事は私の弟君ですから。あと、ファミリネームはあまり気にしないでください。ちよつと

色々ありまして、ゼクトは元の名前を残したいらしく、ミトスは忘れたかったそうなので…。

ってことで、“マーテル”の弟なら“ミトス”が来るのは当然かなーっと」

「……………、うん。」

なるほどね…ま、深くは突っ込まんさ。向こうから話してくれるほど仲良くなるまでな。他の意味でも…」

> 小話2 <

「あのさ、ちょっと気になったんだけど…」

「はい、なんでしょう」

「マーテルって世界各国行った訳じゃん？もう悪魔とか…居るの？」

「はい居ますよ？」

「マジで！？」

「というか魔王に会いました」

「ええ！？ちなみに名前は！？」

「えっと、ベール・ゼファーと名乗ってましたね」

「しょっぱなからポンコツ魔王！？」

「何故かあなたの事を探していました」

「なにゆえ！？」

「あ、この場所言っておいたので」

「ちょっと、待てよ！？」

> 小話3 <

「あ、あのー！」

「うん？どうかしたかなミトス」

「えっと頑張って歌うので聞いてくださいー！ほらゼクトー！」

「う、うむ…」

「どっという事？」

く
く
く
く

「メルト…だと…？しかも完璧、それにこの不思議な感覚は」

く
く
く
く

「ふ、不覚にも泣いてしまった…」

これは一体…」

「ふっふっふ、どうですかこの二人。上手いでしょう？ここまで来るのに数カ月かかってしまいましたよ。苦労したんですからね？」

「って、これお前の仕業か！？いや冷静に考えたらお前しかいねえな！…ってか何でメルト！？それ以前にこの不思議な感覚って！！」

「ふふ、だから言ったでしょう苦労したと…」。

そう！！この二人は神曲を不完全ながら歌えるのです！！ちなみに選曲理由は単純に私が好きだからです。あ、ちなみに良曲的意味でも神曲だと私は個人的に思ってます」

「やっぱり神曲か！！心に直接流れ込むような普通の曲とは比べ物にならない位の心の奔流…。やらかしやがった…。

ってかこいつ…神曲楽士を遂に自分で育て始めやがった…しかもシヨタ子…。なんとという光源氏…」

「もうちょっとしたら契約でもしようかなーとか考えてます」

「やっぱりか！！」

「ちなみに東方曲ももうすぐ完成しますよ？」

「え…？／＼」

いかがだったでしょうか？

今回も他作品のネタを結構入れましたが全部お分かりになられましたかな？

本文読んで突っ込んでしまった方は是非とも感想の方でも突っ込んでやってくださいww作者が喜びます。

分からないと言う場合も教えていただければ返信させていただきます。

さてさて、前書きでも言った本題の方へと参りましょう。

それというのが、これからの展開について色々悩んでいた事についてです。

実は、私がこの小説を書こうと思っていた時にネタとしてではなく、クロスとして他作品の設定やキャラクターを幾つか出そうと思っていました。

その作品が好きで、どうにかその作品にコウジユを介入させて、悲劇を回避したり、好きなキャラとの繋がりを作ってみたかったです。

しかし、現在の執筆スピードやその他もろもろの理由で、変に他作

品入れてしまうと大変な事になりそうな為、いくつか構想していた部分を削る事にしました。

そのため、“く編”の様に章を作る程の大幅なクロスは止め、簡単な世界観や名前を使わせていただく事にしました。

マーテルも細かく言えばその中に入るかもしれませんが。ちなみに今日名前が出たポンコツ魔王ことベール・ゼファーもその一人です。詳細は省きますがナイトウィザードという作品に出ているキャラクターです。

他にもちよくちよくネギま本編に出ていない様なキャラや設定が出たら、「ああ、やりたかったんだな」と温かい目で見ていただければ幸いです。

しかし…です。

しかしながら…一作品。この一作品だけではどうしてもクロスとして“く編”の様に数話にかけて介入させていたきたいと思います。

結構マイナーな方（だと思っています）で、知らない方も多く、最近のグダグダ感も合わせて読む気が失せてしまうかもしれませんが、どうか、作者のわがままに付き合っていていただきたいと思います。 >（

――く

恐らく次回か、その次にはその章に入ると思います。

そしてその章の名前は『夜の王国編』です。

舞台は飛ぶに飛んで、ネギま原作から約1100年前です。

クロスさせていただく作品の名前は『ヴァンパイア十字界』です。

当時ガンガンで連載されており、全9巻の漫画で、この原作者様はかのスパイラル〜推理の絆〜をお書きになった“城平京”様です。

話数的にはそんなに行かないつもりですが、これからの私が書かせていただいて行くネギまの世界観にかなり食いこんで行く設定を使わせていただくつもりです。

改めて、よろしくお願いします。

では、今回はこれにて。

『Stage 49：序章。魔法世界と夜の王国・・・innegima（夜の王国編）

おかしいな…何でこんなページが増えてるんだ？

すみませぬ。結局量が多くなってる。

とりあえず、どうぞ。

えっと、前略。

お父さん、お母さん、妹様。最近いかがお過ごしでしょうか。俺は元気にしてます。

そちらでは俺がPSPを持ったまま布団の中で寝落ちして、死んで、どれ位たったでしょうか？

こちらではあなたの息子が娘になって、既に何千年か経ってます。そちらに居る時の少し前にはやった曲ではありませんが、1万年と2千年前からなんてものをリアルに体験するとは思いませんでした。

いや、もうちょっと少なかったっけ…。まあともかく、その位経ちました。

それですね。

一つ、いえ、二つお知らせしたい事があります。

一つ目、少し前に娘が、最近息子が二人できました。結婚すらしていないのに、3児の母です。せめて父親が良かったです。

そして二つ目――

——俺、神様になっちゃいました。

> side : コウジユ <

あれから何年経ったっけか…。

住む人間が増え、にぎやかになった我が家（宮殿）。

今日も今日とて——。

「逝くぞおらぁッチャ・ジシヨット？弓編！！」

空中からのアクロバティックな射。

通常のシヨットとは違い、一本一本の矢に練りこまれた力は容易く人を貫通する威力を持つ。

「待つんじゃない！その弓でそれはやばい！！せめて概念を解いてくれんかのう！？そして字が違っ！！」

連続した爆発音が、地面擦れ擦れを飛んで逃げるゼクトの寸前まで居た場所を消し飛ばしていく。

「あっはっはっは、怒って無いから大ー丈ー夫ー！！」

俺が手に持つのは『サザンクロス』という、持ち手がハンドガンの様になった無骨な大弓^{ロングボウ}。秘められた概念は“少量の火薬が仕込まれており、その怒りの爆発によって敵は成す術もなく散っていく”というもの。

「……確かに母上はまだ魔法を十全に使えんのにワシは覚え終えてしまった訳じゃが…別に模擬戦にかこつけてフルぼっこにしようと思んでも…（ボソボソ）…」

「……」

「ちょッ！？強くなつとるんじゃが！？キレすぎじゃないかのう！！？」

大きくなつた爆発音と、巻き上げられる土煙。

さっきも言っただけど怒って無いよ？これっぽっちも。全然。まったく。まだ中級魔法しか十分に扱えていないのに息子になつたゼクトに先を越されたからといって怒るなんて事ある訳が無い。絶対にだ！

「また強くなつとるー！？」

気のせいだ。

「くっ！契約符『神杖アマテラス！』」

土煙の中から飛び出したゼクトは、懐から一枚のカードを取り出し、宣言する。

・
・
・

「うんうん良い感じじゃん。杖も中々使えるようになってきたみたいだし」

「使えるようにならざるを得ぬとも言つがの……」

「なんか言つた？」

「言っておらぬ！言っておらぬよ！！？」

まあ聞こえてただけだろうたえて可愛いから許してやるか。

「さて、と。ゼクトはちょっとした間自習な。休憩込みでちょっとした間適当にやっというて」

「
」

俺はそう言い残し、模擬戦をする為に空中に居たので、いつもの羽根を消して宮殿内部に戻る。

その途中で、一度立ち止まり、宮殿の外側、更にその向こう側に目を向ける。

この獣の特性を持つ目からしても少しかすれて見える程の距離にあるソレ。

「うちの子どもたちはホント優秀なこつて」

ソレ……いや、都市に背を向けるように今度こそ、俺は宮殿に入る。

俺に息子が二人できて数日経ったときだろうか、マーテルがこう言い出した。『理論は私が、実践は母上が行ってほしい』と。

俺としては別に問題無いので、俺の息子たちは弟子にもなった。

はい、ミトスとゼクトの魔改造計画はーじまーるよー。

軽い？気にすんな！！
いつもの事だ。

つてわけで第一弾。『精霊契約』の巻。

精霊契約つてのは、『神曲奏界ポリフォニカ』の“神曲楽士”と“精霊”とが紡ぐ契約を基盤としたものだ。マーテルさんがたくらんでた例の計画を実行しちゃったわけですね。ただ、問題があったのは、本来ならポリフォニカでの契約は、精霊が自身を神曲楽士の神曲に調整する事で神曲から受ける効果を増やすというもの（簡単に言えばだが）なんだが、俺達はポリフォニカの世界の精霊ではない為、っていうか、そもそも俺が精霊じゃない為、そのままの原作に準じたモノだと意味が無い。そこで、マーテルは契約を魔改造しやがった。

どうなったかって言うと、原作の逆で“契約者”を“契約対象”に近づけるというものになった。

単純に逆にした訳だ。

…訳なんだが…。

結果、大変な事が起きた。

マーテルと契約したミトスは、精霊との親和性がありえない事に…。おかげで、ミトスくん原作通り“始まりの魔法使い”なうだよ。つ

いでに言うつと身体の最適化？とかいうのが常に起こってる状態らしい（マーテル談）為、20歳位の優男状態が永遠と続く状態に…。どこぞの霊界探偵の師範が技を使う時になるやつ永続版みたいな？ちやつかり不老不死ですよ。

せつかく、成長してナイスミドルになりかけてたのに。

んで、俺と契約したゼクト君。俺がちょっと、ほんのちょっとだけ失敗したから、ゼクトはシヨタ状態で不老不死になっちゃった。これ多分あれだよ世界の補正的なモノの所為だよ。だって原作でシヨタ爺だったじゃん？だから俺が無意識でやっちゃったみたいなの？

こつちもせつかくいい感じに成長出来てたのにね？

ワロス。（＊　　）

まあシヨタ状態になっちゃったもんは仕方ないし、置いていて、と。

特典としては身体能力の向上が出た。しょぼく感じるかもしれないけど、わりとエグイ位上昇してますた。どれ位かはその内語る事があるかもしれない。

あ、副特典で動物に好かれるというものがあつたりするが、関係無いか。

続いて第2段、PSPo2.iシステムでの強化。

これは俺自身の強化もあつたからなんだけど…。

いつだったか俺コンバットキャノン使ったじゃん？

アレよく考えたらPSP02iになって追加された武装だから。PSP02のデータを元にして俺が持つてる筈が無かつたんだ。つまりはいつの間にか俺の倉庫に放り込まれてたわけだ。

ナチュラルに気付かなかつたぜいww

普通にぶつ放してたわww

それで携帯さんアカシックレコードに問い合わせてみたらPSP02iのデータを俺にロードしたらしい。

増えたのが、インフィニティになって結構重要視されるようになった武器の属性についてとか、職業について、それからマイルームについて。

ゲームでは武器に属性が、%で付与（最大60%）されていて、敵の弱点属性に合わせる事でダメージが増えたりとかがある。元々武器に“凍結”とか“燃烧”っていう効果が付いてるのもあるが今は置いておこう。

それでだな、この武器の属性なんだが、俺が持つてるのは全部ノーマルになってるんだよ。武器に属性付与する時は魔法で付加して下さいっていう素敵仕様になったんだってさ。正直どうでもいいけど。

続いての職業については。めんどくさいから簡単に説明するけど、RPGでよくある剣士とか魔法使いみたいに、ハンター、レンジャ

ー、フォース、ブレイバーってのがあって、それぞれ近接武器、遠距離武器、魔法系、器用貧乏っていう特徴がある。これをミトス達に覚えさせる事が出来るようになった。俺は勿論ハンター、元々なミトス、マーテルはフォース。ゼクトはブレイバーになった。

その覚えさせることができるようになった方法ってのが次のマイルームの件についてにかかわってくる。

さて、そのマイルームについてなんだが、皆さん覚えているだろうか？俺は今まで出入りする時は常にどこかのドアと繋げてマイルームの入り口を使っていた。しかし、だ。繋げずに入り口を通ったら、なんということでしょう、部屋が増えてやがんの、っていうか、ゲームで言う“リトルウィング”そのまんまになった。モン○ンで言うと、自分の家だけがあると思ってたらいつのまにか周りにポツケ村が出来てたみたいなの？分かりにくいかな。

ともかく、いつの間にか俺のマイルームが進化していた。ゲームではリトルウィングってのは戦艦型コロニー“クラッド6”内部の1区画でショップとかがある。その中の一つに職業についての設定をする店があるんだ。そのおかげで魔改造の一つを行う事が出来たってわけ。ちなみに店員さんはホログラムになっていた。皆が大好きなお祈り巫女さんの小夜ちゃんもね。あ、そういえば、小夜ちゃんって結構な武闘派巫女さんなんだけど皆知ってるのかねえ？関係ないかww

そして最後の魔改造第3段は『本契約』だ。

スタイルがマーテルに似たミトスはマーテルから様々な術式、技術を学んだ。そしてその過程で本契約について研究を進めていた。

そう、原作でもあった“パクティオー”ってやつだ。原作では薬味坊主が“仮”契約って事にかこつけて十何人かとちゅっちゅちゅちゅしてた“アレ”の大本だ。

まあ俺達がしたのはその大本の更に大本、簡単に言えばプロトタイプの本契約を行った。

こっちの契約は俺が主でマーテル、ミトス、ゼクトが従者で、血を交換する事によって行った。実質的に必要なのはDNA情報の繋がり、つまり粘液の接触が必要なので、原作みたいにKISSでもいいけるが俺が断固として拒否したため血の交換によって行った。

原作と違って、プロトタイプな為か人数制限も緩いし、カード自体の柄が俺が使ってるスペルカードのモノになっている。その他の細かい機能は基本的に同じとなっているようだ。

そして、パクティオーの最大の利点である、マジックアイテムだが、俺が主だから俺の倉庫の中から武器が一本ずつあてがわれている状態になった。

ちなみにマーテルは『サイコウオンド』、ゼクトが『神杖アマテラス』、ミトスは『モタブの預言書』が出た。

さて、お分かりいただけだろうか。

どいつもこいつも物騒なもん出しやがって！！しかもどいつもこいつも当然のごとく概念付加済みだよコンチクショウ！！

マーテルの『サイコウオンド』は先端が十字状になった一見何の変哲もない杖なんだが、“宇宙を消滅させるほどの威力を持つ”なんという概念を持つ。全世界の皆さん。原作が始まる前にこの世界無くなっちゃうかもしれません。

ゼクトの『神杖アマテラス』は公式イラストでシヨタニユーマンの子を持つてゐる儀式杖っぽい形状の杖だ。概念は“所持する者は絶対的な力を得て神の裁きの雷を落とす”だ。なんつう杖を引き当ててるんだか……。まあマーテルの後じゃあインパクト少なえが……。

最後はミトスの『モタブの預言書』なんだが、概念は“テクニクについての秘密が記されているらしい”っていうあやふやなものだったんだが出てきたやつは何でかあらゆる技術、術式スキル テクニクについてが記されていた。それもファンタシースターの世界だけのモノではなく漫画やアニメとかの他の世界のモノ込みでだ。限定的なアカシックレコードみたいな？俺の方の預言書も同じようになってたからどうやらそういう仕様らしい。

え？これでまたチート技を覚えられるねって？

うんまあ、ミトスに関してはそうかもしれないけどさ。これってどこぞのアンサーカードみたいな、どうやったら“それ”を覚えられるかまでを教えてくれる。

けどさ……、皆知ってるか？

解無しつてのも答えなんだぜ…？orz

後は“零”つてのも答えであったりするよな。

才能って…残酷だよな…。

うう…（泣）

ごほん…！

まあそんな感じに魔改造は終了した。

けど、終了したおかげでここ最近やること無くなっちまったんだよね…。

「ああ、暇だ…」

外に出てもこっちの世界はまんま火星のままだし、向こうの世界じゃあもう立派な文化やら世界観が出来ちまったせいで異種に対する排他的な感情も大分強くなってきてるしなあ…21世紀とかならコスプレで通るけど…」

なんでかこの耳、隠せないんだよなあ。

闇繰り（もう確定）でなんとか人間の耳にしようとしたんだけど全然できる気配ないし、なんでかねー？

ビースト種としてのアイデンティティー的な？

あ、そういえば男の姿、前世の俺の姿にもなれない。20年近く連れ添った俺の身体だし、それなりに縁が強いと思ったんだけどなあ。どれだけ頑張っても精々が10秒だ。しかも全力でやってた。終わったらぶっ倒れちまう。

一回だけ、なんでか見た目はKoujuのまま男になった時はビビったな。数日戻らなかったし。そのせいで男の娘状態の俺にやたらとマーテルが反応して危なかった。色んな意味で。性別的には男だからってあの姿にはもうなりたくねえな。

あと、変なパターン（？）で、お姉さん形になるってのもあった。むちむち系の。Koujuのまま身長だけ前世の俺にした感じ？あれはあれでヤバかったな…。マーテルのキレ具合が半端無かった。身長差と胸囲の意味で。数日後には自分も幻術とかではなく身体を成長させる魔法を作ってた所があいつらしいけどな。

「っていかんいかん。独り言っていうか考え事？が最近多くなってるな」。精神がじいさんになってきてんのか？生物学上はばあさんだが…。

「ってこれも独り言じゃん…orz」

最近娘と息子たちは一緒にどこかへ行って帰ってこない事が多い。

今日は久々にいるけど、でもずっと図書館にこもりっぱなしだからなあ…。

「はあ…。せめて俺が普通に過ごせる街があれば…」

その時パンツと扉が開いた。

なんじゃらほい？

「「「こんな事もあるつかと！」「」「」

な、何ですかい？まじで。

キングクリムゾン！！

そんなわけで――、

――魔法世界、できちゃいました（苦笑）

三人であちこち行つてたのはなんでもゲート兼、楔を地球の方に打ち込む為とかその他諸々が理由だったらしい。

魔法世界を今居る火星の別次元で作る上で、火星の公転周期とかを地球に合わせて差異を少なくし、けれども魔法世界だから異種族が居てもおかしくない世界観ができた。

ファンタジーの世界がここに出来ちまったよおい。

けど、何でいきなりこんな大層なモノを作ったのかが分からなかった。

だから聞いてみたんだが…。

なあみんな聞いてくれよ。

この魔法世界。ミトス達は親である俺に今までの感謝を込めて創造してくれたんだぜ？

泣いたね。そりやもう体の水分無くなって、スケドが発動しちゃう位には。

あ、でもちよつとだけ怒ったよ。生命の創造をする事自体は別に罰当たりとか、神への冒瀆とかは言わない。それを成すだけの力があるんだからさ。でも俺の為につてのは駄目。造られたとしても“生命”は“生命”だ。誰かにプレゼントするもんじゃないと思う。“導く”のならありだけどさ。“扱う”つてのならダメ。

まあこの子達なら大丈夫だろうけどさ。

それに俺の為を思つてやつてくれた事には変わりはない訳で…、あ、やべ、また涙が。

火星の次元をずらして存在する魔法世界。そして生み出された生命。魔力によつて創造された存在は、どうやら精霊という存在に近いらしい。

けど、それ故に存在は不安定だ。

マールテルみたいに本体、そして核があれば別だが、あくまで精霊ではなく“人”として存在を固定する必要があつた。感情があり、恋をして、子を成していく。時には争い、友を知り、親しき無くして哀しむ。そして悲しみを乗り越え日常を生きていき、歴史を重ねる。

文字にすれば簡単だが最初はかなり難航したようだ。

そこでミトス達は“悪魔”という存在に行きついた。まででありながら一個の生命として成り立つ彼らをだ。

『裏界』…。

コインに裏と表があるように、火星の裏が魔法世界であるように、地球の裏側、それが裏界。

その住民が魔族だ。

裏界とはつまり魔界。

ミトス達はそこで魔族と色々してきたらしい。それも魔王クラスと。なんか、「面白そうだから」っていうので手伝ってくれるようになったらしい。あと、俺という存在に興味を持っている一部の魔王に少しだけ情報を買ったらしいが…しゃーない今回は許しとくよ。

ともかく、そこでヒントを得て、それを行える術式をミトスが持つ『モトブの預言書』で見つけ出した。

“魔力を消す魔法”を反転させて、“魔力による存在”を固定し、逆説的に魔力に依存するものではなくならせる。

原作のアスナが持つて^{マジック・キャンセル}る魔力完全無効化能力ですな本当にありがとうございました。

どこことなく原作の臭いがし始めてきた気がする。

俺のせいで原作ブレイクがどうなるのかとおもっていたけど、なんだかんだで原作は近づいているようだ。

さてさて、どうなるのやら。

あれ？そういえば、この魔法世界に創造された住人を生命としてとらえて欲しいみたいな事を俺は言った訳だが、そうなる？この世界の住人はあの子達の子どもになるのか？つまり俺の孫？

結婚しない内にいつの間にかお爺さん（お婆さん）になっていた件について…orz

これで名実ともに口リBBAですよ…。

あ…、目から汗が…。

魔法世界が出来てどれ位たったかね？

最近はまだ暇になってきたんでよく寝るようになってます。

理由は単純、皆忙しいからさ。

俺？

働きたくないでござる！！

いや、実際はやってるけどね？内心的にはさ。まあ他の3人に比べればマシだろうけど。

ってわけで、最近の俺達について話そうか。

実は現時点で、魔法世界には国が3つしかない。

その3つを俺含めて4人で担当している訳だ。

魔法によって生まれた存在であり、知識や、記憶に齟齬が現れないように自身が今までも存在していたという架空の記憶も当てられてはいるが、人である以上、どうなるか分からない。それをしっかりと見ていく為にそれぞれ分かれて見守っている。

まず、宮殿から近い位置にある『ウェスペルタティア王国』を最古

の国として“始まりの魔法使い”でもあるミトス、そして、その弟としてゼクトが担当。助言者として活躍中だ。

ちなみに最近ミトスは、初代女王として頑張ってるアマテルちゃん
と良い雰囲気です。紹介された時は何とも言えない気持ちになった
なあ…。

リア充め…。

え？ゼクト？ん、見た目シヨタだからなあ…。

さあ皆さんと一緒に、ゼクト乙！

続いて俺は、第二の国、そして獣人の国である『ヘラス帝国』の担
当になった。

何でか守護神的な位置に居るが…。

あれ？俺も助言者として行ったはずなのにどうして？

ひょっとして街を歩く時はほとんどヤオロスモード（小）で歩いて
たからかね？

気付いたら獣神教ケモカミとかいうのが出来ていた。しかもよく分かんが
“獣”を“ケモノ”と呼んでは駄目らしい。あくまでも“ケモ”ら
しい。何これ怖い。

そのせいかは知らないが、信仰の力？みたいなのが俺の中に入って

くるのを感じるから一応崇めてくれてるみたいなんだけど、街に出たら絶対ムツゴウさんみたいなのが寄ってくる。それもいっぱい男女問わず。一応この身体メスだから自重してね？って言っても聞いてくれない。はあはあ言い出した奴は住人総出でボコボコにされたりつてのも見た事ある。王宮で人の姿してたら絶対メイドたちが俺に色んな服を着せようとするし…。

何だこの国は。俺と同じ同じ獣人の国の筈なのに、俺に対して何かがおかしい。

言っておくが俺が何かをした訳ではない。本当に何かをした訳ではない。大事な事なので2回言っ t (ry

そして最後、マーテルは学術都市『アリアドネー』の担当だ。初代学園長として頑張っている。

魔法世界、旧世界問わず、孤児や身寄りのない子どもたちをさらっ t…ゲフンゲフン…導いてきては育てている。勿論見た目は大人バ―ジョンになってた。

前に様子を見に行ったら、すっごい慕われてて、えらく幸せそうな顔でしたよ。

まあみんな幸せならいいか。

あ、ちなみに生徒の中には魔族もいます。魔族って言ったってピンキリだから勉強したいやつもいるわけですよ。何でか蠅の女王も居た気がするが気のせいだろう。しかも先生として。名前？ベール・

ゼファーなんて名前じゃもちろんなかったよ？涼風鈴さんて名前でした？銀髪なのに不思議だねえ？

こんな感じで皆忙しいわけよ。

なに？俺だけ忙しそうに見えない？

ち、違つかんない！！ちゃんと仕事してるからな！！主に警備とか……。

ちなみに夜は基本的に宮殿に全員帰ってくる。ミトス君は最近夜も帰ってこなかったりするけど……。青春してるよね。どこまで行ったらかは端から見たら諸に分かるんだけど、見て見ぬふりするのが親の役目かなと思うわけよ。

……あれ？生前のお母さんがそんな目をしてたことがあったような……。そういえば妹様も……。な、何がばれてた！？まさかHDの中を……！？

違うつてことにしておこう……これ以上考えるのは精神衛生上良くない。

話がずれ過ぎたな。

とりあえずミトス君たちに幸あれ！！

帝国での俺の役目も少なくなり、宮殿で暇を潰す為に寝まくっていたら、たまに訪れる人からか伝わったのか…っていうかどう伝わったそうなるのか、この宮殿が原作通り墓守り人の宮殿と呼ばれ始めた今日この頃。

二代目学院長に引き継ぎを終えて最近趣味を再開したマーテルと2人での食事のこと。

「夜の王国？」

「はい。最近の躍進は近代…いえ、未来を含めてもそうそう見れるものではないでしょう」

ハムハムとパンをかじりながら、マーテルの言葉について考える。

夜の王国ってどこかで聞いた覚えがあるんだよねあ。
どこだっけ？

「名の通り夜に栄える国で、昼夜逆転のせいか慣れるまでが大変ですが……母上には関係ありませんね」

ある意味夜の住人な俺に隙はなかった。主に廃人的意味で。最近では朝日見たら寝る生活だからなwww

「ともかく一度行ってみることをお勧めします。文化レベルで他国より発展していたりもするので色々と楽しめますよ？」

ふむふむ、聞いてたら行きたくなくなってきたね。

あれ、でもその国って…。

「その国が在るのってこつちじゃなくて地球だよな？俺行けなくね？主に耳の意味で」

だからこそミトス達が魔法世界を創ってくれたわけだし。

「いえ、恐らく大丈夫でしょう。何せその国は——」

——吸血鬼の国ですから——

「キングクリムゾン!!」

「何言ってるんですか？周りから見られてるんで止めてください」

「ういっす」

そんなわけで、はるる来たぜ夜の国♪

ひっさびさの地球だぜ。周りはやけにファンシーさがあるけども。

吸血鬼が続べる夜の国。けれど吸血鬼しか居ない訳じゃないようだ。むしろ人間の中は良好っぽい。その証拠に吸血鬼と人間の間に生まれる“ダムピール”が多数見かけられる。その他の亜人も数は少ないが居るようだ。

え？何で分かるかって？

勿論臭いだよ。ダムピールは臭いが混ざってるし、その他の亜人は獣の臭いがしたり、自然の臭いが濃い。

とはいえ、今は商店街みたいに店が建ち並ぶ場所に居るんだがかなり人が多い。だから臭いが結構ない混ぜになっているため数え間違いもあるかもしれないが…。

「母上こちらです」

大人モードのマーテルが俺の手を引き前を進む。これじゃあどちらが親か分からんね（笑）

しばらく人混みを歩いて、城がある方、中心街へ向かう。

良い国だ。

ここから見えるだけでも道端にゴミは落ちていないし、路地裏に倒れてる者が居るわけでもない。

勿論、魔法世界で俺達が関わるときにその辺りに気を付けたりもしたが、他はともかく俺は帝王学も経済学も生前に勉強してないし、図書館で勉強したりもしたがよくわからなかった。だからこそ俺は肉体労働に走ったわけだが、それでも俗に言う文官がどれだけ必死になって国のために働いていたか知っている。

だから言えるがやはりこの国は良い国だと思う。

皆が笑ってて活気がある。

それを支えるだけの国力や王、家臣達が居る。

笑いと活気って意味じゃあヘラスも負けねえがあつちは喧嘩やらなんやら込みだからなあ…。何回鎮圧したかね？同じ奴がなんてのもザラだし。俺に挑む奴も居るし。つか修行じゃないんだから蹴り飛ばされてありがとうございましたは無えだろうよ。

ん？それは違う目的の奴？…はて？

「着きましたよ」

おっと、考え事してる間に目的の場所へ着いたようだ。

って、ここは飯屋さんかね？中から良い匂いがする。

それにしてもごつい店だなあ。周りに比べて一回りは大きい。あれ？建築様式が微妙に周りとは違うな。国の雰囲気こそぐわない訳ではないが…。なんだろうこの既視感と違和感…。

またしても考え事をしていると、店の入り口に立ったマールテルが振り返った。

「ようこそ。レストランユグドラシルへ」

「真実はいつも一つ！？」

「実はこの店のオーナーなんです」

また お前か！！

どおりで違和感がある筈だ。この建築様式は向こうの世界のモノが混じってるんだからな。

「自重って…良い言葉ですね？」

「嘘だ!!」

いや、良い言葉かもしれないけどお前が言つと嘘にしか聞こえん。

「ま、良いから入って下さい」

「はあ、ツツコムだけ無駄か…」

大人しく店の中に入る。ツツコンだところで俺が疲れるだけだ。もう悟ったんだよ（遠い目）…。

・ ・ ・

店の中は随分とにぎやかだ。かなり繁盛しているらしい。

く…。

「早く注文しましょうか」

「うう… / /」

良い匂いだけでなく、店内で実際に皿に盛られたそれらを見てお腹が鳴ってしまった。

普通に食べてた…。

あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ…。

『ご飯が目の前に置かれたと思ったらほとんど無くなっていた』

な、何を言ってるのk（ry

「まいつかゝんまんまゝ」

「すまない、私にも何か貰えるかな？」

俺の隣、マールとは反対側に誰かが座り、店長さんに注文をする。

「はい、よろこ…んで…

ぬあっ!？」

どうした店長さん奇声を上げて。

俺は食べていた手を止め、店長さんの方へ目を向ける。

その店長さんの顔は真っ青になりながら、冷汗を目に見えるほど流して驚いていた。

何にそんなに驚いてるん？

店長さんが見て驚いているのはどうやら、俺の隣に座っているお客さんを見たからのようだ。

そちらへ顔を向ける。

「ん？」

「あれ…？」

目が合う。

「あああああああああ！！！！！！」

「私の顔に何か付いているかなお嬢さん？」

俺も思わずその人を見て驚いてしまった。

何せ俺はその人を知っていた。店長さんもそうなんだろう。けど俺の場合は別の意味で知っている。

蒼い髪、紅の瞳、そして優しい笑みを浮かべる男としての美しさを持ったその容貌。

そしてすべてが繋がる。

夜の王国。ダムピール。

そしてこの人は——！！！！

> s i d e o u t <

いかがでしょう。

スイマセン今回もやりたい事やってたらこんな事に。

まあいつものごとくツツコミ所が多い話になりました。

つてか、夜の王国編のくせに最後にチヨロツとしか出てないとか…。

PSPo2iについての設定を無理に使おうとした結果がこれですよ…こんな作者を笑ってやってくだせえ…。

PSPo2i込みのPSPo2の設定で全然使えてなかった職業システム等上手く説明できてますかね？

ゲームを持っていない方には分かり辛くなってるかなあ…（汗）

『こう説明した方が良くないか？』等があつたら教えていたけると幸いです。

それとショップの案ありがとうございました！！他にも良い案をいただいているので随時出していきたいと思います。

武器案も募集してますよー。

ではでは、今回はこの辺で失礼をば。

感想お待ちしております。

お読みいただきありがとうございました!!

P . S .

今週の合言葉!!

『マーテルさん自重しろ!!』

今週もだな…orz

『stage50：最強の漫画家と言った奴前へ出る。一つ聞く…豆腐は好き

こんにちは草原！！

一週間以内に出そうと思っていたら普通に過ぎていた。な、なにw
(ry

まあそんな感じの今話です。

赤バラさんの話し方とか雰囲気出せてるかが心配です(´・ω・´)

では、どうぞ。

『Stage50：最強の漫画家とか言った奴前へ出る。一つ聞く…豆腐は好き

>side：コウジユ<

ちやおつす、コウジユだぜよ。

現在俺の隣でとある方がご飯を食べていらっしやいます。

分かる人は分かったであろうあのお方だ。どこぞの名前を呼んではいけないあの人じゃないが、呼ぶのは気が引ける。

何せ俺が大好きだった漫画の登場人物、主人公だ。

やばい、嬉しすぎて手が震えてきた。というか涙が出るってこれ。

「お嬢さん？」

どうやら、俺はジツと目の前のお兄さんの顔を見ていたようで不審がられてしまった。

「い、いえ、少し知り合いの方に似ていたものですから」

不躰に見てしまっていたというのに、優しさを伴った表情を1ミリも崩さずにこちらへ話しかけてきたお兄さんに、思わず俺はここ数千年使った覚えが無い敬語で答える。

「ふむ、似ているだけというのは残念だ。お嬢さんと知り合いのその方がうらやましい所だね」

普通ならつわあという思いしか出ないセリフだが、この人が言うとはまり過ぎだ。

さて、そういえばまだこの人の名前を出していなかったな。

「失礼、そういえば自己紹介をしていなかったね。

私の名はローズレッド・ストラウス。しがないヴァンパイアをやっている者だ」

そう、かの、至高の王と呼ばれた赤バラ王ことローズレッド・ストラウスだ。

『ヴァンパイア十字界』という作品における主人公。公式チートと呼ばれ、出来ない事を探すほうが難しいと言われるスペックを持つ至高の存在。

しがない……なんてとんでもない。マーテルが純白な心である位にはありえない。

さて、店長のお兄さんは未だ固まったままだがそれは置いておいて、と。

名乗られた訳だがなんと返そうか…？

さすがに『コウジュ』という名前だけで返す訳にもいかないし、Fate世界以来使っていなかった名前にお世話になるかね。

「お、じゃなかった、私はコウジュです。コウジュスフィール・フオン・アインツベルン。えっと、獣人？をやってます」

変わらず敬語になる俺。かなり緊張してますですよ。

ちなみに、ちゃんと免許証とかパスポートもその名前で登録されるんだよ？前の世界のだけど。そもそもそんな概念がこの世界では今はまだ無いけど。

「私はマーテル・ユグドラシルです。とある樹の守人をやっています」

守人ってか樹本人（？）だけだな。まあ精霊っていう訳にはいかないか。どうやらこの世界は精霊という概念はあっても、早々会えるものではない珍しい存在らしいし。

ってか今までマーテルが空気っぽくなってたが、初めての事じゃないか？このマーテルを空気にするなんてさすが赤バラさん。赤バラさんまじ赤バラさん。

「ありがとう。しかし、もう少し気軽に離してくれると良い。気を使わせるのは申し訳ないしね」

こちらにも名乗った事に対して礼を言い、続けてそう聞いてくる赤バラさん。

柔和という言葉が似合う微笑みで言う。

やばい、身体が少女な状態で何千年と過ごしてきたが中身は男だと思ってる俺が思わず惚れそうになっちまうくらいのイケメンだ。外面的にも内面的にも。

というか、普通に男であった時にも惚れという意味でだが惚れたからこそ大好きな作品であった訳だが。

「わかりまし…ううん、分かった。ここ何年も敬語というものを使っ
てなかったからそう言っていただと助かる」

それでもちよこちよこへんてこな敬語が入っちまう俺はホント小市民だな。そんなところは転生して何年経っても変わらない。

「はっ!？」

す、スト劳斯様!ご、ご来店ありがとうございます!」

フリーズから回復した店長。

なんという狼狽具合。というか様つけちゃったよ。

しがないって自分で言ってるくらいだから身分隠して来てるんだろ
うに。いや、この人の性格的にどんな場合でも、どんな役職の人間
だろうとわざわざ自分から言っ
て位をかさに着るなんて事は無いだ

ろうけどね。

「突然来訪した事で驚かせてしまったようですまない。突然休暇が取れてね、そこで最近噂のここに来て見たんだ。だから私はただの客だよ。“様”なんて要らないさ」

「は、はい、わかりました！お料理の方もすぐにでも！ごゆっくり！！」

そう言つて作業に戻る店長。

やべえ、すぐにでもつていう言葉通りに今の店長は残像を残す勢いで料理を作つていつてる。今の間に溜まつてしまった他の注文も同時進行みたいだが…大丈夫か？いや、大丈夫そうだな。顔がすんげーうれしうだし。ずばり憧れの人が自分の作ったモノを食べに来てくれて嬉しいという顔。

さすが赤バラさんというところか。

「様…？」

隣のマーテルが思わずといった拍子に口に出した。

ん…？何で様を付けたか分かってない様子。原作知らないのか？図書館に『ヴァンパイア十字界』の漫画は置かれてなかったっけ？いや、でも最初の方に俺読んだ事あったよな。俺より図書館に入り浸つていたマーテルが見つけれなかった？というか最初の時点で俺から知識が流れてなかったのかね？

気になったんでちょいと念話。

【マーテルさんマーテルさん】

【はい？何ですか母上】

【“ヴァンパイア十字界”って漫画知らない？】

【…？】

はい、知りませんが。それが何か？】

【いや、ちょっとした確認。ありがと】

どうやらホントに知らなかったようだ。そういうこともあるのか。
ま、たまたまかね？

念話も込みで高速で至高を終わらせ1人解決していると、赤バラ
さんが少し言いにくそうに苦笑しながら離し始めた。

「様…というのはだね、分不相応ながらお城で少し高い役職に就か
せてもらっていてね」

分不相応って…。あんたが分不相応なら全ての世界から“王”が居
なくなりそうだったの。

「高いつてどれ位ですか？」

俺との念話も気になるようだが一旦置いといたようで、赤バラさん
に詳しく聞こうとするマーテル。

「將軍をやらせてもらっているよ。この身に余る光栄だ」

ん？まだ王様になつてない時代なのか？

確か赤バラさんは、類をみない速さで將軍職に付き、そしてしばらくして王様になった筈。後で年代を確認しておくか。

そこから会話が続ける俺達。

「お待たせしました」

そうこうする内に店長が、料理が出来たのか赤バラさんの前に料理を並べていく。

つて、何で懷石料理！？いや、マールテルがオーナーだからで片付くか。

それを一瞬不思議な顔をしてみた後、食べ始める。

当然、懷石料理ではあるがお国柄フォークやナイフでだ。

ちよ、評価が気になるんだろうけど店長さんガン見しすぎ！

「それにしても、初めて食べた味だが美味しい。この辺りのものは大体知っているつもりだったが、どこの国の物かな」

店長さんを安心させる為にも口でそっという赤バラさん。

というか、当然気になるよな。天ぷらやらなんやらが普通にヨーロッパ系統の国風のこの国で見れる訳ないし、そもそも年代的にありえないし。まあ、赤バラさんが聞いているのは純粹な興味からみたいだけだ。

「スミマセン。私もこのモノかは…。そこに居らっしゃるオーナーのマーテルさんから直接教えていただいたもので、その国に行った訳ではないんです」

マーテルさんエ…。

せめて違和感がないように東方の…位は言っとこうや…。

「ふむ、これは驚きだ。美しいレディに相見えたと思っていたら、その方が噂の料理店のオーナーだったとは。更には美味しい料理にめぐり合う事が出来た。月の恩寵に感謝しよう」

一瞬キョトンとしたが、すぐに元の微笑みに加えて喜びを表してくれる赤バラさん。

「い、いえ、美味しい料理は皆で食べるべきですから…」

なんぞやこの可愛い生き物。

初めて見るんだけど？こんな反応のマーテル。

ドモツて、しかも頬を軽く染めながらってことは、褒められて喜んでいるのか？

これが赤バラクオリティというやつか…。

「それにしても惜しいことをした…」

全てを食べ終えた赤バラさんは、突然、先程までの微笑みに少し苦みを含ませてそう言った。

「…？」

あまりにも突然だったんで俺は首を傾げて赤バラさんを見た。

「いやなに、今日は本当はもう一人居る筈だったものでね…」

ははは、と力無く笑う赤バラさん。

「おや、彼女さんですか？良い身分ですね…リアルに」

「おい！？」

「ははは…」

それに対し少しとげのある言い方で聞くマーテル。

何故に喧嘩売ってんの？

「まあ彼女ではないんだが…。
娘が一人居てね——」

そこから少しずつ語ってくれた事を纏めると。

長い間休暇を取っていなかったから溜まりに溜まっていて困った人事部が泣きながら少力で良いから休暇を消費して欲しいと言われ、ついでに赤バラさん程ではないにしろ休暇が溜まっていた娘さんと一緒に少し休暇を取る事になったらしい。

それで、仕方なく休みを取ろうとしたら緊急の問題が起こってしまった。

当然、休暇を中止してそれに対応しようとした赤バラさんだが、娘さんに『対応は私一人で十分です。それに私は少し前に休暇を取れているのであなたは休暇を取ってください』と言われたらしい。俺も言われたいもんだ。

まあそういう訳で、念の為にすぐに動けるようにはしているが、赤バラさんは現在一人で休暇を消費しているらしい。

人事やら休暇制度やらはツツこんではいけない。チートオブチートな赤バラさんが居る国だからな。というか、仕方なく休暇を取るとか、休暇を消費すると言いながらすぐに動けるようにしているとか、ワーカーホリックにも程がありませんか？

何故か胸にぐさつと来るなあ…。あ、そうか。

少し前までニートしていてゴメンなさい。 > (— —) <

キングクリムジョンー！

噛んじった…orz

えゝ、現在俺達は王宮に来ている。

な、なにg(ry

まあまた簡単に説明するとだな。

マーテルが『ならば私がその娘さんの為に出張サービスしましょうか？』と言い、それに対して赤バラさんが『是非頼むよ』と言った。

文面にしたらこんな感じだな。

何でか空気が凍りついた状態で言ってたが…何でだ？

マーテルは機嫌が悪いままだし…。

それで今は、王宮の結構広い部屋（いかにも高そうな）に通されて待機している状態だ。

赤バラさんは厨房を借りにと、それから娘さん呼びに言った。

高そうと言っても嫌味じゃない程度だし、とても落ち着ける内装となっている。しかし、それでも今は居心地がかなり悪い。

「ちっ…」

舌打ち！？今この子舌打ちした！？どんだけ機嫌が悪いん！？

「な、なあ…？」

「何ですか…？」

氷点下も真っ青な瞳をしつつこちらへ返答する。それはもうギロっ！！って感じ。

俺何かした！？

「何でそんなに機嫌が悪いんだ？俺の所為？ご、ごめんなさい…」

こ、怖くなんて無いんだからね！？お、思わず謝っちまったただけだからね！？

「ふう…まったく…」

マーターが醸し出していた空気を和らげた。

「母上に機嫌を悪くしても仕方ないですね。それに母上は分かって

ないんでしょうね。母上ですし」

空気を和らげたと思ったら、次の瞬間にはそこはかとなく俺がバカにされている件について。

「それで結局何で機嫌が悪かったんだ？気づいてないってのが関係あるんだろうけど……」

「その通りですよ。ったくあの將軍とやらはとんだ曲者ですね。まあ、だからこそ將軍たり得るのでしょうけど……」

今度は赤バラさんに文句を言ったと思ったら、そこはかとなく褒めてるし。

「母上、そういえば『ヴァンパイア十字界』がどうとか言ってますね？」

おおっと、何でかこっちに來たぞ。

まあ言っけどさ。

・
・
・

「なるほど…、あの將軍がその赤バラ氏ですか…。確かに頭腦チー
「ト」

いや、あんたもだから。

「私に見つけられなかった…というのは今は置いておきます。あの図書館はどうやら所有者権限の様なものが働いているようですし」

所有者が知らない権限に意味はあるのだろうか…orz

あの宮殿まだ俺の知らない事があったのか…。

「で、本題ですが…、どうやら私たちは誘い込まれたようです」

突然本題に戻ったんで、俺は一瞬聞き間違いかと思った。

「わんもあぷりーず？」

「ういーあー誘い込まれた。OK？」

えっと…。

「逃げるぞ…！」

「無理です」

何故！？

「すぐそこに彼が居ますから」

ふかふかのソファーから慌てて飛び上がり窓の方へ走ろうとしたんだが、マーテルは座ったまま出されていた紅茶を呑気に飲んでいる。そしてそのまま扉の方を睨み――。

「聞くつもりはなかったんだが」

「まあ聞こえるように言いましたから」

「貴様…」

扉が開き、入ってきたのは赤バラさんと、金髪に青空を思わせる碧眼を携えたモデルもうらやむ体系の美女。

何このカオス。

俺↓窓に手を掛け逃げようとしてる

マーテル↓紅茶片手にソファでふんぞり返っている

赤バラさん↓苦笑い

金髪碧眼美女↓マーテルに斬りかかろうとしている。

ぼすけて…（・・ω・・）

> s i d e o u t <

> side: マーテル <

最悪です。この上なく。

本来なら今日は久々の母上成分を堪能できる日だったのに…。あまえr…ゲフン！いえ、何でもないです。

とにかく今日は良い日になる筈だったんです。

なのに。なのに…。

最近の私は、学院長の任を降り、地球側で趣味の旅を再開しました。しかし、主な場所はほぼ行ってしまった為、暇つぶしに何か事業を興そうかと考えました。そしてどうせならと趣味の一つである料理を広める事にしました。

それからは、場所の確保とか、弟子を集めたりとして行き、遂に本店を開く事に成功しました。苦労しましたよ…。勉強を教える事はそこそこ自身がありますが（仮にも元学園長なので）、実技的な部分を教えるのが何とも。

そして出来たレストランユグドラシル。場所は最近急激な躍進を見せる“夜の王国”です。

開店してからちよくちよく見に行きましたが中々に盛況な様です。

ええ、年甲斐もなく喜びましたよ。もちろん内心だけに留めました。だって恥かしいじゃないですか。

私が料理が好きになった元々の理由が母上に美味しいと言っていた事が最初で、それから褒めていただく為に腕を磨きました。それがまだ一つの国とはいえ認められたのですから。それに喜んでいるのを当の本人に見せるのはちょっと。

前置きが長くなりましたが、とにかくそのお店にどうしても母上を呼びたくて、今日に至った訳です。そして料理に舌包みをつっていたいた後は、活気ある城下町を楽しもうと、そう思っていたのです。

そう思っていたのですが…。

その予定は全て、母上の横に座った一人の男によって崩されました。

ローズレッド・ストラウス。

この男の所為で。

最初はその身に宿された（隠された）魔力に警戒しましたが、母上との会話を聞いている内に、周囲に影響を及ぼさない為に魔力を抑えているのだと思い警戒レベルを下げました。ヴァンパイアである事や、隠された魔力、身のこなし、明らかに一般人ではありませんが、まあたまたまであろうと。それに母上がやけに嬉しそうにしていた事もあって（ここが1番大事です。少し妬ましかったです…）油断してしまいました。

会話が進んで行き、彼の役職について話題に出た辺りで、母上から『ヴァンパイア十字界』を知っているかと念話が来ました。変なタイミングだった為、不思議に思っていました。その後が大問題です。聞いているとこの国の将軍だということではないですか。その瞬間はめられたと分かりました。

どうして私たちの存在に気付いたかは分かりませんが、この男はこの店ではなく私たちを目的にここへ訪れたようです。

そう考えた理由は、最近何かと噂に聞く将軍がわざわざ私たちの隣に座りに来た事。

文面だけだと、何かの偶然であるかもしれないと言えるかもしれませんが。せん。私も最初はただの一般人ではないとは思ってはいいましたが、偶然ということも視野に入れ、警戒レベルを下げたんです。母上はさすが獣と言えいいのでしょうか変な所で勘が良いので、せっかく遊びに来ているのに杞憂の所為で心配を掛ける訳にもいきませんでしたから。

しかしこの国の“将軍”というワード。これがおかしいんです。

各国を漫遊していた私はかなりの情報を持っています。その中にある“夜の王国の将軍”についての情報でこういうのがあります。

『現在将軍は各国の代表と他国に有利な形で条約を結び、恒久的な平和を自国へもたらす為に長く会議を行っている』というもの。

おかしいとは思いませんか？そんな大事な会議の途中に態々休みを取りますか？いくら休暇を長くとっていないからと言って各国代表

を招いている状態かなめで要たる人間が休暇を取るなど対外的な印象を悪くするだけでしかないのに。他国に有利な形で条約を締結しようとする者がですよ？しかも彼は文官でありながら武官でもある。つまり守護者でもある。そんな重役が各国の要人をほっぽり出して最近人気だからというだけの店に来る。そんな訳ありませんよね。

私は一気に警戒レベルをマックスにあげました。

私は精霊であり、内包する魔力は膨大です。そのままこの国に入っていたら当然警戒されていたでしょう。それを見越して、一般的な人間に感じられる様に魔法で偽装しました。母上は…実質的には魔力はありません。本人は魔力があるとか言っていますが実際は能力で無いところから持ってきているか、PPとか言う良くわからないエネルギーを無意識で変換しているだけです。あと、最近では信仰から魔力には該当しないのでほったらかしです。あと、最近では信仰から神力？を得ていますがあれはあくまでヤオロズモードである獣神の時の事なので人状態では使おうとしなければ感じられず神力を持つ者独特の神聖さはありません（ヤオロズモードでも無い気はしますが）。なのでただの獣人に感じられる筈です。というか隠す事を言ったら逆に挙動不審になって怪しまれそうですし…。

しかしながら、その偽装がバレたようです。だから警戒した。

しかし次の瞬間、この店を囲うように膨れ上がった殺気。母上は丁度出てきた懷石料理の方に目が行っていて気付かなかったようですが、すぐに抑えられたそれは明らかに私の警戒に対して反応した結果のモノ。

この場を離脱する必要がある。私はすぐにそう考えました。当然、私も母上も押し通って逃げるだけならいくらでもできるでしょう。

それだけの力はあるつもりです。しかし実行する事は出来ないにほぼ近い。すぐそばには名高き將軍が居るのです。手加減なぞしている余裕はいでしょう。ということは確実に周りを巻き込む可能性があります。それは母上が望みません。母上は極端に命を奪う事を嫌いますからね。

表面上は変わらず思考の世界に入ります。リスクや母上への負担など、頭の中で天秤に掛け、方法を絞っていく。

いざとなれば、多少の犠牲を払ってでも母上を優先し…と、更に絞っていきます。

とは言え存外私も甘い様で弟子の一人たるマスターや、私が伝えた料理を食べに来てくださったお客さま方をむげにはできません。

いや、したくない。

しかし、何の代償もなく離脱は難しい。自分だけが傷付く状況ならば何とでもなったのですが…。

そんな風に思考に没頭している時にです。マスターがここのオーナーが私だと暴露しました。

これはマズイと警戒から戦闘へと移行しようとしています。

何せ、相手からしたら警戒していた人間が実は既に内部に人脈を形成していたのですから。これは侵略行為に見られても仕方がないのです。こうなつては最低でも捕縛は免れない。

こちらとしてはやましい事をしていませんが正体を隠していた事は

事実。それに母上の存在は地球側では何かとマズイ。隠し事が苦手な母上に、これ以上ない位に優秀と噂される將軍。まずい組み合わせです。私は彼に対し優しげな……という好印象もある程度持ちました。がそれすらも仮面の可能性がある。何故か母上は懐くかのように気を許していますが、母上はなんだかんだいって根が素直すぎるので彼のその優しげな風貌などに気を許してしまったのかもしれない。

私はいつでも動けるように魔力を身体に循環させていきます。

しかし――。

『ふむ、これは驚きだ。美しいレディに相見えたと思っていたら、その方が噂の料理店のオーナーだったとは。更には美味しい料理にめぐり合う事が出来た。月の恩寵に感謝しよう』

――やられました。

周りを囲っていた者たちの気配が消え、そして彼自身も警戒を解きました。

そして甘言ともいえる優しい言葉を私に向け、牽制てきたのです。

この状態で私が母を連れて逃げだせば確実に過失があるのはこちらになります。

私たちが囲まれたから逃げるのではなく、私たちが逃げだしたから捕縛したという公式が成り立ってしまいます。

そうなれば私は母上に何故良い人達を巻き込んであんな事をしたの

かと言われるでしょう。状況的に見ると明らかに私が悪いことになるのですから。それは私の望む所ではありません。母上に見捨てられるなど考えたくはありませんが、というか母上の性格上無いとは思いますが、それでも疑問の眼を向けられるでしょう。私はそれだけで死ねます。

私が母上を最重要基準としているのが完全にばれてしまった事が致命的ですね。

それに、彼、母上、私という位置も悪い。この位置では逃げようという意思がある私はともかく、何も気づいていない母上を逃走段階まで持っていくまでに母上に何かしらの危害が加えられてしまう可能性があります。

私自身ならまだ許せますが母上に傷一つでも付けられようものなら私はここら一帯を吹っ飛ばしてしまうでしょう。今の私はさっきから殺気飛ばされたりと積もり積もって機嫌がかなり悪いですしね。しかしそうなる結局母上から嫌われる可能性がある。

私はなんとか表面上は取り繕い。彼の言葉に返します。

あまりの腹立たしさに思わず声がどもってしまいました。ひよっとしたら顔も怒りで赤くなっているかもしれません。彼はよりもよって私が暴れない為の枷に母上を選んだのですから。しかし…どうしましょう。どもるのはまだしも顔が赤くなっていることは誤魔化せない。母上がこっちを見ているし…いや、丁度良い、照れているように見せかけますかね。

って、何こっち見てニヤニヤしてるんですか母上。いや、誤魔化そうとはしましたけど、実際にそんな目で見られるとちょっとイラッ

とします。

そこからは、なんというかあきらめ半分と言った感じですね。

寿命という概念が無いに近い精霊ですが精神的には大人のつもりです。そんな私がこの状況で暴れるという子どもの癪癪の様な事は出来ません。

しかしまあ、その次に振ってきた『娘も共に来るはずだったが…』という話の際に少しトゲを含んだモノ言いをしたり、向こうから来てくれないかと言われる前に小さな反抗としてこちらから行こうかと言ってみたりしましたが、これ位は許されてもいいはずです。

それすらも彼は軽くないなして、客人として私たちを迎えようとしたがね。

母上という最大の弱点があったとはいえ、ここまで手玉にとられるとは…。

ふう、今回は認めましょう。私の完敗です。

それにこの対応は国を守る者としては当然の対応。国内に怪しいものを置いておく訳にはいきませんからね。正直、悔っていた私も悪いですし、自身の隠匿魔法に過信しすぎていたかもしれません。

私もまだまだですね。いやはや、どうやって見破ったものかご教授

願いたい物ですよ。

とりあえずその前にと…母上？ヴァンパイア十字界がどうとか居て
ましたね？そのところ詳しく教えてくださいな？

> side out <

『Stage50：最強の漫画家とか言った奴前へ出る。一つ聞く…豆腐は好き

いかがでございましょう？

さあ皆さん、公式チートの赤バラさんが通りますよつと。

ちなみに、分かる人には分かりますが、若干出てきた金髪碧眼は勿論あの人です。

それにしても、赤バラさん難しい。ただのホスト野郎みたいになりそうになったり、どこぞの陰険眼鏡な大佐みたいに腹グロになりそうになったり…。ボキャブラリーが少ない作者にはホント大変でした…。

原作の雰囲気が出せていたら嬉しいんですが…。

原作での赤バラさんは、頭脳チート、戦闘チート、カリスマチート、優しい、深慮遠謀、イケメン、とまあ文章にしたら安っぽく映っちゃいますが、ホントに王の中の王という方です。この人以上に王に相応しい人を私は知らないっす。

とにかく原作の赤バラ様の雰囲気を出そうと思っているのですが難しい部分が多々あるので、『こういうセリフ回しをした方がらしくないか？』など教えていただけると嬉しいですよ。

ただの軟派やろうにも、陰険野郎にもないよう…マジで…（・ω・）

さて、今回マーテルさんが若干受けに回る話でしたがどんなものでしょう？自重しろと様々な方に言われていたマーテルですが、今回、赤バラさんに捻られてしまいました。まあ今回で言えば捕捉された時点でアウトって感じですが。

本当はもっとこう、どこぞのシスコン魔王こと、ルル山さんなみの裏の裏の裏的な話の展開にしたかったんですが作者にはこれが限界です。

頭脳チート対頭脳チートの頭脳戦なんてそうそう書けないっすよう。

くそう！皆さんに『おお！』と言わせる作略とか書いてやるう！
！絶対に！！その内！！

ごほん…。

えっと、どうでもいい話なんですが、本編書いてる間に考えていた後書きの内容がちよくちよく飛ぶんですね…。

なんだっけ。

とりあえずあと覚えているのは絵に関してです。

活動報告では書いたんですが、コウジユの絵を描きました。ロリで

きよぬーないわゆる萌絵（？）ですね。

えっと、皆さんにはもうさっしていらっしゃると思いますが、作者は基本ヘタレです。

なので、描いたのを見ていただいてコウジュのイメージをしやすくしていただきたいと思う反面、絵を見る事でイメージと違ったとか、うわぁ…みたいな感じで読んで下さる方が減ったら嫌だなあとかへたっています。

というわけで、まずは活動報告みたいなヘタレた事をした訳であります。

そんなヘタレ作者のkouなので、URLだけ載せさせていただきます。

そついう絵が苦手な方は苦手な方は見ない事をお勧めします。

でも見て欲しいという作者の自己顕示欲的な何かに笑ってやっただけだせえ。

で、できれば温かい目で見ていただくと嬉しいです。良い意味で。

あとは、世界に紳士が増えたらなあとか思ってみたり。

ていつか長々と書きすぎた！！

ではでは今回はここで、失礼をば！！

h
t
t
p
:
/
3
6
6
1
.
m
i
t
e
m
i
n
.
n
e
t
/
i
2
9
4
1
5
/

『stages1：労働基準法？何それ美味しいの？な將軍様・・・innネギ

や、やっとできました…。

活動報告でも言ったんですが、マイパソコンが逝ってしまわれたので携帯等でなんとかかんとかここまで…。

とにかくにもどうぞ。

『Stage 51：労働基準法？何それ美味しいの？な將軍様・・・innネギキ

>side：コウジユ<

ヴァンパイア――。

気高き夜の住人。純粹な魔である為、闇に生きる彼らは日の光に弱く、聖の属性を持つ気、いわゆる靈力に害される。

ただ、吸血鬼と同義ではない。

吸血する牙も能力もある。

しかし吸血衝動と言われるものは無く、一生を終える中で血を必要とすらない。

それが『ヴァンパイア十字界』のヴァンパイア。

ダムピール――。

ヴァンパイアと人との間に生まれた存在。

ヴァンパイアの様に長命で生命力が強く、魔でありながら人として靈力を扱える。

人――。

聖たり得る者。

百年にも満たない年月しか生きる事が出来ず、されどその短い月日で驚くほどの跳躍を魅せる者達。

位を上げ、仙人にすらなりうる。

とまあ、厨二描写をした所で、こんばんわん。

絶賛窓の冊子に片足を乗せて、どこぞの船乗りが海際でやる感じになっちゃってるコウジュだぜい。もう何も怖くない、ヴァージョンウィンドウ。

「そろそろ疲れないかい？」

「あ、はい」

赤バラさんに若干微笑ましく（？）と言った感じで見られながら、言われる俺。

すぐごとマーテルの横に戻る。

「紹介しよう。この娘が私の娘、ブリジットだ」

赤バラさんのその言葉と同時に横の金髪碧眼美女が前へ出た。

「ブリジット・アーヴィング・フロストハートだ…」

ぶすつとした表情…というか。完全に俺達二人をにらみながらの自己紹介。

それに俺達も返して名乗った。

やっぱブリジットの姐御だったね。

どうせなら、若干ロリッ子なブリジットも見たかったけど、そこまでは贅沢ってものかな。ここまでの美人さんはそうそう見れるものじゃないしな。

とかまあ現実逃避している俺ですが、何でこんなに陰悪になっただの！？

誘われたとか言ってたけどどどういう意味！？

料理作りに来たんじゃないの！？

誰か教えてくんね！？

えらい人…いや、分かるんならエロい人でも良いから教えて!?

「さて、調理場はどこですか？そろそろ作らないと夜が明けてしまいますよ?」

俺が混乱（若干ぼっち状態で）しているとマーテルがいつものペースでそう切り出した。

「わかっているだろう？その様な呼び出すための建前に意味は無い」
ブリジットの姐さんはそれに対して睨んだまま返す。

ふむ、建て前だった訳ですか。そしてホントに俺達は誘われたと。

だから何で!?

「ふう…、それで？いつ私たちに気付いたんですか?」

諦めたように言うマーテルは、魔法陣を手の上に作りそこからアツプルパイを取り出し食べ始めた。おいフリーダムも大概にしとけ。運命になったつてのに主人公の位置喰っちまうくらいに自由すぎんぞ。

所で俺も貰って良い？サンクス！うまうま♪

その様子に姐さんは再び剣に手を掛けようとするが赤バラさんが手

で制し、マーテルの質問に答えた。

「最初は気付かなかったよ。店の事もあるのだろうし数年前から幾度か来ていたのだろうが…ね。

気づけたのは偶然と言ってもいい。それほどに君の術式は完璧だ」

「だったら何故？」

「君の術式は完璧すぎた。あまりにも理想的な“人”でありすぎたのだよ、その擬態は。感情の揺れ、霊力の流れ…簡単に言えば教科書通りだった」

マーテルはその言葉に眉をしかめ、反論した。

「いえ、それは理解しています。だからこそいくつかのパターンに分け…」

その言葉を遮るように赤バラさんは首を振り、続けて言葉を紡いだ。

「それも含めてだよ。どうやら君と私の思考パターンは似ている様でね。そのパターンすらも私であればこうするという理想と重なってしまった」

「ッ!？」

マーテルは何も言わずにただ奥歯を噛みしめる。

ああ、マーテル負けず嫌いだもんなあ。そりゃあ悔しいよな。

「一度その違和感に気付いてしまえば、捕捉は簡単だったよ。後は

どうにかして直接確認するだけだ。まあそれが今回だった訳だがね」
うへえ、俺の知らない所でドラマが起きてたのか…。雰囲気は何故かサスペンスものだけどさ…。

そんな事を思ったからか、波が押し寄せる崖際をバックに、少しよれよれのコートを着た赤バラさんと、追い詰められたマーテルを幻視した。

やっべ無駄に似合う。

だが、マーテルもただでは追い詰められはしない。

「その割には招き方が下策ですね。レディを招くのですからもう少し気品を持って行って欲しかったものです」
おこな

レディwww

…あれ？ひょっとしてそのレディは俺も含まれてる？

「はは、それは…だね」

マーテルの言葉に先程の優位が一気に反転し、苦笑いしながら言葉を濁す赤バラさん。

というか、招き方がダメだったわけ？まあ嘘をついてたっていう意

味では拙かったかもしれないけどさあ。それに周りでそんなシリアス展開があつたの？

え？俺は食ってて知らないだけ？サーセンww

「マーテル・ユグドラシル…。あなたの名前はかなり有名だという事を知っているかな…？」

「「はい…？」」

俺とマーテルの声が重なった。

有名ってどういう事？

向こうでは、学園長やってたくらいだし有名だと思うけど…。

「各国で、呪いつきや、悪魔と呼ばれ蔑まれてきた者達が消える時、必ずそこにはマーテル・ユグドラシルの名が上がる」

「あ…」

ゆっくりと告げられた姐さんの言葉に、再びの俺とマーテルがシンクロ。

なにせ身に覚えが有り過ぎますからね。

一応筋を通す為とか言って、族長やらなんやらに交渉とかしてたらいいし、そりゃあ有名にもなるか。

しかし、まだ続きがあった。

「まだまだ在る。東の■■■国の崩壊、国もだな。それから大陸が一つ沈んだとかいう話も聞いた事がある。更に――」

そこからもいくつか上げられる事柄。どれもこれも物騒な事物騒な事。まあ何々を退治したとかも含んでるんだけどね…。

って、それホントにマーテルがやったの!?

おいこらその娘!!何で目え逸らしてんだよ!!

そんなマーテルをジト―っと見ていると観念したのかゆっくりと話しました。珍しく目を泳がせながら。

「あゝ、まあ確かに見覚えの有る様な事ばかりが挙げられてますが…全部が全部本当ではないですよ?例えば大陸g…じゃなくて。国についてですが――」

んん?なんで途中で話題変えたのかな?ちょーつとその辺k w s k 教えて貰おうか…?

弁解?を一つ一つしていくマーテル。やっべこいつ絶対歴史の教科書乗るわ。なにこの子主人公みたいな事やってんの?お姫様救出とか完全勇者のする事じゃん。国を滅ぼしたのも理不尽な戦争を吹っかけられた小国を守るためだとか…。もうこの子が主人公でよくな

い？

つと、メタな思考で現実逃避している場合じゃなかった。

「つまりばれたのは、まあ置いて、マーテルが怒ってた連れて来られ方に関しては自業自得的な？」

「そういう事になりますね」

おい、呑気に紅茶飲みながら開き直ってんじゃねえよ。

つてか、こいつ天然属性持ってたのか？なんで気付かなかったよ。聞く限りにおいて数百年前の話だけださ。この国の住民はほとんど数百年単位で生きてるんだぜ？そりゃ名前も残ってるよ。

「当初は国内に入った怪しい存在、それも高度な隠匿魔法を使用している存在が危険であるかどうかの確認に向かっただけだった。しかしそこに居たのは伝説と言っていい程の名前を名乗る女性、それも目撃情報に一致するときた。

念の為控えて貰っていた者たちに緊張が走るのも無理はないと思わないかな？貴女が関わった国のほぼ全てが何かしらの騒動の渦中になった。そんな人物がすぐにでも魔法を使えるように魔力を操作しながら警戒をしていたわけだしね。

もちろん、あなた達に不快な思いをさせた事は私の落ち度、判断ミスだ。すまない。私一人で接触するべきだった」

圧倒的にマーテルが派手にやらかして来た…というか、自重しなかった結果がここに出た訳だが、あくまでもこちらを立ててくれる赤バラさん。

そして俺よ…。どんだけ料理に目が行ってたんだよ。何故気付かなかった…orz

「それにしてもホント珍しいな。頭脳派でいつも冷静沈着なお前がそんなミスするなんて」

改めて考えてみると珍しい。というか初めて？覚えてる限りだこんな失敗してるのを見た覚えはないんだけど。

「……と……から……です」

「ん？悪い聞き取れなかった」

下を向きながらぼそぼそつと何かを口にするマーテル。

俺の耳でも全ては聞き取れなかったので聞き返す。

「母上との…お出かけが久しぶりで…嬉しかったからです」

「……／／」

…。

おっと鼻血が…。

油断している所に良いストレートを貰っちゃったようだ。

普段ツンケンしてるのに偶にこうやってド直球でどストライクしてくるもんだから…。

皆！！この子うちの娘なんだよ！！良い子だろ！？

前世で親ばかを若干バカにしててゴメンね！！俺も親バカだった！！

「……なるほど…それなら仕方ないな」

ブリジットの姐さんがなんかぼそつと言った！！

…そういえば原作で、一応父親でもある赤バラさんに、親に対してのモノ以上の感情があったから…それで共感したとか？

「とても愛されているみたいだね」

微笑ましいといった表情をしながらそういう赤バラさん。

いやー。もうあれだね。世界が敵になっても今の俺なら勝てる気がするよ。

「ところで何度聞いても疑ってしまうのだが…

君がマーテル・ユグドラシルの母親というのは…本当なのかい？」

おっと…、まさかのタイミング。

「えっと、そうだよ？なんか変かな？」

「失礼ながら、外見で判断した場合は…ね」

そりゃそうかw

マーテルは今モデル体形のお姉さま状態だからなあ…。それに対して俺は口リッ娘だ。一部以外。

その2人を見て、いくら親子（しかも小さい方が母親）だつて言われてもそうそう信じられる訳ねえよな。幾ら頭脳チートでもさ。

……つてかさ、今更だけどロリな母親ってどうなんだろう？子供たち側から見ても。

俺も前世の小学姓くらいの授業参観で母親が来たとき、見られて恥ずかしいわけじゃないんだけど何とも言えない恥ずかしさがあった。それがロリな母親だったら…。

ちよいと考えてみる。授業参観、続々と入ってくる母親達、クラスメイト同士で誰が誰の母親かって話になる、そんな中どう考えても同級生にしか見えないロリっ娘（一部以外）、母ですよー…。

よくグレなかったな我が子たちよ！！

授業参観とかはなかったけど、各国のあいさつに入ったからそんなときに俺を紹介するあの子たちの心中やいかに？

いや、ほんと良い子達に育ってくれたよ。うん。

まあ、一人ナチュラルにグレーてるな子がいる気もするが…うん、デレがあるからセーフだな！

そんな風によくわからない思考の海に入っているとマールテルがだいぶ落ち着いたのか、話を始めた。

ちなみに頬はまだ若干赤いw

「さて、そろそろ私たちを招いた理由をお聞かせ願ってもよろしいでしょうか？」

んむう？怪しいから連れてきたんじゃないの？

俺が首をかしげていると、マーテルは一つため息をつき、続けた。

「母上エ…。普通不審人物を重要な人物が居る場所に連れてくると思いますか？どれだけ強力な力を持つていようと、防衛を務めとする者なら、安全が確認されるまで対象を遠ざけるのが定石です」

あ…。そりゃそうだな…。

原作知識で赤バラさんがチートだって知ってたのと、何か俺には想像もつかない理由があるのかと思ってスルーしてたがJK（常識的に考えて）するわけないか。マニユアルはマニユアルだもんな。

……それからマーテルさん、さりげなくその言い方するのやめてくれない？本気で泣きたくなるから…orz

「先程の言い方からすると、対象を確認後に問題がなければ警戒に留め、あるなら被害を最小限に排除をする予定だったのですよね？触らぬ神に祟りなし。藪をつついて蛇を出すのは馬鹿のすることです。まあ出てきたのは虎と狼がセットみたいなレベルですが…。しかしそちらの方がどうやら価値はあったようですね。だからこそその招待。ただ、理由が解りません。母上のことはこちらには知られていない筈ですし、先程から言っている『マーテル・ユグドラシル』

という名前に意味が……」

「なるほど……“こちら”か……」

「ッ……」

「確信は得た。できれば貿易がしたい。もちろん武力はいらない」

「……良いでしょう。利益を考えれば断る理由はありませんからね。しかし……」

「もちろん非礼は詫びよう。ただ私個人からになるが……」

「構いません。今私は個人として居ますから。」

いえ、やはり非礼もいりません。こちらにも非はあるわけですし。何より負けた気になります」

「なら引き分けといこう。ふむ、貴女とはお酒を交えてゆつくりと話をしたいものだね」

「ふふ、私もそう思えてきました。ここまで私の心を揺さぶる相手は久しぶりですし」

「それは光栄だ。次は良き方に震わせたいものだかね」

2人の舌戦はいつの間にか始まり、そして終わり、おいてけぼりな俺。ついでにブリジッド。

あれ？姐さんも解らない組？

お互いに目が合う。

なんだろう…、この親近感…。

目と目が合う瞬間…
♪

あ、そらされた…。

「んで、要約するとどういう事？」

頭脳チートさんや、一般人にも教えてくりゃれ？

「そうですね…簡単に言うと、彼に魔法世界の存在がバレました」

「はい…？」

「今の会話で…？」

「いえ、恐らく——」

途中で赤バラさんの方へ顔を向けるマーテル。

それに対し赤バラさんが話を引き継ぐ。

「ああ、存在自体は疑っていたよ。可能性としては低く思っていたがね。レディ・マーテルが「マーテルで構いません」…マーテルが各地で引き取った者たちは百や千ではきかないのでね。その者達はどこへ行ったか気になって調べたことがある。」

その結果分かったのは、消えた人々はその後目撃されることはないということ。所詮は記憶ゆえに誤差はあるとは思うが人数が人数だからね、境界が何かで隔絶した世界、それもその場所だけで生活環境等が維持独立できる世界があると考えた」

「さ、さすが噂に名高い赤バラさん…」

えつとたしか、まだこの世界は天動説が信じられている時代だ。それなのにそこまで跳んだ思考ができるというのはさすがというほかない。

「そして、隔絶した世界を作れるほどに技術が発展しているならば自国の技術レベル向上のためにも取り入れたいと考えたんだ。」

あとは…」

「予防線…ですか…？」

「ばれていたか…」

「まあ、とある話を聞いてしまったこともありましてね」

苦笑しながら言う赤バラさんに、そう言い返しながらこちらをちらっと見るマーテル。

なるほど…これで分かった。

「予防線つてのは、あれかな？異種族間の…」

「そうなるね。私も、諸外国との関係向上に全力を尽くしている。しかし、戦はなかなか無くならない。それは――」

「“違う”から…だな…」

俺がマーテルに言った『ヴァンパイア十字界』の大まかな内容、ミトス達が迫害された理由、いまだ消えない戦争の狼煙、すべての原因は“違う”から。

民族、思想、理念、生き方、保有する力。

理由なんていくらでもある。

人つてのは、どこまで行ってもその違いを甘受できない。いや、したくないんだろうな。

特に彼らはヴァンパイア。夜の月とともにしか生きられない種族だが、それでも彼らの持つ力というのは羨ましさを感じずにはいられない代物だ。

昼に生きる事の出来ないヴァンパイア。だからこそこの国の中に人

が居ることができるし、諸外国の中には夜の王国と同盟を結ぶ者が居る。皮肉にも昼に生きる人間と夜でしか生きられないヴァンパイアという、その“違い”がギリギリのラインを構成している。

二つの“違い”で何とか成り立つこの国の内情。

もちろん赤バラさんはそのギリギリさに気付いている。

勿論、赤バラさんたちが攻勢に出て、周辺諸国を支配してしまうという策もある。当然それを成す力もある。

だが、それは現時点で何とか平衡を保つ天秤に指を乗せわざわざ傾ける行為に他ならない。

来るのは戦争に明け暮れる日々。

戦争で一番被害を受けるのは民だ。

そして民とは国でもある。

そんな民を守れない国に意味はない。

だからこそ赤バラさんは今ある民の平和を守るために、負の意味での“違い”を覆い隠すため、少しでも次善策が要る。それはどれだけあっても困らない物だから。

種族という前提条件を変えることができない以上、他の部分で補う必要がある。

その為に技術を、そしていざという時のための防衛策を欲している、と。

鎖国状態の魔法世界ではあるが、こちらとしては断る理由はそうそう無いな。

魔法世界にはチートが三人（頭脳限定だと二人だが）いるおかげで技術の発展はこっちの何倍も進んでいる。何よりも未来の技術を知っている俺も居るしな。そういう意味では夜の王国との貿易、条約にこちら側の利益は少なく思える。

だけど、これほどの頭脳チートが居る国を放っておく理由はないな。それに――。

「母上はどうですか？」

考え事をしている俺に話しかけてくるマーテル。赤バラさんと姐さんもこちらを見ていた。

どうやら、いつのまにか話をつけて後は俺に聞くみたいな状態かな？

「俺としては何の反対意見も無いよ。それに――」

「はあ、分かってますよ。悲劇の回避でしょう？」

「That's right! さっすがわが娘だぜい、パーフェクトだ」

「感謝の極み」

まあ、歳食つちまつたせいか難しいことを色々考えちまつたが、俺の行動理由なんて結局一つで良いんだ。

「さつて、ハッピーエンドを始めようかねえ？」

あの…ブリジットさん？その何言ってるんだこの子みたいな目で見るのやめてくれませんか？

赤バラさんもその優しい目が痛いっす。

せつかくかつこよく決めたと思ったのに…orz

side out

いかがでしたでしょう。

今回は前回の続きで、マーテルVS赤バラさんの舌戦で、感想にも頂きました赤バラさんが攻撃的過ぎじゃないか？という部分に関してのフォローのようなものを入れてみました。

作者的にはかなり頑張った方ですが、フォローできてたら…良いなあ…（遠い目）

さて、ご報告というか、お願いというか、お知らせがあります。

前書きにも書きました通り、マイパソコンが逝ってしまったため、ただでさえ遅い執筆速度がさらに遅くなってしまわれると思います…。

本当に申し訳ありません。

修理に出して帰ってくるのも2週間ほどかかるらしく、それまでは携帯か、マイスターのパソコン（最近リア充気味でスカイプ通話にはまってらっしゃるため中々借りれないやつ）でしか執筆していきけないという現状です。

一応、書きかけというか見切り発車的な短編が『執筆中小説一覧』に眠っていたりするので、そちらを少しいじって出す可能性もあり

ます。時間稼ぎすいません…orz

ちなみに、現在眠っているのは、ハンター×ハンター、まどマギ、GANTZ、とある魔術、ゼロ魔です。その中でもH×Hはそこそこできてるかなという感じです。後は完全見切り発車です。

なのでH×H編の短編が次に上がってましたらどうか温かい目で見てください。

それにしても…マイパソコンよ…どうしてこうなったんだ…。

聞いた話によると完全にHDDが死んでしまっているらしく、Dドライブに入っていた約150ギガ分のあれやこれやのデータが一緒に…。

世界はこんな筈じゃなかった事ばかりだ…orz

HDDのデータが消える。この意味は恐らくほとんどの方が恐怖に思っていることの筈。そんな皆さんに一言、バックアップってホント大事ですよ…（号泣）

だがしかし！！私はこんなところで諦めるわけには行けない！！

いざとなったらノートに書き込んで黒歴史を発生させてやる！！

ごほん、失礼…。

ええでは変なテンションで失礼しました。

今回はこの辺で、失礼をば…。

P・S・1

感想と、最近までよくわかってなかったポイントを随時お待ちしております。

P・S・2

また調子に乗って絵を描きました。

こんな感じです。

<http://3661.mitemin.net/i29810/>

>i29810—3661<

こいつまたやらかしやがったみたいな目で見てやってくださいww

『stage52：幸福戦略、しましょうか？・・・innネギま（夜の王国編）

思っていたより早く次話が書けて嬉しいkouです。

携帯でピコピコするのは、パソコンに比べちょっともどかしかったですが、何でパソコンより進行が早く…？

これでは次からずっと携帯で感想で頂きそうな（笑）

それはともかく、本編をどうぞ。

今回、ブリジットの姐さんが若干壊れ気味です。もしくは侵食されております。

お気をつけください。

『Stage52：幸福戦略、しましょうか？・・・innネギま（夜の王国編）』

>side：コウジユ<

どうしてこうなったんだろうか……。

目の前に居る軍隊。

後ろに控えているのもまた軍隊。

そう、ここは戦場だ。

「……………」

俺は静かに、手に持つスペルカードを宣言する。

そしてそのまま、一步、また一步と前方に居る軍隊の方へ歩いていく。

前に居る者達に動きはない。

なぜなら、俺が右手に持つものにおののき、驚愕し、理解できないからだ。人は理解できないものが目の前にあった時、すべからずその動きを止めてしまうものだ。

だからといって、こちらが歩みを止める理由にはならない。

俺はその歩みを次第に速めていき、そして“駆ける”ことへシフトさせる。事ここに至って、ようやく前方に居る奴等は動き出す。その手に持つものを構え、単騎で突撃する俺に備える。

しかし、そんなモノに意味はない。

悪いが、この“剣”を抜いた時点で俺の勝利は確定している。

約束された勝利の剣。

かの騎士王の代名詞たる聖剣エクスカリバーとはまた違うものだ。

だが、その名を冠するに足る効果を右手に持つこれは発揮してくれる。

彼我の距離は既に数メートルに迫っていた。

前衛の槍を持つ者達が、その練度をこちらに見せつけるように統率された動きをもってして、迫る俺を貫こうと力を溜める。

3、2、1…。

ブオウツと、突風を纏っているかのような音と共に槍が迫る。

俺はそれを大きく上に跳んで避ける。

槍兵達を飛び越え、辿り着いたのは敵部隊のど真中、ほどよく中枢に近いそこは僧兵部隊。

霊力を使う彼らは詠唱を完了しようとしている。それが向かうのは当然、たった今彼らの目の前に降って来た俺だ。

しかし――。

「させねえ……」

俺は自分の特性である“獣”性を生かし、隙間を縫うように、駆け抜ける。しなやかに、そして速く、何者の追隨も許さず、すれ違わずに敵を斬り伏せていく。

それによって再び敵軍に驚愕が走る。

しかしそれは当然と言えよう。なにせ、敵はただ一人、それも見た目は少女としか言えない外見をし、その手に持つのはサイズで言えば精々片手剣、攻撃方法は横を駆け抜ける際に斬りかかるというもの。

だというのに、攻撃された者のその悉くが血反吐を吐きながら空を舞うように吹き飛ばされていく。

驚愕のあまり、見ている者達には、刹那の間に人生をたどる走馬灯の如く、世界が遅延したかのように感じていることだろう。

そして俺は、吹き飛ばされた者達が未だ地面へ帰ることを許されていない内に、次の対象へと斬りかかる。

漸く空を舞う者達が大地への期間を果たした時、敵軍の思考は正常へと戻った。

いや、戻らなかった方がよかったのかもしれない。なぜなら戻ったが故にこの異常を捉えなければならなかったのだから。

「何だよこれ…何だよこれ!？」

「うあ…うああ…!？」

「嘘だ、嘘だ嘘だ!!」

仕方ない。一刻も早く斬ってしまうか…。

俺は助ける意味も込めて斬るスピードを速めていく。

斬っては次へ、斬っては次へ、斬っては次へ…。

「後は…あんただけだな…」

「意味が…意味が分からない…」

茫然自失…。そんな言葉がお似合いの男が居た。

俺は一度止まりそちらを見る。

残り数十人といった兵に囲まれた、周りに比べ華美な装飾の装備を身に着けた男だ。

「我が軍が…何故…。

数千は居たのだぞ!？」

俺はその男に向かって歩き出す。

男を囲んでいた兵士がこちらへ駆けてくる。最後の抵抗というものだろうか。

俺はその兵たちの悉くを斬っていく。

そして最後の一人――。

残りは華美な装飾の男だけ。

俺はそちらへ走り出す。

対象はもう目前。後は斬るだけ。

「何故こんな小娘に……!!」

何故…。

何故ただの緑黄色野菜を持っただけの小娘に我が軍がやられねばならんのだああ!!!!」

「坊やだからさ…」

そして斬る…。

「君は、見た目に反してえげつない事をするね…」

戦闘が終わって、後ろに控えていた『夜の王国』軍の元に戻ってきたら赤バラさんにそういわれた。

えげつない…のかね…？

「っていつでも…誰一人殺してないぜい？」

はじめての衝撃的な出会いから数年が経って、友人といえる関係になった俺と赤バラさん。

とある交換条件により、俺は最近ブリジットの代わりに赤バラさんの副官をやっている。

それで、今回は国境付近のイザゴザを納めに来たわけです。

「あれでかい？」

そう言いながら、赤バラさんは俺がさっきまで戦っていた場所へ視線をやる。

続けて俺も視線をやる。

そこにあるのは血溜まりに沈む幾人もの敵国の兵士たち。

ちなみに向こうが国境を侵して戦いを仕掛けてきました。それも村を襲った奴らです。

「大丈夫！死んでない！！」

「そうか…」

見たただけだと地獄に他ならないけどねww

けどよく見たら、誰一人五体不満足になっている人間はいない。

それに、たまにぴくぴくしてるから大丈夫です。

「それが今回の武器の効果かい？凄まじいな…」

「YES」見た目で判断したらいかんぜよってね」

俺は右手に握るそれに目向ける。

右手に持つもの、それは――。

――ネギだ。

いや、あの將軍？が言った言葉で予想できた人も居るだろうけど、例の、ファンシーの中のあのネギだ。ミクミクするあれね。

F a t e世界でアーチャーと戦う時に使ってた片手剣、『ネギセイバー』だ。

もちろん、ただのネギセイバーじゃない。ただのって言い方もおかしいけど、とにかく今回のネギセイバーは特別仕様なわけさね。

それが、一番最初に唱えていたスペルカード。

剣符『^{ドンバツチ}名状し^{ソード}難き葱のようなモノ』

しつこいようだが、見た目はどう考えても「こいつをどう思っ？」

「すごく…葱です…」なんだかなwww

しかしながら、だ。

正直に言おう、名前に反してかなりの反則スペルに仕上がってしまっている。

効果：使用者は気づけば勝利している。

因果律崩壊も甚だしいなwww

加えた効果は『ボ』×7+『ー』×2+『・』で原作の太陽もどき
が使ってた葱が元ネタだ。

スペルに思いつきり名前出してるのに、作品名の誤魔化し方がめんどくさいとか思った奴前へ出る。それでも真剣に考えたんだ：／／

ごほん…。

まあとにかく、その元ネタで、ドンパッチソードという名の葱を使ったらいつの間にか勝っていたというのを流用して、前々から作ろうと考えていたスペルだ。類似品にドンパッチハンマーがあるがこちらは逆にいつの間にか負けるというものだ。

で、色々やってて、俺の情熱が365度よく分らない方向に走った結果、出来上がったら、条件付きで因果律の強制効果をつけることができた。

条件というのは、ラスボスクラスには使えないこと。そして、ギャグ補正が働くこと。

シリアスしてたじゃなかった？

ふふふ、よく見直してみると良い。ちょこちょこギャグってるから敵の吹っ飛び方なんてもろにそれだからww

見直すというよりその状況を思い浮かべた方が早いかな？

んで、長くなっちまったが、血反吐を吐きまくってるのに死んでないというのが『ギャグ補正』の効果ってわけだ。

赤バラさんが引いちやう位スプラッタの光景が広がっていても、『ギャグ補正』の一言ですべては解決してしまう。

どこの悟り妖怪の妹のキャッチフレーズ（？）、『無意識だから仕方ない』みたいに、『ギャグ補正だから仕方ない』と納得すべき事象だ。

あれで生きてるなんて信じられるわけじゃないか！！
←

生きてるものは生きてるんだからしょうがない。だってギャグ補正なんだもの。

つまりはこういうことですww

「しかし、彼らをどう処理するか…」

「ん？ やっておこうか？ 村の復興支援あるんだよね？」

「確かにあるが…いや、ここはお言葉に甘えさせてもらうよ。間に合ったとはいえかなりの被害が出ているようだったし、ね」

「了解、大將軍殿。こっちはまかせといてくれ」

赤バラさんに軽く敬礼しながらそう言う。

赤バラさんも笑って軽い敬礼を返しながら村がある方へ歩いていく。
あ、ちなみにこの世界にまだ敬礼はないから、俺が適当にやってる
のを真似してくれてるだけだぜい。

まあ、俺は外部助っ人みたいな感じで出向してるだけだから、あつ
たとしてもやる必要性はほぼないんだけどな。

「さつてと、禁忌『一条祭り』！！適当に相手国に放り出しとい
てくれ」

俺は俺で後始末をしに、兵どもが夢の後を地でいく先程の戦場に行
き、スペルを唱える。

唱えると上空からポトツと有○みかんの段ボール箱が落ちてきて、
中から、闇が凝縮したような黒い何かでできた腕が何本も出てきて
兵をその内側に回収していく。

思わず、いあいあはすたあ！！って言いたくなる光景（あれは召喚
する呪文だっけ？）だが、何気に見慣れ始めた光景なので、視界の
隅に置いというて、軽く最近の事を思い出してみる。

あの初めての会合の後、俺たち魔法世界組みと、夜の国国王ゴット
f…ゴット…ゴットハンドクラッシャー（？）陛下との間に正式に
条約を結び、貿易、留学等、互いの国にとって有益な交換条約を結

んだ。実質的には赤バラさんとマールテルがだな。その時にもう一つ決めたのが重役の交換出向だ。夜の国からはブリジットが、魔法世界からは俺がといった感じ。大將軍補佐と神様の交換っておいつてな風に思つかもしれないが、この交換は俺が夜の国の為言い出したことだ。

国家間の利益で考えてもらうと分かると思うが、俺がこっちの国に居て得るモノはない。しかし、夜の国からしてみれば未知の技術の宝庫に知識を得に行くことができる。

なのになぜこの提案をしたか。

それは悲劇を回避するため、それなりの地位に俺がいる状態で夜の王国に大手を振って居続けるためだ。

決してNEET働けと言われないようにする為じゃない。その所は誤解しないように。

そんなわけで俺とブリジットは交換出向しているわけだ。

勿論、ちよくちよく里帰りはする。というかまあやろうと思えばブリジットにマイルームに繋がるスペルカード渡してあるから、マイルーム経由でいつでも夜の国に帰ってこれる。

それがかれこれ数年続いている。

向こうではブリジットはマーテル付きの秘書官みたいな感じに頑張
って技術の吸収をしていることだろう。前に見に行った時は2人し
て白衣に眼鏡で研究をしていたし、仲は良好な様だ。

対して俺は、最初の内何故か王宮で書類仕事とかをさせられた。い
や、マジで何故に？と何度頭を傾げたことか。元は大学生だし、転
生してからも頭脳派連中みたいにはいかなくても、長い年月を掛け
て吸収してきた知識もある訳で、下手な文官よりは使える...と思う。
比べる対象として周りに居るのが頭脳チートばかりな為に多分とし
か言いようがないが。

しかし、いつまで経っても待遇は変わらない。最初は武官として行
くつもりだったのに何でこうなっているのか...。赤バラさんの行動
に着いていけないという意味がないんだけど...。そうは思いつつもとり
あえず仕事を続けた。

しばらくして、里帰りしたときに俺はポロツとマーテルにその事を
言った。

そしたらあいつ、大笑い（とはいえキャラブレイクしない程度に上
品にだが）しながら、俺を連れて夜の国に行き、こう言った。

「そう言えば王様達には言っていないませんでしたね。コウジユは私の
母で、ついでに言つと私よりよっぽど武官向きですよ」

そう、笑いを堪えながら言った。

ちょっと待てと、俺は言わずにはいられなかった。

しかし思い返してみると、俺はあまり条約締結の際に口出ししなか
ったのもあってマーテルは俺の事をあまり説明していなかった。赤
バラさんの方も、俺がマーテルの母であることは知っていても武官

側だとは思わなかったようだ。あと、ついでに言つと俺の魔力は他のヒトには感知しにくいらしい。マ―テルに言われて思い出したんだが、俺って『幻想を現実に（後略）』で魔力をもつてきてる訳で、更に言つと、この世界で言つところの魔力と厳密には成分（？）的な意味で違つというか、魔力つぽいのが混ざつた状態らしい。意識的に作ればちゃんとこの世界のも創れるが、無意識に俺って魔力あるんだぜ状態だともね。だからこの世界の魔力を検知する魔力だと、この世界の魔力しか感知できず、混ざつた内のその部分しか引つ掛からないようで……つまり何が言いたいかと言つとだな、俺って王様には少女な見た目だし、魔力も少ないけど、出向の際にマ―テルが何も言わないということは文官として来るのだろうと思われていたわけだ。まあ見た目少女とはいえ亜人だから人間で考えるよりは歳はとつているだろうとは思われてたみたいだが。

赤バラさんはただ単に魔力量から文官だともつていたらしい。

それを夜の王国の会議室つぽいところで、重鎮達が揃つた状態でマ―テルが暴露した。ついでに魔法世界での俺の立場も暴露した。

そしたらもう驚愕どころじゃない位に皆さん大驚きですよ。

全員俺が武官だとは微塵も思わなかったんかい！！

それどころか年下だと！！

確かにこの世界の獣人で言えば、人に比べ長生きとはいえ、俺位の見た目だと精々4、50歳にしかならないからヴァンパイアの皆さんからしたら子どもだろうけど。

まったく！どおりでお菓子くれたり、頭撫でたりしてきたわけだよ！！

いや、うん、美味しく頂いたし、獣性を得てから撫でられのが妙に気持ちよかったりしてたから拒否できなかったんだけどね…／／

けど、俺は歳上なんだぞ！！獣神なんだぞ！！

見た目幼女だけどさあ…orz

まあ、文官として疑問を持たれなかったってことは、それなりに仕事はできてたって意味だと思うし、不満ばかりがある訳じゃあないけどさ。

そんな事があってからは武官としてやつと赤バラさんの補佐に着くことができた。

まだ、元老院のじっちゃん方から心配されたし、今度は兵士達の方で子ども扱いされたりもしたけどな！！

幸いにも、長命種だから見た目が幼くても従軍するっていうパターンは割りとあるみたいだし、そもそもブリジットもそのパターンだったこともあって子どもの分際でといった悪感情は少なくとも表だつては無かった。というか内面でも大多数が思ってないんじゃないかな。勿ろつか、ちよつとも思ってるなら近づこうとしないだろうし。勿論嫉妬心とかがない訳じゃないみたいだが、妬んでる暇があるならちよつとでも訓練して国の為にとってヒトがほとんどみたいだ。お国

柄つてのもあるんだろうけど…。

俺なんてしょっちゅうリア充爆発しろ！！とか思ってたのに。え？そこは一緒？ほう、そう言えば第2大隊の副隊長がメイドの……。

とにかく、マジで良いヒト達すぐるわけですよ。

…それもあつて止めてくれって言いつらくもあつたわけだけどね…。

そんな感じにして数年が経った。

結構頑張りましたよ！！俺超頑張った！！

戦場に出てはちぎつては投げ、ちぎつては投げ…。

とはいえ、そうそう俺のオート防御を抜けるヒトは居なかったんで危険度言えば低かったけどね。

え？

いやいや、一人も殺してないよ？

だって俺、ベーシックにヘタレだもん。

人の命なんて奪って背負えるわけがない。背負わずに吹っ切ること

も出来なかったし。

だから、ギリギリまでボコボコにして反抗できないようにして、終わったら回復して、『一条祭り』にポイントを入れて送ってもらった。いやあ、『一条祭り』さん超便利。怖くてどうなってんのか調査はしてないけど、たまにケーキとかお好み焼きとか入れたら、色々してくれる。応用範囲広すぎwww
あ、そういえばミカンは嫌いらしい。何で？

そればかりやってたからか、いつのまにか『不死一（殺さず）』の二つ名が着いていた。

——何でか畏怖を込められて。

あれえー？

ひょっとして人間側のチートである、“とある人”に圧殺式滅砕陣とかいうのにズグシャアッ！！とスプラッタされたのにヒョコヒョコ自陣に帰ったからかな？

…と思ったけど、どうやら違うらしい。

部隊のヒト達に聞いたら、やり方が問題らしい。幼女にされることもあってトラウマもの？

はて…？

まあいつか。

なにはともあれ、実績も信頼も大分得たし、本来の目的からしたらどうよとは思うが、赤バラさんとは別地方に別部隊の指揮官として出撃させてくれる位にはなったし。

仮にもチートだからね。

『どこでもドア』の効果で大人数の移動とか出来るから部隊の機動力はかなり良い方だし、程度はあるが仲間のステータス向上魔法とか、逆に相手のを下げる事もできる、何気に万能型だし、自分言うのも何だが、良物件だと思うよ？

特に機動力。

人間の部隊はとにかく数で来るから、他方面作戦とかしょっちゅうしてくるし。

んで、そんなこんなでまた数年、そして今に至る…と。

いやあ、簡単に振り返っただけでも結構濃いね。

『ケプ…』

「あ、終わった？ありがとう。これ今回のね」

かわいいゲップを一つした『一条祭り』に、倉庫から出したマーテル特性ケーキを1ホール入れてあげると満足そうに消えていく。

ゲップしたのにケーキを1ホールいっちゃうとかやっぱりデザートは別腹ということなのかね？

他にもちよこちよこ見せる『一条祭り』の意外な女子力に思考を走らせつつ。

赤バラさんが向かった筈の村に足を向ける。

さてさて、次は怪我人の回復つと。

> s i d e o u t <

> s i d e : ブリジット <

足りない…。

激しくスト劳斯成分が足りない…。

…っ、私らしくもない…。

すぐに母上成分が足りないと言うマーテルに毒されたか？

ごほん、改めて自己紹介しよう。私こと、ブリジット・アーヴィング・フロストハートは、コウジュと交換出向ということで魔法世界に来ている。

目的は技術知識の取得。

武官として私の代わりに（実際にしている所を見たわけではないので未だに信じられないが）残っているコウジュに対して釣り合わないと思うが、コウジュ達にはそれなりに得があるらしく、それならと日々私はマーテルの秘書官という立場とともに、様々な知識を得ている。

それにしてもマーテルにコウジュ…か…。

出会った当初では考えられない位に親密になったものだ。

国内に異様な魔力がある。それは人であるなら持つていてもおかしくはない程度だが、どこか違和感がある。蜃気楼のような、陽炎のような、あつたと思えばいつの間にか霞と消えているような…。

その事に最初に気づいたのはストラウスだった。いや、ストラウスに言われなければ他は気付けなかった。

それほど違和感。それも違和感として捉えても、すぐに見失ってしまうような極小さなもの。

しかしそれを捉えていたのが次期王たるローズブレッド・ストラウスだ。

夜の国で王となるためには、純血のヴァンパイアが最低でも1000の齢を迎えている事が通例だ。それを100を越えた程度で王となることを約束された存在。

いかな高位の魔術士であろうと、彼を欺くことはできない。この対象も所詮は…。そう思っていた。だが――。

「不味いな…」

そう言った後、全兵士に対象の補足、接触の禁止を通達し、そしてこう言った。

「この件に関して全権を持つ」

あのストラウスにしては珍しい事だ。かさに着るように全権を宣言

することなど、まったく彼らしくない。

もちろん彼の副官たる私はすぐに訳を聞いた。しかし彼は、念のためと言っただけだった。念のために全権を？

釈然とはしないがストラウスがそう言う以上、その先へ踏み込むことは危険なのだろうと自身に言い聞かせた。

それから、ストラウスは幾度か急に居なくなることが出てきた。どうやら件の対象を、魔力による探知は最低限に極力肉眼で、相手を刺激しないように動向を探っているらしい。

とある日、いくつかの隣国との平和条約のために使者を招き入れており、城内は慌ただしかった。そんな中、対象が現れた。

他国の重要人物を招いており、警備は城内へ集中している。もちろん他へ回す余裕はないし、回したとしても蔑ろにしたと外交問題になる可能性がある。

しかし、あえてストラウスは対象に接触を試みると言った。そしてこうも言った。

「例の対象はマーテル・ユグドラシルで間違いない。見ている限り害する意思は無いようだが…、何が起こるかわからない。今回は何故か獣人の少女が一緒であることが不確定要素ではあるが、少女とは親密であるようだ。遠視で見てきたが、数度見たマーテル・ユグドラシルに比べて感情の表出が大きいのも少女が関係しているのだろう。一筋縄ではいかない相手だが、聞く限り最低限の義理は通すようだし、少女共々国の客人として抱き込めればあるいは…。印象

を悪くする可能性はあるが、この際仕方がない。向こうの出方によつては、それもまたこちらの手札を増やすことに繋がる。諸刃の剣ではあるがね。

いずれにせよ有事の為、ブリジットは少数を連れて対象から700は離れて警戒してもらふ事にする」

マーテル・ユグドラシル……。なるほど、伝説級が存在が関わるのならば彼とはいえ、慎重にならざるをえない。

そう得心させるに足るのがその名前だ。いつであつたか、ストラスは夜の国に敵対する可能性がある国家、人物、それらを書類に纏め、会議に使用したことがあつた。

その際の番外に記されていたのが“マーテル・ユグドラシル”だ。

私を知るものも含め、関わつたとされる事象がいくつも書かれていたが、あれはもう災害の類いだと認識したのを覚えている。容姿から、自然が顕現したものと言われる精霊ではないかとの噂もあり、我ながら言い得て妙だと思つたものだ。

幸いにもマーテルから手を出したとされるモノは無い。あつてもされるだけの理由があつた。

ただ問題なのは、マーテルは“敵”に対して容赦がないということだ。

故に敵と認識されるわけにはいかない。

そして作戦執行。

予定通り、ストラウスが対象に接触。

場所は、最近噂のレストランユグドラシル……。馬鹿にされてるんではなかるうか…。

そうは思いつつも気は抜かず、対象を監視し続ける。距離は予定通り約700。

しばらくストラウスと彼女達の会話は続き、上手くいつているように警戒はしつつも一先ずの安寧は得られそうだと思ったその矢先のこと。

「…ッ！！！！？」

私の身を圧倒的なプレッシャーが襲う。

吞まれるわけにはいかない。気を張り、プレッシャーの主に対し警戒を強めると共に、思わず殺気だってしまう。あの場にはストラウスが居るとはいえ民間人が多数居るのだ。

『落ち着け！！』

普段では出さないような、たしなめる声音でストラウスから念話が届く。

慌てて気を落ち着かせ冷静になる。未だ早鐘のように心の臓は鼓動を続けているが、自分らしくもないと叱咤し、情報を分析し直す。今のは魔力の封印を解いただけだ。まだ術式に乗せてすらいない。誘われたのか？くっ、ストラウスの策を潰してしまったか…。

いや、反省は後だ。

どうやら今の失態でマーテルの警戒を強めてしまった為、ストラスは幾つか用意していた段階を飛ばし、強引になるが客人として招くようだ。

先回りして城で待機しなければいけない。

私は感情を抑えなければならないと理解しつつも、策を潰してしまった自分とその大元に腹立たしさを感じずにいらなかった。

「どうしたんですか？」

声を掛けてきたのは、今まさに反芻した内の1人、マーテルだ。

「いや、ただ初めての会合を思い出してな……」

「ああ、あのブリジットの黒歴史事件ですね」

違う！！と否定したいが、確かにそうなので受け流す。

マーテルとの会話に一々突っかかっていては身が持たない。ストラスの様に優雅に返すこともできないからな。

「つまりませんね…。」

それにしても、いきなりどうしたんですか？ホームシックとか？」

「違う、偶々だ。いや、根本的な原因はお前か。最近コウジユコウジユと煩いからな」

「うるさいとは失敬な。あなたも対して変わらないでしょうに」

「確かにストラウスに会いたくはあるがな…」

あの失態の後、魔法世界と夜の国とで条約は無事に結ばれ、私とコウジユが交換出向したことでマーテルとは友人と呼びあえる中になつたが、未だにコウジユが絡むと途端に面倒くさくなるマーテルには慣れない。勿論コウジユが目の前に居ない時のだ。居たらマーテルはクールキャラ？を気取って、甘えたいくせに素直にならない。その分居ないと面倒くさいのだ。

「今面倒くさいとか思ったでしょう？」

「自覚があるなら直せ」

「いやです」

「だろうな…」

魔法世界に来た当初は、このマーテルにかなり戸惑ったものだ。

これがあのマーテルか、と。

これが私にあの失態を生み出した程のプレッシャーを放った者なのかと。

一週間もすれば怒りは呆れというか諦めに変わったがな。マーテルの自由さには着いていけない。

あとマザコン具合にもな。

「はあ……」

思わずため息が出る。

「おや、お疲れですね」

誰のせいだと…。

「そんなときは新発売のこれをどうぞ。落ち着くアロマが中に入っているケモカミヌイミです」

そう言つて渡される、少し変わった形のぬいぐるみ。

抱える位には大きいため、自然と一部が顔に近くなり、ほのかな香りが鼻孔をくすぐる。

「確かに落ち着く香りではあるが…」

「お気に召しませんでしたか？ふむ、改良の余地ありますね」

「原因がお前だからプラスマイナスゼロだと言いたただけだ。むしろマイナス」

そう言いながら私は手に持つぬいぐるみに目を向ける。

デフォルメされた三尾の大狐。所々に仮面があつたり、何かの塔を背負っていたりするが、全体的に見て子ども受けするだろう可愛さを伴ったそれ。

ケモカミ…か…。

正直言つて嫌な単語だ。

こちらの世界に来て最初にマーテルは魔法世界の各国を案内してくれた。恥ずかしながら想像もつかない技術を前に私は胸を踊らせつつ、外面は冷静を保ち、案内を受けていた。

そんな中に“それ”はあつた。

獣神信仰。

ケモノガミではないらしい。あくまでケモカミ。

思わず何が違うんだとこぼしてしまったのが運の尽き、そこら中から信者が現れて詳しく説明された。

幾時間か経った後に解放された私は、生活拠点となる宮殿で獣神Ⅱコウジュという事を加えて、マーテルに獣神信仰について補習を受けた。

確かにあの丁度良い位置にある頭は撫でたくなるし、精一杯強がる姿は母性本能をくすぐるが…っと危うく洗脳されそうになったのは

記憶に新しい。

「ふう、やはり母上を見てきましようかね。最近は戦場で暴れてるらしいですし…」

「それは私も見てみたいな。正直未だにコウジユが闘えるというのは信じられん」

一応神だというのは信じたが、あの姿で闘かえるといわれてもな。

いや、私自身コウジユ位の身長の際に戦場に出たことはあるが、コウジユはまた別だろう。

あれで軽く一万歳を越えているというのだから、既に詐欺の領域だ。しかしそれでも、あの姿で剣を振り回しているなど想像もつかない。百歩譲つても棒付きの飴を振り回しているところしか思い付かない。

（振り回します）

ん？今変な注約が頭に浮かんだような…。

どうにも疲れているらしい。

それもこれもマーテルのせいだろう。

エターナルロリータがどうか、ロリBB Aがどうか耳がおかしくなる位に言うからな。

私はそんな知識学びに来たわけではない。

はあ、コウジユを見に行くのは明日のようだし。今日はゆっくりと眠ろう。

> s i d e o u t <

どうでしたでしょうか？

サブタイはきつとナニモノにもなれない人達に告げちゃう例のアニメが元ですか、内容にはあまり関係ないです。

お気付きだとは思いますが作者はすぐに見切り発車とかしちゃう奴なので（笑）

さて、今回の話は最初っからクライマックス臭がする話でしたが笑っていただけたでしょうか…？

当作品にお慣れの方だと、途中からこれは落ちる絶対どこかで落ちると予測されていたかもしれませんがねwww

今回の話ではコウジュ・ストラウス組と、ブリジット・マーテル組という風に分かれてもらいました。

これは勿論我らが主人公にも頑張ってもらわなければ、と考えた結果だったのですが、そしたらブリジットがマーテルに…。

どこの使徒のように侵食された姐さん。

もうシリアスは戻らない…。

ごめんね姐さん、原作だと、シリアスな頭脳派クール美女なはずなのに。

マーテルに関わったのが運の尽きさwww

でも、一応良いわけとしては、ブリジットは未だ百年も生きておらず、ストラウスの娘とはなっていますが、その技術、思考、等々まだ全て受け取っているわけではないと思うのです。彼女は確かに優秀ですが、急激な躍進をするのは原作を知る方にしかわかりませんがあの悲劇の後、国が滅びた後だと思うのです。

更に言いますと、姐さんって、レイピアを突くのではなくて振り回して地面を砕いちゃうような直情的な部分もあるので、まあまだありえるかなあと今回の話の様にしました。

というかこの時点での歳の差が激しすぎるwww

コウジュ・マーテルは一万単位ですし、赤バラさんは百を越えた程度、ブリジットに関しては百を満たしていない。

赤バラさんがチートすぎる件について（笑）

さてさて、他にも色々と書きたいことはありますがそろそろ自重しますwww

後書きを長々と書きちゃうのは私の悪い癖ですね（笑）

というわけで今回はこの辺りで、サラダバー！！

感想とお待ちしております！！

P.S.

今回の感想でいただけるであろうものを予想してみみした。

『チート幼女来た！！これで勝つる！！』

『マール、またお前か…www』

『姐さん！？姐さああああん！！！！！！！！』

の3つ。プラスアルファで『葱（笑）』ですかね（笑）

絶対似たようなのをいただける筈www

『stages3:セネル&シン「ステラアアアア!!!!」完全に

どうしてこうなった。

まあ私の小説ではよくある話ですが、キャラ崩壊（原作を考えれば許容範囲？）的な事が起こっていますので用法容量の加減をよろしくお願いします。

ついでに言うと開幕厨二病があるので胸焼けされる方もいらっしゃるかもしれませんがお気をつけください。

あ、タイトルに関しては両方知ってる方は皆さん思ったと思います。ステラつながりでなんだか懐かしくなったのでこんなタイトルにしましたww

では、どうぞ。

『stage53：セネル&シン「ステラアアア！！！！！」完全に

side：コウジユ

ヴァンパイアと人が使う魔力は似て非なるモノのようだ。

fateの世界、まあいわゆる型月世界ではマナとオドという考え
方がある。

マナとは、大気のように自然界に溢れる力。

オドとは、人が内界より産み出す力。生命力。

この考え方はネギま世界でも使うことができる。

マナが魔力、気がオドだ。

ただ、間違えてはいけないのが魔力も^{マナ}気も^{オド}根は同じということだ。
成分と言い換えてもいい。
では何故態々分けるのか？

そこで、ネギま原作にて『魔力は精神力、気は体力に強く関わる』
とあったがコレに起因してくる。

魔力は精神力を以って、気は体力によって操る。ただその過程が違^{プロセス}
う。

たとえば火を着ける術を使うとする。

気を使う場合、“^{オド}気”を“^{マナ}火”として変換し、形成する。対して魔力は、大気中に存在する“^{マナ}魔力”を自身の精神力によって操り、“火”へと変換する。これだけでは分かりにくいが、要は内界に作用するか、外界に作用するかだ。自ら生み出すか、他で生み出されたものを従わせるか。

このことから、魔力保有量やキャパシティという言葉があるが、あれは一度に魔力を変換できる、または従わせることができるための器の大きさについて言っていると推測できる。

ついではあるが、マートルが魔法との親和性が高いのもここに起因する。マートルは元は樹とはいえ、今は精霊だ。そして精霊とは簡単にいえば魔法生物、意志ある魔力^{マナ}、つまり魔力そのものと言っている存在だ。

普通、ヒトが魔力を使用する際、自身にマナを取り込み、精神力を使って従え、そして魔法を発動する。しかしマートルは魔力そのものだ。精神力など必要無いし、大魔法を使うために必要な他精霊を、従わせるのではなく手伝ってもらうことができる。器を必要とせず、魔力を集めて術式に乗せてしまえば魔法を発動できるわけだから、魔法との親和性が高いわけではない。

ちなみに他精霊というのはファンタジーものでよくある設定の、火とか水とかの属性精霊のことだ。初級、中級、上級、根源精霊が居るらしい。初級、中級は自我が薄く、その辺りに居る。というか漂っている。魔法生命体と言ってもほぼマナに近い存在で、本来の意味で“そのもの”に近い存在であるからだ。対して、上級、根源精

霊は完全に自我を持ち、基本的に地球の裏側（裏界）に本来住む存在だ。とくに根源精霊はその司る属性の根幹たる存在で、それぞれ1柱しか存在せず、自身の属性概念を以ってして世界を支えているようだ。根源精霊が世界の根幹をなし、数柱の上級精霊が各地の調整をし、数ある中級・初級の精霊が自然の一部として各地で世界を満たすというわけらしい。

“ ようだ ”、“ らしい ” というのは、俺は会ったことはないからだ。本来ネギま世界の魔法は、上級魔法になるにつれ精霊の補助を必要とするが、俺はどうやら詠唱を唱えて、魔力使って魔法発動という“ 形 ”をとっているだけで、精霊がどうかの過程を吹っ飛ばしているから魔法を通して身近に感じる機会がない。根源精霊に至っては世界を支えるのに忙しくて、そもそも“ ヒト ”に関わらないし、そうそう裏界から地球側に来ない（当然魔法世界であつてもだ）。

さらに追記すると、マールも一応根源精霊だ。ただし支える世界（属性）は“ 世界樹 ”で、それさえ支えれば良いからあちこちに遊びに行けるというわけだ。

話は長くなったがここで改めて、最初の『ヴァンパイアと人が使う魔力は似て非なるモノ』という話に戻ろう。

ヒトが使う魔力は、先ほどからしつこく言っているように精神力を以って操り、魔法として世界へ放出する。

実は、ここまでではヒトもヴァンパイアも同じなのだ。

どちらも魔力を、自身を受け皿にして取り入れて術式に乗せ、求めていた結果を出す。

ただ、ヴァンパイアはヒトのように大型魔法を使う際に精霊の助けを借りて発動させない。

ヴァンパイアは元来魔力を受け入れるための器が大きいこともあるが、理由は他にある。それこそが助けを必要としない理由であり、ヒトとヴァンパイアの“魔力”の違いを決定付けるものだ。

「つまりだなあ、結局ヴァンパイアは闇の根源精霊の眷属なわけよ」

「何故顔を真っ赤にしているのですか？」

「ふふ、コウジゅちゃん顔がリングゴみたいに真っ赤だよ？」

「う、うるさいうるさいうるさい！

先生だぞ！

授業中だぞ！！

お静かに！！！！」

「あ、これが厨二病乙ってやつなのね？」

「何でその言葉を知ってる！？」

「けど、厨二病って結局何なのでしょう？」

「確か…とっても痛い病気らしいよ？拗こじらせると悪魔に取り憑かれたような人格になることもあるとか…」

「念のため聞いておくけど、それらは誰が言ってたんだ？大体想像はつくが…」

「「マーテルさん（です）」」

「あいつ…次会った時にどうしてくれようか……」

「えっと、多分マーテルさんまだ城内に居ると思うよ？この授業が始まる寸前に『母上が闇の精霊がどうか言った後に顔を赤くしたら厨二病乙と言ってあげてください』って言われたのよ」

「私も同じ位の時間ですね。内容も似たようなものを…」

「ぐぬぬ…。そもそもこの世界ルールの法則を見つけたのはマーテルなのに…。厨二っぽくてもこの世界では真実なのに…。この辺りの科目担当はあいつなのに俺にさせたのはそういうわけか？くそう…」

「「まあまあ」「」」

いつものことだがどうしてこうなった？

いやまあ良い傾向なんだろうけど…。

弄られる方の身としては、なんというかね…。

あ、えっと、すみませんトリップしてた。

何せ状況が状況だからね。

改めましてはろーえぶりわん。

なんか中学の英語の授業思い出すなこの挨拶…。

じゃなかった。

現在の状況だが、俺の目の前には二人の女性（女の子？）が居て、俺はその正面に座っている。

そしてやっているのは家庭教師もどき。

とりあえずさっそくネタばれ（？）をするが、分かる人なら分かったと思うけど今俺の目の前に座っているのはほんわか系代表のお二人、ステラとアーデルハイト姫だ。

「ヴァンパイアさんと闇精霊さんは仲良しだったんだね」

「それで、コウジユちゃん続きは？」

「はいはい、えーっと…ヴァンパイは闇の根源精霊の守護を受けてるんだよ。大精霊みたいにさ。とは言っても、精霊種というわけではないんだ。簡単に言えば、種族はヴァンパイアだけど、職業が大精霊…みたいな？」

「「へー」」

「へーっておい…。ま、いいや。」

それで、ヴァンパイアとヒトの魔力は違うっていうのに繋がるんだ。ヒトは大気中のマナを魔力^{マナ}として使うけど、ヴァンパイアはマナをマナとして使うんだ」

「…？」

同じこと言ったよ？」

「それに、器が…という先程の話に反するような…」

「どう説明すりゃいいかな…。マナっていうのは大気中に溢れる力であって、ヒトがそのまま扱える力じゃない。だから、精神力でマナを自分の器に合った量を注いで魔力^{マナ}として扱えるようにしないとイケない。けど、ヴァンパイアは精霊の加護を受けているからマナをマナとして術に使える…っていうので分かるかな？」

「んー？んん？」

「何となく…ですけど…。でもそれなら最初からヴァンパイが扱えるのはマナだと言えば良かったのではないですか？」

「ややこしいんだが、ヴァンパイアもマナを使う際、闇の眷属であるが故にマナは闇の属性を得ちまうんだ」

「んんー？あ！じゃあ靈力は光とか！！」

「おいしい！！ステラってほんとに変なところで勘が鋭いよな。でもちょっと違うんだ。靈力っていうのは、氣が変質したものなんだ。」

ヴァンパイアは闇の眷属って言ったけど、他にも闇の眷属は居る」

「「悪魔？」」

「そう、正解。」

人は遙か昔から悪魔と敵対関係にあった。それに対抗するために生み出されたのが靈力だ。氣という自身が生み出した力に、“闇は滅ぶべし”という思いを、概念を乗せるまでに昇華したものが靈力なんだよ。だから同じ闇の眷属であるヴァンパイアに効果的な威力を発揮するってわけ。だから、例えばの話、俺なんか氣と靈力でそれぞれ同じ量を使った攻撃を受けても差は無いけど、ヴァンパイアが食らうとあり得ない差のダメージがある。ちなみに、“氣”としてオドを使う人がいないのは世界単位で“氣”イコール“靈力”イコール“魔を払う力”っていう思い込みがあるから。そういう風に教える人もいっぱい居るしね。だから魔法世界では普通に“氣”を使う人の方が多い。向こうは種族入り乱れてるから、“魔を祓う”という概念が無いしな。純粹に言うのは少し語弊があるけど“氣”という内部エネルギーとして扱う」

「なるほど、分からないや」

「…難しいところですね。あ、ちょっと待ってくださいコウジユちゃん。ではダムピールはどうなるんですか？」

「ヴァンパイアと人との間に生まれたダムピールは両方の力を使えるけど、同時には使えない。何せ片方はもう片方を消すために生まれたものだからな。けど、だからこそ、先天的に相反する力を持つて生まれるダムピールは制御力が高いというアドバンテージがあるっていう感じかな。」

…つと、今日はここまでにするか。お疲れ様。また明日な」

「お疲れ様でした、コウジゅちゃん、アーデも」

「はいお疲れ様でしたお二人とも」

「なあ…いい加減“ちゃん”付けは…」

「「可愛いから却下」」

「デスヨネー。」

マールテルは“さん”づけなのに…orz」

俺は二人が出ていったドアを見ながらソファーに身を沈める。

こんな風に家庭教師をする様になって早くも1年が経っている。そもそも、俺がなんでこんなことをしているのかという話だが、実

はそれ事態は簡単だ。

魔法世界に行っていたブリジットが帰ってきて、赤バラさんの副官に復帰したというそれだけの事。

他の理由はないぞ？ほんとなんだぞ？追い出されたなんて事があるわけではない。

ごほん。

しかしながら俺は俺の目的の為に、魔法世界に易々と帰るわけにはいかない。

そこで、見た目に反して結構な長生きさんな俺の知識、まあ雑学やら普通の勉強込み込みでのソレを使って家庭教師をすることになったわけだ。さすがに帝王学とかは習ってないから全部が全部とはいかないがな。

魔法世界の学園都市で非常勤講師みたいなのをマーテルのつてでした（させられた？）こともあるし、こつちの世界じゃあまだ確立してない学問なんかも少しは教えられる。

で、だ。本題は、どうしてあの二人が仲良く俺の生徒をやっているかって話だ。

アーデルハイトの方は俺がストラウスの近くにいたこともあって割りと簡単に会うことができた。今では茶飲み仲間だ。

ステラの方とは、ストラウスの原作での出会い方に俺も加わった感

じだな。ストラウスが北に平定しにいった時に、別件で動いていた俺が合流したときに紹介してもらって風に。

当時は色々とあったもんだよ…。

何せこの二人は恋敵通しなんだ。ついでに言えばブリジットもストラウスに並々ならない思いを抱えているわけで…。

胃痛でスケープドールが発動すると思わなんだわ。

俺は思わず、胃の辺りに手を当てて擦る。

同時に当時の胃の痛みと、その原因となった事について記憶から浮き上がってくる。

「恋人…ねえ」

「駄目だろうか？」

「いや、ダメも何も俺に聞かれても困るんだけど。とりあえず落ち着け」

「あ、ああ…。いや、だが、むう…」

なんだこの赤バラさんは、あえて言うなら『あかばら』モード？いや、『すとらうす』モードでも可？

ストラウスとは別件で動いていた俺が彼に合流するなり言ってきたのが先の言葉だった。

ストラウスの活躍で、『夜の国』と周辺諸国との軋轢も大分少なくなってきた今日この頃。それでも喧嘩を売ってくる国はまだある。魔法世界との貿易で、この時代背景から考えたら可なり発達した『夜の国』の技術を奪い、我が物にしようとしてるんだが…。俺からしたら馬鹿としか言いようがない。不可侵条約さえ結んだら、こちららは安全な技術を公開してるのに。

まあそんな馬鹿な方達には丁寧にお帰りいただいてるけどね。

お陰で俺も有名になったもんで、厨二臭い二つ名までいただいちゃまった。

『不死』の虐殺姫。

初めて聞いた日には身体が痒くて痒くて、ひぐらしが鳴いちゃう頃のら発症患者みたいに、血が出るのもいとわず身体を掻きまくってしまった。

ちなみに“不死”とかいて“殺さず”と読む。

殺さないのに虐殺とはこれいかんと思うだろうが、いつだったか俺がネギでやったみたいに殺戮現場みたいになるのに死んでないからっていうのが一つ。もう一つは命を奪ってないのに、兵士として死んでしまうからだそう。

なんでも、俺が殺さないように殺さないようにって頑張って作ったスペルカードや、トラップ作りまくって追いつ返した結果、戦場恐怖症というトラウマ持ちがいっぱいできたらしい。他にも、幼女恐怖症とか、逆に悟りを開いたかのような紳士になったりとか、BLTサンドトマト抜きな方になったりと被害(?)が続出してるとか。何これ怖い。

最近『夜の国』軍で俺の事を“様”付けで呼ぶ奴とか、紳士な奴とか、あと何故か居るヤオロズ教徒。こいつらも増えてるんだが無関係だよな…？

あ、そういえばそいつらが増えてるって気付いた時位に、俺の前に走って来て『ふんでくだs』まで言ったところで周りの奴ら(ヤオロズ教徒の疑いがある奴ら)にボコボコにされるといいう事があったけど…あれはなんだったんだ？

つと、話がずれた…。

ともかく別件が終わったんで何か手伝えることでもないだろうかと、現在ストラスが復興支援をしている、戦災被害にあった村に来たんだがいきなり恋人がどうか聞かれたわけだ。

俺に原作知識が無かったら対処に困るストハウスの現状なわけだよ。

周りの兵士もすぎる様な目でこちらを見ている。

ごめんなさい。前言撤回します。原作知識あっても対処無理です。
恋の病末期つてやつですね。何だか胃がムカムカしてきたんで、実
家帰って良いっすか？

ダメ？

そんな捨てられた子犬みたいな目で見られても…。

つておい！ こんな時だけ年上扱いか！？ え、むう、し、仕方な
いなあ。

おねえ…ごほん、お兄さんに任せとけ！！

「という訳でだ、ストハウス君」

「どういう訳かは分からないが、何かな？」

「とりあえず、その恋人に会わせてくれないかな？」

「ああ、先ずはそれからだな」

そう言つと、急いで走っていく赤バラさん。

ごめんよ皆、お兄さん、とりあえず先送りにする事しか出来なかつ

たよ…orz

・
・
・

「えっと、ストラウスの補佐をやっているコウジユです。どうぞよろしくお願いします?」

「これはどうもご丁寧に、ステラと言います。こちらこそよろしくお願いします?」

「「…?」」

同時に首をかしげる俺と目の前の少女。

「…何をしてるのかな?」

そこへツッコむ赤バラさん。

「「何だろう(でしょう)?なんとなく?」」

「君達に分からないのなら私では尚更だと思っのだが…」

「「…?」」

「いや、何でもない。むしろ、お陰で冷静になれた」

おお、なんか知らんが『あかばら』さんを『赤バラ』さんにすることに成功したようだ。

それにしても、と改めて俺の目の前にいる人物に目をやる。

薄いピンク色の、ストレートの髪が腰まで伸びていて、癖っ毛なのか、寝癖なのか、所々軽く跳ねている（原作知識からいくとおそらく後者）髪型。

少し細身で、出るところは出ているが、引つ込む所は引つ込むメリハリのある体型。しかしながらブリジツの様な妖艶さがあるわけではなく、かといって令嬢の様におしとやかさがあるわけではなく、快活さが前面に出ている。

…なんだが……。

纏っている空気は――。

「ほわほわだねえー」

「ほわほわですかー」

「ほわほわだよ」

「ほわほわ」

「「…？」」

「すまないが、私が首をかしげたいのだが…」

ああ、うん、まあごもつともだ。

けどつつい吊られてしまつて…。なんというか和んでしまつ。

もう固有結界レベルじゃね？

「ごほん…もう大丈夫。それで、えつとステラ…さんはストラウスの恋人になつたらしいけど…」

「はい、あ、私の事はステラで良いですよ。話し方も軽くでいいですし」

「りょーかい。んじゃ俺もコウジュでいいよ。それにそっちも気楽にしとくれ」

「分かつたよ、コウジュちゃん」

「ちゃん…いや、まあ、いいや。」

それで、ステラは今幸せ？」

「もちろん」

「そっか…。うし、ストラウスは仮にも將軍だから何かと面倒だろうけど、俺に出来ることあったら手伝うよ。心から二人を祝福するよ」

こつも幸せそうに笑みを浮かべて即答されちゃあね。ストラウスも吊られるようにして幸せそうに笑ってるし。

「「ありがとう」」

赤バラさんとステラが俺に礼を言う。ラブラブだねえ、ホント。

「いやいや、俺はまだ何もしてないさね。これからこれから」

マジでこれからが大変だろうな。原作では、細かい描写があつた訳じゃないから読んだ当初は大体は丸く収まったように感じたが、今この場に居ると俺としてはこれから軽く憂鬱だぜ。

原作では、ただの村娘というのでは外聞が悪いから、確かヘイゼルバーグに養子として入るんだったか。ヘイゼルバーグとこのじつちやんかあ…。強面だけど、親バカ気質だしそこに関してはいけそうではあるが…。だからといって姫さんとの婚約があるからなあ…。その前に大人気の赤バラさんだし、ステラ自体を守る手段が先か？ いやでも、そのためもしつちやん達に…。うーむ。

「しかし――」

俺が元老院のじつちやん達（実際は俺の方が年上だが）にまず連絡

して、とこれからどうアシストするか考え込んでいたら、赤バラさんが微笑みながら言ってきた。

「——仮にも神の祝福だ。ご利益があるだろう」

「む…／／」

思わず顔を背ける。顔に熱が集まるのを感じる。

つたく、不意打ちにも程があるんじゃないだろうか。

でもまあ嫌じゃないんだから、自分でもけつたいな性格をしてると思うね。

はは、それにしても、神の祝福ねえ。

獣神の祝福ってなんだろうな？

もふもふになる…とか…？

そんなわけねえかw w

なんにせよ、ご利益とかはおいといて全力でハッピーエンドは目指すさ。

「ところで…」

俺は、恥ずかしがる俺を見て微笑ましいといった雰囲気になつている二人の方を向き、話を反らすためにも先程気になつた事を少々無理矢理にでも聞くことにした。

「ステラの髪型つてもともとそんなのか？えらくぴよこぴよこ跳ねてるけど」

話を反らすにももつと何かあるだろうと自分で思っただけど、まあいつか。気になることには変わらんしな。

いや、まて、まじで気になつてきたぞ。

あのまさしくアホ毛と言わんばかりの頭頂のあれは何だ？なぜ風もないのに揺れている？

ほかは動かないのに。

しかし、他も気になる。なぜあれだけの量が重力に逆らつて…。

「あ、ああ。今さっきまで寝ていたから。ほら、私たちとヴァンパイアさんたちって昼夜で生活が反対じゃないですか」

手櫛で何とか直そうしながら、答えるステラ。

しかしながら未だ重力に逆らっている髪達。

寝癖…？寝癖で済むのか…？

無理矢理納得するしかないか。少なくともアホ毛っぽいのに関して、なぜ重力に逆らえるのかなんてのはパンドラの箱のごとき触れてはいけない部分な気がするし。

「昼夜逆転かあ…その内慣れるよ。案外簡単だぜ？」

「君の場合はただの不摂生だと思うのだが…」

おっと、何故か赤バラさんの再度からの攻撃。事実だからどうしようもないんだが…。だって仕方ないじゃん、転生前から昼夜逆転生活とか結構あったし。それが魂レベルで染み付いてるんだからさ。

「なっつかしいなあ。あれが2年前くらいか？」

ステラとの出会いは比較的普通だ。

けど、あの後が大変だった。

なにせ、赤バラさんが北方の平定が終わると同時にステラを城へ連れ帰ったのだ。

言い方は悪いがステラはただの村民だ。

このときには既にストラウスは王になることが決定していて、同時に、現王の娘であるアーデルハイト姫との婚約がほぼ決定していた。いわゆる政略結婚ではあるが、赤バラさんはよくアーデの面倒を見てたし、アーデはアーデでそんな彼にべた惚れだ。だから、夫婦になることは当然だと思われていた。

そこへステラを連れて行ったわけだ。幸いにもその時はまだブリジットが魔法世界に行っていたから少しだけマシだった。まあその後すぐに帰ってきたんだが…。

まあそれは一旦置いていて。

俺はあまり城にいることは少なかったから、基本常に城に居る（自宅警備員ではない）アーデと会うことは少なかった。けど、それも長い年月の間に回数が重ねられていって、友達のような関係になった。今ではコウジユ、アーデと呼び合う仲だ。

「最初の出会いは俺がお城の中で漫画を落として。それをアーデが拾ってだったんだよなあ。それからアーデが漫画にはまって…」

はまったとは言ってもオタク化するほどではなくてよかったと今でも思うよ。

んで、ステラを連れ帰った赤バラさん。ついでに俺。当然の様にステラのことで城中が大騒ぎ。赤バラさんの今までの功績もあつて許しても良いのではないかという意見もあつたし、反対意見もそこら中であつた。

結果、ステラは人間だから100年も生きられないこともあるし、妾という形で元老院等のお歴々から許可が下りた。

だからといって、アーデからしてみれば理解はできても納得できる訳がない。

なにせ、愛しの彼が早く帰ってきてくれないかと待っていたら、帰ってきたときに女連れ。

「その結果があんなことになるなんて…」

「コウジユちゃん!!」

ダン！という効果音とともに俺が宛がわれた部屋に入ってくる
一人の少女、アーデルハイト。

月を思わせる腰よりも下まで伸びているブロンドに、ピジョンブラ
ッドのような紅い瞳。まさしく姫君といった容姿だ。

「あのさあ、俺に遠慮は要らないって言ったけどさあ、女の子はお
淑やかにしろってまた怒られるぜ？」

「コウジユちゃんが言わないでください」

「そりゃあごもつとも。で？用件はやっぱりステラ？」

「…はい」

普段オドオドしているアーデがこんな喧騒になるのも無理はないと
は思っけどね。

なにせ自分の大好きな人がとられたんだし。

「アーデとしてはどうしたいん？」

「私は…」

言い淀みながら下を向くアーデ。気が弱い質の彼女のことだ。ステ
ラをどうこうということは出来ないだろう。だからといって赤バラ
さんを諦めることができるわけもなし。

さて、後回しにした事が今になって出てきたわけだが――。

「決めました！！私、あの子と話をします！！」

あれ？

なしてそんなアグレッシブなのさ？

「コウジユに借りた漫画にもありましたがこういった事は後に回す
とろくな事にならないそうですし、しっかりとお話しします」

O H A N A S H I じゃないよね！？つかおれの漫画が原因！？

漫画だけで！？

いやいや、たかが漫画だと侮ってはいけないのは俺がよく知ってる
じゃないか。

それに、原作でも基本的には気弱だけどここぞというところで女王
の様な品格を出していた。

ふむふむ、これは結果オーライじゃないか？

「よっし、了解了解。俺も行っていい？いきなり二人っきりとかも
気まずいでしょ？」

「…「コウジユ」……」

「つてこら、泣くなし!!」

先ほどの宣言が嘘のように、涙目になりながら俺に抱きついてくるアーデ。身長的に俺が抱え込まれる形になるので動けない。

まったくなんだってんだよ。

「先はああ言いましたがやっぱり心細かったんです…うう…」

うん、まあなんというか、今日も夜の国が平和で何よりです。

“あんなことに…”なんて前振ったが別にOHANASHIが展開されたわけでもないんだけどね。

あの後、すぐにステラが与えられた部屋（つまりは赤バラさんの部屋なわけだが）に行つて、ステラ、アーデ、俺の三人で話をしたわけだが。

原作から考えたらかなりの進歩だろうけど、二人の会話の微笑ましいこと微笑ましいこと。

例えば、「こ、この……えっと、何とか猫!」「何とかって…泥棒猫って言いたいのか?」「それです!泥棒猫!」「えっと、ネコさんはお返ししてきましたよ?」「…?」「みたいな感じにね。ステラはどうやら、いたずらに使った近所の猫のことを言われてると思ったのか話がかみ合わないし。

アーデは、私怒ってるんだぞということを使ったこともない罵倒言葉で表そうと思ったけど、生粋のお姫様な事と、優しい性格が目的の邪魔をして普通にかわいいだけだし。

その後は俺が思わず笑ってしまい、そこからなし崩し的に席に座っての落ち着いた会話になり、それも俺が用意したお茶とかのせいで、お茶会というか女子な会話になるし(もちろん俺は居づらくなった)、いつの間にか、ステラがどんな風にして赤バラさんと出会ってお互いに好きになったのかとかの話になっていた。

それから定期的に、お茶会を開くようになったりと、恋敵ライバルだが、お友達として現在まで中々に良好な関係になっている。

二人で色々競い合ったりしてるし、と思ったら二人で一緒にベッドで寝たりしてる(俺も誘われたが当然断った)し、細かく言うところ余曲折が結構あるわけだけど、それでも二人が楽しそうにしてるし、今回のことは良い意味で予想外だ。

ホント漫画って恐ろしいわww

原作を知っている身としてはこの二人がこの時点でこんなにも仲良くなってくれている事はかなり嬉しい。

まあ、そういうのとは別の部分で色々と手続きやら根回しやら疲れたんで余計な手間が減って嬉しいというのが、嫌なくらいに大きかったりもするが…。

コンコン――。

「はいはい。どうぞー」

ノックの音が聞こえ、辿っていた記憶から意識を現在へ呼び戻す。

俺の返答に間髪入れずに扉が開く。

そこから入ってきたのは先ほどまで俺が家庭教師もどきをしていたステラとアーデ。

二人は何も言わず、微笑みながらこちらへ続いてくる。

彼我の距離が5Mを切った時点で、俺はあることを思い出して壁にかかっている時計を見る。

同時に、俺は窓の方へソファァーから飛び上がって退き、キッと二人を睨む。

「またか！！俺はやダって言ってるだろ！！」

「良いじゃないですか、一緒に入りましょう？」

「なんでそんなにも嫌がるの？気持ちいいのに」

一緒に入ろう、気持ち良い、という言葉でわかってもらえたと思う。

そう、この二人は俺と一緒に風呂に入ろうとしに来たわけだ。これだけじゃない。他にも事ある毎に俺を二人の女の子グループに入れようとしやがる。

もちろんどれもこれも断ってるがな！！

「嫌なもんは嫌なんだよ！だからさらばだぜい！！」

「そうは行きません！！」

アーデがそう言いながら、窓を跳び超えて逃げようとする俺に向かって掌を向ける。

と、同時に俺の胸の辺りを囲うように、魔力で出来た輪っかが出現する。

「バインド！？くっ、けどこれくらい！！」

魔力制御の授業で気まぐれに教えたこれを使われるとは！！

「それっ！！」

あわててバインドを打ち破ろうとする俺に、飛び掛って捕獲しようとしているステラ。

けど、甘い!!

「空間移動」どこでもドア」!!マイルームへ!!」

「あ、ずるい!!」

「へっへーん!逃げるが勝ちさ!!」

バインドで腕は封じられても、足は動く。その足で、マイルームに繋がった窓に飛び込む。魚が飛び跳ねるように無様に見えるだろう事は当然のように思考から削除しながら、自分が通りきったところで、窓をマイルームに繋げていたスペルを解除する。

ふいー、全体的に良い傾向なのはいいけど、俺の被害がその分増えるってのはどうなのだろうかと、毎度毎度のことではあるが今度こそ上手く動くようにしようと決意しながら、窓に横っ飛びに飛び込んだせいで、打ち上げられた魚のようにマイルームに飛び込んだ自身の体をぴちぴちと跳ねさせながら今後について考える俺だった。

え?ブリジットの時はどんな風になったのかって話が聞きたい?

よしとくれ…、思い出したくもない…。

でもまあそれでも聞きたいってならヒントだけあげるよ。

O H A N A S H Iをした。もち被害者は何故か俺。以上。

「はあ…、床冷てえー…。」

s i d e o u t

『stages3：セネル&シン「ステラアアア！……」完全に

どうぞごさいましよう。

開幕厨二はさすが胃もたれますかね？

ヴァンパイア十字界のヴァンパイアとエヴァンジェリンことネギま
の中の真祖のヴァンパイア。

闇の魔法。

霊力。

神鳴流。

魔法無効化能力。

といった二つの物語をクロスさせる上で矛盾が生じそうなワードや、
この物語にあわせた解釈を馴染ませる為の説明文（伏線）という厨
二病を発祥してしまいましたwww

自分で書いておいてなんなのですが、矛盾してないかなかなり心配で
す。自分の中の雑学とかが少ないから、無理矢理感出ているだろう
なあと思いつつ、この辺りで出しかないと、後のちになって、そ
ういえば！みたいな展開に出来ないので強行しました。見切り発車
もいいところですね。

申し訳ないですが、矛盾点やこうしたらわかりやすいんじゃないか等、目についた部分がございましたら教えていただくと幸いです。

あ、あと、ステラの口調に違和感をもたれる方もいらっしゃると思います。

私としてステラが友達と話すときはこんなじゃないかなと考えた結果なのですが、さすがにこれはないだろうといった意見がございましたら、これもまたご報告よろしく願います。

さてさて次回！

…実は何を書くかまだ迷ってる段階です。ここで、いただいた感想にもあつたストラウスvsコウジユというのを書いてみるか、予定通りシリアスパートに入って、番外として二人の対戦を書くか…。

戦闘見たい！とか、先へ進むべし！等、いただいた感想で変えようかなと思いますので、よろしければこれも書いていただくと嬉しいです。

ではまた次回お会いしましょう。

お読みいただきありがとうございます^^

『stage54：すたーぶれいかー（物理）・・・innネギま（夜の王国編）

どうもです^^

今回の話は前半にグダグダしたコウジュ（マーテル）のはっちゃけが、そしてその後に突然のシリアスが御座います。

という訳で今回の突っ込まれるであろうキーワード。

『マーテルマジ自重w』

もうお馴染みですね。

『温度差ww』

まあそういうことです。

『姐さんに愛の手を』

誰かあげてください。

さてさて、けったいな前振りを入れたところで、どつぞ。

『Stage 54：すたーぶれいか』（物理）・・・innネギま（夜の王国編）

side：スト劳斯

どうしてこうなった…。

よく、コウジユが項垂れながら口になっている言葉だ。

しかし今、私が最も口にしたい言葉でもある。

なぜなら――。

「さあ、最初っからクライマックスと行こうぜ!!」

――コウジユが斧槍^{ハルバード}を構えて臨戦態勢をとっているからだ。

さらに言えば、遠くに目を凝らすと見慣れた軍の者達がこちらを観戦している。

かく言う私も、剣を一振り手にしてコウジユに対峙している。

今から行うのは単なる訓練だった筈なのだが…。

「…ままならない」

思わず口からこぼれてしまう。

「あれ？どしたの？」

一時構えを解き、私へと問うコウジユ。

「何、私はどこで間違ったのかと思ってね」

「あゝ、えっと、あえて言うなら、模擬戦決めた時にマーテルと出会ってしまったことかな？」

申し訳なさ氣に言うコウジユ。

「いや、戦いを前に気をそぐことを言っただけで申し訳なかった。どうせだ、盛大にやろう」

私がそう言つと、コウジユは嬉しそうに笑いながら口を開いた。

「そうだな。とりあえず、制限付きとはいえ、全力を尽くさせてもらうぜ。もちろん負ける氣はない」

私も剣を構え、備える。

「もちろん私も負ける氣はないさ」

「大事な大事な恋人も見てるしな」

「ふむ、負けれない理由が一つ増えたな」

「うおっと、やぶ蛇だったかw」

「コウジユの悪い癖だな」

「うるせー。」

さて――」

「そうだな――」

「「始めよう（やろっ）！」「！」「」

side out

side: マーテル

ふむふむ、結界は上手く働いているようですね。

おや、こんばんは。マーテルです。

いやはや、良い仕事をしました。

何をつて？

それは勿論、ストラウスVS母上の模擬戦を大々的なものにしたことですよ。

ちよつとしたお祭りのようなものです。

言っておきますが、ただ単に母上を弄る為だけにしたのではないですよ？

お祭りというものはそれだけで、人々の心が潤い、また市場も潤うものです。

母上から聞いた話では、原作的にもうすぐそこまで夜の国の崩壊は迫っています。

その為にも兵士たちには英気を養っていただかないといけません。国民たちにはこの国の思い出を少しでも多くしてほしいですし。

……なんですか？

私が民たちのことも考えているのがそんなにおかしいですか？

心外ですね。

それでも各地の子どもたちを多少強引でしたが学園都市に導き、幸せにできるよう努力したりもしてるのです。

仲の良い国の人々に、幸せを願うことのどこが変でしょうか。

それもこれも母上に影響されてでしょうがね。

母上が願う“HAPPY END”の。

ごほん。

私らしくありませんね。

一つの終わりが近づいているが故に少しナイーブになっていたようです。

今回のこれは、先に言ったような民達の為ですが、ついでもう一つ、目的があります。

母上は既に悲劇の回避方法を考え付いています。

ただ――。

詰めが甘いというか何というか…。

チェックを掛けるやり方も、その為の力も母上にはあります。それは確実に“幸せな終わり”へと辿り着きます。

しかし、母上は、母上には見えている駒が少なすぎる。

チェスに見立てて言うてはいるけども、世界はチェスのルールの様にはいかない。チェス盤の外にも敵はいる。取ったと思っていた駒が再び敵になることなど幾らでもある。

今回のこの催しは国内だけのものです。故にこの国に関わる者であれば全ての人間が見ることができます。

そういう結界を張りました。

その上で今回についての情報を他言無用と、敵対国へと情報を流すのは禁止だと、王の名のもとにお触れが出ています。現在この国の戦力として多大な役目をもつ二人ですから、その力量を他国へ見せるわけにはいきませんからね。

さてさて、それでも情報が他国へと流れた場合、どういうことでしょうか？

ふむ、どうしてそこまで遠まわしなことをするかですか？

確かにこの世界の魔法に心を覗く魔法があります。しかし、世の中に絶対はありません。自身を簡単に騙せるものもいれば、騙させる魔法もあります。

故に結果さえあれば良い。

おや、母上たちが本格的に戦い始めましたね。

さてさてキツネ狩りと――。

――キツネだと母上を狩っちゃうみたいになりますね。

母上…狩り…／／

けほん…。

というわけで、ネズミ狩りといきましょう。

幸福へと至る道。其は我らが盟約であるが故に――。

s i d e o u t

s i d e : ストラウス

ルール1、他者の介入を許さず。

ルール2、広域魔法を使う際、結界の外側への干渉を確認した時点で使用者の敗北となる。

ルール3、コウジユにのみ適応、スペルカードは3枚まで。

これだけしかないルールで行われている。

いや、改めて考えるまでもなくおかしくはないだろうか？

ルールとは即ち縛る^{すなわ}ためにあるものだ。

縛ると言っても悪い意味ではない。

行う物事に対し、あえて制限を付けることで一定の枠組みを作り出す。試合等^{ゲーム}ではなくてはならないものだ。

当然、先の3つも模擬戦^{ゲーム}であるが故の決め事^{ルール}だ。

しかしながら、制限という制限はできていない。

1つ目はルールにするまでもなく当然のことだ。2つ目はそもそも結界が設定されている距離がキ口^キ単位の為、余程の事が無い限り触れはしないであろう。3つ目は回数の制限であっても“質”の制限はしていない。

つまり、私が言いたいことはだな。

「どれにしようっかなーっと」

コウジユよ、自重してくれ。

「1枚目だ!!」

操符『コン・ファンネル狐七尾の大宴会』!!!」

コウジユの持つハルバート斧槍と、私の剣が交わったのはわずか数十合。

交わされた刃も、技も何もない、ただの力任せなものだった。

だというのに、3枚の内の1枚をもう切ってきた。

あれこれと言いながらも、コウジユもこの模擬戦という名の、戦争（現時点でさえ予想できる規模的に）に乗り気のようなのだ。

とはいえ、私も人の事は言えないか。コウジユの多彩な技は見ていて面白い。

今出してきたこれもそうだ。

マドウーグ。

装備者追従型の魔法発動媒体。

あらかじめ媒体自体に術式を書き込んでおくことで詠唱等を破棄することができる、コウジユが持つそれらの中でも、登録術式数が減る代わりに術者の意思に合わせて自動で魔法を^{オート}発動する特徴を持つ。

マドウーグに登録できる術式数は確か2つ。

しかし、コウジユが出したマドウーグの数は7体。

「囲め!!」

七匹の異色の狐たちが私を囲い、コウジユ自身も斧槍を手に飛び込んでくる。

ヴァイブレイト・アロー

「振動矢!!」

魔力で練った矢を、自身を囲う狐達に飛ばす。

「ちっ!!」

コウジユは舌打ちをするが、一時凌ぎでしかない。

「やはり壊れないか」

私がよく使う魔法形式は振動による分解を付加するもの。

当然狐達を壊す力を無数の矢に加えてある。

しかし結果は破壊する事が叶わず弾いただけ。

クロスファイア

「十字砲火、ダム・グランツ!!!」

私を起点に十字に並んだ七尾はその口から光の砲撃を放ってくる。

厄介な即発動。ゼロタイム

逃げ道は上しかない。

上に飛び避けるが、当然――。

「つらああ――！」

「当然だ……な！」

私のさらに上空からの、体ごとの刺突。

当たる寸前に剣を斧槍に当て、反動で体をずらす。

それとほぼ同時に私の側方をすり抜けることになるコウジユへ斬撃を加えようとするが、一度離れる。

「ばれたか」

刹那も待たず、今まで私がいた所を通り過ぎる、7本の落雷。

二人同時に地面に降り立つ。

「自分を囷にするまでは良かったが、選択した魔法が間違っていたね。継続ダメージ系統か追尾系統ならばまだ可能性はあったが……」

以前見たものに吹雪を起こすものや生命力を吸収するものがあつた。

あれらを使われていたとしたら容易く避けられはしかっただろう。

どちらにしても7つ全てが同じ種類の術式を2つずつ登録している
ということは一。。

登録術式が2種というデメリットを、7つある媒体で埋め合わせる
と思っただが――。

要警戒か…。

「ぐぬぬっ…

なんてな!!
突撃せよ狐達!!」

「む…速い」

再びの七尾の突進。もう一度狐達を弾く^{はじ}為に
矢を放つがすべて隙間を縫うように避けられる。

障壁を！

「貫け!!メガ〇テ!!」

私が張った全方位障壁に狐達がぶつかった瞬間、七尾は極光を放っ
た。

side out

Side: コウジユ

ふうあーっはっはっはっはっはっ！！！！！！

いくらストラウスだろうと、障壁を張ろうと、このタイミングならノーダメージではいられまい！！

まさか自爆しに来るとは思わなかっただろうさ！！

それにしても、いざやるとちよつと罪悪感。作戦の為とはいえ狐を爆破させちゃったからなあ…。

まあ自爆させたとは言ってもスペルカードとして創ったやつだから俺の倉庫には元祖が控えてくれてるんだけだよ。

マドウーグの狐シリーズマジかわいいんだぜ？

こう、感触は鉄っぽいんだけど、見た目はデフォルメされたぬいぐるみたいでさあ、それが自分の横をふわふわ飛んでるんだぜ？もう和むのなんのつて。

マドウグシリーズには他にも可愛いの居るんだけどやっぱ個人的

に狐達が一番好きだわ。ちなみに他にはゲーム内コラボとしてお茶犬が居たり、ネタ要因としてハンバーガー型とか、獅子舞型とかも居る。ファンタシーをやる時についていとお世話になっちまう奴らなんだよなあ。

ただしオキクドウグ、てめえは駄目だ。

オキクドウグ、見た目：呪いの日本人形

「実に面白い…」

どこぞの福山さんみたいなことを言っただけで未だ立ち昇っていた土煙りの中からストラウスが歩いて出てきた。

「嘘っ！？無傷！？」

思わず俺は声をあげてしまう。

「無傷ではないさ。防御するために魔力が削られてしまったからね」
外れた分を“％”で聞いたら絶望しそなくらいだろうなどうせ。

「3つ目の魔法で隙をつけたと思ったんだけどなあ…」

「低確率ではあるが可能性の一つとして考えていたからね。加えて言うならコウジュの戦い方は独創的だから仮想敵として何度か考えたことがある。現状、敵に回られて最も困る二人の内の一人なのでね…」

あと一人はマーテルですね分かります。

むう…。それにしても赤バラさんをそう簡単に出しぬけるわけないか。

ストラウスに依然話した“マドウーグにセッ^{テクニク}トできる魔法は2つ”
というのを逆手にとって、マドウーグに魔法をセッ^{テクニク}トするファンタ
シースターのやり方ではなく、ただの魔法発同媒体として本来存在
しない3つ目の魔法を使っただけだなあ…。これすら予想してる
とは…。

「ところで一つわからなかったのだが…」

俺が不満に唸っているとストラウスが質問してきた。

「何故爆発魔法が最後だったんだい？速度重視の射撃系統ならばあの狐達を私に近づける隙は生まれなかっただろうに。私としてはそのおかげで直接ダメージを受けなくて済んだが…」

い、痛いところを突いてくる。

「魔法発同媒体として、7つの遠隔操作をしながら無詠唱で発動できるのがそれだからだよ。こういう技術系はやっぱ身に合わなくてな。何とかできたのが漢の浪漫“自爆”だけだっただけの話だ」

「…そうか」

温かい目で見んなし。

ごほん、閑話休題（気を取り直して）

「さてさて、ストラウス。実は相談があるんだけど」

「何かな？」

「突然だけど、次で最後にしちゃおうかなっと思うんだけどどうだろう？」

「私は構わないが、スペルカードは後二枚では？」

「いやまあそうなんだけど、さっさと終わらせてどうせならお祭りに行きたいなあっと思い始めて」

さつきからお祭り独特の美味しそうな匂いがそこら中に漂っておりま
す。何故に日本的な縁日風なのかは『マーテル』だからで済むんだ
が、久しく味わっていないこの空気にぜひとも繰り出したいと主に
胃が申しております。

最初のもつと引っ張ってとか思ってたんだけど、どうもね。

「私は構わないよ？警備までの時間が空いた分だけ、ステラとお祭
りを回れるから、むしろ大歓迎だ」

さつきのマジで爆発してればよかったのに。

いくら原作からの憧れとはいえ、ステラとセットになって『あかば
ら』さんにジョブチェンジしてお笑い要員化した今のあなたには容

赦しません。

「割と甘党な俺でも軽く砂糖を吐きなくなっただけ、今は好都合だな」

俺は、斧槍を直し、新たに2枚のカードを構える。

対してストラウスは、自身の魔力を手の平上に魔力を集める。本来目に見えないはずの魔力が球状に形成されていく。術につき込むための魔力を貯めているのだ。俺がどう出ても、即座にその大魔力を適応した術式に流せるように。

これなら結構全力でいつでも大丈夫そうだな。

つてわけで、なかなかできなかった実験を行いたいと思います。いやあよかったよかった。マーテルは頑として実験相手になってくれなかったからさ。

俺は2枚目になるスペルカードを上空へ放り投げる。投げられたカードは一瞬光に包まれた後、3つのあるものへと形を変えた。

それを見てストラウスは、慌てて練っていた魔力に更に注ぎ込む。

当然といえば当然だ。俺はこの3つについても赤バラさんに教えてある。

それも特に危ないものシリーズの一部として。

「全身全霊で叩く!!」

模擬戦ではなくなった、ただの技の打ち合いだからこそできる大技。
ジャンプし、先に空中に在った3つのそのの元へと向かう。

そして、1つ、2つと手に持つ。

手に持つのは（残り一本も）巨大なハンマーだ。

ゲーム内分類としては斧系アックスの中で“クラッシュ”シリーズの3つだ。
見た目は、黄金色の土台にクリスタルの打撃部位という構成で、それも全体的に巨大でそれぞれ少しずつ違う。

そして保有する概念もそれぞれ違いがある。

「1つ!!」

右手の『ノヴァクラッシュ』を投げつける。

これという概念は無いが、それでもあまりあるその威力をぶつけんとストラウスに迫る。

「2つ!!!!」

続いて左手の『ガイアクラッシュ』を投げつける。

“大地を歪めるほどの破壊力を生み出す”という概念を持つそれを。

side:ブリジット

「■■■■■■■■■■——っ!!!!!!!!!!」

私のトラウマが…蘇える…。

ストラウスとコウジユの模擬戦は数km離れた位置で行われている。その為にマールテルは幻影魔法の応用とやらで空中に戦闘状況を映し出している。

しかし、それがなくとも目視が可能となった現在のコウジユの黒い姿。

完全獣化…だったか…？

闇に染まった空へ向かい吼えるコウジユは今にも月を喰らってしまえそうな大きさだ。

「ああ、頭痛が痛い…」

コウジユの今の姿を見るだけであの恐怖が思考をかすめる。けもけももふもふと言いながら迫ってくる獣神教信者共の姿が…。わかるか？その恐怖が。

「もっ…っ、いけない…」

このままでは頭がおかしくなりそうな為、思考をそういえば…と、無理矢理に変える。

コウジュの今の姿を見るのは初めてになる。

大型犬くらいのサイズでは何度か見たことがある。城下の見回りを何故かその姿でしていたからな。

今思い出してもあの大きさでは神の威厳など欠片もなかったな。

しかしさすがに今の、城程の大きさにもなると神であることを認めざるを得ない。

ん？ああ、私は実を言うとコウジュが神であることを理解はしても納得はしていなかったのだ。今の今までな。むしろマーテルの方がそれらしく感じた位だった。

だが――。

『■■■■――！■■■■ツ――！！！！！！』

すぐそこに映し出されている巨獣は、まさしく獣神であろうと言える。

ふるわれる爪。

噛み砕くための顎。あぎと

破壊力すら持つ咆哮。

空間を支配下に置いていたのではと思える現象の数々。

そこまで考えて一つ疑問を持つ。

「何故ストラウスはあのコウジユと普通に戦えているのだろうか？」

いや、ストラウスだからと言ってしまえばそれまでだが……。はたして自分があの場合に居たとしたら対処できるだろうか？そこまで考えでずぐさま首を振る。当然無理だ。そもそも私は広域殲滅などの大威力攻撃は苦手だ。

再び映像へ目を向け観戦を続ける。当然深く考えずにだ。

「楽しんでますか？」

そこへ話しかけてくる声。

「マーテルか。まあ楽しんでいるといえれば楽しんでいるな」

今日の祭りはマーテルが警備主任を務めている。普段はストラウスが私なのだが、主催者たるマーテルがかって出てくれたのだ。さらに言えば幾重もの結界を使っているらしく兵士一人一人の負担も大幅に少なくなっている。だからこそ私も警備をしながらではあるが観戦する事が出来ている。

「それはよかったです。では終わらせますね」

そう言うとマーテルは持っていた杖を空へ掲げ、何事かを呟いた。

次の瞬間、戦闘が行われている方向からすさまじいといしか言いようのない爆音と閃光がここまで届く。

映像に目をやるが砂煙で何も見えない。

『きゆう〜』

が、声だけは届いた。

同時に映像に文字が写しだされ、コウジュの敗北、ストラウスの勝利と出た。

いやいやいやいや、明らかに私の隣に居るマーテルが何かしたんだが。

この、隣で一仕事したといわんばかりの奴が。

「ん？ああ、言っておきますがコウジュの敗北は私のせいではないですよ？コウジュがフルビーストになった時点でコウジュの負けは決定していましたから」

その後続いた話を要約すると、コウジユの完全獣化は霊脈に接続して魔力を集める為、ルール2の“結界外への干渉”に抵触しているのだそうだ。ただし、ルール違反だからそのまま戦闘を止めては観客に悪いから戦闘にまぎれて無理矢理止めたそうだ。

「待て、ならなぜわざわざ私の前にわざわざ来た？」

「それはもちろん——」

「いや良い。聞かない方がましな気がする」

「残念です」

それだけ言うとマールテルはその場から転子して去った。

「あえて聞かなかったが、本当にあいつは何をしに来たんだ…」

最近思うようになった。人間はよくぞ胃薬を開発してくれたな、と。

s i d e o u t

s
i
d
e
:
?
?
?
?

「この国はあんな化け物を飼ってたのか!？」

人気の無い路地裏を走り、町の外へ向かう。

「何なんだよあの化け物狼はっ!？」

人目のない路地裏を走るのには当然理由がある。今は祭りで人ごみの中など当然走れるわけもなく、そうなつては離脱に遅れるから。そして、当然ながら見つかる訳にはいかないから。

しかし口に出さずにはいられない。聞いてくれるものなどこの国には居ない。それでも心を正常に保つためには必要のないことだった。

元々この国には違う目的で潜入するはずだった。それが変わったのは潜入のほんの直前。なにやら潜入先の国で突然祭りを行うことになったらしく、その中でもその祭りのメインイベントとして、かの『赤バラ』と『不死の獣姫』が模擬戦をするとのことだ。

そして潜入して見たのがあの化け物どうしの戦い。

あんなモノは存在してはいけない。

あれは人が生きていく上で必要なものだ。

今この身は恐怖に支配され、まともな考えを浮かべられる状況ではない。

だが、これだけは分かる。

このことを各国に伝えるのだ。そうすればこの国と仕方なく、同盟を結んでいるのである。う者達もこちら側へ付くだろう。

一分一秒もこの国には居たくないが、来た甲斐はあったといえるだろう。潜入するために人道的とはいえない事をしたが、あんな化け物どもを友と呼ぶような奴らだ。殺されて当然だろう。むしろ私たちの礎になれたのだ。これで神もあの者に温情を与えてくださるだろうし感謝してくれても良いくらいだ。

「ふう……」

一息つく。

祭りの喧騒ははるか後方になった。

化け物どもが戦っていた場所から離れる為に一度町を縦に突っ切る必要があったが無事に抜ける事が出来た。

後は道沿いに国へ戻り――。

「おやおや、どこへ行かれるのですか？」

振り返る。

そこに居たのはどこか浮世離れた美貌を持つ女性。

妖艶ではなく、どこか神聖さをもった美しさだ。

どこかで見た気がするが…、いや気のせいだろう。これほどの美貌を忘れるわけがない。

それよりも問いに答えねば怪しまれる。

「い、いえ、実は村に残してきた子どもが病気にかかってしまったそうで…」

状況と、見たこともない美貌を前にして少しもってしまったが、あらかじめ用意していた言い訳を口にする。

「おや、それは大変ですね」

「はは、まったくです」

実際には俺に子どもはいない。しかし、こういった際の為に演技を訓練してきたこともあり、そのおかげか目の前の女性は信じたようだ。

「それでは…」

女性に背を向け行こうとする。一刻も早くこの国を出たいのだ。あれほどの美貌、この場を離れるのは名残惜しいが脱出せねばならない。

「あ、そういえば一つだけお聞きしたい事があるのですが——」

一步を踏み出したところで改めて声をかけられた。

ここで振り切るには怪しすぎる。仕方なく俺は振り向き聞くことにした。

「どうかしましたか？」

急いでいますという表情をしつつも微笑見ながら話しかける。急いでるのは本当だが。

「いえ、ただ……」

「はい……」

もどかしい。さすがにここまで引つ張られると急いでいる私は怒っても良いだろう。

そう思い、声を出そうとしたら続きをやっと話した。

「先程の戦いを見てどうでした？特に獣の方」

何故そんな事を聞く？

訝しみながらも、早く終わらせる為に、不審ではない程度で答える。

「いやあ、あれは中々に見ものでしたなあ。双方ともに素晴らしかったですよ」

あんなものを嘘とはいえ褒めるのは反吐が出る。当然そんなものをおくびにも出しはしないがな。

「特にあの狼の方はコウジユ様の——」

そこから簡単に話していく。ある程度とはいえ前もって得ていた情報を織り交ぜ、どれもこれも俺が実際に感じたことではないが、虚実織り交ぜ話す。

話が終わり…。

「そうですか、狼ですか」

気づくと、目の前の美女は身の丈ほどもある杖を持っていた。

俺は慌ててバックステップをしてその場を離れようとするが――。

「あ、あれ…？」

いつの間にか俺は地面に倒れていた。意識は驚くほどにすっかりしている。しかし体は指一本動かせない。

ならばなぜ倒れた？

「ネズミさんネズミさん。いい事を教えてあげましょう」

いつの間にか倒れた俺のすぐそばに居る先程の女性。この女が何かをしたのは真実。

速く逃げなければと思う。しかし、指一本も動かせない状況でどうしようもない。

そんな俺に続きを話し始めた。

「実は、今日のお祭りの為にこの国には大規模な結界が幾つか設置されました」

なんだ、何が言いたい？

「ただ、結界とは言っても何かを防ぐためのものではありません。あ、あの2人の戦闘用フィールドに張っていたものは別ですよ？それでですね、国を覆っていた結界というのが大別すると三種あるんです。

1つ、この国の国民であるかどうか。これは前もって身体的な特徴等のデータ収集をしてあるのでそれに当てはまるかどうかで判断出来るようになっていきます。ただ、このお祭りは外部の商人達も来るので確実ではありません」

体温が急激に冷えていくのを感じる。

「2つ目、大体にですが結界内の人達がどういった感情を発しているか。普段でさえ何万という人々が住んでいますからね、一人一人何を考えているのかなんて調べるのは現実的ではありません。だから、感情を“色”で表せるようにしました。怒っているなら『赤』、泣きそうなら『青』、みたいな感じですね」

女性が杖を軽く振る。すると、地面に寝たままだった俺の身体が浮き上がり、女性と向き合う形になる。首を動かせない俺は自然と彼女と目を合わせる状態になる。

何も、何の感情も映さない瞳。目の前に俺が居るといつのにも、どこまでも空虚。

「あらあら、震えてどうしたんですか？

まあ良いでしょう。最後の3つ目についてですが、実は一番簡単なものです。人々の心の中からとあるキーワードを拾いあげること。何だと思います？ふふ、仕方ありませんヒントをあげましょう。先程闘っていた二人のうちの一人、大きな大きな獣に変身しましたよね？

あれ、実は“狐”なんです。顔は仮面が付いてますし、速すぎて中々見えませんでしたよね、けどあの遠吠えとか動き、大まかな見た目はどうも“狼”に見えちゃいます」

そこまで言うと、彼女は杖を握っていない方の手で俺の額に触れてきた。手は開けられていたので、どうしても俺の視界は防がれる。

俺の身体は、俺の意思に反して大きく震える。

触れるている手は温かい、しかし、その温かさが逆に俺を不安にさせる。そして前が見えないという恐怖がそれ助長させる。

「では最後に、改めて質問をさせていただきますしう。

この国の人間だと反応が出ているが、あの戦闘を見て恐怖と嫌悪感をその身に宿し、民の全員が知っているあの大獣を“狼”として認識してしまったあなたは――

――
だ あ れ ？
――

……。

……。

……。

s i d e o u t

side:マーテル

これで何匹目でしょうか…？

まあこちらとしては多いに越したことはありません。

多い分だけ利用法が増えます。

今回のこれは、はあ…。どうしてここまで人は残酷になれるのでしょうか。人間を着るとは正気の沙汰とは思えませんね。

先程からこんなヒト達ばかりです。魂の移植や、人体改造による骨格単位での変装。

「…っ」

ギリツと奥歯をかみしめる。今の件の二つほど前には、何も知らない子どもを親を人質に利用していた。当然処理は終わっているが…。

最近この国への、敵対国のアプローチに躊躇いがなくなってきたいます。

やはり――。

「どうだ？」

考えに集中していると声がかった。

「上々ですね。贄もそれなりの数が手に入りました」

「贄って…、まあ変わらんけどさ。それで、保護できた数は？」

「全体の二割にも…」

「まじかよ…。被害者は？」

「残り全てです」

「そう…か…」

「やはり計画を早める必要があるのでは？協力してくれる者も何名か見つけています。事が起こるのは恐らく3年以内なのでしょう？」

「そう…だな…」

ただ追い返すためではだめだった。同盟を持ちかけてもダメだった。力を見せてもダメだった。

もう来るところまで来ちゃった…。

そしてアレも数年以内に起こるのは確実…」

「やはりこの辺りが限界でしょうね」

「だな…。近い内に始めよう」

どれだけ反則的な力を持っていても、行える事には当然限界がある。

だからといってあきらめられる訳がない。

だから、母上は歩き続ける。

私もまた進む。

いつの日か笑えるように。

s i d e o u t

祭りが行われてからしばらくして、『夜の王国』内で不審な事件が
起こり始める。

——連続失踪事件——

被害者は既に二桁に登ろうかという程だ。

しかし未だ犯人は捕まってはいいない。

『夜の王国』は、昼は人間が、夜はヴァンパイアが、と一日を通して活動がある国であるのだ。

そして、さらに不可解な事がある。

目撃者が多数居るのだ。

中には隣を歩いていたという者も居る。

それでも犯人は未だ捕まらない。

その理由は、目撃した者が多数居るのに情報が少ないからだ。

目撃したものに対し、情報が少ないという矛盾。

少ない情報の中で、ただ一つ分かっていること。

それはどうやって人が消えるか。

その方法は――

――影が人を喰うというもの。

いかがでしたでしょうか？

いやあ、最初ぐだるにぐだってしまいました。

作者自重しろという言葉が聞こえるようです。

でも、実際はこれでも削った方なんです。

そのせいで余計ぐだったなんてことは…無いと…いいなあ…。

ともあれ、今回の話からは少々暗い話になっていくと思います。メイビー。

メイビーなのはだってコウジュだものという答えで皆さん納得していただけるとw

そういえば、模擬戦で使おうと思ったスペルカードでこういう案がありました。

祭典『葱の葱による葱の為の葱』

まあただ単にファンタシースター内の葱武器を2本に凝縮しただけなんですけどねww

ただ…

「まずいな…外見に反してこれはやりづらい。剣撃、魔法、長銃（という種類の中遠距離武器らしい）近づこうとも離れようとも攻撃方法がある。斬り合っている途中に杖やライフルに変えられては尚対処が難しい。救いは一本に一つの機能を持たせられないところだが、フェイクという可能性もある。そして剣の状態もまた厄介だ。見た目は葱である事から刃側が分からない。いや、恐らくだがそもそも刃は無く、振って斬ろうとした部分が刃となるのであるうな、切断力場とでも言えればいいか…」

などということをストックスさんに解析してほしかったのです。

え？知りませんでしたか？この二次小説は葱を見るとかつこよく見えるようになる作品なんですよ？私なんかスーパーで葱を買う時についつい下端を持って振りそうになっちゃいますからね。

とまあ戯言はさておき、また何を書こうとしていたのか忘れたのでww　ここらで失礼します。

感想や評価を頂けると作者は飛んで喜ぶのでぜひぜひお願いします。

では、読んでいただきありがとうございました。これからよろしく願います。

P・S・1

もうすぐF a t eのZ E R Oが始まりますね!!

とっても楽しみです。

その裏でコウジユ介入編を妄想して、いつもの番外編風なのを書いてみたりww

P・S・2

先週のマガジンでネギまを呼んだ方にしか分からないネタになりますが、コクイ様に頂いた感想を見て、コウジユ介入の魔法世界救済案がこうなってしまうのではというネタとしてちょこつと落書きをしました。『みてみん』様のk o uのページにあるので暇な方は良かったら見てやってください。

ほんとにちょこつとしたデフォキャラなんでクオリティは許して下さいあ……

『stage???…俺は…帰ってきた!!…』 FateZero 編 (前書き)

Fate/Zero

Zeroの一話を見て衝動的に書いてしまった…。

こんな夜中に何してんだろ…。

とりあえず、普段のことを考えたらかなり短いです。なんせ2ページですからww

だがしかしこの熱いぱとsry

ではどうぞ。

『stage???…俺は…帰ってきた!!…FateZero編』

「何で!!何で——」

誰も踏み入らないであろう山の中。

向き合うのは二人の少女。

あえて特徴を言うとするならば、二人とも“白”の少女。

かたや怒りの表情を、かたや苦笑気味に相手をなだめている。

「まーまー落ち着いてくれよ」

「落ち着けるわけないでしょ!!」

なんで——

なんで、サーヴァントがマスターを召喚してんのよ!!」

「やつちやったZE」

「やっちゃったじゃないわよ!!」というかなんで伸長縮んでるのよ
「!」

「まあまあ、やっぱり俺のマスターはあんたじゃないと思って思ったら
どうしてもね」

「っ…／＼。埋め合わせ、しなさいよ…」

「はいはい分かってますよお姫様。後ツンデレ乙」

「I a m t h e b o n e o f m y s w o r d —」

「ちよっ!?!」

行われるのは聖杯戦争。

魔術師同士の、神秘達の奪い合い。^{「ロシマイ」}

再び行われるのではなく、これは始まりの物語。^{ZERO}

だが少女達にとっては再びとなる参戦。

『矛盾』するが、それが彼女達の片方、2度目の『バーサーカー』を拝命した少女の専売特許。

最初はある願いを秘めた男が『バーサーカー』を召喚したことが始まりだった。

「あんたが俺のマスターか？」

「女の……子……」

「ふふ、ふはははは！とんだ道化よのう！無理矢理に魔術師となるためにこの三年死ぬ思いをした結果がこれじゃとはのう」

召喚主は間桐雁夜と名乗った。聖杯戦争を生み出した御三家が一つ、間桐家に生まれながら間桐家を出、だがとあることを切っ掛けにその間桐家に戻ってきた男。

男の願いはとある少女を救うことだった。

自身が嫌っていた“魔術”という物の生贄になってしまった少女を。自分では幸せにできないと身を引いた女性の子ども。その少女は自分の所為で、自分の代わりに、“魔術”に喰いものにされんとしていた。

男にはそれが我慢ならなかった。

「うつせえよてめえ。『一条祭り』の刑な。「ぬおおお！！？」……うつし、それで？間桐雁夜、あんたの願いはなんだ？あんたが引いたこの身は最高のカードだ。」

言え、その願い、幻想叶えてやるぜ現実にして」

男は言った。とある少女を救いたいのだと。

「ふーん、おｋだ。その程度容易い。ただし、俺のお願いも聞いてもらおうか」

召喚された少女は“ コウジユ ”と名乗った。

コウジユは男の願いを叶える為、一つの歴史を潰す。

容易くコウジユは男の願いを叶えてしまった。その犠牲となった自身の家の歴史と、それを代表する自身の父を喰らう事で。そこに何の感慨も浮かばない。ただ少女が救われたことのうれしさがその身を埋め尽くしていたから。

「さつてと、こっちは叶えた。今度はそっちの番だ」

男は何でも奉げるつもりであった。

少女を救えたその身には、それだけで満足であったからだ。

しかし――。

「うーん、ムリダナ。やっぱあんたクビな」

「というわけで、俺のHAPPY ENDをやる為には雁夜じゃ無理そうなんで、貴女様を呼びました」

正座をしながら涙目に事の顛末を語るコウジユ。

「で、その雁夜とかいうのはどうしたの？」

黒と白の双剣を構えるイリヤスフィール。

「屋敷で幼女に看病して貰ってます。魂削ってたっぽくてそう簡単に治せなかったんで」

「はあ、分かったわよ。私も興味が無い訳ではないし、手伝うわ」

諦めにも似た境地。何度も何度も味わってきた。でも嫌じゃない。

「けどさ、ごめんなイリヤ。俺が渡せるのはほんの少しの間の、泡沫の夢。俺があゝの二人を救うためには――」

「分かってる。でも、この世界の二人は、この世界の私の親よ。そんな事はしちやいけない。そして私の過去を変えるためにはあなたと出会った私が消えないといけない。私達はここを知りすぎているもの。それでも、それでも私はあゝの二人を救いたい。本当の意味では救えないかもしれない。ただの自己満足かもしれない。けど、だからって“この世界の私”まであんな思いをしなくちゃいけない道理なんて無いわ」

未来（過去）の自分と過去（今）変わってしまう事。それは、自身

が歩んできた道を否定することにつながる。

だからコウジユは謝った。しかしイリヤは言う、ただこの世界を救いたいと。

ならば後は簡単だ。突き進めば良い。

「そっか…、そうだな。んじゃやるか！」

「ええ、私だって正義の味方の末席に身を置く者だもの。救いに救ってやるわ！」

「「HAPPY ENDの為に……」」

こうして白き主従の参戦が決まった。

サーヴァント、マスター共に本来存在しないイレギュラー。

そんな異物が混ざった物語はもう誰にも分からない。

『stage???：俺は…帰ってきた!!：FateZero編』（後書き）

いかがでしたでしょう。

ほんとに突発的に書いたものでどうしようとかまったく考えてない話でした。

でもコウジユがここに参戦したらと考えずにはいらなかったのです!!

ツツコミ所しかないなこれww

とりあえず寝て起きたらこのよくわからない衝動も収まっているでしょうか。

では^^

P.S.

この話の続きという名の妄想で、何故かシュタインズ・ゲートの理論とかいつの間にかかなり考えてた。重症ですな、私。

いっそ罵ってください。このモフモフケモノ信者妄想野郎とww

『stages5:U・N・オーエンは彼女なのか?・・・innネギま(夜の王

ほんつとくに申し訳ありません!! >(――)<

長らくお待たせしました!!

すこし短めで、ぐだぐだですがともかくどうぞ!!

皆の期待に応え、皆の幸せを願い続ける事が出来るのは、ストラスが誰よりも強くて大きいからだと思うんです。

でも…、そんなストラスが私には疲れて見えたんです。

何でもできる神様を、誰も心配したり、その幸福をわざわざ願ったりしないように、誰にも幸せを願われない人は本当に幸せなんでしょうか…？

皆の幸せを願うばかりで誰からも幸せを願われないって、どんなに強くても大変じゃありませんか？

だから私はストラスの幸せを願う人になろうかなーと…。

といっても、実際に願うことしかできないんですけどね。

——ただ願う事だけは、私がどこに居ても、どうなってもできる事ですから。

私が死んでも魂はいつもストラスの幸せを。

どうかストラウスにはずっといい月がありますように…。

だから――。

――あなたに、どうか月の恩寵がありますように――

side：ブリジット

城の廊下を速足に歩きながら考える。

あの祭りの時から、この国はおかしくなった。

“影に喰われる”という事件の所為で、民は少しずつ減っている。
先程も一人…。

全兵を以ってしても未だ犯人の目星はついてはいない。今更ではあるが、外部の人間であるコウジュやマーテルにも助けを要請している。マーテルの方はどうやら魔法世界の方で立て込んでいるらしくあまりこちらへは来れないようだが、それでも十分な数を投入している。

しかしそれでも…。

『夜の王国』は領土として存外に狭い。城のある主都、あとは戦災被害に遭った為に援助をしている少数の村で構成されている。それともう、村はあと一つを除き消えてしまった。城下町で人が消える際と細部まで同じかは分らないが、似ている。忽然と消えるのだ。村があった場所に行っても、初めからそこに無かったかの如く消えている。

今丁度、コウジユには最後の村に向かつてもらっている。予感がするのだ、いや、皆が分かる事か。あの村ももうすぐに…。

いかん。常に最悪の状況を予想しておくのは必要な事だが、私的感情に影響してしまうのは良くない兆候だな。

一先ず、現時点で最悪の状況を作りだす要因となるステラを見に行くことにする。ステラがもしも消えてしまうと事だ。現状、事件の被害者に共通点らしきものはほとんど見つかっておらず、精々力の弱い者から消えていっているという事くらいだ。そしてステラはストラウスの妻ではあるがあくまでも元村人。さらに現在は元老院の一人であるヘイゼルバーク家の養子となることで箔をつけるために城外にある屋敷へ住まわされている。そしてタイミングの悪いことに…いや、だからこそなのか、ほぼ独り暮らし状態のステラはその身に子を宿している。当然ストラウスとの子だ。

周りの目が少なくなったことを良いことにストラウスめ…。

こほん、思考がずれた。

先程ステラがほぼ独り暮らしと言ったのは、屋敷（といっても小さなもの）に住むのはステラのみだからだ。大將軍の妻であるため警備は多いが、中に入るわけにはいかないため屋敷外で居る。メイド

位はと思うかもしれないが、ステラは生まれによるものが、気概ゆえにかメイドの世話をしようとする。メイドの変わりに仕事をする大將軍婦人…あり得ない…。

その様なこともあつて、母体に差し障りないように今の様な生活方式になつたわけだ。

元が村娘なだけもあつて不自由なく暮らしているようだが、今は妊娠中なため私かアーデルハイト、たまにコウジユやマーテルが様子を見に来ている。ストラウスは生まれてくる子どもの為にもと周辺各国との条約締結に忙しく、諸国を回っている。件の事件についても各国と情報交換等をしているようだ。他国もこの件に関して明日は我が身と恐怖しているようだ。

と、考え事をしている内にステラの屋敷に着いたようだ。

“ストラウスの妻”であるステラは気に食わない（実は嫌がらせをした事がある）が、ステラそのものは気に入っている。流石はストラウスが惚れ込んだ女と言つべきか。その心根には眩しさすら感じるものだ。

さて、今日もステラは身重の身でありながら訪れた私にお茶を入れようとするのだろうか？

マーテルの技術を幾らか学んだらしく美味しくはあるのだが自重してほしいものだ…。

ステラの好物も持ってきたし、もう一度その辺りをしっかりとゆっ

くりと話すでしょうか。

まったく放っておけないやつで困る。

その数時間後、ステラは例の事件の被害者となり、消える事となる。すぐ外に居た兵士は誰一人その事に気づくこと無く、忽然と姿がなくなつた。

s i d e o u t

s i d e : コウジユ

無限十字のセイバーハーゲン。

万の術と万の武器を持ち、その交差する所に無限の力を生み出す。故に無限十字。

その心に私心は無く、ただ、人の世に平和をもたらす為に魔と対峙し、そのことごとくを退けてきた。数多くの者がその下へ馳せ参じ、弟子として育てられ、ただただ人の世のために尽くしてきた。

そしてただ一人、俺がこの世界に来てから人間として俺を殺す事が出来た人物。

何故に今突然こんな説明を始めたか。答えは簡単――。

――今日の前に居るからです。

「厄介な…、そなたは何度殺せば良いのだ？」

まあ、ぶっちゃけピンチってやつですね。

「えっと、俺が死にたくなるくらい」

「ならば――！」

「むきゅ！？」

はいまた死亡。

はあ、この圧殺式捕縛陣とかいうのやめてほしい。爆縮って言えばいいのか？結界内のベクトルを全て内側に圧縮されるんだけど、食らうたびにペツチャン娘（苦笑）

これじゃあまたシリアス詐欺だなんて言われるよ…。

そんなメタ思考を、何回目か忘れたかすれゆく思考の中で思いつつ、

どうしてこうなったのかちよつと前の事を思い出す。

始まりはそう、あの祭りの後、『ヴァンパイア十字界』についてどう開始するかを最終確認しつつ、各村に行つてある事をしていつてる帰りだった。

「うであゝ、この時代なんでこんなに村と村の距離が離れてんの？馬鹿なの？死ぬの？主に俺が…」

“ 幸せ夜の国計画（仮） ” を行うために、俺は今『夜の国』内の様々な村を回っている。回っていた、の方が正しいかな。なんせ最後の村だ。

『ヴァンパイア十字界』において、悲劇を生み出す原因となるのが“ ヴァンパイア ” の持つ強大な力だ。マナとの親和性がもたらす恩恵が人間の恐怖、畏怖、妬み、様々な悪感情を生み、“ ヴァンパイア ” と “ 人間 ” との間に亀裂をもたらししている。 “ 人間 ” としての “ ヒト ” 、つまり獣人などの亜人からは “ ヴァンパイア ” という種族は恐れられていないからだ。つまり、 “ 力 ” が “ 悪 ” となっているのが現状なわけだ。

そんなヴァンパイアの種族の中に、更に強大な力をもつ者が生まれた。それが赤バラこと “ ローズレッド・ストラウス ” 。

ストラウスの存在は、『夜の国』だけでなく、技術の進歩等で周辺各国にもその恩恵をもたらしている。しかし、“ヴァンパイア”と“人間”の溝は開いてしまった。爆弾のスイッチをどれだけ平和主義者な人物が持つていようとその存在そのものが恐怖をもたらすという事なのだろう。

え？俺？

俺はまあ、各国からなんというか、触らぬ神にたたりなしみたいな？名前を言っちゃいけないあの人みたいなの？扱いを受けているらしい。俺はちよつと前に戦線を完全に離れたからもう忘れたい存在らしい。なんでだろうね？

ともかく、『ヴァンパイア十字界』の悲劇の根本はここにある。それを回避するための計画が“幸せ夜の国計画（仮）”ってわけだ。

ただ、この計画を遂行するためには一人では無理だ。まず、マーテルの力は確実に居るし、魔法世界側にも救援を求めている。一応あちら側には既に話を通っているんだが、こちら側の協力があまり芳しくない。その理由が、王国内にある村々の距離だ。幸いにも王国そのものの領地がそれほど大きくないが、それでも、俺が計画の要としている術の発動条件を満たす事が出来ない。いや、まあこれだけ聞いてもなんのこっちゃって感じだろうけど、この計画は内密に進めないといけないんで、ゆるしてくりやれ？

…わっち様のマネは俺にやあ無理だな。今の声的にはいけるんだろうけど、中の人的にね。

「っと、ここか。ではでは最後の布石を用意するのでしょうか」

・ ・ ・

「——という訳なんです…」

「ふむ…、しかしのう…。正直に言つてその申し出は嬉しい。じゃが、わしらはここに住んでおる。ここで生まれ、ここで育ち、そしてここで死ぬ。先祖代々の、受け継がれてきた土地なのじゃ。いきなりそう言われてものう…」

「大丈夫です！！えつとですな——」

あれ？回想必要なかったかね？だって後は、目的の村行つて、その帰り道にセイバーハーゲンさんに待ち伏せされて、戦闘後、連続あぼん状態（今ここ）。

「というか、帰りたい…」

「なに…？」

おっと、口に出ていたようだ。

けど、そう考えてもおかしくはないと思う。いくら殺されても再生するとはいつでも、痛いのは痛いんだからさ。ドMじゃない俺はこんなところさとおさらばしたいとです。

「今更ですが、何で俺は高何回も殺されてるんでせう？あれですか、マリアっちはドSさんですか？」

言うの忘れてたけど、この人間側のチートさんの本名はマリア・セイバーハーゲンさん（略してセイハさん）。えらく可愛い名前ですがそれもそのはず、実は女性なのです。原作では顔の描写は無かつたけど、さっき一戦やらかした時にいつもの西洋鎧にマント、鎧兜という状態をドレスブレイクしちゃいました…。

ちよつとボロボロになった銀髪（三つ編み）ワルキューレなうな状態のセイハさん。

え？誰この美人さんみたいなの。

「マリ……、一先ず言っておくがそのような特殊性癖を持った覚えはない。そして、そなたにその様な呼称をされる云われもない」

「ふふん」まあまあ良いじゃないのさ。

ところで、なんでここに？」

最後の村に来るのは突然決まった事なのに。内部に入り込んでるの逃してたかな？いや、マーテルに限ってそれは無いよな。俺が何かへまをやらかしたか？

「しらじらしいな。件の犯人はそなたであろう？」

おや、ばれたか。やっぱへまったかね？

でもまあとりあえずとぼけてみるかな。根拠を知りたいし。

「さてさて何のことさね？」

「民を喰らったのは貴様の影であろう！！」

うおっと、どこかで見られたかな。何人かは直接俺が出向いてたしな。

「見られてたか。けどそれで？あんたには俺を殺せても消すことはできないぜ？ストラウスでも命と引き換えにできるかどうかってところかね？」

「侮るな！この身を地獄の業火に飛び込ませてでも貴様の存在を消し去ってくれる！！」

再び圧殺式捕縛陣を発動される。けど、もうくらうのは嫌なんで、適当にシールドを呼び出し、ジャストガードする。剣等ではなく、シールドを使つてのジャストガードはダメージ無効プラス、ダメージを相手に与える。この場合は陣そのものにダメージが行き――。

「くっ！？」

パリンツとガラスが割れるような音とともに壊れた。

「はあ……」

思わずため息が出る。正直に言ってやりにくいんだこの人。

いや、見た目の話じゃないですよ？確かに元男として美人さんに攻撃しにくいけどさ。ちなみにイケ面は10割増しで攻撃します。年齢〓彼女居ない歴（万単位）なめんな！

じゃなくて、セイハさんってさ、エミヤシロウにそっくりなんだよ。向こうは一人で、こっちは弟子が居てって違いはあるけどさ、多数の為に少数を切り捨てられる、そういう人なんだよ。少しでも多くのヒトを救えるなら、何をしようともその志を貫く。

そこに私心は無く、ただただ愚直といえるほどまでに誰かを…。

けど俺は、その生き方は許せない。誰かの人生を否定できるほど高尚な生き方をしてきた訳じゃない。それでも、その生き方は駄目だと思う。誰かを救おうってのはすごい良い事なんだろう。俺もそうしたいし、そうありたい。でも、誰かを犠牲にした平和は俺には到底HAPPY ENDだとは感じられない。俺がただ傲慢で、夢見てるだけで、ただ年月を経ただけのガキなのかもしれない。それでも俺は終わりよければすべて良しなんていやだ。

あ、でも今のは罪を犯した身だと思われてるから何言っても意味は無いからww

とりあえず、最終確認だけしとこつと。

「正直言つてさ。こっちから人を攻撃した事ってなかったような気がするんだけど？」

「大いなる力はそれだけで脅威だ。その力はわずかな弾みで世界を貫く。罪を犯した貴様ならばなおさらだ！！」

「俺はともかくスト劳斯が居なくなったら、次に力を持つのはあんただぜ？あんたの理論で行くと…」

マールテルは表舞台に出た事無いから、必然的にスト劳斯、俺と来て、セイハさんになる訳だが――。

「自ら命を絶つ覚悟なぞとうに出来ている。平和の世に力はいらぬ。新たな戦を呼ぶ前に消えるが道理」

これですよ…。

というか、どこぞの“立派な魔法使いさん”に聞かせてやりたいもんだよ。まだこの時代には居ないみたいだけど…。

はあ、“大いなる力には大いなる責任がある”だったっけ、某蜘蛛男さんの叔父さんが言ってたのは。セイハさんはまさしくそれを体現してるわけだけど、もうちょっと頭を柔らかくしてくれたら良いのにね。

原作でステラも言ってたっけど、セイハさんも赤バラさんも同じ平和を願ってるのにいがみ合っているのは悲しい事だ。大きな力を持つ二人が協力したらもっと平和になるはずなのにつてのは、まさしくその通りだと思うね。

皆でHAPPYになれりゃあそれが一番なのにさ。

でも…、もうその段階では無くなってしまったんだよね…。

悲しいかな、俺の作戦はもう始まってるし、セイハさんの意思は固すぎてどうしようもない。理由が自分に無い人を説得する力量を俺はそもそも持ってない。他人任せにした言葉なんて軽くて吹いたら飛んじまうだろうし。

作戦を既に始め、セイハさんをどうするかも決めた身でありながら未だに悩んでしまう。これで良いのだろうか。頭脳チートさん……孔明とか、どこぞのシスコン魔王とか、新世界の神＋その相手とかうちの娘とか、何であーも簡単にすぽぽーんと考えが浮かぶのかね。あれか？脳の代わりにスパコンでも入ってるのか？

…ロボ孔明を想像しちまったよ……。『イマデス！！』みたいな。クロマテ○高校のあのドラム缶みたいなのがベースなのはまあ、余談だな。

『母上まだでしょうか？こちらの準備は終わりました。決行可能です』

現状のめんどくささ（身から出た錆び）に思わずトリップしていたらマーターから念話が届く。

『あいよ。こっちはセイバーハーゲンが向こうから接触してきたんですぐに釣^つって戻るよー』

釣るつてのは、作戦にセイハさんが必要だからだ。人間側の要は目の前のこの人だからな。この人さえどうにかしちまえば。

『じつまできてへマしないでくださいね』

皆さん念話でまで毒を吐く娘をどうかしてくだしあ……

ごほん、トリップしてて遅れたらまた言われるしさっさと終わらせるか。

「さつてと、無限十字のセイバーハーゲン。改めて聞くけど、この俺をどうする?」

俺は聞きながらスペルカードを一枚出し、構える。

「当然、そなたには滅びの運命しかありえぬっ!!」

セイハさんはそれと同時に術の媒体である短剣を幾本も投げ
てくる。

俺はそれをセイ八さんに向かって前へ出ることで避け、セイ八さん
に持っていたカードを投げつける。

——カッ！！！！——

「くっ！！」

[illegible]

「あゝばよー!!とつつあゝん!!」

とりあえず、今は逃げるとしようww

セイ八さんに背を向け走って逃走する。

混沌『百猫夜行』

ランダムで召喚に応じてくれた猫の英雄やそれに類する者たちを召喚できる。制限時間は30秒。たまに黒レン、白レンが混ざってたり、無かったり。

『ちよっとー!!いきなり何なのよ!?!』

後ろで氷が割れるような音がしたような気がするけど気のせいだろうな。うん。

side out

side:ブリジット

ステラが消えた…。

ほんの、数時間前に会ったのに…。共に時間を過ごしたというのに…。

今までの事件は全て外で起こっていた。だからと言って油断していた訳ではない。屋敷外の兵は国内でも精鋭中の精鋭だった。しかし、兵は物音にも、気配にも気付けなかった。

現在全ての兵をステラの搜索に当てているが…。

私自身も全魔力と霊力を捜査術式に回している。だが一向に進まない!!!

「忌々しいっ!!」

なんと一体たらくだ!!!私は、私はストラウスにステラを任せられていたのではないのか!!!?

「將軍補佐!!」

「なんだ!!」

自分らしくもない。伝令を持ってきただけの兵に強く当たるような物言いをしてしまう。

それでも気にせず、否、気にする余裕もないのか切れた息を整える事もせずに叫ぶように告げる。

「国が！！国が闇に吞まれています！！！」

今日は、次から次へと何なんだ！！？

s i d e o u t

いかがでしたでしょうか？

ほんとうに申し訳ないです。かなりお待たせした上に、いつにもまして見事にぐだぐだorz

スランプという言葉が私が使うのもおかしいと思いますが、原作の雰囲気とかをうまく出せないうえに、どう繋げていくのかかなり悩みました。

大まかな流れは決まっていたのですが、そこまでの道中をどう肉付けするか、そしてテンポ的な意味でどう構成するか…。

かなり悩んだ結果、恐らく次回で夜の王国編終了と相成ると思います。そして次次回からはエヴァ編。たぶんそれもちょいと過ぎて一気にアラ・ルブラ編に行くことになると思います。

ヴァンパイア十字界が好きでクロスさせていただきましたが、締め部分を上手く盛り上げていけないと思い、シンブルにテンポを優先しようと考えました。あの感動を上手く伝える事が出来れば、そして少しでも原作に興味を持っていただければ、と思ったんですが、早まったのかもしれない。

ともかく、次話の解決編は半分ほど書けている状態なのですが、それもテンポよく進め、皆さんお楽しみのエヴァにやんに登場していただくと思います。

とはいえ、前から言っていたようなエヴァと十字界のヴァンパイア組との兼ね合いも十字界とクロスさせていただいた理由の一つでもありますので、ストラウスさん達はちよくちよく出てくる予定です。というか、コウジユが吞まれないように気をつけねば…。

こほん、長々と申し訳ありません。

あ、そういえばもう一つお詫びする事がありました。

シリアル詐欺申し訳ない…え？分かり切っていた事…？

…orz

以下、今期のアニメを見て妄想したNG集。まあ二作品ですが。

H×H

・ドキドキ二択クイズ？

「お前の母親と恋人が悪党に捕まり一人しか助けられない。どちらを選ぶ？」

「彼女居ない歴〓年齢のにヒトになんという質問を…orz はっ！？まさかそうやって精神力を削り…さすがハンター協会汚い」

「違っわー!!」

・ドキドキ二択クイズ？

「お前の娘と息子が誘拐され、どちらかしか取り戻せない。どちらを選ぶ？」

「えっと、どちらも助けない。むしろ犯人を助けます。うちの子達だったら絶対犯人ぶち殺すからな。広域空間攻撃でそこら一帯ぶっ飛ばしたり。というか捕まったのも絶対おとり捜査的な…犯人さん逃げてー超逃げてー」

シーキューブ

「呪うぞー！」

「喰らうぞー！」

ハンハンの方は今書いてる短編の方に移すかもしれませんが、妄想だけならいくらでも溢れますねww

他のやつでも自分でもやばいだろうという位に浮かんで浮かんでw

ベン・トーとか無駄にコウジユに似合う気がしますませんか？（笑）

うっし、妄想してテンション上げて、アラ・ルブラ編まで突っ走ろうー！！

F a t e / Z e r o も見たし、ホライゾンも、ベン・トー見たし、
一寝して続きをば！！

ああ、深夜だから読み返したら文章がよく分かん事になつとる
∴ o r z

ま、消しませんが！！w

ではでは今回は失礼します！！^^

文章についてのアドバイスや評価など、随時お待ちしております。
また次回もよろしく願いします。

P . S .

ホライゾンを見て、うお！？てゐっばいのが居る！？と驚いたのは
私だけではないはずと願っています。あのEDにも居るウサギのち
っちゃい子。髪長かったけど、前から見たら似てるよね？

『stages6：そして誰もいなくなるのか?・・・innネギま(夜の王国館

大変お待たせしました>(――)<

色々と急ぎ足な内容でグダグダになってしまっているとは思いますが、どうぞ――!

そこまで考えたところで、今まさに考えたことを裏付ける存在の聲が響く。

『おやおやあ？そこに見えるはブリジットさんじゃないですか』

壁の向こうから山の様な大きさの獣が城下町へと足を踏み入れ、顔をこちらへ向けた。

「お前、そこで何をしている…？」

頭では答えが出ている。だが心がそれを否定したいと言う。故の問い。

『答えは出てるだろう？それとも否定してほしいか？』

ギリツと、奥歯を噛む。

「その壁はお前が作り出しているのだな…？」

『Y e s だ』

「行方不明事件の影のようなもの…というのもそれか…？」

『それもY e s 』

握りしめていた拳をゆっくりと開き、自身の愛剣たるレイピアに手をかける。

「最後だ…。この国をどうするつもりだ…？」

『^{「じやうじやう」}尽く喰らわせてもらつよ』

「きさまああああ！……！！」

私の記憶は、そこで黒い何かに呑みこまれ、途切れた。

> side out <

> side : ストラウス <

「これは……」

思考を制御しきれず、思わず声が出てしまう。

条約締結と、行方不明事件の情報共有を行う為に各国へと赴いていた。事件の事もあり、条約の方はあまり芳しくなく『夜の国』に係することで事件被害が及ばぬよう内密の不干渉条約に留まらざるをえなかったが…、重要なのはそこではない。

情報の“提供”ではなく“共有”である部分。

事件は全て夜の国内で起きている。しかし、共有した情報の中で解った事がある。提供国は元敵国（厳密に言えばその属国であった小さな国）なのだが、どうやら行方不明事件で最初に被害にあったのは夜の国に敵対する国だったらしい。それも、我が国に潜入していた間諜のようだ。あの祭りの日から連絡が途切れ行方不明、その数日後に帰ってはきたが夜の国に潜入していた事すら忘れていたらしい。

そこで思考は一つの答えを導き出した。否、可能性の一つとしてあったものが答えであると分かってしまった。

“ 答え ” に辿り着いた私は、相對していた代表に感謝と謝罪を行い、すぐさま自国へと飛んだ。

悲しい。とても悲しい事実を抱えたまま。

そして、帰国した私の前に広がっていた光景を見た結果が先の言葉だ。

「 遅かったか… 」

眼前に広がる光景。それは何も無いという、なくてはならないものが無いおかしいもの。

地面ごとえぐり取られたかのように、『夜の王国』がある筈の場所にはただくだ荒野があるのみとなっている。

そして、えぐれた地面の向こうには――。

『遅かったじゃん。ストラウス』

——黒い巨獣の姿をしたコウジュ。

『あややあ？反応なし？』

「何を聞けばいいと？」

『国はどこへ行ったのか、民は、王は、ブリジットやアーデは——』

そこでコウジュは一度区切り、その大きな顎をにやりと歪ませて言う。

『ステラは——どこへ行ったのか…とか？』

「…」

わずかにだが、握っていた手に力を入れてしまう。そして、すぐさま平常へと戻し、ただ目の前の獣へと目を向ける。

『おんや？えらく冷静だねえ？』

「ふむ、やはりコウジュは詰めが甘いな。その挑発は少し安すぎる」

『ん…？まさか…』

私はそれにただ頷く。

『さすがはつてところか…ちつ、どこかでミスったか』

「それで、私は最後の役者かな？」

『いんや、つと、言つてたら来たな』

そう言いながら私の後方へと視線をずらすコウジユ。後ろからは何かが、駆けてくるような音が幾つも聞こえてくる。それは群であるために、地を揺らすかの如くの大きさだ。

「そついうことが…」

どうやらコウジユはどこまでも私を悲しませたいらしい。

「では、役者も揃ったところで道化は踊らせてもらつとしよう」

『遊んでくれるのかい？』

「給金でも出るのかな？」

『コイン一枚』

「一枚ではほとんど何も買えないな」

『あんたがコンティニューできないのさ！…！』

コウジユ、何故私に話さなかった…？

私は頼るに値しなかったか？

まあ良い。少し、ほんの少しだけ、悲しみと怒りが混ざったこの気持ちるぶつけさせてもらおう。

> s i d e o u t <

> s i d e : マーテル <

いやいや、母上エ…。まだこの時代にゲーム的な意味でのコンティニューはまだありませんよ…。

つと、はいはい良い子の皆さん。今晚のスーパーマーテルタイムですよ。

お久しぶりですね。

それはどうでもいいので置いておいて、今私は夜の王国があった場所から数キロ離れた岩陰に隠れています。もちろん結界等もつかってますよ。祭りの時の映像魔法もあるので大迫力の覗き見してます。

そんな私から離れたところでは怪獣大戦争もかくやといった戦闘が行われています。さらにそこから少し離れた場所（丁度私の反対側）では、かの無限十字さんが弟子やらなんやら込みの軍を率いて待機してらっしゃいます。

計画通り（キリッ　　というやつですね。

というわけで“なぜなにナデシコ”のごとく説明しましょう。

始まりはそう。母上が『ヴァンパイア十字界』の悲劇をどう回避するかを考えていたときに思いついた一言に端^{たん}を發します。『そうか、相手が居なけりや何も起こりようがないじゃないか』という一言です。

どこからそんな発想が出てくるのやら、国^{くに}ごと居なくなってしまうおうなんて。ぶっちゃけ夜逃げそのものですね？

しかしながら、ただ逃げてしまったのでは意味がありません。相手側の理論は、“どれだけ大いなる力を持つ者の心が澄んでいようともただ居るだけで恐怖となりえる”ですからね。逃げたと分かっても追いかけてくる可能性や何かしらの呪いといった対策を講じられる可能性があります。それでは意味が無い。

だから一芝居打つ事になりました。

やる事は簡単です。国をあえて滅ぼし、そして自身も死ぬ。最後の最後に自爆して後には何も残らない…と見せかけての大規模転移。

それと、これは上手く行けばですが――。

『俺のターン！！破滅のブラッドスクリーム！！！！！！！！！！』

「はぁッ！！！！！！！！！！」

あ、丁度やってますね。

今は、母上がプレスという名の砲撃をストラウスに撃つと見せ掛けて、その後方に居る無限十字軍を狙いました。そしてそれをストラウスが防ぐ。

悲劇の原因の一つである種族的な遺恨を『ヴァンパイア』という種から取り除くためのモノです。

強大な力に対する恐怖も、自身を守るために使われたのならば薄めざるをえないでしょう。

「ッ！！！！」

『グルア！？』

つてああ、母上が…。

ストラウスが放った、魔力を込めた蹴りで母上が吹き飛ばされてしまいました。その間に肩で息をしながらのストラウスが、今にも突撃を敢行しそうな無限十字軍へと近づく。

…芝居とはいえ母上のお顔を蹴りつけるなど…。なんという羨ま…
けしからん事を…。

「全軍！！！！」

「待て！！」

「何のつもりだ…？」

「“アレ”は私が相手をする」

「敵討ちだとも言うのか？しかし此方が従う理由——」

「違う」

「…何？」

「頼みがある。全てが全て、私心が無いとは決して言えないが今は軍の人間としての依頼だ」

「…聞こう」

ストラウスの依頼は、自分が力の限り母上にダメージを与えるから最後に全力を以ってとどめをさしてほしいというもの。追加情報として、実は母上は命をストックしているだけで、決して不老不死ではない。自分が何とか削るから後は頼む。そこまでで自分の限界が来るだろう、と。普通に嘘ブラフですがね。

しかし実際のところを知らない無限十字は、その言葉に現状ではそれが得策と判断したのか勤苦ことを決めたようです。

『——っ！——！』

「っ！？」

戻ってきた母上がストラウスへ巨大な爪をふるい、再び熾烈な闘争

が始まった。

『宴はこれからだ。』

お楽しみはこれからだ!!

さあ!!

H u r r y!!

H u r r y!!!!

H u r r y!!!!!!!!!!

それにしても、さすがはといひましようか……。あの様子からして、ストラウスはこちら側の思惑に全て気づいて演技に付き合ってた下さっているようですね。…当然といえば当然でしょうかね。母上は完璧に作戦をこなせてきたと思っている部分がありました。そもそもこの作戦自体が穴だらけなのですが……。先程のストラウスから無限十字への依頼もその一つです。母上は無限十字に会った時に色々とヒントという名の誘導を行ったようですが、気づいたストラウスがフオローを行ってくださいだったようですね。母上はストラウスが国に仕えてる身だしある意味裏切らせる事になる作戦に参入してもらうのはと言っていました。が結局こうなってしまうでしたね。残念ながら予想どおりです。全部まるっと。必死に頑張っている母上を見ているとあまりにも可愛くて言い出しづらく……。当然その分は裏で私がフオローしましたよ。苦でもありませんし。

可愛い正義という言葉がありますが、考えた人は天才ですね。

こほん…。

『GRRRAAAA!!!』

「もう少し、お淑やかにと、お願いしたいところだ、な!!」

ふむ、そろそろ終盤でしょうか。

では私も己の役目を果たすしましょう。え？見に来てただけじゃなかったんだな、ですか？

…失敬な。

それはそれ、これはこれです（キリッ

私の役目は母上の転移術式の補助です。転移したとは悟られないように消滅したように見せなければなりませんから。あと、母上ご希望の呪いも…ですね。

『G R A A ! ! ? 』

「今だ!!!私が押さえている間に!!!」

「発動!!!」

『ただではやられん!!!』

はいはい、こっちも行きますよつと。

side out

side:コウジユ

闇を凝縮したような影の塊から、自身の巨体と、ぼろぼろのストラウスを引きずり出す。場所は、予定していたとある場所の草原だ。最後に受けたセイバーハーゲンさんの爆縮式のえぐい結界（それも今まで以上に）の所為で半死半生の身をヒトの状態に戻し、一息つく。

いやあ、こうも上手くいくとはね！！俺の死んだふり作戦大成功！！俺ってひょっとして俳優になれる？

「それで、そろそろ説明を願っても良いかな？正直に言うと、事を急ぎすぎたのではと思うのだが…」

転位と同時にヒトの姿に戻った俺の横に、満身創痍のストラウスが来る。演技に迫力が出るように結構マジで戦闘^{バトッ}しちゃったからか、赤バラさんが今にも死にそうだ。とりあえず回復回復！

そこからは説明タイム。

まず、このままだとヴァンパイアと人間の間に異種族戦争が起きていただろうこと。その原因としてストラウスの特異体質が関係する事。

「体質？」

「そう、それも喜ばしくも悲しい…な」

ここで改めて『ヴァンパイア十字界』の悲劇について纏めてみる。

原作の悲劇はいくつもの事象が重なった結果引き起こされたものだが、何度目になるかは分からないが根本的な原因は“違う”という一点に集約される。

そこから、ストラウスという“ヴァンパイア”の中でも格別の存在が生まれた事で力の差に恐怖を持たれるようになる。それでも、誰よりも平和を願うストラウスは最低限の国土さえあればと他国に有利になるように幾つもの国と同盟を結ぼうと努力した。やがてその努力は実る。だが、絶え止まぬ努力すら人類には恐怖として映った。驚異的なスピードに、頭脳に、怪しげな力を使って洗脳したのではというものも居れば、権力が脅かされる事を恐怖する者も居る。そして排除しようとする。それを防ぐ。だけど“夜の国”は小国だ。同盟があるとはいえ、内容は最低限の領土を守るための不可侵条約。貿易取引はあるにせよ侵略防衛等には不干渉としてあるため、自国の民だけで敵対国から守らなくてはならない。結果、その少数精鋭は新たな恐怖を生む。恐怖は恐怖を生み、繰り返され…。それでもストラウスは諦めなかった。

いたちごっこは繰り返されたままだったが、やがてストラウスはステラに出会った。守るものが増えた。夜の国、親しき者達、民や、ステラ、そしてステラのお腹の中に居る我が子。

「ストラウスにはさ、色々俺の事を話してたけど一つだけ絶対に言わないようにしてた事がある」

「それは？」

「俺は、大まかにだけど、この先どうなるかを知ってるんだ。まあ一つの可能性にすぎないんだけどさ」

「…そうか」

反応薄くない？

あれ？未来予知って…まあ原作知ってるただけど、『…そうか』で済ませられる内容だっけ？二次小説とかではかなりのアドバンテージだった気がするんだけど。というか前のFate世界でそうだった気がするんだけど？

「あの、軽いね？」

「いや、決して軽くはないさ。ただ、私が知らない私の事を知っているというのだから可能性は限られてくる。未来予知、神の力…。ふむ、コウジユの場合神といわれるより未来予知の方が説得力があると思わないか？」

あれ、これって馬鹿にされてる？

「なんか馬鹿にされた気がするんだけど」

「心配ないその通りだ」

「ちょ!?!」

「コウジユ、私は久しぶりに腹に据え兼ねている事がある」

「あ、あの、スト劳斯さん?なんでじりじり近寄って、ちょ!?!
何で頭持つ?!?痛い痛い!!俺UFOキャッチャーの商品ちゃう
から!!にや!!にやあぁっ!!!!!!」

・
・
・

「あう。なんばしよんね…。やばいつて、これ絶対脳割れて二つ
になってるよ」

「ふう…、何故私に言わなかった?いや、それがわたしに関わるこ
とか?」

俺の頭を離れたスト劳斯は俺の方を見ながら深く、かなーり深く
溜息をついた。

俺?頭痛んで押さえながら三角座りですよ。立てないっす。鳴っち
やいけない音とか聞こえるくらいの力加えられたし。めぎょっ!
て…。

「そうだよ。」

まず一つ目、スト劳斯は軍属だろ?王様もだけど、国ごと逃げる
なんて事をさせる訳にはいかなかったから、俺が勝手にやった」

「表面上だけそうすることもできただろうに…」

頭を押さえながらそう言うスト劳斯。

「ふ、二つ目!!」

ステラとその子が狙われていた。それも近日中だ。ただでさえ大いなる力を持つスト劳斯っていう存在が居るのにその力を引き継ぐであろう子どもまで生まれてしまう。そんな事を放ってはおけないってな」

「警備を…。それに意味はないか。所詮その場しのぎになってしまふな」

「続いて3つ目、ここからは俺が知っている未来の内容になるが、ステラと子どもを失ってしまったスト劳斯は失意のままに、だが自身の役目を全うしてアーデルハイトと婚儀を結び、異例の事ではあるが戦災を超えぬままに王に即位。さらなる発展を目指し、赤バラの豊饒時代とまで言われる繁栄が生まれた――」。

――だが、しばらくすると、ストラウスの事である事実が判明する」

「それが私の体質というものか」

「ああ、スト劳斯。あんたはヴァンパイアでありながら“太陽”を生まれつき克服している。ヴァンパイアとして次なる進化を遂げてる訳さね」

「何…？その様な事が…」

「事実だ。けど知らなくて当然だろうさ。誰が好き好んで瞬く間に自身を灰へと追いやる日の元へといくものか」

「しかしそれが知れ渡ってしまう…と…？」

「ああ…」。

ストラウスは、“確かに自分は強大な力を持っているかもしれない。しかし、私とてヴァンパイアの身に過ぎない。太陽の元へ出れば瞬く間に——” って人間側と同盟を結ぶ際に昼は須らく人間が支配する時間だと証明しようとしてな」

「それは…」

「他国が不可侵条約とはいえ譲歩してくれた最大の理由である、昼は人間が夜はヴァンパイアがという支配の住み分けが完全ではなくなる訳だ」

「だが、それならばまだ対処法があるだろう？ 元老院がそれに気がかぬ筈がない」

「気づいたさ」

方法はストラウスの処刑。少なくとも、ストラウスが居なくなれば昼と夜の住み分けはできる。

「当然ストラウスも王の最後の務めとしてその決定に従おうとした。元老院のお歴々も、国を守るためとはいえ王をその手に掛けるしかないことに最後まで嘆いていた。でもその事を納得できない者が居た」

「それは…？」

「アーデルハイトだよ。彼女は王女だから王となったストラウスの処刑を見なければならなかった。けどそんな事を静観出来るはずもなくその身に眠っていた莫大な魔力を解き放つてしまい、暴走する」

「それが、アーデルハイトの家庭教師をするときに魔力制御を熱心に行っていた理由か」

「ごほん！！暴走したアーデはこれまた厄介な魔力形質を持っていた。ストラウスなら“音”だったけど、アーデは“腐蝕”だった。それも、あらゆる物質から何から、日の光すら変質させてしまうほど強力な。“腐食の月光”と呼ばれ始めたそれはあまりにも人間の恐怖を掻き立てた。次第に人間の間でヴァンパイア狩りが始まるんだ」

「考える限り最悪の結果だな…。話を聞く限り私は体質上太陽を克服してただけかもしれないが、ステラは腐食を発現していたとはいえ“魔力”で日の光を克服してしまったという事は私が死んだだけではもう引き返せない。魔力さえあれば絶対の楔くさびと考えられていた日の光を克服できると知られたら、人類とヴァンパイア側で、どちらかが滅びるまでの戦が起こるのは必然」

そう、原作ではアーデが暴走した結果もたらされた被害と、日の光という楔の意味が薄くなった事に人間側は恐れ、あらゆるヴァンパイア、ダムピールを滅ぼそうとした。ただ、そうはならなかった。

「ストラウスは考えた。その悲しい戦争をどう回避すればいいか。そして思いついたのが、自身が両陣営の敵になる事。ヒトつてのは何か強大な敵がいたのなら手を取り合う事が出来るからな」

俺はそこからもヒントを得て今回の事に挑んだってわけだ。そういえばどこぞのシスコン魔王も似た事してたな。自身に恐怖を集めてさ。

「コウジユの場合はそれに加えて国そのものを移動させ、自身も討たれたように見せかけることで遺恨の対象を丸々無くしたという訳か」

「まあそう言う訳ですよ。おかげでなんかお腹いっぱいです。実際食べた訳じゃないんだけど、国とかを転移する目印に俺の一部でもある影をゲートにしたからか…なんか違和感が…」

「まだ取り込んだままなのか！？消化してはいないな！！！？早く出すんだ！！！」

「のあ！？揺らさ、ゆら、y:う、うえ、#\$%○x&——！！！」

思わず出してしまった…orz

「ってかさー、ストラウスは戦闘前の時点で犯人が俺だって目星付けてたみたいだけど何故に？」

俺、証拠とかできるかぎり消してきたと思うんだけど？」

「簡単な話だ。前にも言ったが、あつてほしくはない最悪の状況を想定して動いていた。そして皮肉にもその最悪の状況に近いものが一番しつくりと来てね。被害は“夜の国”内でのみ起こっており、対象は他国の者に始まり、夜の国内部の民へと移る。消えるのは夜

の国の者だけで外部の者は記憶を奪われるのみ。まるで選別だ。要らないものを排除し、その後に事を進めるといふね」

「それだけだと内部犯に見せ掛けただけかもしれないじゃんか」

それに対しストラウスは、また一つため息をつき、続ける。

「ヒントは幾つかあったが、外部犯にしてはあまりにも証拠が無すぎるし、この期に何か行おうというその敵国の動きもなかった」

え？俺の演技かなり無駄だったん？結構頑張ったのに……。演技とはいえブリジットさん怒らせちゃったよ！！

調子に乗っていた過去の自分を心中で殴る俺をさておき、ストラウスはそもそも……と続ける。

「最初の時点でコウジュが事件について何か知っているであろう事は勘づいていた」

「なんでさ！？

ちゃんと搜索にも加わったし、必死に探すフリしてたんですけど！！？」

「そこだ、そこがおかしい。

コウジュの性格からすれば必ず搜索はするだろうが、加わりはしない筈だ。某かの力を使い、体裁など気にせず^{なにがし}に各国を含め手当たり次第に探すだろう。情報上は生死も不明だから尚更ね」

あー、つまり俺が大人しくしてるから少なくともそこまでの事態ではないと考えたわけか。

やっぱり俺には“暗躍”ってもんが出来ないんだろうか？

……これ、毎回言ってる気がする…orz

「さすがにコウジユが大元の真犯人だと確信したのは先程だけだね。マーテルが計画し、コウジユはただの実行犯だと考えていた。おかげで、なんとか得た証拠すら裏があるのではと疑わずにはいられなかったんだが…」

ちよつと待てい!?

逆に言えば俺が真犯人なら納得できる証拠だつてか!?

「さつきから毒づきすぎやしませんかねい!?!」

「ハハハ、口撃^{くげき}がちゃんと通っていたようで嬉しいよ。さつきも言ったが私は少々怒っていてね。同時に悲しんでもいる。かれこれ長い付き合いだしね。少し裏切られた気分だったりする」

な、何故にジリジリと寄ってくるんでせうか? またUFOキャッチャーされるん!?

「頭はもうやめとくれ!?! って、ちよつ、何で耳!? や、やめ、みやああああ!?!?!?!?!?」

「申し訳ありませんでした」 > (_ _) <

「よろしい。さて——」

辺りを見回すスト劳斯。少し離れた部分にはとある事情により、出さざるを得なかった夜の国の城やら城下町やらの一式。人はあらかじめ別に転移させたんでここには居ない。

「——皆はどこに居るんだ？」

「ん？ああ、それならここから幾らか行ったところにある知り合いの国に居る筈だ」

「国……ということは、領地問題などは大丈夫なのか？」

「ん？まあ大丈夫大丈夫ー。ワンステージアンコール有りで何とかデキタカラー。ハハッ、シンパイシナクトモダイジウブダヨー」

「そ、そうか……」

おや、スト劳斯さんそんなひきつつた笑いしてどうしたん？

「ごほん、さて、今更ではあるがここが——」

「ああ、そう言えばまだ言ってなかったな。

ようこそ……！魔法世界へ……！」

side out

小話

「はッ!?!…ここは、どこだ…?」

「おや、目が覚めましたか?」

「マーテル、ここはどこだ? いやそれ以前に、貴様も!」

「ぶ、くくく…」

「な、何がおかしい!」

「いえね、今回の事なんですが——」

・
・
・

「ふむ、夜の国を守るためか…。とりあえずコウジユを殴ってくる事にする」

「ふふ、今回の事が全て演技だと聞いた時のブリジットの安堵した表情からして、母上に裏切られたと思った瞬間かなりシヨック受けてたんでしょうね。母上が夜の国を襲ったという事実を鮮明にするために細かなところでも演技してましたからね…。」

つと、カメラカメラ……」

どうでしたでしょうか？

『夜の王国編』ひとまずの終わりとなりました。すみません、原作を知らないと分からない部分やはしょった部分もあったりします。はしょったのはグダグダなのが更にグダグダになりそうだったので一度書いた部分とかで結構消したりして、今話になりました。

それにしてもあれですね。やはり私に『ヴァンパイア十字界』のクロスは早かった…orz

いつか、ヴァンパイア十字界がメインのモノでリベンジとかできたらいいと思います。

さて話は変わるんですが…。

えっとですね…。感想の事ですが、まるっきり否定される感想ってやっぱりダメージ大きいですね…。寝起きで読んだんで余計に、朝からダメージが…orz

ここで聞くべきことではないかもしれないとは思っていますが、そう言った感想をいただいたときってどう対応するべきなのでしょうかね。

私は基本へたれなんで返信せずにほったらかしにしちゃってます。今回の2件目なんですが、前のもです。やっぱり何かしら返信し

の方がいいんですかね。でもボキャブラリー少ないんで論破できるわけでもなし、悪態付くにも客観的に見て小学生かとツツコミを入れたくなるようなものしか出来ないでしょうし…。

お気に触った部分というのがTSの部分やら自己満足作品はいらな
いとかみたいなんですが、どう対応すれば…。

ひとまず、TS作品であるという事は元々書いてあったんで、自己満足作品注意を追加してみました。他には何をすべきでしょうか。これ以上は読まないようにしていただくしかないんですが…。それでも読む方にはツンデレとして対処するしかないですし…。

そもそもなんですけど、自己満足じゃない小説ってどう書けば…。私はプロでも何でもないその辺の一般ピーポーなんでその辺の線引きがよく分かりませぬ。アイデアならとお角、あれこれ他の方に逐一聞きながら書いたらそれはもう私が書いたものではありませんし…。

む、難しい…。

兎も角、今までもですが、私の書いたもので御気分を害してしまっていたのならば、深く謝罪申し上げます。

しかしながら、その自己満足作品ではありますが、自分では続けていくつもりです。私の思うように書いているので様々な意味でどうなるかは分かりませんが、どなたかのお暇つぶしを成し得たのなら幸いです。

すみません。いつものことながら長々と失礼しました。

どうぞこれからもよろしくお願いします。

さて次回！！皆様待望のネギまのロリBBA代表の登場であります。

ずばりタイトルは『金髪幼女の吸血鬼、バンソー娘』ではありません
ん』です。

ふふふ、本編が投稿されてすらないのにツツコミをしたくなった
ことでしょう。しかしそれが私クオリティ。

ではでは、今回はこの辺で！！

次回もよろしく願いします（＾－＾）ノシ

『Stage57：金髪少女の吸血鬼、バンソー娘―ではありません・・・in

一週間切ったよ！！頑張ったよ！！

いや、すいません。休みが出来たんでやっちゃっただけです。

では、さっそくどうぞ（＾・＾）

『Stage 57：金髪少女の吸血鬼、バンソー娘―ではありません・・・in

side：コウジュ

眠い…。なんというか、とにかく眠い…。俺は一人帰ってきた我が家たる宮殿の寝室に倒れこむ。

ストラウスを予定通りにこれから『夜の国』のお隣さんとなる『帝国』に連れて行き、あれこれした後眠気が一気に来たので後は若い者同士でと、多分そんな感じの事を言い残し、眼をしょぼしょぼさせながら宮殿へと移動した。戦闘、国へ住民を戻す、帝国の皇帝との会談の取り持ち、ステージ、アンコール、アンコール：etc…。

それにしてもほんと眠い…。。

なんでもかは大体察しが付いている。あれだよ、燃え尽き症候群つてやつ。自分でも思っただけ最近頑張りすぎたと思っただよ。

転移の魔法つてさ、結構しんどいんだよ。それも単位が村とか国じやん？いつだったか言っただけ俺って基本的に魔法を覚えにくいしさ。どこぞのT・T・Tみたいに詠唱できないとかじゃなくて学習能力的な意味で。生前はそこそこの大学には入れたわけだし、そんな頭が悪い訳ではないと思うんだけど、なんでかねー？KoujuはPSP02のビースト種だから種族特性上魔法とかに必要な俗に言うINT値、または精神力っていう特殊技能系の適性が低い。けど、PSP02iのデータ追加（転生特典ステータスポイント）のおかげでそういったのはあんまり関係無くなっただけだなあ。

んで、空間^{ゲート}転移魔法の話に戻るけど、『ネギま』でエヴァ吉とかフ
イトが使ってるやつなわけなんだけど、俺の場合、俺自身の影っ
ぽいのを媒体に術式を組まないといけないんで、独自に術式組んだ
けどそれがまた効率が悪い。一応影魔法のを流用してるんだけど、
俺の影って名状しがたい、よくわからいあものに変質してるからそ
れっぽい術式継ぎ足し継ぎ足して自分で使えるようにした。マー
テルに見せたら『それって…いえ、何もありません』とほほえまし
い顔で見られたんだが…何故に？

でもまあとりあえず、めっちゃ疲れるけど術式は完成した訳で、タ
イムリミットが迫っていた『夜の国崩壊』を未然に防ぐための計画
を実行できるようになった訳だ。

あの祭りの前からちよくちよく練習してたんだけど、短期間で無理
矢理覚えたのもあって術式の効率化をせずじまいで計画に挑んだか
ら今まさに身体が重い訳だ。

ちーとばうあーにモノを言わせて不完全な術式を使っただから当
たり前っちゃ当たり前だよな。一応最初は人一人から初めて、回数
を重ねて、幾らか慣れたら村ごととかをしていったんだが…。その
一方で家庭教師とかは続けてたから精神的なものがねえ…。回復^{レス}魔
法とか使っても精神的なダメージはどうしても回復しにくいから、
今はほんとにだるい。というか眠い。

うーむ、まあいいや、このまま寝ようかな。一応国の方には前もっ
て話を通してあるし、『夜の国』内部の整理もあるだろうし。

それに、用があるならこの宮殿まで起こしに来るっしょ。どこでも
ドアのスペカをストラウスに渡したし。マーテルも何かしらしてく

れるだろう。

ってわけで、お休み…ZZZ…。

「……んあ？」

今、何時だ…？

眩しっ、採光窓のカーテン閉めるの忘れてた。

つてか頭痛っ…寝違えたか…？ああ、帽子被りっぱなしだったのか。そりゃあ痛くもなるわな。

んで、まじで何時？

寝たのは夜の国住人が基本夜行性なのもあって、夜に話とかしてたから…日が差してるってことはそこそこ寝れたかな？

「んん…、マール…？居るかあ？」

寢室を出て、ぽてぽて歩く。とりあえず…食堂にでも行くか？

目的地が決まったのでそのまま歩く。すると、ヒトの気配…というか話声に気づく。さすが寝起き。感覚関係がまだふわふわしてるぜい。

感覚以前に脳が覚醒しきってないが、とりあえずヒトの気配がする

食堂の方へと行く。

「おそよーさん…。なんか異変とかなかったかあ？」

「お姉さん誰…？」

んん？んんー？目の前にピンク髪の、どこぞでみたような顔の幼女が首を傾げている。いや、あなたこそ誰ですか？

そんな俺と同じように首を何度も左右に傾げる目の前の幼女。とりあえず可愛いから頭撫でとくか。

「
」

おお、和む和む。

「何してるんですか母上…」

声のした方を向くと、食堂の無駄にでかいテーブルにマーテルが座っていた。というかその他にもスラーッと座っている。

「なんぞ？」

「何ぞじゃありません母上。いくらなんでも寝すぎです」

「そんなに寝てた？」

「はい、あれから50年経ってますから」

（。D。）

話を聞くと、どうやらマジで50年間寝てたらしい。いくら起こそうとしても目覚めないのでもう放っておく事にしたのだとか。おい、と言いたいところだが俺の所為なんでどうしようもない。

そんな俺が寝てる50年の間に色々あったらしく、今日の前で色々座ってるのもその関係らしい。友好国同士でのプライベートな昼食会、と。

詳しく聞いていくと、『夜の国』が移動してきたのは帝国領土がある南側の大陸の東側、開発等が未だにされておらず一応未支配地域なので、条約などは変に揉めたりはしなかったそう。同盟国として、同じ亜人国家ということもあり貿易など、こちらにあまり慣れていない『夜の国』が少し融通してもらう形だが有効な関係が築けているようだ。

そしてびつくりな事に、ストラウスが『夜の国』の王に即位していた。原作から考えたなら既に秒読み段階だったし、おかしくは無いんだろうが……。しかも、正式にステラと結婚したらしい。かなり揉めたらしいが、あのほわわんが今じゃ第一王女ですぜ！！

ふむ、お気づきいただけだろうか？

だいいち王女って部分。

あんの野郎ちゃっかり、側室にアーデルハイトに迎えてんだよ。三人ともで話した結果らしいし、国としても、ストラウスとアーデル間に純潔のヴァンパイアが生まれたら王族の血統も絶えることは無いし、揉めはしたけど何とか纏まったらしい。残念ながら、ステラ

は人間だからスト劳斯との間に生まれる子はダムピールだ。だから王になる事は出来ない。ま、本人達は納得してるみたいだし、世継ぎ問題とかで権力争いとかは基本的に起きない種族だから良いんだけどね。

それで、だ。一つ不思議な事があるんですが、何でステラさんは50年経ったっていう割に俺が最後に見た姿とあんまり変化がないのでせうか？ふむ、マーテルさんのアンチエイジング？いやいや、マーテルさん親指ぐつてされても…。だけどこれだけは言わせてもらおう、グツジョブだ。

(・ω・) b

何…？しかも天然素材だけで行っただと…？全世界の皆さん！！ここに救世主が！救世主が居ますよ！！！！

「でも、寿命的なものは？」

そう聞くと、ステラとスト劳斯が少し悲しげに笑いながら説明してくれた。俺地雷踏んだか？違う？

とりあえず纏めてみると、マーテルのおかげでこの時代の一般的な寿命よりはかなり長くなったし、マーテル式アンチエイジングでほぼ不老っぽくなったけど、100歳位になったら死んでしまうらしい。でも、それはステラがそれで良いといった事らしい。女として、愛しいストラスの為にいつまでも美しく居られるのは幸せだけど、自分はやはり人間だから、それに母親セイバーハーゲンが願ってくれた幸せの為に、人間として死を迎えるらしい。

「そっか…」

「もう、なんでコウジユちゃんがそんなに悲しそうな顔をするんで

すか」

「だって、さ…」

「ああもうほら泣かないでください。コウジユちゃんは心配症というか、優しすぎるというか、他人の分^{ヒト}まで背負いすぎです。これじやあ頼もうと思ってた事が頼みづらいじゃないですか」

「頼み…？」

「うん、今あなたにくっ付いてる子の事で」

この少女の事？

…ああ、この子はずまり原作では生まれる事なく死んでしまったストラウスとステラの…。

ストラウスは王だから構える時間は少ないし、アーデや、ブリジットは言わずもがな。

だから、ステラ達の家庭教師も担当した事ある俺がってことか。もちろんマールテルも。

「おくだ。任せろ。ったく、いつのまにか幸せ家族計画しやがって、いつまでも幸せで居やがれこんにゃらう」

その後は俺も御呼ばれにあずかり、一緒に食べた。それにしてもこの少女は何故に俺にこんな懐いてるんだろつか？別に良いか、可愛いし。母性本能が…。カット！！…父性がくすぐられてる俺はもう逃れようがないし。ってああ、好き嫌いは駄目だぜ？お母さんたちみたいな美人さんになれないぞ？

にしても、改めて思うけど錚々たる面々だな。帝国の皇帝に皇女達、夜の国の現王にその嫁二人、世界樹の精霊、もちろんミトスとゼクトも居る。後、ウエスペルタティア王国の現王に娘さん達、アリアドネーの現学園長たる現総長^{トップ}。今のところ魔法世界に居るトップ勢ぞろいだ。メガロとかは今の時代ではまだ居ないからこれが魔法世界のトップ勢となる。一応ほとんどが俺の知り合いだ。ほとんどというのは、ウエスペルタティアは人間の国だから、寿命の関係で俺は知らない。向こうは俺が寝てるときに來た事があるらしく何故か握手を求められた。ついでに姫さん達にあたまを撫でてほしいと言われた。何故かいつも言われるが何故だ？

後のメンバーは長命種な事もあり知ってるやつらばかり。さすがに50年経てば歳をとって…ああはいはい、アンチエイジングね。つて、そこのおっさんは必要ねえだろ！！ああ！？夜がどうし…た…死ね！！いきなりセクハラ発言すんな！！嫁の為！？なら良し！！

あの会食からまたしても50年。その間にステラはその生涯を終えた。人ではなくヒトとして今を生きている俺に、不老不死となった俺に、ステラの気持ちは分からない。この身体になる前の俺はせい

ぜい二十年生きただけの若造だし、死んだ感覚も無かった。だから寿命を迎える人の気持ちは分からない。

でも、ステラは死の瞬間まで、いつまでも笑ってた。幸せだったと、涙も嬉しさの為に流せたと、そう言っ、一生を終えた。

なんだかんだと、俺は不老不死となつてからどこかがずれているのだろう。大きな力を得てから、死という選択枝しか持たなかったヒト達に生きる選択枝を渡せるくらいになった。だから、俺の中で死つていうのは普通で考えるより、言い方は悪いが易く^{やす}なつてしまつた。死んだとしても、霊体として会つた存在も居た。だからとつても遠くて、身近な、死。

良く分からない。幽霊の子達の時もそうだったけど、答えは見つからない。生きること、死ぬこと。結局どういう事なんだろう？
でも、うん。

ステラはほんとに幸せそうに死ぬ事が出来たと思う。それだけは分かる。

俺は、H A P P Y E N Dをまた一つ、贈る事が出来たんだと思う。

これまでも誰かの死に出会つて、送り出したことはいくらでもある。自分は死なないから、置いて行かれた気分を感じた事もある。でも、ありがとつて言ってくれたから、またねつて言ってくれた奴も居た。

そんな、皆と分かれる時に、絶対に言うようにしている言葉がある。

俺は、どうも涙もろいようで泣いてしまっけど、それでも、笑って逝く奴を笑って送り出す為に、顔を笑みの形にして絶対にこう言う。だからステラにも言った。

——俺に任せとけ——

F a t e世界で俺が幽霊の子達にやった様に、コクイントウ・ホオズキを手を持つ。死者の国への渡航証という概念を持つコクイントウで、寄り道せずにまっすぐ進めるように。いつまでたってもステラは危なっかしいからな。俺が言うなって？はん、言うようになってたじゃんか。でも…いや、何でも無い。今度こそ本当のお別れだ。じゃあ、またな。振り下ろす。

そして、皆で願う。さっきのは俺の言葉。今度は皆で、『夜の国』の言葉を使って。

——その魂に、いと高き月の恩寵がありますように——

「うだー…」

あ、どもです。ついこの間、家庭教師の任を降りたコウジユです。

ステラがその生涯を終えてまたまた100年。最近は、もう俺とマールテルが教える事は無くなったんでその任を降りた。あの娘は既に父親たるストラウスにくっ付いて城内の事に従事している。

「あーメルクリウスさんが羨ましいなあー。あの人、NEETであることを望まれる人だもんなあ。あの人が働いたら世界がどうなるか分からないし、当然っちゃ当然だけど、でも働かずにグータラするのまあ…」

隠居生活つてのもなんだかって感じだし、せめて暇つぶしがありやあ良いんだけど。

あれ…？

何か忘れてないか…？

「んん？なんだろうな、この喉に魚の骨が刺さったようなもどかしい感じ。他の言い方するなら仲良し三人組の残り二人が相思相愛なのについてまでたっても告白しない感じ…」

まいっか。大事な事ならすぐに思い出すでしょ。

今日も今日とてやること無いし、のんびりゴロゴロしよう。あ、そう
うだ。久しぶりにガチで寝てみようかな。数年位をさ。どうせ原作
までまだまだあるんだしさあ。

つと、んじゃ善は急げってことで、マールに数年寝るってメモを
残しといてつと、じゃあじゃあ皆様お休みなさい！！

「ふあゝゝZZZZ」

良く寝た…。

「つて、寝なおそうとしてどうすんねん」

寝起きだからか、微妙な関西弁を口からもらしつつ、グーッと伸び
をして少し寝て凝り固まった体を伸ばす。

「はあ寝起きの伸びってなんでこんなに気持ちいいんだろう？
つておお？」

身体を伸ばしていた動きをやめ、ふと目に入った手紙を手取る。

長年放置されたかのような色褪^{いふ}せ具合の手紙を読む。

えー、何何？

——私も最近すること無くなったので、旅に出ます。探してください。——

ふむ、やること無いしツラレクマーしてやるかね？
つて、裏にも何か書いてある。地図と…え？

——追伸。不死の子猫は良いのですか？——

「あああああああ……！！！！！！」

という訳でやってきました200年ぶりの地球。そんでもってヨローッパ。

え？エヴァ子さんですか？H A H A H A、忘れてないよ？
原作の600年前って言ったらやっぱりエヴァ子さんだよね？

ごめんなさい、600年切って、現在原作から596年前です…
o
r
z

ちょっと予定より遅刻（4年ほど）しちゃったけど、まだ居るかな？

おお、これかな？

湖のすぐそばにあるお城。うちの宮殿も大概でかいけど、こっちもすごい。あたりには自然があふれ、遠くに見える小麦畑や、放牧された羊たちが風情を醸し出している。

誰も居ない？もう居ないのか？すみませんおじゃましm——。

「わーい。リアルお化け屋敷だあ。何年か経ってるはずだろうにこの芳醇な血の香り。うえーい。ばなにづんどぐるう…」

は、鼻が…。ってか、こここの紅魔館！？内装のそこら中が真っ赤ですけど！？

しかも、うわあ…、生きた人の気配しないのに——

—— なんか いっぱい 居る。

「おっじゃまりましたあああ！……！」

・ ・

「なんぞあれ!？」

鳥肌が!チキン肌が!チヨコボ肌がああ!!

誰が予想するよ!!!?

この周りの光景に対してあのお城の中。ドア開けてちょっと進んだら普通なら見えない筈の方たちが続々と集まってきたよ!?

で、でもなあ、ここに来た目的であるエヴァにゃんが居るかもs…
うん、ないな。手掛かりがあるかもだけどあそこに突撃するのは…
ちよいと遠慮したいしなあ…。

なにせ、たぶんだけどあの場に存在してたのは“悪霊”だと思うんだよねえ。

無限十字さんセイバーハージェンに色々と教えていただいた(ラーニングで物理的に)ので、霊力に関しても幾らか技を覚えた。技のえぐさは身をもって知ってるんで使う気は全くないんだけど、セイハさんの技の中には魂に直接束縛を駆けるような奴もあるんで、そっち関係の、俗に言うオカルト関係の事を調べた時に“悪霊”ってのを知った。

“悪霊”ってのは、Fate世界で俺が出会った幽霊とは違って、自身の意思ってのが無い、もしくは限りなく希薄らしい。けど、世間一般で知られてる“悪霊”ってのは何かしらの災いや呪いといった攻撃を仕掛けてくるアクティブな存在だ。じゃあその攻撃の元となる意思は何かってのが重要なんだが、その意思は生前の、死ぬ直前のモノが基礎となってるんだと。本来、ヒトが死んでも魂って

のは身体から離れて意思が魂としての存在にシフトし、何か未練があったのなら地縛霊やら背後霊ってな風に自分の思い残しを意識を保ったまま行い、器が無いからやがて意識・存在が薄れて、死者の国に導かれるようなんだが、“悪霊”ってのは、その自身の意思、ソフト自意識つてのを死ぬ寸前の悪感情が塗りつぶしてただ他人を害する現象になって、本来の輪廻からズレてしまってる。プログラム

端的に言ったら、“悪霊”には大前提として既に自己意識がない。つまり交渉できない。

「むう…、どうしよう。原作でも描写が無いだけでこんな事になったのか？赤松世界だからこんなグロい状況を描かれること無いし。あ、でも原作ではミトス…『始まりの魔法使い』がエヴァにゃんを吸血鬼にした犯人だったけど、うちのミトスちゃんも犯人ちゃうし…。こりゃ完全に原作ブレイクか？」

元々ネギまの面影ほとんど無かった様な気もするが、そんな訳無い、無いっただけ無いです。余計な思考をよけといて、考えに集中する。

「犯人が別の奴だったとして、じゃあ誰が？いや、まだエヴァンジェリンが吸血鬼化させられたと決まった訳じゃない。でもあの城の中の惨状から考えて確実に何かは起こってる」

くそ、やっぱり中に入るしかないか。あこに居た存在達の全てが“悪霊”と決まった訳じゃないし、ひょっとしたらまだ意識のある幽霊が居るかもしれない。

…可能性は低い。数年経ってるみたいだしそれほど意識が摩耗せず存在し続けられてる可能性は低い。悪霊は既に自然現象に近いからあれだけ濃密なのも不思議じゃないけど…。

「はあ、鬱だなあ…」

俺はもう一度城の内部に入るために扉に手をかける。そして、コクイントウ・ホオズキを呼び出し強く握る。悪霊と化していても、元は人であり、自己を保つ誰かだったんだ。意味は薄いかもしれないけど、本来の、死者としての旅路に戻る事を願って強く、強く。

同時に、思考の隅で考えてしまう。この惨状はひょっとして俺のせいなんじゃないか、と。

俺が寝こけてる間にこれが起こった訳だ。俺が間に合ってたらかんな事になって無かったかもしれない。俺がこの世界に関わったことでバタフライエフェクトでも起こって、本来なら死んで“悪霊”なんてものに身を落とすことなんて無かったのだったかもしれない。

傲慢にも程がある考えかな。でも、間接的とはいえ自分が殺したかもという可能性を一度考えてしまうと切り離す事が出来ない。

胸の内に気持ち悪いものが込み上げる。

頭の中がごちゃごちゃとしている所に、何かが近づいてくると感覚が知らせてくる。正面を向くと、件の悪霊が何体か近づいてきていた。

「っと、お出ましか。ゆっくり考えるのは後にするしかないかねえ」

城を出て、城に火を放った俺は一刻も早くその場を離れたくて、走りながら先程出会った“ヒト”の話を思い出す。

“ヒト”と言ったのは、確固とした意識を持つ、悪霊ではない存在が居たからだ。マグダウエル家当主、エヴァンジェリンの父に当たる存在。ほとんど魂が劣化した当主は、会話すらほとんどままたらない状態で時折片言になりながら話をしてくれた。愛娘に対する申し訳なさが犯人への恨みより勝っていたことで悪霊へとならずに残っていた当主は悔恨と共に語ってくれたのは――。

やはり原作通りにエヴァンジェリンが『真祖の吸血鬼』にされてしまったこと。それは、当主が愛娘の10歳の誕生日に祝福を賜るために招き入れた者達の所為で行われた事。正確にはその招き入れた内の一人が他の者達を裏切って殺し、その血を使って儀式を行った事。

「胸糞悪い……」

走るスピードを落とし、人が何度も通ったことで植物が生えなくなっただけの舗装も何もされてない、何とか道だと分かる程度の道沿いに歩く。

あの、城中を埋め尽くされていた血は、ワザと撒かれたものらしい。犯人が儀式を行う準備の一つとしてやったそう。幸い……というのは何だが、あの悪霊達全と、血液のほとんどが犯人の仲間のものだったようだ。本当なら城の使用人達等が犠牲にされるはずだった

が、当主が最低限の人間を残して大体の人間を愛娘の祝福を授かる儀式を行うのにあまり人が居るのもどうかと考え臨時休暇を言い渡していたそうだ。それでも何人かは殺されてしまったらしいが悪霊とまではならなかった。悪霊となった奴らと、犯人は“立派な魔法使い”と名乗り、魔女狩りが既に行われているこの時代に怪しむべき存在だったが、何故か信じられるような気がした当主はそいつらにそののかされるままに儀式を決行する事に決めた。だが実際は愛娘はただの実験動物にされ、当主や妻、残っていた使用人達は儀式の材料にされ、それでも足りないから仲間すら生贄にして行われた悪魔の儀式。儀式の本来の意味を知らされた上でまっさきに殺され、悔恨の思いから魂となったままに儀式が行われていくのを見るしかなかった当主の思いはどれほどに自身を苛んだものだったろうか。

その話を聞き、俺はただ謝るしかなかった。何かが起こるかもしれないとは知っていた筈だったのに、と。

そしたら、今までの片言交じりが嘘だったかのようににはつきりとした意識で以ってして怒鳴られた。“ふざけるな。未来を知ってるからとかそんなもので私の責任を奪われてはたまったものではない。自身が背負うべきモノを他人に押し付けるような腐った人間であつたつもりなどない。それに元々は関係無い者どおしの筈だし、行つたのは奴らだ。驕るなよ小娘” ってさ。

かっこよすぎるってばよ。それで、そこからさらに色々と問答はあったんだけど、ちょっと飛ばすよ。恥ずかしいからな。延々謝つたり、なんなりってかんじだったしな。

そして最後に、当主をコクイントウで送るために構えた俺に当主は、そこまで言っなら一つ願い事を聞いてほしいと言った。

——エヴァンジェリンを支えてやってほしい——

是非もなしだったの。

「はあ、ってまた溜息ついちゃった」

覚悟…が足りないんだろうな、俺。何をするにしても中途半端で、
当主が許してくれるとは言ってくれたけど、そもそも関係無いとも
言ってくれたけど、関わりと決めた俺に背負わなくてはならないモ
ノが無い筈が無いんだ。

自身の頬を両手で思いつき叩く。

「らしくねえ！！らしくねえぞ俺！！」

『HAPPY END』目指すって決めたじゃねえか！

驕るなど言われたけど、全てを救おうとも救えるとも思っちゃんないけど、このままうじうじして何もしないのは“俺”じゃねえ。約束したんだ。さっさと動こう。

「うし！ちゃっっちゃか行くか！！」

「あ…」

ガシャーンっという音と共に、何かがぶつかる衝撃と、生温くて気

持ち悪い感覚が下半身を襲う。

「ご、ごめんなさい！！ごめんなさい！！ごめんなさい！！ごめんなさい！！ごめんなさい！！ごめんなさい！！……」

どうやら思考に没頭するあまり、水瓶を運ぶ少女とぶつかってしまったらしい。

「いや、こっちこそごめん！考え事しててぼうつとしてた！！」

謝り続ける少女に謝罪する。それでも謝り続ける少女に、どうしたものかと考える。

くすんだ緑色の髪に、琥珀色の瞳を持つ少女はついには涙を流して頭を下げ続ける。

「だから大丈夫だって！謝るのはこっちなんだし、当然怒ってなんかないよ」

「け、けど、高そうなお洋服を水で濡らしてしまいましたし……」

「大丈夫大丈夫。放つときやすぐに乾くさ」

121cmの今のおれの身長より更に小さい少女に言い聞かせる。こっちは水瓶を割っちゃってる訳だし、100%俺が悪いからな。

「それにしてもこの割っちゃった水瓶どうしよう。弁償したいんだけど、幾らくらいかな？」

ようやく落ちつき始めた少女に問う。

「い、いえ、大丈夫です！家にまだありますから！！」

そう言つて手をぶんぶん振りながら断ろうとする少女。じゃあ、と他に何か償う方法が無いかとしてほしい事を聞くが無いという少女。むう、今更一日二日で変わるとも思えんが、ここで少女といつまでも押し問答してるのもなあ。

だから、カードを一枚渡して先を急ぐことにした。カードとはもちろんスペルカード。

「何か困ったときや、何かしてほしい事が改めてできた時にそのカードを持つてお願いしてみてください。すぐさま駆けつけて、成就させるからさ」

渡したスペルカードの能力は単純なもので、ただ使用者の声を俺に届けるというもの。一応神様だし、御守りみたいに自分に関わりのある物品を考えて生み出したものだ。

「このカードに…ですか？」

「そうそう。実は俺神様だかね。もうどんと来いってわけよ」

「ふふ、そうなんですか？」

くすつと、やっと笑った少女に、俺も先程までの鬱屈とした心が安らぐのが分かる。ほんと単純だなあ、俺。

「じゃあ、またの」

「はい、また」

少女と別れた俺は再び道なりに少し歩き、そしていつのまにか走り出していた。行けども行けども町とか大規模な集落が全く見えないからだ。少女に会った辺りも村っぽいのはあったけど、町ってほどでは無かったし。容易に飛ぶ訳にはいかないからほんとに面倒だ。

「これじゃあ何日かかるのやら」

一年、城を出てから一年越しだが、目的の少女を見つける事が出来た。金髪幼女吸血鬼。うんあの娘っぽいね。

ただ――。

「えええー……」

思わず口からその光景を見て微妙な声が出る。

地面に突き立てられた十字架、そこに縛られてる金髪幼女。その周りを囲み、テンションが最っ高にハイって奴だぜー！をしている民衆。

幼女を掲げるとこその新興宗教の集まりか？

と、そこまで考えたところで実際のところを考える。いや、うん、あれは魔女狩りなんだよね？3大エヴァンジェリン遭遇パターン。

1、魔女狩りで今にも火あぶりにあいそうな所へ颯爽登場。

2、森の中で『立派な魔法使い』とか賞金稼ぎに追われてぼろぼろな所へエンカウント。

3、崖から落ちそうになるとこへ『シイタアアア！』『パズウウウウ！』をすかさずしに行く。

の1番だよ。でもなあ…。

民衆のテンションが高いのは、この時代、魔女狩りつてのは一種のエンターテイメントでもあったらしいし仕方ないっちゃ仕方無いんだろうけどなあ…。

でもあれは無いだろう！！？

俺が問題にしてるのは今のエヴァ（仮）の状態だ。十字架に張り付けはまだいい。けどさ、半裸はいくらなんでもひどくないでせうか？

ボロボロの布のようなものがかかってるけど、アニメとかで大活躍な絶対防御“湯気”、“差し込む光”の様に要所要所は隠れてるとはいえぎりぎりの部分しか隠してないから18禁が15禁になった位の違いしかない。ワザとか？ワザとなのか！？

でもこれDVD版だと解除されてるレベルだよな！？

「この状況をどうやって打破しよう…」

そうこうする内に、エヴァンジェリオンの足元にくべられていた薪に火がつけられる。

「うっわ、金髪少女吸血鬼（半裸）の熏製って、保存期限伸ばす為にしてんのか？」

どうやら俺はかなり混乱してるらしい。保存期限ってなんだよ。賞味期限消費期限的なモノを少女に採用してどうすんだよ。こんな思考紳士にぼこぼこにされちまうよ。ちなみにあの子がエヴァンジェリンならエターナルな無期限です…って、何を考えてんだ俺は！？何これ電波！？それでもって俺もエターナル…って、ちょ！？やめ（ry

「あーもう！！パクパクの枝来い」

手に呼び出すのは両手杖^{テロツク}。見た目はその辺の枝に葉っぱが一枚付いてる様にしか見えないモノ。一応の偽装で周りからしたらその辺の棒振ってる様にしか見えないようにだ。

「サ・バータ！」

発動するのは設置型の氷属性魔法^{テクニク}で、一定時間吹雪を発生させる。継続ダメージによって徐々にHP削っていくタイプだ。レベル低い杖を使ってるからダメージというダメージも無いだろうし、ただの目くらましだがそれで十分。

そのまま急いでエヴァ子に駆け寄る。

「今外すから…」

「あ…あなたは…？」

「先にここを離れよう」

拘束具を無理やり引きちぎって抱え、スペカで翼を出して一気に上に飛ぶ！！

「グランツ」

上空から光の矢を打ち下ろす魔法。^{テクニク}縛られてた所に落としてクレターにしてやる。

これで、丁度目くらまし消えたし連れ去られたんじゃないやなくて天罰が何かで光を落されて消えたとか勝手に解釈してくれるだろう。

人の目につかないだろう高さまで飛び、安全に降りれそうな場所を探す。

「あの…天使様…ですか？」

「はは…違っよ。俺は通りすがりの…一般人かな」

逸般人が正解か…？

side out

『Stage57：金髪少女の吸血鬼、バンソー娘―ではありません・・・in

どうでしょう？

まずは、皆様に深く感謝申しあげたいと思います。前回の後書きにおいて精神的ダメージについてちよろちよろと書かせていただいたんですが、それについてたくさんの方の励ましのお言葉を頂き、本当にありがとうございました。おかげで、ダメージより回復量の方が多く、HPゲージそのものが増える…分かりづらい例えすいません。ともかく、皆様のおかげで落ち込んでいた気分も戻り、もう大丈夫です！

改めましてもう一度、本当にありがとうございました！！>（

ー）<

えー、さて、今回の話は継ぎ足し継ぎ足しって感じでエヴァ子エンカウントまで行った訳ですが、いつにもましてネタとシリアルの落差が激しいモノになってしまいました（笑）

とりあえず、久しぶりに感想に頂けるであろう一言を思いつきました。

『あ、バグか…』

いや、自分でも何書いてんだ？と思いましたよ？寝坊したり、幼女出たり、グロったり、謎シリアルになったり、幼女出たり、幼女出たり……。

あれ？幼女ばつかじゃね？

やっぱバグっぽいですねwww

さて、その幼女に関してですが、実は名前を募集してます。ローズ・レッド・ストラウスとステラ・ヘイゼルバーグの娘で、ブリジット・アーヴィング・フロストハートの姪なんですが、関係者の名前がバラバラなものでどうしようかと。

どなたか素敵なお名前をよろしく願います> (_ _) <

そしてもう一人、名前が出てこなかった幼女が居ますが、この子伏線です。この子について前にも一応張ったんですが、無いのも一緒だとある方に言われましたww 今回の話とネギま編最初の方で出てきた伏線から誰か分かる方が居らっしゃいましたら彼女の本名に関して考えていただけると嬉しいです。って、この書き方もヒントになりますねww

あと、ネタばらしにならない程度にヒントを出すとしたら、PSP 02においてワンクッションおいてですが彼女に関係するモノが出てたりします。

彼女に関してはPSP 02を自作品に使うと決めた際に出したくなったキャラでして、先の『ヴァンパイア十字界』は作品そのものを、『ナイトウィザード』は名前だけになりましたがどうにか絡ませたいなあと思ってました。

では次回のお話についてですが、多分短くなります。予定は未定なので、いつものごとくどうなるかは分かりませんが……。とりあえず一週間以内に出せたらなあっと思つてます。まだ1000文字くらいしか書いてないんですが、サブタイが『野生の少女が現れた。コモンド?』というまたまたのはっちゃけっぷり。いや、私は悪くないですよ?エヴァ編に差し掛かつちゃたんですから仕方ないじゃないですか。ねえ?

俺は悪くねえ!俺は悪くねえ!!ヴァン紳士が!ヴァン紳士がやれつて!!

ちなみに紳士とかいて先生と読みます。

それにしても改めて思いますが私つてこの後書きでいつもいつもめちゃくちゃ(いろんな意味で)書いてますが、どうなんでしょうかね?他の作者様のを読ませていただいた時にすぱと、ずっぴし要点を踏まえた事をお書きになっていて分かりやすかったり、アニメの予告編みたいな感じにキャラの語り場になってたりしますが、私の後書きはのんびんだらりと、まさに徒然なるままに投下してるものなんでどんなもんかと。

書かなきゃ良くね?とも思われると思いますが、なんかテンション変なままいつも決行しちゃうんですよー。

ば、ばつちだから普段話せない分ここでハシャイデルトカじゃないですよ!?ホントですよ!?

うっわ、また長くなってる。

んじゃ、今回はこの辺で。バグってる私ですが、作品共々これから
もよろしく願いします（＾－＾）

P・S・1

先日、キッチンの包丁を買い替えることになりまして、母が買っ
てきたんですが、いざ使おうとしたらそれがまたオール金属のスタイ
リッシュな包丁で、しかも結構でかいやつだったんですよ。それで、
冗談めかして、『これがあったらバイオハザード的なゾンビだらけ
になってもなんとかできるね（笑）』って言ったら、『うーん、で
も中〇製だから武器耐久がなあ…』とおっしゃられました。ワロタ
ww

P・S・2

どうでもいい話ですが、IFの話でハンター×ハンターの話が一応
出来上がってるんですが、前のアニメ版＋漫画に沿ったやつなんで、
新アニメ版と微妙に違うし書きなおそうか、一旦出して反応見よう
か考え中です。

『stage???：俺は…帰ってきた!!：FateZero編?』(前書き

気づいたら1万文字近くいつていた。な、なにを(r y

いや、何してんだよ。とか、良いぞもつとやれwwとか、まあ色々
思われる方がいらっしやると思いますが、書きちゃったものは仕方
がないということで(笑)

だって熱いパトスが!!

とりあえず、エヴァンジェリンエ：ww

『stage???：俺は…帰ってきた!!：FateZero編?』

『我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した!!』

港近くの倉庫街。そこへ、爆雷を伴いながら空を駆ける牡牛チャリオットが戦車を引き、寸前まで戦っていたセイバーとランサーの間に着地、いや、降臨し、そののたまった。

「あいつ、馬鹿なの？死ぬの？ああ死んでるか」

「バカはバカでも良い馬鹿だと思うよ？というか脳筋？でも漢!!！って感じで憧れ感じまう位にかっこいいんだぜ？」

「そーなのかー」

「ちょ!?!」

倉庫街から遠く離れたビル街。その屋上から今まさにライダーが降り立った場所を見ながらそう話し合う二人の少女が居た。バーサーカーのコウジユと、そのマスターのイリヤだ。二人はそれぞれ獣の特性を生かした肉眼と、夢幻召喚『真アーチャー』を使ったクラス補正でその場を見ていた。広域を一度に見るためにこうして遠くに居るが、声はさすがに聞こえないので使い魔に拾わせていた。そんな中、使い魔を通して聞こえてきたのがまさかの、ライダーによる

自己紹介だ。

聖杯戦争において、その真名を知られるというのは相手にかなりのアドバンテージを与えることになる。だというのにイスカンドルとライダーにそのことを悔いる様子は見られない。

『うぬらとは聖杯を相争う巡りあわせだが、まずは問っておくことがある。』

一つ我が軍門に下り、聖杯を世に譲る気は無いか？』

腕を大きく掲げ、ライダーは宣言するかのごとく、ランサーとセイバーに言う。

「……」「。(。㇏)ノ。(。㇏)ノ

「あいつがやってるこのポーズ…何？」

「あれじゃね？ボディビルダー的な。もしくは威嚇的な？」

「……」「(。ω。)」がおー

「そうそう。そんなの」

『はあ……。その提案には承諾しかねる。俺が聖杯を奉げるのは、今生にて誓いを交わした新たな君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ！ライダー！！』

コウジユとイリヤがのほほんと緊張感無しにライダーのポージング？について語っている間にも問答は続いており、ランサーがライダーに答えを返していた。続けてセイバーも答える。

『そもそも……そんな戯言を述べたてる為に、貴様は私とランサーの勝負を邪魔立てしたというのか？
騎士として、許しがたい侮辱だ！』

その答えにライダーは食い下がり、何とか良い答えを貰おうとする。

『うーむ、待遇は応相談だがな……』

が――。

『『くどい！！』』

「当然よね」

「ま、当然だわな」

「あなたは行かないの？」

「いやいやー、それはそれで面白そうだけど、俺の主はイリヤだけさね。前にも言ったろ？」

「……」

「どした？」

「は、恥ずかしい言葉禁止！！／＼」

「痛っ、ちょ、投影してまで何するんさ！？」

あくまでもほのぼのを崩さないコウジユ&イリヤ組を置いて、ライダー達が居る倉庫街では物語が進んでいく。

『そうか、よりによって貴様が…』

倉庫街に響いた声は、その場に居ない者の声。ランサーの主のモノだ。

『ふああ！？』

「あ、あの子可愛い」

「だろ？小動物的な。ウェイバーちゃんマジヒロイン（笑）」

ランサーの主の声に反応したライダーのマスター、ウェイバー・ベルベット君。その反応の仕方から醸し出す空気までもが小動物ちつくな彼に、どS…ごほん、いじめつこな顔+ぬいぐるみを愛でる顔を2で割ったような複雑な顔（ウェイバーにとつて）をするイリヤ。対してコウジユはただただ年下の子を見るような目で見ている。

倉庫街ではまだ話は続いており、ランサーのマスター、ケイネス・アーチボルト、ケイネスがウェイバーに対して威圧していた。それはウェイバーが通っていた魔術学校『時計塔』において、ケイネスはウェイバーの教師に当たるからだ。そしてウェイバーは、ケイネスに馬鹿にされ、それを見返す為に元々ケイネスが使用する筈だった聖遺物を盗み、ライダーを召喚するに至った。

端的に言えば、ウェイバーがケイネスのモノを盗み、それを怒っている…というものだが、どうもウェイバー君が被害者にしか見えなないこの状況は、苦笑せざるを得ない。

ケイネスは威圧しながら、魔術師として相対する事がどういう意味か教えてやる、と実質的な“殺す”宣言をし、まだ学生でしかなかったウェイバーはぶつけられた殺意に膝を折って怯える。

横に居るライダーはそのウェイバーの肩をやさしく叩き、ケイネスに反論する。

自身のマスターたる資格を持つ者は自身と共に戦場を駆ける事が出来る者。ランサーに戦わせるだけでここに居ない貴様は役者不足も甚だしい。^{はなは}と。

そして、ライダーは続けて言う。今度はケイネスではなく、ライダー達を見ている者すべてに。

『他にもおるだろうが!!
闇にまぎれて覗き見しておる連中は!!』

『どういうことだ、ライダー』

意味を問うセイバー。それをライダーは手で制し（何故かサムズアップで）、続ける。

『セイバー、それにランサーよ。うぬらの真っ向切つての競い合い、まことに見事であつた。あれだけ清澄な剣撃を響かせては惹かれて出てきた英霊が、よもや余一人という事はあるまいで。

聖杯に招かれし英霊!! 今ここに集うが良い!!

尚も顔見世を怖じる様な臆病者は!! 征服王イスカンドルの、侮蔑を免れぬものと知れえいつ!!』

「だつてよ?」

「そうね」

「どうする？」

「あなたはもう決まってるんでしょ？」

「当然。ここで行かなきゃ男がすたるってもんさ」

「男……………、そうね行かないとね」

「ちょい待て！何故に長い沈黙＋顔を背けて言いやがりますかねえ！？」

「ほらほら行くわよ。他のはもう行ったみたいだし」

そう言うイリヤが指さす先では黄金のサーヴァント、ギルガメッシュが限界しているところだった。

「けっ、もーいーよ。ったく、それにしても金ぴかめ…。相も変わらず目に優しくないな」

いつまでも食って掛ってはられない為、コウジユは無理矢理に意識をギルガメッシュに向けるが、不満は解消されていない為に少々八つ当たり気味になってしまう。

「さて、俺達も行くか」

「ええ」

セイバーとその主アイリス、ランサー、ライダーとその主たるウェイバーを見下ろす形で、街灯の上に現界したギルガメッシュ。

「我を差し置いて”王”を称する不埒者が、一夜のうちに二匹も湧くとはな」

傲岸不遜にそう言い放つギルガメッシュに、その場に居る者達は眉を顰^{ひそ}める。

いや一人だけ、ライダーはその言葉に頬をひと掻きして答える。

「難癖付けられたところでなあ、イスカンダルたる余は世に知れ渡る征服王に他ならぬのだがなあ」

ギルガメッシュはその答えが気に入らなかったのか、目を細めた後に更に言う。

「戯け。真の王たる英雄は、天上天下に我^{われ}ただ一人——」

ギルガメッシュは言う、王を名乗って良いのは自分だけだと。ライダーは問う、それほどに名のある王ならば名を聞かせると。

それに答えるギルガメッシュ。

「我が拝謁の栄に浴して尚この面貌を見知らぬと申すなら、そんな蒙昧は生かしておく価値すらない!!」

言いきると同時に、その背後の空間から数多くの武器…宝具を現出

させる。それらはライダーの方を向いており、今まさに打ち出そうとした瞬間――。

「うおおーい。祭り始めるにやあちつとばかり役者が足りないんじゃないかい？」

「まったくね。ホント堪え性のない奴だわ」

その場に居た者たちが、二つの声が響いた方を見る。

「じゃっじゃーん！！GOTT「違っでしょ！」ぐはっ、ちょ、強化して殴らんとって！？」

“白”と言い表すのが的確な少女が二人。コウジュとイリヤがそこに居た。その二人は、片方が片方の鳩尾みそおちを、腰を使った見事な一撃で以って殴りつけていた為にその場に居た者達を固まらせる。

ただ、若干2名+周辺に隠れていたある一命は白い少女達を見て固まってしまう。合計3人の名は、アイリスフィール・フォン・アインツベルン、セイバー、そして遠くからその場を見ていた衛宮切嗣。この3人は白き少女の片方に見覚えがあった。いや、自身達を知る人物にあまりにも面影が重なる。この場に居ない筈の、居るべきでない筈の少女に。

「ごほん。皆様改めまして紹介させていただきますわ。私の名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。そしてこちらが……」

「コウジスフィール・フォン・アインツベルンを名乗らせてもらってる。そして聖杯戦争においては、バーサーカーを拝命」

「イリヤ…なの…?」

「イリヤスフィールですって…?」

思わず口に出すアイリスフィールとセイバー。さもありません。白き少女の片方は自身達が白き雪が降り積もる、閉ざされた城に置いてきた筈の少女なのだから。ただ、そのイリヤに対して目の前のイリヤは似ているが大きく違う。本家に居る筈のイリヤはこんなに育ってはいない。

しばし、時が止まったかのようにその場を沈黙が支配する。それぞれ内に秘めた理由は違うにしろ。突如現れた二人の少女に空気を支配されていた。

もちろん、いつまでも上に立たれていて黙っている者たちではない。特に、ライダーの名を冠して今回の聖杯戦争に呼ばれた征服王は“沈黙”などしていられる者ではない。アイリスフィールとセイバーはさておき、興味が引かれたライダーは話し始める。

「ほほう。うぬらがバーサーカーとそのマスターと?」

「おー、いえー」

軽く答えるコウジユ。その姿はどう見ても英霊には見えない。それでもこの場に居て、そう名乗るのならそうなのであると、気になる事もある為ライダーはひとまず話を続ける。

「ふむ…。しかしバーサーカーにしてはえらく口が達者だなあ？」

ライダーが、いや、この場に居る者たちの多くが疑問に思った事であろう事をライダーはまず尋ねる。

それはむしろ疑問に思わない方がおかしい事だ。何度も…と言うには微妙ではあるがそれなりの数を行われた聖杯戦争だ。その中には当然“常識”と呼ばれるまでは無くとも“通例”というものはある。

『バーサーカー』というクラスは“狂戦士”の名に相応しく、理性の大半を犠牲にする代わりにステータスの上昇という恩恵を得る事が出来る。

しかし、目の前のコウジュと名乗りバーサーカーだという少女は当然のように返答する。

「なーに、簡単な事さね。俺は元々スキルの一つに“狂化”に該当するものがある。だからクラス補正として狂化が適用されていない」

「なんと」

口に出したのはライダーだったが、他の者も驚愕している。自身が持っていた知識をぶち壊された事もそうだが、その厄介さにちてもだ。『バーサーカー』というクラスは“狂化”によって大きな恩恵を得る事が出来るが、その半面で理性を失う事で、マスターからの指示が通りにくいことや、その英霊が持っている筈の戦闘経験といったものがほとんど無意味になる事で他のサーヴァントとの足並みをそろえているといっても良い。だがコウジュが語ったのは、そのマイナス面をほぼ覆すであろうこと。理性を持ったまま、ここぞという時に“狂化”による恩恵を受けるタイミングを選べる可能性。

「まあ驚くわな。若干名そんな事はどうでも良いって顔をしてるけど。まあそれはいつか話すでしょう」

ふふん、とどこか自慢気に言うコウジユは、ちらつとアイリス、セイバーに目を向ける。二人の目はコウジユの横に居るイリヤに向けてられ続けている。コウジユスフィールと態々名乗ったのにそちらを突っ込んでもらえなかった事を若干悲しみながら、視線をライダーに戻す。

「んで？…しないの？」

「何をだ？」

「え、いや、バトルしようぜ？
エアブレイクした張本人が言うのもなんだが」

.....。

——バシッ——！

「痛っ！？イリヤさん！？背が縮んだらどうするのさ！？」

「うるさい！！馬鹿なの！？死ぬの！？むしろここで殺してやるわ！！！」

「のおう！？危なっ！？聖杯戦争する前からマスターによって討ち死にとか何しに来たか分からへんから！！」

「あなたそのものが分からないわよ！！この場の全員が思ってるわ！！」

「嘘っ！？って頷かれた！？」

壊れた空気はどこへやら、コウジユは己がマスターを背に、少しずつ前に歩みだした。その顔には先程までの楽しい笑みではなく、どこか肉食獣を思わせる笑みを浮かべていた。元来、笑みとは敵を威嚇するものだそうだが、コウジユが今浮かべているものがそれだろう。

「いやー悪いねー。ちょいとばかり会いたかった英霊達を見て嬉しくてさー」

そんなコウジユを見ながら、ライダーはふと思いついて隣に居る自身のマスターに問いを投げかける。

「坊主よ、サーヴァントとしちゃあどの程度のもんだ、ありゃ」

見た目はちとあれだが、とライダーは思いつつも自身の勘が告げている。あの者は見た目に反して英霊となれるだけのものがあると。なんとかふいーるが3人居るのも気になりはするが興味は当然、戦に関してのものが勝つ。

「分からない…。まるつきり分からない」

「なんだ。貴様とてマスターの端くれであろうが。得手だの不得手だの、色々見えるものなんだろう？」

先にもまして驚きの表情を見せるウェイバーに、ライダーは言う。それに対しウェイバーは続ける。

「見えないんだよ、あの娘のステータス…。サーヴァントだつてのは確かなのに、まるでステータスの前に一枚壁があるみたいなの…」

そうウェイバーが言うと、コウジユがあ…っと、何かに気づいたように声を上げる。奇しくも原作と呼ばれる本来の第4次聖杯戦争で、バーサーカーの位置に居る筈であった者と同じ状況を作り出している原因に思いついたようだ。

「そついやあんまり気にしなかつたけど、相手のマスターによるステータス確認もこちらへの干渉になるのか。悪いなー、多分、素で拒絶^{レジスト}してるわ。なんかこう…バリア的な？

色々勝手に弾くんだよ」

事もなげにその少女は言う。その後ろに居るもう一人の少女が頭を抱えているがそれはさておき、コウジユが言った事はまた一つ、その場に居る者達に警戒心を引き立たせる。

マスターによる敵サーヴァントのステータス確認は、聖杯戦争において一つの“通例”だ。聖杯戦争という名に相応しい苛烈な争いではあるが、その一面でスポーツの様な“ルール”が存在する。その枠組みの一つに相手のサーヴァント情報の一部をステータスとしてマスターは見る事が出来る。しかしそれをレジストしているのかもというコウジユ。対魔力が高かったら出来る…という訳では当然ない。それならばウェイバーはセイバーのものを見る事が出来なかった。彼女の対魔力はA、それ以下の魔術を意にも返さぬ事が出来る。だからコウジユのそれは、また別のスキル。

バリア的な…といった事にウェイバーは少し納得する。先程自分が言った壁の様なものがそれなのだろう。そこまで考えてまた一つ恐怖を覚える。じゃあ、彼女が言った“色々”はどこまでのモノを弾くのか？

「さつてと、また脱線して来てるしいつちよおっぱじめるか」

コウジユはそう言つと、手を上に上げる。

「来い、ミヤビセン」

次の瞬間には、空間からにじみ出るようにして一つの扇がコウジユの手に収まっていた。淡い紅に蒼で描かれた華。両端に設えられた華のモチーフ。それらは妖艶かつ不思議な魅力を溢れださせている。それは、“輝く貌”の異名を持つランサーの『愛の黒子』の効果にどこか似ている。高い対魔力を持っていない者はコウジユが持つ扇に惹かれてしまう。

コウジユは一度それを一振りする。

「ん、良い感じだ」

一振りと同時に巻き起こる風。同時にどこからともなく多くの花びらが風に揺られて舞う。

正直これじゃなくても良かったんだけど、とコウジユは思う。何故出したかは、単純にグリリバボイスなイケ面に対抗したかったというただそれだけの事。ただでさえイケメンなのに『愛の黒子』でブーストとか羨ましいぞこの野郎と。本人はそれのおかげで死んでも死にきれなかったのだが、コウジユはただ羨む。

「んじゃあ！まずは一発目！！」

コウジユが扇を手にしたまま、舞うように腕を大きく振る。同時に花びら交じりの風が生まれ、それにまぎれて何かが飛ぶ。

「続けてダンスアアイムツ！！」

腕を振り、廻り、振るい…。それはまさしく舞い。その手に持つ扇もあり、その姿は夜であるにも拘らず人の目を惹き付ける。

——はずだった。

コウジユを見ている暇など、その場に居る者達には無いのだ。無数に飛び来る何か…。それは飛刃と呼ばれる質量をもった斬撃。コウジユが舞うと同時に振るう、その扇が飛ばしているものだ。

それは時に地面を抉りながら、時に弧を描きながら空を斬り、それその身に迫る。威力はそれほど高くないのが救いだが、如何せん身に迫る刃達は見えづらい。魔力を凝縮し質量をもつほどになって

いるのだろうが、速い上に元は形の無いモノの塊だ。逆に言えば質量があるからこそ手に持つ武器で弾き落とす事が各々は出来ている。

「雑種があアア！！！」

自身の背後から空間を割いて宝具を打ち出すギルガメッシュ。幾つものそれはコウジユが放つ飛刃を数で上回り突き進む。対象は当然コウジユだ。

「当たってねえぞ！！つと。ぎりぎりだがルナシューターたる俺にはこの程度の弾幕、容易く避けられる！！」

舞いを続けながらそれらを避けるコウジユ。さすがに飛刃を飛ばしてはいないが、余裕を持った避け方だ。

「痴れ者が……。天に仰ぎ見るべきこの我を同じ大地に立たせ、更には歯向かうかッ！！

その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片ひとつも残さぬぞ！！」

先程までは電灯の上に居たギルガメッシュだが、コウジユが放った飛刃によりその電灯は斬り倒されている。

王たる自身が地に下ろされた事で腹を立てるギルガメッシュ。その背後には先程までとは比べ物にならない数の宝具が浮いている。

ルナシューターというものが何かは知らないがその言いようもまたギルガメッシュを腹立たせる。

「散れっ！！雑種っ！！！」

先程とは比べ物にならないに猛攻に、コウジュはミヤビセンでは弾けないと考え次の武器を出す。今度は空間からではなく、一枚のカードを出して呼ぶ。

「幻想舞闘『双剣双銃のクオリア』…」

コウジュが次に呼んだのは2丁の銃だった。全体的に黒く大きめな現代兵器とは違い少し角ばったフォルム。先端には大きめの刃がハンドガードのように、返す形でついている。それは本来、“カノン・クオリア”、“エッジ・クオリア”と呼ばれ、それぞれ双剣、双銃というカテゴリーでゲーム内の武器として存在していたものを、コウジュがボディは一緒なのだからと合成して作りだした武器。

「てやあアアっ！！！」

コウジュが、2丁のクオリアを構えつつ、降り注ぐギルガメッシュの宝具に突き進む。

次々と打ち出される宝具を、コウジュは銃で撃ち、次の瞬間には銃に付いている返しの刃で弾く。その姿もまた一つの舞いのように感じられるものだった。ただその姿は、見る人が見れば銃衝術、ガンカタと呼ぶであろうもの。

「誰の許しを得て我をこちら見ておる！！？狂犬めが……！！！」

「犬じゃないよ！！狼だよ！！もしくは狐！！後猫！！」

言い方はのほほんとしたものだが、コウジュが今現在行っている事を考えたらシニール以外の何物でもない。

「雑種がああ！！」

「雑種というか…混沌？」

一通り弾き終えたコウジユが、体勢を立て直す為に後方へバックステップで一旦下がる。

ギルガメッシュはすかさず追撃を入れようとするが、ピタッと止まる。そしてどこかかなたを見ながら――。

「貴様如きの諫言で、王たる我^{おれ}に引けと…？大きく出たなあ時臣…」

忌々しげにそう言った。一応マスターである遠坂時臣が令呪を使って言われた言葉なので、ギルガメッシュはおとなしく従う。背後にあった、黄金の光が漏れ出る空間の裂け目も消え、ギルガメッシュ自身も空気にとけるように現界を解く。

「雑種ども、次までに有象無象を間引いておけ、俺と見える^{まみ}のは真の英雄のみでよい」

ギルガメッシュはそのまま消え、その場を静寂が満たす。

「ええ、不完全燃焼」

2丁の銃を構えたコウジユが、次はセイバーの方を向く。

「そう思わないか？」

「……」

コウジユが問うも、セイバーは剣を構え警戒するのみに努める。仕方なく、次の話をしようとしたところでセイバーの後ろ、アイリスフィールが口を開いた。

「コウジユスフィール…だったわよね…？」

「あいあい、そうだよ」

「どうしてあなたはイリヤと…成長したイリヤと居るの…？イリヤは本当にイリヤなのよね？」

「ええ、お母様。私よ？」

アイリスの声に応えたのはコウジユではなくイリヤだった。いつもの毅然とした態度で答え、久しくしていなかった母との会話を行う。

「でもイリヤはアインツベルンのお城に…」

「私は…」

「イリヤのママさん。それはこの時代のイリヤの話だろ？俺の横に居るのは未来のイリヤだよ」

アイリスの言うとおり、確かにアインツベルンの城にイリヤを置いてきた。でも目の前に居るのもイリヤだという。その答えをイリヤが答えようとするが、イリヤの声は少し震えていた。すかさずコウジユが後を継いで話す。コウジユと共にこの時代に来たイリヤは、

自身がまだ子どもだった頃にアイリスフィールと死に分かれてしまったのだ。心内に積もり積もったものがあるのも仕方ない事だろう。

「ちよいとこの時代でやりたい事があってね。こうして参上したってわけさね」

「それは…「こいつは聖杯戦争！ たった一つの聖杯を奪いあい、己が願いを叶える為の儀式！！」っ！？」

「なればこそ！！俺達にも叶えたい願いがある！！聞きたい事があるのなら力づくで聞いてみなあ！！」

無理矢理に話を切り、コウジュは両手のクオリアを構えてセイバーに突撃する。今この時点で何をするか話す訳にはいけない。問答を続けていたらつつい話してしまうかもしれないと思った故にだ。それにイリヤの状態が芳しくない。やはり、自身の母との出会いは色々といリヤの心を容易くぶれさせる。

「うらあっ！！！！」

「くっ…」

セイバーは最初の時点でランサーと相対していたため、左手親指にハンデを抱えている。対し、コウジュはビースト種である為その力だけでも驚異的だ。

「そらそらあ！！」

「はあっ！！！！」

だが、剣閃を交わすうちに次第にセイバーは押されていく。見た目に反して一撃一撃が重いコウジユの攻撃。双銃によるものもそうだが蹴り等の全身を使った攻撃、ネコ科の獣を思わせるアクロバティックな攻撃、それらもまたセイバーが攻めあぐねている理由だ。時間で考えたらそれほどたつてはいない。だが、その間に交わされた応酬はどれほどのものか。ただ、それももう終わりに近い。剣を持つ者としてやはり手の負傷はハンデにしては大きすぎた。

そして――。

「これで終わりだ！！サイカ・ヒョウ！？」

セイバーの見えない剣をかち挙げ空いた胴へと、持っていた双銃を消してわざわざ出したハンドガード付きの巨大なナイフ状の剣を、逆手に持って振りかぶる。否、振りかぶろうとした。コウジユは慌てて後ろに飛ぶ。

「余の事を忘れてもらっては困るなあ」

ライダーが、今まさにコウジユが居た場所を剣でもって切り払った。

「うおー危ない危ない。何のつもりだ？」

「なに、手負いのセイバーとはいえ、このような初戦で失うには惜しいと思つてな」

「ふーん。で、本音は？」

「余も混ぜい」

「オーライ。んじゃそっちのランサーはどうするんだ？」

「私は…」

ランサーは心が躍っていた。コウジユは騎士ではないが、その戦いようは見ていて疼くものがある。戦闘狂というわけではないが、自身の力にそれなりの自負を持つ者として戦いたいという欲望が生まれてくる。また、コウジユの相手をしていたセイバーとの決着も着けぬままだ。ライダーが動いていなければ自身がコウジユとの間に入っていたかもしれないほどに先のセイバーとの相対は騎士として心躍るものがあつた。しかし、今のランサーは聖杯戦争のサーヴァントとして仕える身。勝手は許されない。

そこまで考えたところで、ランサーに直接声が届いた。それは遠くから魔術で声だけを届けたもの。ランサーの主のものだ。

「主！？私は騎士です！！その様な真似をせずとも…」

主の声を聞き、思わずランサーは声を上げる。『乱戦に乗り、セイバーを斬れ』というその命は騎士であるランサーの名を踏みにじるもの。声をあげずにはいられなかった。しかし、ランサーのマスタ―は何かに苛立っているのか、ついには令呪を以ってランサーに強制した。

「何があつたかは大体予想付くけど、とりあえず参加ってことね」

何が可笑しいのか、にやにやとした笑みをしながらランサーを見る
コウジユ。

「んじゃ、呪いの様なこの聖杯戦争で、呪いの様にちよいとやろう
か」

s i d e o u t

『stage???…俺は…帰ってきた!!…FateZero編?』(後書き

どうでしたしょう？

比較的前半にアニメを見てのネタを集中し、後半はいつも通り(？)
なコウジユの戦闘。

というか3人称しんどいです。もうやらない(↑たぶんそのうちまたやりよる)

それにしても、まったく出てこないZeroの主役(笑)とちよつとだけしかでない嫁、セイバーエ…、ちよつとだけ入ったウェイバーちゃんマジヒロイン説、ライダーの漢っぷり、そして空気読めないケ、ケイネス…ごほん、スネちやま。

自分で言うのもなんだが、私は一体何がしたいんだ(笑)

とりあえず、この間見た峠を攻めるアイリスフィールで何故かテンション上がったのは覚えてるんですが…。

まあ良いや(笑)

なにせこの小説は最初っから私のよく分からないテンションで成り立ってますし。

さつてと、ネギま扁もしつかり書かないとですね。合言葉はもちろん『エヴァンジェリンエ…ww』です。エヴァちゃんごめんね？忘れてたわけじゃないんだよ？毎週毎週ものすごいクオリティをたたき出してくれるZeroスタッフの皆様感謝したら、気づいた時にはこのざまだっただけです？

では、今回はこの辺で。

次はエヴァ 魔改z…ごほん、エヴァ成長編でお会いしましょう。タイトルがアレなあれです。

次回もお楽しみにー。(^ - ^)ノシ

P.S.

現在Koujuuの中の人が違う人になってます。妹のリア充話が絡むので詳細は割愛させていただきますが、つまりはそういうことです。

なるほど、分かん。つまりどういことだってばよ？

と思われると思いますが、つまりそういうことなのです。

リア充爆発しろ！！ (;ω;)

『stages8：野生の少女が現れた。コマンド?・・・innegima』(前書

どうもです!!私にしては珍しく早めな次話投稿!!

まあ、予定通り短めな話なので7000文字弱な構成でお送りいたします。

では、ちっそくぶっぞ。

『Stage58：野生の少女が現れた。』
「マンド?・・・innegima」

side：コウジユ

A・K・マグダウエルは少女なのかと迷った…。って何だこりや電波?

えー、ごほん。やーはー皆さん。エヴァ子を拾ったコウジユです。人気の無い近くの森の中に一旦降りて、エヴァ子も地面に降ろす。ってなんか身体中に傷があって痛々しいな。とりま回復っと。

「道具『^{ディメイト}中回復』ーっと。どう?まだ痛むかい?」

「ま、魔女!?!」

「せめて、魔法使い（ウィザード）と呼んでくれね!?!」

「ま、魔法使いさん?...?えっと、あ、あの、どうして...」

「どうしてってのは、何で助けたかってこと?」

「（くくく）...!」

「んーと、助けちゃだめだったの...?」

「でも!?!だって!?!ふ...ふえ...」

「ちょ、何で泣くのさ...!?!」

わけが分からないよ!?

と、とりあえず頭を撫でて…。

「よ、よしよし。落ち着けー。落ち着いてー。落ち着いてください。何とぞお頼み申す。…ごめんなさい」

へ、へたれって言うな!!だって幼女に泣かれてみ!??どうしたらいいか分からなくなるからマジで!!

そうこうする内に、うん数十分かったよ。もちろんその間ずっとわたたしてたさ。俺が。

でもま、エヴァ子は泣きやんでくれた。

つと、そういえば。

「俺はコウジユって言うんだが、名前を聞いても?」

「エヴァンジェリン…です」

今更だけどエヴァ子でファイナルアンサーだと分かった、と。

「おーけーエヴァ。何でいきなり泣いたん?俺知らないうちに何かしちゃってた?」

ええつと…と。口を開きかけては閉じ、また開くを繰り返すエヴァに癒され…というか萌えさせられつつ、言葉を待つ。

どれほど経ったか、まあエヴァ子見てたらまったく苦にもならなかったが、それなりに時間が経った後にエヴァンジェリンは話し始めた。

「私を助けたら…コウジユさんも…殺されちゃいます……」

何故に？

いや、問うまでもないか…。

「エヴァが、吸血鬼だからか…？」

「…っ!？」

エヴァが未だ頭上にあつた俺の腕を払い除け、慌てて後ろへ飛びさる。

「あ…」

「へう!？」

…が、森の中だっただですぐ後ろにあつた樹に背中からぶつかる。

よゐこの皆は、後方確認もせずに森でバックステッポウはしないように。

「うう〜」

後頭部を押さえながら蹲うつくまるエヴァに、何この可愛い生き物…と再び萌えつつ再度回復を行う。

「気を付けないとダメだろ？さて、まだ痛みは？」

「…（ふるふる）」

「ほら、そこに座りな。何もしねえから、とりあえずゆっくり話そうぜ?」

「…（こくこく）」

あーもういちいち可愛いなあ!!

こほん…。

「エヴァ、これ見てみ?」

俺はそう言っで、自分の耳に掛けていた軽い認識障害の魔法を解く。

「え…?お犬さんの耳…?」

ん、まあそうだけど、お犬さんの耳だけど…何だろうこの気持ち
…orz

「俺はビースト。獣人の類だ。ちよいと思うところがあつてね。あのお城にいったんだがあの惨状だろう?それで、エヴァを探してたんだ」

「私を…ですか…?」

「ああ、数年経った今でもあの城は惨状に変わりは無かった。多分、中が悪霊の巣窟になってたからだと思うんだけど、あ、俺霊的存在を見る事が出来てさ、たぶん今のエヴァも見れると思うけどそれは一旦置いて、城の中で霊化した当主と会ってな。エヴァを頼むって言われたんだ」

「お父様！？あ、でも、霊ってことは…うう…お父様…」

持っていたハンカチを渡す。

「話を聞いた後、当主達を送って城に火を放っておいた。いつまでもあの場にいさせるのも忍びなかったんでな」

「ありがとうございます…」

「次は、エヴァの方を聞いても良いか？嫌なら嫌でいい。ゆっくりでも良いから」

そこからエヴァンジェリンはこの数年何があったかを話し始めた。

「エヴァが屋敷の住人を皆殺しにして逃げた…？」

「は、はい。お城に来た騎士様が仰っていました。でも、私はそんな事してません！！起きた時にはあぁなっていて…。お、お父様達も…うう…。でも、何度言っても信じてくれなくて…」

原作では犯人らしき男をエヴァが殺したってなってたよな？んで、その正体は“始まりの魔法使い”だったとかなくて…。

ああくそ、その辺りからどうせ原作ブレイクで関係なくなるからって読んでねえ…。変な固定観念持つの嫌だったし。原作とはいえ自分の息子が敵側に居るの読むのもアレだし…。

「それで、吸血鬼は殺さなくてはいけないって…。特に真祖はどうとかって…。それが嫌なら俺のものになれって…。それで、訳が分からなくて、怖くなって、押さえつけられた時に暴れてしまったんです。その時に信じられないくらい力が出て、騎士様が、ち、血だらけになって、駆け寄ったんですけど、死んじゃ、ってて、ぐす…」

「あーもうほら、よしよし」

再びエヴァ子の頭をなでる。原作からは考えられない位涙もろいなあ…。話させてる俺も悪いんだけど、知らなきゃ始まらんしなあ…。

「その後、逃げたんです。でも…ずっとお城で過ごしてたから、どうすれば良いか分からなくて…」

「そりゃそうだよなあ」

「けど、逃げている時に違和感を感じたんです。走る速さがすごくなっていたり、あまりお腹が減らなくなっていたり、お陽様の光で肌が焼けたり…。それで、ああ、人間じゃなくなっただなんて…。それでも、お城に戻る訳にも行かなくて逃げ続けていてしばらくした時に、追いかけてくる人達が出始めて、騎士様や、“正義の魔法使い”って名乗る方達に賞金稼ぎだって言う方達も…。いっぱい、いっぱい…」

「よく逃げれたな。魔法とか別に使える訳じゃないんだろ？」

「は、はい、でも、名乗りを上げる人とか、演説みたいなのをする人や私の見た目で油断して下さった人も居て、その隙に逃げました」

馬鹿ばっか。

だが、今はその馬鹿さ加減に感謝しよう。馬鹿でありがとうよ。

「あ、そう言えば血はどうしてたんだ？吸血衝動はあるんだろ？」

「あ、その…、襲ってくる人達が少ない時が何回かあったので…」

「身体能力だけでやったのか！？」

「はい…。ちよつとずつだけ…。あ、もちろんどの方も命は奪ってませんよ！？そんな怖い事できませんし！！
でも、最初の方は…ううぐす…」

なでりなでり…。

それにしてもエヴァにゃんすげえな。案外アグレッシブ。あれ？でも確か血は嗜好品って原作で言ってたっけ？けどもう原作なぞ当てにならんしなあ。一応、『ヴァンパイア十字界』のヴァンパイアは“吸血鬼”では無いけど、目の前のエヴァは原作通り血を欲する。何が違う？

とりあえず聞いとくだけ聞いとくか。

「普通の食事はどうしたんだ？血だけで命つないでたわけじゃないんだろ？」

「それは…はい。いつからかお陽様の下でもある程度大丈夫なようになつたので、村や集落を通り過ぎる時に助けてくれる方が居て」

「そっか。良かった…」

やっぱり普通の食事も必要なんだな。うーむ、仮説は立てられるけど検証はまた後だな。

それにしても、全員が全員敵じゃなかったわけだな。救いは少なかったかもだけど、それでも無い事を考えたら遥かにマシだ。

「でも、でも!!」

私を匿った事で、こ、ころ、殺された人も居て…」

「っ…。だからさっき俺が殺されるって」

「はい…」

エヴァ子よく性格がねじ曲がらなかったよ。唯一の心の救いなのに、求めたら迷惑かかるから出来ない、と。ふむ…、それした奴、とりあえずやっとかくか？

あ、“や”にどの字をはめるかはご想像にお任せする。

「ふむふむ…。エヴァはさ、その助けてくれた人達の復讐とかした
い？」

ファイナルアンサーなら力になるぜ!!

不死の本領を發揮してやるんだZE

いや、すまない。正直変なテンションだと自分でも分かってるんだが、それでもせんと片っ端から非殺傷設定でO H A N A S H I
Iしちゃいそうだからさ…。

「したくないと言えば…嘘になります…。でも…今更と言われれば
そうですが、人の命を奪いたくありません。それ以前に、私には何
もない…ただ力が強いだけの小娘です…」

ほほう。

「よろしい、ならば戦争だ」

「ほえ!？」

おいおい、どこぞのカードキャプターみたいな驚き方してどうした？

「あ、あの、どういう意味ですか…?」

「なーに、別に殺さなくても復讐なんてものはいくらでもできるつ
てことさ。俺も結構いろいろしてきたけど、未だに俺だって誰かの
命を奪うのは嫌いだ。慣れるもんじゃないし。慣れちゃあいけない
けど、戦いそのものは好きな方だね」

毎回毎回思うけど、矛盾してんなあ。いや、人間ならみんな一緒に
のかな？俺だけなのか？はは、『矛盾』なんて魔法を使えるように
なったけど、人間の命題だからこそ得る事が出来たって考えると面
白いな。命を奪いたくないけど、戦いたい。誰かを救いたいって願
う癖に、怒りを感じて暴れたいとも思う。

自分のことながら何なんだろうな。いつまでたっても答えは出ない。
直接的に誰かの命を奪った事はないけど、間接的に奪った事はある
し、直接的に奪った事が無いのは奪わなくても済む状況が続いてる

だけで、実際その場面が来たら俺は躊躇いはするだろうが誰かの命を奪うんだろう。だって生きていたいから。殺したくないから自分の命を差し出すなんて真似は俺には出来ない。そこまで俺はお人好しじゃない。

あ？何だよその温かい目は！！俺いざとなったら残酷だかね！！ぬっ殺すかね！！

けほん…。

「色々と教えるのもそこそこ出来るつもりだ。盛大に相手さんに後悔してもらおうじゃないか」

「は、はあ…」

「何にせよ力をもっておいて損はしない。選択肢は多い方がいいかな。必要無いなら封印するなり、隠すなり、使わなきゃいい話だ」

それに…。一つ気になる事があるんだよねえ！。

「それに…。話を聞いている限り、エヴァはまだ誰も殺しちゃぁいない」

「それってどういう…！？」

「簡単な話、最初の騎士周囲の動きが早すぎる。それに当主の話と一致しない」

当主は『魔法使い』といった。エヴァは『騎士』といった。騎士は何故“真祖”と知っていた？何故、当主の話ではその辺りの話が抜

けていた？そも、その死体が無かったのは何故？助けてくれた人がいるってことは見た目的にはエヴァが真祖の吸血鬼だとは分からない筈なのに、情報はどこから？

考えれば考えるほどおかしいよなあ？

在り来たりっちゃ在り来たりな展開だが、もうスーパーひ〇し君賭けても良いレベルでファイナルアンサー！。

「エヴァ。多分君は嵌められた」

ちよつと前の回想。

- 1、エヴァ改造計画。
- 2、第一発見者を犯人だと疑え。
- 3、結論。犯人を崖に呼ぶ前に体育館裏呼ぼうぜ。

終わり！！

「コウ姉さま…もう無理…もう入らないよ…」

「だーめ。ほらまだこんなに……次、行くよ……？」

「駄目だよ……もう……」

「いけるよ、エヴァなら——」

——あと10冊分は覚えられるさね」

「無理だよ……魔法の理論と術式だけでもいっぱいいっぱいなのに……、他の学問までなんて……」

机に突っ伏すエヴァ子。うーん。マーテルに比べたら優しい方だと思っただけだなあ……。

しゃーない。

「じゃあ体術しよう！！息抜きに！！」

「それって息抜きじゃないですよ！？」

「細かいこと気にしてたら大きくなれないぞ！！」

「もう成長止まってます！！……ぐすん」

ま、俺もなんですけどね…orz
何というブーメラン…。

……『ヴァンパイア十字界』側の、元々ヴァンパイアだった方は成長するんだけどエヴァに言ったらどうなるかな？

と、さてさて、エヴァ子を拾ってかれこれ1カ月が経った。いやーたった一カ月、されど一カ月、色々ありましたわ。次の日からエヴァ魔改造計画を始動したんでだいぶ強くなっただし、練習相手はエヴァが死んだように見せかけた事に気付いた奴がちよろちよろ来るんで事欠かないし。

あ、ちなみに民衆の前で大々的に神様っぽくエヴァ処刑シーンを演出したので、一般的な賞金稼ぎとか、一般ピーポーの反応はマシになりました。騎士とか協会側のあの件に対する情報操作よりも民草の口伝の方が早かったからねえ。だからといって再手配したら、まんまと逃げられた脳無し（笑）になっちゃうしなwwざまあww

「はいじゃあまずは片手剣から」

「はいいつー!」

いやあ楽しいねー。いつも俺がやられる側だったし。ステラやアーデルハイトは苛m…ごほん、反応が普通すぎて面白k…ゲフンゲフン、まあアレだったから。

こういう妹に教えてあげるって感覚良いよねー。前世の妹はしっか

り者だったから教えてあげる事なんてそうそう無かったし。

そうそう、言うの忘れてたけどこの度エヴァは俺の妹になりました。スール的な意味じゃないよ？キマシタワーじゃないんだよ？

出会ってからちょっとした時に、自分はもう天涯孤独でどうこうって泣きそうになった時があって、その時に家族になろうって言った訳さ。母でも姉でもなあってやるぜ！ってことで姉になりました。

その内、マーテル達紹介しないとなあ。

ふむ、今更なんだが、エヴァはマーテルの叔母って事になるのか？でもマーテルの歳は…っと、これはえーりんさんの意味で考えちゃいけない事だった。

「はいじゃあ次双剣いってみよう」

「りよ、了解です…あうー…」

そう言えばこれもまだ言っていなかったな。エヴァ魔改造計画なんだけど、ネギま魔法は勿論のことファンタシースター式の魔法も教えてる。むしろ、ファンタシースター式で慣れてからネギま式を覚えたほうが効率が良いんだよね。

ネギま原作では『火よ灯れ』っていう小さい火をつける魔法を出来るまで何度も練習して、出来たら次のステップっていう感覚任せな効率悪い方法なんだけど、ファンタシースター方式なら杖自体に術式セットしてあるから後は使用する意思を杖に向けるだけ。後は自動で魔力を吸って魔法として発動してくれる。

これを利用して魔力の感覚をつかんでもらって、魔法を使うことにも慣れてもらって、それから自身で魔法術式を編んでもらうてわけさ。

「はいじゃあ休憩終わり。勉強に戻ろうか」

「本気で言ってたんですか!!?」

冗談だって冗談。

「仕方ないなあ。じゃあマイルームの中で寛いでな。はいカード。次は夕方からね」

その言葉にガバッと顔を上げるエヴァ。

「はい!!分かりました!!」

「元気そうだな。これなら——」

「休憩入りまーすっ!!」

「ホント冗談だってばよw」

他戦闘方式も、ファンタシスター形式を基本にやってます。ちゃんとマイルームで登録も済ませた。現在の職業はハンターだ。フォー스…魔法使い系統はもう終わったからな。え?1カ月で何やったんだって?そう簡単に職業レベルマックスにならない?

A H A H A、何をおっしゃいますやら。ゲームでもいただろ?程良い敵と程良い回数戦い続けたら経験地ウマウマなんだぜい。

まあ何と戦わせたかはご想像にお任せします。

「さーってと、俺もそろそろ中に入るかなーっと、おや、お客さん近づいてる？」

うーん、たった今エヴァ休憩入ったところなんだけどなあ。エヴァのお客さんとはいえ今エヴァに任せたら鬼畜以外の何物でもないし…。

「しゃーない、俺がやるか。はあ可哀そうに、俺が担当する時に来ちゃってさ」

笑い苺ってまだ残ってたかな…？

s i d e o u t

いかがでしたでしょう？

この話で紳士の方を何人釣る事が出来ましたかね？

今回のキーワードは『エヴァたんはあはあ』だったんですが…え？
生温い？もつとやれ？

よかるう、ならば（ry

閑話的な話だったんで、ネタとかもボリューム控えめ、次の話も
そんな感じの予定です。エヴァをああしたのかは誰かつてのをちょ
いと触るうかとも思ったんですが、やはり“紅き翼”編まで持ち越
しに決定しました。ぶっちゃけ、エヴァ編で引つ張るような事を思
いつかず…。下手したら次の次位に“紅き翼”編まで行くかもしれ
ません。

次はある少女について触れようと思いますので、次々話でその子
とエヴァについて触れて、その後半でキングクリムゾンするかもつ
て感じです。

そんな次話のタイトルは『世界はいつだって「こんなはずじゃない」
事ばかりだ』です。まともなタイトルに思えるでしょう？

出落ち用のフリですww

ああ、やっぱりあんたの小説だったわって思う事でしょう（笑）

さてさて、内容についてはこのあたりで…え？マーテルさん？

ＨＡＨＡ、どこ行っただんでしょねー？
まあその内でできますよ。……台風の感じで。

ではでは今回はこの辺で、次回もよろしく願いします！！

P・S・1

募集していた名前に関してなんですが、赤バラ&ステラの娘の名前について幾つか案を頂きまして、ある程度形になりました。本当にありがとうございます。

そういったネーミングセンスが無いのでこれからも度々募集するかと思いますのでこれからもよろしく願いします。

本当に感謝感激です。どうやったらあんな良い感じのお名前を創造できるのか…。

それに対して私エ…。

P・S・2

ホントどうでもいい話なのですが、ＹＡＨＯＯ検索で『セイバー』、『アホ毛』で検索し、それで出てきたピク○ブ大百科を見たんですが、それがあまりにもアレなもので…ｗｗ

特にどこかと言うと、邪神セイバーの部分ｗｗ

某パチモンで有名な国のFate購入特典か何からしいんですが、

ここまでやるかといわざるを得ない（笑）

他にも色々面白い部分（ネタ的意味だけでなく）がありました。うん、何であんな検索したのでしょうか？

ごほん、蛇足ですが、どこだったかは忘れたんですが、Fate設定集が何かで、ちゃんとジャンヌダルクのものがあつたみたいです。ほんとセイバーそっくりな設定画でした。Fate/Zeroでキャスターがジャンヌ、ジャンヌって呼ぶのもあながちって感じですよ。

あ、あと、面白いと言ったら某笑顔動画サイトのFate/ZeroのMAD動画も最近ハマってます。何周した事か。詳しくはさすがにここに書くことではないので控えますが、色々間違っちゃったんですよww あと、さすがと言うか、ある意味予想できたというか、ケイネスの魔術工房らへんの弄りっぷりが半端なかったです（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3719m/>

テンプレ...まじで？

2011年11月17日20時17分発行